日本戯曲全集
第七巻

寛政期京坂時代狂言集

東京
春陽堂版

文化十三年三月中村座所演、七世市川團十郎の七笑ひの時平
（「天滿宮菜種御供」參照）

日本戲曲全集 第七卷 目次

寛政期京坂時代狂言篇

首陽山に蕨を折る大名のやもめ住み氣儘暮らしに乘つたか〳〵乘せて來た千兩箱戀の重荷に女陸尺のぽつとり者は日本無双のどれ合ひ女夫

その水上は浪華に名高き田之助橋の古蹟

けいせい青陽鷄

續七巻

其時節の　歌ひらきに

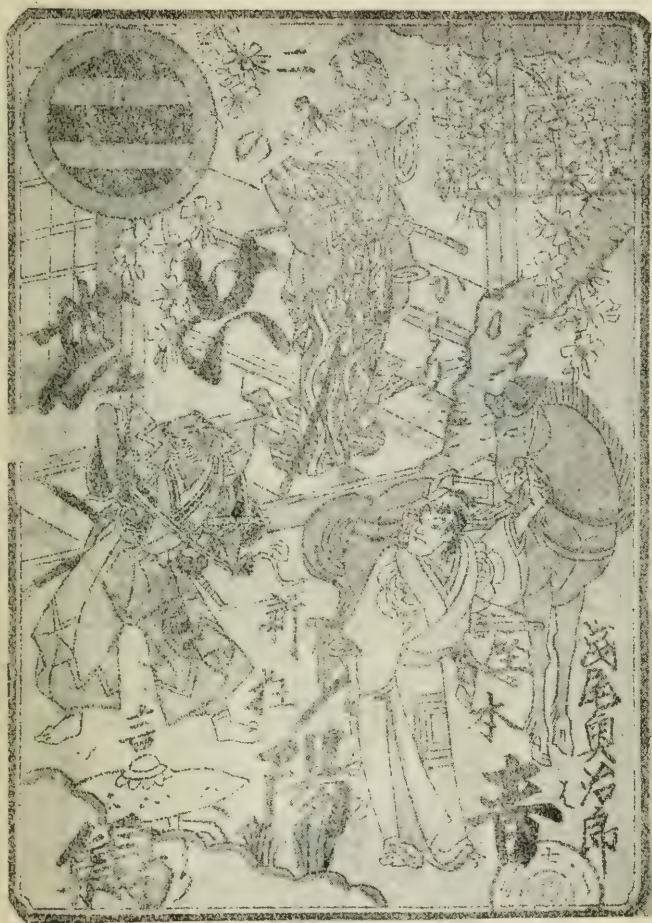
端手な男と　二人づれ

掛けて思ひは武藏の

鐙その名に愛て

釜山浦の貝拾ひにお姫様の縁結び形は一對ようそろ〳〵入て來た千石船廓の根引に崑崙兒の媒介口はちんぷんかんの妹脊あらそひ

その治世は伏見に名高き忠賞島の開發

初演繪番附表紙

けいせい青陽鷄

發端　高麗國の場

役名──女官、白梅女。同、水仙女。同、林光女。同、鳥花女。同、金花女。同、柳葉女。同、蘭女。同、桃花女。同、芙蓉女。高麗國守、館張喰。韃靼の使者、左將軍、孟洪。左軍錢龍妹、玉泉女。船頭、五郎藏 實ハ宅間小平太。漁師、網作 實ハ瀨川采女。照列王妹、照菊皇女。高麗國。照烈大王。

造り物、向う一面の唐の堤。所々に水拔きあり。後ろ淺黄幕。舞臺先に浪板、打寄せし見得。右は高麗國濱邊の體。幕の內より、玉泉女、蘭女、金花女、芙蓉女、柳葉女、桃花女、林光女、鳥花女、右八人、唐裝束、官女形にて、皆々箔置きの目籠に鎌持ち添へ、立つてゐる。合ひ方、唐樂入りにて幕明く。

蘭女　なんと皆の衆。姬君、照菊皇女さまの仰せを受け、今日汐干の御遊覽。

金花　四方に蘭奢の風かをる。

芙蓉　月に最中の、詠めに飽かぬ此お遊び。

玉泉　兼ねて噂に聞き及ぶ、日の本第一の風景、津の國住吉の浦とやらいふ所には、彌生三日に濱邊に出で、潮干となぞらへ男女大勢入り集ひ、貝を拾うて酒宴を催ふす。

柳葉　その彌生三日を象り、この濱邊に、姬御前ばかりが打群れて

玉泉　我れ〳〵までも、潮干のお遊びに連なりまするは

林光　お宮仕へ致しまする私しどもの身の仕合せ。

金花　日の本の大內には、貝合せとやらまで、姬御前のあて遊び。

蘭女　それは大宮人、妹脊の固め、

鳥花　これは又、唐の女の貝合せ。

ト これより唄へ取つて

〽見渡せば、汐の干潟に蛤の、貝取る小褄、しよぼ〳〵と、濡れて拾ひし數々の、その色貝は何々ぞ。

ト 八人、舞臺先へ出て、貝を拾ふこなし。合ひ方に

て
桃花　がふな、したゝみ、あさり貝。
柳葉　潮吹き上げのすだれ貝。
玉泉　ちよつと見染めし姫貝に。
〽一筆書いて送りたいらげ口明けて、ほや〳〵笑ふ赤貝
に、心よせ貝、いたら貝。
　ト少しいろへになり
蘭女　君は酢貝の粋なれど
〽我れは鮑の逢はぬ夜を、かこちて獨り片思ひ。
　トいろへ。
金花　及ばぬ戀も月に手を
〽さるぼら貝のひつたりと、變らぬ神の沖の石。
　トいろへ
芙蓉　朽ちても朽ちぬさゝえ貝。
　トいろへ。
〽梅の花貝櫻貝、寢もせで獨りあかにしの。
　トいろへ
鳥花　戀を待てとの言の葉を、聞けば、ほた〳〵ほたて
貝。
〽悋氣の角貝、露ほども。

　トいろへ。
柳葉　二人ぬる夜の床ぶしに。
〽きぬ〴〵つぐる烏貝。
　トいろへ。
林光　身にしゞみ貝、しみ〴〵と。
〽思ひおし地の青貝に、光りをかざる珊瑚の玉、干珠滿
珠の汐滿ちて。
皆々　門出よしの法螺貝は。
〽喜びの貝、祝ひ貝と、皆々興にぞ入りにけり。
ト皆々よろしく、いろへにて納まると、鳥花女、橋が
かりを見て
鳥花　アレ〳〵皆さん。ありやマァ、何であらうぞいなア。
皆々　なんでござるぞいなう。
鳥花　遙か沖の方より來るは、慥かに船のやうなれど、唐
土には見馴れぬ船。
桃花　ドレ〳〵、蜑の釣船とも見えず。
林光　神代の昔、岩船とも祝ふ船でもあるまいし。
柳葉　うつろ船とやらでもあるまいし。
蘭女　殊に男子の只一人、
金花　この濱邊を目當に

林光　脇目もふらず
皆々　來るワ〳〵。
ト浪頭に成つて、橋がゝりより笘船に小平太、縞繻子の袢纏に紅絞り、縮緬の湯がけ、花色繻子の脚絆にて、隨分綺麗に拵らへて、手拭にて鉢卷して艪を押して立て、出て來る。
小平　ア、嬉しや。どうやら、斯うやら、この島へ漕ぎ寄せたが、爰はマア何といふ島ぢやぞ。
ト云ひ〳〵船より上がり
なんでも對馬の沖から、滅多無性に押し切つたが、餘ッぼど來たつもりぢや。マア、なんでも彼奴を騙して、爰に置いて、我れらは、ホイと。よし〳〵。さうとは知らず、てもマアよう寢て居る。コリヤ、綱作々々。
ト船を叩く。
釆女　オヽ、なんぢやい〳〵。
小平　なんぢやどころぢやない。マア、起きて來い〳〵。
釆女　何を其やうに、けたゝましう起す事があるぞい。
ト笘押しのけて釆女、緋縮緬の上に、練りの絞りの單衣物を着て、淺黄繻子の手甲、脚絆、腰袋にて、練りの手拭を鉢卷にして、船より出かけて。
折角面白う見てゐる夢を覺まさせ居つた。惡い者ではあるぞ。
小平　イヤ、起さにやならぬ。マア、なんであらうと、爰へ來い〳〵。
釆女　ドレ〳〵、何を其やうにやかましう云ふ事ぢや。
ト云ひ〳〵船より上がる。
小平　イヤ、やかましう云はねばならぬ。コレ、わりやア爰を知つてゐるか。
釆女　何を云ふぞい。あんまり酒はきかず、好物の酒は飲み過ぎる。前後も知らず寢てゐるおれに、爰をどこぢやとはなんの事ぢや。
小平　さればいやい。なんぼ起しても、おのれは性根は付かず、とかうするうち、どうやら風は吹いて來る、浪は高し、こりや、なんでも押してくれうと、滅多無性に艪を押すと、風は追手になつて、帆は上げねども船は飛ぶ。こりや巧い鹽梅ぢやと、精一杯に押し切つて、漕ぎ寄せた所が爰ぢや。ついぞ、おりやこんな所へ來た事がない。爰はマア、何といふ所ぢや知らぬ。
釆女　待て〳〵。この濱邊の樣子といひ、こちらの堤の鹽梅から、あの山の險岨な所、こちらの森の木といひ、つ

いぞ見た事もない様子では、こりや唐ぢやわいやい。

小平　ヤア〳〵。

釆女　てもさても、滅相な事をしたわいの。

小平　こちの濱邊へ附けうと思うて、滅多無性に押したが、唐へ來たとは、思ひがけない。

釆女　何を云ふやら。風が吹いたら、おれを起すとよいのに。

小平　何を云ふぞい。なんぼ起しても、根つから起きぬもの。よい〳〵、こんな所へ來たも、おのれがあんまり寢るに依つてぢや。その返報に、われを爰に置いて、おりや去ぬるわい。

ト船へ乘らうとする小平太を引き附け

釆女　イヤ、おのれは途方もない事を云ふぞよ。なんぢや。おれを爰に置いて、わればかり去なうと云ふか。コリヤ、元來おれは漁師、われは楫子、なりや、おれが下知を受けて船を押さにやならぬ。すりや、マア、おれは主のやうな者、われは家來のやうな者ぢやぞよ。その家來が主を捨てゝ去なうとは、野太い奴の。われを爰に置いて、おれが去ぬる。さうと思うて居をらう。

ト船へ乘らうとする。小平太、釆女を引きのけて

小平　なんぢや、おれを家來ぢや。イヤ、野太い奴の。コリヤヤイ。同じ所に住んでゐる漁師なり、船頭なり、高い低いの隔てはないワ。自體常々おのれが邪魔になるわい。

釆女　なんでおれが邪魔になる。

小平　コリヤ、云ふな。惣體對馬の浦々に住む花娘、おのれがいたしめて廻り居るに依つて、ついぞおれがせしめた事がないわい。如何に漁師なればとて、さう礒せゝりせられてはならぬ。おのれを爰に捨てゝ去ぬるは、浦の若い者の爲ぢや。さう思うてけつかれ。

ト行かうとするを引き戻して

釆女　さう聞いたら猶去なにやならぬ。爰に居てよくば、おのれ一人殘つてゐよ。

ト行かうとするを捕まへ

小平　イヽヤ、われを去なす事はならぬ。

釆女　おのれがならぬと云うたとて、爰に居やうかい。

ト振り離す。

小平　イヽヤ、われは去なさぬ。おのれが去ぬる。

釆女　おのれより、おれが先へこの船に乘つて

小平　イヽヤ、ならぬ〳〵。

采女　エヽ、面倒な。

ト突き退ける。采女、船へ乗らうとするを小平太、引きかけ、また乗らうとする事二三度。此うち右の人數。木蔭より出て

八人　コレ、其方衆は何者ぢや

ト皆々ズッと向うへ出る。兩人、この聲に恟りし、皆皆な見て

小平　ヤア、唐裝束を着て

采女　女ばかり大勢寄り集つてゐるワ。

小平　そんなら爰は

八人　女護の島ぢやわいやい。

小平　ヤヽヽヽ。

八人　イヽヤ、爰は新羅百濟高麗國と云うて、三韓の入り口ぢやわいの。

小平　エヽ、そんなら爰は。

皆々　釜山浦の大湊ぢやわいなう。

采女　それ見よ。なんの滅多無性に艪を押さいでもよいことを。

小平　ぢやというて、おれも、よもや唐へ來ようとは思はなんだ。

采女　もうせり合ひを止めて、日本へ去なうぢやないか。

小平　イカサマ、唐で船頭もなるまい。そんなら、網作。

采女　五郎藏、おぢや。

ト兩人船へ乗らうとするを、右八人、兩方へ四人づゝ分れ、兩人を取卷いて

皆々　イヽヤ、去なす事はならぬぞ。

采女　なんぢや、去なす事はならぬ。

皆々　姫君樣の御上意。

兩人　エヽ。

ト恟りする。ト神樂太鼓打ちかける。これより管絃になり、小平太、采女、これを聞いて、ウロ／＼する。ト臆病口より、照菊皇女、唐裝束にて、天冠、唐土姫の拵らへ、唐團扇、唐沓穿き、靜々出る。兩方より、白梅女、水仙女、唐裝束にて、柄の長き唐の團扇を兩方より照菊皇女が頭に付け出る。官女、皆々、平伏する。小平太、采女、照菊皇女を見て、驚ろき、共にうろたへ、辭儀する。此うち靜かなる唐樂にて、照菊皇女、上の方に立つて

照菊　皆の者。

皆々　ハヽア。

照菊　日の本より思はず知らず、流れ寄りし浦人は、あの兩人か。

皆々　左樣でござりまする。

照菊　珍らしい和國の男子、對面しませう。

皆々　ソレ、顏を上げさつしやれ。

小平　ハイ。

ト小平太、顏を上げ、照菊皇女の顏を見て「ても、よい器量ぢや」と云ふこなしあつて、見惚れ、ヂロ〳〵と照菊が側へにじり寄る。照菊皇女氣味惡くなり、唐團扇にて顏を隱す。

皆々　下がりや〳〵。

ト口々に云ふ。小平太、呟き、元の所へ下がる。

鳥花　コレ、こちらの男の子。

皆々　顏を上げや。

釆女　ハイ。

ト釆女顏を上げる。照菊皇女見て「てもよい男ぢや」といふこなしにて、見惚れる思ひ入れ。釆女も、照菊皇女を見て、こなしあつて、小平太、この體を見て、ムツとする體にて、釆女を押し退け、先へ出て、照菊皇女に顏を見せるこなし。照菊皇女、これを見て、うろさがり、唐團扇にて顏を隱す。釆女腹立ち、小平太を引き退け、向うへ出て、下に居て、照菊皇女が顏を見る。照菊皇女、嬉しきこなしにて、また見惚れる思ひ入れ。この模樣よろしくあつて、トヾ小平太、腹立て

小平　エヽ、おきやアがれ、忌々しい。おんなじ男をなんぢややら、依估贔屓な顏の見やう。よい〳〵、こんな所にまだら〳〵として居る事はない。去んでくれう。サア、網作、われも立て〳〵。

ト引き立てるを、振り放し

釆女　イヤ、去にたか、われ一人去ね。おりやもう爰に居るわい。

小平　イヽヤ、われ一人爰に置く事はならぬ。サア、來い來い。

釆女　ハテ、妙な事を云ふわいの。自體われが、おれを酒に醉はして寢さして置いて、どこへなと捨てて去ぬる積りぢやなかつたかい。

小平　オヽ。そりや、われに浦々口の娘子供が、惚れくさるが、げんが惡いに依つて、それでいつそ女護の島へなりと捨てゝこまさうと思うて、おのれを酒に醉はして、

寝てゐるうちに、追手が吹いたを幸ひ、滅多無性に漕いで來たのぢや。

采女　サヽ、それぢやに依つて、おれが爰に居るは、おれが勝手ぢやに、おれを捨てゝわれ一人日本へ去ね〳〵。

小平　イヽヤ、去なぬ〳〵。われ一人置いたら、どんな旨い目をしをらうも知れぬに依つて、爰に置く事はならぬ。サア、一緒に戻れ〳〵。

采女　イヽヤ、去なぬ〳〵。

小平　おのが去なぬと云うて、意地張らして置かうかい。

ト無理に引ッ立てようとする。

照菊　ソレ、留めてたもいなう。

金花　姫君様の御諚ぢやぞ。

皆々　マア〳〵、待ちやいなう。

ト八人して小平太に取り付き、とめる。

小平　イヽヤ、放さつしやれ。

ト踠く。

鳥花　マア〳〵、よいわいなう。

ト皆々小平太を抱きとむ。

玉泉　コレ、あの人には姫君様の御用があるわいなう。

金花　また其方には、わしらが何なりと頼みを聞かうわいなう。其方も又望みがあるなら、何なりと云うて見やいなう。

蘭女　どんな事でも聞いて遣るわいなう。

芙蓉　其やうに腹を立てずと

皆々　マア、心を鎮めやいなう。

小平　ムウ、そんならおれが云ふ事を、何でも聞いて下さんすか。

ト玉泉女、芙蓉女、金花女、蘭女に焦れるこなし。

玉泉　聞くわいなう。

鳥花　こちらも聞くわいなう。

小平　ようごんす。コリヤ、われはあのお姫様の側へ行て、御用を聞け。エヽ、おのれはきつい仕合せ者ではあるぞ。

采女　てもさても、おれが顔が何ぞの用にあふべいな奴ではあるぞ。

ト云ひ〳〵、照菊皇女が側へ行き、互ひに顔を見合せ

私しに御用とは、何でござりまする。

照菊　そもじに頼みたい、自らが願ひと云ふは。

ト云はうとして、恥かしきこなしあつて

樣子を語るも面伏せ。ナウ、皆の者。
皆々　イヤ、その樣子は、私しどもが申しませう。
ト八人見得よく坐り
鳥花　これにましますは、高麗國の帝、照烈大王さまのお妹君、照菊皇女と申しまするお姫樣。
玉泉　未だ定まる殿御もなく、殊に容顏美はしき御事は、四百餘州に隱れなく
桃花　取分け韃靼は大國にて、さま〴〵の貢ぎ物贈り、姫君樣を所望あれど、何分姫君樣の御承引遊ばされず、
柳葉　殿御選びと云ひ觸らせども、さら〳〵いたづらなお心には非ず。
蘭女　過ぎ去り給ふ母御樣の後世の爲と、御かざりは下ろし給はねども、心は淸しき法の營み。
玉泉　御寢殿に閉籠り、御經讀誦なされしところ、この頃不思議の夢の告げ。
金花　母御樣の御面影、姫君樣の御枕にイみ給ひ、これまでいづれへの入内も承引なきは、母への孝心、その誠を感じ、三世の佛神に母御樣の願ひを云ひ給へ。
玉泉　お望みの神のお惠みにて、和國より授け給ふ緣結び、この濱邊に出て、焦れ寄る船を待てよ、とある夢の告げ。
蘭女　それゆゑ今日の汐干のお催しも、誠は殿御を待つ貝合せ。
芙蓉　正直の頭に宿る神風も、忽ち姫君樣の戀風になつて
鳥花　思ふ湊へ焦れ寄つたあの船は、二世の御緣を繫ぐ纜。
玉泉　帆を十分に乘り込んだ好い殿御。
桃花　これから御寢所へお供申して、面楫取り楫御睦言。
柳葉　唐と日本を冥土から、母御樣のお仲人は。
玉泉　三國一の花聟樣。さぞ姫君樣
皆々　お嬉しうござりませうなア。
照菊　推量してたもいなう。
ト樣子を聞いて、采女、小平太、悄りして
采女　そんなら、わしをあなたの。
皆々　殿御とするわいなう。
采女　エヽ。
小平　イヤ、おのれ、どえらい事を仕出したな。よいワ。斯うなるからは、おれも乘りかゝつた船ぢや。ともにお世話を燒いて、唐の聟にして遣らうが、まんざらおれも

素手の孫三ではどうもならぬ。コレ貴樣達、たつた今、何なと望みを聞いて遣らうと云うたが、おれが望む物をくれるなら、お姬樣の望みを叶へて遣らう。又おれが望みを聞いてくれにや、彼奴も爰に置かぬ。日本へ連れて去ぬる。否か、應かの一口商ひ。返事を聞きたい。どうぢや。

皆々　して、其方の望みは。

小平　價が欲しい。

皆々　價とはや。

小平　ハテ、價とは、先づ唐に澤山な珊瑚樹を一萬本。

皆々　それが欲しいかや。

小平　上照りの鼈甲が七萬枚。

皆々　心安い事ぢやわいの。

小平　大人參を萬斤。

皆々　合點ぢやわいなう。

小平　白砂糖を富士の山ほど。

皆々　遣るわいなう。

小平　鳳凰を二千羽。仙人の生捕り。

皆々　よし〳〵。

小平　象の蒲燒。

皆々　ヤア。

小平　虎の天麩羅。

皆々　ヤア。

小平　猩々のこけら鮨。

皆々　ヤア。

小平　なんでもかでも、おれが望む物を下んすなら、料簡するわいなう。

皆々　賴むわいなう。

小平　ようごんす。呑み込んだ〳〵。

釆女　てもさても、慾な奴ではあるわい。時に、私しには、とんと合點の行かぬ事がござりまする。

照菊　何がいなう。

釆女　それ〳〵、さう仰しやる詞付きなら、物腰なら、附き附きの女中まで、皆日本詞。チンプンカンプンは少しもない。こりや、どうした事でござりまする。

照菊　成る程。それには深い樣子のある事。今日よりは自らが殿御と定まる其方、包み隱さうやうはない。何を隱さう自らが母上は、大日本肥前國、長崎丸山にて、蔦山と云ひし浮かれ女。この高麗の臣下、雲南公林官といふ人に馴れ馴染み、情の胤を身に宿し、産み落されしは自

ら、その折柄、林官さまには、お國へお歸りなさらねばならず、母様は別れを惜しみ、我が蔦山と云ふ名に准へ、かねて蔦山の照り蔦を取寄せ、御秘藏ありし一本を林官さまに送り、歸國の後、この國に植ゑ置き給ひしに、日本の蔦唐土の土地に生ひ茂り、五色に彩る花かつら。林官さまにも程なう御病氣にて、遂にこの世を去り給ふ。母様は林官さまを戀ひ焦れ、遂に子の自らを抱き、この國へ尋ね來て、御最期の様子を聞き、心もそゞろの亂れ髪、誰れ取上ぐる人もなく、狂ひさまよひ給ふを、先帝剛照王さま、宮中へ母様を召され、女官となし、勿體なや、妾は照烈王さまの妹照菊女と呼び、御慈しみの有り難さ。程なく父帝様にも崩御遊ばし、母上様も御臨終。最期の際に自らを呼び、父帝様の御恩を、必らず〱忘るゝな。母は今死ぬとも、魂ひは其方の蔭身に添うて守らん。取分け、あの庭前の蔦は日本の蔦、母が名も蔦山と呼ぶ縁に寄り、母が形見と思へと、くれ〲との御遺言のそのお詞。薨かり給ふその年より、いよ〱榮ゆる五色の蔦。殊にこれこそ母様の形見ぞと思へば、蔦が猶大切、身にも命にも替へての秘藏。また自からを初め皆の者が詞附き、見馴れ聞き馴れ何時となう、唐の詞は何所へやら、倭詞に云ひ習ひし、様子はだん〱この通りでござりまするわいなア。

釆女　ハテサテ、思ひも寄らぬこなたのお身の上。ムウ、すりや高麗國の重寶、蔦の錦と云ふは、その五色蔦の事でござりまするか。

照菊　イヽエ、その蔦の錦と申しまするは、高麗國第一の寶、父帝様より、兄君照烈王さまのお手にあるとは聞きながら、自からもどのやうな品やら、目に觸れませぬわいな。

釆女　ムウ。すりや蔦の錦と云ふは、いよ〱照烈王の所持とな。

照菊　アイ。

ト釆女、小平太、ちよつと顔見合せ

兩人　ハテ、ナア。

ト兩人こなし。

芙蓉　サア、斯う姫君様のお身の上を打明けて、仰しやるからは、もう否應は云はしませぬぞえ。

蘭女　日本へ去なうと云はしやんしても、去なす事は成りませぬ。

白梅　今宵はめでたう、蔦の殿にて御祝言。

水仙　日本の殿御の肌にほだされて、必らずおやつれ遊ばすなえ。
柳葉　モシ、日本人は、女子をきつう騙すげにござりまするぞえ。
金花　必らず閨の睦言に、しまけぬやうに遊ばせや。
白梅　ほんに、見れば見る程よい殿御。
玉泉　あんな殿御に抱かれて寢たら。
鳥花　それこそほんまに日本國が、一緒に寄るであらうぞいなア。
皆々　オヽ、をかし。
　ト皆々笑ふ。
照菊　アヽ、コレ〳〵、まだ兄上樣にお願ひ申さぬ緣結び、殊に韃靼國へ自らを、入内せよとお勸め遊ばす折なれば、ひよつとこの事洩れ聞えては
玉泉　成る程、わたしが父上、鐵龍どのへ、密かに語り、首尾よう事を計らひませう。
照菊　萬事は其方衆親子を賴みまするぞや。
采女　そんなら密かに忍び逢ふと思ふには。
玉泉　コレ、モシ、この堤を傳ひ、遙かに行けば入り海あり。

金花　その水筋の流れに沿うて、行く先は
芙蓉　姬君樣の御寢所、蔦の殿。
蘭女　水門にはわたしどもが出迎うて
皆々　首尾よう逢はせますわいなア。
采女　そんなら後より。
照菊　必らず待つて居りますぞえ。
采女　不思議の緣で、唐と日本の契りとは。
照菊　これも母樣の御惠み。
采女　蔦に結ぶの緣定め、
照菊　必らず心の夢を覺まさぬやうに。
采女　いつまでも心は正夢。
照菊　アノ、眞實。
采女　誠に。
照菊　エヽ、嬉しうござりまする。
　ト兩人抱く。
小平　こりや、堪らぬ。
　ト玉泉を抱く。
玉泉　アヽ、コレ。
小平　そんなら、いつそどれなと。
　ト蘭女にかゝるを、嫌がり、突き退ける。また金花女

張喰　に抱きつくを、突き飛ばす。小平太、それより皆々を追ひ廻す。此うち始終唐樂にて、この時、臆病口より高麗國棘守館張喰、びんとこなの唐裝束、唐冠りにて、下官四人粧、折檻杖を持たせ、出で來るを、小平太、取り違へ、張喰に抱きつくを、張喰驚ろき

張喰　キコライ〳〵、ウンクワンタサツ。

ト兩人揉み合ひ、小平太を突き飛ばす。

下官　フナン〳〵。

ト折檻杖を振り上げる。

小平　此奴ら、こりやなんぢや。

張喰　キコライ〳〵、ウンクワンタサツ。

ト下知する。

下官　フナン〳〵。

ト折檻杖にて小平太、采女を叩き立てる。兩人驚ろきあちこちと逃げ廻り、トヾ船の内へ逃げ込み、隱れる。

張喰　日本人はケツタカ〳〵。

皆々　チリテン〳〵。

ト此うち、照菊皇女、皆々心遣ひのこなし。張喰、照菊皇女に向ひ

張喰　照菊皇女に申し上げまする。兄君の仰せに依つて、棘子館張喰。お迎ひの爲、參上。イザ、宮中へ御歸館あられませう。女官達、供奉いたされよ。

照菊　イヤ、自からは今暫く。

張喰　ハテサテ、兄君のお召しでござるか。

照菊　それでも。

張喰　御入來々々々。

ト無理に追ひ立てる。

下官　ハヨウ〳〵。

ト下官ども、女官を追ひ立てる。右唐樂にて張喰、皆皆、照菊その他を追ひ立て、臆病口へ入る。唐樂にて船の内より、采女、小平太、窺ひ出てあたりを見廻し、互ひに顏を見合せ

小平　瀨川采女どの。

采女　宅間小平太どの。

小平　まんまと首尾よう。

采女　コレ。

ト押へ、この唐樂止めて、唐の合ひ方に成り、兩人こなしあつて

主君信長公、茶園を好ませ給ふにつき、高麗國の重寶、蔦の錦を、茶器の袋に遊ばされんと、先達て御所望なさ

れしところ、有無の返答もなく打捨て置きしは、高麗國照烈王、小田家の武威を輕しむる仕業。我が君甚だお怒りあつて、再び高麗國へ使者を差越さるべきところ、思ひ計らず光秀が、反逆にて御落命ありしゆゑ、その沙汰も等閑に打捨てありしが、この度、小田家相續に依つて、眞柴久吉どのゝ下知に任せ、この釆女に仰せつけられ、高麗國へ密かに渡り、蔦の錦を首尾よく受け取り立歸れとの御意を受けて、この土に渡る。

小平　まつたこの小平太も、三七郎どのゝ御意を受け、蔦の錦受け取り歸る横目役を承り、貴殿と申し合せし如く、浦人の吹き流されし體にもてなし、思はずも照烈王の妹姫に近寄りしは、此方の手段。

釆女　成る程、戀から取入り蔦の錦、奪ひ取つて立歸るは案の内。

小平　姫の寢所は向うの入り海。流れに沿うて

釆女　五色の蔦の生ひ茂げる別殿。

小平　一刻も早く忍び入つて

釆女　蔦の錦を奪ひ取らば

小平　貴殿の手柄。拙者とても、横目役の大慶。

釆女　然らば、小平太どの。

小平　釆女どの、ござれ。

ト兩人こなしあつて、臆病口へ走り入る。

右の堤一面に引いて取る。前の打寄せ浪板セリ下げる。件の笹船、橋がゝりへ引き取る。向うの淺黄幕切り落すと、唐樂は止み、造り物、三間の間朱塗りの柱、欄干唐の彫り物。向う無地金の襖、軒先に朱塗りの高欄。臆病口、橋がゝり、兩方とも長廊下、いづれも柱、高欄、皆朱塗りにて、兩方の廊下の屋根より一面に五色の照り蔦、枝垂れかゝり、右は照菊女寢所の蔦殿の見得。この二重舞臺に、照烈王。唐裝束、唐冠りにて劍を拔き持ち、照菊女を切らうとしてゐる。上の方廊下に、孟濡、びんとこなの唐裝束、唐冠りにて、床几に凭れゐる。下の方の廊下に張喩、坐りゐる。女官皆々、照菊女を庇ひ、また照烈王を留めてゐる。この體にて唐樂早め、バタ／＼、にて、一面に向うへ突き出す。

皆々　マア／＼、お待ちなされませ、

照烈　憎くい妹。韃靼國と緣邊の取結び、承引せずは只一打ち。汝が首を渡さねば、使者に來つた右將軍孟濡へ、

我が詞は立たぬわいやい。
孟湛　イカサマ、左樣なされずば、照烈大王のお詞は相立ちませぬ。我國の韃靼王、この國と因みを結ばん爲、妹君照菊女を娶らんと、數々の送り物。今となつて提げて歸られうか。達て御承引なくば、痛はしながら、妹君の御首を持ち歸るか。但し、御承知あつてお輿入れあらるるか。さなきに於ては韃靼、高麗、兩國の確執。軍勢を以て、國諸ともに切つて取らうか。二つ一つの御返答、右將軍孟湛、直々に承はらうか。
張噲　あれ、お聞きなされたか、姫君。こなた樣の御返答が、高麗國の治亂の境でござる。サア、早く、御承知の御返答遊ばされ、然るべう存じまする。
照菊　イヽヤ、どのやうに勸めても、自らは、唐土人と妹脊の語らひは、赦して下され。モシ、兄上樣、達て韃靼國へお詞が立ちませずば、自らが命を召し、國の騷ぎをお鎭めなされて下さりませいなア。
照烈　ヤア、出過ぎたる女め。其方が首打ち、韃靼王のお憤りを鎭むるは、いと易き事ながら、胤腹一つならぬ其方なれども、幼少より我が妹となしたる其方、不便に思ふ我が心底を、無足になし、唐土人に緣を組むまじなどゝ、過ぎ行きしは母、長崎の浮れ女、その性根を受け繼ぎたるいたづら女郎め、不便さ餘つて憎さが百倍、いま首落し、韃靼國へ送り遣はす。觀念せよ。
ト劍振り上げ、照菊女が方へ行かうとするを、女官、皆々照烈王に取りつく。
皆々　マア〳〵、お待ちなされませ。
照烈　マア、面倒な女ばら、其處退け。
ト女官を皆々二重舞臺より蹴落す。張噲、女官を引きのけて、寄せつけぬ見得。照烈、照菊女を引寄せて
今こそ觀念。
ト劍を振り上げる。トどろ〳〵にて、軒に枝垂りし五色の蔦、照烈王が振り上げし劍をから捲き、留める見得。孟湛、張噲、この體を見て、恟りのこなし。照烈王、振り仰のき、蔦を見る。照烈、キッとこなしあつて
ハテ、怪しやなア。妹が命を絕たんと、振り上げし劍を搦まき留めしは、さては彼れが母、最期の節、形見と遺言せし五色の蔦、母の魂魄乘り移り、我が子の命を助けんとなすは、ハテ、訝かしやなア。
照菊　それ程までに自らを、思ひ給はり下されまするか。

母樣、エヽ、有り難うございまする。

照烈　ヤア、奇・怪なる母の亡靈。我が娘ばかりをいたはり、大恩を受けたる國の騷ぎを顧ぬ草木、見るも中々汚らはしい。ヤア、張噲、蔦を殘らず切り拂ひ、根を斷つて葉を枯らせ。早く〳〵。

張噲　ハア、畏まつてございます。

ト張噲、劍を拔いて蔦の根を切り拂はんとする。照菊驚ろき、張噲に取りつき、留めて

照菊　コレ、待つてたも、我が子を憐れむ母樣のお志しは千筋にからむ蔦の葛、切り捨てうとは胴慾な。その代りに自らを、ズタ〳〵に切つてなりとも、どうぞ蔦を切る事は赦してたもいなう。

烈照　ヤア、幾度云うても同じ事。張噲、早く蔦を切り崩せ。

張噲　ハツ、サア、韃靼國へ入內めさるゝか。

照菊　サア、それは。

孟湛　返答延引せば、大軍を以て押寄せうか。

照菊　サア、それは。

照烈　早く蔦を切り崩せ。

照菊　サア。

張噲　入內さつしやるか。

照菊　サア。

孟湛　押寄せうか。

照菊　サア。

照烈　蔦を切らうか。

照菊　サア。

三人　サア。

皆々　サア〳〵〳〵。

三人　なんと。

照菊　ハア、。

張噲　エヽ、面倒な。

ト照菊を引廻して蔦の方へ行かうとする。照菊、キツと留めて

照菊　アヽ、コレ待つてたも。成る程、入內をしませうわいなう。

孟湛　韃靼王へ

照烈　入內いたすか。

照菊　アイ、參りませう。

玉泉　そんなら姬君樣。

皆々　御眞實、入內をば。

照菊　どうも母様のお形見、なんと蔦が切らされうぞいなう。

皆々　それでには先刻の

照菊　ア、、コレ、何事も自らが心にある。マア、默つて居やいなう。

照烈　妹、承引の上は、一時も早く入內の用意。皆の者、妹を奧殿へ伴へ。

皆々　そんなら、どうあつても。

照菊　ハテ、何も云はずと、皆、奧へおぢや。

皆々　先づお入りなされませう。

ト唐樂にて、照菊、こなしあつて奧へ入る。後より女官皆々附いて入る。後にて、三人こなしあつて、孟溘、下座へ下がり

孟溘　姫君、御承引ある上は、かねて照烈王のお賴みの通り、すはと云はば、韃靼國は皆高麗のお身方、その段御安心下されませう。

照烈　我れ、かねて日本を切り從へんと、忍び／＼に合體の武士を語らひ、折を窺ふ處に、武威盛んなる小田信長、明智光秀の爲に滅ぼされ、また光秀も眞柴久吉討伐す。さるに依つて小田の一類、平の三七郎信孝、同舍弟、小田之助信雄。また幼少の三法師丸、この三人のうち、何れか四海を治めるとも、未だ定まらぬ小田の天下。この虚に乘じて、韃靼國の大軍を引連れ、日本へ攻め上らん我が大望。

張噲　又その上に、小田家に遺恨を含む者、その數を知らず。さるに依つてこの張噲、日本へ通路を求め、先達てより、小田家に仇ある者どもと合體仕掛け、照烈大王へ御身方いたさせ置きましてござります。

孟溘　ホ、ウ、天晴れ／＼。姫君御承引の上は、主君韃靼王の喜び。使ひに立つたは孟溘が面目。某は急ぎ歸國仕り、輿入れの儀を言上せん。

照烈　急いで歸國いたされよ。契約の如く妹を送らば、いよいよ我が身方となつて、高麗の加勢さるゝよな。

孟溘　御意に及ばぬ。併し違變あつて、妹君を、送り越されずば、韃靼、高麗、因みは敵身方。

照烈　云ふにや及ぶ。その時は、大軍を以て押寄せ召されい。

孟溘　妹君のお輿入れが善惡の境。

張噲　一刻も早く、姫君をお輿入れ。

孟溘　然らば某は本國へ。

照烈　使者、大儀であつた。

孟湛　ハッ。

ト唐樂にて、孟湛、橋がゝりへ入る。照烈王、張喩、奥へ入る。橋がゝり廊下の方より、釆女、窺ひ出て、あたりを見廻し、こなしあつて

釆女　正しく高麗の照烈王、韃靼の大軍を語らひ、日本へ攻め登らんと、妹を韃靼王へ送り、因みを結ぶ謀り事。今の如く得心の體なれば、韃靼王へ身方に付くは治定。そんならあの姫は韃靼國へ嫁入りする心か。エヽ、こりや腹が立つて來たわい。エイ、何ぢやゝら、先刻に濱邊で見ると、どうやら心のあるやうな素振りに見せかけて、ちやんと内證で嫁入りの相談。ほんにモウ、唐の娘も油斷がならぬ。おのれ奥へ踏込んで、よう一ぱん騙したなアと云はうか。イヤ〳〵、姫の心底は、韃靼へ行く氣はなけれども、嫁入りせねば高麗と韃靼、確執となつて、攻め寄せるといふに依つて、是非なう行きませうと云うた心か。アヽ、思へば可愛い事でもある。取分け不思議なはこの蔦。イカサマ日本に見馴れぬ五色の蔦、最前の奇妙と云ひ、夢の告げに日本の男と緣を結ぶとあるからは、矢ツ張り釆女とあの照菊女と、夫婦の緣を結んだのか。それなれば韃靼へは遣られぬ。いつそ日本へ連れて去んで、さうぢや。

ト奥へ行かうとして

イヤ〳〵、色は諸道の妨げ、大切な御用を承り、入込んだこの釆女。我が身の戀に大事を忘るゝは不忠不義。殊に今聞けば、小田家に仇ある者ども、高麗へ合體いたさせ置いたとは、聞捨てられぬ一大事。立歸つてこの樣子、注進せうか。さは云へ、蔦の錦を持ち歸らねば、高麗國へ入込みし證據なし。ハヽ、何としたものであらうなア。

ト手を組み、思案の體。この時小平太、橋がゝりより出て

小平　イヽヤ、そりや思案に及ばぬ。

釆女　ヤア、小平太どの。すりや、最前からの樣子を

小平　殘らず承つた。釆女どの、高麗、韃靼、合體の樣子に、日本の膝元に正しく小田家に仇を含む者ありとの事、聞捨てになりますまい。貴殿は一時も早く歸國いたし、右の趣き、注進あれ。

釆女　イヤ、彼の蔦の錦の實否を糺し、持ち歸るが拙者の役目。その一品を取り得ぬうちに、滅多に歸國はなりま

すまい。

小平　さればサ、その蔦の錦を取り得んと、數日高麗に滯留のうち、韃靼、高麗一つになり、日本へ攻め上らば、その時貴殿は何と召さる。

釆女　ヤ。

小平　サア、その事を思うて拙者が工風。

釆女　して、その工風とは。

小平　さればサ、高麗國の重寶蔦の錦とは云へども、未だ日本へ渡らねば、誰れあつて見た者がない。サア、爰が工風。アレ、あの五色の照り蔦を持ち歸つて、これこそ高麗國の重寶、蔦の錦なりと、一旦貴殿の役目を納め、その上にて、三輪、柴田、眞柴の三老に、彼の韃靼、高麗、合體の様子、殊には小田家を滅亡させんと企む日本の叛逆人、云はゞ唐と日本に大敵、三軍安からぬ一大事。さるに依つて貴殿に五色の蔦を持參させ、拙者が後に殘つて、誠の蔦の錦を詮議仕り、立歸りませう。なんとこの工風は如何でござるな。

釆女　御尤も。イカサマ、貴殿と拙者、錦の詮議に日を送り、もし唐土勢、日本へ攻め入らば、我れ／＼が役目は

小平　そこであの五色の蔦を、錦と僞り持ち歸り

釆女　高麗、韃靼、合體の様子。

小平　小田家に仇を含む逆賊。

釆女　御注進申すが四海の爲。

小平　然らば蔦を。

ト軒に枝垂れある蔦一ふき取つて釆女に渡す。

釆女　左やうならば、拙者はお先へ。

小平　釜山浦の湊に、乘り捨てたる小舟を幸ひ

釆女　歸朝して何かを言上。

小平　必らず萬事拔からぬやう。

釆女　然らば和國で、

小平　一刻も早く。

釆女　心得ました。

ト蔦を持ち、逸散に向うへ走り入る。此うち始終唐樂にて、小平太、後を見送り

小平　まんまと彼奴を先へ歸し。よし／＼。

ト云ふうち臆病口より照烈王、出る。

照烈　日本より忍びの使ひ、宅間小平太。

小平　照烈大王。

照烈　高麗、韃靼の様子、今の若者に注進させし其方が心

底は。

小平　蔦の錦と僞りて、この照り蔦を彼奴に持たせ、先へ歸したは深い計略。似せ物を以て誑かる瀬川采女と、彼奴を科に落し、後へ拙者が歸朝仕り、高麗、韃靼、合體は、跡方もない雜説なりと、誠らしく云ひほぐし、采女一人を罪に沈め、その油斷の折を窺ひ、唐土より攻め來らば、何の苦もなく勝ち軍。なんと日本人の計略は、また格別でござりませう。

照烈　驚ろき入つた汝が才智。して和國の樣子、內通の書簡は

小平　ハッ、即ちお頭より送り越されし密書。

ト懷中より一通出し、照烈王に渡す、照烈王取る。

これこそ日本の諸大名、又は山賊、海賊、野武士に至るまで、皆お頭への一味徒黨の連判。送り越したるは、即ち、高麗國と合體の印。

ト一卷を差出す。

照烈　成る程、この密書に、新羅、百濟、高麗、右の國地理の一卷と、日本過半一味徒黨の連判を。

ト懷中より蔦の錦の一卷を取出し

これこそ三國地理の一卷。まつたこの表具は、即ち高麗の重寶、蔦の錦、合體の印。

ト差出す。兩人、互ひに取り遣りする。

小平　すりや、これが三國地理の一卷。表具は、即ち蔦の錦。

照烈　日本過半、一味連判。

ト兩方一度にこなしあつて

兩人　エヽ、忝ない。

ト戴く。この時奧より、照菊窺ひ出て

照菊　その一卷を。

ト小平太が持つたる一卷を、後より引き取り、逃げうとする。小平太、照菊女を引ッ提へ

小平　この蔦の錦を奪ひ取るは、さては、心を懸けし瀬川采女に渡さん爲よな。

照烈　ナニ、妹は瀬川采女に心を通はすとな。

小平　ほてくろしい不義の樣子。

照烈　ハテ、憎くい女め。

小平　先づこの一卷を。

ト取りにかゝる。少し立廻り、照烈王、劍を拔いて

照烈　韃靼への見せしめに。

ト照菊女に切つてかゝる。又ドロ／＼にて、照菊女、

小平太が方へ仕掛けにて、軒の蔦、ひらめかして兩人を悩ます見得。照菊女、一卷を持つて、橋がゝりへ走り入る。兩人行かうとする。大ドロ／＼にて、小平太、照烈王引き戻され、照烈王は劍を構へ、キッと見得。小平太は、蔦に引戻されし見得にて、兩人二重舞臺によろしくとまる。チヨン／＼にて道具。

右二重舞臺の前へ、一面に、浪幕下りる。浪頭、打ちかける。大ドロ／＼にて、震動、雷電の見得。これにて舞臺先、花道兩側へ、浪板セリ上がる。この時橋がかりより、唐船一艘、出す。雨車の音にて、物凄き見得にて、臆病口より、照菊女、右唐装束の上へ簑笠着て走り出て、こなしあつて

照菊　アヽ、嬉しや。爰まで追手は來ぬさうな。

ト右の唐船を見て

エヽ、忝ない。この船にて戀人の跡を慕ひ、尋ね廻れと天の與へ。さうぢや。

ト又ドロ／＼、雨風の音にて、照菊女、右の船へ乗り、艫を押し立てると、仕掛けにて船、花道へ行きかゝる。所へ、張喰、下官四人連れ出て、この體を見て、

張喰　船の纜綱を取つて

下官ども、この綱を引ッ張れ／＼。

皆々　ハアッ。

ト張喰、下官、皆々綱を引ッ張る。此うち、右震動雷電、よろしくあつて、照菊女、いろ／＼焦せるこなしあつて

照菊　エヽ、情を知らぬ者ども、見遁がしてたもいなう。

張喰　イヤ、ならぬ。官人ども、力一杯、曳け／＼。

皆々　ハア、。

ト引ッ張る。照菊女、懐劍にて、纜綱をフッツと切る。張喰、皆々、綱を持ちながら、後の海へドタ／＼と皆々倒る。照菊女、懐劍を口に咬へ、向うへ艫を押し切り入る。仕掛けにて船、向うへ逃散に入る。ト口上出て

東西／＼、斯様に仕りまするが發端。凡そ一歳以前の儀。これより「けいせい青陽鶏」大序の始まり。左様に御覽下さりませう。

ト口上入る。直ぐに幕明ける。

大序　御室花見の場

役名――女陸尺、照葉。河田歩左衞門。小姓、左近。禿、文字野。舞子、小櫻。同、初音。同、折鶴。仲居、お市。女陸尺、松江。千本姫。喜代姫。封間、鳴吉。御嶽伴作。斧木軍藏。犬山喜藤治。長井隼人。女陸尺、瀧野。同、山路。長崎民部壽、小田之助信雄。白拍子、濱荻。筒井順慶。ばくち打ち、鐵八。闘歿實ハ瀧川奥方、闘の戸。瀬川釆女。小早川帶刀。女陸尺、小谷。宅間小平太。腰元、裏葉。奴、木田平。傾城、園菊實ハ照菊息女。順禮、十作實ハ高川瀬平。三輪五郎左衞門高秀。小田三七郎信孝。眞柴小一郎。金井山九郎。

造り物　御室の御所花盛りの體。向う奥深に、築地、所々に見事なる櫻の木、同じく吊り枝取合せよろしく、三方に花見幕、毛氈を掛けし床几など、取付けよくあるべし。幕の内より、小田之助信雄、若殿の拵らへにて、着付け素袍、袴、上を脱ぎかけ、花子の狂言のなり形。濱荻、打抜き廣袖、さゝぎ付きの衣裳裲襠、白拍子の拵らへにて、兩人、せり合うてゐる體。喜藤治、伴作、右衣裳、羽織にて信雄をとめて居る。舞子、折鶴、小櫻、初音、濱荻を留めてゐる。千本姫、振り袖、衣裳、裲襠、姫の形。腰元裏葉、抱へ帶、置き帽子にて、これも双方なだめる心の見得。摺り鉦入りの伊達なる囃子事、この中にて幕の内より

信雄　ヤアく、留めるなく。

皆々　マアく、待たつしやりませ。

ト口々に留める體にて幕明く。鳴り物は早くあるべし。

折鶴　濱荻さん、もうよいわいなア。

濱荻　イエく、留めて下さんすな。又しても殿様の惡性、わたしや氣が濟まぬわいなア。

信雄　どうしておれが惡性な。

濱荻　惡性な譯、申しますぞえ。

信雄　オ、、聞から。

濱荻　申します

ト又せり合ふを皆々、とめて

皆々　マア、待たしやんせいなア。

喜藤　若殿、これはマア、どう致した事ぢや。信長公の御公達、小田之助信雄さまともあらう者が、下々の女夫喧嘩か何ぞのやうに、餘りはしたないと申すものぢや。

軍藏　喧嘩の來歴が知れぬに依つて、挨拶もならぬてや。

伴作　一體マア、何から起つた事でござります。

信雄　さればいやい。今日の趣向は、この御室の花見へ持込んで思ひ付いた遊興。其方達も知つて居やらうがな。

喜藤　されば、遊山事も仕盡して、珍らしい趣向も無いぢや。そこで今日はこの櫻の庭を、能舞臺にして

軍藏　亂舞方は、九條の里の舞子ども、美なる者をこの通りに狩り集め

伴作　中にも濱荻さまといふ白拍子の飛切りは、若殿の閨の花。

千本　自らは兄上のお見舞ひ、本國安土から、この御室へ來合して、次手ながらこの遊興。

裏葉　お姫樣のお供に、付添うて參りまして、面白い事の數々。取分け、若殿樣の御機嫌もようて、斯樣なお嬉しい事はござりませぬ。

信雄　花子の狂言。某は、シテの役。
　ト小唄の節にて

「綾の錦の下紐は、解けて中々よしなや、柳の絲の亂れ心は、いつ忘られぬ。」
　ト云ひ〳〵、裏葉の手を取り、眞中へ來る。

裏葉　モシ、何を遊ばしますぞいなア。

信雄　狂言の相手にするのぢや。
　ト裏葉に抱きつかうとする所を、濱荻引き分け

濱荻　イヽエ、さうはさゝぬ。お腰元の裏葉さま、愚かしい殿樣を唆かして下さんすなえ。
　ト腹立てろ、裏葉、氣の毒なるこなし。

喜藤　さては、殿が餘り手まめなるに依つて、こりや、お悋ぢやな〳〵。

折鶴　みんな濱荻さまが尤もぢやわいなア。

軍藏　それは挨拶ではなうて、けしかけるといふものぢや。

伴作　それと云ふも、太郎冠者が居ぬに依つてぢや。

信雄　マア、濱荻が機嫌直しに、太郎冠者を呼び出さう。

喜伴　一段とよからう。

信雄　如何に、太郎冠者あるかやい。
　ト橋がゝりの内より

山九　ハア、。

ト云ひ〳〵、山九郎狂言師の形にて、橋がかりより、
ツカ〳〵と出て
御前に候ふ。

信雄　念なう早かつた。

山九　ハア。

ト信雄、山九郎を見て

信雄　ヤア、其方は、本國の家來、金井山九郎。

濱荻　ほんに兄さんぢやわいなア。

喜藤　すりや承り及んだ。

皆々　山九郎とな。

山九　成る程、各々方は京詰めの御家來なれば、お見知りはござらぬ筈。拙者ことは、御本國安土に於て、三ヶ年以前、先將軍信長さまのお見出しにあづかり、それなる小田之助さまへ、小鼓、又は謠などを御指南申せと御諚意を蒙むり、それより晝夜とも、お側に附き添ひ、お守り役やら御家來やら、次第にお取立て下され、只今にては御近習方と同格のお勤め。その緣を以て、これなる妹をお召し出しにあづかり、剩さへ御寢所のお伽と申すは、妹めが活計、拙者が仕合せ。サ、斯樣な事ばかり申しては、御遊興の妨げとも存ずるから、侍ひ格の出仕を取措き、御遊興のその中へ、罷り出でたる太郎冠者がこの姿。いま某の因緣、斯くの通りでござりまする。

信雄　出かした〳〵。本國にて遊ばうと思へば、三輪五郎左衛門と云ふ家老の親仁めが、クシヤ〳〵と突くやうに云ひ居る。そこで、毛蟲の親仁めを騙して、この御室へ持ち出して遊興。コリヤ、山九郎、本國へ歸らうとも、親仁めに告げるなよ。

山九　その儀は承知いたして居りまする。

信雄　よし〳〵、なんでも今日一日は、主も家來も無禮講ぢや。

山九　よからう〳〵。無禮講とあれば、我が君を差措いて、如何に、阿房よ。

信雄　なんぢや〳〵。

山九　いから座が滅入つて見える。いつそ爰で都風流踊りはどうあらう。

信雄　よからう〳〵。

喜藤　高なしに、踊れ〳〵。ヤア、千代の始めの一踊り。

皆々　松は松坂越えたえ。

ト踊り、太鼓三味線になり、小田之助を始め、皆々、踊る。山九郎も不調法な身振りにて踊る。

ト此うち向うより眞柴小一郎、衣裳・上下にて、侍び連れ出る。臆病口の花見幕の内より、順慶、入道の拵らへ、着附け、長袴、すべて赤仕立ての拵らへ好みあり。小一郎、花道に立ちとまり、この體を見て

我が君様、何れもこの有様は。

喜軍　ヤア、こなたは。

ト愕り、鳴り物止む。

順慶　信雄公、好い加減と馬鹿を盡さつしやれ。

信雄　其方は筒井順慶。久吉が伜、眞柴小一郎。

小一　ハッ。

ト本舞臺へ來る。山九郎、上の櫻の木の側へ、遙か退いて控へる。小一郎、よき所へ直り

我が君様には、御機嫌美はしき體。先づ以て喜ばしう存じまする。

順慶　この順慶は大和一國の大名。先君信長公は、美麗を好みし活氣の大將。お氣に入りのこの順慶、出仕の節も緋の小袖をお免しあつて、お膝元の荒奴、紅梅組の司を預かる。出頭たる身共が目通り、見苦しい女郎ども、控へて居らうぞ。

ト睨む。女形皆々怖がり、後へ寄る。

喜藤　順慶さま、御意の通り、信長公の軍兵は、他家に替つて、お馬の先に赤揃へのお坊主、出陣の節お手打ちあつて、これを血祭りと相定む。その司たれば、あの如く赤揃へのお姿。なんと變つた格式ではござらぬか。

皆々　左やうでござる。

信雄　小一郎、して其方が參つたは。

小一　その仔細と申しまするは、この度帝の勅命に依つて、勢州北畠友成卿の御息女、八重姫さまを以て、小田之助さまへ娶合せよとの、父久吉へ勅命下つてはござれども、父にて候ふ久吉は、幼君三法師君を守りの爲、安土御殿に在城。それゆゑ父が名代として、右の計らひ。即ち八重姫さまをこれまでお供仕つてござれば、急ぎ御祝言を遊ばされ、今日より北畠宰相信雄公と、御名乘りあつて然るべう存じまする。

濱荻　殿さん、お前は祝言をする氣かえ。

信雄　サア、それはの。

順慶　緣談の儀は、私しならぬ禁裏のお指圖。違背あつては違勅の大罪。思案して返答さつしやれ。信雄公、何とでござる。

信雄　サア、さういふ事、只否も云はれまいが。

濱荻　御祝言の杯より先へ、わたしや相果てますぞえ。
信雄　滅相な、其方は殺さぬ。
顧慶　放埓の段々、禁廷へ申し上げうか。
信雄　サア、それは。
濱荻　いつそわたしが。
　ト死なうとする。
信雄　コリヤ、早まるまいぞ。
小一　此方への御返答は。
信雄　サア、それは。
濱荻　矢ッ張り、わたしが。
信雄　これは短氣な。
顧慶　祝言召さるか。
信雄　サア。
信顧　サア〳〵〳〵。
顧慶　御返答は。
顧小　何とでござる。
信雄　これは又困つた事ぢや。
　ト頭を掻いて、當惑の體。この時、山九郎向うへ出る。
山九　イヤ〳〵、我が君。憚りながら、こりやちと御胸中が狹いかと存じまする。

信雄　山九郎、何と云ふぞ。
山九　されば、君にも御存じの通り、去年、御父信長公薨去あつて、未だ一周忌には相成りませねど、御公達、信孝公、信雄公、お二方の中にて、小田の御家督を相立てんと、諸大名、御評議の折柄、禁廷よりお指圖の御縁邊、御違背あつては違勅のお咎め、事に依つては小田家の斷絶の基となりませう。この儀は一旦お請け遊ばさるゝが、よからうと存じまする。
濱荻　ア、コレイナ、それでは。
山九　妹、默れ。其方達が差出る所ではない。控へて居らうぞ。
濱荻　なんぼ、そのやうに云うても、この濱荻に見替へて
山九　サヽ。そこが御縁のあると、ないと。先づ一旦御祝言遊ばされ、その上でお心に入りませずば、離縁いたすは世間にはいくらも。
　ト云はうとして、顧慶が方を見て
サヽ、左やうの儀はござるまいが、何を申しても過去生の緣づく。後しての思案は拙者めにお任せなされ、先づ先づお請け遊ばさるゝが、幾重にもよからうと存じます

る。
信雄　サア、さう云ふ事なら、よいやうに計らうてよからう。
山九　すりや、御承引ござらうとな。順慶さま、小一郎さま、御祝言御承引とござる。各々方にも御滿足でござらう。先づ落ちついた。
　ト　こなしあつて、また元の通り片側へ控へる。
順慶　小一郎、八重姫さまを同道とあるが、善は急げぢや、早く伴ひ召され。
小一　成る程、御承知とある御一言が、取りも直さず吉日良辰。
信雄　すりや、この所で
濱荻　祝言をするのかいなア。
　ト　腹立てる。
千本　自らは待ち女郎。
裏葉　櫻のお庭の大島臺、長柄九獻も有り合ふ三々九度。
杉鶴　早う嫁君が
皆々　見たいわいなア。
　ト　小一郎、花道に向ひ
小一　お姫様お乘り物、御前間近う、早う〳〵。

　ト　向う戸屋の内にて
小谷　ハア。
　ト　聲する。所地入りの和かな合ひ方になると、向うより小谷、關屋、松江、瀧野、山路、照葉、右六人、各々女陸尺の拵らへ、着附け帶の好み、髮結ひ振りなどに好みあつて、各々一樣の姿、鋲打ちの女乘り物、隨分結構に飾りし本式の乘り物にて、小谷、先に立つて、棒端に片手を掛け、關屋、松江先棒を片手にかゝげ、瀧野山路後棒を兩手にかゝげ、照葉、後棒の端に片手を掛け、各々見得にて出て、花道に立ちとまる。
小谷　お供廻りは、御門前に控へさせ、お乘り物に附添ひの我れ〳〵、姫君樣をお伴ひ
六人　申しましてござりまする。
小一　直ぐさまこれへ。
皆々　畏まりました。
　ト　乘り物を橋がゝりへ直し、六人とも橋がゝりに並ぶ。
順慶　ムウ、小田家に於ては見知らざるお手輿の女ばら、われ達は新參ぢやな。
小谷　この度安土御殿へ召抱へられましたる、女陸尺の

我れ〳〵、お姫様に附添ひ來れと、政所様の御意。

關屋　お屋敷の勝手さへ、まだ初々しい新參者。

松江　お譜代とも思し召されまして。

瀧野　御用もあらば

山路　何に依らず

照葉　仰せつけられ下されませうならば

六人　有り難う存じまする。

ト こなしある。

信雄　一旦は否と云ふものゝ、また嫁入りといへば憎うない。一時も早う花嫁のお顔を。

ト 行かうとして、濱荻を見て

サア、祝言をせねばこの場が濟まず。

濱荻　アイ、御祝言遊ばせ。めでたい〳〵。ほんに此やうなアタめでたい事はない。美しさうな嫁御様に、マア、わたしから、御見もじ入らうわいな。

ト 乘り物の方へ行かうとするを

順慶　ヤア、出過ぎたる女め、控へ居らう。

濱荻　それでも。

順慶　まだ〳〵、すッ込んで居らうぞ。

濱荻　エヽ、なんの事ぢやい。

ト びんとして元の所へ來る。

順慶　サア、姫君を早く〳〵。

小一　八重姫君には、これへお越しあられませう。

ト 立寄つて、乘り物の戸を明けると、乘り物の内より、六ツばかりの小兒、芥子坊主の頭を姫のやうに拵らへ振り袖、衣裳、裲襠、姫の體にて、出る。小一郎、眞中へ連れて出て、好き所に坐らす。皆々恟り。

順慶　ヤア、北畠の息女、信雄公の嫁御寮と云うたは。

小一　なんと姫君の御器量、小田之助さまのお心に叶ひませうがな。

ト 信雄、こなしあつて

信雄　そんなら、ほんまの嫁ではなうて

濱荻　この孃様と

裏葉　御祝言を

皆々　させますのかいな。

喜藤　なんの事ぢや。

順慶　小一郎、仔細を云やれ、何とぢや。

小一　御合點が參りますまい。先達て、御縁邊の勅命ござありしところ、八重姫さまには、當春御病氣に依つてお果て遊ばされしに依つて、この儀禁廷へ聞えては、御一

家の御因みも破れ、兩家御疎遠の基。それゆゑ御妹君幼少ながら、この喜代姫君を八重姫さまと名づけ、假の御緣を結び置いて、その上にて御心に叶ひし女を八重姫さまと名け、御祝言あるべしと、事を納める父久吉が計らひ。仔細と申すは、斯くの通りでござりまする。

順慶　ハテナア。

ト思ひ入れ。

小一　姫君には、舅君樣へ御挨拶あられませう。

喜代　コレ、小父樣、今から可愛がつて遊ばして下さりませう。

信雄　可愛らいで何とせう。コリヤ、裏葉、嫁を爰へ連れて來い。

裏葉　ハイ〳〵。サア〳〵、嫁君樣、お越し遊ばせいなア。

ト喜代姫を側へ連れて行く。

信雄　ドレ〳〵。先づ器量も好し、今では某が閨の花。なんと濱荻、この姫と夫婦になるが腹が立つか。

濱荻　なんのマア、キッとお取持ちを申しますわいなア。

裏葉　ほんに可愛らしい嫁御樣、我が君樣とお寢間の睦言に、必らずヤンチヤを仰しやるなえ。

ト此うち、山九郎、側なる櫻の枝を手折り、恭々しく眞中へ持つて出て

山九　千秋萬歲の持遊びをこそ奉る。

ト謠ひながら眞中に坐り、折り枝を下に置く。

ハ、、、、めでたいワ〳〵。お過ぎ遊ばされた姫君を、御幼少な妹君を以て間に合せ、勅諚をも違背せず、兩家の因みを結ぶと云ふは、今に始めぬ久吉さまの頓智發明。この喜代姫さまは、取りも直さず姉君の八重姫樣へ、この八重櫻の一枝は、花嫁といふ引出の音物。お納め下さりませう。

ト折り枝を喜代姫に持たす。喜代姫、小一郞の方へ見せて

喜代　この花を貰うた、嬉しい〳〵。

信雄　これから客殿へ行て、祝言のざんざ。幸ひ、この順慶は色直しの赤坊主。

順慶　アイヤ、拙者はこれに。

信雄　主命を背くか。

順慶　全く左やうでは。

喜伴　信雄公の御意でござるぞ。

順慶　左やうならば、如何やうとも。

小一　拙者めも、お取持ち。
山九　お手輿の女中達も、休息さつしやれ。
皆々　畏まりました。
信雄　サア、皆の者、山九郎も奥へ。
山九　先づ、お入りあられませう。
ト唄になり、信雄、濱荻を連れ、裏葉喜代姫を連れ、順慶、小一郎、千本姫、折鶴、初音、小櫻、小姓、喜藤治、軍藏、伴作入る。陸尺の人數殘り居る。面白き謠らへの合ひ方になり、皆々向うへ出て
小谷　なんと皆様、國元と違うて、花の都は何處も〳〵、賑はしいではないかいなア。
照葉　取分けてこの御室の景色、吉野、初瀬も及びもない花盛り。二千里の外、故人の心とよみたればこそ、詠めばかりか、花にも猶心あり。
松江　春の霞を立てこめて、眩い程に咲いた櫻。
瀧野　有情非情と隔たれど、心あればこそ、詩にも作り、歌にも詠む。
山路　「世の中に、絶えて櫻のなかりせば、春の心はのどけからまし。」
小谷　「はるかに人家を見て、花あれば卽ち入る。貴賤と親疎とを論ぜず。」
照葉　その朗詠は、白居易が花の秀逸。見ぬ唐土の書にも載せ、詠めに飽かぬ櫻の花。
關屋　散りも初めず
照葉　ハテ、うらゝかな
皆々　眺めぢやよなア。
ト各〳〵花を詠める心。所へ奥より、軍藏、長柄の銚子を持ち、伴作、三方杯を持ち出て、軍藏は上の方、伴作下の方に居て
軍藏　お手輿の女中方、これにござるか。御祝言のお喜びとあつて、こなた衆にも御酒を下さるゝ。
伴作　打混じて一獻、お酌みなされ〳〵。
ト長柄三方を下に置く
軍藏　時に斯う見る處が、どれも〳〵、荒くましい所作にお似合ひなされず、美しい御面相。なんと、屋敷勤めで男に乏しくござらうな。どうだ、ちよびと出かけて見る氣はないか。
小谷　何するのぢや。
ト小谷が手を取らうとする。小谷突き退け
軍藏　ハテ、男の味を見せまするのぢや。

トまた手を持たうとする。小谷、軍藏が手を締める。
アイタ／＼。こりや、どう召さる／＼。
小谷　大與を勸める我れ／＼。不義は元より、男帶した者に、ちよつと手も觸らせまいと、腕にはこの通りの御判。目を明けて、てんがうさんせ。
ト手を持つて振り廻し、よろしく取つて投げ
皆さん、見やしやんせ。なんとマア、阿房ではないかいな。
ト軍藏、腰骨を抱へる。伴作、肝を潰す。
關屋　腕に押した御判。手出しして消すか否や、その相手ともに縛り首にあふと云ふは、何處も變らぬ武家の掟。
瀧野　お屋敷の格式、勝手を知らぬ
山路　明き盲目でがなあらうわいなア。
伴作　ハ、、、、。色事といふものは、さう張りがある程、猶面白いものぢや。ドレ／＼、身が出かけて見よう。
ト照葉に抱きつかうとする。照葉、伴作が首筋摑んで
照葉　見さんせ、馬鹿な野郎ではないかいな。
ト突きとばす。
小谷　お次へ行て休息せう。
皆々　サア、皆さん。

關屋　ござんせ。
ト伴作、寄る。照葉、平手にて伴作の頬を毆る。唄になり、皆々、臆病口へ連れ立ち入る。軍藏、腰骨を抱へ、伴作、顏を顰めて
軍藏　伴作どの。
伴作　軍藏どの。
軍藏　お互ひに
兩人　痛み入りましてござる。
ト軍藏は、腰骨抱へ、伴作は頬を抑へ、二人とも入る。
ト祇園囃子になると、向うより、傾城園菊、道中の心にて出る。禿、文字野。仲居、お市。幇間、鳴吉。附き出る。
文字　モシ、太夫樣。爰が御室とやらいふ處かえ。
いち　サア、この御室の花も及ばぬ太夫主の出立ちばえ。九條の里から遙々と、駕籠の衆は、門前に待たして置いて
鳴吉　櫻の庭の八文字は、今の世の御全盛。此方の町の親王樣と、ホ、、、、、、。ヤッチヤ／＼。
園菊　鳴吉さんの、また惡口が始まつたわいな。お前方にも話した通り、今日は釆女さんが、この御室の御所へ御

用があつてござんすと聞いたに依つて、急に逢ひたい事もあるし、お前方を頼んで、連れ立つて來たのぢやわいなア。
鳴吉　突き出した晩から、釆女さまにお逢ひなされ、外の座敷は上の空。モシ、餘り浮き名が高うござりまするぞえ。
いち　釆女さまのお出であるまで、暫く彼處へ。
園菊　花見でもせうわいな。
文字　サア、ござんせいなア。
ト始終鳴り物にて、皆々舞臺へ來て、園菊、床几にかゝる。此うち橋がゝりより、鐵八、藁苞の刀を持ち、人を尋ねる心にて
鐵八　どうぞ逢へばよいが。
ト云ひ／＼出て、園菊を見付け
ヤア、わりや、園菊ぢやないか。
園菊　ヤア、お前は。
ト逃げうとするを鐵八、捉へ
鐵八　何處へ／＼。一寸も逃がす事はならぬ。われは／＼。
ト引摺らうとするを、皆々支へて
いち　狼藉な、なんとしやんす。

鳴吉　無法な事はさゝんぞ。
鐵八　エヽ、面倒な。退いてけつかれ。
ト皆々を蹴り退け
園菊、われに逢ひたかつたわい。マア、下に居れ、下にけつかれ。
ト無理やりに坐らせる。園菊、こなしあつて
園菊　鐵八さん、今日はわたしの身を、わたしが揚げての物詣で。廓の内を逃げ走りはしやんせぬ。用があるとは何の用ぢやえ。
鐵八　オヽ、用がある。ずんとあるのぢや。一體われを斯ういふ傾城にしたその元はと云へば、去年の秋、ちつと樣子があつて、九州の方へ下つて行た時、肥前の國松浦の濱邊に、うろたへて居たわれ。その時の形は稀有な形であつたわい。唐人仕立てに詞は日本。樣子を聞けば、唐からの迷ひ子。どうぞこの日本に、足が留めたうござんすわいなアと、涙をこぼしておれを頼む。ア、不便な事ぢやと思うて、直ぐに上方へ連れて上つて、折節おれも仕合せは惡し、得心づくで九條の里へ、ガラリ百兩で賣つてやつて、その金は博奕の元手、われは傾城になつて、日本の男の食ひ飽きをする。それといふもおれが庇

ぢや。すりや、この鐵八を、親とも兄とも大切にさらす筈ぢやぞよ。

園菊　サイナア、其お世話があるに依つて、お前の云はしやんす事は、何に依らず聞くではないかいア。

鐵八　吐かしやがんな。おれが云ふ事を聞くなら、なぜ應と云はぬ。

園菊　そりや何をえ。

鐵八　さるお歴々のお侍ひ樣が、われが事を思ひ込んで、毎度廓へ通うて、呼び出しに遣らるゝさうなが、今日は揚げぢや、明日は約束があると、摺り拔けて逢はぬげな。そこでこの鐵八を呼んで、われを頼む。どうぞ太夫を口說き落してくれ、得心次第直ぐに身請けする、われにも褒美を遣らうとの事。園菊、この鐵八が恩を忘れぬといふ心ならば、應と云うて身請けをしらるゝか。但しは否か。返答せい。どうぢや。

園菊　わたしが身を、斯うして苦界に沈めたは、身に望みがあつての事。もし身請けを否と云うたら

鐵八　相手は侍ひ。事に依つたら、命づく。

園菊　得心せうと云うたらば

鐵八　身に叶うた大きな仕合せ。

ト園菊ちよつと思案して

園菊　成る程〳〵、よく〳〵に思ひ廻らして見れば、一生のこの身の納まり、殊に相手は歴々のお侍ひさん。

鐵八　さうとも〳〵。

園菊　身請けとあるはこの身も仕合せ。

鐵八　世話燒いたおれも仕合せ。

園菊　こりや、お前の云うての通り

鐵八　應と云つて

園菊　身請けしられて

鐵八　行く氣か〳〵。

園菊　アイ、と云うたらお前の勝手はよからうけれど、否でござんす。

鐵八　ヤア。

園菊　一旦否と云うたれば、變ぜぬが勤めの張り、廓の諸譯といふのは、深かアいものでござんす。皆樣、花でも見よう。ござんせ。

ト唄になり、園菊こなしあつて、皆々連れ立ち、臆病口へ入る。鐵八殘つて

鐵八　此奴、一筋繩では行かぬわいやい。

ト手を組むこなしあり。此うち、橋がゝりより小平太

衣裳上下にて出て

小平　それに居るのは鐵八ではないか。

鐵八　あなたは小平太さま。

小平　幸ひの所で逢うたわい。して、頼み置いた事は、どうぢや〳〵。

鐵八　サア、今も今とて、身請けの事を勸めましたが、イヤモウ、酢でも、蒟蒻でも行く奴ではござりませぬ。

小平　さうあらう。去年身共が、高麗に在りし折柄、蔦の錦を横取りひろいだ女郎め。彼の地にて行くへを失ひ、歸朝の後、樣子を聞けば、彼奴も日本へ渡り、蘭菊といふ傾城姿。直々に詮議いたさば、悪や角と諍がふは定。そこで其方を頼んで、身請けの談合。いよ〳〵得心せぬとな。

鐵八　私しも如才はござりませぬ。

小平　ムウ、よい。然らば又、外に手段もあらう。それは格別、鐵八、彼の一品を持參したか。

鐵八　兄御の毛間玄蕃さまに頼まれて、去年六月、本能寺騒動の中へ紛れ込み、盗み出した蛙聲丸の一振り、暫くぼく除けの爲、方々を駈け廻つて、もう世間も鎭まつたと思うて、持つて來たこの蛙聲丸。

　　ト出して見せる。

小平　出かした〳〵。身共が兄、玄蕃どのへ渡さう。その劍これへ。

　　ト取らうとする。

鐵八　待つた。滅多には渡されぬ。

小平　渡されぬとは。

鐵八　さればぢや。首かけの仕事で盗み出したこの劍。國郡と釣替へでなければ、何時知れぬ人の身の上。

小平　此奴、きつしくな奴だわい。

鐵八　當世、掛け商ひに懲りて居やんすぢや。

　　ト小平太、思案して

小平　此方の大望成就するまで、町家に置くも手段の一つ。よいワ、その劍預けて置かう。

鐵八　何時なりとも褒美と釣替へ。

小平　此方より便りするまで、人手に渡すと身の上だぞ。

鐵八　ハテ、野暮な代物、手離してはおれが身の上。

小平　して、其方は。

鐵八　栗田口の在所で

小平　鐵八と尋ねたらば

鐵八　隠れはごんせぬ。

小平　よいワ。人の見ぬ間に
鐵八　小平太さま。
小平　早く行け。
鐵八　さらば。
ト唄になり、鐵八は橋がゝりへ、小平太、思ひ入れあつて、臆病口へ別れ入る。ト向うより釆女、衣裳上下にて、後に木田平、繻子奴にて附添ひ出る。
釆女　木田平、只今の大勢連れは、慥かに御所方と見えるな。
木田　一ぜんめが附いて居つたところは、慥かに御所でござりまする。
釆女　練りの帽子は美しかつたぞよ。
木田　彼方も見返つて居りました。
釆女　御用先でなくば、只は置くまいものを
木田　あつたら物を見遁がしました。
トこんな事を云ひ〳〵舞臺へ來て
木田　若旦那、花の蔭で、暫らく御休息あられませう。
釆女　ナニサマ、暫らく休んで參らう。
ト床几に掛かる處へ、臆病口より、隼人、衣裳上下にて出て

隼人　これは瀬川釆女どのでござるか。
釆女　長井隼人どの、サヽ、これへ。
隼人　イヤ〳〵お構ひ下されな。この床几で一服いたさう。
ト外の床几へ腰掛ける
木田　イヤ、若旦那へ申し上げまする。今日の御公用の儀は、如何樣な儀でござりまする。下郎めにもお聞かせ下さりませう。
釆女　成る程、其方は樣子は知るまい。去年某が高麗より持ち歸りし五色の蔦かつら。戰國の折柄なれば、暫らく當御室の御所に預け置かれ、某には恩賞とあつて、小田の姫君千本姫さまを、宿の妻に下し置かれんと、政所のお指圖。この身に取つては、上もない大慶。然るところ、今朝これなる隼人どのを以て、大内記錄所よりのお使者、彼の五色の蔦を、當今御叡覽あらんとの事、それゆゑ當寺の寶藏に預けある、五色の蔦を取出し、隼人どの同道にて、明朝未明に大内へ持參の役目。なんと隼人どの、右の段、寺中へも御披露下されたかな。
隼人　成る程、坊官まで通達いたした、貴殿のお出でを相待ち居りましてござりまする。
釆女　木田平、其方も粗略のないやう、相心得てよからう。

木田　ネイ〳〵、それで樣子が相解りました。
　ト此うち、臆病口より、裏葉出て、木田平を招く。木田平見て、今は折が惡いと、いろ〳〵仕方する。
釆女　して、御兩君にもお入りでござるかな。
隼人　イヤ、三七信孝公には、後ほどお入りとの知らせ。御舍弟信雄公には、今朝よりお入りあつて、只今御遊興の最中でござる。
釆女　然らば、信雄公へお目見得いたさう。木田平々々々コリヤ、木田平。
木田　ネイ〳〵〳〵。
釆女　某は方丈へ參る程に、其方も參れ。
　ト立ち上がり、振り向くはずみに裏葉と顏見合す。裏葉、隱れる。釆女、こなしあつて
　ハ、ア、聞えた。これぢやな。
隼人　釆女どの、これぢやとは、どれでござる。
釆女　サア、それは何でござる。櫻木のほとりへ、美しい鳥が出ました。
隼人　ハア、何鳥でござらうな。
釆女　あれは何鳥でがなござらうぞ。
木田　イヤ、若旦那、方丈へお供仕りませう。
釆女　イヤ〳〵、某は隼人どのと同道を致せば、汝はこれに控へて、鳥の正體見屆け居らう。
隼人　サア、御案內仕らう。
釆女　ドリヤ、方丈へ參らうか。
　ト唄になり、釆女こなしあつて、隼人連れ立ち、臆病口へ入る。合ひ方になり、裏葉向うへ出て
裏葉　木田平どの、待ち兼ねたわいなア。
木田　お身も嗜んだがよい。若旦那のござるのに、ツカツカと出て來て、すんでの事に見付けられて見い。お手打ちになる事だわい。
裏葉　何を云はしやんすやら。釆女さまは見てござつたわいなア。
木田　今のを見てござつたか。
裏葉　アイナア。
木田　南無妙法蓮華經
裏葉　櫻木の小鳥に譬へて、正體を見屆けいとは、しつぽりと話しせいとの謎々。粹なお主樣に使はれるやうにもない、氣の堅い木田平どの。
木田　ア、、コレサ〳〵。今日はお供先だから、話しては居られぬ。御用があるならば、近日々々。

ト行かうとするを留め

裏葉　イヽエ、大事ない。

木田　大事ないとは。

裏葉　サレバイナア。釆女さまに云ひ號けのある千本姫さまは、わたしがお主。その家來のわたしと、釆女さまの御家來のお前と、家來と家來が懇ろするは、みんな、アノお主樣へ忠義ぢやわいなア。

木田　ハテ、得手勝手な忠義ぢや。

裏葉　過ぎし頃、政所樣の仰せを受けて、お姫樣をば頼みの音物、お文の使ひはわたしが役。釆女さまの母御から、お返事を遊ばす間、暫らく其處の待合ひの

木田　その時おらはお圍ひの掃除に出て、何かおめでたの御酒には醉ふ。ほろ醉ひ機嫌で見廻せば、揚貴妃か、天人か。

裏葉　ほんにマア、苦味の走つた、キッとした、しやんとした奴さんぢやと

木田　おらが思へば

裏葉　わたしも思ふ。

木田　醉ひ紛れに待合ひで、ツイ

ト顏見合せ

裏葉　オヽ、恥かし。

ト顏を隱す。木田平もこなしあつて

木田　イヤ、その時はほんの酒機嫌、醉ひが醒めて、よく思つて見れば、不義は第一の御法度、現はれたらば首道具。ヤレ恐ろしや。兎角觸らぬ神に祟りなしだ。

ト立つて側へ退くを

裏葉　イヽエ、そりや卑怯ぢや。一旦枕を並べた上は、例へ顯はれてお手打ちに逢ふと云うても、その男へ立て通すが、姫御前の操ぢやわいなア。まだ何やかや話したい事もある。幸ひあの幕の内へ、ちよつと來て下さんせいなナ。

ト木田平を引ッ張る。この前より正面の中開きより、小谷出かけるこなしあり。木田平、振り切つて

木田　滅相な晝日中、話しをせうとは小ッ恥かしい。否だ否だ。

裏葉　ツイ、ちよつとぢやわいなア。

木田　エヽ、否だわい。

ト突き飛ばす。裏葉、辛氣がる。この時小谷向うへ出て

小谷　こりや、奴さんの方が惡いわいなア。

ト兩人見て
裏葉　お前は最前の女陸尺。
小谷　アイ、小谷といふ者でござんす。
木田　その小谷どのが、おれを惡いとは。
小谷　サイナア。見やしやんす通り、わたしや女陸尺、お大名の大奥へも立寄るゆゑ、マア身持ちが第一。若侍ひ衆にてんがうもさせまい、ちよつと手へも觸らせまいと、この通り、腕にはお局樣の御判が据つてござんす。これまで堅い身でさへも、戀の道は格別なもので、有やうは、わたしも
トこなしあつて
マア、それはそれよ。姫御前と云ふものは、よく／＼罪の深いものやら。あの人に斯う／＼した事を云はうと思うても、イヤ／＼云うては叱られうか、云はうか云ふまいかと、心には千萬無量。そこらは又男の方から、われは斯う／＼思うて居やうがなと、汲んでやるも又、男の情と云ふもの。コレイナア、情を知らぬでは、誠の武士とは云はれぬぞえ。
ト木田平が脊中を叩く。
木田　イカサマ、さう云へば一理もあるてなア。
小谷　合點がいたかえ。ホヽヽヽ。呑み込みのよい奴さんではある。
ト此方へ來て
サア、此方はよい程になア、あの幕の内へ連れて行て話しを
トこなしあつて
ツイ手ばしこうさんせえ。
裏葉　アイ／＼。サア、木田平どの、話しせう、ござんせ。
ト手を取り、引ッ張る。
木田　どうでも話しをするのか。
裏葉　アイ、話しせうわいな。
木田　エヽ、儘よ。話しもせい。
裏葉　サア、ござんせいなア。
ト下座の花見幕の内へ連れ立つて入る。始終合ひ方。小谷、こなしあつて
小谷　何處の浦も戀のひるぢやぞ。
ト奥より、釆女、文字野を連れ出る。小谷、隱れる。
釆女　文字野、太夫を連れだつて來たといふが、何處に居る何處に居る。
文字　アイ、櫻の林に待つてゞござんす。お前に逢うたら、

この文上げいと云うてな。
ト紅書きの文を出す。
采女　よし〳〵。コリヤ、其方はナ。
トちよつと囁く。
文字　アイ〳〵、合點ぢやわいなア。
ト走り入る。
采女　早く行け〳〵。時になんぞ急事でもあらう。
ト文を解き、讀まうとする所へ、千本姫出て
千本　モシ〳〵、采女さま。
トおづ〳〵云ふ。采女、ちやつと文を隱して
采女　これは千本姫さま、ハヽツ
ト辭儀する
千本　其やうに慇懃にして下さんすと、どうも云ひ樣がないわいなア。
采女　でも、あなた樣は小田の姫君。私しはあなた樣の御家來。
千本　イヽエ、家來ぢやない、母樣からお許しの出た夫婦の縁。
采女　サア、それはさうでも、まだ此方の屋敷へ呼び取りませねば、マア、お主なり、家來なり。主と家來が懇ろするは、あまりよからぬものでござりまする。爰は端近。イザ先づお入りあられませう。
ト慇懃に云ふ。
千本　其やうに云はしやんすと、どうも云ひやうがないわいなア。
トもじ〳〵する。小谷もどかしがり、向うへ出て
小谷　お取持ち申しませう。
千本　ヤア、そもじは。
采女　こなたは。
小谷　采女さま、此やうに申しましたら、いから馴れ〳〵しうも思し召しませうが、ちよつと見受けましたところが、纔一通りは滿更知らぬやうな、お前樣とも見えませぬ、わたしらも覺えがあるが、嫁入り前の姫御前の心と申しますものは、強う急きが來て、心がモヂ〳〵致しまして、それは〳〵、どうもかうもなるものではござりませぬ。お姫樣のお心根を思ひ遣りなされてナ、ツイ、ちよつと色よい御返事を。
采女　ア、コレ〳〵、女中。其許はいかい世話燒きと見えまするな。
小谷　私しが願でござりまする。

釆女　何は格別、この釆女は武士でござるぞ。
小谷　ハイ。
釆女　只今も申す通り、云ひ號けはあれども、未だ輿入れ
　がない。
小谷　ハイ。
釆女　輿入れのないのに、自墮落な事は叶ひませぬ。
小谷　ハイ。
釆女　それに何ぢや、見ず知らずの身を以て、押し付けた
　取持ち。
小谷　ハイ。
釆女　不作法とや云はん
小谷　ハイ。
釆女　瀨川釆女は物堅い武士ぢやぞ。
　トきつと云ふ。
小谷　ハイ〱〱。
　ト手持ち無沙汰にて此方へ來る。
千本　どうしたらよからうぞいな。
小谷　どうと申しましたら、あなたの仰しやるのが皆御尤
　もでござりまする。待ちなされえ。
　トちよつと思案して
　よし〱、斯うぢやわいなア。
　ト千本姫にちよつと囁き、釆女が刀を教へ、死ぬる眞
　似をして、又囁き
　ナ、ぢやわいなア。
　トいろ〱呑み込ます。
千本　大事ないかや。
小谷　大事ござりませぬ。
千本　そんなら。
　ト釆女が側へ寄らうとして、接ぎ穗のないこなしにて、
　また後へ戻る。小谷、もどかしがり
小谷　これはしたり。初心なも時に依る。何ぢやあらうと
　なア、モシ
　ト叱る眞似をして
　ちやつと行きなされいなア。
　ト千本姫を、釆女が側へ突き遣る。この拍子に釆女が
　側へ倒れかゝり、其まゝ刀に手を掛けて
千本　さうぢや。おさらば。
　ト死なうとする。釆女、留めて
釆女　コレ、待つた。何ゆゑ御自害。
千本　この場で戀が叶はねば、生きて居ぬ。死ぬる〱。

釆女　これは短氣な。マア〳〵、お待ちなされ。
千本　聞入れて下さんすかえ。
釆女　サア、マア、そこらあたりは、にふがにふでござりまする。
　　ト千本姫、どうせうと小谷を見る。小谷、また死ぬる眞似をして、突ッ込んで行けと敎へるこなし。千本姫呑み込み
千本　さうぢや。
釆女　コレ〳〵、得心ぢや〳〵。眞實ほんまに聞き入れて居ります る。
　　ト千本姫を突き離す。
小谷　ざつと納まつたわいな。これから後は、幸ひの、あの幕の内で。
釆女　イヤ、その儀は。
小谷　辭退なさると、お姫樣は
千本　相果てまするぞえ。
釆女　それでは。
小谷　ぢやに依つて、幕の内へ。
釆女　これは迷惑な。
小谷　サア〳〵、ちやつと。

　　ト千本姫が手を持つて、釆女が手に持ち添へ
　　ござりませいなア。
千本　サア釆女さま。
釆女　これは又、迷惑な。
　　ト云ひ〳〵上の幕の内へ、兩人入る。小谷、こなしあつて
小谷　此方は餘ッぽど、骨が折れたぞ、
　　ト奥より、信雄出て
信雄　サア〳〵、腹が立つぞ〳〵、彼奴をどうしてこまさうしらぬ。
小谷　殿樣、なんと遊ばした。
信雄　コリヤ、聞いてくれ。先刻にから濱荻の影が見えぬ。一體某は、ちつとばかり足らぬさうな。その足らぬところを見込んで、慥かに隱し男を拵らへたのぢや。どうしてこまさうかしらぬ。
小谷　これはあなたのがお道理でござりまする。斯う遊ばせ。なんぢやあらうと、濱荻さまをお召しなされて、お詮議なさるゝがようござりまする。
信雄　ムウ、さうぢや。
小谷　お前樣は、どこぞ爰らに隱れてござれ。

信雄　よし〳〵。
小谷　所へ、濱荻さまが、その隱し男に逢はうと思うて、お出でなさるゝわえ。
信雄　來さうなものぢや。
小谷　その男を尋ねて思はず知らず、お前樣の隱れてござる所へ、濱荻さまが行かしやんす。
信雄　來る〳〵。
小谷　所を捉へて、御詮議はどうござりませう、
信雄　よい〳〵、いつち好い思案ぢや。さうして、何處に隱れて居やう。
小谷　幸ひ、あの幕の內へ。
ト正面の幕を敎へる。
信雄　よし〳〵。隱れて居る程に、氣を附けてくれいよ。
ト云ひ〳〵、眞中の幕へ入る。小谷、捨ぜりふあり。所へ、濱荻、出る。
濱荻　殿さん、何所にござんすぞいなア。
ト云ひ〳〵
爰にもござんせん。面妖な。
小谷　逢はせませうかえ。
濱荻　エ、。

小谷　お前がござらぬと云うて、御立腹であらうぞえ。
濱荻　サア、それで早う逢ひたいわいなア。
小谷　御前樣はナ。
濱荻　何處にござるえ。
小谷　ツイ、あの幕の內に。
濱荻　エ、、そんなら。
ト上の幕へ行かうとする。
小谷　ア、、モシ〳〵、その幕は外のぢやわいなア。御前樣のござる所はナ。
ト眞中の幕を敎へる。
濱荻　そんなら、この幕の內。
ト行かうとして、後へ戾り
どうやら改まつたやうで。
小谷　オ、、笑止。此お子は、玄人のやうにもない。ドレドレわたしが。
ト濱荻を幕の側へ連れて行つて
モシ、今のお方を上げますぞえ。
ト幕の內へ濱荻を入れ、此方へ來て、息をつぎ
マア、方付いた程にの。
トこなしあつて

此やうに人の戀まで世話をやくも、身につまされたわたしが願ひ。國元で云ひ交した庄助どの、別れてから便り音づれのあればこそ。その夫の行くへを尋ねう爲に、爰の屋敷、彼處の武家方、あるが中にもお手與の奉公は、不義せぬといふ心の誓ひ、腕に押されたこの御判。何時か剝がしてしつぽりと、夫の側に寢る事ぞ。思ひ廻せば。味氣ない身の上。

ト泣かうとして氣を替へ、あたりを見廻し

ホヽヽヽヽ。わたしとした事が、あたりに聞く者がなければこそ。ドリヤ、休息せうか。

ト唄になり、小谷こなしあつて奥へ入る。ト三方の幕の内より、右人數、皆々出て

木田　其やうに、いつまで話しするものぞ。
裏葉　それでも氣が濟まぬわいなア。
采女　マア、御用を方付けて參らう。
千本　イヤ〳〵、離さぬ。
信雄　そんな僞はりは、聽かぬ。
濱荻　そりや、胴慾ぢやわいなア。

ト此せりふを、皆々、ごつちやに云ひ〳〵、幕を出る。采女、木田平。信雄は奥へ行かうとする。裏葉千本姫、濱荻は留めて男共は離せと云ふ。女共は離さぬと云ふ。いろ〳〵引ッ張り合ふ。所へ臆病口より。小平太出てこれを見て、

小平　ヤア、こりや、何事ぢや。

ト云ひ〳〵、揉み合ひ中へ入る。女子ども、皆々、小平太を突き退け、右の通りいろ〳〵あつて、たうとう、濱荻、小平太を信雄と取り違へ、上の方へ引ッ張る。千本姫は又、裏葉を采女かと思うて引ッ張る。四人、珠數つなぎになつて引ッ張り合ふ。この間に、采女、信雄、木田平、逃げて入る。後にいろ〳〵あり、小平太、フナ〳〵となつて

小平　コリヤ〳〵、目が舞ふ。どうするのぢや、どうするのぢや、

トこの時、皆々、顏見合せ

女三　エヽ、お前ぢやない。
小平　間違ひぢや。

ト三人、小平太を突き飛ばして奥へ走り入る。小平太、呆れた體にて

何事ぢや。さゝほうさいの目に遭はしやアがつた。

ト呟き居ると、中門の方より、關屋、山路、瀧野、出

る。臆病口より、順慶出る。

順慶　宅間小平太。これに居るか。

小平　順慶さま、いづれも。

ト合ひ方になり、皆々あたりを見廻し、一緒へ寄る。

順慶　瀧川將監どのゝ奧方、關の戸どの。

關屋　夫將監、記録所の内意を受け、面體知られぬ自分が斯く姿をやつし、都の内を徘徊して、信孝どの、信雄どのゝ行跡を見出さん爲。

山路　我れ〳〵は、北國の英雄、川尻肥後守が妹山路。

瀧野　武智光秀が郎黨、開田太郎が妻の瀧野。

小平　身共が兄、宅間玄蕃、各々方へ腹心の血判を固め、小田の四海を奪はん大望。

順慶　この上は時刻を移さず、叛逆の旗揚げ。

關屋　ヤレ、音高し。謀り事は密なるを以て善しとす。久吉世に在るうちは、何かに附けて大望の妨げ。近々都大徳寺に於て、先君の追福を勤めし上、小田の家督を定めん爲、京都には柴田修理之亮勝重、この頃、所勞に依つて、勝重が旅館へ、諸大名寄り集まり、家督定めの評議ある筈。

小平　さるに依つて、國々の空虚を窺ひ、兼ねて一味の高麗國へ内通し、釜山浦より攻め寄せなば、六十餘州は粉微塵。

順慶　イヤ、その思案、まだるい〳〵。この順慶が存ずるは、信孝、信雄、この處へ來ることこそ幸ひ、先達て一味なしたる、川尻肥後守に諜じ合せ、この御室へ不意に押寄せ、討つて取れば根を斷ち、葉を枯らすと云ふもの。

山路　兄肥後守も手勢を以て、北山へ埋伏し、順慶さまの合圖を待つ筈。

瀧野　その加勢に加はつて、女ながらも、開田どのゝ修羅の妄執。

關戸　これも尤も。久吉は、本國安土に在城の折と云ひ、信孝が後見、柴田修理どのは、折柄病氣。

小平　三輪五郎左衛門は、信雄どのゝ後見、小田家隨一の舊臣なれど、高が七十に餘つた老ぼれ、打ち殺すに手間は入らぬ。

瀧野　この瀧野も一緒に。

順慶　兩人、行きやれ。

瀧野　山路さん、

山路　瀧野さん、ござんせ。

ト兩人、向うへ走り入る。松江、出かけて居て

松江　さてこそ、曲者。

ト追はうとするを、順慶捕へて、脇腹へ突ツ込む。

小平　その女は。

順慶　焼鳥に餌を、後日の邪魔。

ト刳る。橋がゝりより、組子四人、赤き絆纏の拵らへにて、バラ／＼と出て、

四人　順慶さま。

順慶　紅積組の荒奴ども、申し附けた一儀を。

組一　ハツ、兼ねてよりの仰せに從ひ、お手下の我れ／＼。

組二　小田之助が遊興の中へ紛れ込み

組三　不意を窺ひ、討取る手筈。

組四　用意一々

四人　整ひましてござりまする。

順慶　必らず拔かるな。

四人　畏まつてござりまする。

關戸　自らは大內の隱し目付け、何事も知らぬ振りにて、

一左右次第禁裡へ奏聞。

小平　何かの密事は、奥へ來つて。

關戸　順慶どの。

順慶　小平太、來やれ。

小平　先づござりませう。

ト唄になり、順慶、組子の者へ顔を知らす。皆々、「ハツ」と云うて、橋がゝりへ入る。障の戸こなしあつて、順慶、小平太、附き添ひ奥へ入る。ト采女、出て

采女　もう／＼、御免々々。我が君の無理酒には、ホツと弱るぞ。

ト云ひ／＼、出て、合ひ方になり、采女、あたりを見て、袂より最前の文を出し、讀む事あつて

こりや、コレ、急に身請けせうと云ふ客があると、おれへの知らせ。

トこなしあつて

外でよい事があるに依つて、おれをば退かうといふ氣か。よもやさうではあるまい。が、カウツ、どうしたものであらうぞ。

ト煙草盆取つて來て、煙草をのんだり、また文を見たり、いろ／＼ある所へ、園菊、出て、采女を見るより、ツカツカと行つて

園菊　采女さん、逢ひたかつたわいなア。

ト側へ寄る。采女、彼方へ振り向く。園菊こなしあつて

園菊　定めしそれを見やしやんしたでござんせう。その事も相談したし、廓の首尾を見合せ、どうやら斯うやら。

　ト云ふを打ち消し

釆女　コレ〳〵、長談義聞くには及ばぬ。其方に身請けがあれば、此方は御用先、相手になる隙がない。

　ト立つて、行かうとする、裾を持ちて留め

園菊　イヽエ、わたしよりお前が。

釆女　おれがどうした。

園菊　將軍家のお姫さんと、祝言する氣であらうがな。

釆女　ヤア、その譯をどうして。

園菊　知らいでならうかいなア、モシ、釆女さん、

　ト釆女を引き廻し、下に置く。キッパリとした合ひ方に變る。園菊こなしあつて

今更云ふには及ばねど、わたしが身の上、母樣は日の本のお生れなれど、高麗人に思はれて、わたしは、あの國で生れたれば、幼いからの唐土人。去年の秋、蔦の錦を手に入れんと、高麗へござんした時、フッと見染めたは、母樣の夢の告げ。割符を合す緣ぞと、喜ぶ甲斐のある事か、本意ない別れに身も世もあられず、後を慕うて釜山浦の港に、有り合ふ船は天の與へ、浪に搖られ風を凌ぎ、生きる死ぬるの切ない苦しみ。その念が通つたやら、松浦の濱へ舟を揺り上げ、日の本の地へ來るは來ても、何處をどうしての勝手は知らず、人を頼んで都へ上り、わたしが好んで斯うした勤めの身になつたも、お前にま一度、巡り逢ひたいばかりぢやわいなア。母樣のお話しで、倭の形も風俗も、習ふに早き傾城のこの姿、戀しい床しい念が屆いて、廓で逢うたその時の、わたしが嬉しさ。三千餘里の海山を、戀ひ慕うた心根を、可愛い事ぢやと、思ひやつてはくれもせいで、わたしを振り捨て、外の奥樣を持たうとは、そりや聞えませぬ。胴慾ぢや胴慾でござんすわいなア。

　ト取りつき、大泣き。釆女、こなしあつて

釆女　イヤ、モウ、さう聞いては一句もない。高麗で逢うた時は、つい假初めのやうに思うてゐたが、歸朝の後、小田之助さまのお供を申して、廓へ來る殿の遊興。この釆女にも傾城をあてがへと、その時の新造太夫、顔を見れば恟りせまいか、驚ろくまいか、樣子を聞へば段々の話しとは云へ、高麗と日の本、劍を含む仲なれば、どうも肌が許されぬと云うたれば

園菊　僞はりならぬ證據にと、お前に渡した、高麗の地理

の一巻。

釆女　その一巻は爰に

ト懐中より出して

高麗に於て、眞の蔦の錦と名付くるは、地理の一巻。拵らへの布を以て、蔦の錦と名付くる由。この度、帝様より、五色の蔦を叡覧とあるゆゑ、この一巻を差添へ、大内へ持参せん爲。これで其方への疑ひも晴れて

園菊　それから深う云ひ交はし、鳥の啼かぬ日はあれど

釆女　逢はぬ一夜のあらばこそ。廓で浮名を立てられて、二人が仲を唄に作り、謳はれたではないかいの。

園菊　ほんにさうぢやわいなア。

ト釆女、こなしあつて、園菊に凭れかゝり

釆女　斯う差向ひになつた所は、揚屋の座敷で出逢ふ心地。

園菊　二人が仲を製らへたその唄を「唐土」と外題を附け、可愛らしいその唱歌。

釆女　折しも其方の香包みに、唄の文句をおれが手で書き記し、君が移り香、持ち歸らうと云うたれば

園菊　イエ／＼、焚き物を送れば緣が切れるとの譬なれば、わたしが方にと留め置いた、その香包みは、コレ、爰に

ト香包みを出して見せる。

釆女　久し振りにて、ちよつと一焚き。

園菊　アイ。

ト内にて

〽なか／＼に、見ぬ唐土の鳥は惜し、桐の葉がくれ、それかとよ、一葉は船の水馴棹、八重の汐路を辿り來て、ほんに思ひは伽羅の香を、別れはいつも懐かしき。

ト唄のうち釆女、煙草盆を取り、火入れに灰をする。園菊、香を出し、いろ／＼あつて、火入れに注ぐ。釆女香をきゝて、園菊が方へやる。園菊、同じく香をきく。右唄のうちに、この模様、いろ／＼あつて、唄の切れよき程に、向う戸屋の内より

呼び　信孝公の御入り。

ト云ふ。兩人驚ろき

釆女　ナニ、我が君のお入り。この態を御覧あつては如何。園菊、さらば。

ト立つて行くを、園菊留め

園菊　コレイナ、まだ話さねばならぬ事もある。ツイ、ちやつと門前の茶店まで。

釆女　イヤ／＼、今日は大切の公用。

トまた行くを

園菊　ツイ、ちやつとぢやいわなア。

ト又引ッ張る。

采女　ハテ、サテ。

ト振り離して行くを

園菊　マア、ござんせいなア。

ト無理に引ッ張ると、此うち「いざや酒を酌まうよ」と「酒宴事」の合ひ方、笛、太鼓の鳴り物になる。と向うより三七郎信孝、元服、突立ての茶筅、廣袖の衣裳、羽織、丸絎けの帶にて、大杯を持つて駒下駄を履き、酒に醉ひし體。小姓二人、一人は信孝が太刀を持ち、一人は、長柄の銚子を持つ。その後より、上下の侍ひ、近習、大勢附き添ひ出る。花道にて、兩方行き逢ふ。信孝、チッと園菊に目を着ける。園菊も見て

園菊　ヤア、お前は。

ト惆り、采女、園菊を引き廻し、圍ふ。

采女　我が君樣。

ト信孝、采女を睨む。これに怖れて、采女、園菊を圍ひながら、チリ／＼後へ戻る。信孝、附け廻して、本舞臺へ來る。始終、右の鳴り物にて、各々、並よく、シヤンととまる。鳴り物止んで、和らかな合ひ方になり、信孝、こなしあつて

信孝　太夫園菊。

園菊　アイ

采女　ムウ。すりや、我が君樣と

園菊　お近附きの段かいなア。わたしを身請けすると云うて、この頃廓へ通はしやんすは、あなたでござんすわいなア。

采女　すりや、アノ、我が君樣が。

ト信孝を見て思ひ入れ。信孝、園菊をヂロリと見遣るこなしあつて

信孝　ハテ、羨ましい。當春廓でフト見初め、姿と云ひ、器量と云ひ、近習の者に云ひ附けて、名は何と問はせたれば、わしや園菊と云ふわいなと、膠ない顔つきに、ぞつこん惚れ拔いた。權威で逢ふは面白からずと、供をも連れず只一人。戀には窶す忍び姿。呼びにやつても來ればこそ、文をやつても否やの返事いたさぬは、彼の間夫とやら云ふ似非者。その間夫とやら云ふは、采女、汝か。

采女　サア、その儀は。

信孝　太夫、予が心に從ふ氣か。

園菊　サア、それはナ。

信孝　但しは否か。
園菊　サア、否と云うたら
信孝　取持たす。
園菊　そりや、誰れにえ。
信孝　この采女に取持たす。
　ト采女方へ行くを、園菊止めて
園菊　ア、コレ、采女さまを。
信孝　抱かれて寝るか。
園菊　サア、アノ、つッと辛氣な。
信孝　それ〳〵、さう拗ねたのがしんぞ命、是非とも心に従うて。
　ト園菊に抱きつかうとする。采女、園菊を下へ引廻し、眞中へ入る。
采女　我が君様、見ますれば御酒興の態。よもや、御眞實でござるまい。酒の上のお戯れに。
信孝　默らう、此奴。醉ひ潰れても、本心亂るゝ信孝でない。
采女　すりや、御本心で。
信孝　口説き落して抱いて寝る。
采女　エ、。
　トぎしむ。
信孝　なんぢや。なんとした。
　ト睨めつける。采女こなしあつて
采女　一夜流れの傾城とは云ひながら、云ひ交した縁は縁。現在御家來たるこの采女が、
信孝　縁切れ。
采女　エ、。
信孝　縁切つて、予が心に隨くやう、取持つが家來の役。
采女　ちやと申して。
信孝　主命に背くか。
采女　サア、その儀は。
信孝　取持つか。
采女　サア。
兩人　サア〳〵〳〵。
信孝　取持たずば汝が身の上。いつそ
　ト小姓が持ちたる太刀を取つて、采女へかゝる。園菊、采女と入れ代つて留め
園菊　ア、コレ。抱かれて寝よう。
采女　コレ、それでは。
園菊　サア、マア。わたし次第にしてナ。

トいろ／＼呑み込ます。信孝の方へ向うて
抱かれて寢るわいなア。
ト信孝、和らぎし體にて、太刀を小姓に渡し

信孝　アノ、得心して、予が寢所へ。

園菊　アイ、夕告げ鳥の告ぐるを合圖に。

信孝　ムウ、今宵は當御所に一夜を明さう。僞はりなくば
宵の内から。

園菊　行くわいなア。

ト采女腹立てる。園菊押へる。信孝、園菊の焚捨ての
香をフトきゝ取る事あつて

信孝　ハテ、心得ぬこの名香。

ト思ひ入れ。

園菊　すがりなれどもわたしが焚捨て。

信孝　この一本が。

園菊　アイ。

信孝　ムウ。

ト思ひ入れあつて、懷中より香包みを出し、右火入れ
の中へ香を注ぎ、しか／＼あつて
きいて見やれ。
ト園菊、香をきく。驚ろく體にて

園菊　香りも違はぬ、正しき一本。

ト信孝を見る。信孝こなしあつて

信孝　「唐土の山の彼方に立つ雲は、爰に焚く火の煙りなり
けり。」

園菊　その歌をどうして。

信孝　先つ頃、高麗國より、父信長へ獻じたる、「唐土」と
名づけし名香。割符を合せし只今の一焚き。

園菊　エヽ。

信孝　サヽ、閨の下着にしつぽりと、焚きしめて居るぞ
や。

ト唄になり、信孝、兩人へ心を殘し、矢張り未練の體
にて、そろ／＼奥へ入る。小姓、近習殘らず附き添ひ
入ると、この時、橋がゝりより、帶刀、野袴羽織にて
侍ひ連れ、出掛け兩人を見て、侍ひを退け、ためらひ
居る。采女、園菊こなしあつて

采女　思ひ掛けない我が君が、其方への戀慕と云ひ

園菊　香の割符にわたしが身の上。

采女　試さん爲の空言か。

園菊　但しは誠か。

采女　深い樣子を試した上の一思案。園菊、おぢや。

ト闌菊を連れ、行かうとする。帶刀、スツと出て

帶刀　女に迷ひ、忠義を忘れし、瀨川釆女。

ト兩人慟り。釆女、帶刀を見て

釆女　ヤア、こなたは兄者人。

ト闌菊を退けて、下へ來る。帶刀、眞中へ入る。

闌菊　そんなら、あなたは。

帶刀　小田の家臣、小早川帶刀。北山巡見の歸るさ、今の有樣見聞いたした。

釆女　兄者人、この釆女が忠義を忘れしとはな。

帶刀　賢を賢として色に易へよとは、聖賢の敎へ。幼少より瀨川主計どのへ養子に遣はし、今、瀨川釆女と名乘り小田之助さまのお側の奉公。君には生得愚かしく渡らせ給ひ、附き添ふ輩が勸むる放埒、惡事千里と禁裏表の上聞に達し、君の放埒は釆女が勸むるところと、差當る汝が惡名。それと知りつゝ御諫言も奉らず、共に亂るゝ惰弱の振舞ひ。その性根を以て、養父主計どのゝ名蹟が立たうと思ふか。淫婦に迷うて忠義の道を、踏み迷うた空け魂ひ。不義不忠の身を以て、よも武士道は立てられまい。

トきつと云ふ。この時、臆病口より山九郎出掛け、こなしあり。釆女、懷中より一卷を出して、帶刀が前に直し、こなしありて

釆女　これこそ高麗國地理の一卷。深い樣子は、それなる闌菊、我が死後は御前へ申上げてたも。サア兄者人、釆女をお手打ちに遊ばされませ。

帶刀　なんと。

釆女　大内へ申し譯。小田之助さま、御放埒の根差しは、この釆女と仰せ上げられ、この首を以て諸大名の疑念を散じ、若殿の汚名を雪いてたべ。サア、一時も早う。

ト覺悟の體

闌菊　そんなら、お前は。

釆女　長い未來で添ひませう。サア、兄者人。

ト帶刀こなしあつて、柄に手を掛けて、立ち上がる。

闌菊　コレ、モシ。

ト留めるを引廻して

帶刀　不便なれども若殿の御爲、覺悟いたせ。

ト釆女を切らうとする。山九郎、スツと出て、帶刀をよろしく留める。

山九　イヤ／＼、釆女さまをお手打ちとは、餘り性急に見えまする。先づ／＼待たせられませう。

ト帯刀こなしあつて

帯刀　わりや新參の家來、金井山九郎とやら。

山九　陪臣たる私しが、差出ますは如何はしうござれど、御大身たる小早川帯刀さま、憚りながら、ちと御短慮かと存じまする。

帯刀　なんと。

山九　小田之助さま御放埒は、御身の生得。今釆女さまをお手打ちあつたればとて、御本心におなりなさるゝでもござるまい。爰は幾重にも御賢慮のあるべき事と存ずるから、慮外無禮お叱りをも顧みませず、かゝる仕合せでござりまする。

ト帯刀、山九郎を見て、こなしあつて

帯刀　功もなく、手柄もなく、縁を以て小田家に取入り、おのれが妹を以て白拍子と名づけ、色酒の二つに勸め込み、知行を貪る國賊同然。一つ穴の狐ども、手打ち次第に、何處へ刃金が廻らうも知れぬ。覺悟して待つて居らう。

ト山九郎こなしあつて

山九　漢の武帝は賢王にて在せども、李夫人の別れを歎き、數日朝に出給はず、群臣これを諫め奉ると雖も、帝これを用ひ給はず、中にも、李延峯が智謀の催ふし、娼家の中に管絃を含み、九華帳にて李夫人の俤を承らせ、愛慾を斷ちしゆゑ、武帝忽ち御心を飜へされ、頓憐の雲霧を拂ひ、戀慕の思ひを留めさせ給ふとある。古への賢王さへ斯くの如し。ましてや末代。この山九郎、小田家の御恩を飽くまで蒙むり、させる忠功はなくとも、御放埒を何ゆゑにお勸め申さん。拙者めは、鼓亂舞の御指南。武道を以て、御諫言申さば、その職に非ずとあつて却つてお咎めを蒙むる。退去仕るに於ては、愈々御酒宴に募り、御身の仇ともならんか。色に臨んで色を遠ざけ、酒を進めて酒亂を止める。臨機應變は軍の掛引きばかりにも非ず。諸道これに依つて行ふ時は、全く利を得るものと彼れこれを存じて、わざと御諫言を申さねば、不義不忠とも思し召されんが、この儀に於てお咎めを蒙むるとも、聊かお恨みとは存じませぬ。お手打ちをとござらば、釆女さまより先づ、金井山九郎め、牛裂き、八つ裂き、逆磔となるとも、成敗はお心任せ。サ、如何やうとも、お仕置あられませう。

ト段々の云ひ譯を聞いて、帯刀、こなしあり。信雄、濱荻を連れて出掛けて

信雄　山九郎が忠義は、兼ねてより存じて居れば、必らずともに粗忽いたすな。

濱荻　殿様の御放埓は、わたしから起つた事。兄さん、わたしを手に掛けて、お前の忠義を立てゝ下さんせいなア。

ト山九郎が側へ寄り、覺悟の體。

山九　妹、出かした。小田の御恩を忘れぬと云ふ、山九郎が忠義の魂ひ。不便ながら、其方を手に掛け、返す刀で身共が臓腑、引出だしてお目にかける。覺悟はよいか。

濱荻　南無阿彌陀佛。

ト山九郎、拔いて振り上げろ。

帶刀　山九郎、待ちやれ。

山九　イヤ、拙者めが。

帶刀　手打ちに及ばぬ、疑ひ晴れた。

信雄　罪もない濱荻、聊示すな。待て〳〵。

ト山九郎、こなしあつて

山九　イヤ、其お疑ひが晴れたとござれば、拙者が滿足、この上はござりませぬ。

ト濱荻を信雄が側へやり、その身は末座へ行つて扣へろ。

信雄　今日より禁酒して、改めらわいやい。

帶刀　すりや、御本心に。ハヽア、お出かしなされた。

園菊　この上は釆女さまへのお疑ひも。

信雄　晴れいでどうせう。ナア、帶刀。

ト帶刀、思ひ入れあつて、一卷を取上げ

帶刀　高麗地理の一卷、五色の蔦に相添へ、二品とも大内へ持參しやれ。

ト釆女に渡す。

釆女　相役、隼人どのに渡し、私しも同道仕りませう。

ト帶刀、懷中より、袋入りの印を出し

帶刀　これこそ禁廷より、朝敵追討の印として、小田の館へ預かるところの、獅子の御判。雌雄二つのうち、去春雄獅子の方、紛失なし、相殘るはこの雌獅子の御判。御本心改まる上は、小田之助どの、イザお受取りあられませう。

ト御判を信雄に渡す。山九郎、思ひ入れあり。

釆女　雌雄の御判、片割れを盜み取り、殊には去年本能寺騒動の折柄、蛙鼈丸の劍紛失。これにつけても、去年高麗にて聞き取りし一大事、三輪五郎左衞門さまへ注進せしに、この儀、沙汰あつては、諸大名の心も區々ならん。

先づ〳〵沙汰いたすまじとの事。彼れこれを思ひ廻せば、四海を望む叛逆人の仕業。武智が餘類か、又は、今川義元が殘黨が、時を窺ふに相違はない。

帶刀　それゆゑ某、巡見と名附け、忍び〳〵に寶の詮議。心得難きは、三七信孝公の御所存。もしや、劍を

ト こなしあつて

これとても證蹟なければ、粗忽な儀も申されまい。

釆女　幸ひこの閑菊に、心を懸けてござれば、信孝公の御本心

閑菊　及ばずながら、試して見ませうわいな。

帶刀　まつた某、この所へ立寄りしは、先君御在世の砌り、當寺の境内五重の塔の二重目に、黄金千兩を籠め置かれ、まさかの軍用と仰せ置かるゝ。これを以て、この度在京の諸武士、軍功に依つて分ち與へよとある三老職の内意に依り、罷り越したる折に、幸ひ君の本心承り、安堵いたしてござる。御判の片割れ、必らずともに御大切に遊ばされませう。

信雄　よし〳〵、滅多に失ひはせぬぞ。

ト 御判を懷中する。

帶刀　信孝公の御本心、探り見るは、閑菊とやら。

閑菊　合點でござんす。

帶刀　某は、歸館の用意。

濱荻　そんなら、殿樣。

閑菊　釆女も一緒に。

釆女　然らば、兄者人。

帶刀　イザ、我が君。

信雄　サア、山九郎も來い。

山九　ハツ。

帶刀　まづ、入らせられませう。

ト 唄になり、信雄。濱荻を連れ、釆女、閑菊、附き添ひ、帶刀、山九郎へ目を殘して、こなしあつて、皆々奥へ入る。山九郎は、矢張り末座に扣へたるなりに、殘つて居る。合ひ方になり、山九郎、皆々の入つた後を見送り

山九　ウム。

ト 手を組み、思案のこなし。ト此うち上の櫻の垂の傍らへ黄なる胡蝶群がる體。山九郎、思案のうち、フト蝶の方へと目を着ける。ト蝶、段々分れて、友喰ひに戰ふ體。右の合ひ方いつともなしに小凄うなり、山九郎、こなしあつて

ムウ、群がる胡蝶の羽色も變らず、花に集まり遊ぶにもあらず、おのれを先に、我れを負けじと喰ひ合ふ有様。誠や蜂蛙の戰ひは、時變に感じて間々ある例と、博物志にもこれを載する。今この體を考ふるに、當時小田家瓜の紋を用ふれど、正しく先祖は淸盛が嫡流、揚羽の蝶は傳はりし家の紋。信長亡びて信孝信雄、又は三法師丸と四海の跡目を爭ふは、取りも直さず、目前の蝶の戰ひ。黄蝶集つて戰ふ時は、國に變ある相とも云ひ傳ふ。

トこなしあつて

我が亡君は駿州の大守今川義元。さしも名高き名君たりしも、桶狹間の戰ひ敗れ、信長の爲に無念の御最期、我れも戰場に討死すべかりしを、主君の仇、小田一類を恨みんと、その場を切り拔け、年月經つて、いま、金井山九郎と變名し、遊藝を以て小田家に任官。我れを今川の餘類とも知らず、傍らに附け置くは、自滅を招くと知らざる馬鹿者。去年六月、武智の謀叛に、信長信忠、父子共にほろび失せ、光秀も又、久吉亡ぼす。兩虎挑んで取るの計略。三七信孝は氣品の猛將、四海を握るべき器に非ず。小田之助は酒色に耽り、放埒者に仕立て置く。信忠が倅三法師丸。此奴、捻り殺してしまへば、小田の一族、根を斷つて、葉を枯らすの道理。いま、蝶の戰ひは、時節こそ來れりと、我が亡君の導き給ふ知らせならん。數年の大願成就すべき時至つたか。ム、、、、。ハ、、ハ、、。喜ばしやなア。心地よし、心地よし。

トきつと云はうとして、あたりを見て隱し

ハレ心地よい。

ト笑みを含み、笑壺のこなし。この時、本釣り鐘にて、入相を打つ。蝶、散亂する。山九郎立寄りて、こなしあると、橋がゝりより、昆崙壽、外國人くろすの拵らへにて、窺ひ出て

昆崙　山九郎どの、これにござるか。

山九　外國渡海の黒す、彼の地の樣子は、

昆崙　先達てこなたの荷擔人、宅間小平太どのを以て、高麗國へ送られし連判。韃靼、變を生じ、下知に從はずと雖も、高麗の照烈王、臣下とも異變なく御味方仕る證據。血判据ゑし連判狀、持參いたしましてござりまする。

ト一卷を差出す。山九郎取り開き見て

山九　連判狀、慥かに受取つた。

昆崙　この黒すは、水練に妙を得たれば、日の中は海川の

水底に住居して、夜に入ると都を徘徊。隱す事でも聞き出すが黑ん坊の一德。

山九　其方は長崎黑岸の津へ立歸り、兼ねての手筈は、コリヤ。

ト囁く。

昆崙　そんなら、此まゝ。

山九　早く行け。

昆崙　合點ぢや。

ト向うへ入る。始終、本釣り鐘。山九郎見送り

山九　ムウ。よし〳〵。

トこなしあり。橋がゝりより、鐵八出掛け

鐵八　お頭。首尾は。

山九　只今帶刀が申せしは、獅子の御判、雌雄のうち、片割れは紛失。その一つは雌獅子の御判、いま小田之助へ渡せしは幸ひ。これも密かに奪ひ取り、一先づ本國駿河へ立退き、變を窺ひ、事を謀らん。また五重の塔に黃金千兩籠め置きしと口走つたは、これも幸ひ盗み取つて、軍用金、其方へも遣はす間、兼ねて語らふ手下の者に、分配いたせ。

鐵八　すりや、五重の塔に黃金千兩。

山九　其方は物蔭に忍んで。

鐵八　心得ました。

山九　ぬかるな、鐵八。

鐵八　合點ぢや。

ト臆病口へ走り入る。

山九　黃金と云ひ、時刻も屈竟。さうぢや。

トいろ〳〵身拵らへする事あつて、ツイと橋がゝりへ入る。釣り鐘、止む。トばた〳〵にて隼人と小平太、蔦の箱と一卷とを、奪ひ合ひ、出る。

隼人　小平太どの、こりや何となさるゝ。

小平　五色の蔦、地理の一卷。二種とも所望するのぢや。

隼人　なんと。

小平　この手柄をせう爲に、去年高麗へ渡つて手に入れた、所を女郎めに横取りせられ、心外でならなんだ。今見附けたは幸ひ、二種とも身共が大内へ差上げ、恩賞に與かるのぢや。邪魔せずと渡せ。

隼人　さう聞けば、いよ〳〵渡さぬ。

小平　洒落臭い老ぼれめ、受取つて見せう。

隼人　ならぬ。

小平　渡せ。

ト立廻りにて、二種ともに取落し、いろ〳〵タテあ る所へ、櫻の木蔭より、照葉、ツカ〳〵と出て、この中へ入る。兩人、これはと寄る所を、左右へポン〳〵と當て倒し、蔦の箱と、一卷を持ち、ツイと向うへ走り入る。兩人、心付き

隼人　うぬ、曲者。

ト追ひかけようとする。小平太後へ切り倒し、直ぐに乘りかゝつて止めを刺す。ト音樂になり、小平太抉り抉り向うを見て

小平　身共が手には入らずとも、あゝして置けば釆女が自滅。巧い〳〵。

ト云ひ〳〵抉り、落ちてある香包みを見て

この香包みは

ト取上げ見て

この歌は釆女が手蹟。狂らて居る女郎めと云ふは唐で逢うた衒妻。その時の意趣、何もかも持ち込んで、蔦の紛失、老ぼれを殺したも、釆女に塗りつける。證據はこの

ト香包みを見て

ムウ。よし〳〵。

ト笑壺に入つたこなし。人音するゆゑ、中門の方へ、ツイへ走り入ると、臆病口より、喜藤次、千本姫を連れ、出て

千本　コレ、なんとしやるぞいなう。

喜藤　細言云はずと、ござれ〳〵。

ト引ッ立てる。所へ、裏葉出て、喜藤次を支へ、千本姫を圍ひて

裏葉　狼藉な。お姫樣をどうするのぢやぞい。

喜藤　どうもせぬ。瀧川の御子息が、姫君に首ッたけ。密かに盜み出してくれいとのお頼み、邪魔せずと姫君を渡せ。

裏葉　さう聞いたら、愈々渡されぬわいな。

喜藤　面倒な衒妻め。

ト裏葉を引退けうとして、これより品よき立廻り、いろいろあつて、トヾ、喜藤次、千本姫を引ッ立てる。裏葉有りあふ毛氈を取つて、喜藤次が頭へ被せて、引ッ轉かし、兩人して抱へ、帶に括り、突き飛ばして

裏葉　お姫樣、ござりませ。

ト千本姫を連れ、向うへ走り入る。後に、喜藤次、猫が紙袋を被つたやうな身振り、いろ〳〵あつて、毛氈を引き退け、向うへ追ひかけ入る。

始終音樂にて、返し。

右飾り附けの儘、築地、櫻の木共に東へ引き取ると、西より五重の塔を引き出す。紋板、霞になり、塔の二重目まで見える體。櫻の木、東へ引き込むと、西より塔に附いて櫻を引出す。後方は築地の續き。すべて、初手よりは花多くあるべし。右の塔の石段に、順禮十作莨のみ居る。五重の塔、眞中へ來る時分に、道具とまる。音樂は絶えずある。ト十作、こなしあつて

十作　ヤレ〳〵、歩いたぞ、歩いたぞ。イカサマ、よう思へば、今日は餘ッぽどの道であつたわい。大津の宿を出て、朝ッぱらに清水の札を納めて、六角堂から嵯峨のお釋迦樣へ詣つて、嵐山の花を見て、北山をぐるりと廻つて、打止めがこの御室。ナニガ、花は盛りなり、腹は時分なり、行李飯をしたゝかにしてやつて、彼方此方と歩くうちに、長の日を暮らしてのけた。カウッ。今日は、ホウ宵闇ぢや。月の出るまで、マア、一服のんで、三條までぼツついてくれう。ドレ〳〵。

ト舞臺先へ出て、火打ちを出し、莨をのむ。暫らくあると塔の內より、拔身出して振り廻す。十作悄りして木蔭へ隱れる。ト正面の扉開くと、內より山九郎、頭巾冠り、凛々しき態にて、獅子の判を咬へ、黄金箱を抱へ、拔身を提げ、キッと見得あつて、向うへ出て刀を納め、二品を見てニッコと笑ひ、

山九　雌獅子の御判、忝ない。

ト戴いて、懷中する。臆病口より、濱荻、一腰にて出て、こなしあり、橋がかりより、鐵八窺ひ出て

鐵八　お頭。

山九　鐵八。千兩の黄金、手下の者へ。

ト渡す。

鐵八　そんなら、此まゝ。

山九　早く。

鐵八　合點ぢや。

ト金箱を持ち、向うへ走り入る。山九郎、こなしあつて、行かうとして、濱荻、向うに立ち塞がり

荻濱　兄さん、矢ッ張りお前は、惡人であつたかいなア。

ト山九郎、こなしあつて

山九　大望の足手纏ひ。勘當だ。

ト濱荻を上へ引き廻し、行かうとする。

濱荻　イヤ〳〵、惡人と知つたら一寸も遁がさぬ。[illegible]さん

への云ひ譯、いつそ。

ト拔いて、切つてかゝる。山九郎、懷劍を引取り、濱荻に切りつける。十作、ズツと出て組み附く。振り切つて行かうとする。立廻りあつて、十作を引廻し、ツカツカと花道中程まで行く。

十作　曲者。

ト聲掛ける。山九郎、右の懷劍を打ちかける。十作、身を躱す。この時。濱荻、立ち上がらうとする。途端懷劍當り、ウンと倒ける。山九郎、向うへツイと入る。

南無三。うぬ。

ト後を慕ひ追ひかけて入る。後、仕掛けにて月出ると、奥の方より、信雄、木田平を引ッ張つて出る。

信雄　サア、一大事ぢや、一大事ぢや。

木田　一大事とは、何事でござりまする。

信雄　サア、その一大事と云ふはナ。とろ〳〵とまどろむうち、帶刀が渡した、雌獅子の判を、誰れやら取つたわやい。

ト木田平不悧り

木田　ヤア〳〵、大切の御判。して、その盜賊の行くへは。

信雄　サア、何方へ行つたやら。

トうろ〳〵する。

木田　何にもせよ、遠くは行くまい。

ト駈け出さうとして、又、後へ戻り

なんぞ手掛りはござらぬかな。

信雄　イヤ〳〵、手掛りもない。

木田　すりや、手掛りもござらぬか。ホイ。

ト當惑する。濱荻、息を吹き返す。兩人見て

信雄　ヤア、こりや、濱荻が切られて居る。

木田　誠に濱荻さま、こりや、コレ、急所の深手。

信雄　濱荻やアい〳〵。

木田　濱荻さま〳〵。

ト兩人呼び生ける。

濱荻　大切な雌獅子の御判を奪ひ取つたは、皆兄さんの惡心。

木田　すりや、山九郎が。

ト向うを見る。

濱荻　その上、千兩の黃金まで、鐵八とやらが、持つて立退きましたわいなア。

木田　ヤア〳〵。
濱荻　モシ、未來の御縁を待つて居りまするぞえ。
　ト云ひさして死ぬる。
信雄　可愛や、可愛や。
　ト大泣き。
木田　コレ、泣いてゐる所でない。盜賊は、金井山九郎。
　ござれ。
　ト信雄を連れ行かうとする所へ、紅梅組の組子、バラ
　バラと出て
組子　動くな。
木田　何ひろぐのだ。
組一　放埒者の小田之助を、引ッ立て參れと順慶さまの云
　ひ附け。
組二　下郞ぐるめに引ッ立てるのぢや。
皆々　早くうせう。
木田　ハヽヽヽヽ。小癪な靑蠅めら、若殿に附き添ふ奴
　は、鐵の楯よりまだ〳〵丈夫なワ。寄りやアがると、片
　ッ端から、小豆粥だぞ。
組子　面倒な。ソリヤ。
　トかゝる。一々取つて投げ

木田　若旦那、構はずと、早う、早う。
信雄　合點ぢや。合點ぢや。
　ト橋がゝりへ走り入る。皆々、立廻つて、「ドッコイ」
　と見得になる。これより誂らへの鳴り物になる。華や
　かなタテいろ〳〵あつて、皆々、逃ぐるを、木田平、
　追うて入る。チョン〳〵にて返し。
　同じく飾り附けの儘、又、東の方へ引く。矢張り、
　築地の續きにて、五重の塔、櫻と共に、東へ引き込む
　と、西の方より櫻の馬場を引出す。後方は一面の築
　地。前は櫻の林になる。道具納まると、また音樂
　になる。
　トばた〳〵にて、橋がゝりより、歩左衛門、黑羽二重
　麻上下、若侍ひの拵らへ、高股立ちを取り、白木の文
　箱を持つて、氣の急く見得にて出る。臆病口より小谷、
　これも氣の急く體にて出掛け、兩方、行き逢ひ、摺れ
　違うて行かうとする。小谷、歩左衛門を見て
小谷　歩左衛門ぢやないか。
歩左　姉者人でござるか。
小谷　オヽ、矢ッ張りさうぢや。弟ぢや〳〵。五六年も逢

はぬうち、ても、マア肥滿して、よい男になりやつたなう。

歩左　こなたも堅固で、何より大慶。して、親仁樣には、只今に於て。

小谷　氣儘ばつかり仰しやつてござるわいなう。

歩左　左やうござらう。久々御疎遠に打過ぎましたは、御用繁多に依つて、寸暇を得ませず、思はざる御無沙汰、今日とても公用でござれば、折を以て、便宜仕らう。先づおさらばでござる。

ト行かうとする。

小谷　歩左衞門、待ちや。

歩左　イヤ、御用先でござれば。

トまた行かうとする。

小谷　不孝者、待て。

トきつと云ふ。歩左衞門、立ちとまつて

歩左　なんと。

小谷　歩左衞門。

ト歩左衞門の胸倉を持つて、下に坐らせ、その身も下に居て

エ、、其方はなう。わしやなんぢや、現在、其方の姉者でないか。父樣母樣は、由緒ある家筋なれど、今は越後の國、入方村といふ所に、浪人のお住ひ。其方は少さいから力も強く、假めにも腕立て。遠國邊鄙に朽果てんより、奉公を稼ぎますと、上方へ上りやつた跡、縁でかな、云ひ交した庄助どのと云ふ、わしが夫、お大名のお鷹匠と聞いたばかり、身には深い望みがあるとて、わしを置去りして飽かぬ別れ。月日が經てば懷かしさも、幸ひ其方が上方に居やる樣子を聞いて、夫の行くへを尋ねてたもと狀文の便りしたは、幾度と云ふ事はないぞや。ついに一度の返事もせず、その後聞けばお大名樣へ有り附きやつたとやら。さういふ事なら、なぜ便りをしやらぬ。各々の勝手ばかりを構うて、この姉の事も、父さんの事も、母さんの事も思ひやらぬか。其方を不孝者と云うたが誤まりか。忠義々々と思ひやつても、孝が立たねば武士ではない。エ、、其方は酷い氣な人ぢやなう。

ト泣いて云ふ。歩左衞門、こなしあつて

歩左　成る程、お恨みの段々、至極仕つた。拙者が國元を出ましたも、親仁樣の我まゝ、氣儘、もう御意見にも盡き果てまして、國を立退き、一先づ上方を稼ぎ、親々の家名をも引興さんが爲、只今にては小田家へ仕官仕

り、母方の河田を以て、河田歩左衛門と名乘り、段々とのお取立て。また庄助どのゝ儀も、心を着け、相尋ねますれど、いくらもあるお大名の中、お鷹匠とばかりでは、一向雲を摑むやうな儀でござる。併し幸ひなる事は、この度先君の御追福とあつて、京都には柴田どの、旅館を設らへ、御焼香の儀なれば、諸國の大名、殘らず御參觀でござる。矢張りお鷹匠でござるか、又は、外證の身でもござらうか、拙者も相尋ねませうから、こなたにも、御旅館へお出でなされ、とくとお尋ねなされたがよくござる。

ト小谷、これを聞き、思案して

小谷　ほんにさうぢやわいの。その思案がいつち好い。シタガ、歩左衛門、わしが腹の立つまかせに、今のやうな惡口を。

歩左　ア、イヤ、拙者めは火急な用先。

小谷　ほんにわしも心急けば。

歩左　今出川、柴田の御旅館。

ト差添へを取つて

夜陰と申し、路次の用心。

ト遣る。小谷取つて

小谷　歩左衛門。さらば。

ト差添へを抱へ、向うへ走り入る。歩左衛門、見送り、こなしあつて

歩左　女儀のお心では、あゝありさうな事。

ト思ひ入れあつて

イヤ、殊の外の延引。

ト行かうとする。臆病口より、帶刀、出掛け居て

帶刀　歩左衛門。

歩左　帶刀さま。安土御殿より書面到來。

帶刀　ドレ。

ト文箱を取り、狀を出し、讀んで

ムウ、先君恩顧の諸大名、段々、後日までに、今出川の旅館へ參集いたすべき旨、その節に至り計ふべき事。久吉どのより內意の文體。

トこなしあつて

歩左衛門。

歩左　ハア。

帶刀　其方事は、力量、百人に勝れ、陪臣ながら忠義一心の者と、久吉どのゝ眼識を以て、幼君三法師君を守護の役目。家督定めは四海の安危。おのれ／＼が我意に募つ

て、血脈たる幼君を、もしや
ト切る眞似をして
油斷のならぬ時節ぢやぞよ。
ト歩左衞門、こなしあつて
歩左　ハツ、委細承知仕る。
ト帶刀、懷中より、密書を取出し
帶刀　期に及んで討るべき密計。勢州表に久吉どの陣代と
して罷り在る、福島左衞門どのへ申し送る密事、大切の
使ひ。ハテ、誰れをがな。
ト歩左衞門、思ひ入れあつて
歩左　帶刀さま、密計とござらば、餘人は遣はされまい。
苦しからずば、拙者めが。
帶刀　其方が參るか。
歩左　一晝夜を駈けるならば、明々後日までには、キツと
京着仕るでござらう。
帶刀　尤も。
ト密書を右の文箱へ入れ
一刻も早く。
ト渡す。歩左衞門取つて
歩左　畏まつてござりまする。

帶刀　四海の跡目、立てるか立てぬかは薄紙一重。御譜代
と云ふにはあらねど、一心を見抜きし其方、この後とて
も。
歩左　比干は胸を裂かれ、屈原は汨羅に沈む。一命あらん
限りは。
帶刀　もうよい。行きやれ。
歩左　おさらば。
ト文箱を持つて、向うへ走り入る。帶刀、こなしあつ
て臆病口へ入る。返し。
見附けの櫻、左右へ分れる。築地、觀音開きにて、
兩方へ開く。向うより、結構なる御殿を突き出す。
簾、一面に下ろしあり。櫻の吊り枝は、矢張りある
べし。すべてこの一場は、御室の內奧御殿の體なり。
音樂にて、道具は納まる。
ト御簾、一面に揚がる。向う、金襖。この眞中に、信
孝、結構なる褥の上に、脇息に凭れ、前に大杯直しあ
り、上の方に、園菊、長柄の銚子を持ち、酌して居る
見得。小姓二人、兩方の隅に扣へる。方々に銀燭臺、
數多點しある。音樂止んで、和らかなる合ひ方にな

り

園菊　マア、一獻おあがり遊ばせいなア。

信孝　イヤ〳〵、もうよしに致さう。措きやれ。太夫、いよいよ予が申す事を聞入れて

園菊　アイ、暮れを合圖に忍ばうと、約束をしたに依つて

信孝　それでこの所へ

園菊　アイ。

信孝　イヽヤ、呑み込めぬ。予に靡いては采女に濟むまい。

園菊　逢ふは別れの始めとやら、變るは勤めの習ひぢやわいなア。

信孝　すりや眞實で。

園菊　抱かれて寢よう。

信孝　寢所の伽を。

園菊　サア、寢ようは寢ようけれど、それよりは、マア、この

ト信孝が膝元の太刀に手を掛ける。

信孝　何をする。

園菊　サア、これはナ。

トこなしあつて

餘りお疑ひなさるに依つて、心中を見せようと思うて。

信孝　ハヽヽヽ。もう疑ひは解けてあるのに。

園菊　イヽエ、表面に解けぬあなたの本心。

信孝　ヤ。

園菊　それゆゑに、この太刀を。

トまた取らうとする。信孝、園菊を下へ引き倒し、スツと立つて

信孝　予が佩劍に手を掛くるは、尾籠の女め、眞ッ二つに。

ト太刀に手を掛ける。采女出て、信孝を品よく留める。

采女　先づ〳〵、待たせられませう。

信孝　采女。

采女　ハッ。

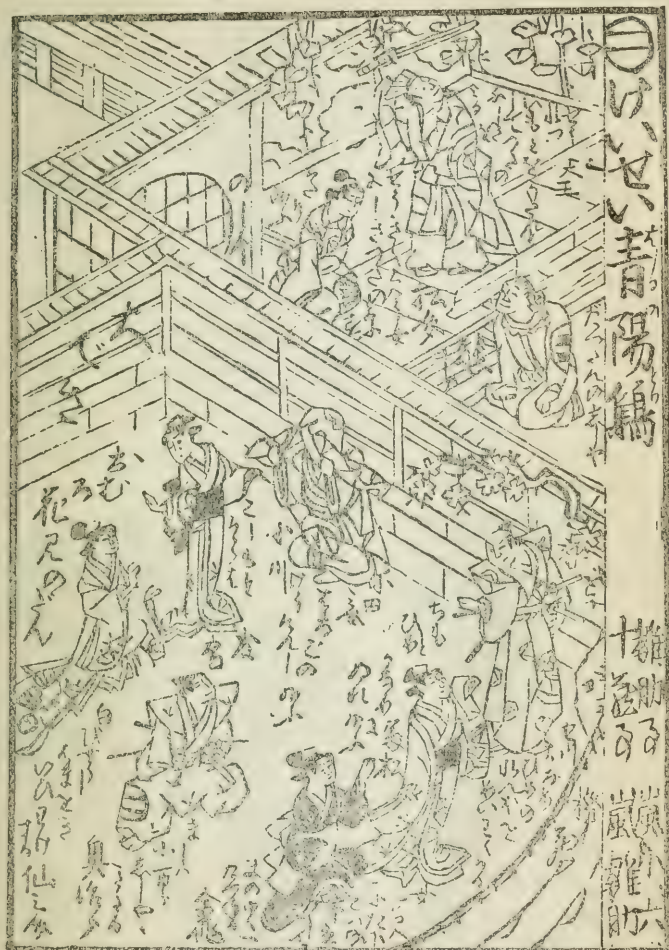
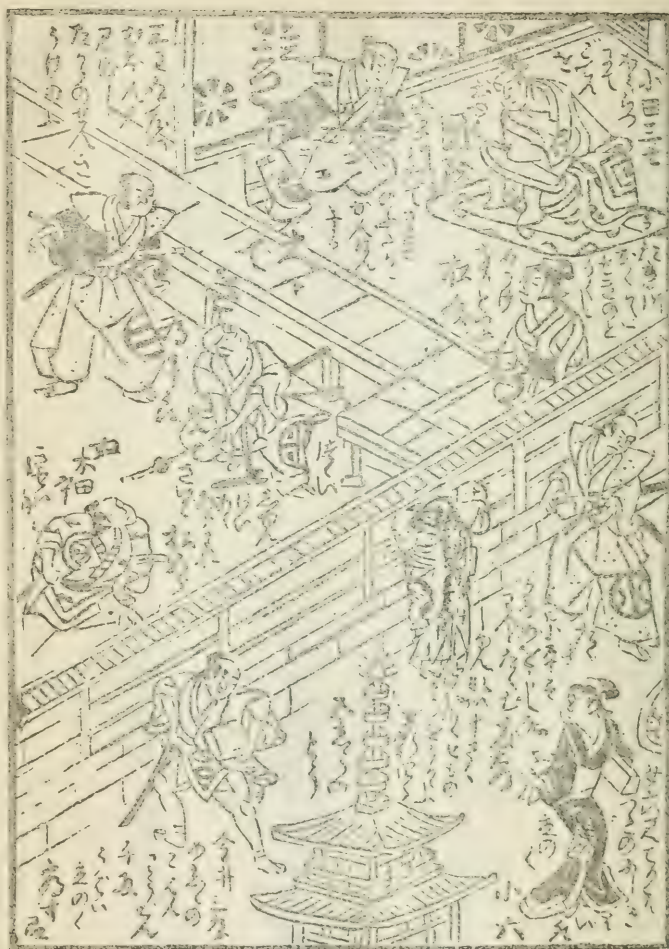
信孝　無禮の女め、手打ちに致すを、なぜ妨げをなす。

采女　妨げは致しませぬ。申さば女、餘りの御短慮。

信孝　短慮とは、何が短慮。コリヤ、なにが汝が狂うた女と思ひ、庇ふのぢやな。

采女　全くさうでは

信孝　二才め、退かう。

けいせい青陽鶴

小姓　ト采女を引き退け、園菊を切らうとする。小姓、出て
我が君、暫らく。
ト留めようとする。信孝、拔打ちにポンと切る。これを見て、一人の小姓、立たうとして、チヤツと下に居る。兩人悄りして慄へる。
信孝　背かば忽ち斯くの通り。
ト血刀を園菊が眼先へ突きつける。園菊、思案を極めし體になりて
園菊　お氣に染まずば、どうなりと。
信孝　ムウ。
ト振り上ぐる。この時、帶刀出て、ヅツと園菊を下舞臺へ落す。信孝、行かうとするを、帶刀、隔て、信孝が刀の血を袱紗にて拭ひ、チツと見る。双方氣味合ひあつて。
信孝　帶刀、
帶刀　ハツ。
信孝　信孝が帶劍をとくと見たか。
帶刀　この、お太刀は。
信孝　蛙聲丸ではないぞよ。
帶刀　ハツ。
ト思ひ入れ。信孝、振り放す。小姓、鞘を取つて差出す。信孝、シヤンと納める。
采女　すりや、御劍は
帶刀　正しく外に。
ト三人、顏見合せ、こなし。
信孝　國に盜賊、家に鼠。去ぬる六月、本能寺落去の折柄、紛失なしたる蛙聲丸。
トこなしあつて、下に居る。
帶刀　さるに依つて、忍び〳〵に劍の詮議。畏れながら御前には、先君信長公の御氣性を受け繼ぎ、生得勇猛に在まし、四海掌握の御心あつて、もしや劍を。サア、愚案を以て拙者めが計らひ。
采女　それゆゑ、園菊に申し付け、君の御本心。
園菊　心に思はぬ戀の手管も
采女　皆、我が君の
ト信孝を見る。
信孝　本心は酒。
ト大杯を取つて
注げ。
ト小姓、酌する。信孝、飲まうとする。

帶刀　待つた、我が君。儀狄が作る美酒は、禹王の口に苦し。酒池肉林は亂の基。

信孝　イヽヤ、この信孝は、日本の大鵬、六十餘州も只一呑み。

　ト ぐつと酒を呑み干し

斯くの通りサ。

　トこの時、木田平、バタ／＼にて走り出て

木田　申し上げまする。御近習、金井山九郎、雌獅子の御判、黄金千兩、奪ひ取り、何處ともなく立退きましてござりまする。

帶刀　ナニ、雌獅子の御判、千兩の黄金とも

采女　金井山九郎が。

木田　彼れが手下と相見え、鐵八とやらんに黄金を渡し、兩人とも立退いてござります。目當てなければ、ぼッ駈けん事も叶ひ難く、先づ御注進と存じ、立歸つてござりまする。

　ト信孝、生醉ひの態にて、思ひ入れある。

采女　何にもせよ、草を分かつて。木田平、續け。

木田　ハツ。

　ト兩人、駈け出さうとする。この時、正面の襖より、

關の戸、衣裳、襠補に改め、出る。奧御口の下より、順慶、小平太、橋がゝりより、喜藤治、軍藏、伴作、その外、諸士、バラ／＼と出て

小平　采女に繩打ちやれ。

喜軍　腕廻せ。

　ト采女へかゝる。木田平、立塞つて

木田　御主人に指でもさすと、何奴此奴の容赦はないぞ。

順慶　瀧川の奧方、關の戸どの、この場の樣子。

關戸　殘らず聞きました。

　ト信孝、睡うたる態にて眠る。

帶刀　すりや、こなた樣は。

關戸　夫將監は禁裡在番。關白家より、信孝信雄が行跡を糺せよと、御內意を蒙むつて、わざと自らを差越されしは、この實否を探らん爲。

采女　この采女には何科あつて。

順慶　云ふな、采女。帝の叡覽に備ふべき、蔦の錦は何處へやつた。

采女　サア、その儀に付き、先程より長井隼人どのを。

喜藤　隼人はお身が手に掛け、殺さうがな。

采女　なんと。

小平　證據と云ふは、この香包み。
　ト出して
其方が手蹟のこの歌。隼人を殺した死骸の側に、落ち散りあつたが慥かな證據。
采女　すりや、隼人どのを殺めし死骸の側に
小平　香包みは、どうしてあつた。
采女　サア、その儀は。
順慶　蔦の錦はどれへやつた。
采女　サアそれは。
喜軍　繩打つて詮議せうか。
采女　サア。
小平　云ひ譯があるか。
采女　サア。
皆々　サア、サア／＼。
小平　何とぢや。
帶刀　采女、それへ出い。
采女　ハツ。
帶刀　大切なる蔦の錦。殊には隼人どのゝ横死。證據を以て詮議、押默つて居つて事が濟まうか。申し譯あらば明白に致せ。采女、返答せい。どうぢや。

　トきつと云ふ。采女いろ／＼あつて
采女　ハア、。
　ト泣く。園菊、取りつき
園菊　モシ、采女さま、云ひ譯はござんせんかいなア。うぬ、詮議のある奴。
小平　女郎め、身共を忘れはせまい。
侍ひ衆、次の間へ引立てさつしやれ。
侍ひ　立たつしやれ。
菊園　イヤ／＼、なんぼうでも離りやせぬ、離りやせぬ。
侍ひ　ハテサテ、立たうてや。
　ト無理に引立て、橋がゝりへ入る。
木田　御主人の申し譯に、その盜賊め。天地を穿つて、さうだ。
　ト血相して駈け出す。
帶刀　木田平、待て。
木田　イヤ、盜賊めを。
帶刀　尋ねに參る目當があるか。
木田　イヤ、その儀は。
帶刀　御判といひ、黄金といひ、亭がせを亂せし今となつて、何處を目當、誰れを詮議。四海の大變、うろたへる所でない。待てと云はば、マア／＼待て。

木田　エヽヽ。
　ト向うを見て、拳を握り、是非なく元の所へ戻る。信孝、始終眠つて居る心意氣あり。
關戸　この騒動に小田之助どのは、どれにござるな。
小平　誠に。何れも若殿の在所を尋ね、この所へ引立てさつしやれ。
喜軍　心得ました。
　ト立ち上がると、向う戸屋の内より
五郎　待つた、いづれも。三輪五郎左衞門・若殿を同道いたいた。待ちやれ、待ちやれ。
順慶　ナニ、五郎左衞門が。
小平　若殿も引立てやれ。
喜軍　ハツ。
　ト早き太鼓、謡になる。三人向うへ駈け出す。ト向うより三輪五郎左衞門、七十ばかりの親仁、赤顔、白髪の鎌髭、岩疊作りの拵らへ、着附け上下に嚴物作りの大小にて、信雄が手を持つて引立て出る。花道にて、先に立つた喜藤治を殴り退け、入り代れ、又、軍藏を後へ殴り飛ばして入れ代り、續いて作作を殴り倒し、段々入れ代つて、ノサ〳〵と本舞臺へ來る。三人、附いて來て、おこつく。五郎左衞門、振り返りて睨む。三人、氣を呑まれて、後へ寄る。太鼓、謡、打上げる。五郎左衞門、座席を見渡し
五郎　ホヽヽ、こりやア、歴々のお入りだワ。聞いてくりやれ。此うつけ殿がヤンチヤ起いて、安土御殿へ歸らぬ。爺がお迎へに參つた。只今御門前で出逢つたところ、何かこの和郎に詮議の有る體。なんとせう搦り合ひだと思つて、引立て參つた。和子、其處へ出さつしやい。
　ト信雄を眞中へ突き据ゑる。
信雄　コレ帶刀、其方から受取つた、獅子の御判を取られてしまうたわい。その上、濱荻が殺された。可哀い事をしたわいやい。
　ト泣く。帶刀こなしあり。
關戸　聞き及んだ、小田の老臣、三輪五郎左衞門高秀どのぢやな。
順慶　三輪氏には、夜陰といひ
小平　殊には御老體。
喜軍　御苦勞に存じまする。
帶刀　信孝公にもお渡りでござれば、高秀どの、サヽ、これへ〳〵。

五郎　構やるな。居たい所に居る。

ト下舞臺の眞中へ坐る。

帶刀　左やうでござらぬ。貴殿と久吉どの、柴田どのは、小田の三老職、殊に貴殿は、信雄公の後見、各々方出席の折柄、座席に甲乙がござつては

順慶　成る程〳〵。この順慶、十二萬石の大名、三輪氏は無祿なれども、御前の羽振り、威勢の段は、何として何として。サヽ、上座あられませう。お手を取りませうかな。

五郎　アヽ、やかましいわい。年寄りは、尻が重たいから、坐つた所で動きはせぬ。尤も我れら年積つて、七十六歳、先君、信長公の前髪つぶりより、嫡男城之助どのに仕へ、今この和郎の後見と、三代の奉公。國を取らず、祿を受けず、氣儘腕白に暮らすから、諸大名の理窟臭いが、蟲に障つてムン〳〵と胸が惡い。

トじろ〳〵と其處らを見廻し、順慶を見て

坊主、赤い形だな。しつかい梅漬の酸漿だワ。

ト順慶、ムツとする。又、小平太を見て

わりや、宅間玄番の弟、小平太だな。面癖の惡い人相だわい。

ト小平太、脇見する。又、關の戸の方や、帶刀の方、橋がゝりの方を見たりして

エヽ、何れを見ても、マジ〳〵マジ〳〵と、理窟臭いしやツ面。これにつけても、先君が存命のうちから、牛の睾丸が三つ欲しかつたわい。

齋藤　ナニ、牛の睾丸が

伴作　三つ欲しいとは。

小平　牛の睾丸があつたら、何に召さるゝ。

五郎　されば、牛の睾丸が三つあつたら、一つをば久吉に頰張らせ、又、一つをば、小むづかしい柴田めに頰ばらせ、相殘つた一つをば、穀潰しの大名どもに、知行をくれて置く信長公に、頰張らしてくれたかつた。ハヽヽヽ。

帶刀　ナニサマ、三輪氏は先君の寵臣。御在世の節より、出仕登城も勝手たるべしとの事。只今の冗談も、畢竟、諸大名の我慢、偏執の魂ひを取拉ぐの名言。帶刀に於て感心仕つてござる。

關戸　して、高秀どのには、この場の騷動

五郎　承つた。

小平　蔦の錦、獅子の御判、千兩の紛失は、安からぬ四海の騷動。

喜藤　落ちつきも時に依る。
小平　この場の詮議は
皆々　何とでござるな。
五郎　去年、雄獅子の御判、蛙蟇丸紛失。又ぞろや今日、二品三品の無くたつたは、盗んだ奴より、盗まれたが馬鹿の天上。今となつてうろたへ眼。役にも立たぬ詮議呼はり、腹減らしに入らん事だ。取下ろさつしやい。
順慶　すりや、詮議もせず、此まゝに。
五郎　イヤ、捨てちや置かぬ。
小平　して、その詮議は。
五郎　明々後日は、今出川の柴田が旅館へ、諸大名の會合。この所で評議を極め、先君御追福の薫香も相濟んで、家督定めの時節までに、何もかも尋ね出し、事を無難に納めて見せるワ。
關口　イイヤ、呑み込めぬ。斯程の事を仕出かす曲者、家督定めの時節までに、もし寶の揃はずば。
五郎　楚國には、寶を以て寶とせず、仁を以て寶とする。まツその如く、仁を以て治め、智を以て詮議せば、遲いか早いか、六十餘州は將軍の懐同然。瀧川の御内儀、餘り嫉かつしやるな。日和見の順慶も、よい加減に默りやれサ。
小平　ナニ、順慶さまを
三人　日和見とは。
五郎　日和見の因縁曰くを知らぬか。知らずば云つて聞かさう。筒井順慶、先君の御高恩を蒙むりながら、光秀が謀叛に頼まれ、本國より八幡山まで出張せしを、天王山の旗色變り、久吉勝軍と見るより、又ぞろや身方に加はり、何食はぬ顔で小田に奉公。いま御家督の評議となつて、信孝公の機嫌を取り、この信雄どのに追從輕薄。幼少なる三法師君に取り入り、三方四方へ諂ふは、何れが四海の主となりても、汝が知行を取り外すまいと云ふ勝手料簡。其方よ此方よと日和を見て、暮らすに依りてそこで日和見の順慶。なんと解つたか。
ト順慶、脇見をしたり、いろ／＼眞面目になる。
喜伴　御尤もに存じまする。
帯刀　順慶どの、流石でござる。日和見の御巧者を以て、手も濡らさず、十二萬石。拙者もちと、日和の見やうを御傳授下されい。ハ、、、、。ハテ、よい異名を附けさつしやれたな。
五郎　宅間小平太、われが兄は、柴田の出頭、鬼玄番と異

名を云ふが、その弟のわれにも異名がある。先づわれが
異名を云ふは

小平　ア、、コレサ〳〵、もう異名話しは聞かいでもよくござる。お止めなさい〳〵。

五郎　でも、彼奴らが聞きたがるわサ。

小平　サア〳〵よくござる。なんの向うでも、問はいでもの事を。モウ〳〵〳〵、よくござるわいの。

木田　イヤ〳〵、小平太さま。五郎左衞門が異名のお話し、下郎めも聞きたくござるから、こりやお聞きなされたがよくござる。

小平　默れ、下郎めら、奴が差出る所でない、すッ込んで居らうぞ。

帶刀　イヤ、小平太、さうでない。斯樣の事は、武士たる者は後學にもなる事ぢや。小平太が異名は何とか申す。三輪氏、どうでござる〳〵。

ト小平太、眞面目になりて

小平　ア、、さりとては帶刀さま、もうよくござるわいの。根問ひ葉問ひをすると、後では屑の出るものぢや。ナウ、何れも。ハ、、、。イヤ、モウ、五郎左衞門さまの儀は、昔にも變らぬ御氣丈。先君信長公、御在世の砌りは、君の馬前に數ケ所の功名。遂に一度の後れを取らず、鎗は寶藏院流の奥儀を究め、馬藝に於ては大坪流の達人。古今獨歩と云はうか。ハレ、ヤレ、惜しい者が年寄つたわい。ハ、、、、。イヤ、お羨やましうござる。なんと、何れも、左樣ではござらぬか。

ト我が事を云はれまいと、いろ〳〵追從らしう云ふ。

喜藤　左やう〳〵。五郎左衞門さまは、大坪流の馬藝の達人。そこで、大坪流の五郎左衞門さま、大坪流々々々と申すぢや。

軍藏　ナニサマ、大坪流のお馬名は

伴作　日本に隱れがござらぬ。

喜軍　ハ、、、、。

關戸　女ながらも自らは、記錄所の目附け役。寶の紛失、この場の體裁、其まゝにして歸りしと、立歸つて申されうか。失ひしは誰れにもせよ、四海の跡目が即ち科人。

帶刀　御兩君は信長公の御公達。三法師君は城之助どのゝ嫡男。いづれを四海の跡目たらん。諸大名の評議區々。高秀どの、其許の所存は如何でござるな。

五郎　餘人は知らず、この和郎は、身が後見。連れ歸つて杖棒の折檻、根性を撓め直し、性拔け病を直いた上で、

家督に立てるも、立てぬとも、そりやこの菜が胸にある。

關戸　して、これなる信孝公は。

帶刀　御後見たる柴田勝重、所勞とあつて、この場所にござらねば、この場の落着。

順慶　信孝公の

皆々　納まりは。

　ト信孝を見る。この時、信孝、顔を上げ

信孝　追放。

皆々　なんと。

　ト信孝、居直り、こなしあつて

信孝　六十餘州に望みはない。父信長薨去の後は、各々が威勢に募り、我れ一天四海の補佐にならうと、一心に針を含み、他人は元より、父子兄弟に至るまで、際限なき蝸牛の爭ひ。三七信孝、この世になくばと、予を鬱陶しく思ふ輩もあらう。とあつて予に向つて、指差し手差しは猶え、せまい。そこを察して、其方達が身の立つやうに、誰れ彼れの指圖を受けず、信孝が覺悟は、信孝が追放する。

　ト太刀を持つてスツと立ち上がる。五郎左衞門、思ひ入れ。

帶刀　ア、イヤ、左やうござつては四海動亂の基。この儀は暫らく。

信孝　帶刀、留めるな。斯う云ひ出でたら、ふるなが辯舌で意見しても、いつかな止まらぬ。今月の今日より三七信孝、日本國を氣儘の往來。ハヽヽヽヽ、ハテ、面白い境涯ぢやな。

　ト采女、五郎左衞門が袂を引き、信孝を留めぬかと云ふこなし。五郎左衞門、采女を顔にて叱り、默つて居る。帶刀、信孝の顔を見て、こなしあり。

帶刀　日頃の御氣性、よもお止まりは。

　トこなしあつて、小姓を招き

近習の面々、信孝公に附き添ひ、守護されよと云へ。早う早う。

小姓　ハツ。

　ト入る。

小平　喜藤治、軍藏、伴作、お身達もお供に附添ひ、あはよくば途中に於てナ。

　ト切る眞似をして呑み込ませ

合點な。

喜軍　心得ました。
ト上下を取つて着流しになる。此うち、近習三人出る。帶刀、こなしあつて
帶刀　いづれも我が君の警固、萬事に就き油斷なきやう。
ト袱紗包みの金を捻り
守護いたされてよからう。
ト近習、金の包みを取つて
近習　畏つてござりまする。
ト此うち、信孝、座席を見廻す事あつて、五郎左衛門を見やり
信孝　爺よ、予が潔白。政道、批判があるか。
ト五郎左衛門、思ひ入れあつて
五郎　御尤もに存じまする。
信孝　ドリヤ。
ト合ひ方になり、信孝、太刀を提げ、ノサ／＼と花道の方へ行く。
五郎　三七君。待つた。
ト信孝、振り返り
信孝　用があるか。
五郎　猛虎深山にある時は、百獸これが爲に慄へ戰く。もし誤まつて里に出づれば、尾を打振つて食を求む。深山に在つてその威勢强からんか。里に出てその威勢衰へんか。御賢慮如何でござるな。
ト信孝、こなしあつて
信孝　秦の始皇帝、奢りをなせしも、驪山の塚に埋もれ、漢の武帝の命を惜しむも、とりようの苔に朽ち果つる。生者必衰、是非に及はぬ。
五郎　して、御在所は。
信孝　行き着き次第、天竺浪人。
五郎　愈々四海に望みはないか。
信孝　「櫻木を碎きて見れば色もなし、香りは春の空にこそあれ。」
五郎　ムウ、ハテ。
ト感心の思ひ入れあつて。
五郎左衛門、承知いたした。
信孝　爺よ、さらば。
ト額にて切る。唄になり、信孝、ノサ／＼と向うへ入る。喜藤治、軍藏、附いて入る。采女、信雄、こなしあつて
采信　さうぢや。

ト一時に切腹せうとする。五郎左衛門、眞中にて兩方を留め

五郎　和子、待たつしやれ。釆女、待ちやれ。

釆女　蔦の鏡の讒まれし申し譯。

信雄　濱荻に別れて生きて居る心はない。

五郎　默らつしやい。さう云ふたわけを盡すに依つて、寄つてかゝつて馬鹿にするわい。

釆女　申し譯は拙者が。

五郎　犬死して功になるか。

釆信　それぢやと云うて。

五郎　それ〳〵、さう云ふ他愛なしに仕込んだ女郎め、くたばつたは勅勘の幸ひ、なぜ性根を入れ替へ、あれこそ小田の公達。天晴れ名君よ、賢君よと敬はるゝ氣はないか。和子は和子とも思はうが、釆女、如何に若いというて、何ゆゑ一命を全うし、蔦の行くへを詮議して、しやッ面を雪がうといふ所存はないか。死は易し生は難し、掛替へのない命一つ、今くたばらうとは、若い〳〵。急く場でない。何事も爺に任して、和子、釆女、待ちやと云はゞ、マア〳〵、待ちやれ〳〵。

ト左右へ突き放す。

小平　イヽヤ、貴殿は格別。釆女が科は遁かれぬ〳〵。覺悟の切腹。身共が介錯

ト釆女目掛けて行く。五郎左衛門、小平太を引き離してポンと當てる。これをキッカケに、内にてドンチャンの打込み。

大勢　エイ〳〵、オウ〳〵。

ト鬨の聲揚がる。皆々悄り。

關戸　ヤヽ、あの貝鉦は。

五郎　小山に埋伏せし叛逆一味の、川尻肥後守を討ち取つた、勝鬨の引き鉦、太皷だわい。

順慶　ヤヽヽヽ。

ト悄り。

帯刀　叛逆人を見出さん爲、高秀どのと申し合せ、密事を探りし間者の方々、何れもこれへ。

ト橋がゝりより

瀧野　ハア。

ト又エイ〳〵ッ、ワアッと勝鬨を揚ぐ。瀧野、衣裳、裲襠に改め、小一郎、小手臑當にて、切り首を持ち、半切れの軍兵、大勢、小田の赤旗を押し立て、出ろ。順慶、瀧野を見て悄り。關の戸も驚ろき

關戸　ヤア、そちや最前の
ト立たうとする。帶刀、目を着けるゆゑ、ヂッと納まる。
瀧野　聞山太郎が女房と、名乘りし我れはお局頭、木幡といふ者。山路が白狀の上、聞き取つた密事の段々。
小一　某が手勢を以て、小山を取圍ませ
瀧野　一味の者を討ち取りしといふ、知らせの勝鬨。
小一　肥後守は斯くの通り。
ト討ち首を見せる。
順慶　ヤア〳〵〳〵。
ト大愕り。
帶刀　高秀どのゝ御計略、圖に當り、天晴れ〳〵。
五郎　叛逆の張本は筒井順慶、遁がれはあるまい。
帶刀　潔く切腹するか。
木田　但し捕へて、坊主首を洗ひ晒さうか。
皆々　サア〳〵〳〵、なんとぢや。
ト詰め寄る。順慶、いろ〳〵あつて
順慶　すりや、謀られたか。エヽ、殘念な。いつそ。
ト五郎左衞門へ切つてかゝるを、かひ潜つて、順慶を引ツ摑み、グッと据ゑ。
五郎　動きやがるな、茲な人外めが。敵となり、身方となり、義もなく勇も無く、極惡無道の畜生同然。今までも生け置く奴ではなけれども、先君御寵愛の大名だから、この坊主首を、胴に附け置きしを有り難いとは思はず、小田の四海をしてやらんとは、野太いづく入。
ト關の戸を尻目にかけて
所存があれば、事微細に詮議はせぬ。張本の坊主め、今打つ放す。覺悟ひろげ。
ト突き飛ばす。順慶、また拔身を取つて
順慶　さう云ふうぬが白髮首を。
ト切つて行くを、拔身を捥ぎ取り、下へ引き廻す。順慶、木田平と立廻り、關の戸、キッとなり立つを、二重舞臺にて三人隔てる。小平太、起きて、五郎左衞門へ行くを、五郎左衞門、持つたる拔身を小平太へグッとさしつける。途端の立廻り、各々一時に
帶刀　關の戸さま、これは。
關戸　ムウ、
トこなしつあて
叛逆人の筒井順慶。
帶刀　禁廷へよろしく奏聞。

ト繝の戸ヂッとなり、こなし。

小平　こりや身共を何とするのぢや。

五郎　毛唐人へ内通して、日本へ逆寄せにせんと企みの段段。

小平　なんと。

五郎　いらざるてんがう。うぬら如きを吟味に及ばぬ。命を助けて追放だ。

小平　ムウン。

　ト こなし

釆女　して、この釆女は。

五郎　云ひ譯立つまで遠慮いたせ。

信雄　この信雄は。

五郎　爺が同道。

瀧野　枝葉の詮議は

五郎　摺粉木で重箱、行き屆かぬが公の政道。

順慶　なにを、うぬ。

　ト木田平を引きのけて、五郎左衛門へかゝるを、右の拔身にて、順慶が腹へ突ッ込む。

皆々　これは。

五郎　小田家の吉例、門ん出の

　ト順慶が首をポンと切つて

血祭り坊主。

帯刀　天晴れ。

五郎　ドリヤ、罷らうか。

　ト拔身を鞘る。小平太、五郎左衛門へかゝる。五郎左衛門、小平太を蹴据ゑて、頭を踏る。尻居に返るを見て

ハヽヽヽ。

　ト高笑ひ、各々、こなしあつてよろしく

幕

二つ目　柴田旅館の場

役名——柴田修理勝重。河田歩左衛門。小山三法師丸。禿、文字野。幇間、傳吉。遣り手、おかや。大炊女房、千草。左京妹、白妙。兵庫妹、柏手。宮内奥方、木末。大工、嘉助。同、喜三。同、七郎兵衛。同、新吉。同、宇兵衛。同、杢兵衛。岡崎藏八。鳴見一學。内膳女房、渚。平手長司。玄蕃妹、初花。羅漢の鐵八。瀬川釆女。大工、與四

郎。下女、おため。大垣大膳。片山左近。小田之助信雄。宅間玄蕃。藤右衛門娘、お豐。傾城、園菊。鹽谷藤右衛門。萩坂主計頭 實ハ木田平。在所女小谷。眞柴久吉。三輪五郎左衛門。

造り物、三間の間、二重舞臺。向う金襖、臆病口、少し小高き上段の間、金骨障子、横は黒塗り障子。橋がかり折り廻り、障子屋體。今出川、柴田が旅館の體。幕の内より、信雄、着付け、壺折にて、褥に坐り居る。平舞臺、上の方に、木末、渚、衣裳、裲襠。初花、衣裳、裲襠にて、三方に、杯、長柄の銚子を側に置き坐り居る。橋がかりの方に、與四郎、ぼつとせ、木綿やつし、麻上下にて、杢兵衛、宇兵衛、喜三、嘉助、新吉、七郎兵衛、皆々布子木綿、輕衫にて、大工の形にて坐り居る。この體にて、めでたき太鼓、唄にて幕明く。

初花　小田之助さまへ申し上げまする。今日、旅館の普請も、成就いたしましてござりますれば、あなたにも一献お進め申しませいと、柴田さまの御意。サア、一つお召上がり遊ばされませう。

信雄　オヽ、某を慰めんとて、柴田を始め、其方達の深切、過分々々。

與四　ハイ、お願ひの者でござりまする。

木末　私しは、安部宮内が妻、木末と申すもの。

柏手　私しは、金折兵庫が妹柏手。

白妙　私しに、蒲生左京が妹白妙。

千草　鳰川大炊が女房千草。

渚　堀尾内膳が妻渚。

皆々　信雄さまを、お見舞ひの爲參上いたしましてござりまする。

信雄　これは〳〵打揃うて、忝ない。

初花　幸ひ、普請成就の喜びに、家中の子供が、風流の一奏でを、御遊覽遊ばされませいなア。

信雄　それよからう。此方へ通せ〳〵。

初花　畏こまりました。コレ、其方衆も見物しや。取次ぎしてやるわいなう。

與四　それは有り難うござりまする。

ト戸屋の内へ向ひ

初花　申し附けた風流の一奏で。急いでこれへ。

ト對馬がゝりの鳴り物にて、向うより、丹前六法の殿、

衣裳、羽織、焙烙頭巾、大小にて、大盡の妻、花道より本舞臺へ來て、所作の立てやうよろしくあつて、文句にて向うを招く。と奴ツカ〳〵と出る。花道にてキツと見得よろしくあつて、これより兩人所作少しあつて、とまり、辭儀する。

皆々　ヨウ〳〵。

信雄　ハテ、しをらしい。者ども、出かした〳〵。初花、彼れらに褒美を取らせい。

初花　畏こまりました。コレ、二人とも、御前にお禮を申しや。

兩人　有り難うござりまする。

ト信雄方へ辭儀する。

初花　其方衆は、次へ立つて休息しや。

兩人　ハア、。

ト兩人橋がゝりへ入る。

與四　皆の衆、今の子供らが、舞を舞うて褒美を貰うたが、此方も踊つてなりと、願ひを聞いてもらはうかい。

宇兵　何を阿房らしい。コレ、彼處にござるのが、小田之助信雄どのぢやげな。いつそあなたへ願はつしやれ、願はつしやれ。

信雄　ムウ、某に願ひとは何事ぢや。

與四　ハイ〳〵。私しは、柴田さまの御領地、栗田口に居りまする、大工與四郎と申しまして、この度の御普請に就きまして、皆御領內の大工どもを召寄せられまして、その中に年若な私しを、棟梁に仰せつけられましたゆゑ、ナニが大切な役目と存じ、精を出しまして、凡そ三十日餘りに、この旅館の御普請を仕立て上げ、即ち今日で何處もかも、出來上がりました。所でのお願ひ。コレ、この次は、貴樣替つて云はつしやれ。

李兵　オツと、合點ぢやわい。ナニガ、その三十日が間、夜を日に繼いで、仕立て上げましてござりますゆゑ、內へとては、一夜さも去んだ事はござりませぬ。そこで嬶めが、ちよこ〳〵迎ひに參じまする。それなれど、一向私しらには逢はさず、玄蕃さまが中で叱り散らして、追ひ返さつしやりましたげにござりまする。

嘉助　ところで、御普請も出來上がりました事なれば、どうぞ今夜は去んで、嬶の顏が見たうござりまする。

李兵　イ、私しは今年八十になる、病氣持ちの親仁が、留守をして居られまする。

喜三　私しの母者人は、氣が狂うてござりました。けれど

殿樣より、急な御用とござりますゆゑ、母者人を押入れへ打込み、錠を鎖ろして參りました。
杢兵　三十日の間、ヤレ急げ、急げと、御普請はお急きなさる。
喜三　せめて一夜さ、內へ去なうと思うても、日が暮れると、御門の出入りは叶はず。
新吉　やう／＼御普請も仕上げました事なれば
七郎　とうぞあなたが、御挨拶下されまして
嘉助　今夜はお歸しなされて、下さりませうならば
皆々　ハイ／＼、有り難うござりまする。
信雄　ムウ、尤もな願ひ。よいワ、某がよいやうに執成し云うて、今宵は皆歸してやらうぞ。
皆々　エヽ、有り難うござりまする。
初花　コレ、與四郎、そんなら其方も、今夜は去にやるかや。
與四　ハイ、私しも、去んで、お勝とお豐が
　ト云はうとして
イヤサ、わしが內へ去んだというて、やもめの事なれば、去んでも誰れも待つ者はなけれども、皆が去にたがるに依つて、ツイ、それで私しも。
　トぐづ／＼云ふ。
初花　イヤ、去にたからう。
與四　エヽ。
初花　外の衆より、其方が一人、去にたがりやるけれど、去なしやせぬぞや。わしが又金輪際
　ト云はうとして
イヤ、滅多に去なさぬと云うてござるぞや。
與四　そりや誰れがな。
初花　御主人柴田さまが。
與四　エヽ。
初花　柴田さまも、兄玄蕃さまも、滅多に去なさぬと云うて居られまするを、あなたが去なしてやれと、御意遊ばす事は、よしに遊ばしませ。
信雄　ヤア。
初花　なんぼうでも、去なす事はならぬ／＼、なりませぬわいなア。
　ト泣く。大工皆々不思議な顏する。與四郎困つた顏する。信雄、推量したるこなしにて
信雄　ハア、讀めた。わりや初花、戀ぢやな／＼。
初花　エヽ。

信雄　隠すな。今の其方が五音で、何もかもさらりと、事が判つてあるわいやい。ナア、女ども。
木末　あなたが、あのやうに仰しやるを、隠さしやんすと、却つて悪うござりまする。
白妙　また様子に依つて、わたしらも、共々にお世話いたしまするわいなア。
柏手　いつその事に、何もかも、あなたにお話し申さしやんせいなア。
皆々　左様でござりまする。ナア、その様子云はしやんせいたア。
初花　そんなら是非に及びませぬ、申しまするが、皆さん、笑うて下さりまするなえ。
女皆　なんで笑はうぞいなア。
信雄　サア、包まずと白状せい。
初花　アイ、何を隠しませうぞ。この與四郎が普請におちやつた日から、テモサテモ、どうやら正直さうな、よい男と思うたが縁の端、てんぽの皮とわたしが方から、云ひかけましてござんす。あの人の云ふには、お前の志しは忝なうござりますれど、大切な御普請の間に、其やうな淫らな事を、ひよつと兄御が見付けさつしやつたら、大抵の事ぢやござりますまい。ハテ、御普請さへ、首尾よう仕上げましたら、二三日も逗留のうち、願ひを叶へてやり申さうと、コレ。
　ト與四郎が手を取つて向うへ連れて出る。
コレ、この口で、誠らしう云やつたに依つて、わしや御普請の出来るのを、今日か〱と待つて居るのに、今日御普請が出来上がつたら、直ぐに今宵去なうとは胴慾な。ようもわたしを騙しやつたなう〱。
　ト與四郎が胸倉取つて振り廻す。大工ども腹を立て
宇兵　エヽ、よい機嫌な、色事どころかい。
嘉助　此方は半時でも早う、内へ去にたいわいの。
喜藏　一體また、若いわれを、棟梁にする筈はなけれども、どう氣に入つたやら、玄蕃さまが、われを棟梁に定めさつしやつた。
杢兵　ねそり事を仕出かすと、ぬるい顔で居ながら、誰れあらう、宅間玄蕃さまの妹御を、そゝのかすとはわりや、怖い事を知らぬ者ぢやわい。
杢兵　それ〱、此方の在所、粟田口の郷士、藤右衛門の娘を。
　ト云はうとするを、與四郎云はすまいと云ふこなし。

與四　エヽヽそりや、惡い〳〵ぞ。
李兵　コレ與四郎、惡い〳〵とは。
與四　イヤサ、その惡いと云ふは。
皆々　云ふは。
與四　貴樣達ぢや。
李兵　なんでおいらが。
皆々　惡いぞ。
與四　貴樣達は、御普請を仕舞うたに依つて、内へ去にたいと云ふのぢやないか。
皆々　オヽヽさう云うた。
與四　サア、それが惡い。
皆々　なんで。
嘉助　あの女中を誰れぢやと思ふ。忝なくも御家老、玄蕃さまの御妹御ぢやないか。
與四　サア、そこぢや。なんぼ貴樣達が去にたがつても、玄蕃さまからお許しが出にや、去ぬる事はならぬワ。
皆々　さうぢや。
與四　玄蕃さまへ、よしなに執成し云うても下さるお方は、あなたぢや。其あなたの心に、障るやうな事を云うたら、また去にたい〳〵と云ふに依つて、あなたの御機嫌が惡い程に、もう去ぬる事は、とんと止めぢや。
皆々　ヤア。
與四　ハテ、サテ、マア、去ぬる事はとんと止めても、そつと、どこぞ御普請にかゝらしてもらはねばならぬ。ハテ、マア、なんぢやあらうと、あれが云ふやうに、とんと去ぬ氣になると、あなたのお腹立ちも鎭まつて、兄樣へ、よしなに仰しやつて下されまする程に、マア、あれが云ふ通りに、去なぬがよからう。オヽ、去なぬぞ〳〵。
李兵　オヽ、さうぢや、おいらもナウ、皆の衆。
皆々　オヽ、去なぬ〳〵。
與四　なんとお聞きなされましたか。もう去にや致しませぬぞえ。
初花　そんなら、アノ、いつまでも去なずに、わしが願ひを聞いてたもるかや。
與四　承りまするとも。ナウ皆の衆。
李兵　さうとも、こちらが世話やいて、お前の願ひを叶へさすわいの。
初花　それに違ひは無いかや。
皆々　違はぬ〳〵。
初花　エヽ、嬉しうござるぞや。

與四　サア、御機嫌が直つたぞや。

信雄　幸ひこの杯で、祝言やら、仲直りやら、皆寄つて、一つ飲め〳〵。

大工　ヤア、御酒とは有り難い。

女皆　それ〳〵。わしらが取持ち致しませう。

初花　それは、マア、いかい御苦勞樣。

喜助　これがほんの、涙の雨が降つて、酒になり濟ました。

皆々　ヤア、よい〳〵。

ト手を打つ。

與四　も一つせい。

皆々　よい〳〵。

與四　祝うて三度。

皆々　おしやさんの〳〵。

ト派手な唄になり、皆酒飲みにかゝる。女形皆々酌する。此うち初花、與四郎に抱きつく。信雄この體を見て、樂しむこなし。この唄をかつて向うより、園菊、着付け、抱へ帶、被衣にて、後より、禿文字野、小姓にて、おかや、腰元にて、幇間傳吉、着付け、袴、羽織、大小にて、若黨の體にて、この人數、花道にて立ちどまる。

文字　申し〳〵、その向うの屋敷が、今出川の旅館とやらかいなア、太夫さん。

かや　これはしたり、そりや何云やる。今日はあなたも御所風になつて、其方も小姓出立ちに拵らへ、この遣り手のかやも、赤前垂れを取措いて、お腰元になつて來たのに、申し、太夫さんとは、何事ぢや、ナア、申し、太夫さん。

園菊　アレ、又いなう。文字野を叱る其方も、矢ッ張り粗忽を云やるわいなう。

傳吉　イヤ、そりや道理でござりまする。幇間を商賣にしてゐるわたしさへ、道々も、すんでの事に、太夫どのと申さうと致しましたてや。

園菊　隨分氣をつけて下さんせ。この間、御室で別れてから、心にかゝるは采女どのゝお身の上。今日この今出川の旅館とやらへ、大名さん方が、寄合はしやんすと聞いたに依つて、もし采女どのがござんせうかと、此やうに御所風になつて來たも、廓の者と目に立てば、また采女どのゝお爲にならぬわいなア。お前も隨分侍ひのやうに、物を云うて下さんせえ。

傳吉　お氣遣ひなされまするな。そこらは滅多にやるもの

ぢやござりませぬ。諸事胸中に有馬山でござりまする。
園菊　それが矢ッ張り廓めくわいなア。
傳吉　ほんになア。
園菊　とんと、太鼓さんを取揩いて。
傳吉　オッと取つて居る〳〵。
園菊　アレ、矢ッ張りかいなア。
傳吉　ハヽヽヽ。サア、お出でなされませ。
トまた唄にて、皆々本舞臺へ來る。此うち皆々よろしく酒飲んでゐる。園菊、傳吉に囁く。傳吉呑み込んで
傳吉　物申す。
與四　どうれ。
トこちらへ來る。
傳吉　拙者事は、女院御所の局頭より參つてござる。
ト仔細らしう。
與四　して、そのお局のお名はな。
傳吉　サア、おつぼは、アノ梅つぼか、砂糖つぼでもなし。アノ、ソレ。
トうろ〳〵と云ふ。園菊、おかや、氣の毒がる。此うち信雄、傳吉を見て
信雄　ヤア、其方は幇間の傳吉ぢやないか。
傳吉　信さまか。
信雄　その形は。
傳吉　これには段々。樣子は直にお聞き下されませう。申し申し、太夫さん
かや　また太夫さんと云はしやんす。
傳吉　云うても大事ない。申し、信さまがあれにござりまする。
園菊　なんと云はしやんす。信さんが
ト信雄を見て
ほんに信さん。
信雄　園菊か。サア、爰へ〳〵。
園菊　アイ、皆さん、お許しえ。
トずつと通り、二重舞臺へ上がる。大工皆々見て
杢兵　テモサテモ、美しいものぢやなア。
信雄　時に、其方のおぢやつたは、定めし采女が事を、案じての事であらうの。まだ采女は來ぬが、どうで五色蔦の云ひ譯にくるであらう。マア、それまでは奧へ來て、忍んで居たがよいわいの。
園菊　忝なうござんす。どうぞわたしも、ちよとなりと、逢ひたうござんす。そんなら、あなたのお側に置いて、

下さんせえ〳〵。
信雄　合點ぢや。
かや　申し、太夫樣が、お前が爰に待つてござるその間に、この二人と連れ立つて、北野の天神樣へ、詣つて參じませう。
かや　コレ、傳吉さん、文字野、戻りに御所の內へ、廻つて來うぞえ。
傳吉　さうせう〳〵。
與四　なんと、こちらも去にたいなア。
喜藏　いつその事に、脫けて去なうか。
杢兵　ハテ、もう仕事しまうたら、何の用のない身の上。
宇兵　こちらも、あのお衆と一緒に、天神樣へ參つて、それから直ぐに去なうわい。
傳吉　そんなら、一緒に連れ立ちませうか。
與四　それがよからう。マア、この棟梁から先へやりかけう。
ト去なうとするを、初花、留めて
初花　コレ、其方は去にやるかいなう。
與四　イ、ヱ、天神樣へちよつと。
初花　イ、エ、さう云うて去ぬるのぢや。去なさぬ〳〵。

與四　マア、爰を放さつしやりませ。
ト振り切る。
初花　申し、皆樣、留めて下さりませ。
女皆　マア、待ちやいなう〳〵。
ト皆々與四郎を捕へにかゝる。與四郎逃げ廻る。大工皆々女形を支へる。與四郎、橋がかりへ逃げようとすると、橋がかりより、玄蕃、着付け上下、鎌髭にて、ツカ〳〵と出て與四郎を留める。
玄蕃　大工ども、一人も動き居るな。
ト睨む。
與皆　ハイ〳〵。
ト皆々、後へ寄る。初花、女形皆々、モヂ〳〵する。玄蕃は、傳吉、おかや、文字野とを見て
玄蕃　わいらは見馴れぬ者ども。
傳吉　ハイ、私しどもは、
トうろ〳〵云ふうち、玄蕃上へ通り
玄蕃　見ますれば、信雄どのゝお側に見馴れぬ女。
ト信雄、園菊を後に圍ふ。
信雄　イヤ、この者は
玄蕃　傾城、遊女を引ツ込み、もし今にも諸大名、三法師

丸を供奉し入り來らば、何となさるゝ。今日この旅館へ、江州安土より、眞柴久吉、三法師君を御供申し、諸大名到着仕り、小田家の御家督の內談。その上近々、大德寺に於て、信長公の追福なさるゝその日限まで、三法師君は、この旅館に御滯留遊ばさるゝに依つて、斯く新たに普請仕つた儀は、先達てより、よく御存じでござらうがな。

信雄　そりや、よう知つて居るてや。

玄蕃　それに、淫らな女を引入れ、まだ御放埒がとまりませぬな。

園菊　イヽエ、わたしや信さんに、逢ひに來たのではござんせぬ。

玄蕃　瀧川采女に用があるか。

園菊　エヽ。

玄蕃　傾城め。

園菊　そんならわたしを

玄蕃　存じて居るてや。

園菊　アノ、ついに御見ならぬお前が。

玄蕃　如何にも。

園菊　ハテナア。

傳吉　申し、太夫樣。見りや采女さまも、まだお出でなされぬさうな。マア今日は、お歸りなされぬかな。

かや　それ〳〵、どうやらをかしいこの場の樣子。マア、お歸りなさんせいなア。

園菊　成る程、采女さまの居やしやんせぬに、爰に居るも異なもの。信さん、又お目にかかりまする。

信雄　イカサマ、爰に居やつたら、そこらあたりへ氣がねもある。アア、今日は去んでもよかろ。

園菊　サア、皆おぢや。

玄蕃　イヽヤ、歸す事罷りならぬ。

園菊　エヽ。

玄蕃　この旅館へ入込みし大工は元より、女どもに至るまで、一人も歸す事罷り成らぬ。

皆々　エヽ。

ト大工皆々、傳吉、おかやも驚ろく。と向うより侍ひ一人走り出る。

侍ひ　ハア、片山左近さま、平手長司さま、その外皆々お入りでござりまする。

ト云ひ捨てゝ入る。

玄蕃　最早、評議の對談の刻限。

女皆　左樣ならば私しどもは
玄蕃　マア奧へ。
女皆　ハア。
玄蕃　妹、其方は傾城園菊を奧へ同道。
初花　畏こまりましてござりまする。
玄蕃　家來參れ。
侍ひ　ハッ。
　ト三人出る。
玄蕃　廓の者ども、大工もろとも、長屋へ引連れ、一人も
　動かすな。
三人　畏まつてござりまする。
與四　そんな、どうでも
初花　アノ、與四郎を
　ト與四郎が方へ行かうとする。玄蕃隔てる。
玄蕃　傾城を取逃がすな。
初花　ア、。
玄蕃　ソレ、皆の者を引ッ立てい。
大皆　これは又、迷惑な。
　ト唄になり、柏手、白妙、千草、渚、信雄へ辭儀して
　奧へ入る。初花、與四郎が方へ、心を殘すを、玄蕃顏
　にて奧へと睨みつける。信雄、園菊顏合せ、信雄「マ
　ア行きや」と顏でするゆゑ、園菊是非なく初花の後に
　付き奧へ入る。與四郎、大工皆々投げ首して橋がかり
　へ行く。後より、傳吉、おかや、文字野を連れて、呟
　きながら附いて行く。家來後より
侍ひ　サア、行かうてや。
　ト追ッ立て、皆々橋がかりへ入る。信雄、二重舞臺の
　眞中にて、褥に坐る。玄蕃、威儀を正し出迎うて
玄蕃　何れも、此方へお通り下されませう。
　ト太鼓、謠になり、向うより、平手長司、大紋、立烏
　帽子にて出て來る。後より片山左近、大紋、立烏帽
　子。後より、大垣大膳、鳴見一學、岡崎藏八、皆々大
　紋、立烏帽子にて出て來る。平手長司、花道よき所に
　立ちとまる。片山左近、大垣大膳、岡崎藏八、皆々立
　ちとまり
長司　兼ねて申し合せし今日の評議。
左近　刻限違へず
一大　皆々參着
皆々　致してござる。
玄蕃　イザ先づあれへ、お通り下されませう。

トまた太鼓、謡になり、平手長司先に立ち、平舞臺の上の方へ、平手長司、片山左近、大垣大膳右三人坐る。下の方に鳴見一學、岡崎藏八。太鼓、謡打ち納む。柴田修理之助勝重、小さ刀にて靜々と出て、二重舞臺の信雄が次に坐る。

修理　何れも、早速の到着、御苦勞々々々。

長司　柴田どのには、この程より所勞と承つてござる。

左近　先づは、全快の樣子を見受け

大膳　大悦至極に

皆々　存じまする。

修理　如何にも。この程より風邪に犯され、引籠り居たるゆゑ、御室の御所騷動の場所へも駈けつけず、三七郎どのゝ出國も、某その場に有り合さず、これ以て今に殘念。柴田が胸中、何れも推量下されい。

長司　成る程。貴殿事は、三七郎どのゝ後見、殘念に思はるゝも、甚だ尤もに存じまする。

左近　これにおいでになるゝ、小田之助信雄公は、三輪五郎左衞門後見の公達。承れば、一昨日御室にての騷動。それより柴田どのゝ、旅館へお出でありしとの噂に違はず、これにお出でのその仔細はな。

信雄　イヤ、その仔細は某が申し聞けう。一昨日御室にて寶の紛失その場より、金井山九郎と云ふ、能師行くへ知れず。正しくこの者の仕業とは思へども、これと云ふ證據もなく、寶紛失は皆この信雄の誤まりとなつて、三輪五郎左衞門の預かり。申し譯を立てさせんと、その場はマア遁がれたれども、近日大德寺に於いて、信長公一周忌の法事執行。その後にて小田家の家督定め。是非その時は、紛失の寶どもを取揃へねばならぬ。これと云ふのも、此方の放埒より事起ると、また例の堅親仁が意見で、如何な某も迷惑して居る所へ、柴田が情で、あの玄蕃を迎ひにおこしてたもつたゆゑ、ヤレ嬉しや、理窟親仁の苦言を助かり忝ないと、直ぐに玄蕃と同道して、この旅館へ來たは、右の樣子。なんと、あの五郎左衞門を我れらが後見とは、ひよんな事を定めた事ではあるぞ。

長司　ハ、、、、。イカサマ、あの意地くね爺には、誰れも困り申すてや。

一學　先君信長公に引添ひ、所々の戰ひに、軍功せしとあつて信雄公の後見と定められ、老體を御勞はり遊ばされ、殿中杖、頭巾を御免ありしを、有り難いとも思はず、おのが威勢に高慢して、頭巾杖は面倒なと、君恩を思はぬ

不屆き。

大勝　その上、信長公より、軍功あつて大祿を下し置かれんとの御上言をもどき、わざと小身にへり下り、諸大名は軍功もなくて、大祿を貪る國賊同然と、我れ〳〵に向つて雜言を吐く、憎い老ぼれ。

一學　殊さら、信長公御存生の砌りより、諸大名の大紋なども、隨分尋常に致せよと、仰せ出されしゆゑ、我れ我れその趣き、キッと相守り罷り在る。

藏八　まつた大小も、三尺を限り、至つて長きは御法度に仰せつけられしゆゑ、信長公逝去の後までも、その御定法を相守り、この如く大小も、小短く仕る。

玄蕃　成る程、その御定法を用ひぬ三輪五郎左衛門、なま長い大小を横たへ、出仕登城の折柄、障子襖に行き當り、人に觸るも構はず、狼藉けれう。各々方が老耄して、五郎左衛門を料簡あればこそ、事も出來ませぬ。併し、あの儘に打捨て置かれましては、信長公の上意を背くも同然、且は小田の武威を輕しむる五郎左衛門、信雄どの、この儀はとくと、相止めらるゝやうに仰せつけられ、然るべう存じまする。

信雄　如何にも、彼れが機嫌を見合せ、申し付けうが、ツイ承知すればよけれども、ひよつと、捻ち出したが最後、モウ〳〵、煮ても、燒いても、食へる親仁ではないてや。

玄蕃　イヤ、その食はれぬで、思ひ出しましてござりまする。何れもお聞き下さりませい。先つ頃、三輪五郎左衛門、主人柴田どのゝ、所勞見廻りとあつて、入來いたされてござるが、幸ひ到來の鶴の吸ひ物を出しましたところが、殊の外の大食。何がさて小身でござるゆゑ、鶴を食べる事は稀れなり、お聞き下されい、年寄りに似合はぬ、鶴の吸ひ物を、九膳まで山盛りとして、食べましたてや。

皆々　ハテナア。

玄蕃　イヤモウ、下作者と申さうか、喰ひ拔けと申さうか、言語道斷。あのやうな親仁めは

ト此せりふの口より

修理　默れ、玄蕃、默れ〳〵、默れといふに。

ト叱りつける。玄蕃とまる。

誰が望みもせぬ讒言。五郎左衛門が洩れ聞かば、安穩で置くべきか。無益の舌の根動かすな。

玄蕃　イヤサ、左樣ではござれども

修理　まだ〳〵。控へて居らうぞ。

ト叱る。玄蕃控へる。ト向うより侍ひ一人走り出る。

侍ひ　ハッ、三輪五郎左衛門さま、お入りでござりまする。

修理　人事云はゞ、はや三輪が入來、此方へと申せ。

侍ひ　ハッ。

ト又向うへ走り入る。

修理　信長公寵臣の五郎左衛門、如何ほど無禮法外を致さうとも、何れも必らず、心にさへられな。玄蕃もその旨相心得よ。

玄蕃　畏こまつてござりまする。

ト「コイヤイ」になり、向うより五郎左衛門、着付け上下にて、いか物作りの大小さし、茶縮緬の焙烙頭巾に竹杖を突き、小松菜を繩にて括り下げて出て來り、花道に立ちどまり

五郎　ホウ、こりや早い參着だな。

修理　三輪どのには、御苦勞の入來。

長司　最前より、待ちかね申した。

左近　イヤ、五郎左衛門どの。

信雄　爺よ、爰へおぢや〳〵。

五郎　いづれも許さつしやい。

ト「コイヤイ」にて五郎左衛門上座へ通り、二重舞臺に坐る。

信雄　五郎左衛門、其方が持つておぢやつたは、そりやなんぞ。

五郎　イヤ、これはこの間、馳走にあづかつた返禮。柴田どの、先日は忝なう存ずる。玄蕃、これを煮て、柴田どのも其方も、存分食べてくりやれ。

ト右の菜を玄蕃方へ抛る。

玄蕃　五郎左衛門さま、こりや、なんでござりまする。

五郎　そりや、鶴だ。

玄蕃　エ、。

五郎　この間の返禮、約束の鶴を持つて來たのサ。

玄蕃　フ、、、、ハ、、、、。三輪さま、イヤ、五郎左衛門どの。其許は、大坪流の馬術の達人、若い時は氣丈にあつたが、麒麟も老ぬれば駑馬に劣ると、こりや老耄さつしやつたな。鶴の返禮に鶴を持參したと、こりや、なんぢや。小松菜を鶴だとは、なんの戯言。腹存分に鶴を喰つて、今度身共が鶴を持參するなどと、小身者の悲しさは、鶴の才覺ならず、菜を以て鶴だとは、我れ〳〵主從を馬鹿にするのか。武士は虚言を吐いて事が濟みまするか。それで大坪流の達人と申されまするか。ハレ、年

は寄るまいものだ。ハヽヽヽハヽヽヽ。

ト右の菜を五郎左衛門方へ抛り戻し、嘲笑ふ。

五郎　此奴、この五郎左衛門に向つて、過言を吐く、毛二才め。

玄蕃　イヤ、なんぼう立腹さつしやれても、その小松菜、鶴にはなりませぬ。

五郎　イヽヤ、なる。

玄蕃　そりや又どうして

五郎　この間馳走になつた時、初め四五杯は鶴があつた。ところで、われが勸めるゆゑ、また三四杯喰うたであらうが、後の三四杯は菜ばかりで鶴はない。そこでおらが今日の御馳走だ。此やうな鶴に、おらが庭先にいくらもあるから、今度返禮に持つて來ると、約束違へず持つて來た鶴だ。

玄蕃　エヽ。

五郎　われ今、大坪流の達人が、虚言を吐いて武士が立つかと云つたが、なぜ又鶴がなくば、もうよしにせよと云つてこそ、僞はり飾らぬ誠の武士。小松菜を鶴だと云つて、なぜ年寄りを馬鹿にひろいだ。

玄蕃　サア、それは。

五郎　柴田どのゝ差し金か。但しわれが采配か。この五郎左衛門、僞はり飾る事大嫌ひだ。上を見習ふ下、川上より水を流せば、川下に住む者ども、自然と泥水喰うて心が濁る。川上の濁るゆゑ

ト修理介を尻目に掛け

重ねて虚言を吐かぬやうの誡め。その小松菜を鶴にして受納しろ。

修理　憎くい玄蕃、老人を騙る不屆き。ソレ、三輪どのへお詫び申せ。ハヽ、お詫び申し居らう。

玄蕃　イヤ、拙者は曾以て存ぜぬ儀。御膳番料理方の不調法。キツと捕へて糺明仕りませう。

五郎　ナニ、料理人膳番の知つた事でない。われが業だ。

玄蕃　これは又、迷惑千萬。

信雄　コレ〳〵、玄蕃、生れついて意地強い五郎左衛門、云ひ出した事變ぜぬ氣性ぢや。あやまれ〳〵。

五郎　ナニ、此やうな蜻蛉野郎を、あやまらしたといつて役にや立たぬ。高がこの菜を鶴だとさへ云へばよい。

玄蕃　左樣なら、この菜を鶴だとさへ云へば。

五郎　オヽ、よい〳〵。

玄蕃　でも、見す〳〵

五郎　鶴だと云はれぬか。
玄蕃　オヽ、申します〳〵。
ト右の菜を兩手に載せて
これはマア御返禮とあつて、結構な鶴を下し置かれ、千萬忝なう存じます。しかもこりや眞鶴だ。主人も拙者も賞翫いたすでござらうサ。
ト皆々顏見合せ。
ハヽヽヽ。馬鹿々々しい。
ト以前の所へ坐る。
長司　左程虚言を飾らぬこなたが、なぜ信長公より御免なされし杖頭巾、日頃岩壘に高慢して、出仕登城にも用ひぬは、これ全く主人の命に背く道理。
左近　それを今日ばかり用ひたるその仔細。
一學　日頃達者自慢の詞にも似ず、
藏八　杖頭巾を用ひるは
玄蕃　正しく僞はり、表裏か。
長司　それでも貴殿、虚言を吐かぬか
左近　サア、その返答は
皆々　なんとでござる。
五郎　ハテ、小ざかしい。所詮お身達の愚案では、合點行くまい。我れ老年に及べども、今にも一大事と聞くなれば若武者には劣るまじと、朝暮忘れぬ武士の嗜み。只有り難きは信長公、コリヤ、爺よ、世俗の譬へにも、老いては子に從へと、年寄つての我武者は無用、教訓の爲、杖頭巾を許し置く。
ト着たる頭巾を取つて
コレ、この頭巾は焙烙と、武士は知行奉祿を頭に戴き、主君に忠義を忘れず、反逆、野心を押へる爲「上見れば及ばぬ事の多かりき、笠着て暮らせおのが心に」。ナ、及ばぬ事だ。お身達がこの五郎左衞門を亡きものにせうと思つても、そりや及ばぬ事だ。ナア、慮外ながら。また杖は程よきに節を生ずる直ぐなる竹だ。ゆがみ曲らぬ教への爲、大切な主君の拜領、平常用ひぬ君の賜物、今はお形見となつたか。
ト二品を持つて少し愁ひのこなし。
長司　その大切な二品を
左近　今日用ひる
皆々　その仔細は。
五郎　ハテ、そりや斯うだワ。安土より三法師君を供奉し眞柴久吉、今日この旅館へ入來して、小田の家督評定と

ある。これ大切た會合だから、こなたにもせよと云つて
もあり、我まゝ氣儘を致さぬやうに、おらから先へ、ま
ツこの如く頭に戴くは、我が君の御意を背かぬ五郎左衞
門が潔白。なんとこれにも批判があるか。

皆々　サア、それは。

五郎　サア

皆々　サア〳〵

五郎　なんとだ。

皆々　ムウ。

ト皆々力む。修理介こなしあつて

修理　ハア。天晴れ流石の三輪どの、恐ろき入つた。左程
先君のお詞を立てる貴殿が、なぜ信長公の御上意を背き
召さるな。

五郎　ナニ、五郎左衞門が信長公の御上意を背いたとは。

修理　イヤ、背かぬとは申されまい。

五郎　なぜ〳〵。

修理　先君御存生のうち、諸大名へ仰せ置かれし御定法、
大小は三尺と限り、至つて長きに御法度仰せつけられし
に、貴殿一人戰功の劍なりと、昔に變らぬいか物作りを
帶し召さるゝは、なんと、君の上意を背くではないか。

五郎　サア、それは。

修理　サア、これでも信長公のお詞を守り召さるゝか。

五郎　サア。

兩人　サア〳〵〳〵。

修理　なんとでござる。

ト云ひ詰められ、五郎左衞門ぐんにやりとなる。

五郎　あやまりました。

修理　ヤ。

五郎　イヤモ、ずんとあやまりました。

修理　御合點が參りましたか。

五郎　この五郎左衞門、若年の砌りより今日まで、ついあ
やまつた事がない。それをたつた一句で取拉ぐとは、流
石の柴田氏。ハレ、けうといものだ。何とせう。せう事
がない。いよ〳〵、短かく致さう短かく致さう。

ト云ひ〳〵平舞臺に下りる。

長司　すりや、そのいか物作りを

左近　今この場に於いて

皆々　改めさつしやるか。

五郎　オヽ、改める〳〵。誤まつて改むるに憚る事勿れだ。
なま長いこの大小、いつその事打ち切つてくれうわい。

修理　すりや、その大小を

五郎　まツこの通りに打ち切るぢやで。

ト刀を抜き、大小の鞘寸法を定めて切つて捨て、刀を鞘に納める。刀引きの抜き身、鞘より切尖四ヵ寸出るを見て

南無三、よい程に鞘は切つたが、身が長くて出しやばる。エヽ、忌々しい。

ト云ひ〳〵兩腰とも差して

この切ツぱづしは

ト兩手に取つて

よい〳〵、こいつ蠟燭入れと出かけう。

ト袂へ入れ

さて大分腰が輕くなつた。コレサ、長司、左近、なんとこれでよいか。見てくりやれ〳〵。

ト長司、左近が鼻の先へ、件の鞘より出でし切尖を、わざと突きつけ、大小ひねくり廻す。兩人迷惑なこなし。

大膽を初め、お身達も、これでよいか。玄蕃も見てくれ。これでよいか〳〵。

ト皆々の鼻の先へ當るやうに振り廻す。皆々彼方此方と顏をよけ、鼻を押へて

玄蕃　ア、コレ〳〵、三輪どの、其やうに振り廻してもらつては、我れ〳〵が迷惑。

一學　顏も鼻も、堪るものぢやない。

藏八　どうぞもう、その大小を取措いて

皆々　外の大小と差し替へて下されい。

五郎　すりや、お身達、この大小が迷惑なか。

皆々　甚だ迷惑に存ずる。

五郎　よいワ。それ程迷惑なら、先づこの大小は取措いてやらうわサ。

皆々　それは大慶に存じまする。

五郎　家來ども、用意の大小持て。

侍ひ　ハア。

ト袴股立ちの侍ひ、大小を持ち出て、五郎左衞門に差出す。五郎左衞門、件の大小を差し替へて、鐺の切つたる大小を家來に渡す。家來持つて入る。

五郎　これでようござるか。

皆々　安心仕つてござりまする。

ト云ふ顏を眺めて

五郎　フヽヽ、ハヽヽ。ハテ、よい氣味であつたな

ア。

向う　勅使のお入り。

信雄　思ひも依らぬ勅使のお入り。

修理　いづれもお迎ひ。

皆々　ハア、。

ト皆々威儀を正す。五郎左衞門、煙草盆提げ、平舞臺上の方より、よき所に坐る。

修理　お勅使これへ

皆々　お入り下されませう。

ト管絃になる。ト向うより萩坂主計頭、着付け上下にて、左の拳に青陽の鷹を据ゑ、出て來る。後より上下の侍ひ、とまり木を持ち出る。この後より瀬川采女、着流し大小にて、悄々と附き出る。主計頭花道よき所に立ちとまる。

信雄　ムウ、勅使と云ふは。

主計　關白兼房公の御內、萩坂主計頭即ち勅使。

采女　アイヤ、主計頭さま、何卒拙者のお願ひを。

主計　途中の願ひ、殊に身に科ある其方。

采女　すりや、如何やうに申しましても、

主計　勅命相濟んだその上にて、

采女　お聽き屆け下さりまするか。

主計　先づそれまでは、控へて居やれ。

采女　エヽ、有り難い。

ト主計頭、威儀を正し

主計　勅使なれば、

皆々　先づ／＼あれへ。

主計　然らば、上座御免。

トまた管絃になつて、主計頭靜々と上座へ通り、床几にかゝる。上下侍ひ、主計頭が側へとまり木を持つて行き、よき所へ直し、下へ下りる。采女は橋がゝりの末座に控へ居る。皆々、見得よく居並び

信雄　して、勅使の

皆々　趣きは。

主計　勅使の趣き餘の儀にあらず。その仔細は、即ちこの據へし青陽の鷹、元この鷹は明朝より、信長公へ獻じたる、青陽の鷹の不思議には、その飼ひ主の心に逆意の氣ざしあつて、一言にても、邪まなる詞を出せば、忽ち飛び去つて、形を隱す稀代の鷹。明智光秀只管に所望せしゆゑ、下し置かれ、光秀本國丹州へ持歸りしところ、信長公を討たんと、本國にて軍評定せし時、この鷹自づと

明智が手を離れ、何處ともなく飛び去るに、果して本能寺にて、信長公を討つたる逆意の光秀。心汚れたる者の手にとゞまらぬ靈鳥、その後禁廷へ飛び來り、卽ち大內に飼ひ置れかしところ、この度小田家家督相續につき、信孝、信雄、三法師、この三人の中、いづれなりとも、家督相續の方へ、下し置かるゝ靑陽の鷹、まつた鷹野は、唐土酒の君より始り、古へは公卿、殿上人の遊びとして、右の拳に鷹を据ゑ、又その後武門に備はつてより、左の拳にこれを据ゆる。それゆゑこの度の勅使は、武門の某に命じ給ひ、持參なしたるこの鷹は、柴田修理介、貴殿へ下し置かるゝ間、早く頂戴召されよ。

修理　すりや、信長公御秘藏の鷹を某に。

主計　小田家出頭の貴殿、この靑陽の鷹をよく預かり、いづれなりとも、家督相續の公達を、守護いたせよとある勅諚。

修理　すりや、その飼ひ主の心を知つて、善心なれば

主計　自然となつく。

修理　惡人なれば

主計　おのれと飛び去る。

修理　穢れ不淨の心を嫌ふ靑陽の鷹。

主計　希代の名鳥。

ト鷹を差出す。

修理　確かに預かり奉る。

ト鷹を受取り、とまり木へ鷹を据ゑる。

主計　從つて小田之助信雄へ勅諚。

修理　ハア。

ト平伏する。

主計　去る年、本能寺亂軍の砌り、雄獅子の御判、蛙聲丸の一振り紛失のところに、又々一昨日、殘る雌獅子の御判、軍用の黃金まで、奪ひ取られしは、其方が誤まり。この三品の寶、軍用の黃金もろとも、近日大德寺にて、法事執行終りまでに、キッと詮議仕出し、差上げられよ。先づ差當りて、五色の蔦、今日受取り、立歸れよとある勅諚。イザ、五色の蔦、これへ出し召されい。

修理　サア、その五色の蔦も

玄蕃　紛失いたしてこの場にござらぬ。

采女　イヤ、その申し譯は、この采女。

トつか／＼と眞中へ來て、腹切らうとする、この前より、園菊、後へ出かけ居て、この時ツカ／＼と出る。

園菊　コレ、待つて下さんせいなア。

ト釆女に取りつき止むる。皆々園菊を見て

五人　ムウ、この女は。
玄蕃　九條の傾城。
五人　ヤア。
玄蕃　瀬川釆女が放埓の根ざし。
左近　五色の蔦を勅使へ渡せ。
釆女　その申し譯に。

ト また刀に手をかける。

園菊　コレ申し。

ト止むる。

玄蕃　なぜ切腹いたさぬ。
園菊　イ、エ、なんぼうでも。
四人　蔦の申し譯は
釆女　どうでも。

ト切らうとする。

園菊　イ、エ。

ト止むる。

玄蕃　切腹せぬか。
園菊　サア、
五人　蔦を出さぬか。
園菊　サア、
皆々　サア〱〱、
皆々　なんと。
五郎　イヤ、蔦はある。
皆々　ヤア。
五郎　五色の蔦は詮議して、おらが手にある。
園菊　エ、。
皆々　ドレ、その蔦拜見いたさう。
五郎　オ、、見せるワ。

ト舞臺の眞中へ出る。

家來ども、五色の蔦を持參しろ。

侍ひ　ハア。

ト股立ちの侍ひ、蔦の箱を三方に載せ持ち出る。五郎左衛門に渡し、直ぐに入る。

五郎　サア、これこそ唐土より渡つた五色の蔦だ。
長司　ムウ、すりや、その箱が五色の蔦とな。
五郎　如何にも
玄蕃　ドレ、拙者が改めませう。

ト玄蕃、ツカ〱と行く。箱へ手をかける。五郎左衛門止めて

五郎　勅使へ御覧に入れる大切な五色の蔦。われ達に取次ぎ頼まうか。慮外な奴の。

左近　然らば、この片山左近が

ト左近、箱へかゝるを拂ひのけ、玄蕃又かゝるを、兩方へポン〳〵と拂ひのけ、箱の蓋を取ると、内より紙にて拵らへたる五色の蔦を出し、キッと見得になる。

左近　ヤア、これは。

五郎　即ちこれが五色の蔦だ。

左玄　アノ、紙で拵らへたこの蔦を。

長司　イヤ、子供たらしの紙細工を以て

玄蕃　お勅使を嘲弄するのか。

大膳　よもや云ひ譯には

皆々　なるまい〳〵。

五郎　高が五色の蔦は、唐土の草木。その唐人の重寶を、天子の叡覽に供へるには穢らはしい。そこでおらが工風の紙細工だ。この蔦を叡覽に供へるが、神國に相應の五色の蔦。これで事の濟む事だ。

長司　イヤ、一旦奏聞せし五色の蔦。

左近　紙細工を差上げては、違勅も同然。

皆々　後日のお咎め、何と召さるゝ。

五郎　ハテ、もし後日にお咎めあれば、五郎左衞門が皺腹一つ。お身達が存じた事でない。すッ込んで居やれサ。

長司　イヽヤ、それでは勅使の表が

皆々　立ちますまい。

主計　イヽヤ、相立つ。

皆々　なんと。

主計　五色を彩る紙の照葉。外國の穢れを淸むる天晴れの工風。勅使に立つたる萩坂主計頭、天機よろしく奏聞いたすであらう。

皆々　イヤ、それでは。

主計　勅使を差措き出過ぎた裁配。

皆々　サア、それは、

主計　控へ召されい。

玄蕃　よいワ。五色の蔦は相濟んでも、濟まぬは信雄どの、大切な雄獅子の御判。

左近　御寶の塔に籠め置かれし軍用の黄金。

玄蕃　盜み取られしとばかりでは濟みますまい。

三人　サア、この申し譯は

皆々　如何でござるな。

主計　小田之助信雄は勅勘。

信雄　ナニ、某を勅勘とは。
五郎　ハア、理非明白の勅諚。こりや斯うありさうなものだ。
信雄　五郎左衛門、そんなら其方も、この信雄が
五郎　追放は望む所だ。
信雄　ヤア。
五郎　信孝どのには、一徹にて心猛く、こなたは放埒惰弱にて、四海を知る器でない。さるに依つて、三法師どのに、小田の家督を相續が、四海泰平。なんぼう預かり君でも、放埒なれは追放仕る。これ、依怙贔屓なき某が潔白。
信雄　そんならどうあつても。……ハア。
　ト俯向く
五郎　オヽ、さぞ當惑でござらう。コレ、和子。
　ト件の頭巾を出して
この頭巾は、先君より拜領なれども、これをこなたへ讓り申す。流浪の身は何かにつけ、無念口惜しい。辛抱せねば、紛失の寶は尋ね出されぬ。必らず〳〵短氣を出さぬやうに、父御の形見だ、大切にさつしやれ。
　ト頭巾を信雄へ渡す。信雄取つて戴く。

釆女　五郎左衛門どの、何卒私しも信雄さまもろともに、御追放下さりませう。ならば、せめてお供が致したう存じます。
五郎　イヤ、その願ひは叶はぬ。
釆女　すりや、お供のお願ひは。
五郎　生れついて、女難と云ふ病ある瀬川釆女。
釆女　エヽ。
五郎　大切な和子のお供は、叶はぬ〳〵。
釆女　すりや、この身の病は。
　ト園菊を見て
園菊　エヽ。
釆女　いま聞く通り、瀬川釆女が病の根を絶つて、誠の武士に本腹するわいなう。
園菊　成る程、得心しましてござんす。釆女さん、さらばでござんす。
　ト釆女が刀に手を懸ける。五郎左衛門止めて
五郎　マア、死ぬるに及ばぬ。
園菊　イエ、釆女さんの禍ひなれば。
五郎　よいワ。左程に思はゞ、死に勝る役目を申しつける。
釆女　ムウ、死に勝る

園菊　御用とはえ。
　ト、五郎左衞門、件の鞘の切れを出し
五郎　こりやコレ、最前切り折つた大小の鞘。刀は釆女、差添へは其方。
　ト兩方に渡す。
釆女　すりや、これを私し共へ
園菊　お渡しなされた
兩人　お心はえ。
五郎　その鞘を渡した謎の心、兩人ともに、とつくりと判じて見よサ。
釆女　すりや、この謎を
五郎　解き負せたら、それにましたる功はないぞよ。
園菊　そんなら信さんのお供にまさる
五郎　拔群の忠義になる。
二人　そんなら次へ立つて
五郎　工風をせろサ。
園菊　ハア。
　ト釆女、園菊を連れ、橋がゝりへツイと走り入る。玄蕃この體を見て
玄蕃　ハテ、跪くワく。これから追放の段ぢや。サア、信雄どの、キリく立たつしやれ。よいワ、立たれずば、幸ひのこの杖で。
　ト件の杖を取つて、信雄を追ひ立てようとする。五郎左衞門、玄蕃が振り上げた杖の手を止めて
五郎　玄蕃、わりや何する。
玄蕃　ハテ、阿房拂ひに割り竹はお定まりの道具、その割り竹代りにこの杖で、百杖打つて追ひ拂ふのが追放のお定まり。
五郎　成る程、追放のお定まり。百杖打つとは、こりや、理窟だわい。
　ト杖を引ツたくり、玄蕃をなぐる。
玄蕃　こりや、身共をなんでぶたッしやる。
五郎　なんでぶたら。この杖で斯うぶつのサ。
玄蕃　コレサく、この玄蕃、何も百杖打たるゝ科はないわい。
五郎　如何にも科はない。
玄蕃　それに又
五郎　意見の杖だ。
玄蕃　意見の杖とは。
五郎　この杖は、信長公より、五郎左衞門が拜領の杖だ。

それを猥りに手をさへる宅間玄蕃、無體法外を誡しめの
爲、この杖で、かう〳〵打ち擲ゑる、意見の杖だ。
ト散々叩く。

玄蕃　ムン。
ト反り打つ。

五郎　これも形見だ、持つてござれ。
ト杖を信雄へ渡す。

長司　して、信雄どのを追ひ拂ふ

皆々　警固の者は。

女皆　私しどもが仕りまする。
ト奥より柏手、白妙、千草、木末、渚出る。

主計　某も勅使の役目相濟む上は、この五色の蔦、叡覽に
供へ奉らん。

五郎　天機よろしく願み申した。

主計　萩坂主計頭。その儀に於いて粗略ない。柴田どのに
は、その青陽の鷹をよくなづけ、小田の家督相續の儀を。

修理　委細承知仕る。

信雄　そんなら皆の者。

女皆　御前樣。

五人　お勅使御苦勞。

主計　三輪どの。柴田どの。

修理　萩坂どの。

三人　おさらば。
ト合ひ方になり、主計頭を先に立て、花道へ行く。後
より信雄、右の杖頭巾を持ち、女中皆々後に付く。向
うへ入る。五郎左衛門、信雄の後を見送り、こなしあ
つて、

五郎　なんと柴田どの、貴殿とても某も、預かり君を追
ひ拂ふも、小田の天下を、三法師君へ讓り、四海泰平に
納めたき存心。ハテ、よく符合いたしたな。

修理　ムウ、すりや柴田が本心を

五郎　よッく存じ罷り在る。

修理　互ひに預かり君を見限るは

五郎　三法師どのを世に立てたさ。

修理　云はねど、聞かねど、

五郎　貴殿も、

修理　こなたも、

五郎　忠義の魂ひは一つ。

修理　三輪どの。

五郎　柴田どの。

修理　ハテ、思ひ合うた
五郎　本心で
兩人　ござつたなア。
奴二　下がれ〱。
ト小谷、つか〱と出る。奴二人附き出る。
小谷　ハイ〱、御免なされて下さりませ。
奴　下がり居らう〱。
小谷　ハイ、私しはちと逢ひたい人が。
奴　胡亂な奴の。下がれ〱。
小谷　イヤ、私しは、づッと遠國の者でござりまする。お許しなされて下さりませ。
奴　御前へは叶はぬ、下がれ〱。
小谷　ハイ〱。
ト本舞臺へ行かうとする。玄蕃小谷を突きのけ〱
玄蕃　此奴、見苦しい在所者、大切な場所へつか〱と、慮外な奴の。
小谷　ハイ〱、私しが尋ねまするは鷹匠の
ト云ふうち修理介を見て
ヤア、こちの人。
ト云はうとするを玄蕃また突きのけて

玄蕃　ナニ、こちの人とは、うぬが男がどこに居る。
小谷　イヽエ、お前の知つた事ぢやない。退かしやんせ。
ト玄蕃を引退け、修理介の側へ行く。顔を見て
オヽ、矢ッ張りさうぢや。こちの人。庄助どのぢや〱。
ト喜ぶこなし。修理介手を組み、ヂッとこなしあり。
皆々不思議なこなし。
オヽ、嬉しや。この年月、お前に逢ひたい〱と、ほんにモウ〱、祈らぬ神佛は無かつたわいなア。そのお庇で、どうやら斯うやら、いま廻り逢うて、嬉しうございんす。わしや餘り嬉しうて、嬉し淚が
トちよつと泣いて
モウ〱お前に逢うたら、何も云ふ事はござんせぬ。直ぐに在所へ連れ立つて行きます。サア、ござんせ、ドレ、わしが手を取つて
ト云はうとするを玄蕃また引退けて
玄蕃　此奴、わりや氣狂ひぢやな。
小谷　アイ、成る程、氣狂ひのやうに、わしやなつて、方方を尋ねたわいなア。
玄蕃　そりや何者を。
小谷　アノ鷹匠の庄助どのを。

玄蕃　此奴、慮外の奴の、小田家の出頭、柴田修理介どのを、鷹匠の庄助とは何の囈言。

小谷　ムウ、そんなら柴田修理介と云ふは

玄蕃　卽ち身が御主人サ。

小谷　そんなら、アノ庄助どのが。

玄蕃　又々庄助とは、何の囈言。

小谷　さう聞いたら猶以て、爰には置かれませぬ。サア庄助どの、わしと一緒に在所へ戻つて下さんせ。エヽ、、此やうに云うても物云はしやんせぬは、どうでもわしが否になつたか、愛想が盡きたかいなア。

トちよつと泣く。

そりや胴慾ぢや庄助どの、なんぼ遠國に住み馴れても、見事貞女兩夫に見えず、殿御を大切にする事を、なんの忘れてようござんせうか。あの堅苦しい父さんの目顏を忍び、云ひ交したこなさん。母様のお情で、女夫になつたその時の嬉しさ、間もなうこなさんが、云はしやんすには、さるお大名へ鷹匠の御奉公にありつく契約、卽ち直ぐにお目見得すると、火急な話し。マア、待つて下さんせと、止めても止まらぬ日頃の氣質。奉公の先はそんぢよそこと名も所も云ひもせず、ついと出てからは、梨礫も便りは聞かず。父さんはお腹立ち、母様のお嘆き、聞いて居るわたしが辛さ。今日は便りがござんせう、明日は文でも來ませうと、執成し云うたり、泣いても見たり、丸五年が間、問ひ訪れもさしやんせぬ、胴慾なこなさんでも、わしや大事の男ぢやと思ふに依つて、母様に呑み込ませ、お前を尋ね國を出て、あそこに一月水仕奉公、爰ではお物師、彼處では、お腰元よお髮上げと、女子の手に叶ふ程の渡り奉公、女陸尺とまで姿を變へ、尋ねても知れぬこそ道理、小田の出頭柴田どのがわたしが夫鷹匠の庄助どのでもあらうとは、ほんに夢見た今日の出會ひ。モシ、此わたしが形を見て下さんせ。在所模樣の垢づいて、いつ取上げし事ぢややら。髮も涙もはら／＼と、その身は綾の重ね着して、大勢の上に立つ、御出頭ぢやの、御家老のと、もてはやした館の御普請。斯う緩やかなお暮しに、在所の事はどこへやら、あんまりつれないお心ぢやと、思へば思ひ廻す程、ほんに胴慾でござんすわいな／＼。

ト大泣き。修理介矢張り手を組みヂッとこなし。五郎左衛門皆々顏見合せ、吐息ついたこなし。長司、左近藏八、皆々顏見合すこなしあつて

長司　ハレ、思ひも依らぬ柴田どのゝ身の上。尤も信長公の上意に叶ひ、鷹匠より經上がり召された儀は、よく存じ罷りあるなれども、現在女房舅を振り捨て、その身一人が榮華を極むるとは、ハテサテ驚き入つた、誠の武士でござるよなア。

左近　イカサマ、眞柴久吉どのは、草履摑みより小田家の三老と呼ばれ、その隨一たる柴田どのは鷹匠。ハレ、揃ひも揃つた、成り上がりのお大名でござるよなア。

大膳　我れらがやうに、筋目正しき者はへり下り

一學　下樣が上に立つとは

藏八　世は逆樣の盛衰で

皆々　ござるよなア。

五郎　ハテ、サテ、どれも無益の舌の根動かし召されるな。

皆々　ぢやと云うても。

五郎　ハテ、年寄れば物事に退屈仕る。ドレ〳〵、暫時休息仕らう。いづれも、身共と共に奥へ來て、休息さつしやれ。

皆々　イカサマ、左樣仕らう。

五郎　玄蕃、案内しやれ。

玄蕃　畏まつてござりまする。

ト琴唄になる。五郎左衞門皆々こなしあつて奥へ入る。あと合ひ方になる。修理介こなしあつて、ズッと立ち、行かうとする。小谷、長袴の裾に取りつき

小谷　コレ、待たしやんせ。そんならどうあつても、元の女夫には、ならぬ心でござんすな。

修理　一旦離縁したる女、未練な奴の。

ト長袴にてお谷を蹴のけ、奥へ行かうとする。お谷キツとなつて

小谷　叛逆人待つた。

修理　ヤ、なんと。

ト振り返る。小谷キッと詰めかけ

小谷　信孝さまのお行くへも尋ねず、三法師さまを小田の家督に供へると、誠らしうこの旅館の普請まで、幼君を大切に思ふ柴田と心許させ、つれ〴〵の諸大名共に、深い企みの奥御殿。

修理　なんと。

小谷　コレ、庄助どの、こなた樣を柴田とは、今の今まで露知らず、來て見て愕り、こなさんの出世。小田家の出頭、威勢を憎んでの事か、但しは誠か、柴田修理介は、小田家を押領せんとする兆あるとの、噂まち〳〵。その

叛逆の思ひ立ちがある故、わたしら親に、まさかの時に難儀さすまい爲、無得心にさしやんしたは、却つてお情の離別でござんすか。そりや聞えませぬ。善であらうが、惡であらうが、夫に附くが女房の誠。なぜわたしにもお前の本心、打明けては下さんせぬ。ハテ、叛逆なら、女でこそあれ共に叛逆。もしも事成就ならず、お前が木の空へ登らしやんすなら、わたしも共に登る心でござんす。コレ、子を生むばかりが、女房の役ぢやござんせぬわいなア。

ト泣く。修理介こなしあつて

修理　すりや、善惡共に夫に隨ふ所存よな。

小谷　アイ。

ト顏上げるを、修理介チッと小谷の顏を打守り、こなしあつて

修修　我が本心を語つて聞かさう。

ト大小入りの好みの合ひ方に成り、修理介、とまり木に据ゑある鷹をよき所に直し置き、押下つて鷹に平伏する。小谷この體を見て、こなしあつて

小谷　この體は。

修理　これこそ、信長公の御秘藏青陽の鷹。この鳥その飼ひ主の心に逆意あつて、邪の詞を致せば、忽ち飛び去る希代の鷹。今日某に下し置かれしは、コレ叛逆の罪なき證據を、先君信長公の御意に叶ひ、鷹匠より取立てにあづかり、次第に立身して、いま大老職に經上がりしも、これ皆先君信長公の御厚恩、仇疎かになりがたし。勝重の胸中に叛逆の兆なき事は、我が君ならでは御存じないわい。

小谷　そんならお前も心に

修理　神明佛陀に誓ひをかけ、叛逆の兆はない。

小谷　オヽ、出かしやんした。流石はこちの人と、云ふに云はれぬわたしが身の上、どうぞ元の通りの女夫に

修理　誓ひを立てよ。

小谷　誓ひとは。

修理　善惡ともに、夫の詞に洩れまじと、いま其方が一言。その詞に相違ないといふ誓ひが見たい。

ト小谷ちよつと思案して「さうぢや」と頷き、藁束より口明けの一腰を出し

小谷　夫の詞に從ふと云ふ、わたしが誓ひ。

ト自害せうとするを、修理介止めて

修理　待て。一命を捨てゝ誓ひが立つか。

小谷　アイ。お前の誠ある心を見屆け、元の通りの女夫ぢやと、云うて下さんしたら、例へ死んでも、わしや本望でござんす。ぢやに依つて。
修理　出かした、心底聞き屆けた。
小谷　そんなら、いよ〳〵元の通り。
修理　イヤ、今はならぬ。
小谷　エヽ。
修理　時節を待て。
小谷　時節を待つて、その詞に違はぬやうに。
修理　柴田が誓ひは、コレ、この
ト紫色の指皮を出し、はめて、件の鷹を左りの手に据ゑ。
靑陽の鷹は卽ち信孝どの、お行くへ尋ね、再び柴田が拳に、まツこの如く、守護なす折を待つて
小谷　夫婦の緣の
修理　「はしたかの、野守りの鏡見てしがな。
小谷　思ひ思はず餘所ながら見ん。」
修理　いま詠みしは、野守りの水鏡。
小谷　水も洩らさぬ
修理　其方が願ひを
小谷　どうぞま一度。
修理　女房ども。
小谷　こちの人。
修理　マア、それまでは
小谷　このお屋敷の
修理　腰元同然。
小谷　アイ〳〵。
ト嬉しきこなし。
修理　次に立つて休息いたせ。後に逢はう。
ト唄になる。修理介、鷹を手に据ゑ、奥に入る。小谷ちよつと天を拜して、橋がかりへ走り入る。ト奥より長司、左近、大膳、一學、藏八、出て皆々舞臺に出る。
長司、眞中に立つて
長司　いづれも、柴田が本心
左近　如何にも、とくと
皆々　承りました。
長司　彼奴、逆心の兆ありと仄の取沙汰。さるに依つて、三輪五郎左衞門と申し合せ、某小田家を亡ぼす逆意ある體にもてなし、柴田に近寄り、彼れが底意を探りしところ、叛逆の兆は少しもなく、小田家を守り立てる本心顯

はれ、貴殿達もさぞ安堵でござらう。

左近　仰せの如く、この片山左近も、わざと小田家を滅亡させるなぞと、逆心の體に見せ、彼奴が本心窺ふところに、以ての外なる柴田が實心。

大膳　今の如く、忠臣の魂ひを聞く上は、

左近　急ぎ途中まで出迎ひ。

大膳　柴田が本心、久吉どのに言上して

左近　三法師君にも御安堵いたさせ

大膳　一刻も早くこの旅館へ

皆々　御供申し奉らん。

長司　如何にも。某は、粟田口まで出迎へん。

皆々　我れ〱はお乘り物まで

長司　急いで君を。

皆々　ハア。

長司　ござれ。

ト唄になり、皆々橋がゝりへ走り入る。後より長司靜靜と入る。暮れ六ツの鐘鳴る。ト橋がかりの障子屋體より、釆女、手燭を點し出て來る。後より園菊窺ひ出る。

釆女　最前三輪どのが下されし刀の鞘、忠義になると仰しやつたこの謎。

ト刀の鞘を出して居て

ハテ、何となる。

ト思案のこなし。

園菊　釆女さま。

ト側へ行く。

釆女　園菊。

園菊　まだ謎が解けぬかえ。

釆女　さう云ふ其方は。

園釆　わたしもまだぢやわいなア。

釆女　其方へも、わしへも、切り折つた鞘を渡さつしやつた三輪の心底。

園菊　なんのマア、此やうに難かしい謎を掛ける事はござんせぬ。ツイ、斯う〱したら忠義になると、云うて聞かしてくれたがよい。

釆女　わざと心底打明けず、この鞘で工風せよとは

園菊　ほんに辛氣な

釆女　様子ありげな

兩人　事ぢやよなア。

ト手燭を眞中に置き、兩人思案のこなし。この時五郎

五郎　左衛門、奥より出かけて「年を經て又越ゆべしと思ひきや、命なりけり小夜の中山」。

釆女　エ、。

ト五郎左衛門方を見る。

五郎　東海道島田金谷の境、中山寺の領地を、往古より小夜のとも、又さやのともいふ。

釆女　「年を經て」

園菊　「又越ゆべしと」

兩人　「思ひきや、」

五郎　「命なりけり」

兩人　「小夜の中山」。そんならこの

ト兩人一緒に鞘を出す。五郎左衛門、兩方を取つて

五郎　「命なりけり

ト兩手にて二つの鞘を握り砕く。

さやの中山」。

ト兩方へ抛つてやる。兩人取つて見て

兩人　誠にこの鞘の

ト鞘の中より書き物一通づゝ出るを、兩人取り、披き見て

釆女　武士は守義信、

園菊　女は護貞節。

兩人　これは。

五郎　武士の義信は主君の爲に命を捧ぐる。

釆女　なんと。

五郎　女の貞節は、夫と共に命を捨つる。

園菊　エ、。

五郎　この心を籠めし鞘の謎。

兩人　そんなら二人は。

五郎　命を的に窺ひ見よ。

釆女　命を的に

園菊　窺へとは。

五郎　柴田勝重が忠義の心底を聞き、諸大名は歸伏すれども、この五郎左衛門一人はその意を得ぬ。彼奴、口に甘き蜜を塗り、諸大名を皆彼れが辯舌にて蕩し込み、誠小田家に忠義の體を見せ、三法師君をこの旅館に一宿させ、如何なる計略を計りあらんも心元なし。差當つてあの上段の間、この間新たに建てし普請の有樣、如何にしても心得ぬ。サ、爰が即ちソレ、その一書の如く、武士は義信を立て、女は貞節を守るとは、かゝる時を申すぞよ。

采女　そんなら私しどもが
園菊　あの、上段の間へ忍び入り
采女　もし落し穴の計略でもないか。
園菊　釣り天井とやらいふ、怖い事でもあるまいか。
五郎　兩人が不義放埒の證にもてなし
采女　とくと試したその上にて
五郎　もしや企みの落し穴。
采女　劍にこの身を貫かれ
五郎　即ちそれが武士の義心。
園菊　わたしも共に冥途の供。
五郎　それが即ち女の貞節。
采女　成る程お役に
兩人　立ちませう。
五郎　出かした。……ア、とは云ふものゝ
ト兩人を見て悄ろゝこなし。采女園菊も顏見合せ、愁ひのこなしあつて、采女キッと氣を替へ
采女　イヤ、御未練な。
ト云ふに、五郎左衛門キッとなつて
五郎　早く。
兩人　ハツ。

ト兩人辭儀する。五郎左衛門頷きる。チヤンと唄になる。五郎左衛門ツイと奥へ入る。あと合ひ方になり、
兩人顏見合せ
園菊　采女さん。
采女　園菊。
園菊　もしもの事があつたらば
采女　これがこの世の顏の見納め。
ト互ひに手を取り交し、ヂッと顏見合せて、よろしく愁ひのこなしにて、また采女氣を替へ
隙どつては不忠。園菊おいでや。
ト手燭を傾けし園菊が手を取る。園菊顫ふ。この時上段の障子引拔きにて、引いて出る。内に、修理介、衣裳羽織にて、大きな褥の上に坐り居る。此うち始終面白き合ひ方にて、采女、園菊が手を引き、そろ／＼二重舞臺へ上がる。園菊采女顫ふ。怖々差し足にて、上段の間の間の障子をソッと開ける。修理介、内より窺き見て、間の敷居に行く。暗がりにて采女が手をヂッと取る。采女慄りする
修理　何者ぢや。
ト云ひながら采女が手を持ちながら、引廻して兩人の

眞中へ入る。釆女、園菊、この聲に恟りして

釆女　イヤ私しは。

　ト云ふ聲を聞きつけ

修理　其方は釆女でないか。

釆女　ハイ。

　ト手を捕へられながら顫ふ。修理介、釆女が手を持ちながら、さあらぬ體にて、謠にて

修理　「されどもこの人、夜はくれども」

　ト謠ひながら、釆女を上段の間へ突き飛ばす。釆女、内へこけ込み、蒲團の上へこけかゝる。この音にて、園菊も恟りして行かうするはずみに、修理介に行き當る。修理介、園菊が手を捕へる。園菊また顫ふ。修理介また謠にて、

「ある夜の睦言に、」

　ト唄ひながら園菊を引廻して

「苧環に針を付け」

　トまた同じく園菊を上段の間へ突き飛ばす。園菊こけ込み、釆女の上へこける。兩人ヂッと取りついて

釆女　ヤア、園菊か。

園菊　釆女さま。

　ト兩人ぴつたり抱きつく。修理介こなしあつて

修理　「裳にこれを」

　ト小柄を上段の間の天井へ、手裏劍に打つ。仕掛けにて天井より、緞子の夜着。ふうはりと落ちて、兩人の上へ程よく着る。兩人、夜着より顔を出して

兩人　これは。

修理　柴田が工風の釣り夜着。

兩人　エヽ。

修理　心措かずと、よい夢見やれ。

　ト間の障子、しやんとさす。唄になる。正面の障子スッとさす。修理介こなしある所へ、玄蕃、鐵燈を持ち、窺ひ出る。

玄蕃　御主人。

修理　宅間玄蕃。

玄蕃　只今の樣子は。

　ト行かうとするを止め

修理　ハテ、コリヤ。

　ト小聲にて

　上段の間に如何なる計略もあらんかと、戀に事寄せ探る兩人。それゆゑわざと暗がりを幸ひ、取持つたは、彼れ

らが思案を、食ひ違はす身が工風。

玄蕃　天晴れ御思案。長司を始め諸大名、みな三法師を迎ひの爲、途中まで參つたれば、首尾よく三法師入來いたすでござらう。

修理　三法師を始め諸大名諸とも、計りおきたる我が密計に、落し入るゝは治定。日頃の大望、今月今宵成就なすか。ハレ、心地よやな。

トきつとこなし。少しドロ〳〵にて、奥庭より青陽の鷹、差し金にて、臆病口の方より修理介が上を向うに飛んで行かうとする。ト目早く修理介拔討ちにハッシと切る。鷹仕掛けにて二つになり、死んで落ちる。玄蕃、つか〳〵と行き、鷹を取つて

玄蕃　ヤア、こりやコレ、青陽の鷹。

修理　叛逆の詞を聞けば、忽ち飛び去る希代の鷹。

玄蕃　禁裡より下されし鷹を殺害あつては。

ト鷹を前の井戸へ抛り込む。

修理　ヤア、愚か〳〵。今宵のうちに大願成就、青陽の鷹を殺せしとて、何恐るゝ事のあらう。併し、千丈の堤も蟻の一穴より。只禍ひはせう〳〵の元のあり。最早普請成就の上は、大工どもを。

ト玄蕃に囁く。

修理　合點か。

玄蕃　心得ました。

修理　早く〳〵。

玄蕃　ハア。

ト唄になる。玄蕃橋がかりへ走り入る。修理介靜々奥へ入る。後合ひ方になり、上段の間より、采女を前へ廻し、しどけない體にて出て來る。後より閨菊、これも帶を結び〳〵、しどけなき體にて出て來る。采女こなしあつて

采女　太夫。

閨菊　采女さん。あの上段の間の樣子では。

采女　サイナウ、なんでも二人が命を捨てねばならぬと思へば、どうやら悲しうなつて、體が顫へて來て、上段の間へ入るまでは、とんと夢中で居たが、何事もないと思うたら、ア、嬉しやと心ゆるむと、がつくりと草臥れが出たわいの、

閨菊　サイナア、思ひも依らぬ釣り夜着とは、ほんに粹な仕掛けぢやわいなア。

トかふうち、橋がかりの障子屋體を開け

五郎　釆女。

ト云ふ聲に、闌菊帶を直し、下に居て

闌菊　五郎左衞門さま。

五郎　とくと試し見しか。

闌菊　上段の間には、何事も

兩人　ござりませぬ。

五郎　出かした。其方兩人が一命を的にかけて、吟味いたしたればこそ、事の樣子相知れた。この功に依つて見遁しくれる。

釆女　して、私しどもは。

五郎　この場を立退き、紛失の蔦の錦

釆女　詮議して取返さば

五郎　汚名も淸き瀨川釆女。

闌菊　そんなら私しは

五郎　釆女が妻女。

闌菊　エヽ。

五郎　夫を慕ひ、波濤を越したる女の操、無下にもなるまい。殊にこの女ゆゑ、高麗韃靼因みは切れて、確執となつたるゆゑ、日本へ攻め來る軍評定も打捨て、おのが遺恨に日を送るとの風聞。其方が手を離れ、この女もし高麗へ立歸らば、韃靼國へ相渡し、因みを結ぶものならば、由々しき大事。其方の緣組みは、まさかの時の人質。イヤサ、人に知らさぬ夫婦仲、隨分睦まじく添ひ遂げよ。

釆女　成る程、委細心得ました。

五郎　承知の上は

釆女　一時も早う。

五郎　心憎きは柴田の振舞ひ。

釆女　隨分と御油斷なう。

五郎　爰構はずと。

釆女　そんなら太夫。

闌菊　アイ。

五郎　行け。

ト五郎左衞門、障子さすと、唄になる。釆女、闌菊が手を引き、向うへ走り入る。　チヨン〳〵にて返し

右三間の間、欄間仕掛けにて在所屋根になる。正面の金襖、田樂返しにて赤壁になり、上の方一間佛壇になり、下の方一間、納戸口になつて、暖簾かけある。臆病口の上段の間、時代障子の前側引いて取り、

鐵八　世話障子竹屋體、橋がゝりの時代障子屋體、二重舞臺諸共に東へ引いて取る。うしろ藪垣になる。門に車付きにて、よき所へ突出す。右道具變る間、在郷唄にてよろしく道具納まる。

ト鐵八、平合羽、一本差し、脚絆にて、百姓大勢と一緒になり、向うより出て來る。

鐵八　貴様達大勢して、何事でごんす。

百一　サレバイノ、久吉さまのお通りで、道の掃除を仕りますわいの

百二　今夜は夜通しに村中が、傳馬に取られます。

百三　こなた、藤右衛門どのへ行くか。

百四　藤右衛門どのは、會所に居らるゝぞや。

トこんな事云うて居る。在郷唄にて花道の間に捨せりふ。皆々橋がかりへ入る。鐵八、門口へ入る。ト納戸より下女おため、下女の形、木綿やつし、前垂れにて出て來る。

ため　鐵八さんかいな。

鐵八　オヽ、おためか。

ため　お前はマア、久しう見えなんだが、どこへ行つて居なさつた。

鐵八　サア、おれも親仁は死ぬる、一家一門は、何のかのと吐かして寄りつかず、去年から下へ稼ぎに行つて居るが、二三日先から用があつて、上つたに依つて、ちよつと寄つたが、藤右衛門どのは達者なか。

ため　アイ、旦那さんは、隨分お達者で、今夜村方の寄合ひに行かれましてござんす。

鐵八　お娘のお豐どのは。

ため　奥に一人居てゞござんす。

鐵八　ムウ、藤右衛門どのは留守、お娘は一人奥にとは、うまいワ。

ため　エヽ。

鐵八　イヤサ、藤右衛門どのが戻られたら、ちよつと逢ひたいものぢや。

ため　もう追ツつけ戻つてござんせう。納戸で待つて居やしやんせ。

鐵八　オヽ、さうせうか。おため、茶漬一杯食はしてたも。

ため　アイ〳〵。サア、斯うござんせ。

ト合ひ方になる。鐵八、おため納戸へ入る。ト障子屋體より、お豐、絹やつし、振り袖にて、丸行燈を提げ、出て來て、あたりを見廻し、佛壇の下戸棚より、御所

文庫と硯箱とを出して、文庫上の巻き紙を出し文を書く。此うち納戸よりおため出かけ、これを見て

ため　コレ、申し、お豐さん。

ト大きな聲にて云ふ。お豊愕り、文を隠し

とよ　オヽ、おため、愕りしたわいの。

ため　お前、そこに何して居なさる。

とよ　わたしや、わたしや

ト文庫にある本を取つて

わたしや百人一首を讀んで居たわいなう。

ト外さぬこなし。おため側へ行き

ため　お豐さん、お前はマア、いつの間に、なぜ嘘つくやうにならしやりました。

とよ　コレイナウ、わしが何を嘘云うたぞいなう。

ため　それ〳〵、それが矢ッ張り。お前、書置して駈落ちする氣ぢやな。

とよ　ア、コレ。

ため　イヽエ、隠さつしやりまするな。この粟田口の大工、與四郎と、疾から懇ろしてござる事、わしやよう知つて居りまする。あの大工の與四郎、京に仕事に行くと云うて、今日で丁度三十日戻らぬゆゑ、てつきり京で色が出來たかと、この間からお前の物案じ。今宵旦那どの、留守を幸ひ、駈落ちして、與四郎を探すつもりと見た。コレ、申し、お家さんはお果てなされ、また旦那さんはお年寄りでもなけれど、女房を持たつしやりませぬは、お前がいとしさゆゑ、考へて、短氣なされますなえ。

とよ　おため、よう云うてたもつた。わしも父様のお腹立ちは悲しいけれど、餘り與四郎さんの事が案じられ、この書置を殘し、京都へ尋ねに行かうと、思うての事ぢやわいなう。

ため　サア、そりやお道理ぢや。けれど、そんな事なされたら、親御へ不孝、明日は旦那さんにお暇貰うて、京中を駈け歩き、尋ね出して參じまする。今宵一夜さのところ、マア〳〵辛抱なされませないア。

鐵八　イヤ、辛抱はならぬわい。

ト鐵八、納戸より飛んで出てお豊に抱きつゝ、お豊、おため、愕りする。この時橋がかりより鹽谷藤右衛門、鄕士の拵らへ、着付け羽織、大小にて、出て來て、門口に立ち、内の樣子を立聞きして居る。

ため　オヽ、鐵八さん、

とよ　愕りしたわいなア。

鐵八　何も驚く事はない。そさまには、我れら疾から惚れて居れど、まだ十二や十三では、間に合はず、丁度今は十六の、手入らず娘と思ひの外、もうそろ／＼と、うづかすな。云はゞ我れらが先役ぢや。今爰で、ツイ。

ト抱きつくを振り離し

とよ　エヽ、舌たるい鐵八さん、わしやそんな事は、否ぢやわいなア。

鐵八　なんぢや。否ぢや。否と仰しやれど馴染み深い。どうでもおれは馴染みだけ、否とは云はさぬ云はさぬ。

ト無理にお豊を取つて押へ、戯れかゝるをおため支へる。鐵八おためを蹴飛ばす。お豊「アレエ／＼」と跪く。よき所に藤右衛門ズツと入り、鐵八が首筋を取つて投げる。お豊、おため、藤右衛門を見て

ため　マア、旦那さん。

とよ　父さん。

藤右　娘、怪我はなかつたか。

ため　イヽエ、怪我所へは、さんじませなんだ。

藤右　何を馬鹿な、

ト云ふうち、鐵八起き上がり、藤右衛門に詰めかけ

鐵八　藤右衛門どの、なんで貴様はおれを取つて投げた。

藤右　おのれ、何用あつて、身共が内へ踏ん込んだ。

鐵八　ハテ、そりや一家ぢやに依つて。

藤右　どこへ。一家とは、野太い奴の、おのれと身共は従弟同士なれども、元來勝負事を好むゆゑ、一家一門愛想を盡かし、勘當して寄せつけぬ。すりやコレ、身共とも赤の他人。その他人の内へ、夜に入つて參るさへあるに、女子どもを手籠めにする、盗賊め、村方の支配する、鷹谷藤右衛門、引ッ括つて盗賊の刑に行はうか。茲な、大盗人めが。

鐵八　なんぢや。おれを大盗人ぢや。コリヤヤイ、親の讓りの田地田畑は、賭博の元手に賣り拂うたれど、ありや親の物は子の物、おれ次第ぢや。それになんで大盗人ぢや。ま一言云うたら、従弟同士とは云はさぬ。その頰桁切り下げてこますぞ。

ト一腰に手をかけ、きつぱ廻す、藤右衛門その體を見て

藤右　わりや、百姓の件でありながら、一腰を差いてきつぱ廻すか。マア、見事な拵らへ

ト鐵八愕りして、ちやつと一腰を隠す。

いつの間に、その一腰を求めたぞ。なか／＼百姓づれが

端下金で、求めらるゝ一腰とは見えぬ。定めし銘作であらう。イカサマ、其やうな一腰で、切らるゝは、侍ひ冥加に叶はうと云ふものぢや。サア、抜いて切ッかけい。盗人と云はれて料簡なるまい。サア、切れ。抜け〳〵。

ト せりかける。鐵八、いろ〳〵こなしあつて

鐵八　ア丶、コレ〳〵、誰れが抜かうと云つたぞいの。

藤右　いま其方が云うたでないか。

鐵八　口も辷れ、そんな事云うた覺えはごんせぬ。

藤右　すりや、如何やうに惡口せられても。

衛八　何ともない。

藤右　盗人と云はれても。

鐵八　嘘でもなし。

藤右　ハテ、張合ひのない。大盗人め。

ト 蹴飛す。鐵八こける。

とよ　もうようござんすわいな。

ため　堪忍しておやりなされませ。

藤右　イヤ〳〵、此やうな、盗賊を其まゝにして置くと、得ては村方の家尻切つたり。

ト 聞いて鐵八ムッとする。

背のぞき、小盗みから段々經上がり、後には、コレ

ト 鐵八が頭を持つて、ズッと突上げる。鐵八術ながり、足を爪立てる。

コレ、この首が、粟田口へ西向き。ハヽ、よい獄門面だわい。

ト 右のなりに表へ突き飛ばす。鐵八「うぬ」と行かうとするを、藤右衛門しやんと戸をさして

二人ともに奥へおぢや。

ト 唄になる。藤右衛門、お豊を連れ、おため後に附いて入る。後合ひ方になり、鐵八こなしあつて、

鐵八　騙りと惡口せられても、抜く事ならぬこの一腰。すんでの事に蛙丸を、召上げられうとした。京地でこれを持つて居るは危ないもの。一先づ大坂へふけつて、どめて置くが上分別。さうぢや。

ト 唄になる。こなしあつて向うへ走り入る。後合ひ方になる。向うより與四郎、手拭を頰冠りにして、走り出る。花道よき所にて立ちとまり、空を眺めて

與四　もう何時であらうぞ。門番を賴んで、今夜の七ツまでに歸る約束。今出川から粟田口まで、息もせずに走つたが、アヽ、どうぞ首尾よく、お豐どのに逢ひたいものぢやが、マア、なんでも。

ト ちよこ／＼走りして門口へ來る。此うち奧より、お豊、忍び出てこなしあつて

とよ　父さん、堪忍して下さんせ。お前にも斷らず、わしや駈落ち致します。必らず後で、不孝者ぢやと、叱つて下さんすなえ。さらばでござんす。

ト 門口へ行き、戸を開ける。

與四　ヤア、お豊どのか。

ト ずつと入る。

とよ　與四郎さん、逢ひたかつたわいなア。

ト 抱く。

與四　逢ひたかつたは道理〻〻。わしも逢ひたいけれど、マア聞いて下んせ。今度京の普請は、大抵むづかしい細工ぢやごんせぬ。今日で恰度三十日程の間、晝は仕事で急がしく、夜は門を締めて、一人も外へ出さぬゆゑ、一夜さもつい戻つて、こなさんの顔見ることもならず、シタガ、喜んで下んせ。今度の普請を仕上げると、おりや大分金儲けするわいの。爰の下女のおためが云ふには、コレ與四郎どの、こなさまお豊どのと、女夫となりたくば、隨分金儲けさつしやれ、旦那さんの仰しやるには、町人でも大事ない、分限者の所へなら、嫁にやると、云はしやんしたと聞いたゆゑ、おのれやれ、金儲けして、お前を女房に貰はうと思うて、三十日が間、夜の目も寢ずに精出したは、お前を女房に持ちたいばつかりでごんすわいなう。

とよ　與四郎さん。嬉しうござんす。わたしを思うてそれ程までに、苦勞して下さんす志し。例へ死んでも忘れませぬ。エヽ、忝なうござんす。

與四　時に今門で聞けば、お前は親御に隱して、何處へやら行かんすさうな。夜夜中女子の一人、危ない。マア、何處へ行かんすのぢや。

とよ　サイナア、父さんに隱して、今夜わたしが出て行くは、お前を尋ねて、京へ行くのでござんしたわいなア。

與四　エヽ。

とよ　三十日餘りも、京へ行かしやんして便りもなく、餘り案じて、今夜駈落ちして、お前を尋ねて行くのでござんしたわいなア。

與四　でも、それ程までにわしが事を。

とよ　思はいでかいなア。お前もわたしゆゑに御苦勞を

與四　せいでかいの、女房ぢやもの

とよ　夫ぢやもの。

與四　お豐どの。
とよ　與四郎さん。
兩人　エヽ。
ト兩人ぴつたりと抱く。この時藤右衛門納戸より出て
藤右　不義者め。
ト云ふ聲に、慄りして與四郎、門口へ出ようとする。
コリヤ、動いたらぶツ放すぞ。
トきつと云ふ。
與四　ハイ。
ト顫へながら下に居る。お豐は「ハア」ト俯向き、下
に居る。
藤右　おのれ憎くい奴。身が支配地に住みながら、よくも
娘と不義いたしたな。コリヤヤイ、身共今こそ郷士なれ、
何卒娘は大身方へ嫁づけやうと、コレ、この如く、器用
に育てゝ置いたぞよ。それに、よくも娘に疵つけたな。
殊に夜に入つて忍び入る、盗賊同然の振舞ひ。生けては
置かれぬ。手打ちにする。サア、それへ直れ〳〵。
ト刀に手を掛け、詰め寄る。お豐あせる。與四郎、兩
手を上げて身を縮め
與四　アヽ申し、マア、お待ちなされて下さりませ〳〵。
成る程、娘御様と云ひ交しましたは、私しが惡うござり
まするが、何を隠しませう。爰なおためどのゝ云はれま
するには、お娘御様は身上のよい町人へ嫁入りさすると
仰しやつてござると聞きましたに依つて、マアどうぞ、
わたしも身上がようなりたい、金をたんと儲けたら、ど
うぞ、あなたの聟にしてもらひませうと思ふ矢先、今度
京の今出川、柴田さまの旅館を、御普請なさるゆゑ、卽
ちこの粟田口は柴田さまの御領分なれば、私しも名を指
され、參りました。ところに、私しに棟梁を仰せつけられ
ましてござりまする。ナニガ爰でこそ精出して、金儲け
をしたら、聟になれやうと、それを樂しみに三十日餘り、
あつちに滞留して、御普請もやう〳〵今日仕上げまして、
明日は金を貰ひ、歸るつもり。今宵一夜さになつて脱け
て參りましたは、三十日といふもの、内へも戻らず、ど
うやらお前の側では申し憎うござりまするが、お豐どの
にちよつとは逢ひたうもござりまする。戻り憎い所を、
門番を頼みまして、今宵七ツまでに去ぬる約束で參りま
した。私しが戻りませぬと、門番の衆がきつい難儀、外
の大工どもも迷惑いたしまするでござりませう。申し、ど
うぞ御料簡なされて、お歸しなされて下さりませ。申し、

お頼み申しますわいの〳〵。

ト手を合せ泣く。藤右衛門此せりふを聞き、こなしあろ。

とよ　申し、父様、何もあの與四郎さんの業ではござんせぬ。皆わたしが徒ら。元はわしが方から云ひ掛けましたのでござんす程に、どうぞ與四郎さんは堪忍して、去なせてあげて下さんせいなア。

ト泣く。

藤右　ヤア、その云ひ譯聞き届けぬ。例へ其方が云ひかけうが、身の支配に住む與四郎、只管辭退すべきを、先づ第一身共を踏み付けた致し方。殊に以て大枚の金子を以て聟になりたいなどと云へばとて、コリヤ、よく物を合點せよ。われが作料は一日が四兩三分でないか。それを三十日積つたというて何程の事。後先の揃はぬ、茲ない僞り者め。おのれ柴田どのゝ普請と云はば、大老の權に恐れて助け歸すと、高を括つたうぬが企み。今出川の旅館を普請などとは、まざ〳〵しい僞はり者め。

與四　イエ〳〵、僞はりではござりませぬ。大眞實でござりまする。今宵近江の安土から、小田の若君様に、大名衆が大勢附いて、彼の小田さまの旅館で、御滞留なされます。その若君様の寢さつしやる座敷の普請は、大抵むづかしい。アノ、イヤ〳〵、こりや大事の事ぢや。マアなんでもむづかしい御普請に違ひはござりませぬ。そこで御普請成就のお祝ひとござりまして、作料の外に大分お金を貰ひまする約束、微塵も違ひはござりませぬ。さらさら僞りは申しませぬ。

ト此うち藤右衛門こなしあつて

藤右　ムウ、すりや若君御一宿の座敷は、格別念の入つたる普請とな。

與四　ハイ。

藤右　して、その普請の様子は。

與四　サア、そりやどうも申されませぬ。

藤右　作料の外に褒美の金を取るとな。

與四　ハイ。

藤右　三十日餘りも普請の間

與四　一夜さも宿へは歸りませぬ。

藤右　それに拔けて歸つたは。

與四　お豐どのに、ちよつとなと逢ひたさに。

藤右　それ程までに、娘を思うてくれる志しに免じ、如何にも其方と夫婦に致してくれたいものなれど、そりや

叶はぬ。

與四　エヽ。

藤右　ならぬ事ぢや。われがなんぼう心を盡しても、鹽谷藤右衛門はな、粟田口、南山科、大塚、花山、觀成寺、五ケ村を支配する家柄、その傘に、見る影もないその日暮らしの田舎大工、取分け親共も定かならぬ、やう／＼二ケ年先から、この粟田口へ參つて、素性の知れぬ其方。所詮其方が望みは叶はぬ。この事はフッツリと思ひ切れ。娘も與四郎が事は、さつぱりと思ひ諦めてしまへ。

與四　そんなら、どのやうにお頼み申しても。

藤右　ハテ、くどい事を。

とよ　南無阿彌陀佛。

ト藤右衛門が刀へ手をかけるを留めて

藤右　待て、早まるな。

とよ　イエ／＼、放して下さんせ。父様、聞えませぬ、常常お前の云はしやんすのには、コリヤ娘、例へ女はその身より、遥かに劣つた夫を持つても、縁なれば是非に及ばぬ。その夫を大切に、貞女兩夫に見えずといふ教へを、必らず忘るゝなと、仰しやつた詞、忘りや致しませぬ。與四郎さまを退けて、外へ嫁入りする心はござりませぬ。それぢやに依つて、所詮願ひが叶はずば、いつそわたしは。

ト死なうとするを藤右衛門留めて

藤右　コリヤ、待て。すりや與四郎と女夫にせねば。

とよ　父さん、先立ちまする不孝、免して下さんせ。

藤右　マア、夫婦にしてくれう。

とよ　エヽ。

藤右　與四郎、聟に致すぞよ。

與四　そりやマア、ほんまでござりまするか。

藤右　なんの、身共が僞はり云はう。今聞く通り、娘が命に替へて、其方と夫婦になりたいと云ふ。それをなんと無得心に、思ひ切れよと、親甲斐に云はれうか。願ひを聞き屆けた程に、ソレ、與四郎と、随分睦まじう致せいよ。

とよ　アイ／＼、睦まじうせいでなんと致しませう。ナア、與四郎さん。

與四　それ／＼。ハイ、私しも随分あなたへ孝行に仕りませう。

藤右　オヽ、めでたい／＼。いつそ今爰で祝言の杯。幸ひこれに身が寢酒の銚子杯。身共が酌を致さうわい。

トあたりの銚子杯を、よき所へ出す、お豊與四郎喜ぶこなし。藤右衛門、佛壇を開き、三つ具足の鶴龜と、位牌を經机に乘せて、謠にて

藤右　「千秋萬歳の千箱の玉を奉る。」

ト兩人の眞中へ出す。

與四　これは。

藤右　一世一度の娘の祝言、有り合せたる佛壇の鶴龜は、夫婦の取りも直さず島臺の學び。この位牌は其方が母、祝ひ者が眞中で祝言さすれば、女房もさぞ喜び。サア娘、祝うて一つ飲みやれ。

とよ　そんならアノ、私しから。

藤右　祝言の杯は、其方から飲んで聟與四郎へ。

とよ　アイ〳〵。

ト嬉しがる。

藤右　ハテ、喜ぶ奴ではござるわサ。

トお豊、杯を取上げる。藤右衛門注いでやる。お豊飲んで下に置く。藤右衛門杯取つて與四郎へ渡す。與四郎喜び、杯戴く、藤右衛門注く。與四郎飲むまでに唄しまふ。後合ひ方になる。

サア、斯う祝言さす上は、聟舅の仲に、何も遠慮はない。

その今出川の普請とは、どの様子ぢや、ちやつと云やれ、どうぢや〳〵。

與四　イエ、その様子は。

藤右　聟舅になりたれば、氣遣ひはないと云ふに。

與四　サア、申したうはございますれど、どうも神文まで書きました事なれば。

藤右　すりや、神文まで認め

トこなし

與四　ハイ、どうもそれぢやに依つて。

藤右　こゝな、僞り者め。

ト繩かける。

とよ　コレ申し、父さま。

ト寄るを突きのける。

與四　こりやマア、どうなされます〳〵。

藤右　うぬがやうな僞はり者には

ト柱に括りつける。

とよ　申し、どうぞ。

ト支へに行くを引のけて

藤右　彼奴が生死は今宵のうち。

とよ　エ、

藤右　娘、來い。
ト無理に引ッ立て、ツイと納戸へ入る。
與四　コレナ、申し、コレ、何にも僞はりは申しませぬ。どうぞ神文書いたに依つて、云はぬといふに、無理な事ばつかり云つて、さうして何ぢややら、不義者めと云つて叱るかと思や、また祝言させて喜ばせて置いて、また此やうに縛つて、何の事やら譯が知れぬ。アヽ、もう七ッに間もあるまいが、屋敷へ去なにや、門番といひ、大工どもが難儀するであらうが、これは又ひよんな事して、來た事ではあるぞ。
ト投げ首する。この間始終合ひ方、奥よりお豐走り出る。
とよ　與四郎さん。
與四　お豐さん。
とよ　これはマア。どうせうぞいなア〳〵。
與四　ヤア〳〵。ありやもう七ツ。去なねば大勢の難儀と云ひ、おれが身の上。こりやマアどうしたらよからうぞいなア〳〵。
ト踠く。お豐思案して、與四郎が繩を解き
とよ　ちやつと去なしやんせ。
與四　それでは親御樣へ。
とよ　わたしがよいやうに云ふわいなア。
與四　そんならお前を頼みます。
とよ　合點でござんす。
與四　夜の明けぬうち。
とよ　早う行かしやんせ。
與四　さうぢや。
トおちよぼからげして向うへ走り入る。お豐見送り
とよ　コレ、氣を急いてこけさしやんすなえ。怪我して下さんすなえ。
ト云ふうち、藤右衞門上下を着し、願書を懷中に入れ、納戸より出る。
藤右　娘々、そちや爰に居るか。これから與四郎を連れて
ト見て、與四郎が居ぬゆゑ恟りして
娘々、與四郎が居ぬが、どうした〳〵。
とよ　與四郎さんは。
藤右　どゝゝゝ、どうした〳〵。
とよ　サア、それは、アノ。父さん、堪忍して下さんせ。
ト藤右衞門の刀に手を掛けるを留めて
藤右　マア、なんで死ぬる。與四郎が居ぬ譯を、サ、云へ

云へ。
とよ　サア、その譯は、今七ツが鳴つたゆゑ、今出川へ去なしやんせぬと、大勢の大工衆が難儀といひ、與四郎さんの身の上ぢやと云はしやんすに依つて、繩を解いて、今出川へ去なしましたわいな。
藤右　ヤヽヽすりや與四郎を。
ト向うへ駈け出さうとして、又立ち戻り
エヽ、親の心子知ずと、コリヤ、與四郎を今出川へ歸すと、直ぐに切り殺されるわい。
とよ　エヽ、そりやマア、何としていなア／＼。
藤右　コリヤ、ヤイ。最前、與四郎が云ふを聞けば、柴田が旅館の普請、君を設けの一間、至つてむづかしいとは。コレ、正しく落し穴か、何にもせよ、安からぬ一大事。いま普請成就しても、大工一人も歸さず、それに與四郎門番を頼み、拔け出でしは、さては他言せしと、與四郎が詮議最中の所へ、立歸る與四郎。不便や與四郎は、直ぐに切り殺さるゝわやい。
とよ　エヽ。
ト大悄り。
藤右　そこを覺つて縛り置いたは、與四郎を留め置き、コリヤ、この願書を認め、久吉どのへ訴人して、我の命を助けうと思うた心も水の泡になつたわい。エヽ、おのれはなア／＼。
トお豊を振り廻して泣く。
とよ　父さん、堪忍して下さんせ。さういふ事とは知らず。ひよんな事して去なしました。申し、どうぞ與四郎さまを助ける仕樣は、ござんせぬ事かいなア／＼。
ト取りつき泣く。藤右衞門キッとなつて
藤右　最前村方の噂に、久吉どの、早追分までお出での樣子。駈けつけてお願ひ申す。
とよ　どうぞ與四郎さんの命を
藤右　サア、助けたいは山々なれど
とよ　もし切られさしやんしたら。
藤右　我が仇は柴田勝重。
とよ　そんなら追分へ行て。
藤右　身共が訴人。娘、來い。
トお豊引ッ立てゝ橋がゝりへ走り入る。トちよん／＼。
廻り道具。
造り物、後方、山の見得、南方に袖山。好き所に柔

り物二挺下ろし、六尺、徒歩侍ひ、對の挾み箱、臺笠、立て傘、大鳥毛、草履取り、笠籠持ち、茶辨當持ち、茶道坊主、右行列の人數立ち、提灯數多、小田の紋付き、火を點し、この眞中に久吉、手を組み、空を眺め、キッと立つて大道具廻る間、本釣り鐘、明けの六ツ方々にて鷄の聲、夜明けの體、雲氣の合ひ方にて道具とまる。

久吉　ハテ、怪しや。都の方に當りて、黄なる殺氣むら立ち、いま東雲の明け近く、太陽東に立ち昇る。その光り黄なる殺氣を貫きしは、ハア、ハテ、訝かしやなア。

トきつとこなし。又ドロ／＼にて、空より鷹飛び去る。久吉キッと見返ると、又ドロ／＼にて、件の鷹、空にて二つに切り離れて、久吉が眼前へ落ちるを取つて見て

こりや、コレ、信長公御秘藏の青陽の鷹。この鳥の不思議は、叛逆人の手に止まらぬ稀代の異鳥、禁廷より勅諚なりと、柴田が底意を探らん爲、この鷹を下し置きしに、その青陽の鷹を斯くの如く切つたるは、さては柴田が叛逆、他門へ知らすまじと鷹を害せしに、この鳥、先君信長公の恩を思ひ、鳥類なれども小田家の害を除かん爲、柴田が惡事を告げの鳥。いま我が面前へ飛び來りしは、ハ、ア、稀代の業を見る事ぢやよなア。

トきつと見得よく、この時、合ひ方替る、ト橋がゝりより、藤右衞門、上下を着し、願書を持ち、バタ／＼と走り出て、久吉を見てこなしあつて

藤右　ハッ、恐れながら拙者は、粟田口村を支配仕る鹽谷藤右衞門と申す者。眞柴久吉さまへ途中ながら一大事のお願ひ。即ちこれに願書認め、持參仕りましてござります。

久吉　ムウ。聞き及びし粟田口の郷士、鹽谷藤右衞門。一大事の願ひとあるは、ドレ、その願書これへ。

藤右　ハッ。

ト願書を久吉へ差出す。久吉取つて、開き見て

久吉　藤右衞門、近う。

藤右　ハッ。

トにじり寄る、

久吉　この願ひ書を見れば、柴田が旅館の普請に就き、其方が聟與四郎といふ者、即ち大工のうちに加はりしところ、何とやら怪しき普請の樣子。小田家のお爲を思ひ、注進仕るとの文意。この通りに相違ないか。

藤右　毛頭相違ござりませぬ。
久吉　併し、事露顯に及ぶまでは、訴人の大法、とくと合點であらうなア。
藤右　ハッ、訴人の大法。
トすつと向うへ出で
イザ、繩お掛け下されい。
ト下に居て、兩手を廻す。久吉、藤右衛門の體を見て
久吉　ハテ、健氣の有樣。矢張り其まゝ。
藤右　イヤ、それでは訴人の大法が。
久吉　イヤ、苦しうない。例へ繩は掛けずとも、一旦久吉が膝下にかゝつては、いつかな身動きはなるまい〳〵。
藤右　御尤ものお詞。拙者支配仕る粟田口は、柴田どのの領地、すりや、私しとても柴田の家來同然なれども、四海の爲には代へられませぬ。さるに依つてこの訴人。
久吉　出かした。君子は危ふきに近寄らず。此まゝ安土へ御歸館、某は青陽の鷹を以て、柴田が叛逆奏聞して、刑罰は、今目前。併し、三法師君御歸館の御供も大事、また禁廷へ奏聞も大切。役目は二つ身は一人。エヽ、。コレ、かゝる折に河田歩左衛門が有り合はさば、若君の御守護いたさせんもの。ハテ、如何いたしたものであらうなア。
藤右　ハア、久吉さま。何卒拙者めに三法師君のお供、仰せ付けられ下さりませうならば、有り難う存じ奉りまする。
久吉　ムウ。武邊を磨く志し、神妙なれども、其方に柴田が領地を支配の役人、迂濶に若君をお預け申されぬ。
藤右　御尤も。
ト腹切らうとする。
久吉　ヤア、何ゆゑの切腹。
藤右　柴田が領地を支配は致せども、小田家の御恩は忘れぬ拙者、二心ないと申す腹を御覽に入れませう。
ト又切らうとする。
久吉　待て。
藤右　イヤ、お留め下されな。
久吉　ハテ、心底聞き屆けた。
藤右　エ。
久吉　若君の御供、申し付けたぞ。
藤右　すりやお聞き屆け下さりませうとな。エヽ、有り難い。
久吉　もし路次の狼藉あらんも計り難し。畏れながら幼君

を、我が乗り物にて、
藤右　御尤も。
久吉　急いで用意。
藤右　ハッ。
　ト藤右衛門、袴の股立ち取つて身拵らへするうち、久吉、三法師丸を乗り物より出し、我が乗り物へ乗せ換へて
久吉　者ども、お乗り物に引添うて、前後に眼を配れ。
皆々　畏まつてござりまする。
久吉　藤右衛門、ぬかるな。
藤右　ハッ。
久吉　急げ〳〵。
皆々　ハア、。
　ト所地入り早めて、行列の人數皆々、乗り物に引添ひ、藤右衛門跡より附き入る。臆病口より長司、左近、大膳、一學、藏八、皆々出て、素袍の股立ちとつて、ツカッカと出で兩方へ別れ
皆々　三法師君のお迎ひ。
久吉　イヤ、幼君は安土へ歸館。
皆々　とは又なぜな。

　ト久吉、青陽の鷹を取つて
久吉　青陽の鷹は、まッこの通り、
皆々　これは。
久吉　叛逆露顯さすまじと害せし鷹、おのれと來る不思議の異鳥。
皆々　すりや、柴田が。
久吉　コリヤ。
　ト皆々を押へるこなし、よろしくあつて
　隱密々々。
　トちよん〳〵、廻り道具。
　宿の山廻ること、柴田が旅館奥座敷の體になり、造り物、眞中、二間半程の屋體。向う襖、緣先よき所に吊り燈籠、手水鉢、臆病口、少し小高き亭、二階。塗り骨障子建て、橋がかりは庭の體。植込み、石燈籠などよろしく、橋がかり床の中を切戸口、兩方へ出す。この二重舞臺、柴田褥に坐り、莨盆控へ居る。平舞臺に玄蕃、袴の股立ちとつて、刀に手を掛け、與四郎方へ行かうとしてゐる。初花、玄蕃を留めて居る。大工ども居る。與四郎、下の方に顫う

て居る。この見得にて、五ツ太鼓にて道具納まる。

玄蕃　妹、そこ放せ〳〵。

初花　マア〳〵、待つて下さんせいなア。

與四　申し、しつかりと留めて居て下さりませ〳〵。

喜藏　コレ、與四郎、わが身ゆゑにこちらが難儀。

李兵　もそつと貴樣の戻りが遲いと、こちらも手打ちに遭ふところ。

宇兵　可愛や、殘り三人は、今朝明け方にばつさりと。

與四　エ、。

三人　これと云ふも、皆われゆゑぢや〳〵。

玄蕃　ヤア、かしましい、罪人めら。どうで遲いか早いか打ち放す奴等。

三人　エ、、、

玄蕃　コリヤ、與四郎め。うぬ、よくも門番を騙かり、逃げ歸つたな。うぬも打ち放す奴なれども、息あるうちに尋ねる仔細。コリヤ、この一腰、覺えがあるか。立寄つてとくと見よ。

ト持ちたる一腰を差出す。與四郎、矢ツ張り怖さうにして居る。

初花　ハテ、マア、ちよつと見やいなう。

ト與四郎、顫ひ〳〵一腰を見る。此うち、修理介、莨のみ居る。與四郎見て惘り。

與四　ヤア、こりや、わしが大事の脇差。いつの間に誰れが持つて來ました。

初花　コレ、與四郎、昨夜其方が門番を頼んで、拔けて去にやつた後で、兄樣が人數を改めしやしやんした所に、其方が居やらぬに依つて、大方粟田口へ去にやつたであらうと、後から追手をかけ、其方の内を詮議したら、あの一腰があつたと云うて、家來が持つて戻つたわいなう。サア、ちやつと、あの一腰の譯を云うて、其方の拔けて去にやつた事も、ちやつとお詫び申しやいの。

與四　さういふ事でござりましたか。やもめ住居ぢやに依つて、用心が惡いと思うて、半櫃の底へ入れて置いたその脇差。そりや大事の形見ぢや。ちやつと此方へ戻して下さりませ。

玄蕃　默り居らう。うぬ、此方より暇を出すまで、一人も歸る事罷りならぬと申し附け置いたに、うぬ一人背いて逃げ歸つたゆゑ、われが家は缺所、この一腰もお上へお取上げなさるゝ。

與四　エ、、、、。

玄蕃　その上、うぬを始め、殘りの奴輩、皆首を打ち落す。
與四　ア、、申し〳〵、何を隱しませう、その一腰は、私しが親の形見、水子の時その一腰を添へて、私しが伯父、其方へ一生不通の養子に參りました。ちつと譯あつて養父方にも居らず、成人してこの粟田口へ參り、大工を渡世に致して居りますうちも、どうぞこの一腰を證據に、誠の親に廻り逢はうと存じて居りまする。いま殺されましてはその望みも叶はず。申し、どうぞお情、お慈悲でござりまする。命をお助け、お歸しなされて下さりませ。拜みますわいの〳〵。

ト泣く。此うち修理介こなしあり。

玄蕃　ならぬ〳〵。うぬ、逃げ歸つたからは、この度の普請の樣子。他言いたしたに相違ない。ぢやに依つて、打ち放さねばならぬわやい。
與四　イエ〳〵、その事は誰れにも申しや致しませぬわいの。
玄蕃　まだ〳〵野太い云ひ譯。うぬから先へ、息の根とめてくれう。

ト件の一腰拔かうとする。初花、留めるを、取つて引退け、與四郎の方へ行く。與四郎、身を縮める。よき所にて

修理　玄蕃、待て。
玄蕃　イヤサ、此奴。
修理　彼奴は身が成敗せう。
玄蕃　すりや、あなた樣が。
修理　その一腰をこれに置き、殘りの者共を奧庭で、ナ、合點か。
玄蕃　畏まつてござりまする。妹、來い。
初花　ハア。
玄蕃　然らばこの一腰を以て。

ト修理介が前に置いて

うぬが一腰で、うぬが成佛。サア、妹、其方も來れ。
初花　イ、エ、わたしや爰に居て、死ぬるなら一緒に。
玄蕃　ヤア。
初花　イ、エ、與四郎が死にやるを見たうござんす。
玄蕃　馬鹿者め、キリ〳〵うせう。

ト初花を引き立て

ソレ、引ッ立てい。
侍ひ　立たう。

ト唄になり、家來、大工を引き立て、後より玄蕃、初

花を無理に引き立て、皆々床の下の切り戸へ入る。後、合ひ方にて、與四郎、此うちウロ／＼してゐて、この時

與四　こりや、もう、いつそ。

ト切り戸口へ逃げようとする。

修理　コリヤ、待て。

トきつと云ふ。

與四　ハイ。

ト振り返り、顫ひながら下に居る。

修理　すりや、いよ／＼この一腰は、其方が親の筺とな。

與四　ハイ、この場になつて、なんの嘘を申しませう。

修理　して、其方が養父は如何いたした。様子を語れ。事に依つては命を助けてくれう。

與四　エ、、命を助けて下さります事なら、有りの儘に申しませう。養子に參りました伯父貴が所は、堺の町人私しは又、大工職が望みで、大工へ弟子奉公。十五の年に友達同志の喧嘩にて、相手に手疵を負はせ、所にも置かれずと、養父の内も勘當受けて、出て行く時に、ソレその一腰を出し、元は兄の子を養子にしたとの物語り。この一腰を印に、誠の親に逢へと、貯への金を貰ひ、二年前に粟田口へ知るべあつて、しつけた仕事の大工働らき。方々の普請場へ行き、度々氣を付けて、もしや誠の親の噂はないか。手掛りはあるまいか。この一腰を印に名乘り合ひたうござりまする。様子と申しまするは、ハイ、この通りでござりまする。

修理　ムウ、その養父と云ふは、もし田郎助とは云はざるか。

與四　アイ、田郎助と申しまする。

修理　すりや、其方は。

トこなしあつて、一腰を與四郎が方へ拋つてやる。

與四　これは。

修理　命は助けた。

與四　エ、。

修理　一度某が親になつたりし其方。事に依つては其方が身の上。

與四　エ、。

修理　一先づ爰を立退け。

ト懷中より服紗包みの金子を出し、拋つて遣る。與四郎取つて

與四　そんならこれを。

修理　路用に致せ。

與四　エ、忝ない。殺されまするを引替へて、お金まで下されまするは

修理　實父が情。

與四　エ、。

修理　我れ十七年以前、先妻の難産に、生み落して直ぐに歿る。浪人の身、是非なく、幸ひ我が弟田郎助は町家の交り。行く〳〵町人となしくれよと、印の一腰を添へ、養子に遣はし、我れは他國へ武者修業に出で、縁を求めて、北國入方村にて後妻を持ち、小田の家へ入込み、今この身の上。さては其方は、我が倅であつたよなア。

與四　エ、。

ト驚き

そんならお前が、

修理　其方が親、庄助ぢやわい。

與四　てもマア。さうとは知らず、親子一緒に寄りながら

修理　大工の與四郎を倅とも

與四　柴田さまを父上とも

修理　知らず計りし我が密計。

與四　お頼みの一大事に代りし私し。

修理　もし捕へられ、憂き目にあはゞ、我が鐵石もたゆむ道理。

與四　成る程、お心休めに立退きませう。

修理　して、落ち附く所は。

與四　養父田郎助どの、今は浪花にござるとの噂。尋ね求めて

修理　大願成就の上、めでたう對面。

與四　マアそれまでは、

修理　堅固で暮らせ。

與四　おさらば。

修理　行け。

與四　ハイ。

ト立ち上がると、ドンと遠責め打ちかける。與四郎この太鼓の音に恟りすると、次第に遠責め打ちかける、修理介こなしあつて

修理　爰構はずと、早く〳〵。

與四　ハイ、、、。

ト顫へ〳〵一腰を差しながら、花道へ行きかける。うぢうぢして、よき所にて振りかへり、修理介と顔見合せ、修理介「行け」と顔でする。與四郎「ハイ」と顫へながら向うへ走り入る。修理介、後にキッとなつて

修理　ハテ、怪しき貝鉦太鼓、我が心魂に響かすは、ムウ。

ト　どつかと座し、手を組み、キッとなると、バタ〳〵にて、橋がかりより、玄蕃初花、一腰差し走り出で

玄蕃　御主人樣、思ひがけなき貝鉦太鼓、聞くと其まゝ門外へ出で樣子を窺ふところ

初花　柴田勝重こそ謀叛人と、數萬の軍勢、この屋敷へ押寄せまする。

玄蕃　三法師君も、追分まで來りしところ、最前死したる青陽の鷹、おのれと飛行し、自然と露顯仕り

初花　眞柴久吉は、禁廷へ注進に參り

玄蕃　三法師は、安土へ取つて返し、兼ねての謀り事、悉く相違いたした。

初花　こりや何と致しませう。

玄蕃　御主人樣、如何でござりまするな。

修理　玄蕃、汝は手勢を引連れ、大津海道を駈け抜けい。

玄蕃　ハア。

修理　大工與四郎は我が肉身の伜、浪花の池へ落しやつた。初花、其方は伜に近附き、この場の樣子を語り、必らず我が伜といふ事を、口外いたすなと申し聞かせよ。

初花　ハア。

修理　兩人とも、急げ〳〵。

兩人　ハア。

ト　云ふところへ、橋がかりより、軍兵大勢、拔刀にて出で

皆々　やらぬぞ。

ト　玄蕃に切つてかゝるを、切り立て〳〵、追うて入る。此うち初花は向うへ走り入る。トまた橋がかりより長司、左近、大膳、一學、藏八、半切れ陣羽織、小手脛當にて、めい〳〵鐵砲を持ち、ツカ〳〵と出て、平舞臺より取卷き

長司　サア柴田、紛失の蛙丸。

左近　雌獅子雄獅子の二つの御判。

大膳　汝が手に隱しあらん。

一學　尋常に渡さばよし

藏八　異議に及ぶと、鐵砲の釣瓶打ち。

長司　サ、返答は、

五人　なんと〳〵。

ト　鐵砲構へる。

修理　我が謀計は小田を亡ぼし、年來の鬱憤を散ぜん爲。寶を賴みに、叛逆などゝは、イヤ、馬鹿な事を。

五人　その廣言の頭骨を。
　ト皆々火蓋を切らうとする。
五郎　いづれも待つた。
　ト遠責め打ち上げ、信雄、着附け上下にて、五郎左衛門後に附き、木田平（萩坂主計頭）奴の形にて供して出る。
皆々　ヤア、信雄卿。
五郎　オヽ、さぞ不審にあらう。柴田が意底を探らん爲、釆女が家來木田平を、萩坂主計頭と僞はり、青陽の鷹を以て、叛逆を顯はし、信雄卿を追放の體に見せしも、この旅館を遠ざけ、御身に凶事なきやう、五郎左衛門が計らひ。
信雄　わざと勘當蒙むりし體に見せ、跡へ廻りしも、五郎左衛門が指圖。
木田　下郎が面體、見知らぬを幸ひ、勅使となつて入込みしも、五郎左衛門さまの計略。
五郎　如何に勝重、三七どのを楯に附け、大望の成就の後にて、三七どのも打つて捨てべき汝が所存。國遠ありしは、巧みの臍の喰ひ違ひ。三輪が眼力違はぬところ。サア、尋常に切腹せよ。

五人　但し火蓋を切らうか。
修理　サア
五郎　サア
皆々　サア
五郎　なんと勝重、最早動きは取れまいがな。
　ト皆々詰めかける。此うち修理介、悲しきこなしあつて、刀を我が腹へガバと突き立てる。
皆々　いで叛逆人の首を。
　ト皆々行かうとする。
五郎　コレ、待たれよ。
　ト切腹の體をとくと見て
臍下三寸覺悟の切腹。介錯に及ばず、此まゝ〳〵。
皆々　おやと申して。
五郎　ハテ、五郎左衛門が見屆けたれば、氣遣ひない。此まゝ苦痛の最期も、主君に敵たふ彼奴が天命。
長司　でも、柴田が切腹いたせば
皆々　寶の在所が
五郎　それも五郎左衛門が胸にある。
皆々　でも。
五郎　ハテ、六十餘州は武將の懷、いつ取返さうと儘な事

だ。
皆々　もしや、此まゝ。
五郎　禁廷の奏聞。イザ、和子。
信雄　皆参れ。
皆々　ムウ。
ト修理介へキッとなるを
五郎　ハテ、來やれと云ふに。
皆々　ハア。
ト合ひ方になり、信雄先に立ち、五郎左衞門皆々を連れ向うへ入る。ト此うち矢張り遠責めかすかに打つて居る。修理介、皆々が入りし後をキッと見て、こなしあると、バタ／＼にて、橋がゝりより小谷走り出て、この體を見て
小谷　ヤア／＼、腹切らしやんしたか。ハア、
ト撞と打伏し大泣き。修理介こなしあつて
修理　コリヤ小谷、これまで其方にも包み隠せし我か本名。元某は武田の殘黨、土屋東蔵正勝と云ひし者。天目山の戰ひに、信長が爲に討死。おのれこの鬱憤を散ぜんものと、鷹匠と姿を變へ、其方と夫婦になつて
ト懐中より一巻を出し

この一巻は、汝が親、與惣太夫が先祖、柴の武勝より傳はりし系圖、これを以て柴の末葉なりと、信長を僞むき、大老職まで經上りしが、時來らず、大望空しくなる上は、この系圖、與惣太夫に相渡し、まつた某が奪ひ置いたる雄獅子の判、人知れず埋め置いた。それを以て諸國の軍勢を語らひ。我が存念を立てさせよ。小谷、しかと申し渡したぞ。
ト件の一巻を渡す。
小谷　成る程、遺言の趣き、心得ました。女でこそあれ、例へ謀叛にもせよ、夫につれるが女房の誠。最期の御無念晴らさせませう。して、その雄獅子、御判は、
修理　『越路なる入方村の白雪は、降り埋みしと人は知らじな』
小谷　ムウ、そんなら本國越路に。
修理　オヽ、無念を埋む我が最期、冥土は暗き修羅の苦しみ。その無明を照らすは。アレ／＼、あの吊り燈籠。
小谷　ナニ、あの吊り燈籠とわえ。
修理　闇路を照らす、思案を待つぞよ。
ト刀引き廻す。小谷あせる。修理介トゞよろしくあつて死ぬる。小谷、死骸に取りつき

小谷　ハア、。

ト大泣き。エイ／＼オウ、ヲア、と遠責め打上げ、橋がかりより左近その外大勢、いづれも小手脛當にて出て

左近　いづれも、柴田切腹の上は

侍一　紛失の寶の在所。

侍二　彼奴が懐中。

侍三　又は居間の下家。

皆々　殘らず詮議仕らう。

ト皆々二重舞臺へ上がり、左近は小谷の首筋を掴み

左近　面倒な女め。

ト二重舞臺より下へ蹴落し、皆々は修理介の死體、又は疊などを上げて詮議の體。此うち小谷は一腰を拔いて

小谷　無明を照らす夫の遺言。

ト吊り燈籠を切り落す。仕掛けにて、右屋體一杯の天井、一面にがつたりと落ちる。この天井の上に二重舞臺だけの大石載せてある。皆々地獄落しにてギヤツというて死ぬ。小谷、拔身を捨て、ゾツとしたるこなしにて、また振り返り、ちよつと死骸の方を眺め、こなしあつて向うへ走り入る。ト忍び三重にて、二階の障子を明け、五郎左衛門ソツと出て、ツカ／＼と下りて小谷の後を見送り

五郎　『越路なる入方村の白雪に、降り埋みしと人は知らじな』。彼奴を助け歸すも、寶を無事に取り得る工風。

トこなしあつて振り返り、様子を見て

ハテ、企んだよなア。

トよろしくこなしあつて、チヨン／＼、廻り道具。

造り物、向う黒幕、一面の松原、眞中に乘り物あり。この前に藤右衛門と玄蕃切り結び。烈しき合ひ方にて道具とまる、といろ／＼タテあつて、互に手を負ひ、よろめき／＼、遂に藤右衛門は玄蕃を切つて伏せ、乘りかゝつて止めを刺し、

藤右　アラ嬉しや、邪魔は拂うた。

ト立ち上がり、乘り物の方へ行かうとして、深手によろめき、ガツクリとなつて轉けると、臆病口より黒装束、兜頭巾にて大勢走り出て、乘り物の中を覗き

皆々　三法師、してやつた。

ト皆々乘り物を上げようとするところへ、向うバタ

にて、歩左衛門走り出て、皆々を取つて投げ、乗り物を圍む。

歩左　幼君の御守護、河田歩左衛門。うぬら寄つたら蹴殺すぞ。

トきつとなつて見得。この𦖋にて藤右衛門起き上がり

藤右　さては歩左衛門どの。

歩左　さいふ貴殿は。

藤右　道の警護、熊谷藤右衛門、宅間玄蕃が狼藉。歩左衛門どの。お頼み申す。

ト云ひ捨てゝガッパと死ぬる。歩左衛門こなしあつて。

歩左　すりや

ト藤右衛門方へ寄らうとする

皆々　この乗り物を。

ト皆々かゝるを、また取つて投げのける。

渡せ。

ト一面に取卷く。歩左衛門、乗り物の棒を振りかたげて

歩左　なにを

ト力足踏む、これにて皆々こける。

小癪な。

トきつと見得よく。

幕

三つ目　入方村の場

役名――與惣太娘、小谷。長岡新吾。百姓、喜多作。同、彌五四郎。同、小次郎兵衛。まゐらせ曾六、女房、お雪。小谷母、小みつ。人間與惣太夫。

造り物すべて、この一場、半分は時代。半分は世話。上手、簾屋體、欄間、竹の節。柱黑塗り高欄附き、随分見事にて、廣庭に大木の糸櫻、吊り枝見事に御殿の上へ枝垂れかゝりあり。下の方、藁屋葺き、納戸口、暖簾。橋がゝり、斜に取つて、反古貼り障子屋體。よき所に草井戸。人出入りある。この側に竹二三本、雪に萎えてあり。いつもの井戸口の所、岩穴。舞臺先、下の方半分は、雪降りにて、雪、板屋根にも積りあり。燕の巣、外れるやうにてよき所にあり、月出る仕掛けあり。時代世話。二重舞臺の眞

中にて、取りつけよく疊敷き、後に蹴上げて入る仕掛けあり。幕の内より、小谷、衣裳、裲襠好みの形、右の上へ前垂れ、置き手拭にて糸車にかゝり、糸紡ぎ居る。上座に、曾六、衣裳上下にて床几にかゝり體。この前に彌五四郎、小次郎兵衛、百姓にて、訴訟の體。下座には、お雪、世話形、下女の拵らへにて右井戸の端にて米洗ひ居る。喜多作、掛乞ひにてお雪をせがんで居る。この見得三方よろしく、在郷唄にて幕開くと、直ぐに琴唄の合ひ方。

彌五　ハイ／＼。お願ひの者でござります。

小次　どうぞお取次なされて下さりませ。

喜多　サア、此せいらくはどう付くのぢや。

ゆき　御尤もでござります。

喜多　イヤ、御尤もごかし、措いてもらふぞや。

彌小　どうぞお願ひ申し上げます。

曾六　イヤサ、叶はぬと云ふに。

喜多　なんでも取らにや去なぬが。

ゆき　サヽ、そこをどうぞ。

兩人　お取次なされて

曾六　旦那は留守ぢや。

喜多　また留守を使ふか。

ゆき　イヽエ、お家様は、すや／＼とお寢み。

兩人　そんなら直訴に。

ト立つ。

曾六　ハテ、留守ぢやと云ふのに。

ト留める。

喜多　寢てなら婆様に。

ト立つ。

ゆき　ハテ、マア、今日は。

ト留める。双方よろしく、小谷、糸を紡ぎ居て、爰にて

小谷　オヽ、さう／＼がましい。二人とも、待ちや。

兩人　イヽヤ、庄屋に。

ト行かうとする。

小谷　慮外であらうぞ。

兩人　ハイ／＼。

ト下に居る。

小谷　喜多作さまとやら、マア／＼待つて下さんせいなア。

ゆき　ソレ、小谷さまが留めるわいなア。

曾六　御寮人様の御上意ぢや。

兩人　ハアッ。

ト尻もつ立て、辭儀する。喜多作、小谷に惚れて居る思ひ入れにて

喜多　小谷さま、こなさまえ。アノ、お前、わたしを留めて、挨拶でもする氣かえ

小谷　アイナア。

喜多　アイは愛想のものと云へば、待てならば待ちもせうが、マア、せがむはわしが無理か、尤もか、さうか、それでないか、側へ寄つてとつくりと見れば

ト側へ寄り見て

ハテ、あぢいなお前の形。

喜多　裲襠姿に置き手拭。

小次　前垂れに似合はぬ武家風の詞付き。

喜多　曾六女夫がそぐはぬ姿。

兩人　御殿の結構。

喜多　婆樣貧乏。

兩人　お前の姿を

喜多　外から見ると

小谷　氣狂ひのやうにも思はしやんせうが、これには段々樣子ある事、そりや追つて知れるでござんせうが、マア、百姓家の願ひ、お前の譯はどうでござんすえ。

喜多　ハテ、譯も云うたら知れた掛乞ひ。しかし爰の内、借錢があるとはこの喜多作、とんと合點が行かぬ。なぜなれば、マア、爰の内はこの越後の國、入方村で代々の庄屋樣。金は饒りん、田地はあり、何くらからぬ身上よし。なりやこそ、アレ／＼、あの通り、親仁の隱居は、御本山の佛壇見るやうな中に、日頃氣の合ふ友達の百姓を家來にして、奢りの有り條かと思へば、婆樣の居間は矢ッ張り變らぬ藁屋葺き。

彌五　ほんに、こりや、氣が附かなんだ。あちらとこちらは、泥龜とお月樣。

小次　炭と雪降りに、時ならぬ糸櫻の眞ッ盛り。

喜多　こりや何でも名前を切り替へ、一切するのか何にもせよ、稀有けれつな爰の內へ、金貸して置く事はならぬ。これまで米薪味噌醬油を仕送つた算用して、キリ／＼戾してもらはうかい。

小谷　イヤモウ、お前の腹立ち、無理ぢやござんせぬ。さうして、こなさん方が願ひの品は。

兩人　ハイ、光りが欲しいのでござります。

喜多　なんぢや、光りが欲しい。よみうつやうな願ひぢや

な。
小谷　當國蒲原郡入方村は、この庭の岩穴より、夜に入れば陰火現はれ
ゆき　ちよつと夜なべの針仕事、無精な者は猶の事、燈火ともす世話いらず。
曾六　火が欲しければ村中へ、水の代りに竹とよで、火を自由に取り遣りしても焦げもせず、燃えもせず、火傷もせず、家の内に火が降つても、半鐘打たぬといふ國は、凡そ日本、唐、天竺を尋ねても、この越後の入方村ばつかり。なんと調法な事ではないか。
喜多　ハテ、それは調法な事ぢや。
彌五　サア、その調法を書入れにして、この入方村の繁昌、凡そ三千六百軒餘りの竈數。
小次　油火灯さぬかすりで、庄屋樣へ火貰ひ料の年貢上げても、他の村より實入りの好い所の賑ひ。
彌五　時に去年の春から、陰火めがしろが抜けたか、但しは、火が高ぶつて、陰氣火動の性分か、とんと今では火が出ませず、陰火が出ぬから村中は暗闇。
小次　俄かに今町へ、蠟燭を買ひに走るか、高田へ油を取りに遣るか、村中は上を下への騷動でござります。

小谷　ほんにさうでござんせうなア。
曾六　火が出いで迷惑する代りに、折々洪水で難儀するゆゑ、村中が家々に水の用心と書いて貼るも、他國で火の用心の代りぢや。
彌五　火貰ひ料出して、灯し油を買うて焚かねばならぬとは、とんと詰まらぬ詮索でござります。
小次　どうぞお大事の物でござりませうけれども、矢ツ張り光りをお移しなされて下さりませ。
彌五　但しは雨乞ひの代りに、火乞ひでも致しませうか。併し、淀鯉と違うて火乞ひは臭うていけるものぢやござりませぬ。
小次　「雨たもれ龍神」は聞えてござりますけれど、「火たも火たも」は子供の云ふやうで、大づけなうござります。
彌五　どうぞ今までのやうに、陰火をお貸しなされて下さりませうならば、ハイ〱
兩人　有り難うござります。
曾六　ハテ、無理な事を云ふ奴らぢや。出ぬ火がどう出されるもので、この願ひは叶はぬ〱。
兩人　そんなら、どのやうにお願ひ申しましても
小谷　サア、その叶はぬ所を、この小谷が取上げて、村中

へその陰火を、施しさへすりやよいではないか。

兩人　イヤ、モウ陰火さへ貰へば、有り難いでござります。

曾六　陰火を貰ふがその位有り難いか。ても陰火な奴等ぢやな。

喜多　さうしておれがせいらくは。

小谷　それもわたしが工面して、お前に損は掛けぬわいなア。

ゆき　小谷さまの請合ひなりや、もう今日は料簡して、お家さんのお目の覺めぬうち。

喜多　去んでやらうか。待つと云うても長うは待たれぬ。御定法の暮れ六ツ、ゴンと鳴るが合圖に、仕送り金。

兩人　陰火も一緒に。

小谷　サア、合點して居る。金も拵らへますわいなア。

喜多　そんなら小谷さま。

彌五　お姫樣。

小谷　喜多作さま、二人の衆。

兩人　必らず待つて居りまするぞや。

ト在郷唄になり、三人ワヤ／＼云うて橋がゝりへ入る。あと琴唄の合ひ方になり、曾六、こなしあつて

曾六　ヤレ／＼、やかましい奴等。

ゆき　ほんに大水の出た後のやうな。

ト箒にて掃き出し、思ひ入れあり。兩人、小谷が側へ寄つて

曾六　御寮人樣、去年の春から皆目、出ぬ火を

ゆき　暮れ六ツまでに遣らうと、請合はしやんした金

曾六　火の心當て

ゆき　金の工面が

兩人　ござりますかえ。

小谷　ハテ、一寸延びれば廣い世界に、金は湧きもの、湧かぬ陰火。ムウ。

トこなし。

曾六　遣らねば又、來をるであらう。

兩人　ほんにうるさい程、喜多作づらに。

小谷　大方これでありさうなものぢやが

ト思案する。

近習　お成り。

ト反古貼りの内より手を叩き、これをキッカケに、天王立ちにて、御簾卷き上がる。内に、與惣太夫、すりはがし、ぼつとせの白髮を、冠り下地に結うて、錦の着附け、廣袖、壺折り、丸絎けにて、二疊臺の上に結

構なる褥を敷き、短き煙管を、咬へ煙管にして、貧乏揺りして居る。近習二人は、太刀を持ち居る。曾六、ちいと叩頭する。お雪は、手鳴りし時、アイ〳〵と下座の反古貼りの障子を明ける。内に小光、在所婆の拵らへにて、見臺に軍書を載せ、立て膝にて讀んで居る見得。

小光　董卓が勢ひ日々夜々に盛んなりしかども、婬に耽り、酒に長じ、放蕩なる事恰も狂亂の如し。

與惣　ア、〳〵。

ト大欠伸して

夏の日の長いのに、大名に生を變へる下稽古に、ほつと退屈。シタガ、今の沸いた人參湯の行水の水は、都から取寄せた加茂川の流れか。

近習　左樣にござります。

與惣　流石は王城、水までが格別綺麗なが、山水はどうか體が荒れるやうで心悪い。ヤイ、曾六、今度は氣を變へ、大坂堀井の水を汲みに遣れ。

曾六　ハ、ッ。

與惣　しかと申し渡したぞ。

曾六　心得ましてござる。

與惣　エ、。

曾六　ハッ。

與惣　ハ、、、、。大分今の受答へは味をやりをつた。時に、湯草臥れか、空腹で腹が減つた。何ぞ晝飯を持て。イヤ、晝飯ぢやない。エ、、何やらぢや。エ、、何でも晝飯ぢや。娘小谷は居ぬかやい。飯食はさぬかやい。

小谷　畏まりました。ソレ、申し附けた、御膳を早う。

近習　ハッ。

ト太刀を刀掛けに掛け置き、兩人入る。

小光　お雪、もう御飯は炊きやつたか。

ゆき　ハイ、イ、エ、炊かうと存じて居りましたうち、つッといろ〳〵の邪魔が入つて。ドレ、米かしてしまひませう。

トこれより米かしの好みの合ひ方ひ、管絃入りにて、お雪米洗ふこなし、いろ〳〵あり。

小光　「剰へ王允が娘、呂布が妻と定めたる貂蟬といふ女に迷ひ、これを幸ひす。」

與惣　まだ菜を拵へやがらんか。おれが近がつゐを知りやがつて、大名がひだるい目をするものか。キリ〳〵膳を据ゑあがらんか。

小谷　ソレ、平次、彌五郎兵衞、御膳の用意、早う／＼。
近習　ハア。
ト近習甲、結構なる蒔き繪の掛け盤、目八分に、與惣太夫が前へ出す。近習乙、盆に燒き物皿を持ち出でよき所へ直す。與惣太夫見て
與惣　こりや何ぢや。汁は信濃の名物、筑摩の豆腐。平は又汁か。こないに常住汁が食はれるものか。又も燒き物は糸魚川の糸魚。この國の名物でも、所で食へば何でもない物。忌々しい料理人め。
トぼやき／＼飯を食ふ。
小谷　不調法な與八。ソレ、お詫び／＼。
近習　眞平御免下さりませう。
小谷　あやまつて居ります。御料簡遊ばされませう。
與惣　娘が挨拶、今日は赦す。飯持つてうせう。
ト兩人替へに入る。
小光　小谷。娘々。
小谷　アイ／＼、それへ參ります。
ト補襠を脫ぎ、前垂れを締めて、藁屋葺きの方へ來る。
小光　五月雨の徒然、昨日讀み掛けた三國志、董卓が起りにて、帝を苦しめるゆゑ、王允といふ忠臣あつて、董卓を謀つて、呂布に討たすところ、よく書いてあるぞいの。其方も聞きや。
小谷　ハイ、畏まりましてござります。
小光　お雪も聞け。
ゆき　ハイ、これから承つて居ります。
ト米かしつゝ云ふ
與惣　小谷。娘。云ひつける事がある。早う來んかいやい。
小谷　ハイ、畏まりましてござります。
トちやつと補襠を着て、與惣太夫が側へ來て
父樣、御用は何でござんすえ。
與惣　彼奴等が料理、如何にしても不細工な。明日からは、われ、彼奴等に代つて、食ひつけた物は旨うない、至急に唐へ飛脚を立て、西湖とやらの鮒鱠、松江とやらの洗ひ鱸、琉球國の蟇の油揚げ、取寄せて菜にせい。われにキツと云ひつけたぞよ。
小谷　畏まりましてござります。
小光　娘、何處に居やる。早うおぢやいなう。
小谷　アイ／＼、それへ參じます。
ト補襠を脫ぎ、前垂れして
ハイ、母樣、參りました。

小光　時にこの董卓が、片田舍の土民の身を以て、及ばぬ望みに奢り、我まゝ。女房の諫めも用ひず、遂には王允が謀り事に陷り、首は梟木に晒され、骸は街に捨て、肥え太りしを諸人憎み、腹上に燈火を點ずること三日三夜、油は街に滿ち流れし事は、何と恐ろしい成敗。それと云ふが奢りの報い

與惣　小谷に用があるわいやい。

小谷　ハイ〳〵、それへ參ります。

ト前垂れ外し、裲襠を着て、

ハイ、御用でござりますか。

與惣　又しても立騷ぐは、固意地者の女房めが、機嫌を取りにうせるのぢやな。

小谷　ア、イ、エ。さうでは。

小光　娘、ちよつとおぢや。小谷〳〵。

小谷　ハイ〳〵。それへ參ります。

ト裲襠を脱ぎ、前垂れをしめ

御用でござりますか。

小光　慾惡非道な父御に附き、母が詞を用ゐぬな

小谷　なんのマア、滅相な。

與惣　小谷、早う來い。キリ〳〵うせあがれ。

小谷　ハイ〳〵。それへ。

ト裲襠着る。

小光　娘、用がある、何處へも行く事はない。

小谷　ハイ。

ト裲襠を脱ぐ。

與惣　爰へ來い。

小谷　ハイ。

ト裲襠着る。

小光　早うおぢやいなう。

與惣　行くにや及ばん。

小光　來いと云ふのに。

トこの度に、小谷、ハイ〳〵と裲襠を脱いだり、着たり、うろたへて、いろ〳〵あつて草臥れ、べつたり下に居て、

小谷　ア、、しんど。

與惣　イヤ、來いと云ふに。

ト立つを

兩人　マア〳〵、待つて。

ト留める拍子に、お雪、桶に躓き米をこぼす。與惣太夫、曾六を引きつけ

與惣　喰はれもせぬ膳部の獻立て、キリ〳〵持つてうせあがれ。

ト掛盤を踏み落す。小光はお雪を引きつけ、軍書の本にて、散々に打つ。小谷分け入り

小谷　こりや、何となされます。

トお雪を圍ひ、留める。

小光　何とするとは、いま其方が躓いたうちまきはな、天か下の農民百姓と名のつく程のもの、春耕し、夏は實り秋は刈り入れ、冬收む、粒々辛苦の五穀の司さ。人命を繋ぐ天道よりの賜物。如何に榮耀に餘ればとて、土足に掛けて勿體ない。

ト泣く。

月日といふ天の眼が見てござるぞよ。追ッつけその報いにて、思はぬ身に禍ひ起り、果は野末に淺ましい死恥を晒す時、婆は嬉しからうと思ふか、悲しうなうて何とせうぞいやい。

ト泣く。

與惣　イヤ、當て言交りの世迷言、聞きたうない。追ッつけ北陸道七ケ國の大名になるこの與惣太夫、どんな結構な料理でも、氣に入らにや蹴飛ばすに何の報い。報いを受けぬ證據は、今この阿房めを大神殿にして、その大神をおれが斯う〳〵。

ト骨六をくらはし

斯う打ちのめしたら罰を當てるか。斯う

ト下へ蹴落し

蹴飛したら報いが來るか。なんと、大神殿でも踏み飛ばすは、即ち大名の威勢、えらいものぢやあらうがな。

小光　エヽ、淺ましい。報いも罰も目に見えねど天然自然。

與惣　當ると云ふは通例の人の事、日本一のこの我仁、罰も報いも身には立たぬ。

小光　そりやこなたの皆氣隨我まゝ。

與惣　氣儘云ふは大名の常。

小光　その大名には何方のお許し。

與惣　そりや、

ト行き詰まり

誰が許さうと、うぬが入らぬ吟味立て、

小光　イヤ、吟味するがこなたの爲。

與惣　うぬ、さう云へば斯ういふと、夫に反く不貞の女。

小光　天理に背くこなたの行跡。

與惣　詞を返すと打ち放すぞ。

初演の

繪番附

ト太刀を取る。
小光　サア、殺されませう。切らつしやれ。
與惣　うぬ、さう吐かしや。
ト抜かうとする。
三人　ア、コレ申し。
ト支へる。
二人　ヤア、とめるな／＼。
ト兩方振り切つてつか／＼と寄る。小谷、中へ糸車出し
小谷　コレ、待つて下さんせ。
ト隔てる。
小光　ハテ、邪魔せずと退きや。
與惣　妨げするは母めを庇ふか。
小谷　勿體ない。父の御恩、蘇命路の山より高き御惠み。
小光　すりや、父御に附いて、この母の。
小谷　御恩は深き海よりも、底はかりなき慈しみを、忘れぬ印の糸車。彼の深草にはあらねども、少々尋ねる人ありて、都の空へ旅立ちの、後の便りに御夫婦の、詞の飾りぞ破れ損じ、父様は御殿の内。母様は藁家の内、一つ家内にござつても、心と住居は別々。戻つて悔りせまいものか。父様のお目にかくれば、母様のお噂云うてお腹立ち。この御殿の外へ出れば、勘當すると嚴しい云ひ附け また母様のお話し聞けば、父様の無理の有り條。此方から暇は取らねど、何時知れぬ殿御の高下。女子の子は女に附くと云へば、其方はこの家を離れなと、お慈悲深い母様のお詞、從へば父様へ不孝。父様に附いて、母様を捨てられもせず、背きもならず、裲襠姿は父様の、お詞立てる娘の道。前垂れ襷糸車は、母様への宮仕へと、體一つを兩親に、分けて願ひはこの場の爭ひ。わたしに免じてお二人とも、マア、御機嫌をお直しなされて下さんせ。申し父様、母様、お願ひ申し上げますわいなア。
ト小光思ひ入れ。與惣太夫、こなしあつて
與惣　大馬鹿めらに要らざる論議。打ち殺す筈なれど、免してこますが大名の、寛仁とやら、大度とやら。ひね臭い面見ようより、奥で一杯引ッかけう。曾六も來い。
曾六　いま蹴落されたその代り、瓢箪酒の接伴せう。
與惣　身に着いて奥へ來い。
曾六　「帳臺……」
ト淨瑠璃語る

與惣　何吐かすのぢや。
　トかみつけろ。曾六悧りして
曾六　先づ、お入りあられませう。
　ト琴唄にて御簾下りろ。後在所めいた合ひ方になり、
　爰にて袂折り戸出す。三人顔見合せ
ゆき　阿母樣、
小谷　母樣、
小光　娘。お雪。
ゆき　手を換へ品を換へ、御意見なされても
小谷　所詮直らぬ父樣のお心。
小光　ハテナア。
　ト思案の所へ、喜多作、一本差し、窺ひ出て、内へ入
　ろ。
喜多　何もかも樣子は聞いた。親仁の起り、北國七ケ國の
　大名になると、底を叩いた謀叛の企て、この通り注進す
　る、待つて居い。
三人　エ、。
　ト悧り
喜多　と走る所を走らぬは、貸した金が惜しさと、色事が
　したさ。有やうはお娘に首ッ丈。何も相談ぢや、いつそ
　おれを爰な聟にして下んせぬか。すりやおれも、惚れて
　居るお娘の手に入る事。男は親、親の惡事を訴人せう筈
　もなし。これまで仕送つた金も敷金に直して、ずる／＼
　べつたり。下女には惜しいこのお雪も、直ぐに引上げ、
　われらが妾。右と左に月と花。お雪もよもや否でもある
　まいし、又こなさんも淋しけりや、十夜に一度は孝行の
　爲、廻りもせう。達者作りを相談する氣はないか。但し
　は否か。否とあれば、見た事、聞いた事ある事ない事、
　將軍家へ訴へようか。
小谷　サア、それは。
喜多　聟にしやるか。
小光　サア。
喜多　訴人せうか。
三人　サア、
喜多　サア／＼、婆さん、返事はどうでござんすぞ。
小光　成る程、聟に取らう。
ゆき　エ、、それでは。
小光　是非に及ばぬ。仲の惡いは意見の爲。幼な馴染みの
　夫の大事。マア、其方も、一旦
小谷　イエ、得心はなりませぬ。

ゆき　でも、旦那の御難儀。あなたの爲には現在の
小谷　親にも替へぬは、ならぬと云ふ。
ゆき　して、その樣子は。
ト六段戀慕の合ひ方になり、向うより、新吾、虛無僧にて尺八吹き出る。この間に、小谷、燕の巣を下ろし、持ち出て
小谷　わたしの心は、この燕の巣。お雪、母樣、これを見て下さんせ。
小光　この燕の巣を。
ゆき　お前の心とは。
ト新吾、門口に立つて、矢張り尺八吹いて居る。
小谷　昔山城國の仕人、一人の娘を持ち、聟入らせしその後へ、又の夫を合はせんとす。
喜多　丁度おれがやうな、よい男であつたであらう。
ゆき　その家に巣を作り、子を生む燕のありしを取り、我れに異夫を進め給はじ、先づ試みにその燕の、雄鳥を殺し、妻鳥に糸を附けて印とし
小光　その明けの春を待ちしに、その雌鳥は來れども、雄鳥をくする事もなく、
小谷　巣は作れども子も生まず

ゆき　兩親はこれを見て、後の夫に斷わり立て
喜多　變替へしたとは、ぎえんの惡い。
小谷　サヽ、その古事がわたしがお返事。
小光　すりや、云ひ交した庄助に
ゆき　操を立てる
小谷　女子の誠。
小光　その庄助は何所に居るぞ。
小谷　エヽ。
小光　サヽ、行くへも知れぬ庄助に、なんぼう誠を立てたと云うて、眼前親の罪科に沈むを見捨てゝ、親子の道が立つか。母が惡い事は云はぬ、得心して夫を持ちや。
小谷　ぢやと云うて、庄助どのへ。
喜多　その庄助が行くへ知つて居るか。
小谷　サア、行くへは知らねど。
ゆき　そんなら、マア、親御樣の御難儀を。
小谷　サヽ、それは。
喜多　訴人せうか。
小光　祝言しやるか。
ゆき　但しはお否か。
兩人　サア〳〵〳〵。

喜多　エヽ、アタ邪魔な。いつそ訴人を。

ト駈け出す。

兩人　ア、コレ、待つて。

喜多　イヤ、面倒な。

ト振り放し、ツカ〳〵表へ出る。新吾直ぐに喜多作を取つて投げ、また來るを、尺八にてポンと眉間を割る。喜多作、蘇枋になつて倒れるを、皆々、新吾を見て

二人　ヤア、あなたは。

新吾　廻國の梵論字。越路の雪に降り込められ、思はず頼りしこの家の軒。袖振り合はすも他生の縁。女儀の難儀と見請けしゆゑ、ちよと挨拶いたさうと存じて。

小光　これは〳〵、御深切。そこは門中、吹雪も繁し。

新吾　イカサマ、當國の鎌鼬、暴風には甚だ難澁。苦しからずば暫時の宿り。

小光　貸さいで何と致しませう。マア〳〵、これへ。

新吾　然らば御免下されい、

ト通る。喜多作この間に頭を抱へ、起き上がり、鉢巻をして、新吾が側へ大胡坐をかき

喜多　ヤイ、素燒きめ、おどれ、マア、おどれ。かけも構はぬ所から出くさつて、なんでおれが頭を、斷りなしに割りさらした。

新吾　イヤ、頭を割つたは些細な事。その頭が胴に附きあるが仕合せ。彼れこれと云ふうちには、その首は胴と遙かに別れて飛び散るぞよ。ハテ、不便千萬。ハヽヽヽハ。

喜多　イヤ、此奴が〳〵。人の頭を割つて置いて、げらげらと、わりやをかしいか知らぬが、おりや痛いわい。なんで又、おれが頭は、胴と遙かに別れて飛び散るぞ。その譯聞かう、虛無僧め。吐かしやうが惡いと、この越後の荒海へ、天蓋ながら抛り込んで、漬け松茸にしてこますぞ。

新吾　すりや、その譯が聞きたいか。

喜多　オヽ、聞かしや。その譯はどうぢやい。

新吾　以前フト云ひ交して、その後、當國を立退いた夫庄助。小谷、久しいな。

ト天蓋を取る。小谷見て

小谷　お前はついぞ

新吾　ハテ、コリヤ、女房。イヤサ女房。見知らぬと云へばこの場の難儀。イヤ、悋氣であらうなア。久しく便り、音信も致さぬゆゑ、外に異妻を重ねたかと、腹立ちゆゑ

詞を交さぬとは、ハヽヽヽヽ、ハテ、氣の狹い。
小谷 エヽ、成る程、この場の難儀。イヤ、悋氣ぢや。アイ、わしや悋氣するのぢや。ナウ、お雪。
ゆき さうでござります。ほんに久しうお逢ひなされず。思ひも寄らぬ。サア、思ひも寄らぬ所で、御深切な今のお詞。それで餘り腹が立つて、ツイ、お顏をお忘れなされたのでござりませう、ナア申し。
小谷 さうぢやわいなう、ほんに好い所へ、よう戻つて下さんしたなのう。
小光 ムウ。そんならあなたが犨の庄助どのか。
喜多 イヽヤ。そんなとび食ふのぢやない。この場の難儀を救はうと、いゝ加減の出鱈目せりふ措けよ。そんな事くふ喜多作ぢやない。うぬは、マア、一體、どこの馬の骨ぢや。爰の親仁は大それた謀叛人、その肩持ちや、うぬも同罪。打ち殺して頭の返報。
ト切つてかゝるを、刀もぎ取り、ひた〳〵と井戸の端まで追ひ詰め、トヾ喜多作を切り倒し、井戸へ抛り込む。三人慟り
三人 それは。
新吾 苦しうない。犨庄助が密夫の成敗。斯樣の奴を生け置いては、其許達の夜が寢られぬ。サ、そこを察して殺害せしが、卽ち身共が結納の印。御老母、御受納下されうや。
小光 成る程、と申したいが、所詮娘が
ゆき よもや斯うとは仰しやるまい。
ト兩人こなし。
小谷 母樣、得心いたしました。
小光 ヤ。
小谷 どうやら奧床しいこの庄助どの。犨にして、いつそ打明けたら、サア賴もしさうな好い男、わたしや祝言いたしますわいなア。
ゆき 申し、祝言なされうといな。
小光 オヽ、出かしやつた〳〵。外へは出されぬ大事の花犨。其方の得心しやるからは、
ゆき 御祝言の用意は、わたしがよろしう致しませう。
小光 オヽ、待女郎にも、仲人にも、打つたり舞つたり其方一人。わしは又軍書の役。奧で夕時のお勤めせう。娘、隨分犨どのに、ナウ、心を附けて、御馳走しや。
小谷 畏まりましてござります。
新吾 然らば娘御、お雪とやら、今宵は大儀。

ゆき　なんのマア。めでたい今宵。そんなら聟様。
小光　萬事は後に。お雪、おぢや。
ト唄になり、小光こなしあつて、お雪を連れ、奥へ入る。後合ひ方。小谷思ひ入れあり。
小谷　イヤ、申し、間に合せの庄助どの。尤も人の難儀を見かねて、救うて遣るも慈悲善根、情の道とはいひながら、人を殺して難儀を救ふとは、ちつと救ひ過ぎたお前の心底。わたしや合點が行かぬわいなア。
新吾　ハ、、、、。これ程合點が參りあるに。
小谷　合點が行たとはえ。
新吾　惚れたに依つて。
小谷　エ、。
新吾　いつぞや都、柴田どの、旅館に於て。
小谷　エ、、なんと。
新吾　田舍めいたる取なりと、主人が噂に聞き及び、見ぬ戀に憧れて、尋ねて爰へ越路の入方。サア、入り聟には不足なし。婚禮がしてもらひたい。
小谷　イエ、そりや嘘ぢや。
新吾　何がなんと。
ト小谷こなしあつて、糸櫻の枝を手折り來て
小谷　お前の心はこの一枝。
新吾　ムウ、この一枝を身が心とは。
小谷　人は武士、花は櫻木といへど、この糸櫻は風に從ひ、彼方へも靡き此方へも。武士に取つては表裏の侍ひ。サア、わたしに惚れたの、なんのかのと、詞の花は飾らしやんしても、表面ばかりの作り花、心の底は仇花と、花實の薄い、心の底でござんせうがな。
ト新吾、雪持ち竹を切り取り
新吾　身が心底はこの雪持ち竹。
小谷　雪持ち竹を心底とは。
新吾　松に古今の色なし。竹に上下の親子の仲を、隔つる雪は雪ぐとも讀む。ナア、挑み強みし親竹の、頭の雪の積し罪科も、得道といふ節さらへにて、打ち拂へば清き竹の正直。サ、その直ぐなる竹の子の、雪中に得る孝行にめで、暫時猶豫の其うちに、受取り歸る聟引出物、とくと承知でござらうの。
小谷　聟引出物を渡せとは。
新吾　「越路なる、入方村の白雪に、降り埋みしと人は知らじな。」
小谷　ヤ、なんと。

新吾　三輪五郎左衛門が家の子、長岡新吾が曠れの聟入り。嫁御寮、三々九度にならぬやう、色直しを相待ち申す。

ト唄になり、新吾、竹を投げ出し、思ひ入れあつて、納戸へ入る。後に小谷、うつとりとこなしあり。氣を替へ

小谷　すりや、モウ、今宵が。ムウ、さうぢや。

ト合ひ方になり、小谷、竹を持ち、思ひ入れあつて奥へ入る。ト右の井戸の縁へ鍵繩を懸け、喜多作ヌッと首を出し、飛び上がる。臆病口より、小次郎兵衛、橋がかりより彌五四郎、ひそ／＼出る。喜多作、呼子の笛を出し、吹き立てる。納戸より、新吾出て

三人　新吾どの。

新吾　シイ。

ト押へ、皆々あたり見廻し

喜多　我れ／＼斯く姿をやつし、この所へ入り込みしも主人のお指圖。

小次　この家の主、與惣太夫が底意を探り

彌五　二つには、紛失せし雄獅子の印を詮議の爲。

喜多　して、貴殿には、件の寳の隱し所、手懸りでも出來ましたかな。

新吾　なか／＼一應では相知れませぬ。併し、この家を離れぬ寳の吟味。其許方は、コレ。

ト喜多作に囁く。また彌五四郎に囁くうち、喜多作は小次郎兵衛と囁く。

兩人　如何にも。

三人　必らず合圖を違はぬやう。

新吾　行きやれ。

三人　ハッ。

ト三人橋がゝりへ入る。新吾あたりを見廻し、鍵繩を出し、手繰り、井戸へ引き懸け、飛び込む。ジャンジャンの半鐘、本釣り鐘にて暮れ六ッを打つ。絹張りの月出る。雪チラ／＼と降る。琴唄にて、御殿の御簾卷上がる。曾六、銀燭臺を二本持ち出し、御簾屋體、よき所へ直し居る。此うち反古貼り障子の内より、お雪、角行燈に火をともし、提げ出る。曾六を見て思ひ入れあり。

ゆき　コレ、こちの人。

曾六　なんぢやい。

ゆき　用がある。ちよつとござんせ。

曾六　イヤ、用もない。行く事もない。

ト入らうとするを、お雪ツカ／＼と行つて、胸倉を持ち引廻し

ゆき　ハテ、待たんせと云ふに、

ト突き出す。

曾六　コリヤ／＼おのれ。此方の領分へ踏ん込んで、どうしをる。

ゆき　ほんに、お前もお家様の内へ入らす事はならぬ。

曾六　そんなら待て。入れ替つてせりふするワ。

ゆき　入れ替らんせ／＼。

ト兩人入れ替り

曾六　さて、なんぢや。

ゆき　コレ、こちの人。こなさんは／＼。今さら云はいでも知つて居やしやんす通り、日頃からちつとゝやつとゝ、ちやう／＼しい旦那様、去年の暮から、何を思ひ出してやら、急に大名になると云うて、ソレ、其やうに、雛祭りの内裏様見るやうな普請をして、いろ／＼の奢り我まま。お家様はそれを苦にして、さま／＼と御意見なされても、却つて逆に聞入れもあればこそ、もうお家様も愛想つかして、あの一間に引籠り、御不自由なお暮し。最前も最前とて、喜多作どのにせがまれてござるのが、お前の目にはかゝらぬかいなア、見えんかいなア。

曾六　コリヤ、ヤイ、それ程の事が見えないでならうか。目が二つあるわいやい。

ゆき　サア、そんならなぜ初手から云ひ合した通り、父御にも附き、母御にも附いてござる小谷さま、心の底を見屆けるまで、わしは御不自由なさるゝお家様の手助けをせう程に、こなさんは旦那様に附き添うて、餘所ながら御意見して、御夫婦仲も睦ましう、直しまして下さんせと、合點づくでお前もわしも、引別れて居るぢやないかいなア。

曾六　知れた事を吐かす奴ぢや。

ゆき　サア、その知れた事を、なぜ請合はした通りにさんせぬぞ。女房は水仕の荒仕事、こなさんは此やうな結構な衣服を重ねて着て、榮耀榮華が面白さに、お主の事も、女房の事も、忘れ果てゝ居やしやんすかいな、こちの人。

曾六　それ忘れて堪るもんか。常住われと寢たおれが、今は飼ひ放しの獨り身で、夜になると淋しいにつけ寒いにつけ、われの事を思ひ出すは思ひ出すけれど、意見せうにも、あの旦那どのゝ顔を見い、一體怖い顔を睨み廻されると、怖けてひよつと云ひそぐれ、今日は云はう、明

日は云はう、てんぽの皮、云ひ出してくれうと思ふう
ち、ヤイ、曾六め、追ツつけ大名になるこの輿惣太夫、
おのれもこれまでの忠義に免じ、家老に取立つて遣らう、
着物がむさい、着替へ居れいやい、と云うて、ちやんと
こんな金繖の葬禮行きに着替へさせ、あの人の膳の剰り、
エヽ、旨いぞい。それでツイ、怖いのと、食ひ物に釣ら
れて、それで異見がいはれんやうになつたのぢや。

ゆき　イヽエ、さうぢやござんすまい。隣り村の女按摩の
お紋、旦那様の氣に入つて、ちよこ／＼來る度、こなさ
んと味な目遣ひ。わしが見附けて置きやんしたいなア。

曾六　サア、そりやア、アノ、たつた

ゆき　たつた

曾六　二度ぢや。

ゆき　ソレ、見やんせの。

曾六　なんのへちにわれと別れてから、ひだるうはある。
ひだるい時にまづいものなし。据ゑ膳食はぬと、芝居の
女形は男のうちぢやないわい。

ゆき　エヽ、憎てらしい。あの口合ひの愚かしい癖に、惡
性な。アタ／＼油斷のならぬ。

曾六　イヤ、此奴が／＼。云はせて置けば案外千萬。既に
歌にも「こちの隣りのみつちやくちやの娘、誰がこつく」
と詠んだ例もあれば、一度や二度は男の高下。何ぞいふ
と二言目には、愚かしいの、阿房のと、男に恥辱を恥か
しめるな。コリヤ、以前の曾六とは違ふ。追ツつけ旦那
様が大名にならんすと、御家老職の隨一。名も長うなつ
て、まゐらせ曾六、なんと好い名であらうがな。

ゆき　サア、それがまだ、さうなる事やら、ならん事やら、
先も見えぬ丁半の當存み。

曾六　ヤア、又しても出世の邪魔する憎くい女め、われが
やうな七むづかしい女子は嫌ぢや。去つた去つた、七生
までも去りこくるぞ。

ゆき　オヽ、わしを去つてお紋を後へ入れうでの。さうは、
マア、ならぬわいなう。

ト曾六を引き廻す。

曾六　イヤ、われは假初めにも男を振り廻して

ト見て

また此方の御殿へ入り居つたか。

ゆき　お前が此方へござんすわいなう。

曾六　早う出されやい。

ゆき　こなさん、出やんせ。

曾六　オヽ、出るワ〳〵。サア、出たワ。
ト入れ替る。
ゆき　わしも、モウ、出て行く。
ト入れ替る。
サア、暇の狀、書かんせ〳〵。
曾六　最前ほつとしたゆゑ、一本書いた。さう〳〵はかけんわい。
ゆき　エヽ、どんくさい。
ト有り合ふ桶を取つて拋る。
曾六　なんぢや、コリヤ、投げ打ちか。面白い〳〵。
ト横鉢卷して
うぬに負けてゐやうかい。
ト最前の膳部を拋る。
ゆき　さうさんすりや、斯うぢや。
ト莨盆拋る。
曾六　イヤ、おのれは。
ト箒にて打ちかゝる。お雪、釣瓶にて留める、立廻りのうち小谷出かけ、最前より窺ふ。と上の月、黑うなる仕掛け。前の岩穴より、ハッと掛け煙硝燃える。金色立ち、櫻散り、雪降る、右一時の模樣。合ひ方凄うなり
曾六　ヤア、これは。
ト兩方へ分れ、キッとなる。西の隅、屋體の簾卷き上がる。與惣太夫立ち身。反古貼り明け、小光窺ふ。小谷眞中へキッとなつて
小谷　ハテ、合點の行かぬ。この入方の陰火は、普ねく人の知れるところ。然るに去年の始めより、この火出づる事なく
ゆき　いま五月雨の頃ほひまで、降り積む越後の雪國に、遲咲きながら糸櫻の、盛り爭ふその風情。
曾六　お月樣が此方の屋根までござると、俄に眞黑にならつしやると、常に陰火の出るこの岩穴から、小判の光りがするは
小谷　唐土の卞和が、玉を懷いて臥す時は、常に金氣立ちしと聞く。
ゆき　殊に御殿のあたりは、この大雪にも積る事なく
曾六　かみ樣の庭は矢ッ張り大雪。
小谷　それ日の蝕は月の影に蔽はれ、月の蝕は地の陰に蔽はる。
ゆき　この家の棟に滿月の光りを隱す奇瑞といひ

曾六　火は出ずに、小判色の光りが出るは
小谷　これ正しく火剋金。
ゆき　櫻の盛り。
曾六　お月様の不思議。
小谷　雪の知らせは
ゆき　取りも直さず
曾六　月
小谷　雪
ゆき　花の
小谷　三つに表はす天のお告げ。
三人　そんなら
トお雪、與惣太夫を見る。御簾ばつたり。曾六、小光を見る。障子ぴつしやり。三人顔見合す
小谷さま。
小谷　コレ、何にも云はずと、おぢや。
ト唄になり、三人納戸へツイと入る。後、樂入りの合ひ方、與惣太夫、小光そろ〳〵出る。
與惣　今の不思議、娘めがちんぷんかんは解せぬ。なんでも油斷がならぬわい。
小光　親仁どの。
ト與惣太夫構はず行かうとする。お雪出る
ゆき　コレ、申し、旦那様。
ト取りつく。
與惣　うぬら、また意見ぢやな。死にぞこなひの冬の蠅めら。ぶう〳〵と耳の傍で、とこぼえるが喧ましさに、別間をしつらへしも、顔を見まいおれが料簡。それに又
小光　云ふまいと思へど今の前表。意見をするも幼な馴染のこなさんが大切さ。
ゆき　お主大事と存じまするゆゑ。
小光　聞きとむなくとも、これぱつかりは
ゆき　マア、お聞きなされて、
小光　下さんせいなう。
ト與惣太夫、睨みながら、二重舞臺へ上がり
與惣　平藏、彌五郎兵衞。蒲團、煙草盆持てやい。
兩人　ハア、。
ト兩人、褥、煙草盆、刀掛けに太刀を直し置き、入る。
小光　こちの人。お前、天命といふ事知つて居やしやんすか。お前は
ト與惣太夫、物云はず、灰吹きコツ〳〵いはして居る。
ゆき　正直は一生の寶。

小光　堪忍は家の相續

ゆき　慈悲はその身の祈禱。

小光　酒と色と諸勝負を敵と思へ。

ゆき　掟に怖ぢよ、火に怖ぢよ、分別なき者に怖ぢよ。

小光　九分は足らず、十分は溢るゝと知るべし。

ゆき　昔の將門

小光　最前讀んだ三國志の董卓。

ゆき　奢りに身を果たした例し。

小光　こなたは合點が行かぬか。イヤ、行きませぬかいなう。

ゆき　アレ、御覽じませ、お家樣の、あの垢づいたおひえに引替へ

小光　綾錦を纏はしやつても、高が百姓の與惣太夫どの、わしが目からは呵責の脫衣。

ゆき　七寶を鏤めて、お建てなされた殿作りも

小光　野原の草に野干の棲家。

ゆき　昨日の奢りは今日の夢。

小光　覺めての後を思ひ計り

ゆき　お家樣の御意見を聞き入れ

小光　御本心に立返つて下され、コレ、與惣太夫どの。

ゆき　旦那樣

小光　エヽ、淺ましい

二人　お心がやなう。

ト泣く。與惣太夫、この間莨のみゐて、爰に莨のみしまひ

與惣　もうそれでよいか。うぬもおう、胡弓の絲はそれでとまりか。百姓與惣太夫とは、緩怠な一言。おれが先祖は斯波の武勝、三管領の隨一であつたを、朝倉小田に國を取られ、次第に威勢衰へ、祖父が代より土百姓とまで成り下がりし、先祖の鬱憤晴らさう〳〵と思ふ折から、娘小谷ととち狂ひし鷹匠の庄助め、此奴一器量ある奴と見込みしゆゑ、五年前密かに呼び寄せ、彦勇の名乘りして、小田家へ入り込ましたが、思うたに違はぬ偉い奴。いま世間で鬼と呼ばるゝ、柴田修理介勝重といふが、彦の庄助。

二人　エヽ。

與惣　なんと肝が潰るゝか。彼奴が心底に大望あるゆゑ、おれに便つて斯波の系圖を借り受け、立身して四海を一呑み。その時にやおれも元の斯波與惣太夫、北國七道の太守にせうと堅き約束。その上大切の物を預かつて置い

たが、もう庄助は七十萬石の大名、小田の執權、今一飛びで天下取り。おりや又七ヶ國の主となる。もうコレ、十が九つまで上つたと思ひや、餘命なきこの親仁、氣が焦つてならぬゆゑに、この普請をしたも、一日も早く大名になつた心。また大名になつた時、附合ひに場打てせぬ下稽古といふもの。それに何のかのと非難を附け、立身出世の幸先を挫く、こな貧乏婆め。それに附き添ふしみつたれ女郎。何にも吐かすな意見聞かぬぞ。否だぞ。用ひぬぞ。何を猪口才な。

小光　それ〳〵、その固意地ゆゑ、現在血を分けた歩左衞門も、こなたを見限り、遂には家出。

與惣　惡事も知らぬ倅歩左衞門め、又してもうぬに似て、意見立てが小面倒さに、ぼいまくつたが、何とした。

小光　今ではわたしが苗字を附けて、河田歩左衞門と名乘り、健やかに生ひ立ちしと娘が噂。こなたが本心に立返り、歩左衞門も呼び返し、夫婦親子四人とも、睦ましう暮らしてこそ、世に住みし甲斐もあれ。

ゆき　忠義を盡す樂しみもござります。

小光　生きて詮ないこの長生き。

ゆき　長らへて憂き目を見やうより

小光　早うお迎ひは來ぬ事かいやい。

ト泣く。

與惣　大事を聞いたうぬら、生きたいと云うてももう、生けちや置かぬに、死にたいとはよい覺悟。早うくたばつてしまひ居らう。

ゆき　すりや、どのやうに申しましても

小光　これ程までに意見しても

與惣　馬の耳に風。

小光　胡馬北風に嘶くも

ゆき　故郷を慕ふと聞くものを

小光　妻子の別れも

ゆき　家來が歎きも、思ひやるお心はないか。

小光　エヽ、こなたはなう〳〵。

ト泣く、氣を替へ

思ひ切つた

ト懷劍出し

與惣太夫どのが呵責の魁け。

ト自害する。お雪も剃刀を出し

ゆき　冥土のお供。

ト同じく突き込み、苦しむ。兩人を與惣太夫、矢張り

構はず、外さぬ顔して居る。曾六走り出て

曾六　ヤア、お家様。女房ども。こりや自害して、死ぬるかいやい。

ゆき　こちの人。

曾六　ヤア／＼／＼。

ト泣く。介抱する。

ゆき　お前にも斷わらず、わたしが死ぬるも、

小光　わたしが自害も與惣太夫どの、お前を本心にしたいばつかり。

與惣　カウッ、明日の朝飯は何を云ひ付けたものであらうぞ。

ゆき　女夫の者がこれまでの御恩報じ、命を捨てゝの御意見。お前も共々お諫め申して下さんせ。

曾六　合點ぢや。

ト與惣太夫の側へ詰めかけ

コレ、旦那

ト與惣太夫が睨むゆゑ

さん、阿母様や女房が、あの様を見て下んせ。これといふもお前の悪心。薬燿食ひから起る事、わしもしまひはどうで、こんな事があらうと思うた。

ト泣く。

わしがこんな形で附き添うたも、こなさんに意見をせうせうと思うても、ツイ怖さにそれなりにして、暇が入つたばかりに阿母といひ、女房まで、これは又、酷い目を見る事ぢや。サア、たつた一言、根性直したと云うて下さりませ。安堵させて葬禮が出したい。旦那どの、どうぞ。土根性を入れ替へて、もう大名事は止めて下んせ。コレ、拜みます。

ト手を合せ、あちこちして頼む。與惣太夫、莨の煙吹きかける。曾六、莨にむせながら、いろ／＼あちこちして

これほど云うても聞分けないか。エヽ。

ト力んで

エヽ／＼。エヽ、、、

ト泣いて

餘りぢやわいの／＼。此やうな酷たらしい目を見ても、莨ばかりのんでゐて、それ程こなたは莨が旨いか。此やうに喚いても、聞く耳はないか。エヽ、胴慾な人ぢやなう。

ト大泣き。

與惣　明日は若い者どもを寄せて、雪の中で角力を取らせ、それを樂しみに南都の霰酒、雨魚の吸ひ物。ムウ、こいつはよいワ。

小光「雨あられ、雪や氷りと隔つれど

ゆき　落れば元の谷川の水。」

小光　南無阿彌陀佛。

ト兩人いろ〳〵あつて落入る。

曾六　ヤア、こりや阿母樣御入滅か。女房も、もう死ぬるのか。コレ。

ト兩方の死骸を見て、ウロ〳〵して

ハアヽ。

ト泣き倒れる。

與惣　アヽ、ほつとりと退屈した、ドリヤ、奧へ行て酒にでもせうわい。

ト立つを、曾六、ツカ〳〵と行つて、裾をキッと捉へ

曾六　コレ、旦那樣。

與惣　なんぢや。

曾六　こなたのとち根性が直らぬばつかりで、阿母樣といひ、いとし可愛い婢めまでが、あの死ざま。エヽ、こなたはお主でなくば

與惣　どうぞするか。

曾六　どうも、エヽ、せぬわいの。

與惣　うぬがせいでも身共がするわい。

ト太刀を取つて抜きかゝらうとする。小谷、補襠改め、三方に最前の竹を載せ、ツカ〳〵と持ち出て、與惣太夫を突き廻し、曾六をポンと當てる。曾六ウンと倒れる。與惣太夫おこつくを、小谷三方を突きつける。兩人きッと見得。

小谷　父樣。

與惣　娘。そちや最前からの樣子を

小谷　殘らず承りました。

與惣　母の別れ、そちや悲しいか。

小谷　末の露、元の雫や世の中の、早いか遲いか、どうで一度は。

ト泣き、こなしあり。

與惣　見りや三方に雪持ち竹を載せ、衣服補襠を改め、曾六めが吸呼を止めたは。

小谷　人に聞かさぬ大事の密談。

與惣　ナニ、密談とは。

小谷　父樣、出して下さんせ。

與惣　出せとは何を。
小谷　雄獅子の御判を、早う爰へ出して下さんせいなア。
與惣　イヽヤ、そんな物は知らぬ。
小谷　知らぬとは云はせませぬ。最前の月蝕の不思議とい
ひ、時ならざる庭の櫻の盛り。
與惣　イヽヤ、月の曇りも、花の咲くも、大名になる身共
が威勢ぢや。
小谷　云はしやんすな。この御殿ばかり、この大雪の降り
積らぬは、陽氣の御判をこの池に埋めしゆゑ、陰火は押
され、消え失せて、金氣の立つも寶の奇瑞。
與惣　ムウ、サ、それは。
小谷　なんと違ひはござんすまいがな。
與惣　ムウ、如何にも寶は身共が隱し置いたが、また身共
が寶を隱し置くを、うぬ、娘の身を以て、その詮議して、
どうせうと思ふ。
小谷　ハテ、知れた事。お前の本心聞いた上、及ばずなが
らわたしも荷擔人。
與惣　ヤア、そんなら、其方も。
小谷　親夫と同腹中。
與惣　そりや、アノ、ほんまか。
小谷　先立たしやんした母様より、殘るお前が猶大切。
與惣　如何にもさうぢや。
小谷　殊に夫と一味同心の父様、猶孝行盡さにやならぬ。
與惣　それ〱。
小谷　この三方の竹も合體の印。父様を祝うての獻上。
與惣　よし〱。
小谷　故實の通り戴いて、弓手の脇腹へガバと突き立て
與惣　面白い。
小谷　馬手へキリヽと引き廻し
與惣　ヨウ。
小谷　潔う生害なされて下さんせいなア。
ト泣く。
與惣　おきやアがれ、とち女郎め、追ッつけ北陸道七ヶ國
の大名になる與惣太夫に向つて、腹切れなどとは何の囈
言、見るもなか〱穢らはしい。この三方、うぬが手づ
から突き付けたは、親を殺すも同じ大罪。竹の鋸で引
かれたいか。コナ不孝行者めが。
ト三方を踏み碎く。
小谷　サア、そのお前の底企み、七ヶ國の大名にならうと
思うて居やしやんす、後ろ楯の夫庄助どの、いつぞや

都今出川の旅館に於て、三輪五郎左衛門が爲に叛逆現はれ、遂に敢ない御切腹。

與惣　ヤ、、なんと。

小谷　折よくその時廻り合せ、

　ト懐中より一巻を出し

コレ、この斯波の系圖も受取り、預けし寶を其方取り返しくれよと遺言。殘る一首の歌「越路なる入方村の白雪にふり埋みしと人は知らじな」と、形見の一句が夫婦の別れ。それよりその場を切りぬけて、戻つても、今日までそれと明さぬは、寶を深う隱さしやんす、お前の心を探らう爲。サア、夫の遺言、雄獅子の御判を、わたしに渡したとても、腹はえゝ切らしやんすまい。わたしも有やうは大事の父樣、助けたいは山々、また後は氣遣ひさしやんすな。萬事はわたしが及ばずながら、よろしいやうにいたします。サア、早う寶を渡して爰を落ち延び、賤山賤とも身をなして、命全うして下さんせいなア。

與惣　ムウ、すりや獅庄助が多年の大望、一時に顯はれ、都に於て切腹して相果てたか。それでは身共は大名にもなられず、樂しんだ事は皆ぐりはま。ヤア／＼／＼。

　ト大きに仰りする。遠責め打ちかゝる。與惣太夫びくびくする。小谷、キッとこなしある。與惣太夫、慄へ出し

與惣　娘々。ア、、、あの太鼓や鉦は。

小谷　三輪五郎左衛門が多勢の人數、雄獅子の印を奪ひ返し、謀叛人のお前を取り逃がすまいと、入方を取卷く攻め鉦攻め鼓。

與惣　ヤア、、、、、、。

　ト腰抜かす。

小谷　これぢやに依つて最前から、寶を渡して立退かしやんせと云ふに、ぐづ／＼と。サア早う、寶を渡して落ち延びて下さんせ。サア、立退いて下さんせ。

與惣　イエ、さう云うて騙して寶を取らうでな。これ渡しては便りない。滅多には渡しやせぬ。

小谷　エ、未練にござんす、父樣。最前からぐづ／＼として、御判の在所は何處に。早う云うて下さんせ。エ、エ、、コレ、申し、父樣。

　ト云うても與惣太夫、物云はず、隙を見て逃げ出す。

　小谷留めて

待つた、父樣。して、雄獅子の御判は。

與惣　そこ所ぢやないわい。

ト前の岩穴へ飛び込む。

小谷　すりや、この岩穴より兼ねての拔け道。エ、御卑怯な。さうぢや。後を慕うて。

ト行かうとする。新吾、井戸より、凛々しき形にて、首を咬へ出て

新吾　待つた、謀叛人の荷擔人、與惣太夫は、拔け道に待ち受け、斯くの通り。

ト首を抛り出す。

小谷　すりや、父樣は、はや御最期か。

新吾　この上は叛逆の張本、柴田勝重が妻小谷、御判を渡して繩かゝれ。

小谷　例へ御判は手に入るとも、陪臣の其方に渡さうや。

新吾　異議に及ばゞ、ソリヤ、者ども。

大勢　ハアヽ。

ト出て、取卷き

動くな。

新吾　疵つけぬやう、搦め捕れ。

捕手　やらぬぞ。

トどんちやん早め、立廻りちよつとあつて、皆々を追ひ込み、新吾かゝるを、立廻りにてとまり、糸車のつむを手裏劍に打ち、疊を蹴上げ、隱れる。新吾キッとなる。所へ、喜多作、小次郎兵衞、彌五四郎、凛々しき形にて出て

喜多　家内いろ／＼詮議すれど、御判らしき品は、一向に

三人　相見えませぬ。

新吾　ハテ、心得ぬ。何にもせよ、其許方は、小谷を狩出し。いま一吟味。コレ。

ト囁く。

喜多　如何にも。兩人、來やれ。

ト喜多作、彌五四郎、小次郎兵衞を連れ、疊切り穴へ飛び込む。新吾こなしあり、奧へ入る。曾六、息吹き返し

曾六　ヤア。こりや誰れも居ぬワ。小谷さま。旦那樣。

ト云ひ／＼、あちこちして、よき所にて、與惣太夫が首を蹴散らして、愕りして、取上げ

ヤア、旦那どのも、こりや、ごねたか。惡い人でもお主はお主。さうぢや。

ト首を風呂敷に包み脊負ひ、立つては轉け立つては轉け居る所へ、捕り手大勢

捕手　首を渡せ。

晉六　否ぢや、待ち居れ。

ト立つて力足踏む。

サア、もう鬼ぢや。首を渡せと吐かすからは、旦那樣を切つたも、おのれらぢやな。これからは旦那の弔ひ喧嘩、入方與惣太夫が家來に、猿と呼ばれたまゐらせ晉六。うぬら寄つたら、一々掻き捲つてこますぞ、覺悟せい。

捕手　ソリヤ。

トこれよりドンチヤン早め、いろ／＼をかしき立廻りあつて、皆々を追ひ込み、チヨン／＼にて返し。

右道具、時代世話、兩方へ引き分ける。造り物、奥庭の體。植込み、雪積りし體。奥深によろしく、よき所へ井戸をセリ上げる。すべて雪降り、一向物の黑白も分らぬ程降る。この中に、小谷、大童にて、小次郎兵衞、彌五四郎、喜多作を相手に、大立廻り、皆々を當てる。新吾出て、小谷と立廻りになる。よき所へ、晉六出て、小谷を件の井戸へ突き落す。新吾、行かうとする。晉六、腹へ突ッ込み

晉六　コレ、どうぞ。

ト拜む。新吾思ひ入れあり、晉六の首をポンと切り、井戸の端へツカ／＼と寄つて、よろしく見得。トこの前へ塗垂れ塀、屋根に雪つもりある幕を一面に引き、遠責め凄き合ひ方になり、小谷、印を咬へ、よき所へセリ上がり、いろ／＼思ひ入れあつて、向うへ遁がれ入る。

幕

四つ目　大和橋の場

役名――奴、段平。煮賣り屋お德。二合半助。馬士、勘太。同、胴三。權太。同、腕藏。同、喜茂六。金の釆領、拔目内記。住吉の侍ひ、反橋安武内。櫻木和忠太。禿、袖野。同、市彌。同、菊江。傾城、小妻。同、遠里。千本姬。馬子、陀多八。大工、與四郎。牛飼ひ、庄吉。小田三七信孝。

造り物、向う黑幕。松原、上の方に、煮賣り屋店、床几二脚並べ、仕出し大勢腰掛け、酒飲み居る。在鄉唄にて幕開く。

仕一　なんと、皆の衆、蛤の吸ひ物で、えらう入れたら、

きつう面白うなつて來たわいの。

仕二　サア、この微醉ひ機嫌で、皆連れ立つて歸りませう。

仕三　さうしませう。コレ、爰に酒の錢があるぞや。

とく　アイ〳〵、まそつと上がつてお歸りなされませ。

仕一　また來月の卯の日に來ませう。

とく　左やうなら。ようお出でなされました。

皆々　サア、ござれ〳〵。

ト在郷唄にて、仕出し、皆々橋がゝりへ入る。お德そこら方付け、内へ入る。トまた在郷唄になつて、橋がかりより牛飼ひ庄吉、牛の綱を曳いて出て來る。この牛に千本姬、横乘りにして居る。庄吉、本舞臺まで牛を曳いて出る。在郷唄にて

庄吉　申し、女中樣。爰がお尋ねなされました住吉でござりまする。御參詣なされまするなら、御案内いたしませう。

千本　ほんに、マア、しをらしい其方の世話。何を隱さう、自らは、夫のお行くへ尋ね侘び、都の空を振り捨てゝ、知らぬ浪花をうろ〳〵と。斯程住み憂き浮世をば、住吉と聞くも嬉しき御神の御利生にて、どうぞ巡り逢ひたうござるわいなう。

庄吉　それはマア、お笑止なお話し。私しも今日はこの牛に、草を喰ませうと、こつまの邊まで參りました處へ、あなたが道に疲れさつしやりませうと、お氣の毒に存じまして、幸ひの戻り路、お足休めに牛には乘せましたが、結構な小袖を召してござる、あなたさまを牛に乘せまするは、どうやら蟬丸さまを逢坂山へ捨てに行きまするやうで、道連りがなんのかのと、惡口を申しましたてや。

千本　成る程、その蟬丸さまは逢坂山。自らは又この大坂の人目の關を忍びかね、夫の行くへを尋ぬる辛さ。推量して下されいなう。

庄吉　して、そのお尋ねなさるゝお方の名は、何と申しまする。

千本　サア、その名は。

ト云ふうち、橋がかりより櫻木和忠太、討手の形にて、奴、段平、その外家來を連れ出て來て

和忠　ソリヤ。

皆々　動くな。

ト家來皆々千本姬を取卷く。千本姬、牛より跳び下りるを、庄吉圍うて

庄吉　こりや狼藉な、何事でござりまする。

和忠　ヤア、猪口才な童め。その女こそ、小田の娘千本姫。主人瀧川三郎さま、かねて御執心の所に、瀬川采女に云ひ號けと聞き、主人の立腹、奪ひ取つて立歸れと、仰せを受けて櫻木和忠太、京都へ上りし處、采女は出國、跡を慕うて千本姫、浪花の地へ立越えしと、聞くと其まゝ跡を追うて、住吉海道、爰で大江の岸の姫松、めでたいめでたい、奪ひ取つて、和忠太が手柄。ソレ、引ッ立てい。

皆々　ハア、。

　ト皆々千本姫にかゝるを、庄吉、皆々を拂ひ退け

庄吉　すりや、あなたが、小田の御息女千本姫さま。

千本　相違はないわい。

庄吉　申し、お氣遣ひなされまするな。私しが親どもは、小田家に御奉公いたしました歩仲間。本能寺動騒の場所にて手疵を負ひ、故郷淺澤村へ戻つて、今では百姓なれども、小田家は古主、滅多に渡す事はござりませぬ。お案じなされまするな。

千本　ほんに、マア、思ひがけもない主從の緣。そんなら其方を頼んだぞや。

庄吉　心得ました。サア、此まゝに歸ればよし、達て手向ひすると、百姓なれども、腕に覺えの草刈り鎌で、どなたこなたの容赦はないぞ。

和忠　ヤア、憎くい素丁稚め。ソレ、段平、彼奴を打ちのめせ。皆の者は姫を引ッ立てい。

皆々　畏まつてござります。

　トこれより住吉神樂にて、段平、庄吉にかゝるを、草刈り鎌にて立廻り。此うち家來皆々千本姫を引ッ立てようとする。庄吉、段平もろとも皆々を、鎌にて切り立て〳〵、橋がかりへ追うて入る。後に千本姫、焦つて

千本　アヽ、コレ、長追ひしやんないなう。

　ト云ふうち、松原より、喜茂六、腕藏、馬士の形にて出て、千本姫が兩手を取つて

兩人　千本姫どの。

千本　ヤア、其方は。

　ト手を振り拂ふ。

腕藏　三七どのゝ供をして、京地を退き、今この海道で馬士の世渡り。

千本　さうして兄上信孝さまは。

喜茂　伏見の船場で突ッ放したれば、大方大坂へ來て、へちまうて居られうぞいの。

腕藏　いま聞けば、瀧川將監どのゝ御子息、三郎どのが首ツたけ惚れて居らるゝ千本姫どの、こなたを瀧川へ渡して、褒美の金子をせしめるのぢや。

喜茂　マア、おいらに任せになつて、ごんせ〳〵。

トまた手を取る。

千本　エヽ、嫌らしい。聞くもうるさい。其方達も家來の身ながら、自らが手を取つて、慮外者めが。

ト振り放す。

喜茂　ハテ、主も家來も以前の侍ひの時、今は馬方、三文でも金儲けなりや、せにやならぬわい。

腕藏　ハテ、こま言いふ事はない。キリ〳〵と

二人　おぢやいなう。

ト兩人して千本姫を引ッ立てようとする。この時、陀多八、馬士の形にて、ツカ〳〵橋がかりより出て來て喜茂六、腕藏を取つて投げ、また來る所を、双方ともにポン〳〵と當てる。兩人ウンと轉ける。

千本　ヤア、其方は。

陀多　宅間小平太が成れの果。先づ〳〵。

ト千本姫を上座へ直し、押下つて

小田家の御恩を忘れ、順慶に荷擔人したる某、追放の身となつて、一日々々身に浸む主君の御罰。何卒して三七信孝さまのお行くへを尋ね、せめてあなたへなりと、御恩送りを仕りませうと、存じ居りました所に、幸ひ千本姫さまのお目にかゝり、斯樣な喜ばしい儀はござりませぬ。この者どもは三七君のお供を仕りながら、途中にて信孝君を振り捨て、御用金を盜み取り、逐電せしとかねての噂。今また千本姫さまを瀧川へ渡し、褒美を貪らんなどゝ、重ね〴〵憎い者共。お氣遣ひ遊ばされまするな。小平太が參るからは、彼奴等が如何程に致しても、いつかな、あなたを瀧川へは渡しませぬが、千本姫さまには、何ゆゑ當地へお越しなされましたな。

千本　サレバイナウ。母上樣の仰せには、柴田勝重が謀叛に、穩やかならぬ小田の天下。聞けば信孝さまには、浪花の地にお出でなさるゝとの樣子。それを便りに摩崎右膳を連れ、安土御殿を立退く途、瀧川が追手に出合ひ、可哀や右膳も敢へない最期。それより自ら只一人、知らぬ浪花へ來ましたも、兄上樣ばかりぢやない。どうぞ自らが云ひ號けの、瀬川采女に巡り逢ひ、自らが貢ぎも手渡して、女夫になりたい願ひぢやわいなう。

陀多　ヘイ。して、其あなたの貢ぎとは、マア、なんでご

ざりまする。
千本　自らが化粧料として、一千町の御朱印、これをどうぞ釆女に渡し、兄上樣の御在所も尋ねて
陀多　それならばお氣遣ひなされまするな。私しが釆女が在所、大坂中を駈け廻つて、尋ね逢はせませうが、それをお前が持つてござつては惡い。拙者がお預かり申しませう。
千本　そんなら其方に預ける程に、必らず釆女に逢はしてたもや。
陀多　お氣遣ひなされな。追ッつけお逢はせ申しまする。
二人　その朱印を。
ト兩人、陀多八にかゝる。立廻りよろしくあつてとまり
陀多　うぬら、こりや瀧川が家來に頼まれたな。
腕藏　千本姫も手渡しすりや、一廉の金になるわい。
喜茂　オヽ、知れた事。その朱印を手繰つて差上げ
腕藏　われも得心して、その朱印を渡したら、褒美の分け口。
喜多　否と云ふと馬士仲間もこれきり。
腕藏　斧木軍藏が手並
喜多　深山伴作が腕で取つて見せる。
ト三人、タテになり、トヾ付け廻しにて橋がかりへ皆皆入る。後、千本姫殘る。所へ庄吉出る。
千本　コレ〳〵、馬士に朱印を渡したがえゝかや。
庄吉　ムウ。して、その馬士の名は何と申しました。
千本　慥か、陀多八とやら聞いたわいなう。
庄吉　エヽ。馬士の陀多八は、この海道で名うての惡い者。
千本　ヤア。
庄吉　エヽ、ひよんな事をなされました。と云うて、爰に居ては又今の侍ひ。マア、一先づ在所へお供して、陀多八から朱印を取返すは後での事。マア、お出でなされませ。
ト云ふうち和忠太窺うて
和忠　さうはさせぬワ。
トかゝるを、庄吉支へるを、和忠太、庄吉を取つて退け、千本姫を引立てうとする。此うち、庄吉、牛の綱を和忠太が帶に括り附け、牛を追ひ立てる。和忠太牛に曳かれ、「コリヤ、ヤイヤイ」と焦る。牛、逸散に橋がかりへ和忠太を引ッ立て入る。
庄吉　この間に、早うござりませ。

ト合ひ方になり、千本姬、向うへ走り入ると、松蔭より陀多八窺ひ出て、向うを見る。橋がかりより腕藏、喜茂六、そろ／＼出て來て

兩人　小平太どの。

陀多　まんまと朱印はしてやつた。

兩人　なぜ千本姬も一緒に瀧川どのへ。

陀多　イヤ、さうでない。高で今の童めを捻り殺して、姬を奪ひ取るは易けれども、マア、この朱印をしてやつて、千本姬は後での事。時に、わいらに頼んで置いた、羅漢の鐵八が在所は。

腕藏　サイノ、方々と聞き合せたが、阿波座邊にゐるとの噂。

喜茂　その粟田口の鐵八は、京坂に徘徊したいがみ、大分ぼくの高い仕事を働らき、いま配符を以て詮議するといの。

陀多　サア、おれも今その噂を聞いたに依つて、鐵八が在所を搜すも、先達て盜ませて置いた、蛙鑿丸が此方へ欲しい。ひよつと彼奴が捕へられ居つたら、蛙鑿丸は只取られ、何も彼も吐き居ると、この小平太が身の上。コリヤ、鐵八を尋ね出し、蛙鑿丸を受取つて、高ぶけりをさせてくれい。

兩人　合點でごんす。

陀多　コリヤ、又わいらに云はねばならぬ、えらい金儲けが出來たわい。

腕藏　して、その樣子は、どんな事でごんす。

陀多　最前、新在家で聞けば、眞柴久吉、信長どのゝ弔ひに、高野へ三千兩の祠堂金を上ぐるとの事。サア、爰が相談。どうで長町からこの住吉へ來たら、馬を替へるであらう。そこでおれが馬にその金を附けたら、わいらはわざと相對喧嘩に事寄せ、宰領めを叩き殺し、三千兩を三人して分け取りにして、大坂を高けぶり。なんと、この相談はどんなものぢや。

喜茂　面白い。三千兩とは、マア、仕事が大きうて仕甲斐がある。

腕藏　安立町の出端れで、首尾よう宰領を叩き殺したら、大和橋からポンと死骸を海へやつてくりよ。

陀多　オヽ、それがよい／＼。

ト云ふうち、橋がかりより、和忠太、段平、立戻り、この事を聞いて

和忠　ても逞ましい者ども。

陀多　和忠太さま。
和忠　して、頼み置いた姫が事は。
陀多　ふつけた先は淺澤村、何時捕へようと儘な事。マア、それよりは朱印を、奪ひ取つて渡す上は、これを功に瀧川どのへ推擧の儀を。
和忠　それは氣遣ひ致されな。この朱印を一つの功に申し立て、主人瀧川どのへ有りつくは、拙者が胸にござる、御安堵なされい。
陀多　何事も、兎角よろしう頼み存ずる。
和忠　それは承知いたし居る。これはコレ。
　ト朱印を懷中して
さて又、お身達に申し合はす一大事がある。
皆々　ムウ、して、その一大事とは。
和忠　其れ、主人の仰せを受け、小田三七信孝、信雄、この兩人だに打つて捨てなば、幼少の三法師は捻り殺すもいと易し。さるに依つて、先づ三七信孝が在所を聞き出せしに、阿波座田郎助といふ者の方に匿まはれ、毎夜々々新町へ通ふとの風聞。又この程は堺の乳守へ參り居ると聞いたゆゑ、今日これへ參つた。何卒彼奴が歸りを待つて、打ち殺してくれまいか。
陀多　ようごんす。呑み込みましてごんす。コリヤ、かねてより、しまうて取らうと思うて居る三七信孝。わいらも精一杯働らけよ。
喜茂　合點でこんす。自體京地を立退く時、こちらが供して伏見まで來て、そこらで殺らしてこまさうと思うたれど、三七めも、彼奴大抵の奴ぢやない。イヤ、こいつは生なか手向ひ立てしたら、此方の體をしまはねばならぬ、と思うてこちらから云ひ合せ
腕藏　外の近習めらを奈良瀬川の邊で殘らず殺らし、路用の金を盗み取つて伏見から逐電。
喜茂　三七一人を舟に乘せ、路銀は一文無しに大坂へ突き放したから、えらい難儀をしをつたであらう。
陀多　サア、其わいらが仕事を氣取つてゐる三七、生けて置くは怖いもの。和忠太どのに頼まれたを幸ひ、仕舞うて取るが上分別。乳守の戻りを待ち受けて、大和橋で大勢寄つて疊んでしまはう。
皆々　合點でごんす。
和忠　と云うて居るうちも油斷がならぬ。
陀多　こちらが仲間の大勢寄る、大和橋に張つて居て
喜茂　敵はぬ時は、かぶり附いてなりと

皆々　方附けますわいの。
陀多　オヽ、頼もしい〳〵。
和忠　そんならわいらは橋詰めへ行つて、頑張れ〳〵。
皆々　合點でごんす。
ト云ふ所へ、勘太、馬士にて走り出て
勘太　コレ、陀多八、祠堂金の役馬は、われに當つたぞや、
陀多　うまいワ。
兩人　そんならこなたは。
陀多　金箱附けて後から行かう。
和忠　そんなら身共は。
陀多　淺澤村へ行て姫の詮議。
和忠　合點ぢや。
兩人　おいらは大和橋へ。
陀多　行け。
ト腕藏、喜茂六は向うへ、陀多八は和忠太、勘太を連れ橋がかりへ走り入る。返し道具。
造り物、向う淺黄幕。上の方に大きなる橋あり、右は堺の大和橋の見得。橋詰めに茶屋あり、床几出し、煙草盆載せてある。右道具畄ると、和かな唄になると、
向うより信孝、百日鬘に黒羽二重、小田の紋、着流し大小にて出て來る。橋がかりより、反橋安武内、田舍侍ひにて、着付け羽織、大小にて、のか〳〵出て來て、花道よき所にて信孝に行き合ひ、信孝、安武内が大小に目を附け、スッと手を掛け、刀を引き拔く。安武内、悸りして兩手を擴げ顫ふ。信孝、刀をとくと見る事あつて、刀を安武内が前へ拋る。安武内また悸りする。信孝また差添へを引き拔き、改める。安武内、矢張り顫へて居る。信孝、差添へも拋り返し、悠々と本舞臺へ行く。安武内、二本の拔き身を持ちながら、信孝と花道にて入れ替つて
安武　ハテ、怪しからぬ狼藉。大小を
ト鞘に納め、ホッとして
エヽ、命冥加な
ト信孝を見て
エヽ、おれぢやなア。
ト向うへ逃げて入る。此うち、信孝、本舞臺へ來る。
ト臆病口の橋の方より、半助、奴にて、息せき走り出て、信孝に行き當らうとして悸り。信孝、半助が腰の物にちよつと目をつける。半助、袖にて隠すこなし。

信孝半助が首筋取つて引寄せ、一腰に手を掛け引き拔くと、竹光なり、信孝見て

信孝 大馬鹿者め、

ト竹光を抛る。半助、面目なげに頭を掻き、竹光を手早に鞘に納め、向うへ走り入る。信孝、茶店の床几に腰掛け、莨のみ居る。此うち、始終、合ひ方にて、向うより小妻、遠里、傾城、仲居二人、禿、小千代、出て來る。後より、與四郎、木綿やつし、脚絆にて出て來て

與四 これはマア、よい所でお前方を尋ねました。

仲一 サイナア。みつさんはわたしらが、神前に拜んで居るうち、どこへやらお出でたさんしたわいなア。

遠里 又どこぞへ隱れてわたしらに、尋ねさせうと思うてぢやわいなア。

小妻 大方惡洒落でござんせうぞいなア。

與四 イヱ／＼、わたしを御覽じまして、また迎ひに來たかと思うて、それで、一人乳守へお歸りなされたものでこざりませう。

皆々 さうでござんせうぞいなア。

ト云ひ／＼、皆々本舞臺へ來て、信孝を見て

オヽ、爰に居なさるわいなア。

與四 オヽ、ほんに旦那樣。

ト信孝が側へ行き

私しも今日は卯の日なり、住吉樣へ詣つて、次手にあなたをお迎ひ申して戻るやうに、田郎助どのが申されましてござりまする。ほんに好い所でお目にかゝりました。申し、もう乳守へお出でなされずと、阿波座へお歸りなされて下さりませ。

ト信孝、物云はず、莨のんで居る。與四郎、側へ蹲うて

申し、お前はどうしたお身持ちでござりまする。阿波座にござれば、毎晩々々新町へ浸り込み、やうやうこの間は廓通ひも止んだかと思へば、又この間から堺の乳守で居續け、如何にお大名ぢやと云うて、今は御浪人のお身の上。親田郎助はお家來筋でござりまするゆゑ、遊所の諸拂ひに、モウ／＼、いろ／＼の事をして、金の

ト云はうとしてこなし

ちつとは思ひやつて、御放埓をおとまりなされて下さりませえ、申し

ト云うても信孝、取り合ぬこなし。

成る程、折角廓の衆を連れて面白う、住吉詣りをなされました所へ、お迎ひに來た事ぢやに依つて、乳守の衆の手前といひ、お腹の立つは御尤もでござりまするが、また親仁様も尤もでござりまする。内にござれば多くの刀屋を呼び寄せて、滅多無性に刀脇差しをお求めなさるし、外へござれば、廓の遊び。雁木鑢と金の入る事ばつかり。内はもう朝から晩までせがみに

ト云はうとして

大抵やかましい事ぢやござりませぬ。それ程取込んで居ても、お前様を大切に、コリヤ、與四郎、乳守へ行てお迎ひ申して來い、御大切な御身を輕々しうお一人やりましては置かれぬと云はれますゆゑ、私しがお迎ひに參りました。どうぞ親仁様のお心を休める爲でござりまする。コレコレ廓の衆、こなさん達も共々に、お歸りなさるやうに、お勸めなされて下されいの。

仲一　ほんに、先刻にからあのやうに、事を分けて云はしやんす程に、マア、今日はお歸りなさんせ。

仲二　また今度ゆるりと居續けさしやんせいなア。

遠里　廓へはわたしが、よいやうに云うて置きますわいなア。

小妻　住吉様へ詣りがてら、爰まで送つて來たも太夫さんの

神野　館の首尾のよいやうに、マア、今日はお歸り申しませいと云はしやんしたわいなア。

小妻　マア、あの方と連れ立つて

皆々　お歸りなさんせいナア。

與四　ても、さても、こなさん方、よう云うて下んしたなう。なんぼう迎ひに來ても。イヤ／＼、いつまでも歸しませぬといふが、色里の常であるさうな。所をマア、今日はお歸りなされとは、マア、また廓は格別ぢや。その代りに今度はわしがお供して、五日も十日も居續けなさるやうにするワ。なんと氣隨か。サア、申し、旦那様、お歸りなされて下さりませ。

ト云ふ所へ金宰領、着付け、野袴、打裂き羽織大小にて、家來を連れ、向うへ出て來て

内記　ヤイ／＼、方寄れ／＼。

ト云ふ。これにて女形、皆々、與四郎も方寄る。

只今これへ、眞柴筑前守どの、高野山へ祠堂金三千兩寄附なさるる間、往來の妨げ致すか、又は箱に少しでも凶

事があると、わいらキッと曲事申し付けるぞ。

ト云ひ〳〵與四郎を見て

若い者、わりや旅がけの者ぢやよな。

ト懷中より鐵八が人相書を出し、開き、與四郎と比べて見て

ムウ、この繪姿とは相違。コリヤ、ヤイ、この人相書は粟田口に住居いたす、羅漢の鐵八といふ者、盜賊騙りの御詮議あつて、斯くの如きの配符。われ達も似寄りの者あらば、當所の代官まで相知らせよ。合點か。往來に氣を付け、お金箱へ粗忽いたすな。申し渡したぞ。方寄れ方寄れ。

ト云ひ渡し、橋がゝりの方へ入る。與四郎、これを見てこなしあり。

與四　申し、もうお歸りなされませぬか。

信孝　其方は先へ歸り、田郎助に追ッつけ金子を持つて歸ると云へ。

與四　ハイ、さうは申しませうが、その金はどこにござりまする。

信孝　ハテ、どこにあらうと、歸れと云ふに。

ト叱りつける。

與四　そんなら先へ歸りませう。

皆々　わたしらも去なうわいなア。

信孝　オヽ、さうしやれ〳〵。

ト皆々花道へ行きかゝり

皆々　今度お出での時、約束の物おくれえ、申し。

信孝　合點ぢや〳〵。

袖野　申し、どうぞ早うお歸りなされませ。

ト橋がかりへ行きかゝる。

信孝　ハテ、去ぬると云ふに。

小妻　いちま人形忘れなえ。

信孝　よいてや〳〵。

與四　早うお歸りなされませ。

信孝　まだ歸らぬか。

仲二　申し、わたしらが揃へを。

信孝　忘れはせぬ〳〵。

與四　戻り道をお忘れなされますなえ。

信孝　エヽ、歸れと云ふに。

ト叱る。

與四　ハイ、、、。

皆々　おさらばえ。

信孝　行きやれ〳〵。
ト合ひ方になり、この両方のせりふ、皆々歩きながら
振り返り〳〵といふ。與四郎も右の通り、信孝両方へ
相手になり、與四郎の方へは短氣に叱るこなし。女形
へは和らかに相手になるやう。與四郎は向うへ、女形
皆々、橋の方へ入る。後に信孝、こなしあつて
信孝　久吉が祠堂金は、幸ひ〳〵。
ト云ふうち、向うにて
陀多　「明けりやお寺の鐘が鳴るナア、エ。」
ト馬士唄うたうて陀多八、馬士、千兩箱三つ載せ、追
うて來る。
エ、動き居らぬかい、ほてツ腹め。
ト馬を追ひ立てゝ行かうとする。信孝、陀多八を取つ
て引きのけ
信孝　この金、予が入用な。置いて歸れ。
ト轡面を取る。陀多八、起き上がり
陀多　なんぢや、途方もない。この金入用などとは
ト信孝を見て
ヤア、こなたは三七どの。
信孝　そちや宅間小平太。

陀多　この金が入用などとは、けち太い。
ト信孝に詰めかけ
コレ、この金は信長どのゝ弔ひ料、眞柴久吉これを寄附
するといふ繪符が附いてあるぞや。定めしこなたは、久
吉が金なら、取つて遣つても大事ないと、高を括つて取
る心であらうが、そりやハヤ昔の三七信孝どのなら、そ
んな太平樂をしても大事あるまいが、こなたの氣儘に國
遠して、今では匹夫追放に遭うた、この小平太も同じ身
の上。この金に指でもさへると、わごりや盜賊ぢやぞや、
また嘘ぢやないワ。聞けば貴樣は新町へつかり込み、き
つう馬鹿を盡すげな。この頃は、又この堺の乳守で居續
して騷ぐげな。その帳尻が合はぬので、こりや住吉海道
で物取りするか。盜賊を働らくのか。コレ、この祠堂金
は貴樣の親、信長どのゝ弔ひ料。その金を阿房遣ひに盜
み取るのか。天竺浪人どの。ア、それも又尤もかい。
馬鹿は盡したし、金は無し、他人の者に手を懸けると、
その首が落ちる。そこで親の物は子の物と思うて、この
金をたくるのか。わごりや、先達て小田家に望みはない
と廣言を吐いて、我れと我が身を追放して、小田の縁は
切つてあるぞや。すりや、匹夫下郎、盜賊を世渡りする

素浪人。うぬがやうな奴が、この海道に徘徊するは、所の難儀。重ねてへちまはぬやうに、仕舞ひつけてくれう。皆、來いやい。

皆々　オヽ、合點ぢや。

ト東西より腕藏、喜茂六、胴三、權太、勘太、皆々馬士にて、木蔭より出る。

二人　三七どの、見知つてか。

ト信孝、兩人を見て

信孝　ムウ、近習の者。

喜茂　コレ、こなたの供して、伏見の邊で殺さうと思うたれど、眼惡こい若樣ゆゑ、仕損じて惡いと思うて免して置いた。

腕藏　そこで、小早川が附けておこした、近習の奴等を殺してしまひ、路銀を取つて伏見から、わり樣をまいてしまうたわい。

喜茂　それから大坂へ來て、この海道で馬士の世渡り。最前瀧川どのゝ家來に賴まれて、わり樣の戻りを待つてゐたのぢや。

腕藏　高が斯うぢや。瀧川どのゝ云ひ附け、われ樣を仕舞うて取るのぢや。

胴三　こちらが斯う一つになつたら、所詮敵はぬと覺悟して

勘太　キリ〳〵と命を投げ出してしまへ。

權太　叩き殺して褒美は分ける。

陀多　コリヤ、まだその上この三千兩もおれがしこ溜め、われを金の盜賊にする工面で、この大和橋に皆を頑張らして置いたのぢや。斯う引導渡してやるも主從のよしみ。この金を此方へ戻しやがれやい。

ト信孝へかゝるを、手早に拔打ち、陀多八をポンと切る。

喜藏　うぬを。

ト二人かゝるを、同じくポン〳〵と切つて、轡面を取つて、血刀提げて、キツと立つて居る。

皆々　ヤア、切つたな〳〵。人殺しぢや〳〵。

ト喚く。喧嘩太鼓になり。町人大勢、梯子を兩方へ持つて出て、圍うて、皆々棒を持つて

町人　エイ、ヤア〳〵〳〵。

トワヤ〳〵云ふ。信孝、血刀を構へ、馬の口綱を取つてキツと見得。内記走り出て

内記　金子を奪ひ取る盜賊、剩さへ馬士までを手にかける

狼藉者。繩打つて屋敷へ引く。駒廻せ。
ト反り打ち、詰めかゝる。
信孝　予がこの金子を持ち歸りしと、久吉に達すれば、其方が不調法にはならぬ。この金子、早く予が方へ持ち來れ。
内記　ヤア、憎くい盗賊め、うぬ、其まゝで置かうか。繩ぶつてこの身の申し譯。うせう。
ト内記寄る所を、信孝また切る。この時右の人相書、内記の懐中より落ちるを、信孝取つて、懐中する。
町人　ソリヤ、また切つたぞ。エイ、ヤア／＼／＼。
ト兩方より遠卷きにして、ワヤ／＼捨ぜりふ云うて居る。向うより、年寄、スタ／＼息にて走り出て
年寄　コレ／＼、皆の衆。人を切つたといふは、ドヾ何奴が切つた。ハヽ、其奴か。ドヽ、どこに居るぞ。
皆々　オヽ、お年寄りか。コレ、そこに居るわいの。
ト信孝が側へ年寄りを突きやる。年寄り、信孝に行き當らうとして、惘りして
年寄　アレイ。
ト飛び退き、こなしあつて
なんぢやい／＼。當町を騒がす狼藉者。また當町を支配して居るこの年寄りが聞くに、よもや云ひ分はあるまい。皆の衆、騒ぐまい／＼。騒いでとけりや、おれから先へ騒ぐわいの。落ちついて居さつしやれ、居さつしやれ。
町人　コレ、落ちついて居られぬ。お代官樣へ申し上げねばならぬわいの。
年寄　それを拔かるやうなお年寄ぢやないわいなう。おれが來しなに、組の衆を走らした。もう追ッつけお代官樣がござるであらうが、全體、どこからうせ居つた奴ぢやぞいの。
皆々　おいらは知らぬわいの。
年寄　よい／＼。おれが一つ探つて見ようわい。
町人　オヽ、さうさつしやれ／＼。
ト年寄りを又突きやる。
年寄　エヽ、其やうに突かつしやるないの。
ト年寄り氣味惡がり、後しざりするを、無理に突きやる。年寄り、信孝と顔見合せ、惘りして、ちやつと下に坐つて
へヽヽ、ハヽヽ。これは／＼、御苦勞樣でございまする。私しは當町の年寄りを勤めて居りまする者でござりまする。なんぢや存じませぬが、お前樣がえらう人を切

らつしやりましたゆゑ、お役には立ちませねども、
逐駈けつけましてござりまする。マア、その刀をどうぞ
納めさつしやれて下さりませねば、恐ろしうて、町内の
騒ぎ、往來が群集仕りまして、甚だ難儀に存じまする。
どうぞ、御無心ながら、その刀を納めて下さりませうも
のならば、有り難うござりまする。
ト信孝、年寄りを見てニツコリと笑うて
信孝　ムウ、尤も。
ト湊紙を出し、刀を拭ひ鞘に納め
彼れらは予に無禮をなしたるゆゑ、手打ちにせり。町人
どもに仔細はない。何も恐るゝ事はない。
ト信孝、馬の口綱を取つて行かうとする、
皆々　ソリヤ、エイヤア〳〵。
ト棒を振り上げ、取卷く。信孝、構はず行かうとする。
年寄り向うに出て、逆になつて手を突き
年寄　ハイ〳〵、申し〳〵、此やうに死人が出來たから
は、御檢死を乞ひ受け、事濟むまで、どうぞお待ちなさ
れて下さりませ。お代官様がお出でなされたら、あなた
が直ぐに斷わり云うてお歸りなされて下さりませ。左や
うなれば町内は、なんぼの難儀やら知れませぬ。どうぞ
聞き分けて、ちつとの間、お待ち下さりませう、
トいろ〳〵願ふ。信孝こなしあつて
信孝　ムウ。下々の難儀とあらば、暫時待つて取らせうわ
い。
ト床几に腰掛け、莨のむ。
年寄　それは有り難うござりまする。
トこちらへ來て
なんと皆の衆。どんなものぢや。智慧か〳〵。
町人　きついものぢや。全體、何者であらうなう、お年寄
り。
年寄　ハテ、何者であらうぞ。爰を去なしさへせねば、此
方に粗忽はないわいの。
皆々　さうぢや〳〵。エイヤア〳〵。
ト向うバタ〳〵にて、捕り手五人、黒の袢纏股引、草
鞋、鉢卷、襷、大小にて、本舞臺へツカ〳〵と來て、
信孝を取卷く。
捕一　人を殺めし狼藉者。
皆々　腕廻せ。
ト十手を振上げ取卷く。信孝構はず莨のんでゐる。町
人皆々、年寄りも

皆々　ソレ、お代官様ぢや。

ト云うて下に居る。冇五人、信孝が顔、衣服付き、紋の様子を見て、五人額を見合せ、さうぢやといふ心意氣にて、十手を納め、五人ながら小腰を屈め、花道へヒソ／＼と行きかゝる。よき所にて

信孝　コリヤ／＼。

五人　ハツ。

ト五人花道へ坐り、平伏する。

信孝　其方達は久吉が家來よな。

五人　ハツ、御意の通りでござりまする。

信孝　三七信孝に向ひ、匹夫の者ども、慮外働らくゆゑ手打ちに致した。町家の者どもには仔細はない。其方達取鎭めてよからう。

五人　畏まつてござりまする。

信孝　見苦しい死骸、取捨てゝよからう。

五人　ハツ。

ト五人、本舞臺へ來て、四人の死體取片付ける。

年寄　ムウン。そんならあなたが噂のある、三七信孝さま。

町人　ヤア。

ト皆々立ち騒ぐ。

五人　控へ居らう／＼。

ト十手を振り上げる。

町人　ハイ／＼。

ト下に居る。五人、信孝に手を突き

五人　御意の通り、計らひましてござりまする。

信孝　ムヽ、其方達が帶刀を拔き放せ。

五人　エイ。

信孝　何も仔細はない。早く／＼。

五人　ハツ。

ト刀を拔き見る。信孝、見下ろして

信孝　よい／＼、納めい／＼。

五人　ハツ。

ト皆々鞘に納める。差添へに手をかける。

信孝　イヤ／＼、差添へには及ばぬ／＼。

五人　ハツ

ト信孝、馬の口綱取つて鎭々花道へ行きかゝる。五人心意氣あつて、本舞臺へ並ぶ。町人皆々、息を詰めて見て居る。信孝、悠々と花道に立ちとまつて

信孝　者ども。

五人　ハツ。

ト辭儀する。

信孝 予もこの砌り、諸用の金子ゆゑ、幸ひ久吉寄附の金、三七信孝が持ち歸る。この事久吉に告げよ。

五人 ハツ、如何やうとも、思し召しの通りに遊ばされませう。

信孝 よいか。

五人 ハツ。

ト辭儀する。

信孝 ハヽヽ。オヽ、喜ぶ。

トよろしく向うへ馬曳いて入る。

幕

五つ目 阿波座の場

役名――刀屋、金助。宿老、茂左衞門。轟大藏。娘、お豐。玄蕃妹、初花。羅漢の鐵八。小早川帶刀。大工、與四郎。小田三七郎信孝。材木屋中買ひ、田郎助。

造り物、平舞臺、向う赤壁、納戸押入れあり。正面本二階。西の方中二階。この脇、床の前まで高塀、見越しの松の木あり。橋がゝりの方、塀。この後、坐り座敷の體。上手の舞臺先に栫みを受け、池水の體。いつもの所に門口あり。幕の内より外の方に茂左衞門、宿老の拵らへにて、町人大勢居並び酒飲んで居る。お豐、世話娘にて酌をして居る。下の方に鐵八、どんざの上に小さき上下を着て、太き煙管を持ち、わめいて居る體。與四郎、腰に竹馬をさし、鐵八を留めて居る。この前に樽肴並べあり。この見得、在鄕唄にて幕開ける。

鐵八 いま〳〵しいぞ。怪體が惡いのぢやぞ。

與四 これはしたり、お宿老樣や、お町内の衆も來てござる。マア〳〵、默つたがよいわいの。

とよ サア、お一つお上りませぬかいなア。

茂左 イヤ〳〵、酒はもう取りにしませう。時に、この田郎助どのは、遲い事ぢやの。

とよ もう戻つてゞござりませうわいなア。サア、取りにお一つ上がりませいなア。

茂左 オイ〳〵。

ト杯を受ける。

鐵八　なんぢや、田郎助が留守ぢや。留守とは忝ない。

ト　お豊が癪して居る眞中へ坐る。茂左衛門、杯を持つて、恟りして後へ寄る。與四郎、鐵八を見て

與四　とんと氣狂ひの沙汰ぢや。

とよ　あんな人に構はずと、此方へござんせいなア。

ト　與四郎を此方へ連れ來る。

與四　さうして、親仁様はどこへござつたな。

とよ　サイナア、お前が堺へ行かしやんした後、天滿の問屋から呼びに來て、行てゞあつたが、まだ戻らずぢやいなア。マア〳〵、脚絆も解いて休ましやんせいなア。

與四　さうしませう。ヤレ〳〵、草臥れた〳〵。

ト　お豊も手傳ひ、脚絆を解いてやつたり、しか〴〵ある。

鐵八　假令田郎助は内に居ずとも、乘り込んで來た花聟様ぢや。否でも應でも祝言するのぢや。オヽ、グツとするのぢや。

與四　なんぢや、花聟様ぢや。そりや誰れが花聟ぢや。

鐵八　誰れであらうぞい。そこに居るお豊が花聟様だ。

與四　ヤ。

とよ　鐵八さま、お前もマア粟田口から、爰まで附け廻して、執念なお方ぢやわいなア。

鐵八　サア、そこが悪縁契り深しぢや。われが親の藤右衛門は、おれが伯父貴なりや、全く他人ではなし、否でも應でも女房に持つのぢやぞ。

與四　エヽ、聞えた。こりや何ぢやな、おれをば堺へやつて置いて、この和郎と女夫になるのぢやな。

とよ　なんのマアわたしが。

與四　イヤ〳〵、さうぢや〳〵。いま聞けば、在所からの馴染み。ちやんと内證で談合を極めて、見せつけた聟入り、エヽ、思へば

ト　竹馬にて鐵八を叩かうとする。

鐵八　何ひろぐのぢや。

與四　サア、こりやアノ、竹馬ぢや。

鐵八　竹馬がどうした。

與四　サア、あんまり急な相談で、肩へ馬を乘りかけたといふのぢや。

鐵八　こいつはよいわい。

與四　エヽ、鈍くさい。

ト　竹馬を打ちつける。鐵八、肴臺をちやつと取つて

鐵八　ヤイ〳〵、樽肴が骨灰になるわい。エヽ、聞えた。

さてはうぬが、粟田口に居る時分、このお豐を引ッ捕へやがつた、大工の冷飯めぢやな。
與四　大工なら、どうぞするかい。
鐵八　道理でお豐が、爰に居る因縁が知れたわい。こんな冷飯と女夫にならうより、身上の暖かな鐵八さまぢや。コリヤお豐、どうぢやぞいやい〳〵。
ト お豐に抱きつかうとする。
とよ　エヽ、嫌らしい、否ぢや〳〵。
鐵八　否とは胴慾ぢや。
ト 又抱きつかうとする。
與四　さうはさゝぬ。
鐵八　エヽ、退いてけつかれ。
ト 突きのける。
茂左　これは騷々しい。待たしやれ〳〵。
ト 鐵八を留める。町人皆々立騷ぐ。この模樣いろ〳〵あると、此うち在郷唄になり、向うより田郎助、着附け、羽織、腰に手帳を提げ、後より初花、着附け、抱へ帶、綿帽子にて連れ立ち出る。
田郎　女中、よい時分に知らさう程に、門口に待つて居やしやれ。

初花　よいやうにお頼み申しまする。
田郎　サア〳〵、ござれ〳〵。
ト 始終在郷唄にて、連れ立ち、本舞臺へ來て、田郎助內へ入り
戾つたぞよ。
鐵八　ヤア、田郎助か。
茂左　待ちかねて居ましたわいの。
田郎　これはお宿老樣、町內のお衆、鐵八どのも、ようござりました。
とよ　お歸りが遲いので案じましたわいなア。
田郎　さう〳〵、先づ一服下されうか。
ト 莨盆を持つて眞中に坐る。
與四　イヤ、親仁樣、お前の云ひつけで、殿樣のお迎ひに乳守へ參りましたが、今日は是非歸る程に、マア先へ去ねと仰しやる。それでマア、先へ歸りましてござりまする。
田郎　今日は是非戾らうと仰しやるか。
與四　もう追ッつけお歸りでござりませう。
田郎　よし〳〵、マア落ちついた。
ト 此うち鐵八、樽肴を田郎助の側へ並べ

鐵八　田郎助、舅は親といへば、今日からこの鐵八、隨分と孝行にせう。マア、頼みの印ぢや。めでたう納めてたも。

ト田郎助、莨のみながら見て

田郎　後も先もなう、頼みの印ぢや、めでたう納めいとは。

ト鐵八の形を見て。

見りやア上下を着飾つて……納めるも、納めんも、譯を聞いた上の事かい。

鐵八　ハテ、いらぬくだ言を取措いて、短かう云ふが當世、後の月、われに貸した百兩の金。その代りにそこに居るお豐と女夫になつて、この内へにじり込むのぢや。なんと否應は云はれまいがな。

田郎　イカサマ、さう云へば筋が立つてある。尤もな云ひ分ぢや。

とよ　申し、わたしや否でござりますぞえ。

田郎　マ、よいてや。伜與四郎が、又、後月この内へ戻つて來て、二三日もすると、伜が跡を慕うて來たこなた。どうぞ與四郎に添はしてくれいとの頼み。ハテモウ、互ひに好き合うた縁なら、どうなりとせうと云うて、マア妹やら娘やら、何やら彼やらで取込んで置いたのぢや。

案じる事はない。おれ次第にして、マア〱默つて居や。

鐵八　イヤ、默つて居まいわい。女房にくれずば、金を濟ますか。昔は身上もよかつたさうなが、今は下つれた田郎助、百兩の金は、何として〱、滅多に才覺は出來まいてや。

田郎　以前は堺で手廣うした材木問屋、樣子あつて身上をしまひ、二年以前、大坂のこの阿波座へ引越し、今では材木の仲買ひ。なんぢやの、彼ぢやのと金のいる事ばかり。こなたに借りた百兩も皆アノ……サア、マア何は格別、こなさんに損はかけぬ。氣遣ひせずと、落ちついてござれいの。

茂左　イヤコレ、人は落ちつかうが、町の者は落ちいつて居られぬぞや。ナウ、皆の衆。

町人　左樣でござりまする。

ト茂左衞門眞中へ出て

茂左　田郎助どの。今度都の殿樣から、この阿波座の町内へ承つた御用。その譯は。

田郎　ハテ、仰しやらいでも知れてある。商人の往來、土地繁昌の爲とあつて、この阿波座の川筋へ、橋を掛けいとの仰せ渡され。我れ〱しきが、土地の賑ひまでも思ひ

し召したお上の御仁政、有り難い事ではござりませぬか。
茂左　サイノ、その橋普請の入り用。家持ち、借り家、それぞれに割りつけて、集まつた三貫五百匁、幸ひこなたは材木仲買ひの事なり、木材木をば阿波座より買ひ廻して下されと云うて、二貫五百匁の金を渡して置きましたぞや。
田郎　左様でござりまする。
茂左　見りや材木を買ひ込んだ體にも見えず、どうやら大名の駈落ち者を取込んで、茶屋狂ひの榮耀使ひに、三貫五百匁も費ひ込んだとの噂。コレ町の者は氣が氣でござらぬわい、ナウ、皆の衆。
町一　左様でござります。橋を掛けねば町内の誤まり。
町二　材木を揃へるなりとも
町三　三貫五百匁の金を戻すなりとも
茂左　譯立てをさつしやれ、田郎助どの。
皆々　どうでござるの。
田郎　どうと申したら、和泉の山から切り出して、大廻しで取寄せる材木、一月とそこらはかゝりうち。併し、今日明日のうちには、是非參りませう。それともに參りませねば、三貫五百匁、並べさへすればよいではござりませぬか。
茂左　サア、それはさうぢやけれど。
ト頭を掻き〳〵、片脇へ寄る。此うち表より初花招く。
田郎助見て
田郎　サア〳〵、よいてや。イヤ、與四郎、お豐よ、おりや急に女房を持たうと思ふが。
兩人　エ、。
田郎　縁といふものは變つたものではないか。天滿の用を仕舞つて戻りがけ、馬喰町の稻荷の茶見世で休んで居た所へ、十六七の女子、これも茶見世へ腰をかけて、おれが持つて居るコレこの注文帳に、阿波座田郎助と書いてあるを見て、どうぞ女房になりたい。面倒を見て下されいと、親にも持ちさうなおれへ、押しつけての相談。そこでおれが思ふには、ア、、聞えたわいやい、處が稻荷の鳥居先、こいつ彼のぢやわい、心得ぬと思うて、後ろ身に氣を附けれど、尾の生えた體も見えず、マア何がなしに談合極めて、その女子を連れ立つて戻つた。なんとマア、不思議な事もあるものぢやないか。
與四　それはマア、めでたさうな事でござりまする。
とよ　さうして、その女中さんは、どこにでござんすえ。

田郎　門口に待たして置いた。

とよ　さういふ事なら、先刻にから仰しやつたがよいわいなア。ドレ〳〵、わたしが

　ト門口へ出て

エヽ、お前さんかえ。サア〳〵、お入りなされいな。

初花　左樣なら、お免しなされえ。

とよ　免すの、免さんのといふやうな事かいの、サア〳〵。

　ト内へ連れて入る。初花、與四郎を見て、こなしあつて下に居る。

鐵八　なんの事ぢや。聟入りが打つて變つて、嫁入りの相談とは、こいつも變ぢや。エヽ、いま〳〵しい。

　ト樽肴を蹴ちらし〳〵、上の方へ行く。

とよ　マア、綿帽子も取らしやんせいなア。ドレ〳〵、わたしが。

　ト綿帽子を取る。この時與四郎、初花を見て

與四　ヤア、こなたは。

　ト慟り、田郎助と顔見合せ、ちやつと控へる。

初花　コレ、逢ひたかつたわいなう。

　ト與四郎へ云はうとして、田郎助と顔見合せ、ヂツと納まる。田郎助「さては」と思ひ入れある。

とよ　與四郎さん、お前お近附きかえ。

與四　イヤ、近附きではないが。

とよ　どうやら合點のゆかぬ。

　トこなし

初花　わしや、其方の行くへを尋ねて、はる〳〵と來へ。

とよ　エヽ。

初花　イヤサア、この田郎助さんに、逢ひたい〳〵と思うて、國を立退き、この大坂へ慕うて來て、この内へ入込んだも、有やうは其方に……イヤ、田郎助さまに、添ひたさでござんすわいなア。

茂左　田郎助どの、こなた、存じの外の奴ぢやなう。

町一　どこに見込みがあるやら、とんと合點が參らぬ。

與四　一體譯が知れぬ。こりや、とつくりと樣子を。

とよ　樣子とはえ。

與四　サア、それはアノ、親仁樣の嫁になつたは、樣子があらうといふ事ぢや。

とよ　樣子があらうとも、儘にして置かしやんせいなア。

鐵八　田郎助、百兩の達引はどうするのぢや。

田郎　ハテ、どうというたら、借り受けたに違ひもなし、返さいで何とせう。

茂左　橋普請の材木が調はずば

田郎　三貫五百匁を、お町内へ辨まへます。

皆々　そりや何時までに。

田郎　長うては得心あるまい。明朝までに、キッと譯立て致しまする。

與四　親仁様、心當りがあるかえ。

田郎　あつても、なうても濟まさねばならぬ金。マ、、おれ次第にして默つて居い。

鐵八　明日までに金が出來ずば、お豐を女房に。

田郎　それもその時の事かい。

鐵八　よいワ。待つてやろ。

　トそこにある鯛を取つて

この鯛もおれがのぢや。今夜は爰に泊つて、飲み食ひなとしてこまそ。

　ト鯛を腰へ挾む。

茂左　此方は去んで、明日來ませう。

初花　必らずともに、わしが心を。

　ト與四郎へ云ふを、田郎助引取り

田郎　ハテ、呑み込んで持つた女房。今の素振り、慥かに悴を……イヤ、おれを慕うて來た女房ども。

とよ　わたしも早う與四郎さんと

初花　エ、。

與四　コレ、何にも云ふまい。云はぬが花ぢやぞ。

田郎　與四郎、女房どもを奧へ。

與四　連れて行きませう。

　ト初花へ寄るを、お豐支へて

とよ　イ、エ、嫁御樣はわしが連れ立ち。

鐵八　祭入り變じて、嫁入りになつたは。

茂左　材木の仲買ひだけ、材木が紛れて來たのぢや。ハ、ハ、、、、。

田郎　もう旦那樣も歸らつしやらう。御膳の用意を。

與四　拵らへて置きませう。

鐵八　田郎助、いよ／＼明日の朝までに。

皆々　ハテ、阿波座の田郎助は、男でござります。

　ト唄になり、茂左衞門に町人連れ立ち、橋がかりへ入る。鐵八はお豐へこなし、與四郎は初花へこなしあるを、お豐見ろゆゑ、素知らぬ話する。初花は與四郎へこなしよろしく、一件皆々奧へ入る。田郎助一人殘り居て、箒を取つてそこらを掃き出すと、向うより町代、

羽織にて、辭儀しい／＼出る。帶刀、衣裳上下にて、後に近習、蒔繪の亂れ箱を持ち、外に股立ちの侍ひ大勢附き添ひ出る。

町代　ハイ／＼、材木の仲買ひ田郎助が宅は、爰でござりまする。

帶刀　案內せい。

町代　ハイ／＼。

ト先に立つて帶刀、本舞臺へ來る。供廻りは橋がかりに控へる。町代入つて

田郎助さま、內にか。オ、、內にぢや／＼。コレ／＼、ちよつと出迎はつしやれ。早うぢや／＼。

田郎　オ、、町代どの、出迎へとは何を出迎ふのぢや。

ト云ひ／＼表の方を見て

見ますれば、お歷々のお侍ひ樣。

帶刀　田郎助とは其方か。

田郎　左樣でござりまする。何かは存じませぬが、田郎助に御用とござりますなら、マ、、お通り遊ばされませう。

ト帶刀、內へ入り、家內を見廻すこなしにて、直ぐに上へ通り坐る。田郎助、煙草盆を持ち行き、しか／＼あつて

して、あなた樣の御家名はな。

帶刀　某ことは、小田信長公の家臣、小早川帶刀と申す者。この家へ推參せしその仔細は……家來、持參せし品、これへ持て。

近習　ハツ。

ト亂れ箱を眞中へ置く。田郎助見て

田郎　見ますれば、桑の御紋の高蒔繪。この一品は。

帶刀　信長公の後室、政所樣所持の亂れ箱、信孝公へ差上げてくりやれ。

田郎　すりや、この所に。

帶刀　小田三七信孝公、匿まひある事慥かに承知。

ト田郎助、こなしあつて

田郎　成る程、日本國を放し飼ひの御浪人と、お觸れの出た信孝さま、神武この方珍らしい匿まひ者。戸棚や長持の住居に引替へ、毎日の御遊興。今日とても御他行でござれば、今にお歸り遊ばされ次第、お出での樣子も、この一品も、差上げるでござりませう。

帶刀　ムウ。我が君御他行とあれば、身もこの家に一宿いたし、御歸館を相待ち居らう。

ト立ち上がる。
田郎　見苦しうはござりますれど、隠居所の離れ座敷で。
帯刀　侍ひども。われ達は名主方へ控へ、追つて我が君の警護すると云はゞ、彼れの手當を。ナ、必ずぬかるな。
皆々　畏まつてござりまする。
帯刀　行け／＼。
皆々　ハア。
ト町代も一緒に橋がゝりへ入る。
帯刀　田郎助、其方が倅、與四郎とやらは。
與四　ちと様子ござつて、二年以前より他所へ住居。また
後月
帯刀　すりや、與四郎は宿に居るか。
田郎　左様でござります。
帯刀　ムウ。
トこなし。
田郎　何は格別、マア奥座敷へ。
帯刀　田郎助、後刻逢はう。
ト唄になり、帯刀、心を殘し、奥へ入る。田郎助、亂れ箱を片脇へ直し、こなしあつて
田郎　御大身の帯刀さまが、直々にお越しなされたは、何でも様子のありさうな事。
ト思案して門口へ出て、方々見廻し
イヤ、それはさうと、もう暮れるに間もないが、この旦那様は、お歸りなされさうなものぢやが。
ト方々見て
まだ影も見えぬ。イヤ／＼、もう歸らつしやるであらう。
ト内へ入る。此うち隣りの二階座敷の内にて
客　この後は『蘆刈り』を所望仕りませう。
大勢　これはようござりませう。
ト聲する。
田郎　ホオ、こりや貸座敷に客があるさうな。イヤ／＼、この間に一寢入やつてくれう。ドリヤ／＼。
ト莨盆を枕にして寢轉ぶ、ト右二階座敷にて、次第打ちかける。
うたひ〽淀船や、水野の原の曙に／＼、影も殘りて有明の、山本かすむ水無瀬川、渚の森をよそに見て、猶行く末の渡邊や、大江の岸も移りゆく、浪も入り江の里つゞく、浪花の浦に着きにけり／＼。
トこの謠のうち、向うより信孝、右の形にて馬の口を

取り、靜々出て、門口の方へ來る。謠のあと靜かなる鼓の調べになる。田郎助、枕を上げて

田郎　イヤ〳〵、寢ては居られぬ。鐵八が百兩、橋普請の入り用、材木買ひ廻しの金までを取込んで、まだその外にも、爰や彼處の借金、積つて見れば四百兩ばかり。辨まへる當というては……ハテ、どうしたものであらうぞ。

ト思案のこなし。この時表より

信孝　その金子、辨まへてくれう。

田郎　ヤア、旦那樣、歸らしやつたか。

信孝　オヽ、いま歸つたわい。

ト馬を表の柱に繫ぎ、ズツと上手へ通る。田郎助しかじかあり。

田郎　ようこそお歸りなされました。一昨々日から乳守へお越しなされ、今日で三日の居續け。御酒の上で、また短氣など起りはせぬかと、お留守の間も氣が氣ではござりません。イヤ、それはさうと、只今小早川帶刀さまとやらが、蒔繪の亂れ箱を御持參なされ、お目見得の上で、委細の儀を申し上げうと、即ち奥に待たせまして置きました。

信孝　帶刀が參つたとな。

田郎　左樣でございまする。

信孝　ムウ。後刻對面の上、亂れ箱も拜見いたさう。先づ其まゝにして置け。

田郎　へイ、左樣ならば、マア御膳を差上げませう。

ト立たうとする。

信孝　イヤ〳〵、まだ欲しうない。よしにしやれ〳〵。

田郎　左樣なら、後程差上げませう。

ト此時橋がゝりより金助、刀屋にて、刀を五腰ばかり持つて、出て來て

金助　内方にございますか。先日の刀屋でございます。

信孝　オウ、刀屋、來たか。なんぞ珍らしい物が出たか。

金助　左樣でございまする。銘の物を又、五腰ばかりお目にかけまする。

ト信孝の側へ持ち行く。田郎助こなしある。

信孝　よし〳〵、先づ置いて歸れ。

金助　イヤ申し、この間から見せましても〳〵、素手ばかりでございまする。どうぞ今日はお金を戴きたうござりまする。

信孝　ムウ。よいワ。田郎助、あの者に金子を取らしてやれ。

田郎 ヘイ
トうぢ〳〵する。
信孝 イヤ〳〵、金はある。ナニ刀屋、其の金箱をこれへ持參いたせ。
金助 ハイ〳〵、畏まりました。
ト表へ出て、馬に附けし金箱を一箱づつ、田郎助の側へ置く。田郎助、見る度々にびく〳〵する。馬に附けし繪符も一緒に金箱の上へ置いて
ハイ〳〵、千兩箱が三箱と見えまする。
ト田郎助驚ろくうち、金に添へし繪符を取つて見て
田郎 高野山祠堂金三千兩。
ト讀み、惘りして
すりや、この金は
信孝 今朝、堺よりの歸るさ、大和橋にてこの金子を脊負ひし馬、書附け見れば、眞柴久吉より高野山へ祠堂金とある。さすれば予が金子も同然、馬士どもが狼籍いたすゆゑ、其まゝ打ち放し、持ち歸つた金子。田郎助、今日の家土產ぢや程に、入用次第遣うたがよい。刀屋も氣に入つた程、金子を持つて歸れ〳〵。
ト鷹揚に云ふ。金助、田郎助と顏見合せ、こなしあつて、田郎助が袂を引く。こなしあつて兩人、門口へ出て
金助 御亭主、どうやらぼくの來さうな金ぢやぞや。
田郎 わしも困つて居りまする。
金助 金は欲しいけれど、どうやら小氣味の惡い金ぢやに依つて。
ト頭を掻く。田郎助思案して
田郎 マヽ、なんぢやあらうと、刀の代金はわしが工面して、明日までにキッと渡しませう程に、今夜はマア、お歸りなされて下さりませ。
金助 さうなとせざなるまい。そんなら明日來ますぞや。
田郎 さうなされて下さりませ。
金助 合點ぢや〳〵。明日逢ひませう。
田郎 御苦勞でござりました。
ト金助、橋がゝりへ入る。信孝は右五腰の刀を引寄せ、改める。ちよつと拔きかけて見て、拔いて見たり、又目釘を拔いて、とつくりと改めたり、しか〴〵ある。田郎助は、思案しい〳〵内へ入ると、鳴り物やみ、合ひ方になる。
信孝 刀屋に金子をくれたか。

田郎　イヤ金子は、
　ト云はうとして
成る程、遣はしましたでござりまする。
信孝　ムウ。
　ト云ひ〳〵刀を改めてゐる。
田郎　イヤ、旦那様……と申すは世間の手前があるゆゑ。あなた様は誰れあらう、小田信長公の御公達、平の三七郎信孝さま。あなた様の御後見をなされてござる、柴田修理介さまと申すは、私しが兄者人。また私しが養父、先田郎助と申すは、堺で手廣い材木問屋、先君信長公の御用を達し、段々と立身したも、皆殿様の大恩、必らず仇に思ふなと、過ぎ行きました今際の枕に、私しを呼んで、くれ〴〵との遺言。その後ちとした様子あつて、堺の身上をしまひ、大坂のこの阿波座へ引越しまして、只今では材木の仲買ひ。ところに、先々月、注文の事に就き天満へ參り、渡邊筋を通りましたれば、錢屋四郎兵衛が格子先に立つてござるあなた。只ならぬ御威勢といひ、召してござるお小袖は、信長公の御紋附き。京都よりの御出國の様子も、かねてより承つて居りますれば、さては信孝公に相違はない、養父の遺言といひ、兄者人の御主人、侍ひに忠義があれば、町人にも義理があると、四郎兵衛どのに譯を云うて、直ぐにこの阿波座へお伴ひ申し、あの通りに屋敷をしつらひ、お匿まひ申しては置けど、綾や錦に卷かれてござつたお大名様が、糊のこはい木綿蒲團。なんの片時も内にござらう。今日は新町、明日は乳守の里通ひに、遊所々々に夜泊り、日泊り。取分け腰の物をお好きなされて、三十兩五十兩、或ひは百兩の折紙、價の高いもおいとひなう、金子に屈托を遊ばされぬが、世事を御存じない大名の御氣性。その金も、茶屋の算用も、みな私しが後から廻つて……サア、内證の心遣ひを、氣の毒に思し召され、大枚のこの金の、お志しは有り難い、忝ないと申したいが、こればかりは聞えませぬ。町人の私し風情が、武將の御公達を一日でもお匿まひ申すは、この身一生の手柄。金銀は愚か、この身をひしびしほに致すというても、それいとふ田郎助ではござりませぬ。この後とても、斯様なお心遣ひは、必らずともに遊ばされぬがようござりまする。
　ト段々の様子を云ふ。信孝こなしあつて
信孝　田郎助、餘程氣鬱いたしした。あれへ行て休息いたさう。

ト立ち上がる。

田郎　アイヤ。

トちよつと留め、綸符を取り、信孝へ見せて

この上とも、斯やうな狼藉を。

信孝　ハ、、、。流石は町人田郎助……枕時計を仕掛けに來い。

ト歌になり、信孝靜々と中二階へ入る。後に田郎助こなしあつて

田郎　此方も手詰めにはなつてあれど、この金ばかりは……垣越しに見る隣りの山吹、手折つたらば落花狼藉。と云うてコレ、戻しにも行かれず。マ、、、此まゝ直して置きませう。

ト金箱を抱へ、押入れへ入れる事、しか／＼あつて

さて此方の工面は。

ト手を組む。ジヤン／＼と暮れ六ツの鐘鳴る。

ありや暮れ六ツ。

トこなしあつて

ドリヤ、時計を仕掛けて置かうか。

ト唄になり、田郎助こなしあつて、戸口へ入る。內より與四郎、行燈を持ち、お豐を連れ立ち出る。合ひ方になる。

とよ　サア／＼、ござんせいなア。

與四　お豐さん、お前も惡い人ぢやなア。今の女中は、親仁樣の嫁ぢやないか。

とよ　サア、それはさうぢやけれどな、お前を見ると、合點のゆかぬ目遣ひ。お前も又、樣子のありさうな素振りぢやに依つて、こちやモウ、氣が濟まいでならぬわいなア。

與四　それは氣の廻りといふものぢや。マア／＼、下に居い。

ト兩人下に居て

粟田口に居る時云ひ交した仲。お前ゆゑには恐ろしい目を凌いでな。覺えがあらう、おれも殺される所を不思議に助かつて、この內に戻つて居る所へ、尋ねて來たお前なりや、大抵な緣ぢやないぞえ。

とよ　サイナア、父さんの免しで、祝言も濟んで、後で聞けば、お前は殺されに行かしやんしたと、聞いた時のわしが悲しさ。死なば一緒と內を出たれば、追分の山中で、父さんは人手にかゝつての御最期。悲しい中に、人さんの噂を聞けば、お前の身は別條なう、この大坂へござん

したとの事。嬉しいと悲しいが、この身一つに迫つて來て、父さんをお寺へ葬むり、後を慕うて大坂の、そんじよそこにと聞くと其まゝ、尋ねて來た甲斐あつて、無事に顏見たその嬉しさ。勿體ないが、父さんの事も忘れて、女夫にならうと、わたしや、それぱつかりを樂しんで居るわいなア、

ト此うち納戸より初花出かけ、こなしある。始終合ひ方。

與四　その樣子を、親仁樣に打明けて話したれば、追ツつけ女夫にしてやらうと仰しやつてござる。それに外へ移り氣があつて、よいものかいの。

とよ　その心に違ひがなくば、必らず變つて下さんすなえ。

與四　なんの變らう。

とよ　與四郎さん。

與四　お豐さん。

とよ　オヽ、嬉し。

ト抱く。初花引分け

初花　エヽ、嫌らしい。あんまりぢやわいの〳〵。

ト袖にてお豐を叩き

與四郎、下に居や。其方はなう〳〵。

與四　コレ〳〵、何にも云ふまい。無言々々。

初花　イヤ〳〵、云ふ〳〵、云はにやならぬわいなう。屋敷へおやつた大勢の大工のうち、一人すぐれた其方の器量。兄さんの目顏を忍んで、いろ〳〵と口說いたれば、折を見て忍び逢ひませうと、其方の口から、云やつたぞや云やつたぞや。それにマア、今のやうな。わしやモウ、腹が立つやら、悲しいやら。田郎助さまの女房の何のと、あられもない嘘をついて、この內へ入込んだも、其方に逢ひたいばつかりぢやわいなう。なぜ騙しやつた。なぜ嘘を吐きやつた。エヽ、其方は聞えぬ、胴慾な人ぢやいぞいなう。

ト泣いて云ふ。お豐、いろ〳〵あつて、初花を引退け

とよ　エヽ、何ぢやぞいな。人の殿御を捕へて、澤山さうに、アタなめた女中さん。アイ、この與四郎さんは、わたしが大事の〳〵殿御ぢやわいなア。與四郎さん、ござんせ。

ト與四郎を連れて行かうとする。所へ鐵八出て

鐵八　お豐、爰に居るか。なんと、思ひ直して、おれに抱かれて寢ぬか。

とよ　アタしつこい、否ぢやわいなア。

ト鐵八を突きのける。初花、與四郎をあちらへ連れ行き

初花　コレイナウ。わしや其方と女夫にならうと思うて

與四　サア／＼、女夫にならうと思うたは、アノソレ、親仁様ぢやナ。お前は、親仁様の嫁御。おれが為には母者人ぢや。

トお豊、中へ入つて

とよ　アイ／＼、わたしが為には、姑御様ぢやわいなア。

ト鐵八も中へ入り

鐵八　お豊を女房に持てば、おれが為にも母人ぢや。

初花　與四郎、そんならわしは其方の母ぢや。

與四　隨分孝行に致しませう。

とよ　母御様のお側では、なに話すも差合ひだらけ。サア與四郎さん、ござんせ。

ト與四郎の手を取る、鐵八引分け

鐵八　さうはさゝぬ。コレ、母者人の高下で、お豊とおれと、女夫になれと、ナ、云はれさうなものぢやが。

トいろ／＼呑みこます。

初花　さうぢや／＼。この母の云ひ附けぢや程に、與四郎、お豊とあの人と、女夫にしてやりや。

與四　イヤ、それでは。

初花　母の云ひ附ける事を背きやるかや。

とよ　アイ背きます。わたしや背くわいなア。

鐵八　ところを背かせぬは、田郎助に貸した金の威光で、女房に持つて見せる。

初花　與四郎を聟御に持つて見せる。

とよ　與四郎さん、女夫になる氣かえ。

與四　サア、なるでもなし、ならんでもなし。

鐵八　イヤ、なる。女夫になる。いま爰で祝言をするのぢやぞ。

とよ　エヽ、知らんわいなア。

初花　聞入れなくば、覺悟は極めて居る。さうぢや。

ト鐵八の差してゐる刀に手を掛ける。鐵八怖りして

鐵八　滅相な。これ拔いて堪るものか。

とよ　餘所の女中に見替へられて、生きては居ぬ。さうぢや。

トまた手をかける。

鐵八　滅相な。これ拔いて堪るものか。

ト刀を隱さうとする。兩人死なうとする。この採み合ひにて、たうとう三人して、鐵八を採みくちやにして、

お豊は與門をつれ、納戸へ逃げて入る。初花は鐵八を突き飛ばしてこれも入る。これにて唄になり
コリヤ〱、待ち居れ〱。エヽ、いま〱しい。
トこなしあり、合ひ方になる。
田郎助が匿まうたと、噂に聞いた三七信孝。多くの刀を求むるといひ、もしやこの……こりや、どこぞへどめて置くがよい。
ト腰を持つて、隠し所に困る事、いろ〱あつて、トド池の中へ埋め、此方へ來て、よし〳〵と頷き、こなしあつて
マア、これでよいワ。時に、いま三七が持つて戻つた三千兩の小判、久吉が高野へ送る祠堂金を、いがめて來た大仕事。凡そこの鐵八が、爰では百兩と、盗み騙りの數限りはなけれど、たつた一度に三千兩いがめるとは、アア、また上があるものぢやなア。時に又、其いがんで戻つた金を、又おれが方へいがめて、此方の内へはかして、次手に徑妻を引ツかたげ、これもおれが内へ埋んで置くワ。三七を引ツ縛つて、彼のお人へ渡せば、この褒美ばかりでも、千兩が物はある。爰に三千兩
ト池の方を見て
この値打ちが千兩と見て、凡そ五千兩ばかり、寢耳に小判の摑み取り。ヘヽヽヽヽ、巧いワ〱。マア、押入れの金を。ムウ、さうぢや。
トつか〳〵と行て、押入れを明けうとする。納戸より田郎助ズイと出て、鐵八を引き廻し
田郎　鐵八どの、何さつしやる。
鐵八　ヤア、田郎助か。
田郎　見りやア押入れに手をかけて、田郎助が家内を吟味するのか。
鐵八　イヤサ、それは。
田郎　家探しをさつしやるは、盗賊も同然。トサ云へば物事に角が立つ。定めしこりや何ぞの間違ひであらうの。ハテ、麁相とあれば、云ひ分はないぢやて。
鐵八　如何にも麁相ぢや。家探しをせうとしたは、大きな間違ひ。こりやおれが麁相であつた。田郎助、免してたも。料簡して下され。
田郎　なんの、あやまらさうといふではない。
トこなしあつて下に居る。
鐵八　イヤ〱あやまる。ずんとあやまるのぢや。それはそれにして田郎助、百兩の金受取らうかい。

田郎　イヤ、そりや約束が違うた。
鐵八　なんで違うた。
田郎　ハテ、先刻の議定は、明日の朝まで金拵らへて戻さう、如何にも呑みこんだ、明日まで待たうと、こなたの口から云うたでないか。
鐵八　如何にも云うたが、金の無い田郎助ならば、品に依つて待ちもせうが、金の澤山な爰の内、金はあるぞよ。
田郎　金があるとは。
鐵八　外でもない、あの押入れに。
田郎　ヤ。
鐵八　久吉どのから、高野への祠堂金、いかんで來た三千兩。
ト大きな聲して云ふを
田郎　ア、コレ。
トあたりへ憚ることなしあつて
成る程、思ひがけなう降つて湧いた三千兩。サ、金はありながら、あの金はどうも。
鐵八　なんで使はれぬぞ。
田郎　さればサ、あの金は久吉さまより、高野への祠堂金。信長さまの追福の爲とある、繪符の附いた三千兩ぢや。信孝さまは格別、それ知りつゝよい年をして、この田郎助、私用に使うては、大切に思ふ信孝さまを、世間で不孝者の惡名。サ、そこを思うては、指もさゝれぬあの金。
鐵八　遣はれぬといふのか。現在有る金を戻さぬは、こりや何か、橫倒しになつてだゝけるのか。さうはさゝぬ。信孝が不孝にならうが、孝行にならうが、そりやおれが構はぬ事。マア、なんでもあの金を。
ト押入れへかゝるを、よろしく留めて
田郎　ハテサア、そりや聞分けがないといふもの。これ程に分けて云ふ事を。
鐵八　イヤ、聞かぬ。
田郎　サア、そこをどうぞ。
鐵八　エ、七くどい。大泥坊めが。
ト云ひさま、田郎助が首筋とつて引きつける。
田郎　こりや何とさつしやる。
鐵八　何とするとは、こな合摺りめが。
田郎　合摺りとは。
鐵八　合摺りではあるまいか、コリヤヤイ、うぬが匿まつてゐる風來の浪人めが、いかんで戻つた金、盜人の宿す

るからは、うぬも合掛り、大騙り、大盗人めが。
ト二階へかけて云ふ。
サア、斯う云ふのが口惜しくば、爰へ出て相手になれ。出ぬか、出あがらぬか。何として面出しも得せまい。うぬがやうな奴は、カウ／＼。
トいろ／＼手籠めにして、蹴飛ばす。この時納戸よりお豊初花、出て
二人　ヤア、こりや田郎助さんを。
ト留めるを、鐵八、両人を引退ける。
田郎　サア、尤もぢや、道理ぢや。有る金を戻さぬは、横道とも恩知らずとも、こなさんの腹立ち、返す詞はない。サア、打擲で事が濟めば、踏むなりと、蹴るなりとして、暫くのところを待つて下され。さら／＼恨みには存ぜぬ。サヽ、存分にさつしやれ。
鐵八　オヽ、存分にせいで。これからは又われを。
ト材木の極印を取つてくらはしにかゝる。お豊初花コレと取りつくを、引退けて
材木の極印、うぬが面へ、カウ。
ト極印にて眉間を割る。田郎助ヂイと辛抱する。
二人　ヤア、額から血が。

ト両人寄るを、引分けて
田郎　ハアテ、大事ない。面體へ疵を附けられても、非道は構へぬこの田郎助が潔白。立騒ぐ事はない。二人ともに、マヽ、默つて居やいの。
二人　エヽ。
ト両人泣く。
鐵八　ハヽヽヽヽヽ。恥を恥と思はぬ田郎助。よいワ、この上はわれには構はぬ。奥に居る浪人者、彼奴が騙つて寄せた金なら、その騙りに逢つてせりふせう。サア、出ぬか。サア、おれが行かうか。出あがらぬか。所詮ええ出やせまい。ドリヤ、おれが行てこまさうぞ。
トこの時中二階の障子引抜く。内に信孝、烟盆控へ居て
信孝　町人が申す通り、予が逢うてくれうわい。
田郎　すりや、只今の樣子を
信孝　殘らず聞いた。
鐵八　ア、そんならわり樣が、爰な内にゐる浪人者ぢやな。
信孝　町人、われが名は鐵八といふか。
ト云ひ／＼、鐵八をヂロ／＼見て居る。

鐵八　なんぢやい〳〵、人の顔をキョロ〳〵と詠めくさつて、コリヤヤイ、そんな侍ひの嚇しをくふやうな鐵八ぢやないぞよ。オヽ、慮外ながら、金といふ強味のあるのぢや。しかも百兩といふ大枚の小判を
信孝　返濟すれば云ひ分はないな。
鐵八　オヽ、云ひ分はない。ア、聞えた。そんならあの三千兩のうちで
信孝　イヤ、其方にくれる金は外にある。
鐵八　なんぢや、また外に金があるか。
信孝　田郎助、この一札を以て、彼れに借用の金子、爲替に致せ。
　ト小幕の繪姿を抛つてやる。田郎助ハツと取上げろうち
鐵八　ハヽヽヽヽ。田郎助に貸したのは正金で百兩、其やうな紙屑で、爲替とは否ぢや。ほんまの小判で百兩返せ。受取らうわい。
　ト云ふうち、田郎助、繪姿を開き見て
田郎　すりや、この繪姿で。
信孝　讀んで見やれ。
田郎　「粟田口の住人、羅漢の鐵八といふ者」。

鐵八　ヤア。
　ト鐵八ハツと繪姿を覗き見て、恟り。
田郎　「博奕を渡世として、その上お寶の御用金をかすめ立退く曲者、見附け次第に注進すべし、褒美は望みに任すべきものなり」。
鐵八　ヤア、その繪姿は。
信孝　田郎助、褒美は望み次第とあれば、百兩は愚か、千兩にもなりさうな一品。注進いたし、褒美の金子を取つて、彼れに借用返して遣はせいサ。
田郎　成る程、畏まりました。左様なら一走り行て參りませう。
　ト田郎助行かうとする。鐵八留めて
鐵八　こりや田郎助。われ見事、その繪姿を持つて、注進するか。
田郎　サア、只今注進して金子調へ、こなたへ返納申す。暫らく待つて下され。ドリヤ、行て來うか。
　ト行かうとする。鐵八あわてゝ抱きとめ
鐵八　コリヤ〳〵田郎助、待つてくれ〳〵。
田郎　イヤサ、ちつとも早う金子を調へて。
　トまた行かうとするのを留めて

鐵八　コリヤ〳〵、マア待つてくれいやい。
田郎　待て〳〵と、なんぞ用でもごんすかいなう。
鐵八　サア、アノ用はアノ、ソノなんぢやわいの。その繪姿をおれに賣つてはくれまいかといふ事ぢや。
田郎　アヽ、そんならアノ、この繪姿を、こなさん買ふ氣か。
鐵八　オイナウ、どうぞ賣つてたもいなう。
田郎　ハテ、望み手があれば、賣りもせうかい。
鐵八　賣つてくれるか。マア忝ない。ドレ、その繪姿を。
ト取らうとする。田郎助ちやつと持ち替へて
田郎　イヤ、滅多には渡されぬ。
鐵八　なんで渡されぬぞ。
田郎　價の金と引替へせうか。
鐵八　サア、その金は。
田郎　無ければ幸ひ。おれが借りた百兩とさしつがうか。
鐵八　ヤア、アノ百兩にか。
ト狼狽ろく。
信孝　コリヤ〳〵町人、百兩に求めても、餘り高うはあるまいがや。
鐵八　でも、百兩には。

田郎　ハテ、高いと思はんすりや、注進する分ぢや。
ト行かうとする。
鐵八　アヽ、コリヤ、待つてくれいやい。
田郎　そんなら百兩の爲替に取るか。
鐵八　サアそれは。
田郎　注進せうか。
鐵八　サアそれは。
田郎　爲替か。
鐵八　サア。
田郎　注進か。
兩人　サア〳〵〳〵。
田郎　鐵八、どうぢやぞいなう。
鐵八　アヽ、せう事がない。百兩の爲替に取らう。
田郎　そんならおれが百兩は、この繪姿で事を濟ますか。
鐵八　そんならおれが此……オヽ、濟ます。何を云うても、あやの拔けぬおれが體。首に釣替へ。買ひ取つたこの繪姿。此方へ納めて置かうか。
ト繪姿を取る。
田郎　もうそれで云ひ分はないか。
鐵八　云ひ分があつても、邪魔になる繪姿、紙屑一枚を百

兩に買ふからは、われが方に云ひ分がありやせまいぞい。アタいまく〳〵しい。

田郎　イヤ有るぞ。この田郎助、ちつと云ひ分が殘つてある。

鐵八　なんぢや、云ひ分が殘つてあるとは、そりや何の云ひ分が。

田郎　外でもない、この云ひ分が。

　ト鐵八が眉間を極印にてくらはす。

鐵八　アイタ、、、。こりやどうさらすのぢや。

田郎　イヤ、どうもせぬ。借つた金を返したからは、眉間の疵も返したのぢや。

鐵八　ヤ。

田郎　疵は五分〳〵。算用濟んだ。

鐵八　エヽ……怪體の惡い。

　ト額を拭く。田郎助、信孝の前へ行つて

田郎　お情の一札、爲替に致しましてござりまする。

とよ　ほんに、殿樣のお計らひで、この場の納まり。

初花　田郎助さんの顏も立つて。

鐵八　其方はよからうが、エヽコレ、巧い具合ひにやりかけたものを。

田郎　まだ云ひ分があるか。

鐵八　イヤ無い。

　ト繪姿をいろ〳〵ひねくり見て

こいつを百兩の形とは、ても高いものぢやなア。

　トこの時橋がゝりより轟大藏、野袴、羽織の侍ひにて家來を大勢連れ出て

大藏　ソリヤ。

　ト聲かける。

家來　動くな。

　ト家內を取卷く。

田郎　待つた。こりや何ゆゑの狼藉。

大藏　ヤア吐かすまい。身は大內在番の武士、瀧川將監の家來、轟大藏といふ者。禁裏表の下知に依つて、信孝どのを召捕らん爲。

鐵八　この鐵八が犬になつて、日頃の行蹟、何も彼も注進したのぢや。

田郎　其方が注進すりや、此方も今の事を注進せうか。

鐵八　滅相な、それ云うて堪るものか、此方は云はん、云はぬぞ。

　ト家來皆々信孝を目がけ行くを、田郎助支へる。大藏、

田郎を引廻す。この時奥より帶刀、つッと出て大藏を引き廻し
帶刀　我が君に向ひ、尾籠の振舞ひ。狼藉いたさば手は見せぬぞ。
田郎　すりや、大內よりの下知とござつて。
大藏　如何にも。尤も小田家の類葉なれど、町家に交はり、傍若無人に、あぶれ者の振舞ひ。
鐵八　オ、さうぢや。堺の大和橋で、大勢の馬士を殺らし、金を附けた馬ともに引いて戻つたは、盜賊も同然。
田郎　コレ、盜賊の詮議とあらば、此方も盜賊の詮議
鐵八　ア、、コリヤ〳〵、そりやしつこいといふものぢや。何かに附けて邪魔なこの繒姿。エ、、いまいましい。
ト打ちつけ、又ちやつと取つて懷へ入れ、後へ引ッ込む。
大藏　餘人は格別、此方は、信孝どのへ繩打つなりとも、首にしてなりと、見附け次第に計らへと、大內よりの下知。手向ひ致さば朝敵ぢやがや。
帶刀　例へ我が君、非道の業あるにもせよ、賞罰は武家を以てこれを沙汰す。大內の下知とは、見え透いた瀧川が叛敗、折角の討手なれど、帶刀居ましたれば、恐ろしさに逃げ歸りましたと、立歸つて將監に云へ。猶豫いたさば帶刀が一刀の下に、首と胴とが分るゝぞ。
大藏　ヤア、默れ帶刀、妨げなさば先づ其方から。
ト拔いて切つてかゝる。帶刀、拔き身をもぎ取り、鐵八かゝるを帶刀二人ともなぎ倒し、胸打ちに打ち据ゑる。家來皆々これに驚きて逃げて入る。
コリヤ〳〵、手並は見えた。歸る〳〵。
鐵八　大藏さま、こたへましたか。
大藏　こたへた〳〵。身共は身共ぢやが、可哀や鐵八。
鐵八　ア、、痛いお相伴にあづかつてござりまする。
ト帶刀、拔身を抛り、兩人が首筋引ッ立て
帶刀　詮議もあれど、今は免す。キリ〳〵と歸り居らう。
ト橋がかりの方へ突きやる。大藏ツッと拔き身を取つて納める。鐵八も這々起きて
鐵八　斯うなつたら、もう自棄ぢや、踏ん込んで詮議を……と云うたら又繒姿の詮議であらう。……とは云ふものの。
ト云ふを大藏押へて
大藏　コリヤ、何にも云はずと、來い。

ト目くばせして、二人とも走り入る。合ひ方になり

信孝　小早川帶刀。

ト云ひ〳〵下へ下り、よき所へ坐る。

帶刀　ハツ。

ト平伏する。此うち田郎助、最前の亂れ箱を取つて來て信孝が前に置き

田郎　帶刀さまか御持參の一品、イザ、御覽遊ばされませう。

ト信孝思ひ入れあつて、亂れ箱を明ける。金の釆配入れてある。取上げて

信孝　これは。

ト見る。

帶刀　政所樣より、公達信孝公へ、送り越されしその釆配。御先祖清盛公、保元平治の昔より、代々平氏に傳はつて、御父信長公、數度戰場に諸軍の驅引き、手馴れ給ひし御釆配。信長公の形見とも又は四海を治むる軍器、智勇備はる平三七公、四海の武將と仰ぎ奉らんが爲。

信孝　なんと。

帶刀　三法師君、未だ御幼稚に渡らせ給へば、何卒我が君御後見をなし下され、補佐となつて四海をお治め下されよと、即ち君をお迎ひの諸大名、渡邊橋の岸に相詰め、君の御承引の諚意下らば、御父右大臣の格式を以て、安土御殿へ御歸館の警衞、相計らふべきやう、眞柴久吉どの內意を以て帶刀が參着。何卒この儀御承引下さらば、諸大名の安心、下萬民の願ひと思し召し分けられて、その釆配の納まるべき御賢慮、畏れながら願ひ奉る。

ト信孝こなしあつて

信孝　イヽヤ、六十餘州に望みなしと、信孝が出國。上一人に重言あつては、四海の政道立たうと思ふか。帶刀、歸つて母人にもこの旨を傳へてよからう。

帶刀　すりや御承引はござらぬとな。ムウ。

トこなし。

田郎　イヤ〳〵、帶刀さま、一旦出國を遊ばされた殿樣、つい一應で御得心はござりますまい。折を見合せ、及ばずながら御歸國遊ばさるゝやう、私しもお勸め申しませう。それまでは、この田郎助が內にお匿まひ申して、及ばぬ忠義も、養父田郎助の御恩送り、仇疎かには存じませぬ。

帶刀　イヽヤ、辯舌巧みに詞を飾れど、肌ゆるされぬこの家の內、君御安座は心元ない。

田郎　なんと御意なされまする。
ト此うち二階の障子明け、與四郎聞いて居る。
帶刀　叛逆の張本、柴田修理介が弟田郎助。
田郎　なんと。
帶刀　小田の四海を傾けんと計りしかど、天命遁かれず、悉く露顯に及び、柴田勝重は切腹して相果てたわやい。
田郎　エヽ。
ト大憤り。與四郎も驚ろく。
すりや、兄柴田どのは、お主に敵たふ叛逆人であつたか。
トお豊初花、田郎助を見てこなしある。田郎助いろ／＼あつて
ホイ、、、、。
ト當惑する。信孝こなしあつて。
信孝　ムウ、さては予が目鑑に違はず、都を開きし後に於て、柴田が叛逆露顯して、空しく相果てしとな。
帶刀　御意の通り、京都今出川は柴田が旅館、諸國の大名集まつて、家督の評議あらんずところ、幼君の三法師君を設けの席となぞらへ、座敷普請の結構、先達てより大工日雇の人夫を定め、釣り天井の工風を以て、幼君お成りの時を窺ひ、彼の天井を切つて落し、磐石を以て取拉ぎ、殺害なさんといふ、イヤモ恐ろしき企みの段々。
ト云ふうち田郎助一々驚ろく。お豊、初花こなし、二階にて與四郎、慄へ出す。
信孝　ハテ小ざかしき柴田が計略して、三法師に凶事なかりしか。
帶刀　幼君守護は眞柴久吉、晴陽つ鷹の奇瑞に依つて、さては旅館に仔細ぞあらんと、途中より道を替へ、安土へ歸館の折も折、又ぞろや途中の狼藉、河田歩左衛門折よくも駈けつけ、御乘り物を守護なし奉り、その夜の御難は遁れ給ふ。柴田勝重、さては事ならずと思ひしか、その日を去らず切腹して相果つる。まつた釣り天井を營みし大工の者ども、柴田が計らひに依つて殘らず討ちとめ、中に一人立退きしといふは、勝重が實の倅、釣り天井の企みといひ、叛逆人の胤といひ、重罪たる曲者。目當は違はぬこの家の内。
豊初　エヽ。
ト驚ろくこなし。與四郎段々慄ひ、障子バタ／＼さす。この音に帶刀二階へ見上げる。與四郎顏見合せ、障子バツタリ閉す。各々こなし。帶刀キッとなつて立ち上

田郎　先づ〳〵、先づお待ち下さりませう。帶刀さま、さすればその謀叛人の餘類の者を、御詮議なされん爲とあつて。

がる。田郎助留めてあせり

帶刀　如何にも。其方が伜、與四郎といふは、柴田が實子、目前この家に

ト二階へ目を附け、こなしあつて

網にかゝつたよな。

田郎　成る程、先刻にからの大物語り、一つ〳〵この身に當つて、針釘を刺さるゝ心地。血を分けました兄弟でも、武士と町人、殊には又、國所を隔て住めば、兄柴田どのが叛逆人であらうとは、知らなんだ〳〵。小田家の御恩を蒙むりながら、非道の企みで若君を失はんと、釣り天井の企み。拵らへ手といふは

ト二階を見上げ、こなしあつて

サア、螟子といへど、義理ある伜。

ト帶刀キッとなつて行くを、田郎助立ち塞がつて

コレ、どうぞ。

ト手を合せてこなし。

帶刀　イヽヤ、叛逆の餘類、根を斷つて葉を枯らすが四海の掟、容赦はならぬ。

ト田郎助を引退ける。お豐初花留めるを、よろしく引廻し、行かうとする。三人鼎になつて、よろしく留める。

信孝　帶刀、待てよ。

帶刀　助け置かれぬ四海の科人。

信孝　イヤ苦しうない。窮鳥懷に入る時は、獵夫すらこれを免す。其まゝ〳〵。

帶刀　御意畏まつてはござれど、底意知れざる主田郎助。

信孝　イヽヤ、予に仕へて二心なき彼れが誠。その身は町家に育つたれど、流石甲州の英雄、土屋刑部が胤ぢやよなア。

田郎　エヽ、すりや私しめが

信孝　實父は正しく由緒の侍ひ。天目山の戰ひ破れ、父刑部は勝頼と共に討死、一子藤藏正勝は、柴田修理介と變名し、主家の仇に逆意の企て。

田郎　また私しは弟といひ、外戚腹に生れたれば、本妻の嫉みを思し召されて、母が故郷、和泉の國にしるべを求め、先田郎助どのへ貰はれ、生れながら。町人氣質。

帶刀　先君の恩義を思ひ、志しを立てんと思はゞ、功を立

てい。

田郎　功を立ていとはナ。

帶刀　勝重が血脈たる與四郎を、汝が手にかけ、首討つて渡せ。

豊初　エ、。

田郎　すりや、伜與四郎を。

帶刀　討つて出すが、その身の潔白。

田郎　サ、その儀は。

帶刀　但し身共が討ち取らうか。

田郎　サア。

兩人　サア／＼／＼。

帶刀　田郎助、なんと。

　ト　いろ／＼あつて

田郎　如何にも、伜與四郎が首、討つて差上げませう。

豊初　申し、それでは。

田郎　ハテ。

　ト　額にて押へ、こなしあつて

暫時の容赦はこの場のお情。親子が別れの

帶刀　無情を告ぐる夜半の鐘、鳴るを合圖に

田郎　首討つて差上げませう。

　ト　信孝もこなしあつて

信孝　思へば今日は父の逮夜、いますが如きこの采配、佛事料具に引かへて、夜中の茶の湯も心ばかり、父亡靈へ手向けをなさん。

　ト　采配を持つて立ち上がる。

帶刀　拙者めはこれにて宿直。

とよ　與四郎さんの惡名も

初花　云ひ譯立たぬこの場の仕儀。

田郎　おれが爲には眞實の、子で子にあらぬ時鳥。

豊初　エ、。

　ト　田郎助、二人の手を取つて引寄せ

田郎　啼く音血を吐く思ひぢやわいなう。

　ト　はら／＼と泣く。兩人もこなし。

帶刀　我が君には、今一應御賢慮をめぐらされ、四海の納まり、何卒。

　ト　信孝を見る。信孝思ひ入れ。

信孝　「蓮葉の濁りに染まぬ心もて、何かは露を玉と欺く」。

帶刀　ムウ、悟道を示せし遍照が古歌の秀逸。

信孝　雲水と定めなきこそ、浮世の有樣。

帶刀　すりや、どうござつても。

ト思ひ入れ。
田郎　未來を賴む經陀羅尼。二人は佛間へ御燈火を。
豐初　それぢやというて。
田郎　ハテマア、奥へ。
豐初　アイ。
帶刀　然らば我が君。
信孝　帶刀、後刻。
ト湖出（唄ひ手の名）の獨吟になり、信孝、采女を持ち、靜々と中二階へ入る。帶刀、田郎助に心を殘し納戸へ入る。お豐初花田郎助こなし。田郎助、マア奥へと顔にてする。兩人是非なく納戸へ入る。田郎助一人殘り居る。右獨吟の間、思案する事いろ〳〵ある。唄よきほどにとまる。合ひ方になる。
田郎　斯ういふ仕儀になり果てうとは、知らぬが凡夫の淺ましさ。お匿まひ申した信孝さまは、兄柴田どのが後見の殿樣といひ、養父田郎助どのは、小田家の御用達、なりや、一方ならぬ御主人も同然。おのれやれ、忠義の奉公をと、思うた事も鶍の嘴。身に曇りない云ひ譯に、伜與四郎が首討つて、差上げませうと、受合うた事は受合うたが、義理ある伜がなんと討たれう。藁の上から預かつて、この田郎助が手鹽にかけ、成人をさす其うちに、堺の人相見が云ふを聞けば、コレ、この子には劍難の相がある、氣を附けたがよいぞやと、聞けば猶更案じまいか。三年以前の口論に、相手の者へ手疵を負ふせ、解死人に出さねばならず、詮方盡きて、マア與四郎を京へのぼし、その後で家屋敷を賣り拂ひ、殘らず扱ひ金に出して、その時の難儀を遁がれたが、又ぞろや今度の災難。京の屋敷ですんでの事に、殺されうとしたも、劍難といふ相があるゆゑ、どうぞ助けたいばつかりに、何も彼もこの身に引受け、さつぱりとおれが。
ト云はうとして、あたりを見て、こなしあつて
死後の願ひは帶刀さまへ。ア、さうぢや〳〵。
ト隣りの二階座敷にて
ウタヒ〽地を走るけだもの、空をかける翅まで、親子の別れ知らざるや、況んや佛性同體の人間、この生にこの身を浮かめずば、いつの時にか生死の海を渡り、山を越えて彼岸に到るべき。
トこの謠のうち門口を締め、押入より一腰を出し、行燈を引寄せ、灯影にて一腰を拔きかけ改めるこなし。此うち正面の二階の障子左右へ明くと、内に與四郎お

豊、立聞きの體。與四郎嘆く。お豊泣くを押へる事いろいろあり、それより兩人懷劍にて死ぬ用意をする。下には田郎助、硯箱を取り、書置を書く。橋がかりより鐵八、一腰を差し、窺ひ戻り、門口をしやくつても明かぬゆゑ、塀を切り破り、忍び込む。納戸よりは初花出かけ、田郎助が體を見て、驚き隱れる。右謠のうちにて、あと鼓の調べ、しめやかな合ひ方。田郎助、書置を認め、ちよつと泣いて

田郎　とは云ふものゝ、親子が一生の別れ際に、顏さへ見られぬといふは、よく〳〵深い因緣か、業か。是非もなき世の成行きぢやなア。

ト泣き、また書置を書く。

〽親子は三界の首枷と聞けば誠に本意心。

ト謠のうち、中二階の障子引拔きにて明くと、內に信孝、右、采配を上段に直し、臺子かざりにて采配の湯の體、こなしあつて

信孝　父信長は、しんちやうといふ鬼神の再來なりと、恐れし名將たりしも、傾むく御運は力及ばず、本能寺にての御落命。巡る月日は早一年。思ひ廻せば

トちよつと愁ひのこなしあつて、采配を直し

親子の機緣も濃茶の手向け。

ト茶の湯にかゝる。

田郎　アヽ、さうぢやなア。老は先立ち、若きは殘る。なに嘆くらん死出の旅。

トもろ肌ぬぎ、腹切りの用意する。

ウタヒ〽別れの涙の雨の袖、しをれぞまさる草衣、身を怨みてもその甲斐も、なき世に沈む罪科は。

ト謠のうち、與四郎腹へ突き込む。お豊、懷劍を突き立てる。田郎助、腹へ突ッ込まうとする。初花出てよろしく留め

初花　コレ待つた。與四郎が代りになつて、死なうといふお前の心。

田郎　何にも云ふまい。

初花　それぢやというて。

田郎　ハテサテ。

ト立廻つて、初花を膝へ引敷き、腹へ突ッ込む。初花「コレ」と聲立てるを、田郎助押へて物云はさぬこなし。此うち上の松の木へ鐵八出て、信孝を覘ふ。田郎助は初花をのけ、苦しむ體。

初花　コレ、申し、我が子を助けたいと、親の慈悲とはい

ひながら、死なずと仕様はなかつたかいなア。ひよんな事になりましたわいなア〳〵。

ト大泣き。上にては與四郎お豐のた打つて苦しむ。この血汐二階より田郎助が肩へかゝる。仕掛けにて田郎助が襦袢蘇枋になる。田郎助驚ろき

田郎　ヤヽ、この血は。

初花　エヽ。

ト恟り

與四　親仁樣。

とよ　舅御樣。

田郎　ヤア、すりや其方達は。

與四　覺悟の生害。

田郎　ヤア〳〵〳〵。

初花　コレ、田郎助さんも、腹切らしやんしたわいなア。

ト立つたり居たり、うろ〳〵する。

與四　ヤア〳〵〳〵。

トお豐も驚ろく。

田郎　コリヤ、われが命乞ひをせう爲に、この身を捨てた甲斐もなう、なぜ早まつてくれたぞいやい。

與四　イヤ〳〵、大それた事を仕出かしたれば、所詮助からぬこの命。

田郎　サヽヽヽ、その助からぬ命を、助けたいばかりにナ、おれが切腹して、帶刀さまへ願ひし事も、水の泡になつたか。

與四　親仁樣。

田郎　二度三度の難を遁がれ

初花　廻り〳〵て今日の今

とよ　刃の錆にならしやんすといふは

田郎　持つて生れた劒難の

與四　相であつたか、情ない。

初花　與四郎。

とよ　舅御樣。

皆々　エヽ。

田郎　可愛や〳〵。

ト上と下にて大泣き。信孝は茶の手前釜たぎる音しきりに鳴る。これに耳を寄せ、こなしあつて

信孝　ムウ、水火の二つは陰陽の形、自然と激して、立つべき湯氣は底に廻り、たぎる湯玉に殺伐を顯はすは、ハレ、訝かしい。

トきつとこなし。

與四　親仁様、
とよ　舅御様、
二人　おさらば。
ト一時に笛を掻き切り、ばつたりと死ぬる。田郎助初花「ハア、」と泣き落す。信孝、柄杓を松ケ枝へ打つ。鐵八、座敷へヒラリと飛んで
鐵八　信孝。
ト切つてかゝる。信孝拔き身を引取り、一刀浴せる。其まゝ反つて落ちる。田郎助が血汐、池水へ流れる仕掛け。途端一時にて、大ドロ〳〵になると、水中より張り絹の虹現はれ、松ケ枝へかけて見事に棚引く。蛙すさまじく鳴きわたる。合ひ方烈しく、始終薄ドロ。信孝血刀を引ッ提げ、緣先に突立ち、水中に目を附けキッとなつて
信孝　ハて心得ぬ。いま田郎助が最期の血汐池のあたりへかゝると等しく、友呼び誘ふ數萬の蛙、赤光の虹を吐いて空に棚引き、太陽と輝やきわたるは、ハ、ハテ、心得ぬ。誠や家の重寶蛙聲丸の劍といふは、千疋の蛙が血汐を以て湯加減となし、鍛へ上げたる名劍なれば、蛙の聲の二字を以て、蛙聲丸とこれを名く。もしや劍の奇特に依つて、暗夜に輝やく虹なるか。ハ、、ハテ、稀代の不思議を見る事ぢやよなア。
ト水中を睨み、キッとこなし。ト大藏、種ケ島を持つて信孝を覘ふ。
田郎　さればその劍とやらか。何にもせよ。
ト池へ這ひ寄り、劍を取り出す。鐵八起きて「それを」と寄るを、信孝ズッと下り、鐵八をポンと切る。大藏火蓋を切らうとする。信孝拔身を手裏劍に打つ。種ケ島を取落す。信孝目がけてかゝるを、帶刀ツカ〳〵と出て大藏を引廻す。田郎助は劍を信孝に渡す。改め見て
信孝　さてこそ、尋ね求むる蛙聲丸の御劍。我れ都を開きしは、この劍を詮議せん爲。計らず今日只今我が手に入りしこの一口。再び榮ふる小田家の開運。平家擁護の嚴島明神の加護ありしものなるか。ハ、、、、ハテ、有り難や、喜ばしやなア。
ト劍を戴く。帶刀は大藏を當てる。
帶刀　柴田が血脈たる與四郎が切腹、彼れが首を以て三條大路へ晒しなば、我が君大内への申し譯も相立ち、田郎助親子が死後の忠義。

田郎　殿の云ひ譯、お役に立つは、まだしもの本望。エ
エ、忝ない。
ト拜み泣く。この時橋がゝりより大名六人、小手脛
當、腹卷の上に、烏帽子大股立ち凛々しく、軍兵大勢、
小田の紋の提灯を持ち、バラ〳〵と出て、皆々手をつ
かへ、
皆々　信孝公のお迎ひ。
帶刀　君にはイザ、お立ちあられませう。
信孝　イヽヤ、功成り名遂げて身退く我が本心。小田の四
海は嫡孫たる三法師丸。補佐の臣下は眞柴久吉、四海の
治まり、家督を壽く予が賜物。
ト劍を出す。
帶刀　ハツ。
ト劍を取つて
御劍慥かに落手仕る。
初花　與四郎が本來の道連れ。
ト死なうとする。
帶刀　宅間玄蕃が妹、いま相果てなば功になるまい。
初花　エ、。
帶刀　惡人に血筋を引けば、この世で一つの功を立てい。

初花　功が立たねば死なれませぬか。ハア。
ト泣く。
田郎　サア、我が君。切腹の死首、倅と諸とも、木の空の
お仕置、御成敗あられませう。
信孝　町人ながらも健氣の魂ひ。仕置に及ばぬ。ハレ、不
便の最期を遂げたるよな。
大名　して、我が君は。
ト信孝、采配取つて
信孝　父信長の追善に、形は墨に染めずとも、心ばかりは
有髮の僧、信孝の文字を其まゝ信孝法師と法名なし、九
州の地に閑居を定め、今にもあれ事あらんと聞くなれば、
父が形見のこの采配、下知をなさんが、予が心腹をば眞
柴久吉、諸大名にも傳へよ帶刀。
帶刀　ハツ。流石の名君、帶刀承知仕つてござります
る。
田郎　さほどに道を守る殿樣が、大和橋の狼藉、非道の仕
業は。
帶刀　イヽヤ、非道でない。お手討ちありし馬士は、叛逆
一味の佞人ばら。まつた高野山の祠堂金と名け、路次に
於てまツ斯くなさんと計らひしは、久吉どのゝ下知に依

つて、我が君を貢がん爲。卽ち金子三千兩。

ト云ふうち、侍ひ、金箱を眞中へ積む。信孝こなしあり。

信孝　暫しながらも予が住居せし阿波座の流れ、橋なき所に橋をかくるは、田郎助親子が追善供養。帶刀、その金を以て、この橋を營み、我れを貢ぎし志し、末の世までも知らする爲、田郎助橋と名付けてよからう。

田郎　エ、、有り難い。

ト内にて鷄鳴く。信孝、空を見て

信孝　最早鷄鳴。

大藏　うぬ。

ト信孝へかゝるを、帶刀、拔打ちにポンと切る。

大名　これは。

帶刀　四海の跡目も治まる吉相。

トしやんと鞘へ納める。田郎助、いろ〳〵あつてバッタリこける。

初花　ハア、。

ト大泣き。信孝ちよつと見やり

信孝　ア、、有爲轉變ぢやよなア。

ト愁ひのなしよろしく

ト信孝一人、靜々と向うへ入る。　幕

六つ目　道行の場

役名――瀨川采女。傾城、園菊。蔦の靈魂。太夫　富吉路世里太夫。富園二尾太夫三絃、岸むら兵輔　　景事「道行四季のながめ」

造り物、一面の山、小高きところに見事なる松、上より吊り枝、蔦かつら茂く、うち二筋は早房にて谷へ落ちる仕掛け。花道戸屋際より雨方、菜種畑。舞臺端しがらみ、菖蒲杜若の盛り。上の方太夫座。幕明けると雪降る。すべて四季の景色取合せよろしくあるべし。

〽德若に御萬歲と、御代も榮えましんます、愛敬ありける新玉の、年立ちかへる朝より、水も若やぎ木の芽も咲き榮えけるは、誠にめでたきこの御代、何とて沈む戀の淵、瀨川采女は園菊に、思ひ重ねし旅ごろも、はる〳〵

爰に八つ橋の、昔の跡に袖濡れて、甲斐なき三河萬歳と、姿形に二世三世、相生いらぬ好いた同士、いとし男といつまでも、離れぬ願ひ掛川や、淸き流れに岩淸水、弓矢の神といふ島田、つとにぞ早くおき遠き、世との嵐や蘆屋の里、來てこそ見たれ烏帽子山、麓の野へは秋の原、霞が中の櫻花、卯の花あやめ六つの花、ちり〳〵ばつと散る風情、四季も一目に見る夢の、ア、浮世ぢやなア、行き〳〵て、駿河の國に到り、我が到らんとする道は。

釆女　蔦楓しげり合ひ、いと暗うして、すゞろなる目を其方にまで。

へ見せる辛さと引寄せて、ゆふしも結ぶ蔦の葉に、露も涙もおき添ふる、ほんに不思議な二人がえにし、唐で見染めて日の本で、枕交した恥かしさ、そちや唐人の胤なれども、和國で生れ、そして又、人となりしは唐ごろも、着つゝ馴れにしお前を慕ひ、又もこの地へ返り咲き、名も園菊と突出しより、外では解かぬ二重帶、二人が仲を隔て垣、いひさかれたる法界の、悋氣も何の僞の皮、船にしかられ、禿にまで、氣がねするのも逢ひたさの、琴三味線で、峰崎さんや中川さんが、彈き唄はんとした仲ちやぞえ、この世はおろか盡未來、手を引き合うて行く奈落、底の底まで必らずえ、見捨てしやんすな見捨てじと、しげる道草踏み分けて、往き來るさの旅人に、咎められじと立ならひ、有り難かりける秋津洲の、國民榮ゆる繁昌の、商ひ神は蛭子三郎、誕生ましますその時に、何だか熱湯を口から出し、はつたか口よりぬる湯を出し、產湯をひかせ奉り、錦が千反、俵が千反、金襴緞子の產着をめさせ、天の岩戸はあし分けの、くりゝ〳〵くりゝくり、くる〳〵船に乘せ奉り、海を譲りに受取り給ひ、西の宮の戎御前、命長棹いともかしこに釣り針おろし、あらめで鯛を、釣り〳〵釣つた姿の、やれしをらしや、唄ひをどけて舞ひ納む。

ト橋がかりより、代官大場、捕り手出て

代官　ソリヤ。

捕手　動くな。

ト兩人を取卷く。

釆女　我れ〳〵は三河萬歳、何ゆゑのこの狼藉。

代官　ヤア、吐かすまい。宿々に忍びを置き、釆女園菊と慥かに見屆け、附け出した。物な云はせそ、打つて取れ。

ト これより采女タテになり、皆々を追ひ散らし、蘭菊を連れ、行かうとする。方々にて、アリヤ〳〵といふ。

采女　早東西を圍まれたれば、行くへなし。……蘭菊、あの蔦かつらを力草に、思ひ切つて谷底へ。

蘭菊　合點でござんす。

ト兩人岩臺へ上がり、かつらに取りつき、かゝる捕り手を切り、蘭菊早房にて谷底へ飛び込む。采女も飛び込む。始終雪降る。返し道具。

造り物、奥深に宇都の山の體。松蔦かつら澤山にあり。上手の太夫座廻ると、藁葺きの庵になり、よき所に岩石、これに松蟲の鉦三つ並べてあり。眞中に竹の簀戸、この際に采女蘭菊谷底へ落ちたる見得にて、簀戸ともにセリ上がる。

采女　さて〳〵、ひやいな事であつた。其方に怪我はなかつたか。

蘭菊　イヽエ、氣遣ひして下さんすな。さりながら、日は暮れる。行く先知れぬこの山中。

采女　サレバイノ、微かに見えし灯影を力に、たどり附いたこの一つ家、どうぞ寄宿を頼んで見よう。

ト戸より入り

卒爾ながら、ちとお頼み申したい。我れ〳〵は旅の者、道に踏み迷ひ、難儀いたしまする。

蘭菊　苦しうなくば、どうぞ一夜を、明かさせて下さりませ。

兩人　申し、申し。

ト庵の中より

照葉　旅人の、道に迷ひ給へるとかや。さぞ便なくも思すらん。

ウタヒ〽實に我が身も便りなき、浮世に秋の色見えて、あさげの風は身に浸めども、胸を休むる事もなく、あら定めなの境涯やな。

トこの謠の間に、照葉、好みの形にて庵より出て

照葉　人里遠きこの庵、月影たまらぬ閨の内、如何でお宿を申すべき。

采女　しきにいとはじ草枕、今宵ばかりの假寝せん。

蘭菊　只々宿を貸し給へ。

照葉　流石思へば痛はしや、とく〳〵御入り候ふべし。

ウタヒ〽扉を開き招ずれば、草の庵にせはしなき、旅寝の

床ぞ物憂き〳〵。
ト二人を伴ひ、上座へ招じ、照葉よき所へ坐る。
釆女　無禮なる申し事、お聞入れ下され、忝なう存じます
る。
園菊　お嬉しう存じます。
照葉　イヤモ、不自由さへ御合點なら、いつまでも御逗留
は苦しからず。
釆女　イヤナニ、御亭女、あれなる石の上に、鉦鼓を三つ
置かれしは、如何なる仔細。
照葉　あれこそ鉦鼓三羽とて、三つを拜する事の候ふ。
釆女　してその三つとは。
照葉　日月星の三光。
園菊　神道にては
照葉　三社の託宣。
釆女　さて、佛道にては。
照葉　三尊佛、利益を祈るその爲に、三つの鉦鼓を朝夕に、
うつの山邊の賤の女も、打ちくつろいで
釆女　お互ひに
照葉　夜とともお話し
三人　申しませう。

釆女　さて又、この所を宇都の山と申すいはれ、それは屢
ば聞き傳へた事もございますれど、所の御方なれば、猶
猶詳しいお物語。
園菊　我れ〳〵が家土產に、承りたう存じまする。
照葉　イカサマ、旅宿のお眠り覺まし。あら〳〵語り申す
べし。
ト、トモロの囃子になり、チョン〳〵にて後の山、東
西へ引ける。出囃子大勢、屋體ともにセリ出す。釆女
下へ廻る。照葉、眞中にしやんと構へる。
そもこの山を宇都の山と名付けし事は、そのかみ景行天皇
の御子、日本武尊、そも〳〵賊徒を亡ぼせと、その神
勅に、近江路や。
ウタ〽瀬田の高橋踏み鳴らす、駒の足なみカッシ〳〵、
勝つ色見する秋の山、木々の梢も紅葉して、啼くや男鹿
の妻戀ふる。聲にもつれてきり〴〵す、つゞれさせてふ
啼く暮れに、萩の上風吹きそひて、同じうつりに置く露
を、こぼしもやらぬ俤は、さながら秋の小夜なりと、
冴えゆく月の鏡山、光りを磨く湖も、越えて、とてあれ
夕月の、空も夜寒に鳴海潟、宿にころりは岡崎女郎衆、
池鯉鮒の市藏ぢやないかいの、おろしませんかいの、休ま

んせ、泊りぢやないか泊らんせ、午の刻だがうぬが目にや見えないか、ほてつ腹め、なぶりくさるかどう／＼どう、どうぞいの／＼、道中早めて、おじやれ寐床にとつて解く前垂れの、赤坂吉田白須賀、ちよいと越えて新居今ぎれ、船に召せ／＼ヤッシャッシャッシッ／＼／＼、蛤召さんか蛤々々、遠州濱松は廣いやうで狹い、横に車がヤンレヤレ、こりや一町も二町も三町も四町も五町も六町も七町も八町も九町も十町も、横に車が一梃立たぬ、よいわいな、よいやな、曳馬の里とその昔、夕ばえ山の村時雨、濡れて澤渡る雁金の、落つるへいさん、ひやうひやうと、汐の干潟は入海の、濱名の橋はこれかとよ、小夜の中山八町鐘、甲乙しどろに拍子をかしく打ち鳴らし、夢になりとも逢ひたや見たや、夢になりとも、夢に浮名はさんさよも立たじ、よしなや、さしやの、それがあぢぢやいな、浮世ぢやの、それがあぢぢやいな、よそには何と菊川や、ぱつと浮名の散るや櫻の里過ぎて、流れ名高き大井川、先へ／＼と咲きかゝり、藤枝岡部所々の名物買うておあし、つく／＼手鞠、この一イ二ウ三イよ、府中江尻に末とん／＼、とんと打つたる雄松浪、三保の松原、むら立ちくる敵の勢ひ、射かくる矢先バラバラバラ、打たんは神力應護の太刀、逃ぐるを追うて武藏野や、敵の大勢火を放つ、時に帝のお腰の太刀、忽ちひとり拔け出でゝ、燃えくる炎かるたせや、これ草薙の御劔、鞘に納まる御代太平、荒き戎をやす／＼と、宇部の山とはこの時より、名け初めたる事ぞやと、今見る如く語りける。

照葉　それより帝は白鳥と化し給ひ、一つの蔦かづらを貽へ、この谷へ落し給ふ。それより世にひろがりて、茂り合うたる蔦の細道。

采女　それゆゑにこそ、蔦といふ字は草かうに

園菊　鳥と書きしは實に理り。

采女　かゝる詳しき物語り。

園菊　覺えてござるは故あるお方

采女　お名がゆかしう

兩人　存じまする。

ウタ〽何をか包み參らせん。

照葉　御身の母君、この山に名にある蔦をめで給ひ、唐土までも携へて、誠に上なき御寵愛、惠みにほこる蔦かつら

〽その精靈にありけるぞや。

計らざりしに情なや、兄帝の逆鱗にて、切り枯らされんとしたりしを、御身に代への闌菊さま、助け給はるその大恩、返さんものとそれよりは、御身に附き添ひ奉り、いつぞや御室の御所に於て、陸尺女の姿と化して、奪ひ返せし地理の卷、五色の蔦。

ト二品を闌菊に渡し

再び御手に返す上は、これまでなりや、早おさらば。

ウタ〽夢か現か宇都の山の、その蔦かつらは儚なくも、形うもれて失せにけり。

ウタヒ〽うせにけり。

ト大ドロ〳〵にて、切り穴へセリ下す。

釆女　受けし恩義を返さんと、蔦の精靈顯はれしは

闌菊　この二品を我れ〳〵に、渡さん爲で

兩人　あつたよなァ。

ト捕り手大勢、凛々しき形にて、槍にて二人を圍み

捕手　動くな。

釆女　小癪な奴ばら、漂泊しても瀬川釆女、ならば手柄に突きとめい。

ト面白き合ひ方にて、槍のタテいろ〳〵あつて、兩人危ふくなる所へ、上より蔦のまとひし松の吊り枝、トンと下りて兩人を隱す。捕り手、ウロ〳〵して

捕手　どこへうせた。なんでもこの中

皆々　合點ぢや。

ト双方より槍を入れて、蔦かつらを突くと、大ドロドロにて、吊り枝の中より照葉、好みの形、凄き拵らへにて、半身現はれ出て、睨む。皆々驚く、松引き上げると、照葉、立ち身にて印を結び、捕り手を惱ます。皆々空を突いたり、一人手に返つたり、いろ〳〵あり。始終ドロ〳〵。ト照葉、皆々を引寄せ、キッと見得になると、チョン〳〵にて浪幕を切つて落す。見事なる岩、浪幕に添うてセリ上がる。西の方に藁葺きの東屋をセリ上げる。この中に釆女、闌菊、旅姿にて、菅笠にて顔を隱し寢て居る見得。夜明けの鐘鳴る。上手の岩廻ると、元の太夫座になる。

〽梅吹きおろす朝あらし、ふつと目覺めて起き上がり。

釆女　行き暮れて、この處にまどろむうち、不思議の夢。

闌菊　そんならお前も

釆女　其方も見たか。

闌菊　二人一緒に同じ夢。

釆女　蔦の精靈顯はれ出で、慥かに地理の一卷を

關菊　ト側にある一茎を見附ける。關菊は蔦を取り
釆女　五色の蔦、現在爰にあるからは
兩人　すりや正夢であつたよな。
關菊　エ、、忝ない。
釆女　二品が手に入るからは、これより都へ引返し
身の云ひ譯も……關菊、おぢや。
釆女　〽さア〳〵早くと打連れて、出づる朝日ともろともに、
都の空へと。
ト文句のうち、岩の間より綟張りの朝日を筋かひにセり出す。兩人花道へ行く。

幕

七つ目　濱御殿の場

役名——河田歩左衞門。小田三法師丸。下財、土六。同、重八。同、石松。同、砂吉。娘、湊 實ハ千本姫。仲居、お汐。同、お梶。同、お浪。幇間、苦六。同、島七。傾城、入江 實ハ裏葉。同みよし 實ハ初花。瀧川將監。珍花園。傾城、綱手。奴、梅平。同、木田平。高川瀬平。仲居、お舟 實ハ小谷。大判事岩城守 實ハ金井山九郎。眞柴久吉。眞柴小一郎。

造り物、一面の通し屋體、眞中三間の間、打拔き浪幕。上の方、筋かひに腰高障子。下の方筋かひに長暖簾。欄間に河田屋と記せし軒提灯數多あり、すべて濱館を揚げ屋に仕立し好みの道具、取附けよろしくあるべし。祇園囃子にて幕明くと、向うより入江、振り袖の傾城にて、お汐、仲居にて長柄の傘をさしかけ出る。次に綱手、傾城にてお梶、仲居にて同じく長柄の花傘さしかける。次にみよし、傾城。お浪、仲居にて右同斷。この後よりお舟、仲居の拵らへ。湊、娘の形。苦六、島七、幇間の形にて附き添ひ出る。此うち本舞臺、向うの浪手摺りを、小さき飾り船、旗を吹き立て、隨分見事に粧ひ、遠見にて何艘も並び、だん〳〵入り船の體。この間に右の人數花道に、居並び、皆々立ちどまるト鳴り物かすめて
入江　皆さん、見やしやんせ。この島を目がけて數多の入り船、勇ましい事ではないかいな。
綱手　サイナウ、昨日の淵は今日の瀬とやら、この伏見の

離れ島へ、新たに立てし濱御殿も、今日一日の揚げ屋町。

みよ　その賑ひに招かれて、爰に寄るべの道中は、めぐる紋日の揚屋町。

かち　當世風の色くらべ、姿も花のさしかけ傘。

しほ　駕丁に代るわたしらが、相合傘の相思ひ。

なみ　好いた殿御にしつぽりと、濡れを聞かせた長物傘。

苫六　その君達を手に入れんと、アレ〱、漕ぎ寄せて來る船揃へ。

島七　思ふ湊へ便らんと、櫓櫂を早めて、入つて來る。

湊　その入り船より、仲居のお舟どの、今日は大儀でござんした。

ふれ　これは〱、御挨拶。イヤモウ、出口の柳より、花の都へ花揃へ、晴れな座敷の附合ひに、酒のひら強ひ、合ひの押への引けの山、上戸の手先引き締めた、赤前垂れの仲居風。

綱手　御室で逢うたその時は、女陸尺の小谷さん

ふれ　お姫様は新造太夫。

湊　妹女郎は腰元裏葉。

みよ　わたしや初花。

しほ　皆それ〲に

ふれ　名を替へて、また見直すや桃の花。

綱手　爰は所も名にしおふ

初花　伏見の里か新館。

ふれ　河田が許へ、皆さん一緒に

皆々　サア、ござんせいなア。

ト始終祇園囃子にて、皆々本舞臺へ來る。この間に遠見の船、殘らず東の方へ入る。歩左衞門、揚屋の亭主の形にて出て來る。

歩左　女子どもはどこに居る。女子ども〱

ト呼びに來て

これはいづれも、河田屋が新宅へ、打揃うてのお入り、近頃以て祝着に存じまする。

苫六　コレ〱、揚屋の亭主が祝着に存ずるとは、挨拶が堅い〱。

島七　侍ひの癖がのかいで、亭主振りがそぐはぬ〱。

歩左　これは迷惑、昨日までは、この離れ島の囚人、河田歩左衞門、大内の希れ人を饗應の爲とあつて、新たに建てし廓町、苗字を其まゝ、河田屋といふ揚屋の亭主。今日一日は、貴賤いとはぬ無禮講。

湊　傾城の風俗に

しほ　取持ちの仲居役。

ふれ　河田屋の御亭主、初めての御見もじ。

ト向うへ出る。歩左衛門見て

止左　ヤア、こなたは

ト云はうとする。お舟打ち消し

ふれ　アヽ、コレ、わしや仲居、ナア、サア、今宵の座敷へ招かれて、この大寄せに雇はれ仲居。

歩左　すりや、この所へ

ト思ひ入れあつて

ハテ、仲居ぢやよなア。

ふれ　まだ里馴れぬ仲居の新造。

湊　揚屋の勝手は奥へ行て

ふれ　御指南にあづからう。皆さん、後にえ。

湊　サア、ござんせ。

トお舟、歩左衛門へこなしあつて、湊連れ立ち奥へ入る。

向う　お客人のお入り。

歩左　ナニ、お客人のお入りとな。

皆々　わたしらはお出迎ひ。

ト太鼓謡になり、歩左衛門出迎ふ。ト向うより大判事岩城守、衣裳羽織、大盡風にて、次に三法師丸、衣裳壺折り、瀧川將監、衣裳羽織、後より梅平、奴にて、桃の一枝を持ち、槍持ち、草履取り二人附き添ひ出る。

歩左　承り及びましたる大判事岩城守さま。

岩城　新に營む廓の亭主、今日の取持ち、何かと心配であらうなア。

歩左　先づお通り下されませう。

岩城　イザ、將監どの

將監　先づ、ござりませう。

トまた太鼓謡になり、岩城守は二重舞臺の上の方、次に三法師、將監、女形、皆々平舞臺の下手、歩左衛門續いて、梅平控へる。此うち苫六島七、大火鉢を抱へ出て、岩城守が側へ直さうとする。

コリヤ〳〵、彌生の暖氣に火鉢とは、無粹千萬、其方へやれ其方へやれ。

苫六　ハイ〳〵、左樣ならこれに置きませう。

ト平舞臺の眞中に置いて片脇へ寄る。

岩城　只今桃山の假家より、この所を見渡せば、諸大名の乘船、この離れ島を目がけ、追ひ〳〵に入津の體。身共をもてなしの爲、久吉の計らひであらうなア。

歩左　御意の通り、大切の希れ人とござつて、右の計らひ
　でござりまする。
將監　眞柴氏には小鳥狩りとあつて、小野深草の邊を徘徊。
　遊興になぞらへて、非常を糺すも、岩城守どのを警護の
　爲。そこ〳〵に氣を附けた儀でござる。
岩城　そりやその筈でござる。元來拙者は佐渡の出生、こ
　の日本に於て、金山は何れの國、それの山と、眼力の及
　ぶところ、一つとしてこれを外さず。さるに依つて大内
　の召出しにあづかり、當時大判事の職を以て、大二の局
　の化粧殿を預かる役目。即ち當今の宸筆を所持いたし罷
　りある。まつたこの度、當桃山に於て、金氣を見出し、
　正しく金山ならんと奏聞なし、下財を以て桃山に敷の口
　をしつらひ、萬事の支配奉行職を仰せつけらるゝ。身に
　取つては大慶ながら、畢竟天下への奉公、某ことは日本
　の寳同然、久吉どのが、足手かいさましにして馳走たつ
　ぱい。この濱御殿を今日一日の揚屋となせしも、所存あ
　つて身共が計らひ、歩左衛門、其方は亭主の役目を申し
　つかつたか。貴人の饗應、隨分氣を附けたがよいぞよ。
梅平　主人岩城守さま、帝の宸筆を頂戴すれば、關白家の
　司も同然。智慧自慢の久吉どのでも、岩城守さまの御威
　勢には、何として及ばぬ事、叶はぬ儀でござるぞや。
將監　先達て紛失なしたる雌雄二つの獅子の御判、去年六
　月、小田家の燒香あつて、その節十ケ月の日延べを願ひ、
　詮議すれども行くへの知れず、日延べの月日も今日限り。
　それゆゑ三法師丸をこれへ同道。久吉どの入來あれば、
　この旨を傳へてよからう。
三法　歩左衛門、寶の詮議してくれいよ。
歩左　ハツ、委細畏まつてござりまする。追ツつけ二品を
　尋ね出し、御手に入れませう間、ちつともお氣遣ひ遊ば
　されますな。
　ト岩城守、座敷を見渡し
岩城　ムウ、それなるは廓の傾城、仲居、幇間とやらぢや
　な。
皆々　左樣でござりまする。
みよ　岩城守さま。
　ト岩城守へこなしある。岩城守、三人を見て
岩城　われ達は、どうか見たやうな女ばら。
三人　アイ、わたしらは
　ト云ふを歩左衛門押へて
歩左　ア、イヤ、岩城守さまへ御馳走に、取寄せました廓

の花。

岩城　すりや、あの女を

歩左　取替へ、引替へ、お取持ち仕らう。

岩城　ハテナア。

ト思ひ入れあつて

取持ちの亭主へ、客來の花をくれう。ナニ梅平、その一枝をくれい。

梅平　ネイ。御主人様の賜物。有り難く頂戴せい。

ト桃の花を歩左衛門にやる。

歩左　この一枝は

岩城　桃山へ檢見に參り、歸るさに折り取らせしその一枝。唐土にては桃園に節義を結ぶ。河田の苗字を引き起し、武名を再び上げんと思はゞ、この岩城守に、ナ、義を結ぶしるしの一枝、歩左衛門落手いたせ。

ト歩左衛門、思ひ入つあつて

歩左　イヤ、家名は土に埋れても、二君に仕へぬ拙者。花の榮えは望みでござらぬ。

ト一枝を梅平の側へ抛る。

將監　ヤア、貴人に向つて無禮の返答。梅平、ぶち据ゑい。

梅平　心得ました。

ト枝を取つて打ちかゝる。歩左衛門、梅平が腕首取つて

歩左　こりや、何と召さるゝ。

梅平　將監さまの御意、われをぶちのめすのぢや。

トまた打つてかゝる。歩左衛門叩き落し、其まゝ一枝を取つて火鉢へくべる。火炎立つ。梅平かゝるを、歩左衛門居ながら梅平を片手に引伏せ、片手に大火鉢の足を持つて、宙にためて差上げ將監に差附け

歩左　落花再び枝に歸らず。歩左衛門が潔白、斯くの通り。

ト將監キッとなつて反り打ち、立ち上がる。岩城守立つて將監を上へ引廻し、歩左衛門を見てこなしあり

岩城　秦の哀公はきやうを振はんと欲す、列國の諸國これに會す。楚國の將軍伍子胥といへる者、千斤の鼎を弓手に捧げ、馬手には筆を取つて、八句の詩文を書き終りしと聞く。伍子胥に劣らぬ稀代の力量。ハレ、この若者ぢやよな。

ト此せりふのうち、歩左衛門火鉢をためて居て、この時梅平を引起し、火鉢を下に置く。

梅平　うぬ。

ト行くを

岩城　梅平、控へい。

梅平　ネイ。

　ト控へる

将監　岩城守どの、すりや、歩左衛門を

岩城　ハテ、何事も拙者が胸に、ナ。これから座を變へて、一献酌まう。傾城ども、奥へ來やれ。

女皆　そんなら御一緒に

岩城　歩左衛門、後刻逢はう。

歩左　先づ、ござりませう。

　ト唄になり、将監を岩城守押へて、梅平へ目くばせする。梅平呑みこみ、橋がゝりへ入る。岩城守こなしあつて、将監三法師を連れ、女形皆々附き添ひ、一件殘らず入る。

關白の身内、大判事を司る岩城守といふは、正しく先達て御室を立退きし金井山九郎。彼奴を引ッ捕へて詮議せば、紛失の獅子の御判、在所知るゝは治定。併し、手出しのならぬ禁廷の威光、ハテ、なんとしたものであらうなア。

　ト手を組み、思案のこなし。所へ羽搏きして、欄間の鴨居に矢文立つ。歩左衛門キッと見て、件の矢文を拔きとり

ムウ、仔細ありげなこの矢文は。

　ト取つて、開き見て、キッと向うを見ると、門屋の内より

久吉　その矢の主は眞柴久吉。

皆々　お出迎ひ。

歩左　ハッ。

　ト手を突き、辭儀する。ト鳴り物入りの面白き合ひ方にて、久吉、吹そらし笠、野袴、鷹狩りの形にて、後より近習四人、久吉と同じ出立ちにて、めい／＼吹矢筒を持ち、附き出る。皆々花道よき所に立ちどまり

歩左　お珍らしや、久吉さま。

久吉　河田歩左衛門、堅固であつたか。

歩左　ハッ。先づ／＼これへ、お通り下さりませう。

　ト久吉上座へ通り、床几に腰をかける。次に近習四人中腰に坐る。歩左衛門末座へ坐り、手を仕へ

歩左　先達て承りますれば、久吉さまは今日小鳥狩となぞらへ、この近邊を御巡見のよし。只今射かけられましたる矢文の樣子、歩左衛門承りたう存じまする。

久吉　歩左衛門、其方ことは先達て、今出川騒動の砌り、

幼君の御乗り物に駈けつけ、途中の難を救ひしは、拔群の忠臣。その忠義も却つてその身の破滅となりしは、これ全く其方が一徹より事起る。
近一　夜に入つて安土御殿の、惣門を打ち破りし狼藉。
近二　剰つさへ、支へ止むる番人中間どもを踏み殺し
近三　安土御殿の騒ぎ、一方ならぬ大騒動。
近四　これ皆貴殿の越度となる。
久吉　君の御危急お助け申せし忠義にめで、久吉が計らひを以て、市中の島流しと名け、但し　他界の後、空虚となりしこの伏見の濱御殿。分るか。離れ島へ流刑せしも、天下の法令を立てし我が采配。汝忠臣の魂ひあらば、ソレ、その矢文を見よ。
　ト歩左衞門取つて見る。
それ、その詩の如く、故郷へ錦を飾り、例へ劒の下に臥すとも、一度面目を閉かずば、誠の武士とは云はれまいぞよ。
歩左　御意の通り、流刑の汚名を雪ぎ、再び歸參仕らんと、朝暮忘れぬ歩左衞門が本心。
久吉　ムウ、さほどに思ふ其方、叛逆人柴田勝重を、鷹匠の庄助といふ事、よく存じて居やうがな。

歩左　成る程、承り居りまする。
久吉　その庄助が妻、小谷といふ女は、其方が肉身の姉であらうがな。
歩左　御意の通りでござりまする。
久吉　さすれば其方も、叛逆人柴田が縁者、滅多に忠義は立てられまい。
歩左　お詞ではござれども、忠義ゆゑには親をも討つ。例へ姉でござらうとも。
久吉　出かした。その心底ならば、汝に見する一品あり。その一腰、これへ。
近一　ハツ。
　ト一腰を久吉へ渡す。
久吉　歩左衞門、この一腰、覺えがあるか。
　ト抛つてやる。歩左衞門取つて
歩左　この一腰は、信雄卿より拜領した拙者が差添へ。その一腰があなたのお手には
久吉　入方村は其方が故郷、姉の小谷にめぐり合ひ、この一腰の仔細を尋ねよ。
歩左　成る程、この一腰は、先達て姉の小谷に渡せしが
久吉　めぐり〳〵て久吉が、手に入つたる仔細は、姉の小

谷に、ア、「問ふも憂し」
歩左　エ。
久吉「問はぬもつらし武藏鐙。かゝる折にや人は死ぬらん。」
歩左　なんと。
久吉　とつくりと思案いたせ。
　ト久吉、皆を引連れ奥へ入る。あと合ひ方になり、歩左衞門、一腰を見て、こなしあつて
歩左　この一腰　先達て、御室に於て姉者人に、渡し置いたこの一腰、久吉さまの手に入つたは、ハテ心得ぬ。
　ト云ふうち、お舟の小谷、窺ひ出て
小谷　歩左衞門。
歩左　姉者人。
小谷　先刻には云ひたい事も控へたは、多くの人目。
歩左　拙者も久々にてお目にかゝり、先づ何か差措き、お尋ね申したいは、國にござる親人、母者人、御兩所とも御息災でござるか、樣子が承りたい。如何でござりまする。
小谷　サア、國にござる、父さんや母さんは
　トこなしある。

歩左　御健勝でござるかな。
小谷　お達者なわいなう。
歩左　堅固でござりますか。
小谷　御無事なわいなう。
歩左　エ、それは喜ばしい。イヤモウ、この歩左衞門は、御主君の不興を受けて、當所に流罪の身の上なれども、その我が身の事は打忘れ、明暮れ心にかゝるは、御兩親のお身の上。如何なされたかと案じるばかり。北國大方村と、この伏見、程を隔てし事なれば、便りを承る傳手もなく、今こなさんに樣子を聞いて安堵いたした。これといふも、歩左衞門が孝心天へ通じ、思ひも依らぬ姉者人にお目にかゝり、樣子を承つて、エ、、有り難い。
　ト天を拜し喜ぶ。此うち小谷こなしあり
小谷　其やうに其方の喜びやるのを見るにつけ
歩左　エ、。
小谷　イ、ヤイノ、わしも嬉しいわいなう。
　ト涙を隱すこなし
歩左　誠に、その喜びの次手に姉者人、こなたの夫庄助どのに、巡り逢はつしやれてござるか。
小谷　ヤア。

歩左　イヤサ、先達て御室にてお目にかゝつた時、今出川旅館へ尋ねて行かしやつたが、いよ〳〵こなた樣の夫庄助どのに、尋ね逢はつしやれたか。

小谷　イヽヤ。

トこなしあつて云ふ

歩左　すりや、今に尋ね逢はつしやれぬとな。

小谷　オイナウ。

歩左　ハテナア。

トこなしあつて、件の一腰を出し

姉者人、これ見知つてゐさつしやるか。

ト見せる。小谷見て

小谷　ヤア、この一腰は。

歩左　こりや先達て御室にて、路次の用心にと渡し置いた、拙者が差添へ。

小谷　どうしてこの一腰が、其方の手に入つたぞいなう。

歩左　只今思ひがけなく、久吉さまより拙者へ遣はされしこの一腰。

小谷　そんなら、久吉どのゝ手よりこの一腰を。

歩左　如何にも。

小谷　ハテナア。

トこなしある

歩左　姉者人、いよ〳〵こなた、庄助どのに巡り逢はつしやれぬか。この拙者が渡した一腰が、久吉さまの手にはどうして入つたぞ。サア、有やうに仔細が承りたい。

小谷　歩左衛門、勘當ぢや。

歩左　ヤ、なんと。

小谷　向後、其方と兄弟ではない。姉が勘當しましたぞや。

歩左　ムウ。すりや兄弟の縁切つて、歩左衛門に、叛逆一味の疑ひを受けさすまいとの勘當か。

小谷　ヤ、なんと。

歩左　こなたの夫、鷹匠の庄助、柴田修理介と改名して、小田家を亡ぼす謀叛の棟梁。

小谷　ヤア、そんならその事を。

歩左　疾より樣子承つた。

小谷　さうぢや。

ト右の一腰にて死なうとする。歩左衛門留め

歩左　待つた。こりや何ゆゑの生害。

小谷　何ゆゑとは歩左衛門、其方の手前も面目ない。今出川の旅館へ尋ね行き、やう〳〵巡り逢つた庄助どの、後にゆるりと對面せうと、云はしやんしたがこの世の別れ、

御幼君三法師さまに敵たい、様子疑はれ、三輪五郎左衛門が爲に敵へない御切腹。なんぼう叛逆人でも、夫婦に逢ひはない。この身はどのやうになつてもいとはねど、姉の縁に引かれ、其方に叛逆の疑ひかゝるが情ない。ぢやに依つて、兄弟の縁切つて、この身を先へ

トまた死なうとするを留めて

歩左　待つた。今こなたが相果てゝ、兩親は何者が介抱申すぞ。

小谷　ヤア。

歩左　この歩左衛門は、忠義が却つて不忠となり、市中の島流し。再び忠を生かせずば、武士道は立つまじと、かねて覺悟の拙者。所詮本國へ立歸り、兩親に仕へる事覺束ない。ぢやに依つて、兩親の介抱は姉者人、こなたより外はない。いま相果てゝ、兩親に、嘆きをかける御所存か。

小谷　そんなら、國にござる兩親を

歩左　御健勝でござるでないか、

小谷　サア、御息災は御息災なれど

歩左　兩親を後へ殘し、いま死ぬる場所ではござるまい。

小谷　ぢやと云うて、夫柴田どのに繋がるわしが身の上。

歩左　立退かつしやれ。

小谷　ヤア。

歩左　この場にござつて、もし見咎められては身の大事。

小谷　そんならこの場を立退き

歩左　何卒御兩親の御介抱を

小谷　何にも知らずに

歩左　エヽ。

小谷　イヤ、何にも云はぬ、歩左衛門。

歩左　姉者人。

小谷　おさらば。

ト唄になり、小谷ツイと向うへ走り入る。歩左衛門後を見送り、こなしあると、暮れ六ツの鐘鳴る。奥バタバタするゆゑ、歩左衛門橋がかりへ小隱れすると、奥より湊、實は千本姫、三法師を連れ、逃げて出る。後より將監、押取り刀にて走り出て

將監　千本姫、三法師を渡さつしやれ。

千本　イヽヤ、なぜこの子を殺さうとするのぢや。滅多に渡す事はならぬわいなう。

將監　何もこなたの知つた事ではない。先づその三法師を

ト奪ひ取らうとする所へ、綱手實は腰元裏葉、みよし

實は初花出て

裏初　さうはわたしらがさせませぬ。

ト支へる。梅平出て

梅平　女郎どもの存じた事ではない。邪魔ひろがずと、すッ込んで居らう。

ト引退ける。よろしく立廻りにて、とまり

裏葉　イヽエ、控へますまい。今日一日は、この濱御殿を揚屋の催し。

初花　殊に幼ない三法師さまを、馳走役との仰せ渡され。

千本　母政所樣のお案じ。それゆゑ傾城と姿を變へ、入込みしこの千本。

裏葉　腰元の裏葉もとも〴〵、姿を變へて附き添ひしも、三法師さまの御守護。

初花　兄達こそ惡人なれ、せめてこの初花なりとも、小田家に一つの功を立てん爲、傾城となつて入込みました。滅多に若君樣は殺させませぬぞ。

千本　マア、何ゆゑに三法師丸の

裏葉　お首を討つので

三人　ござんすえ。

將監　ヤア、猪口才な女ばら、三法師が首討つは、私しならぬ禁廷の勅諚。うぬら、惡く留め立てすると、違勅の科になるぞよ。

三人　エヽ。

將監　邪魔せずと、そこ退け。

ト裏葉初花を引退け、三法師にかゝる。裏葉初花行かうとするを、梅平引きつけて動かさず、將監、千本姫を突きのけ、三法師を引ッ立てる所へ、歩左衞門小蔭より出て、梅平を取つて投げ、將監を退け、三法師を圍うて

歩左　幼君の御守護、河田歩左衞門、樣子を聞かぬうちは、何奴此奴の容赦はない。指でも差したら、打ッ放すぞ。

トきつとなる。

兩人　何を此奴が。

ト兩方より打つと、岩城守奥より

岩城　待つた、兩人。

兩人　でも。

岩城　ハテ、その仔細は岩城守が申し聞かさう。マア〳〵、鎭まり召され。

兩人　ハツ。

ト兩人控へると、奥より侍ひ四人、ツカ〳〵と燭臺に

初　演　の

繪番附

火をともし出る。後より岩城守靜々と出る。

岩城　仔細存ぜねば、狼狽へるも尤も、その仔細といふは

ト懐中より錦の袋に入りし宸筆を出し

これこそ忝なくも、當今正親町の院の御宸筆。立騒いで尾籠な奴の。飛び退いて拜聽いたせ。

歩左　ナニ、御宸筆とは。

ト歩左衞門は三法師を圍ひながら下に居る。千本姫裏葉初花も坐る。

岩城　小田信長公薨去の後、跡目に立つべき三七信孝は出國、小田之助信雄はうつけ者にて、天下を知るべき器にあらず。さるに依つて、幼少なれども三法師に、小田の四海を治めさすべき勅諚下り、即ち先達て大德寺燒香の席に於て、小田の家督は三法師に相極まる。然るところ小田家相傳の寶、蛙蟇丸紛失せしかど、難波の地にて三七信孝、尋ね出せども、大切に禁廷より預かり奉りし、雌獅子雄獅子の二つの御判、在所知れず。天下の寶を失ひしは、小田の家督相續に相立ちし、三法師が誤まり。直ぐに切腹に相極まりしを、大德寺燒香の席にて、眞柴久吉三輪五郎左衞門、兩執權の願ひに依り、去年六月二日より、今月今宵が日延べの終り、今に於て二つの御判在所知れねば、三法師の命はない。今日安土より召し寄せ、直ちに禁廷にて、首を討つべき筈なれども、政所の願ひに任せ、この信長が濱御殿にて、廓の遊びに心を慰め、思ひがけなく首を打ちくれよと達ての願ひ。さるに依つて、空家なりしこの濱御殿、今日は揚屋となし、小田家に重恩を受けし者どもを、傾城遊女或ひは仲居、又は幇間藝子法師、駕丁遣り手と姿を變へて入込ませしは、三法師に今際の暇乞ひを致させん、この岩城守が情の計らひ。

三人　そんなら、どうあつても

ト顏見合せ

ハア、

ト泣き落す

岩城　歩左衞門、其方も是非に及ばぬと覺悟して、三法師を早く渡せ。

歩左　イヤ、なりませぬ。

岩城　なぜ。

歩左　紛失の獅子の御判、詮議して差上げなば、幼君切腹には及びますまい。

岩城　して、その御判の詮議は

歩左　今宵のうちに

岩城　イヤ、そりや叶はぬ。

歩左　なんと。

岩城　殊に以て其方は、先達て今出川騒動の折から、三法師の乘り物を打擔ぎ、夜陰に及び、安土の惣門を打ち碎きし狼藉法外。それゆゑ市中の島流しと罪極まり、この所へ流罪の其方。身動きならぬ歩左衞門、御判の詮議罷り叶はぬ。

歩左　サ、それは。

岩城　但し、獅子の御判の在所、存じ居るか。

歩左　イヤサ、その儀は。

岩城　在所も知らず、御判の詮議などとは、小癪な奴の。

歩左　ぢやと云うて。

岩城　流人の身で慮外働らくか。

歩左　サ、それは。

岩城　帝の宸筆に刃向ふか。

歩左　サア。

岩城　違勅の科に落入るか。

歩左　サア。

兩人　サア〳〵。

岩城　身の程知らぬ、蛆虫めが。

トこれにて歩左衞門、口惜しきこなし、いろ〳〵あつて

歩左　ホイ。

ト當惑の體にて、ペッタリと坐る。トこの時バタ〳〵にて、向うより駕籠一丁、繩からげに舁いて出る。後より木田平、奴の形、胸當て脚絆にて、籠の後より氣をいらち、ぼッ立て〳〵花道より

木田　久吉さまはいづれにござる。御注進々々。

ト云ひ〳〵駕籠をぼッ立て、橋がかりへ控へる。この時奥より久吉出て

久吉　奴木田平、あわたゞしい、何事ぢや。

木田　ハッ、主人采女、東國宇都の山にて、蔦の錦地理の巻を手に入れ、直さま大内へ參內。この儀東國へ知らせのお使ひ。只今歸國仕つてござりまする。

岩城　すりや、蔦の錦、地理の一巻

ト云はうとして、久吉と顔見合せ、こなし、

久吉　これは、大判事岩城守どの。

岩城　眞柴久吉どの、今日の饗應、過分にござる。

久吉　これは〳〵。

トこなしあつて、久吉、下に居る。歩左衛門は三法師を久吉の側へやつて控へる。此うち木田平、岩城守を見て

木田　ヤア、われは

ト恟り。

久吉　コリヤ〳〵、お客人に粗忽申すな。

木田　イヤ、御室より立退いた金井山九郎、逢はう〳〵と思つて居つた、二品の盗賊。

ト行かうとする

久吉　まだ〳〵申すか。禁廷より罪判斷を司る大判事岩城守さま。

木田　イヤサ、正しく彼奴は。

久吉　ハテ、古へは何者にもあれ。今は大内の御家人、手出し致さば身の上ぢやぞ。

木田　見す〳〵知れた曲者を。

久吉　見遁がし置くも大切なる、當今の宸筆を、所持めさるゝ岩城守どの。

木田　エゝ。

トこなし。

梅平　御主人に慮外すると、兩腕切つて切り下げるぞ。

木田　なにを。

ト擬勢する。岩城守は莨盆引寄せ。鷹揚に莨のみゐる。

久吉　木田平、して注進とは。

木田　ハツ。下郎めが御注進と申すは。

ト右の駕籠の繩を解き、珍花慶、ボタン附きの絆纏を着たる非人の體を引出し

安土より歸る途中、見すが鼻の葭島に、野伏りの非人、古びたれどもボタン附きの襦袢を着し、唐劍を帶し、伏り居る曲者。下郎を見て逃げ出さんとするを、其まゝ引ツ捕へて駕籠に打込み、直さま召連れてござりまする。

久吉　ムウ。ナニサマ、眼中の樣子といひ、常とは變りし曲者、仔細ぞあらん、白狀させい。

木田　ハツ……サア、眞ッ直ぐに白狀ひろげ。僞はると命がないぞ。

ト珍花慶物云はずに、頭振つて居る。

木田　此奴、啞の眞似をひろぐな。白狀せずば、いつそ打ち殺してくれう。

ト唐劍を拔いて、珍花慶に切りかける。あちこちと逃げ廻り、たうとう追ひ詰められて

珍花　ハレイコンニヤ〳〵。

ト手を合せて拝む。

木田　さてこそ異國の廻し者め。

ト劍を振り上げる。

珍花　ケレンポ〳〵。

ト身を縮める。

木田　なんと。

ト劍を差しつける。

珍花　ア、、待つて下され〳〵。こりやおれが誤まり。唐音で詫び言しても解らぬ筈。おれは高麗國の珍花慶といふ者。韃靼國へ云ひ號けの照菊女は、瀬川采女を戀ひ慕ひ、日本へ立退き、それゆゑ高麗韃靼は確執となつての合戰。高麗は韃靼の大敵に責め破られ、我れ〳〵とても逃がさぬゆゑ、唐土に足もたまらず、この日の本へ渡りしが、先達て高麗へ、合體の武士あるを幸ひ、尋ね當てて高麗への加勢を頼まんと、その人を探せども、かいくれにその武士にも逢はず。兎角するうち、路用には盡きる、日本に知るべはなし。是非に及ばずみだれとなつて、彼處の橋の下、爰の軒、犬に追はれて、一夜さは稲荷の森で夜を明かし、やう〳〵この伏見の葭島に身を忍んで居るところ、あの人が無理に引ッ立て參りましたのでござりまする。ハイ、何も日の本へ邪魔しに來たのぢやござりませぬ。先達て高麗と合體した人を尋ねるのでござりまする。様子といふは、段々この通りでござりまする。

ト此せりふのうち、岩城守こなし。

久吉　ムウ、その高麗へ合體いたしたる者の、名は何と云ふ。

珍花　イヤ、そりや滅多には申されませぬ。

木田　憎くい奴、云はずばおらが。

ト珍花慶を拉ぐ。

珍花　こりやならぬ。

ト逃げ出すを、引戻して立廻り。岩城守は梅平へ目くばせする。梅平心得

梅平　おらも加勢を。

ト珍花慶へかゝる振りにて、木田平を支へる。

木田　下郎め、何とする。

梅平　その唐人めを。

ト刀を抜かうとする。この間に珍花慶逃げようとするを、木田平引留め、片手に梅平引留め、片手に梅平の肱を押へ

木田　イヤ、これしきの奴に加勢は頼まぬ。
梅平　ところを。
　ト木田平を引廻し、珍花慶を押へる振りにて、井戸の中へ突きやる。珍花慶、井戸の中へ飛び込む。木田平、梅平を引退け
木田　南無三、拔け道。
　ト行かうとする。
久吉　木田平待て。
木田　でも。
久吉　ハテ、翼の折れた小鳥同然、あまり高飛びも致すまい。其まゝ〳〵。
岩城　久吉どの、寶の詮議も今日につゞまる、三法師が一命、早く首打つてしまひ召され。
久吉　アイヤ、まだ入相を打つや打たず。莟の花は散らされまい。
岩城　なんと。
久吉　東雲までに二つの御判、手に入れてお目にかけう。
　トこれにて歩左衞門、思ひ入れあつて
歩左　久吉さま。幼君守護の役目を、何卒この歩左衞門に。
久吉　イ、ヤ、叛逆の疑ひかゝりし其方、守護の役目は相叶はぬ。
歩左　ナニ、叛逆のお疑ひとは。
久吉　最前渡せし一腰は。
歩左　即ちこれに。
　ト出す。
久吉　柴田修理介、今出川の旅館を設け、三法師君、斯くいふ久吉もろとも、釣り天井の謀り事にて、討取らん企みも、半途にて事顯はれ、切腹の場所に、落しありしその一腰。
歩左　ナニ、柴田が最期の場所に、この一腰が落ちありしとな。
久吉　信雄卿より汝が拜領せし一腰、どうして釣り天井の場所に落しあつた。
歩左　この一腰は拙者が姉、小谷へ路次の用心にと、相渡しましたが、ムウ。
　トこなし
久吉　その小谷といふのは、柴田が妻女、謀叛の荷擔人。
歩左　エ、。
久吉　汝が親、北國入方村與惣太夫も、柴田が逆意に一味同心。

歩左　すりや、親人まで。
久吉　三輪が家來、長岡新吾、討手に向ひ、與惣兵衛が首を取る。
歩左　ヤア、。
　ト驚ろく
久吉　その日を過さず、彼奴もろとも、家内の者が殘らず相果て、小谷一人その場を立退き、即ち彼れが雌獅子の御判を所持なす盜賊。
歩左　ナニ、すりや姉小谷が。
　トきつとなり、立ち上がる。
久吉　コリヤ、待て。
歩左　拙者を騙かり立退きました姉を引ッ捕へ、紛失の御判を。
　ト駈け出さうとする。
久吉　こな僞り者めが。
歩左　なんと。
久吉　詮議ある姉を見遁し、共にこの場を立退かんとは、イヤ、野太い奴の。
歩左　お疑ひを晴らす爲に。
　トまた行くを

久吉　イヤ、一寸も此場は動かれまい。
歩左　そりや又なぜに。
久吉　先達て其方は、市中の島流し。この所を出る事は叶はぬぞよ。
歩左　サア、それは。
久吉　久吉が申し附けたる流人の歩左衛門、赦免の詞を出さぬうち、みだりに島を拔け出でゝ、科に科を重ぬるか。
歩左　サア、それは。
久吉　滅多に身動きは、なるまい／＼。
歩左　エ、。
　ト向うを見て、いろ／＼あつて、ヂッと下に居て、思ひ入れ。
將監　ヤア、まだら／＼と、役にも立たぬ評定。日延べが切れたれば首打つが申し譯。岩城守どのには檢死の役、某は太刀取り、いつそこの將監が。
　ト刀押取り、立ち上がる。
久吉　イヤ、いま幼君のお首を打つて、曉までに寶が出たれば、將監どの、如何召さるゝ。
將監　イヤサ、それは。
久吉　首打つた幼君を、蘇生させる手段があるか。

將監　サ、それは。
久吉　無成敗せよと禁廷の指圖か。
將監　サア。
兩人　サア〳〵〳〵。
久吉　善惡ともに久吉が裁斷。差出ずともマヽ、控へてござれ。
將監　ムウン。
　トこなし。
岩城　イヽヤ、如何やうに云ひ出げても、二品の紛失、三法師にお咎めかゝる、詮議の定法。
梅平　その潔白を亂すは、卽ちこれに。
　ト大火鉢を引寄せ、側にある矢を火鉢へ突ッ込み、矢の根を鐵火にして
　矢の根を以て鐵火の誓ひを。
　ト三法師の方へ行かうとする。久吉引き廻し
久吉　匹夫の身を以て、幼君に近寄る慮外者め。
梅平　イヤ、大判事岩城守が家來。罪の輕重を亂す主人の云ひつけ。
　トまた行くを、久吉、矢をひつたくり、梅平を下に蹴落す。梅平起き上がり、矢を取らうとする。久吉、鐵矢を面體へ差し附ける。梅平「ワッ」というて顏を抱へ、苦しむ。岩城守キッとなつて
岩城　久吉どの、身が家來の面體に
久吉　燒き金當てゝも苦しうない。
岩城　そりや、なぜ。
久吉　この下郞は、今川義元が近習、黑澤重次郞といふ奴。
岩城　なんと。
久吉　岩城守さまには、ハレ、變つた家來を懇望めさるゝな。
岩城　イヤ、下郞が本名。且以て存ぜぬ。
久吉　すりや、今川の近習、黑澤重次郞と申す事御存じないか。
岩城　如何にも。
久吉　ハテナア。
　トこなし。梅平、額に燒き印附け起き上がり、久吉へ詰めかけ
梅平　今川が家來、黑澤重次郞ならば、面體に燒き金當ててもよいか。
久吉　今川義元は、四海を押領せんと謀叛を企て、押して都へ馳せ上ぼる、討取らん爲主君信長、桶狹間に待ち受

け、その時は我れ未だ此下東吉と呼ばれ、主君の御前に槍を捻つて、無二無三に突き伏せ、遂に義元の首は此下が、水も溜らす打ち落したわい。

ト岩城守キッとこなし。梅平、無念の思ひ入れ。

その謀叛人今川が殘黨、黒澤重次郎、其方ばかりでない、まだ今川が餘類、見附け次第に久吉が刑罪、面體に燒き金當ては、謀叛人の餘類と、諸人に知らする我が計らひ。なんとこれにも返答あるか。

梅平　サア、それは。

兩人　サア〳〵〳〵。

久吉　叛逆人の餘類、思ひ知つたか。

ト腰より九寸五分を出し、岩城守へ手裏劍に打つ。岩城守、片手に受け留めて

岩城　これは。

久吉　今川義元が最期の際まで帶せし、名山と名けし首搔き刀。

岩城　すりや、これが。

トきつと見て、こなし。

久吉　桶狹間の戰ひに、此下が足下に押へ、その短刀を以て義元が首を。

岩城　ヤア。

久吉　おのれが刀で、おのれと死恥さらず首搔き刀。

岩城　エ、。

ト口惜しきこなし。

久吉　その短刀に錆び附きしは、義元が無念の血汐。

ト岩城守、刃の血を見て、いろ〳〵こなし、無念泣きに身を慄はす。久吉これに目を附け

岩城　エ、、さしも剛なる今川義元、運盡きぬればやみやみと、無念の血汐見るに附け、最期の心根が思ひやられて

ト久吉へ打ち返す。久吉かはす。歩左衞門、短刀を中に摑み

歩左　イヤ、この短刀は歩左衞門めが

岩城　なんと。

歩左　もつれた座敷を預かるは、亭主の役。ハテ、今日一日は揚屋の亭主、私しが預かりますれば、申し分はございますまい。

ト緣先の手拭を取つて、短刀を納める。

木田　サア、今川が殘黨、腕廻せ。

ト梅平へかゝる、立廻つて梅平、下へ廻り

梅平　寄りあがると、打ち放すぞ。
　ト立廻りにて梅平を押へ
木田　腕廻せ。
　ト立廻り
　捕つた。
　ト早繩かける。
久吉　木田平、出かした。
木田　して、叛逆の張本はな。
久吉　今日某、小鳥狩と名け、方八町の離れ島に渡したる、橋々を切つて落し置いたれば、翼を生じ、空を駈ればイザ知らず、一人も歸る事は叶はぬわサ。
　ト將監驚ろき、岩城守を見る。岩城守、頭にて押へる。
歩左衞門、われが歸るとてもその通り、當所を立退く事はならぬ。是非立歸るは目のあたり。
歩左　それこそは望むところ。忠義に代へぬ拙者が潔白、相糺しお目にかけう。
久吉　イヤナニ、岩城守どの、この囚人は、其許へお預け申しませう。
岩城　繩附きを身共に。
久吉　拷問の儀は勝手次第。
　ト岩城守、思ひ入れあつて
岩城　如何にも、囚人を預かり申さう。
木田　イヤ、それでは。
久吉　ハテ、何事も胸にある。女どもは、幼君に千本姬を奧へ同道。
裏初　畏まりました。
久吉　歩左衞門は同じ罪人。久吉が直の警護。
歩左　すりや、拙者めを。
木田　御意ぢや。立たツしやれ。
　トきめる。歩左衞門こなしあつて
歩左　畏つてござりまする。
將監　エヽ、思へば。
　ト久吉を目がけるを
岩城　コレ。
　ト顏で押へる。
久吉　岩城守どの。
岩城　久吉どの。
久吉　後刻。
兩人　御意得ませう。
　ト裏葉初花は、三法師と千本姬に附き添ひ、久吉こな

しあつて木田平に、歩左衞門を伴へと額にてする。木田平は歩左衞門を庇ふ心の見得。近習皆々附き添ひ、右の人數皆々奥へ入る。岩城守見送り、將監は梅平の繩を解き、三人こなしあつて、唄の後、合ひ方になる。

將監　岩城守どの。

梅平　身共といひ、こなたの俗姓、氣取つた樣子。もう時刻は延ばされまい。

岩城　苦しうない。久吉が如何ほど狂うても、帝の宸筆所持すれば、指さしならぬ違勅の咎め、氣遣ひはない、落ちついて居やれ。

將監　して、二品の寶は。

岩城　雌獅子の判は某所持なせども、心憎きは雄獅子の判を所持する奴。雌雄二つの獅子の御判、武家にあつては軍勢催促の印鑑同然。まつた禁裏に於ては、帝御卽位の節は、雌雄揃へてこれを飾るが代々吉例。それゆゑ、いま一品雄獅子の判を我が手に入れ、大内へ差上げなばこれを功に六十餘州を、併呑せん我が大望。雄獅子の在所を兩人とも、心を附けてよからう。

將監　して桃山に城を築く

梅平　城取りの繩張りはな。

岩城　それこそ一大事の密計、密かに／＼。

トこなしあつて、持つたる扇を、前なる井戸へ落すと、これを合ひ圖に、下財の者三人、火繩に火をともし、上つて來る。將監梅平驚ろく。三人手を突き

三人　お頭。

岩城　下財の者ども。愈々成就いたしたか。

下一　お指圖の通り、この伏見川の水底を、一丈あまり掘り拔き、通路の箱樋を仕掛け置きたれば、桃山よりこのお濱御殿まで、拔け道は自由自在。

下二　その上桃山を切り開き、地面ならし置きたれば

下三　天晴れ屈竟の城の地圖。

下一　急いで繩張りが

三人　肝要かと存じまする。

岩城　して、殘りの者は。

下二　皆桃山へ置き、我れ／＼三人

下三　この井の中に忍び居て

下一　すはと云はゞ、殘らず馳せ參る手筈。

三人　定め置きましてござりまする。

岩城　ぬかりなき手配り、出來た／＼。

將監　すりや、桃山に金氣の體ありと、奏聞せしも僞はり。

岩城　如何にも。桃山の地は、東に喜撰ケ嶽を負ひ、南は淀川を引受け、北は王城、西は山崎、天王山に出張りを築かば、要塞堅固の金城。そこを計つて、金氣の精ありと申し立て、數多の下財を集め、山を切り開かせしも、我が計略。

梅平　誠は城取りの計略でござつたよな。

將監　天晴れ明智、驚ろき入つた。

梅平　兎角邪魔になるは眞柴久吉。

岩城　下財ども、われ達は、つまり〳〵に埋伏して、コリヤ。

ト下財一を呼びて囁く。

三人　すりや、我れ〳〵は。

ト岩城守、手槍を取つて

梅平　幸ひこの手槍を以て。

三人　畏まつてござりまする。

將監　もし手に餘らば

梅平　我れ〳〵も加勢を。

岩城　ぬかり召さるな。

將監　心得ました。

岩城　いづれもお行きやれ。

ト唄になり、將監は左右の一間へ、下財三人は橋がゝりへ、右三方へ別れ入る。岩城守こなしあつて二重舞臺へ上がる。四ツの時計打つ。

最早亥の刻。

ト空を見て

今宵の分野は。ムウ。

ト指にて繰る。この見得にてチョン〳〵、返し道具、靜かに廻る。

造り物、眞中に大和葺きの綺麗なる屋體、この左右小高きところ牡丹畑。舞臺先に一面の花壇、各々牡丹苔みの見得、橋がゝりより花壇に弓矢を持つ案山子。上手に捨て井戶。すべてお濱御殿花壇の體。右座敷の眞中に小谷、奥を目がけ行くを、步左衞門留めて居る。合ひ方にて道具とまる。

步左　待つた、姉者人。こりや何處へ。

小谷　久吉どのゝ計らひで、立退く事も叶はねば、いつそ奥へ踏ん込んで。

ト また行くを

歩左　待つた。内縁の弟を騙かり、両親の御最期まで、包み隠す姉者人の心底。さは知らず、兄弟のよしみを思ひ、この場を落せしゆゑ、却つてお疑ひを蒙むり、罪に罪を重ぬれば、殊に依つては兄弟とて容赦はない。討つて捨つるが主君へ忠義。姉者人、覺悟さつしやれ。

ト小谷を下へ引き廻す。小谷こなしあつて

小谷　親夫の悪心、母様の御最期まで、わざと包み隠したは、せめて其方ばかりは誠の武士にしたいばかり。悪人に繋がつて、罪に罪を重ねたとすれば、もう武士道はすたつたぞや。この上は兄弟一緒、共に謀叛を受け繼いで、小田家に弓を引いてたも。

歩左　イヽヤ、歩左衛門が忠義の一心、いつかな狂はぬ。

トこれにて歩左衛門に詰めかけ

小谷　コレ、親與惣太夫さまは、小田の下知に依つて、お首を打たれなされたぞや。

トきつと云ふ。歩左衛門こなし。

時も變らず母様も御生害。譜代の曾六お雪まで、その日を變へず命を捨て、故郷には草生ひしげり、野干虎狼の棲み家となる。先祖は由々しき斯波の家名も、小田家の爲に朽ち果つる、その無念さ、口惜しさ。其方は口惜しうはないか。無念には思やらぬかいなう。エヽ、腑甲斐ない心ぢやなう。

トきつと詰めかけて云ふ。歩左衛門こなしあり

歩左　親人へ孝を立つれば、主人へ不忠。忠義を立つれば親人へ不孝。最前久吉さまのお詞、武蔵鐙を掛けたる謎。かゝる折には人や死ぬらん。

ト一腰を取り直し、腹切らうとする。小谷留めて

小谷　そんなら、どのやうに勸めても。

歩左　悪事に組する歩左衛門ではござらぬ。

ト腹切らうとする。

小谷　待つた。その心なら、いよ〳〵兄弟でない、縁切つた。

ト歩左衛門が持つたる一腰を引取り、奥へ行くを、歩左衛門留めて

歩左　イヽヤ、奥へはやらぬ。

小谷　三法師丸といひ、眞柴久吉、奥に居るこそ幸ひ、親、夫の敵、近寄つて恨みの刃。

ト歩左衛門を引退ける。立廻つて

歩左　狼藉召さるゝと、手は見せぬぞ。

小谷　忠義立てする其方には構はぬ。久吉を。
　ト振り放し、行くを
歩左　もう、是非に及ぼぬ。
　ト小谷が持つたる一腰を抜き、一かせ切る。小谷「ウン」と二重舞臺よりこけ落ちる。歩左衛門續いて下り、抜き身を振り上げる。
小谷　歩左衛門、これで其方の忠義は立たうが。
歩左　なんと。
小谷　所詮この身は死ぬる覺悟。其方の手にかゝつて、惡人の縁を斷ち切り、忠義を立てさせたいばつかり。
歩左　ヤ、、、。さうとは知らず。
　ト抜身を捨て、小谷を介抱して
思ひ切つた急所の深手、早まつた事を仕りました。
　ト取りついて愁ひ。小谷、御判を出して
小谷　これこそは雄獅子の御判。
　ト歩左衛門に渡す。奥より岩城守出かけ、こなし。
歩左　すりや、この御判を。
小谷　みな父上の惡心。それを一つの功にして、斯波の家名を立つるやうに、頼むは弟。コレ、どうぞ。
　ト拝み、泣く。

歩左　氣遣ひなされな。遺言を立てませう。
小谷　エヽ、忝ない。
歩左　苦痛は却つて不孝の不孝。
　ト刀を振り上げる。小谷、合掌する。歩左衛門打ちかれて慄ふ。
小谷　未練であらう。
　トきつと云ふ。歩左衛門氣を取り直し。小谷が首をポンと切つて、ホロリと泣き、氣を變へて刀を納めるこなしあつて奥へ行かうとする。岩城守ツカ／＼と出て歩左衛門を引き廻し
岩城　その一品を。
　ト歩左衛門が懐中へ手を掛ける。立廻つて兩人、ドッコイと見得になると、ドロ／＼にて、三方の花壇の牡丹の莟み、赤白の牡丹一時に開く。ト正面襖サッと明いて、久吉ツカ／＼出て、縁端に立つ。下には歩左衛門岩城守立廻つて、左右へ別れ、キッと見得、大小鼓入り、靜かなる雲氣の合ひ方、好みあり。右三方キツと見得になる。
三人　ハテ、怪しやなア。
久吉　むかし大江の定基、寂光法師となつて入唐渡天し、

清涼山に到り石橋を渡らんとなす。

岩城　この橋、自然と出現したる石橋なれば、石橋と名く
神變不思議の術なくては、渡らんこと思ひもよらず。

歩左　尺餘に狹き石の橋、苔滑らかにして渡り得ず、如何
はせんとためらふところ。

久吉　不思議や谷間より、雄獅子雌獅子現はれ出で、彼の
石橋を渡り越え

岩城　向ひは開ゆる文珠の淨土、常に清香の花降り下り

歩左　谷間の牡丹は一時に開く。小田家に預かる雌獅子雄
獅子の二つの御判。

久吉　天子の寶の威德にて、自然と獅子王の氣を現はし

岩城　二つの寶、一つの所へ寄る時は、

歩左　忽ち牡丹の花咲き亂れ

久吉　その氣を現はす寶の奇瑞。

岩城　片割れの雄獅子の御判

歩左　雌獅子の御判と揃ひしゆゑ

久吉　一時に開く牡丹の盛り。

岩城　彼れと云ひ

歩左　これと云ひ

久吉　ハテ

岩城　不思議の

歩左　次第を

久吉　見る

三人　事ぢやよなア。

ト　きつと見得。岩城守歩左衛門、互ひに懷中へ目を附
け、立寄らんとする。久吉スッと眞中へ入り

久吉　歩左衛門、雄獅子の印は手に入つたか。

歩左　ハッ、紛失の御判、イザお受取り下さりませう。

ト久吉に渡す。岩城守「それを」と寄らうとする。久
吉と顏見合せ、こなしある。久吉御判を懷中して

久吉　出かした。この功に依て小田家へ歸參、斯波の家名
を取立て、昔に返る河田歩左衛門。

歩左　すりや、御勘氣を御赦免とな。

久吉　叛逆の血筋を斷ち切り。忠義を盡せし功に依つて、
この所を忠義島とも、又は歩左衛門島とも名付けてよから
う。

歩左　この上は敵の片割れ。

ト岩城守を見る。

久吉　イヤ苦しうない。最早籠中の鳥も同然。一つの功の
立ちし上は、今こそ免す幼君の守護。心を附けて警護い

たせ。
歩左　畏まつてござりまする。
久吉　行け〳〵。
歩左　ハツ。
　ト歩左衛門は橋がゝりへ走り入る。この間に岩城守花壇へ目くばせする。西の花壇より下財一、槍にて久吉を覘ふ。東の花壇にある案山子の中に下財二入り居て竹の矢にて久吉を覘ふ。向うの捨て井戸より下財三、半身を出し、半弓を構へる。岩城守こなしあつて
岩城　久吉どの、武家にあつては軍勢催促の獅子の御判。
久吉　雌雄二つと揃ふ時は、大内御即位の儀式に用ふる
岩城　その片割れは貴殿の懐中。
久吉　雌獅子の御判は。
岩城　拙者が懐中に所持いたし罷りある。
久吉　なんと。
岩城　盗み取つた曲者を引ッ捕へ、手に入つたは帝へ忠義。貴殿が所持した雄獅子の御判、此方へ渡さつしやれ。
久吉　ハヽヽヽ。蛙は口ゆゑ呑まるゝとの譬へ。その身の罪を、その身の白状。

岩城　こま言いはずと、御判を渡せ。
久吉　某が懐中は、石の唐戸も同然、取り得る手段は、あるまい〳〵。
岩城　手に入れて見せませう。
久吉　そりやどうして。
岩城　者ども、ソリヤ。
　ト下財一出て
下一　久吉。
　ト槍にて突いてかゝる。久吉、扇にて穂先を叩き落し、その槍を取り、石突きにて一の脾腹を突く。ウンと倒る。井戸より弓を放す、案山子の弦放す、久吉かはすと二の矢は三にあたり、三の矢は二にあたり、両方一時に死ぬ。一起き上がるところを槍にて突きとめる。
久吉　雌獅子の印は、いつ手に入れやうと久吉が心の儘。方八丁の離れ鳥、智略の網が下ろしあれば、立歸る事いつかな叶はぬ。命一つを助かるやうに
岩城　なんと。
久吉　これでゆるりと工風を召され。
　ト槍を抛る。唄になり、久吉こなしあつて、悠々と奥へ入る。跡に岩城守無念のこなし、いろ〳〵あつて、

岩城　抜身を鞘に収め、二重舞臺へ上がり
　ムウン。
　ト諸手を組み、思案のこなし。臆病口より珍花慶走り出て、岩城守に氣の附かぬ體にて
珍花　空井戸から、この花壇への抜け道、かねて開いて置く。
　ト花道へ駈け出す。
岩城　異國人待て。
珍花　なんと。
　ト立ちどまる。
岩城　高麗の珍花慶、用がある、待て。
珍花　さいふ貴殿は。
岩城　先達て合體なしたる金井山九郎。
珍花　ヤア。
　トつか〳〵と戻り、岩城守を見て
珍花　すりや、貴殿が金井山九郎どの。
岩城　高麗、韃靼兩國は確執とな。
珍花　イヤ、最前云うたは眞赤な僞はり。かねて貴殿と內通を仕る棘守官張嚕、この珍花慶を密かに招き、汝日本へ紛れ入り、金井山九郎に巡り逢うて、密事を告げよ、我れは後より、高麗國は韃靼國に打負け、敗軍と云ひ觸らし、數多の兵船、日本の地へ乘り入れ〳〵、兵庫の沖へ屯ろする其うちに、軍勢催促の獅子の御判を手に入れて持ち來らば、高麗國は日本の幕下に屬せしと、呼はり〳〵切り入つて、眞柴久吉、三輪五郎左衞門なんど小田家にはびこる臣下どもを討取つて、山九郎どのを四海の主と定めんと、高麗一統の存心。最前久吉に聞かさん爲、韃靼と確執に依つて、高麗は打負けしと、誠しやかに物語りしは、久吉に油斷させんが我が計略。
岩城　すりや棘守官張嚕を始め、我れに合體の高麗人、殘らず兵庫の浦まで着岸とな。
珍花　斯く姿を變へて、貴殿の在所を尋ぬれども、知れぬこそ道理、大判事岩城守どのが、金井山九郎どのであらうとは、思ひがけがござらぬ。なんと、獅子の御判を手に入れる工風がござらうかの。
岩城　氣遣ひしやるな。雌雄の片割れ、雌獅子の判は卽ちこれに。
　ト出す。
珍花　して、雄獅子の御判は。
岩城　眞柴久吉、今宵のうちに討取つて、久吉が首もろと

も、手に入れる雄獅子の判。先づ雌獅子の判を高麗へ合
證の印。
　ト渡す。珍花慶受取り
珍花　慥かに受取つてござる。この上は、見すが鼻に繋ぎ
置いたる小船にて、神崎門より兵庫へ駈けぬけ
岩城　片時も早く、
珍花　おさらば。
岩城　行きやれ。
　ト珍花慶、走り入る。橋がゝりより梅平走り出て
梅平　岩城守さま、こなたを饗應とあつて、この濱御殿に
集まる大名、肌には小具足、弓鐵砲を伏せ置き、こなた
を始め我れ〳〵を討取る手筈。油斷して不覺を取らぬ、
御用心々々々。
岩城　イヤ、久吉が素丁稚、何程の事があらん。彼奴ら
が手段の裏を掻く我が謀計。汝はこの宸筆を眞先に押し
立て、桃山に埋伏せし味方の者と一つになり、逆寄せに
責め寄せい。
　ト宸筆を渡す。梅平取つて
梅平　畏まつてござりまする。
　ト内にて遠責め打ちかける。岩城守こなしある。梅平
恟りして
あの遠責めは。
　ト岩城守、ツカ〳〵と下りて、空をキツと見て
岩城　忽ち變る星の變化。さては。
　ト思ひ入れあつて、落ちたる槍を取つてしごき
先づ久吉を、うぬ。
　ト槍を構へ、奧へツイと駈け込み、こなしある。
梅平　例へ山がこけて來ても、この宸筆さへ持つて居れ
ば、おれが身に凶事はない。エヽ、忝ない。
　ト戴く。この前より初花窺ひ出て
初花　その御宸筆を。
　ト取らうとする。
梅平　女郎め、何ひろぐ。
初花　御宸筆を此方へ渡せ。
梅平　なにを。
　ト立廻りにて、初花宸筆を取り、逃げようとする。梅
平引戻すところへ、木田平駈け出て梅平を投げて
木田　初花さま、宸筆お手に入りましたか。
初花　これを功に、わたしが身の上。
　ト宸筆を木田平に渡す。

木田　お出かしなされた。久吉さまへ吹擧いたさう。
初花　エヽ忝ない。今こそ與四郎が未來の道連れ。
ト側にある矢を取つて、自害して死ぬる。梅平起きて
梅平　その宸筆を。
ト取りかゝる。立廻りあつて、木田平と切り結びながら兩人橋がかりへ入る。ト奥より將監千本姫裏葉、立廻りの見得にて出て、將監二人を舞臺へ蹴落し
將監　將監に向つて慮外な奴の。
千本　いつぞや住吉で小平太に、奪ひ取られた自らが朱印。
裏葉　こなさんの手にある事は、醉うた振りして、わたしがよう見て置いたわいなア。
將監　それ見附けたら、女郎とて生けては置かれぬ。覺悟しろ。
ト千本姫へ切つてかゝる。裏葉支へるうち、將監朱印を落す。千本姫取上げる。將監寄るところへ、お汐、お梶、お浪、湊、めい／＼一腰差し、襷鉢卷き、脱ぎかけにて出て、將監を支へる。この隙に
裏葉　お姫樣、ござりませ。
ト千本姫を連れて入る。將監行くを、四人取卷き
四人　動かしやんすな。
將監　女郎ども、寄りやアがるな。
しほ　仲居といひしは久吉さまの計らひ。
なみ　皆小田家の家來の者。
將監　ヤア。
かぢ　叛逆一味の瀧川將監。
湊　尋常に
將監　なんと。
四人　覺悟さしやんせ。
將監　何を小癪な。
ト四人を相手にタテいろ／＼あり。トヾ切り結びながら皆々橋がゝりへ入る。始終遠責めにて、返し道具。
造り物、一面に桃の花盛り、この山の半腹に岩城守實は金山九郎、荒れの形にて刀を構へ、キツと見得。軍兵大勢、長柄にて取卷く。上手に久吉、三方に雌雄の御判と宸筆を載せて持ち、三法師丸を連れ千本姫は長刀を持ち、裏葉附き添ひ、四人の女形、めい／＼弓張りを持ち、橋がゝりの方には步左衞門、高股立ち、大小にて、珍花慶は衣裳入り上下に改め

木田平は二つの切り首を持ち、この後に軍兵弓張りを持ち、所々に篝り火を焚き、遠責め烈しくあつて、山九郎、軍兵を切り廻し、皆々逃げる。山九郎行かうとするを、歩左衛門立ち塞がつて、最前の短刀を出し、山九郎が目先へグッと突き附け

歩左　最前預かりし今川が短刀。
山九　なんと。
久吉　雌獅子の御判、宸筆ともに手に入れば、最早遁がれぬ、謀叛の張本。
珍花　高麗の使ひ珍花慶を打ち殺し、汝を騙かり、雌獅子の御判を手に入れし某は、久吉が家來、高川瀬平。
木田　宸筆を所持せし黒澤重次郎、瀧川もろとも、首にして、この通り。

ト見せる。山九郎驚ろく。

久吉　今川が殘黨、本名は大澤宮內。尋常に切腹するか。
歩左　押へて搦め捕らうか。
木田　切腹するか。
皆々　サア／＼、何とぢや。

ト詰めよる。

山九　運盡きたれば、是非に及ばぬ。

ト腹へ突ッ込む。

久吉　朝敵亡びたれば、この旨禁廷へ奏聞せん。先づ／＼、この場はお立ち／＼。

トめでたく　打出し

けいせい青陽鶴（終り）

八百七十五年忌

天滿宮菜種御供

留別の御詠歌に

流れ行く我れはもくづとなりぬとも
君しがらみとなりてとゞめよ

懷舊の御一首に

世につれて浪花いり江も登るなり
道明らけき寺ぞ戀しき

再演繪番附表紙

天滿宮菜種御供

口明

加茂神社の場
内裏紫宸殿の場
廊下の場
内裏門前の場

役名 ─齋世の宮。菅原道眞。左大臣時平。松ケ枝。判官代輝國。平の希世。紅梅姫。三好淸貫。春藤玄蕃。唐使、天蘭敬。舍人、峯丸。たくら丸。辨の宰相。伴の仲友。物淵の宰相。頭の中將。藤原の宿禰。腰元、勝野。

造り物、一面の玉垣、間に並木の松あり。臆病口に石の鳥居。東の方に車一輛あり。庭神樂にて幕明く。

ト向うより紅梅姫、姫の形、かつぎにて出る。後より腰元、勝野、腰元三人、お百度參り。此うち春藤玄蕃、非人の形、頬冠りして、向うに立ち、道の邪魔する。勝野、一人々々に行き當り、トヾ紅梅姫が袖を捕へる。勝野、中へ入り、玄蕃を突き退け

勝野　最前から見苦しい形をして、後になり、先になり、こりや、女子ばかりぢやと思うて、狼藉をしやるのか。

玄蕃　イヽヤ、狼藉ぢやござりませぬ。どうぞ取らして下さりませ。

勝野　ムウ、さては其方は袖乞ひか。さうならさうと、疾から云やつたがよいわいの。

ト懐の服紗包みより金を取出し

これ遣らう。

ト抛る。玄蕃取つて

玄蕃　こりやなんぢや。此やうな目くさり金、貰ふとて附けては來ぬ。馬鹿盡すない。

腰二　オヽ、をかし。乞食が金を嫌うてよいものか。

腰三　ほんに變つた物貰ひ。金が否なら、其方は何が欲しいぞいなう。

玄蕃　おれが欲しいは、情が欲しい。

皆々　ヤ、なんと云やる。

玄蕃　イヤサ、お姫樣の色よい返事、どうぞお聞かせなさ

れて下さりませい。

勝野　慮外な奴の。色よい返事の、情のと、むさい形をして穢らはしい。あなたをどなた樣ぢやと思うて。

玄蕃　イヤ、菅原の姫君、紅梅姫といふ事知つて、この願ひ。

勝野　ヤ、なんと。

玄蕃　どうぞ色よい返事、聞かして下さりませ。

　ト頰冠り取る。皆々見て

皆々　ヤア、お前は、

玄蕃　大內の官人、春藤玄蕃。

勝野　その玄蕃さまが、何ゆゑ襤褸を召して。

玄蕃　この玄蕃が仲立ちにて、度々送る時平公の艶書は、高位ゆゑ憚りありとのお返事。それゆゑ、この玄蕃がこの姿は、時平公の戀を叶へん爲。姫君、非人なれば高位の畏れもあるまい。色よい返事をお聞かせなされて下さりませ。

腰二　すりや、時平公の戀を叶へん爲

腰三　非人となつて姫君の、返事をお聞きなさる、のか。

勝野　ほんに、思ひがけもない戀の取持ち。

腰一　殊に、日頃から惚れてござる時平さま。

勝野　こりやマア、お姫樣、お返事を

皆々　どうなされますえ。

紅梅　不束な自らを、さほどまで思うて賜はる時平公。さりながら、父上、母樣のお許しもなきに自らが、直ぐにお返事は、免して下されいなう。

玄蕃　すりや、どうあつても時平公を、お嫌ひなさるゝのか。

勝野　イヤ／＼、申し、玄蕃さま。なんの左やうな事でござりませうぞ。時平公は今の世の美男。なんのお嫌ひなされうぞ。親御樣への御遠慮か。結ぶの神樣の御麁相か。御緣のないものと思し召し、フッツリと

玄蕃　默れ、勝野。いま飛ぶ鳥も落つる時平公の御威勢。得心なければ無理やりに、館へ連れ歸つてお取持ち、

勝野　詞が過ぎる、玄蕃さま。事を分けて仰しやるに、無體に取持たうとは。そちらは武官、こちらは大納言。權威を以て、得心は致しませぬ。

玄蕃　面白い。大納言でも、武官でも、戀に上下の位があらうか。面倒な。そこ退かうてや。

　ト勝野を突き退け、紅梅姫にかゝる。橋がゝりより判官代輝國出て、玄蕃を投げる。

勝野　ヤア、お前は輝國さま。

輝國　これは菅家の姫君。當社へ御參詣でござりますか。

ト玄蕃起き

玄蕃　ヤア、輝國。この玄蕃をなぜ投げた。

輝國　今日は齊世の親王さま、この加茂の社へ御參詣。路次の警固は貴殿と某。宮には先達て御參詣なされたところ、遲參といひ、その姿は。

玄蕃　イヤサ、その儀は。

輝國　武官は、襤褸を身に纏うても、苦しうないか。

玄蕃　サ、それは。

輝國　その通り、記錄所へ申し上げうか。

玄蕃　サア。

輝國　サア〳〵〳〵。なんとぢや。

玄蕃　段々拙者が不調法。衣服を改め、親王のお目にかゝらう。

ト淨瑠璃になり

〽この場をくろめる口車、ぬらりくらりの二股武士、尻をふり立てゝ逃げて行く、あと見送りて女中達。

勝野　よい所へ輝國さまが、お出でなされて今の難儀を。

紅梅　それ〳〵。自らはどうなる事と案じて居ました。段段の心遣ひ、嬉しうござるぞや。

輝國　イヤ、モウ、武士に有るまじき主の戀の取持ち。その馬鹿者に出合ひがしら、各々の御難儀見かねまして、ちよつと支へましてござります。

勝野　申し、お姫樣、とてものお世話次手、輝國さまをお頼みなされて、今のお方の事を。

紅梅　ほんにならう。イヤ、コレ、輝國どの、この上ながら自らが願ひ、どうぞ聞いては下さるまいか。

輝國　姫君のお頼みとは、大方御神事を拜みたいとの儀でござりませう。拙者はこれより神主巫女が方に休息いたします。いづれも方も、御神事の始まるまでは、神職方へお越しなされ、御休息なされませう。

ト紅梅姫、いろ〳〵心遣ひ

紅梅　ムウ、そんなら、まだ宮樣は

勝野　イエ、サア、アノ、宮樣へ參るのは、後になされて、マア、輝國さまと御一緒に、暫らく神主方へお越しなされて、ナア、宮樣に。ナア、宮樣へ御參詣遊ばされ、暫らく御休息なされませ。

紅梅　そんなら勝野。暫しのうちは

輝國　神職方へ、御同道申しませう。

勝野　左やうならば輝國さま。
輝國　勝野どの。姫君樣。
皆々　サア、お越しなされませう。
〽いざ此方へと輝國が、案内につれて女中達、神主方へ急ぎ行く。
ト輝國、紅梅姫、腰元、皆々、臆病口へ入る。
〽始終の樣子とくと見て。
ト松並の間より玄蕃、たくら丸出る。
たく　玄蕃さま。
玄蕃　たくら丸。
たく　いま勝野と紅梅姫と、申すを聞けば、今日この處にて、齊世の君と紅梅姫と、密かに不義の出合ひ。
玄蕃　さてこそ。いつぞや時平公が、紅梅姫を御覽なされて、ハテ、なよやかな女と仰せありしは、惚れてござるに相違ない。道を守る時平公。口へ出しては仰しやらぬ。そこを見込んで此方から、口說き落して差上げさへしたら、身共が働らき。
たく　サア、拙者も左やうに存ずれど、何を云うても、齊世の君とくさりあうて。
玄蕃　コリヤ、其方はこの處に忍び居て、齊世の君と紅梅姫が、不義の樣子をとくと見屆け、早速身共に相知らせよ。合點か。
たく　畏まりました。この事御注進申さば、定めてずつしりと御褒美下されますか。
玄蕃　オヽ、その時は一廉の恩賞くれるワ。
たく　うまい〳〵。
玄蕃　必らずぬかるな。
たく　合點ぢや。
〽しめし合せて兩人は、東西へこそ。
ト玄蕃、たくら丸、兩方へ別れ入る。ト神樂になる。
ト松が枝、郡代の娘の形、抱へ帶、菅笠持ち出る。後より腰元四人、抱へ帶、菅笠にて出る。
腰八　オヽイ〳〵、皆の衆。もそつと待ち合はしてくれたがよいわいなア。
ト云ひ〳〵本舞臺へ來る。
腰七　若菜どの、お前、もつと早う歩いたがよいわいなう。
腰五　なんで後へ下がつて居やしやんしたぞいなう。
腰八　サイナア。あまり加茂川の水が綺麗にあつたに依つて、堤を河原へ下りて、口を濯いで居たうちに、ほいと

先へ來てから、とんとわしに汗をかゝしたわいなう。
腰六　其やうな事なら、さう云うたがよいわいなう。
腰八　なにを、人をほつたらかして置いてから。イヤ、申し、松が枝さま。ちつと向うの山の景色を御覽じませ。なんと、いづくでも春の山路は、一入の詠め、よいものでござります。取分けて、都の東山は、名高い程あつて、どこやらがしをらしい。のどやかに見えますわいなア。
松枝　サレバイナウ。河内の内にも生駒山、またその外に、たんと名高い山はありながら、この都の東山は、おのづと長閑に、花の盛りも一入の詠めぢやわいなう。
腰六　左やうでござります。蒲團着て寢たる姿や東山、と發句とやらに詠んだ通り、ソレ、あの山の姿は、とんと蒲團着て寢て居るやうにござります。
腰五　ほんにさう見えるわいな。思ふ男と寢ながら、あの山を詠めたら、面白からうわいなア。
腰八　オヽ、兹な子わいなう。アノ、まだ、しつぽりと寢て、面白いやら、をかしいやら、知れやしまいが。但し知つて居やるか。
腰七　コレイナウ。そんな事云はずと、ちやつと加茂へ參らしやんせぬかいなう。

腰八　もう爰が加茂樣ぢやわいなう。
腰六　コレ、若菜どの。もう爰とは、どこぢやぞいなう。
腰八　アレ、あの石の鳥居の在る所が、加茂ぢやわいなう。
松枝　ムウ、なんならあそこが加茂樣かや。
腰八　左やうでござります。
松枝　思ひの外、早う來た事ぢやなう。
腰八　その筈でござります。春の野づらの道草で、思はず近う覺えます。あの鳥居の方が加茂。それから斯う左の方に高う見えますが、都の富士と名高い比叡の山。それから、こちらが百萬遍眞如堂、黒谷永觀堂、それから祇園、淸水。あの大きな屋根が今朝參りました大佛。それからこちらが
ト方々指ざし敎へるうち、花道の方を見て
ハア、來るワ〳〵。
皆々　何が來るぞいなう。
腰八　申し、松が枝さま。御覽じませ。この加茂堤を眞直ぐに、アレ〳〵、赤い笠をさしかけて來るのは、どこぞの長老。お寺參りか、但しは、お公家樣の御參詣かいなア。

腰七　ほんになア。しかも大勢連れて來るわいなア。

腰五　松が枝さま。御覧じませ。ありや、邌物ぢやないかいなア。

松枝　ほんに、珍らしい事を見る事ぢや。シタガ、爰に居たら叱りはせまいかいなう。

腰八　ナンノイナア。叱つたら、こちらは田舍者でござります。お公家樣を拜ましておくれと申しますわいな。

腰六　アレ／＼、もう向うへ見えるわいなア。

腰八　ほんに、矢ッ張りお公家樣の御參詣ぢやわいなう。

腰七　お公家樣といふものは、器量のよいものぢやげな。爰に居て見ようわいなう。

腰五　松が枝さま、ちつとの間、この床几にお掛けなされませ。

〽わしも見ようと口々に、笑ひさゞめき女中どし、これ幸ひと木蔭なる、床几に休らひ待ち居たる。

ト皆々床几に腰掛けると、津島がゝりの囃子になる。

ト向うより、半素袍、股立取り、鐵棒二人、舍人、峯丸、白臺に丹塗りの矢一筋載せ持ち出る。齊世の君、指貫、壺折りにて中啓を持ち出る。後より仕丁、朱の日傘さしかけ、供の仕丁、太刀をかたげ、仕丁、大勢附き出る。本舞臺に並ぶ。神主臆病口より出向ひ

神主　これは、畏れ多い、徒歩路の御參詣でござります。先達て仰せ越されました通り、當今の御心儀御祈りの爲、心しづめの御神事、執行いたしましてござります。

齊世　オヽ、大儀々々。卽ちこれへ持たせし丹塗りのこの矢、神前に供へ、愈々丹精を抽んでゝよからう。

ト此うち、松が枝、齊世の君にこなし。

神主　畏まり奉りました。卽ち御內意に從ひ、向うなる林の中に、別殿をしつらひ置きましてござります。あれへお入りあられまして、御休息あつて然るべう存じ奉ります。

齊世　オヽ、何かと、いかい心遣ひであらう。兎角よろしう計らひを賴む。

峯丸　ナニ、釆女どの。然らばこの矢を相渡し申します。猶々御祈念賴み存じます。

神主　畏まりましてござります。

齊世　峯丸、參れ。

峯丸　ハッ。

神主　イザ、御案內いたしませう。

ト神樂になり、齊世の君、峯丸、神主、仕丁、殘らず

ト橋がゝりへ入る。松が枝こなし。
腰八　なんと、皆の衆。今のお公家様は、美しいお器量なお方ぢやあつたなア。
腰七　サイナウ。とんと姫御前のやうにあつたわいなう。
腰六　シタガ、もそつと、とつくりと見ようと思つてゐるうち、つい。
腰五　わしも、とつくりと見ようと思うたに、残り多い事ぢやわいなア。ありや何といふお公家様であらうぞいの。
腰八　オヽ、何といはうと儘よ、所詮、こちらの口へは入らぬ。矢ッ張りこちらが口へ入る、焼餅なと可愛がらう。イヤ、申し、松が枝さま。ちやつと参らうではござりませぬか。……申し、松が枝さま
ト松が枝、橋がゝりの方を見て、うつかりとし居る。
コレ、申し、松が枝さま。
松枝　なんぢやいなう。
腰八　加茂へ参らうぢやござりませぬか。
松枝　参らう／＼。ちやつとおぢや。
ト橋がゝりへ行かうとする。腰元八、留めて
腰八　申し／＼。こりや、どれへお出でなされますぞいの。
松枝　ハテ、加茂へ参るわいなう。
腰八　ハテ、滅相な。加茂はそつちぢやござりませぬ。こちらでござりますわいなア。
松枝　それでも、こちらへ行かしやんしたもの。
腰八　誰れがいなア。
松枝　今のお方が。
腰八　それを此方が構ふ事かいなア。
皆々　加茂はこちらでござりますわいなア。
松枝　それでもわしは、こちらへ行きたいわいなう。
腰八　ハテ、わつけもない。コレ、皆の衆、連れまして行きやいなう。
皆々　サア、お出でなされませ／＼。
ト松が枝が橋がゝりへ行かうとするを無理に引ッ張り
皆々　サア、お出でなされませ／＼。
〽いざ御越しとさゝめけど、姫は心も空蟬の、名残りをし鳥いはぬ氣も、知らぬ腰元附きそひて、宮居の内へ急ぎ行く、又も鳥居の内よりも、姫に従ふ勝野が采配。
勝野　コレ／＼、皆の衆。此やうに遅い宮様は、どうした

事であらう。わしが案じるより、姫君樣は百倍。コレ、皆の衆は、この堤を往て見てござんせ。

皆々　アイ〳〵。畏まりました。

〽皆打連れて出で迎ふ。出合ひ頭に峯丸を、見るより勝野は走り寄り。

勝野　オヽ、峯丸どの、待ちかねたわいなう。コレ、峯丸どの、今のお方のお首尾はどうでござりますえ。

峯丸　お氣遣ひなされな。上首尾々々々。お姫樣にも、さぞお待ちかねと、私しも最前から心が急きました。

勝野　お待ちかねどころか。お姫樣は、最前から飛び立つやうに。

峯丸　お道理々々々、そんならお供仕りませう。

勝野　サア〳〵、早うこれへ、連れまして下さんせ。

峯丸　合點でござります。

〽詞の中へうづ高き、人目忍びの御參詣。

勝野　これは畏れ多い宮樣。これへ御供申しましたは、ちつと申し上げたい事がござりますゆゑ。

齋世　勝野、して、其方の云ひたいといやるは、何事ぢや。

勝野　サア、その樣子はツッとモウ、わたしが口から申し憎い。コレ、申し、姫君樣、お前が直々に仰しやりませ。

〽押しやられて姫君は、我が身もともに紅梅の、色香も恥づるその風情。

紅梅　申し、宮樣。度々送る玉章のお返事、其うちに首尾あらばと遊ばしたは、よもやお僞りではあるまいと、思ひながらも疑ふは、姫御前の常と勘忍して、必らず變つてたもるなえ。

齋世　それなる勝野が、いかい世話。嬉しい文の數々も、もしや戲れ、ざれ事かと、疑うて居ましたわいなう。

紅梅　其お詞に僞りなくば、いつまでも、淺からぬお情を。

齋世　僞りならぬ證據は、コレ、そもじより送られしこの短册。

紅梅　成る程、これは自らが送りし筆すさみのこの下の句。

齋世　我が詠みかけし上の句は、春くれば柳の色も解けにけり。

紅梅　結ぼふれたる君が心も。そんならこの短册は。

齋世　そもじへの返事。

紅梅　エヽ、お嬉しうござります。

　ト短册を抱きしめる。

峯丸　さうぢや、姫君様。たんとお喜びなされませ。戀の叶うた印の短册。春くれば柳の絲も解けにけり、と書いてはあれど、此まゝでは、姫君のお心が解けまい〳〵。アヽ、どうぞして。オヽ、それ〳〵。今日はマア、お歸りなされませ。

勝野　アヽ、コレ〳〵、滅相な。それでは折角

峯丸　イヤ〳〵、大事ござりませぬ。何事も私しが胸にござります。なんぢやあらうと、あの車に召してお歸り、姫君様もあの御車へ。

紅梅　滅相な。其やうな耻かしい。

勝野　成る程。こりや峯丸どのゝ云はしやんす通り、あの御車へ御一緒に、お召しなされてお歸り遊ばしませ。

紅梅　それでも。

　トうぢ〳〵する。

勝野　エヽ、初心な。皆の衆、何をうつかり、早うお二人を。

皆々　アイ〳〵。マア、お越しなされませ。

〽さア〳〵お出でと進められ、流石にそれと耻かしの、森の木の葉の夕づく日、面まばゆき御風情。

サア〳〵、お越しなされませ。

〽嬉しいやら、怖いやら、今更なんと岩橋の、渡りかけたる初戀路、いざなひ乘せる御車の、內やゆかしき絲なり。勝野はほつと吐息つき。

勝野　アヽ、しんどやの。マア、どうやら斯うやら、御神事を濟すやうになつた。コレ、皆様、爰に居てはお二人のお氣が張る。暫しのうち向うの森へ行て、待ち合はして居やしやんせ。

腰二　イカサマ、まだお隙もいらう。そんならわたしらは參りますぞえ。

峯丸　私しもあれへ參り、お歸りを待ちませう。

勝野　さうさしやんせ。

腰二　サア、皆様、ござんせ。

　ト腰元皆々橋がゝりへ、峯丸は臆病口へ入る。

〽皆打連れて入る後へ、こなたの蔭よりたくら丸、官人仕丁引き連れて、始終立ち聞き、しすまし顏。

　トたくら丸、仕丁、大勢出る。

たく　コリヤ、勝野、齊世の君、紅梅姫、二人の不義を取持ちする其方。宮様はどれへ連れて行た。

勝野　コレ〳〵、たくら丸どの。そりや何云はんす。わたしが宮樣の事知らうかいな。その上、此方の姬君、宮樣と不義などとは、何を證據。何を見附けて云はしやんす。ひよんな事云ひ出して、後で後悔せまいぞえ。

たく　イカサマ、こなたは菅原の腰元、宮樣の事は知らぬ筈。よい〳〵、宮樣のござる處は、これから身が詮議せうかい。

ト車へかゝる。勝野支へる。所へ峯丸走り出て、車を圍うて

峯丸　イヤ、この御車のうち、詮議さす事はならぬ。

たく　そりやなんで。

峯丸　この御車は宮樣の御車。お歸りに召させて、この峯丸がお供する。其方達に指をさゝす事はならぬ。

勝野　オヽ、さうでござんす。必ず見せて下さんすな。

たく　イヽヤ、其やうに見とむながる程、猶見たい。ソレ、仕丁達、詮議さつしやれ。

仕丁　合點ぢや。

トこれより神樂になる。仕丁、車へかゝる。峯丸、勝野、たくら丸、皆々立廻りよろしくあつて、勝野、峯丸、仕丁を左手に皆々橋がゝりへ追ひ込む。ト車の内より齊世の君、紅梅姬、飛び下り

齊世　コレ、紅梅姬、人が知つては、互ひの身の上。密かにこの場を。

紅梅　そんなら、どうでも。

齊世　所詮、御所へは歸られぬこの身。

紅梅　自らも一緒に。

齊世　紅梅姬。

紅梅　宮樣。

齊世　サア、おぢや。

〽互ひに手に手を鳥居先、行くへも知らず落ち給ふ、斯くと聞くより春藤玄蕃、車の許へ馳せ向ひ。

ト齊世の君、紅梅姬、向うへ走り入る。玄蕃、つかつかと出て車の内を見て

玄蕃　さては兩人とも早や、落ち失せたか。

ト以前の短册を取つて

ムウ、齊世さま參る、紅梅より。これこそ、紅梅姬と齊世の君が不義の證據。さうぢや。

〽逸足出して駈け行く。

ト玄蕃向うへ入る。

〽後へ駈け來る峯丸は。

ト峯丸、車の内を見て

峯丸　さてはお二方とも、はや落ち給ふか。ホイ。

ト仕丁取卷き

仕丁　やらぬぞ。

トこれよりさま〳〵大ダテあつて、仕丁殘らず逃げて入る。たくら丸かゝるをポンと當て

〽心ならずも峯丸は、御跡慕ひ走り行く。

ト峯丸、向うへ走り入る。

〽後へ勝野がいつきせき、車の内を見るよりも、はつと驚ろき、胸は板、立つたり、居たり、狂氣の如く。

勝野　ヤア、さてはお二方ともにお立退き……道の程が心元ない。さうぢや。

ト行かうとする。たくら丸起きて

たく　さうはならぬ。われより先へ記錄所へ注進する。そこ退け。

ト勝野、たくら丸立廻りにて、ちよいと勝野を當て、たくら丸向うへ走り入る。

〽いで御供と駈け行く向うへたくら丸、立ちふさがり、駈け行くを、やらじと留める女の念力、後を慕うて。

ト勝野も起きて追うて行く。返し。

三間の間、小高うして、御殿の見附き、一面に御簾、東西は御殿の渡殿にて、前は殘らず黑塗りの高欄。正面に階。階下に右近の橘、左近の櫻。舞臺先は三尺程高き卓に金の香爐載せある。御殿の上に伴の仲友、藤原の宿禰、頭の中將、物淵の宰相、いづれも冠、裝束にて兩方へ二人づゝ別れ居る。その下渡殿に、並み公家大勢並び居る。櫻の下に三好淸貫、冠、裝束、床几にかゝり、橘の下に平の希世、冠裝束、床几にかゝり居る。官女、一、二、三、天冠、舞ひ衣、緋の袴にて、梅ヶ枝を持ち、踏歌の舞を舞うて居る。本管絃、琴入りにて、双方この見得にて、右の道具一面に突き出す。三人いろ〳〵振りありて舞ひ納むる。後向きに辭儀する。淸貫、希世、正笏して

淸貫　今日の踏歌の節會、首尾よく相勤めましてござります。

ト管絃止んで、樂になり、皆々シイ〳〵と警蹕の聲。花道より左大臣時平、冠、裝束にて笏を持ち出て本舞臺へ來て、御殿の方へ頭を下げ、正面に直り、香爐に

時平　香をつぎ、天拜する事あつて、靜々と階を上り、チツ
と辭儀する。ト東西より公家、二人出て、右の卓を舁
いて臆病口へ入る。時平正面に直り、こなしあつて
宣風樓の北、新たに栽うる所千金の吟、二葉よりか
んばしく、君幼稚にましませども、世は巍々たるかな君
たる事。唐堯に準らへ、民また舜の民の門。豐かに治ま
る秋津洲の、今日の節會の幸ひ。いづれも拜賀を唱へて
よからう。

皆々　ハア、君の寶算萬々歲。おめでたう存じ奉ります。
ト皆々辭儀する。ト橋がゝりより官人出て

官人　申し上げます。唐土照宗皇帝の使ひ、天蘭敬といふ
者、隣國會盟の喜びを奏せんと、來朝仕りましてござり
ます。

清貫　右中辨、聞かれよ、君の仁德、四海の外まで惠み、
唐使來朝は、日本の外までの譽れ。時平公、如何計らひ
ませうな。

時平　長の波濤を越し、來朝せし唐使、無下に歸すは本意
ならず。何にもせよ、此方へ通してよからう。

希世　官人。唐使をこれへ通せ。

官人　ハツ。唐使天蘭敬、此方へ通りませい。
ト云ひ捨て入る。

天蘭　ハ、ア。
ト唐人の姿にて、異風なる石臺に、梅の莟を植ゑ持ち
出て、清貫、希世が間に直し、下へ直りて辭儀する。

清貫　唐土の使ひ、天蘭敬とは汝よな。

天蘭　ハツ。

希世　見れば、梅の一本の鉢植ゑを持參したるは、唐土よ
りの獻上なるか。

天蘭　ハツ／＼、畏れながら、臣この土へ渡りしは、即ち
この梅の不思議に依つて、はる／″＼來朝仕りましてござ
ります。

希世　梅の不思議に依つて來朝とは。

天蘭　ハツ。抑々この梅は、唐土皇帝の御宇、天下文學盛
んにて、萬民泰平を唱へし時、諸木にすぐれ、花の色香
を增したるゆゑ、好文木と號す。それより、國家に文學
起る世には、花も色よく、匂ひも深く、まつた文學すた
る時は、色香を失ひ、博學の人の殖ゆる時は芽を出だし、
不學の人の殖ゆる時は、土の底に朽ち果つる。君子の德
を備へし名木。然るに日本の大臣、和漢の學に通じ、こ
の梅を深く所望の由、我が帝これを感じ、臣を使ひに來

朝は、即ち大臣に獻上申さん爲。臣、來朝仕りましてご
ざります。
清貫　ムウ。日本の大臣とは、即ち本院の左大臣藤原の時
平公。唐土へあの梅御所望の覺え、ござりますかな。
時平　イヤ、臣、拙くも不學なれば、いま、唐使の物語り、
希代の梅の好文木、所望せし覺え、更になし。
希世　でも、日本の大臣とは、時平公より外になし。我が
師匠と頼む菅原の道眞卿は、未だ大納言なれば、猶以て
覺えはござるまい。
仲友　イヤ〳〵。希世卿。日本の大臣とは、矢張り時平公。
左大臣の御仁德は、四海の外まで靡き隨ふ日本の聖人。
物淵　如何にも、仲友卿の仰せの通り、時平公は正しく照
定公の御胤。氏は正しき藤原氏。
宿禰　唐使、天蘭敬。日本の大臣とは、これなる時平公。
尊顔を拜し、早く梅を獻上仕れ。
頭　智仁兼備の時平公。拜顔の致し、唐土への土産に致
せ。
清貫　天蘭敬、許す。
天蘭　ハツ。
ト天蘭敬差寄る。

皆々　近う〳〵。
時平　先づ〳〵。いづれも靜まられよ。全く覺えなき時平。
僞はりを述べ、後日に顯はれなば、唐土までも日本の耻
辱。イヤ、ナニ、天蘭敬とやら。この土より望みしその
梅、定めて其方に覺えあらう。日本の大臣とは、この時
平に於いては、梅を乞ひし覺えない。併し、唐土の使ひ、
其まゝに歸朝もなるまい。臣が面を見て、思慮をめぐら
せ、天蘭敬。
天蘭　ハッ〳〵。有り難き仰せ。流石は日本の大臣の威風。
お詞に從ひ、御免を受け
ト摺寄り時平をとくと見て
ハア、。畏れながら、拜顔仕りましたるところ、君にて
はましまさず。すりや、君より外に。
仲友　右大臣は、三歳以前、御他界あり。
清貫　それより左右兼帯の時平公。
希世　外に大臣とてはましまさぬ。
天蘭　でも、折角この土へ渡りし天蘭敬。すご〳〵と歸朝
もならず。ハテ、何とがな。
時平　イヤ、ナニ、天蘭敬。主は知らねど、日の本より望
み、唐帝に契約せし好文木なれば、何ぞ外に、これぞと

いふ證據ばし覺えぬか。
天蘭　ハア、。貴君のお詞にて、思ひ出だせし慥かな證據。去年の春、唐土へ渡り、好文木を望まれしを、宮中より召し、詩文を詠じ、即ち我が國の裝束を賜はりしは、慥かな證據。
時平　ちやというて、去春、渡唐せし公卿、覺えなし。
皆々　すりや、矢張り時平公か。
時平　ハテ、何人ぢやよなア。
　ト皆々こなしある。橋がゝりより
道眞　アイヤ、その好文木を望みしは、菅原の道眞。それへ參つて、唐使に對面いたしませう。
　ト唐樂になり、道眞、輪巾、涼衣の唐裝束にて靜々出る。
清貫　ヤア、道眞卿。其お姿は。
道眞　我れ常々好文木を慕ひ、幾春過ぎし思ひ寢の、夢路は遠き唐土の王宮に到り、天蘭敬といふ臣下に筆談して、長篇の詩を奏し、裝束を賜ひて着すると思へば、夢覺めて、枕を見ればこの裝束、誰が置きしとも、不思議とも、人にも語らず過ぎつるに、只今參内し、仁壽殿の渡殿にて、唐使の來朝と承り、取寄せ着せしこの裝束。夢に見えし天蘭敬。其方に覺えありや。
　ト此うち天蘭敬、道眞をとつくりと見て
天蘭　ハア、。誠や、この君に違ひはあらじ。
清貫　すりや、道眞卿には、夢に渡唐ありしとな。
道眞　如何にも。枕に殘るこの裝束、天蘭敬來朝といひ、かた〳〵思ひ合はすれば、疑ひもなき正夢なりしか。
天蘭　さては夢に魂ひの、我が國へ渡り、詩を作り給ひしか。只人ならぬその粧ひ。拜顏いたして蘭敬が、國への規模、この上の喜びなし。エヽ、有り難や。
清貫　ハテ、夢に魂ひが通ふなどゝは、女童の俗說。莊子が夢中に胡蝶となつて、牡丹に戲むれしとは皆虛說。それに、道眞卿の渡唐を正夢とは、珍說を承はるではござらぬか。
物淵　成る程、道眞卿を今の世の聖人ぢやと申すが、大きな僞はりでござります。
皆々　そりや又、なぜに。
物淵　ハテ、聖人に夢無しと申しますてや。
皆々　イカサマ、左やう。ハヽヽヽ。
　ト皆々笑ふ。
時平　イヤ〳〵、さに非ず。大聖人孔子も、夢にだに周公

を見ず、と宣へり。すりや、聖人に夢なしとも申されまじ。道眞渡唐ありしは正夢。文學書蹟に秀でし德、卽ち日本の譽れ。さぞ、帝にも御喜悅ならん。

道眞　これは〳〵、時平公。有り難きお詞。道眞が大慶、家の面目、この上がござりませうか。

天蘭　イザ、道眞卿。獻上の好文木の一枝を手折り、宿の枯れ木に接木して、咲くや咲かずや、試みん。

ト道眞、右の石臺の傍へ來て、振りよき枝を手折り、袖ぐるめに持ちて渡唐の天神の見えあると。大ドロドロにて、右の梅の花パッと開く。時平、思ひ入れあつて

時平　ハヽア、奇なるかな、妙なるかな。花物云はねど主を知り、開けし花は天蘭敬が、詞に違はぬ好文木。これにて、道眞卿が、文學に秀でし事を思はれよ。

希世　誠に、師匠ながら稀代の不思議。

清貫　清貫も言語を絶しました。

皆々　ハテ、天晴れの道眞卿ぢやよなア。

ト皆々なじるやうに云ふ。と內より

官女　勅諚。

ト官女一、白臺に冠、裝束を載せ持ち出づる。官女、二、同じく白臺に宣命を載せ持ち出る。

官女　菅原道眞卿へ勅諚。

道眞　ハツ。

ト平伏する。

官四　唐使の趣き、梅の不思議、帝樣の御叡聞に達し、それゆゑ昇進、卽ち宣命。清貫卿、急いで拜聽。

清貫　ハツ。

ト官女、四、宣命を差出す。清貫うや〳〵しく開き

從二位大納言、菅原道眞、先帝太政公以來、師範たる規模あるの上に、文學の譽れ唐土に達し、好文木の不思議を感ず。これに依つて正二位右大臣近衞の大將、兼ねて御內覽の宣旨を奉るものなり。延喜元年酉の正月。三善清貫承る。

ト皆々顏見合はせ

希世　ヤア。すりや、道眞卿を右大臣とは

皆々　こりやどうぢや。

官女　道眞卿、違背はあるまい。

道眞　ハツ〳〵。こは畏れ多き勅命。從二位大納言に昇進せしは臣が規模。それに、又候ふや、上もなき右大臣とは、氏を知らぬその身の活計。勅命に背くにはあらねど

も、臣が身を顧みて御辭退。何卒勅許希ひ奉りまする。

時平　イヤ〱、道眞卿。當今の覺えめでたき其許。臣、左大臣は司れど、未だ三十路に足らぬ時平。今日より左右に連綿して、政務萬事取計らひませう。

道眞　イヤ〱、時平公。君は正しく藤原氏、照宣公の御公達。臣は菅原。その職にあらざるに、官を穢すは天の照覽、勿體なし。

希世　左やうでござります、お師匠。官位も子供が愛する凧と同じ事。なんぼう用ひがよければとて、餘り上へ上り過ぎては、糸が切れて落ちて怪我を致す。ナア、清貫公。

清貫　如何にも。月天子さへ、滿つれば缺くる高上り、怪我の元。

仲友　道眞卿。こりや、いつまでも、御辭退あられよ。

道眞　成る程。各〻の仰せの通り、公けの政務は時平公、兩大臣を御兼帶にて。

時平　イヤ〱。天下は一人の天下にあらず。自他とも時平指圖を受けん。

清貫　イヤ、時平公。大納言の道眞卿を、常から餘りお用ひが過ぎますゆゑ。

時平　默れ、清貫。希世も共に、師たる道眞卿を嘲ける過言。まつた公卿の面々もその通り。この時平は父の命、例へ地臣、匹夫たりとも、德ある者を敬ふ教へ。まして文學の司、道眞卿を敬ふが不思議なか。今日只今より右大臣道眞卿とこの時平、甲乙があらんや。出世を妬む偏執の方々、心外に思はゞ、その道に秀でゝ、官位昇進召され。餘りといへば、法外至極。

ト皆々を睨め廻はす。ト皆々冠を下げる。

この後、道眞卿を陰にても惡舌あらば、キツト曲事たるべきぞ。

ト皆々あやまり平伏する。天蘭敬こなしあつて

天蘭　ハヽア、時平卿といひ、道眞卿といひ、いづれ劣らぬ聖賢の道、羨ましき神國の不思議。我が國廣しとはいへども、御兩君程の聖人なし。かゝる君に見ゆるは、來朝の德。この上は臣も退出いたさん。

時平　待つた。唐土よりの使ひ天蘭敬。暫らく都に留まつて、右近の馬場の花盛り。饗應は清貫、希世、兩人。彼れをもてなされよ。

希世　ハツ。これより直ぐに我が館へ。天蘭敬を誘引仕りませう。

天蘭　こは有り難き和國の馳走、辭退いたさずお受け申すが、國への土産。

官女　この上は道眞卿。帝樣へ。

道眞　でも、餘り冥加の程も。

時平　ハテ、違て辭退は違勅の罪。

道眞　ちやと申して。

時平　勅命は背かれまじ。局達。道眞卿を裝束の間へ。天蘭敬は兩人と共に歸館。イザ、道眞卿。裝束を改め、共に御盃を頂戴いたさん、

道眞　すりや、詞を盡して申しても、

時平　四海安全、諸民の爲。

道眞　ハッ。

官女　イザ、裝束の間へ。

時平　いづれも退出。

皆々　ハッ。シイイイ。

ト唐樂になる。皆々警蹕、辭儀する。ト二重舞臺殘らず御簾下りる。ト清貫、希世目まぜある。清貫先へ希世、天蘭敬を連れ、橋がゝりへ入る。返し。

右の道具、段々東へ引込み。平舞臺の御殿を引き出す。常の管絃になり、時平靜々向うへ行きかゝる。向うより官女、三、二、一、銘々白臺の織物、絹布、黄金を載せ持ち出で、一人々々行き違ふ事あり。三人、時平を取廻して

官皆　時平公。只今御歸館でござりますか。

時平　ホウ。采女司の小督達。その獻上は。

官三　ハッ。菅原の道眞卿へ、今日右大臣昇進の賀を祝して、女院樣よりお贈り物。仰せを蒙むる我れ〳〵三人。

官二　この黄金は親王家より道眞卿へ。

官一　これも道眞卿へ、后町より下され物でござります。

時平　すりや、上樣より道眞卿へ。

官皆　時平公。定めしお羨やましうござりませう。

時平　ハヽヽヽ。女童の何を云ふやら。道眞卿も、追ッつけ退出であらう。早う行け〳〵。

官一　サア、二人とも、ござれ〳〵。

ト官女三人、右の臺を持ちて橋がゝりへ入る。時平こなしあり、又段々行く。此うち絲終管絃。臆病口より、公家の形にて二人、銘々獻上物を持つて出る。時平を見て思ひ入れある。

公家　これは最早御退參でござりますか。暫らく。

ト時平、上の方にチッと留まり、右臺の物を前へ並べて

公一　今日、君の幸賀を祝し、一院より下され物。有り難う拜領あられませう。

時平　ムウ、さては臣と道眞卿と、見紛うたのぢやな。

公家　エヽ。

ト仰のき、顏を見て

まことにあなたは時平公。

公二　お裝束が替りしと思ひ、道眞卿と見紛へたる、我れ我れが不調法。眞平御赦免下されませう。

時平　なんの〳〵。赦す〳〵。

ト何氣なう云ふ。

公二　エヽ、有り難う存じ奉ります。

ト兩人怖々右の臺を取り上げ

公一　ハテ、其許の麁相。

公二　イヤ、貴公の不調法。

ト兩人せり合ひながら、橋がゝりへ入る。ト此うち、御簾の間々より希世、清貫、伴の仲友、頭の中將、物淵の宰相、藤原の宿禰窺うて出て來て

希世　時平公。暫らく。

ト時平立ちとまる。皆々時平を眞中に包み

皆々　さぞ、御心外にござりませう。

時平　いづれも、心外なとは、何が心外。

清貫　菅原の道眞。

時平　ヤ。

清貫　イヤ、お包みあられな。時平公。從三位より大納言に經上り、今日又、右大臣と、君と同席する道眞。

仲友　外戚の位を以て、なぜ追ひ退けなされぬぞ。

清貫　我れは顏なる道眞が、權威に押されて、君の御威勢日向の朝顏。

希世　菅原氏は日の本の繁昌。道眞一家、殿中に威を振はん現在。希世は師匠なれども、君の心を押し計り

清貫　道眞をぽッ下す御企てあらば

仲友　及ばずながら、我れ〳〵も合體して

物淵　共に道眞を追ひ退けん。

希世　サア、時平公、

皆々　御賢慮はな。

時平　臣を思うて、いづれもの志し、時平も滿足。併しながら、盛んなる時には制し、衰ふる時には制せらるゝ。世の盛衰は天の歸するところ、他の榮ゆるを見ても、さ

のみは羨やましからず。臣は臣なり、人は人なり。
清貫 すりや、現在お位を乗り越されても
皆々 君には、何とも思さずや。
時平 如何にせん玉の臺も八重葎、茂げらん宿に二人こそ
寝め。……官職の高下はあれども、仕ふる君は只一人。
皆々 すりや、どのやうにお勸め申しても。
時平 世は常闇ならず、日月は明らか。ア、、恐るべし恐
るべし。
皆々 ムウ。
ト皆々顔見合せ
ハテ、是非に及ばぬ。
ト皆々こなしあつて、御簾の内へ入る。時平、直垂の
袖を拂ひ
時平 ア、、穢らはしや。我れに勸むる逆意の程、巣父に
ならひ、瀧あらば耳を清めんに。
トこなしある所へ、辨の宰相、公家にて出て、橋がゝ
りへ向ひ
辨 求女司。内膳司。八省院。典藥寮。菅原の道眞卿、
今日より右大臣に任ずべきとの勅諚。キッとその旨心得
られよ。

ト方々の内より
内 千秋萬歳。おめでたう存じます。
ト大勢の聲する。時平後へ戻り
時平 辨の宰相。大切なる勅諚、とくと觸れたがよい。
辨 ハッ、畏まりましてござりまする。
ト御簾の内へ入る。清貫、希世、つか／＼と出る。
希世 御隨身、玄蕃より、君への取次。
ト返し前の短册を差出す。時平取つて
時平 春くれば、柳の糸も解けにけり、結ぼふれたる君が
心を。……齊世さま參る、紅梅姬。これは。
清貫 君かねて御賞美ありし、菅原の紅梅姬は、道に背く
不義密通。
希世 慥かに、時平公は紅梅姬に惚れてござらうと、家來
玄蕃が岡目の推量。そこで玄蕃が、折にふれて口說くと
いへども、得心をせぬ筈、齊世の君と忍び逢ひ、時平公
を忌み嫌ふは、これも大方、道眞の云ひ付け。ナア、清
貫公。
清貫 如何にも／＼。玄蕃が話し、蔭では時平公のざんげ
ざゝら。イヤ、モウ、都度々々には申し上げ憎い。
希世 戀といひ、位といひ、始終道眞が君の仇。いつそ、

我れ〳〵に仰せつけられたらば
清貫　この戀は、ずる〳〵。
希世　道眞が位は、べた〳〵。
清貫　その時は下地の威勢に又百倍。
時平　默れ。
希世　イヤモウ、なんにもむづかしい事ではござりませぬ。
清貫　つい時平公の、舌を揮ふばかりで
時平　默れ。
希世　道眞が官を引ッ剝ぎ
時平　默れ。
希世　紅梅姫を抱いて寢る。
時平　默れといふに。
ト大聲にて云ふ。
清希　ハイ。
時平　佞人の詞、劍より速かに人を斬ると。清貫、希世、この時平を魔道へ引入れんと、手を盡し、品を變へての逆意の勸め。言語道斷。使の廳の詮議にかけ、キッと刑に行ふべき兩人なれど、人を損はぬが臣が情。其まゝに差許す。この以後、無益の舌を動すこと勿れ。

清希　いつかな變ぜぬ。
ト行かうとする。希世、時平の袖を控ふる。清貫右の短册を見せる。
時平　エヽ、穢らはしい。
ト直垂の袖にてしばき、靜々と臆病口へ入る。兩人、時平を見送り、がつくりとして
希世　清貫卿。
清貫　希世どの。
ト立ち上がる。物淵の宰相、藤原の宿禰、頭の中將、件の仲友、皆々出る。ト向うより玄蕃出る。
玄蕃　御兩所樣。して、我が君
皆々　時平公のお心はな。
清貫　イヤモ、矢ッ張り善心。讒言などとは思ひも依らず。
希世　惡う勸めたら、我れ〳〵が首が飛ばうも知れぬ。
玄蕃　すりや、お渡し申した短册でも。
清貫　なか〳〵此方に思うた事は、鶍の嘴
皆々　喰ひ違うたる時平公の御心底。
玄蕃　して、この上は
清貫　云ひ合はした通り、
希世　道眞を仕舞ふ手段。

皆々　そんなら、密かに、

清貫　いづれもござれ。

ト皆々御簾の内へ入る。返し、右の道具、東へ引込む。

築土の塀。眞中石壇、公家門、飾り附けにて、前へ突き出す。ト橋がゝりより御所車を引出し、仕丁、隨身、青侍ひ、皆々列を正し、出て、控へ居る。ト臆病口へも同じく御所車を引出し、仕丁、隨身、皆皆出る。門の内にて

時平　先づ〳〵。右大臣より。

道眞　先づ〳〵。時平公より。

時平　ハテ、サテ

道眞　先づ〳〵。

時平　然らは御一緒に。

ト門の内より出る。道眞、冠り、裝束改め出ると、左右の供、一時に警蹕。時平こなしあり。

アイヤ、右大臣。今日、俄かの任官、もし供廻りも、先格なくば、同じ官位の時平が隨身、仕丁、御車舍人。道眞如何謝すべき。

道眞　ハツ〳〵。重ね〳〵の御懇志。有り難くも、法皇より御車勅許。

時平　ハテ、何かにつけて、お覺えめでたき道眞公。

道眞　公とは餘り

時平　イヤ〳〵、今日よりは右大臣。キツと正すも官位の禮儀。

道眞　誠に、それ程までに有り難き御賢君。

時平　唐土の樊噲が韓信を敬ひしも、高祖へ忠義。

道眞　その韓信は匹夫なれども、後には漢の大元帥。させる功なきこの道眞。

時平　イ、ヤ、彼れは武官、

道眞　これは文官。

時平　忠義は和漢相劣らず。

道眞　時平公。

時平　道眞公。

兩人　イザ〳〵。

トこなしある。

皆々　還御。シイイイ。

ト唐樂になる。時平、道眞、目禮。

幕

二つ目

菅丞相花園の場
內裏金樓閣の場
內裏記錄所の場

役名＝＝菅丞相道眞。娘、十六夜。平の希世。判官代輝國。三好淸貫。腰元、勝野。春藤玄蕃。久方御前。天蘭敬。物淵の三位。辨の宰相。頭の定岡。藤原の宿禰。菅秀才。左大臣時平。

造り物、向う一面網代垣。臆病口、一間四面、御簾かけてあり。舞臺眞中に見事なる紅梅の木飾りあり、西の方に射垜、的掛けてあり。紅梅の下に捨子あり。菅秀才、壺折りにて、半弓、的矢を射て居る。腰元勝野、傍らに矢取りして居る。腰元、一、二、銀の團扇にて菅秀才をあふぎ居る。腰元、三、太刀をかたげ居る。腰元、四、側に金の采持ちて居る。この見得、琴唄にて幕明く。

腰四　當り〳〵。
　ト采を上げる。
腰三　ほんにきついものぢや。一本も仇矢はないわいなう。
腰一　常々、稽古遊ばす程あつて、又ぶんなものぢやわいなう。
勝野　そりやその筈ぢやわいの。平常何につけても、氣を詰めて稽古遊ばす故ぢやわいの。イヤ、申し、ちとお休みなされませ。其やうに遊ばしたら、お手が痛みませうぞえ。
腰四　左やうでござります。ちつとお休みなされて、梅の盛りでもお詠め遊ばしませいなア。
菅秀　成る程、其方衆の云やる通り、最前より餘程の間。ちと休息しませうわいの。
皆々　左やう遊ばしませい。
　ト床几にかゝる。所へ侍ひ一人出る。
侍ひ　申し上げます。左中辨希世さま、何か御臺樣へ密々相談いたしたいとの儀、最早これへお出でゝござります。
勝野　そんなら、その樣子、奥へお知らせ申しませう。
久方　イヤ、勝野、聞いた〳〵。
　ト御簾の內より久方御前出る。
ソレ、希世卿を、こなたへお通し申しや。

侍ひ　ハッ。

ト云ふうち希世、橋がゝりより侍ひ連れ出て來る。久方御前こなしあつて出で迎へ

久方　オヽ、これは希世卿。

希世　御臺所。菅秀才どの。この程は打絶えましてござります。

久方　イヤ、モウ、此方も何かと取紛れ、お尋ねも申しませぬ。只今承りますれば、何か密々にお逢ひなされたいとの仰せ。どうやら案じられます。マア、その樣子をお聞かせなされて下さりませ。

希世　イヤ、密々と申しますでもござらぬ。御息女紅梅姫どの、齊世の君と譯あるとの取沙汰。行くへが知れぬとやら、見えぬとやら、餘り合點が行かぬゆゑ、親王の御所へ寄れば、御病氣とて御對面叶はず、まつたこなたの館へ參り、樣子を見れば、いつに變らぬ館の體。殊に、斯樣に花見ぢやの、的矢などと、優美の遊び。この希世、とんと合點が參りませぬ。紅梅姫のお身の上は、誠の事でござりまするか。

久方　成る程、御不審御尤も。齊世の君樣と忍び／＼の戀仲とは、まんざらな僞はり。殊更二人とも行くへ知れぬの見えぬのと、ほんに、それが惡名と申すもの。宮樣の御病氣も僞はりならず。まして紅梅姫は、お前にも御存じの通り、誠の母御は河内の土師村にござる覺壽さま。久しう便り音信もなし、それゆゑ、お見舞ひがてらに紅梅も、河内の館へ參りましてござります。

希世　ムウ、すりや、親王の御病氣も違ひなく、紅梅姫は河内の館へ。

久方　如何にも。

希世　ハテナア。

久方　ホヽヽヽ。希世さま。とつけもない事のお尋ね。何事かと存じまして、胸を抱きましてござりますわいなア。

希世　イヤモウ、この希世もお師匠の御息女、もしやと存じ、それゆゑ密々にてお尋ね申したのでござります。

久方　そりや御深切に忝なう存じまする。幸ひ今日のお出で。この花園の梅の盛り、一入の詠めゆゑ、小筒を持たせました。希世さまにも、暮れかゝるまで御酒宴なされませ。

希世　これは忝なう存じます。

菅秀　イヤ、申し、希世さま。私しが腕の的矢を御覽なさ

れて、御批判讀み上げます。

希世　これは〳〵、菅秀才どの。文武を忘れぬ心がけ、末頼もしう存じます。

久方　これは、マア、希世さまの御挨拶、忝なう存じまする。ナニ、菅秀才、其方も暫らく休息の爲め、奥庭へ御同道申し、御酒宴をお進め申しや。勝野、御案内申せ。

勝野　サア、希世さま。

希世　然らば御臺。菅秀才どの。いづれも案内。

皆々　先づ、お入りなされませい。

〽然らば後刻と左中辨、奥殿にこそ入りにける、跡はなまめく女中同志、色づく梅の木の下に。

腰四　アレ〳〵、梅の下に、赤子が泣くわいなう。

勝野　ほんに、何やら見える。

ト見て

ほんに、矢ッ張り、赤子ぢやわいなう。

腰二　こりや、捨子とやらぢやわいなう。

久方　ハテ、慈悲を守る世の中に、捨子するとは、邪慳の者の心ぢやなア。

腰四　申し〳〵。アレ、向うへ十八九な女中が爰へ來る。捨子の親であらう。

勝野　ほんに、それ〳〵。慥かにこの子の母親。申し、御臺樣。暫らく樣子を、控へて見ようではござりますまいか。

久方　イカサマ。勝野の云やる通り、子を捨てる親心、どうするぞ、試して見ん。皆も密かに。合點か。

〽皆打連れて入り澤の、小蔭に樣子を窺ひ居る、斯くとも知らず取り形も、廿歳にはまだら若き、子を捨てる身の憂き思ひ、梅の露やら涙やら、乾く間もなき十六夜は、やうやうに走り寄り。

トこの淨瑠璃にて、十六夜、御所女中にて、しを〳〵と出て、梅の下に寄り

十六　子を捨つる藪はあれど、身を捨つる藪はないとは、ほんに、よう云うた譬へ。よしないお腹を、假初めならぬ、宮仕への身の上。御所の人目を憚りて、其方を爰に捨てゝ置く、わしが心の悲しさ、辛さ。思ふやうなら、守り育て、蝶よ花よと撫でさすり、いたいけ盛りを樂しまうものを、それさへ叶はぬ御所の勤め、せまじきものは宮仕へ。捨てるわしより、捨てらるゝ其方も因果。わしとても、因果と因果が寄り合つて、假に親子となつたかいなう。可愛や〳〵なア。

ト抱き上げる。赤子泣くを、ちやつと抱きしめ
〽乳房を含めて我が身をも、子持ち筵の添へ乳して、撫でさするこそ哀れなり。
ト乳を飲まして、梅の下へ置くと、赤子泣く。
〽そつと退けば、わつと泣く、また立寄りて抱き上げ。
オヽ、泣きやんな〳〵。泣かずと直ぐに寢々しや。ねんねこせい〳〵。ねんねが守りはどこへ行た。愛兒を見捨てゝ、これがマア、なんと此まゝ去なれうぞ。
〽離れがたなや、可愛やと、名殘り盡きせぬ紅粉の、花降りしきる血の涙、降らせば濡れじ、濡らさじと、小袖に包み、梅の木蔭にそつと置き、立ち上がらんとする折柄。
ト十六夜いろ〳〵こなしあつて、赤子を下に置き、立たうとする。腰元一時にバラ〳〵と立ち出でゝ
腰四　コレ、待ちや。捨てる程なら、生まぬがよいわいの。
腰二　子が嫌なら、男に逢ふ時、その差引きしたがよいわいなう。
腰一　後先なしに、爰をどこぢやと思うて居やる。
腰四　コレ、菅丞相さまのお花園。父なし子を捨てる處おやないわいなう。
ト御簾の内より久方御前出る。勝野附き出る。
久方　詳しい譯は知らねども、捨子の樣子は聞き届けた。コレ、そこな女中。慈悲萬行の世の中にも、現在生みの子を捨てる、邪慳の母が身の上にも、よく〳〵深い樣子があらう。品に依つたら、幼な子の爲にも、惡しうはあるまい。譯を包まず、明かしてよからう。
十六　これはマア、お情あるお詞といひ、お咎めは御尤もなれども、お情厚き菅丞相さま、木蔭を賴むは可愛さ餘つて捨てるこの子。私しは元女院の御所にお末の奉公。十六夜と申す者。院の廳の武士、判官代輝國と申す、御隨身の侍ひと人知れず馴染み、忍び逢ふ夜の數重なり、身の重る程、傍輩の手前、御所の人目をやう〳〵に産み落し、身二つになつたれど、殊に夫の名が出ては、互ひに宮仕への妨げ。産まぬ先の氣遣ひより、産み落しての心の苦しさ。詮方なさの思ひ附き、お慈悲深い菅丞相さま、何卒お目にかゝれかし、鳥類畜類はいふに及ばず、有情非情の草木まで、御憐みをかけ給ふ、まして生ある幼な子、よもや酷うはなされまいと、押し附け業なこの願ひ。拾ひ育てゝ下さりませうならば、生々世々の御厚

恩と、有り難う存じます。
〽涙にくれて頼みける、御臺所も共涙。

久方　オヽ、切なるそもじの物語。自らも子を持つて、いとしさを思ひ知る。殊に、我が夫菅丞相さまは、もと父もなく、母もなく、是善卿の庭前、梅の下へ下り給ふと聞く。その因縁もあるなれば、必らず氣遣ひしやんな。拾ひ取り、乳を附けて育て上げ、菅原のみばえとなし、菅秀才が末の頼りとするわいなう。

十六　エヽ、重々深きこの御恩、いつの世にかは忘れませうぞ。

久方　オヽ、喜びは道理々々。コレ、この梅は、道眞公の御秘藏。殊に、あの南へ咲いた好文木は、白梅の繼ぎ穗。その子をこの木の下で拾ひ取りしは、南枝花始めて開く、この木の榮え。行く末長う喜んだがよいわいなう。

十六　エヽ、有り難いお情。あの子一人と申しながら、いはゞ夫婦三人の命の親の御臺様、お禮は詞に盡されぬ。さりながら、爰に長居は人目あり、もう私しはお暇申しませう。

久方　イカサマ、人目にかゝらば、却つて其方の爲にもならぬ。御所の暇を見合はせて、また折々はこの子の顔見におぢやいなう。

十六　左やうならば、御臺様。皆様、よろしくお頼み申し上げまする。

勝野　必らず氣遣ひさしやんすな。この勝野が抱き抱へて、やんがて大きう育て上げ、無事な顔を見せませう。

十六　兎角お前方の、いかいお世話。お禮は重ねて。

勝野　十六夜さま。

十六　勝野さま。

久方　必らず無事で

十六　あなたも御息もじで

久方　もう行きやるか。

十六　おさらば。

〽さらば〳〵と久方の、光りのどけき花見の御所、玉垂れ深く入り給ふ。

ト久方御前、右の子を抱き、勝野皆々、御簾の内へ入る。

〽あと見送りて十六夜が、御臺の影を伏拜み〳〵、悦び勇く後の方、樹木の蔭に最前より、様子窺ふ判官代輝國、始終立ち聞き走り出で

ト輝國、垣の間より出て

輝國　十六夜。
十六　エヽ、輝國どの。
輝國　大内の聞えを憚り、胴慾にも捨てうとした、枠は却つて大きな仕合せ。
十六　サイナア。一方ならぬ菅原家のお情。
輝國　其方や身共が爲には、命の親の道眞公。
十六　この御恩を、どうぞして下さんせ。
輝國　せめてはちよつと御臺樣へ、一禮を。
ト云ふうち御簾の内にて
希世　イヤ／＼、お構ひなされな。ちよつと梅の下へ參つて。
ト云ふ聲に兩人こなしあつて
十六　あの聲は希世さま。
輝國　顏を合しては、
十六　殊に日頃の意地惡、
輝國　不義の樣子、沙汰せられては互ひの爲。
十六　そんなら輝國どの。
輝國　十六夜來い。
ト打連れてこそ駈り行く、御簾の隙より洩れ來る希世、嫌がる勝野を無理やりに、梅の木の下へ引張り出で。

希世　ハテ、來いと云うたら、マア、おぢやいなう。
勝野　申し、希世さま。あなたは御酒宴の、酒機嫌かは存じませぬが、もし人が見ましたら、てんがうとは申しますまい。物事堅い菅原のお家。不義がましい取沙汰があつては、私しよりあなたのお名が。
希世　オヽ、名が出やうが、不義の名が立たうが、大事ない。さほど物堅い勝野が、なぜ造酒之進と不義はして居るぞ。
勝野　ア、イヤ、申し、それは。
希世　それとは。コリヤ、隱しても隱されぬ、何もかも知つて居て口說くこの希世。應と云うて叶へると、造酒之進が事もはなふでしまふ。又、否ぢやと云ふと戀の敵、二人ながら道眞どのへ沙汰して、キッとした目に遭はしてやるぞ。
勝野　サア、それは。
希世　否か。
勝野　サア。
希世　應か。
勝野　サア。
希世　サア／＼／＼。どうぢやぞいやい。

〽ほうど抱きつき、きめ往生、責め念佛のその所へ、瀧口の官人、あわたゞしく罷り出で。

官人　希世さま、これにお渡りなさるゝか。只今記錄所へ、參内遊ばされよとの儀でござります。

希世　ヤア、ナニ、只今記錄所へ參れとな。

ト勝野、逃げて入る。

官人　イヤ、菅原の道眞公へも、只今參内遊ばされよと、お使ひが相立ちましてござります。

希世　ハテ、心得ぬ。何にもせよ、大内の騷動に極まつたわい。

ト云ふうち奥より久方御前、菅秀才が手を引き、勝野、腰元三人、皆々附き出る。

久方　イヤ、申し、希世さま。あなたと申し、道眞卿まで、火急の參内いたせよとは、心元ないと存じます。自らはこれより館へ歸り、道眞公も、早速參内なさるゝやう申しませう。お前はこれより御所へお出でなされても、もし氣遣はしい事ならば、早速お知らせなされて下さりませ。

希世　成る程、その儀は心得ました。斯う云ふうちも心が急く。おさらば。

〽さらばとばかり左中辨、夢中になつて駈け出だす、久方御前は若君を、伴ひ立つや春霞、大内山へと。

ト希世は橋がゝりへ、久方御前は菅秀才、勝野、腰元三人を連れ、向うへ入る。

返し、この道具引き、始終管絃なり。

一面の御殿。向う一面に無地の金襖、半御簾、欄間に殿上の札掛けてある。橋がゝり、渡殿の體。管絃にて道具止まる。

ト奥御殿より辨の宰相、裝束、冠にて靜々と出る。ト橋がゝりより希世、靜々と出る。

辨　ホウ、これは左中辨希世どの。

希世　これは辨の宰相どの。何か火急のお召しゆゑ、希世直さま參内いたしてござる。

辨　して、菅原の道眞公はな。

希世　これも追ツつけ參内でござる。して、お召しの仔細はな。

辨　イヤ、何か委細は存じませぬ。先づ記錄所へお詰めなされい。

希世　然らば記錄所へ相詰めませう。

ト管絃にて、希世、靜々奥御殿へ入る。ト引違うて、物淵の三位、公家の形にて、奥より出で

物淵　宰相どの、未だ道眞卿は參內召されぬか。

辨　只今、希世卿參內召され、道眞公も最早參內あるとの事でござります。

物淵　然らば、白洲に控へし宿直の武士に用事あり。これへ呼び寄せ召されい。

辨　ハッ。……ヤア〱、次に控へし武士、早々とれへ參れ。

玄輝　ハア、。

ト兩人納豆烏帽子、半素袍、龍神卷きにて橋がゝりより出て、手をつかへ

玄蕃　藤原の時平公の隨身、春藤玄蕃。

輝國　院の廳の武士、判官代輝國。

兩人　參上仕つてござります。

物淵　汝等を召す事、餘の儀にあらず。菅原の道眞公、參內あらば、共に記錄所へ相詰めよとある勅命。

兩人　ハッ。委細畏まり奉りましてござります。

內方　道眞公參內。

物淵　最早道眞公參內とある。

辨　この趣き、記錄所へ知らせませう。

物淵　左やう致さう。

ト物淵の三位、辨の宰相、奥殿へ入る。始終管絃なり、道眞、橋がゝりの渡殿より靜々出て、上手の間金樓閣へ來る。掛けて有る札、どろ〱にて落ちる。道眞この體を見て不思議の思ひ入れ。輝國に札を取れといふこなし。輝國取つて渡す。道眞受取り

道眞　ハテ、心得ぬ。故なくして殿上の札、右大臣道眞と記せし文字の失せしは、正しく凶事。ハテ、心がゝりや。

ト小首傾けこなしある。玄蕃、輝國も不思議のこなし。此うち辨の宰相奥より出で

辨　道眞公、參內を相待ち居ります。イザ、記錄所へお詰めなされ。

道眞　イカサマ、參內延引いたす。先づ〱記錄所へ相詰めませう。

ト管絃になり、道眞、辨の宰相、御殿の上を歩む。玄蕃、輝國、平舞臺の下を歩む。廻し。右の金樓閣、渡殿、段々東へ引いて取る。

向う半御簾、下は木連れ格子、階、高欄附き、道具

とまる。

ト舞臺の上に三好清貫、平の希世、伴の仲友、頭の定岡、藤原の宿禰、物淵の三位、皆々冠、裝束にて並び居ろ。ト橋がゝりより道眞靜々出ろ。辨の宰相も附き出る。輝國、玄蕃も出て、よき所に坐る。

辨　道眞公參內。

ト伴の仲友、頭の定岡、物淵の三位、藤原の宿禰、道眞を取卷き

四人　謀叛人の道眞公。そこ動き召さるな。

道眞　ハテ、仰々しき謀叛呼はり。何を以てこの道眞を謀叛人とは。

ト清貫、道眞に向ひ

清貫　ヤア、何を以てとは白々しい。如何に道眞卿。汝は天の穗日の尊の嫡孫、累代學問を以て家業とし、帝七歲の御時より物讀みを敎への博士なれば、師匠は親と尊み給ひ、右大臣まで昇進せしに、何の恨み、何不足あつて、我が國を傾けんと企んだぞ。

道眞　ヤア、奇ッ怪なり、清貫。この道眞、朝廷を恨み奉り、逆意を企つるなどとは、穢らはしい詞。但し慥かなる證據ありや。

仲友　ヤア、謂はれざる證據呼ばはり。

ト口明けの短册を懷より出し

證據といふはこの短册。先達て齊世の君の召されたる車の內に、落ち散る短册。汝が娘紅梅姬と齊世の君、不義の證據。我が娘を后に立て、威を振はんといふ、其方が企みであらうがな。

物淵　殊に、齊世の君、紅梅姬、加茂堤より行くへ知れず。察するところ、兩人とも、汝が館へ隱し置き、親王を位につけん、底企みであらうがな。

頭　まだその上、洛中の公家、武家は云ふに及ばず、下人、土民の子供まで、手習ひ學問に事寄せ、懷け親しみ、子に迷ふは親心と、すわといふ時、勅命は背くとも、道眞が爲には命惜しまぬ一味徒黨を企つるからは、謀叛といふに違ひはあるまい。

宿禰　かゝる叛逆の道眞、右大臣などとは中々以つて畏れあり。

清貫　叛逆の罪ある道眞、今日より殿上の交りは叶ふまい。官位を召し上げるが僻事か。ヤア、守護の武士、立寄つて道眞が裝束召し上げい。早く〳〵。

玄蕃　ハツ、畏まつてござります。

ト玄蕃つか〳〵と寄るを、輝國立廻りあり、玄蕃を引き戻し

輝國　春藤玄蕃、待ちやれ。

玄蕃　清貫公の御意を請け、謀叛人の道眞が官位を剝ぐに、輝國、御身はなんで留める。

輝國　さればサ。誰れかある守護の武士、參れと御意を下されしを、お身一人が守護の武士か。春藤玄蕃仕れ、とお指圖があつたか。

玄蕃　イヤサ、その儀は、

輝國　院の廳の武士、判官代輝國が、控へ罷りあり。玄蕃、ちと無禮でござらうぞ。

玄蕃　イカサマ。其許へ御挨拶も申さぬ。こりや拙者が無禮。眞平御免なされ。併し道眞どの、申し譯は、ア、、立つまい〳〵。

輝國　イヽヤ、齊世の君さま、紅梅姫、互ひに不義の惡名ありと雖も、これ以て道眞公の御存じない事。その上、御兩所の行くへ知れざるは、彼の不義の樣子、加茂堤にて餘人に見咎められ、面目ないと思し召し、姫を伴ひその場より、行くへなうおなりなされたを、道眞公のお館へ引込みあるなどとは、正眞の惡舌と申すもの。まつた、洛中の童ども、道眞公を戀ひ慕ふも、これ正しく筆の德、我が子の眼を、明らかに致しもらひしその恩を思ひ、道眞公を主とも親とも尊むは無理ならず。大仰に云ひふらすは愚人の取沙汰。天下の政事に似合はざる、御評議かと存じ奉ります。

玄蕃　成る程、さう利口に云へば云ひ譯は立つやうに聞ゆれど、さう利口に云ひ譯叶はぬ。肝腎の證據を先達て引ッ捕へ置いた。

輝國　ナニ、慥かな證據を、捕へありとは面白い。その證據、これへ出しやれ。

玄蕃　オヽ、只今爰へ引出して見せう。ヤア〳〵、玄蕃が家來。道眞が一味の科人、早うこれへ引ッ立てい。

侍ひ　ハア、。うせう。

ト侍ひ大勢、天蘭敬を繩附きにして、つか〳〵と引立て出る。道眞見て恟り

道眞　ヤア、唐土の使ひ天蘭敬、その縛めは何事ぞ。

清貫　ヤア、その驚ろきは喰はぬ〳〵。この天蘭敬が謀叛の證據。ヤア、玄蕃。今一度道眞の目の前で白狀させい。

玄蕃　ハツ。天蘭敬。最早遁がれぬ所ぢや。最前白狀せし通り、今一度この所にて白狀せよ。異議に及ぶと、又々

綸命さするぞ。
天蘭　アヽ、申します〳〵。エレ、道眞卿。エヽ、口惜しうござるわいなう。先達て諜し合はせし通り、夢の內に唐土へ通ひしとは、跡方もなき僞はり、かねて我が國の大王へ通達し、この日本を唐土に隨へんとの契約。一味徒黨の手合せに好文木に事寄せ、某が來朝。彼の大王より送られし內通の書翰を、無念や、奪ひ取られ、この通りの細目。最早遁がれぬ道眞公。何もかも白狀してしまはつしやれいなう。
玄蕃　サア、なんと。かゝる慥かな證據があるからは、動きは取れまい。道眞どの、判官代、返答あるか。
輝國　すりや、唐土より渡つたる天蘭敬が內通にて、慥かな證據が手に入りしとな。
清貫　オヽ、その一通はこれにあり。
ト出して見せる。
輝國　すりや、その一通が、
玄蕃　謀叛の證據。
輝國　すりや、アノ、それが。
トいろ〳〵あつて
ホイ。
ト俯向く。
道眞　いやとよ、判官代。さのみ心を苦しめられな。如何程重き證據ありとも、この身に知らぬ無實の難。察するところ、逆心の輩あつて、天蘭敬を引入れ、我れを追ひ失はんと計りしに疑ひなし。
清貫　イヽヤ、何ほど口利口に云ひ廻しても、最早叶はぬ。差當る慥かな證據は、天蘭敬が自身の白狀。これに上越す證據はない。君甚だ逆鱗まし〳〵、かゝる惡逆不道の道眞とは、ゆめ〳〵知らず、急ぎ道眞が官祿を取上げ、殿上の札を削り、太宰府へ遠島させよとの勅諚。
輝國　ナニ、すりや道眞公を、筑紫へ遠島とな。
清貫　朝廷に弓引く道眞。例へ命を召さるゝとても、違背がならうや。
仲友　洛中を引廻し、如何なる刑にも行ふべき叛逆人。
物淵　命を助け、遠流とは、まだこの上の御憐れみ。
定岡　從三位より右大臣まで昇進せし道眞。下々でいふ實がいると仰向くとは其方の事。
清貫　身の程知らぬうつけ者。この日の本を異國へ隨へんとは、水の月取る猿猴が望み同然。
宿禰　イカサマ、あのまじ〳〵した顏わい。しつかい猿同

然。天が下を盗まうとする手長猿。
玄蕃　今といふ今、木から落ちた道眞。なんと天命
四人　思ひ知つたか。
　ト皆々取巻き云ふ。道眞チッとなる。輝國いろ〳〵思
　ひ入れある。ト內より
希世　宣命。
　ト臺に宣命を載せ、恭々しく持つて出る。
　菅原の道眞へ宣命。伴の仲友卿、讀み上げ召されい。
仲友　ハッ。
　ト仲友受取り、恭々しく開き
　右大臣菅原の道眞。この度叛逆の沙汰分明なるに依つ
　て、位階を止め、太宰の權の帥に下し、筑紫へ流罪せし
　むる者なり。內裏より宣命。伴の仲友承る。依つて執
　達件の如し。延喜元年辛酉正月二十五日。
　ト道眞の側へ置く。道眞、宣命を取つて見て、いろい
　ろありて泣く。
清貫　叛逆の罪、道眞公、今より殿上の交り相叶ふまい。
　綸旨を承りし三好清貫が政務は、まッこの通り。
　ト道眞が着たる冠を笏にて打ち落す。輝國見て驚く。
　道眞ハッと俯向く。希世、手を打ち

希世　ハヽア、知らなんだ〳〵。かゝる謀叛人とは夢にだ
　も知らず。今日が日までもお師匠の、イヤ、先生のと敬
　うたが口惜しい。もう此方から弟子師匠の因みを切つて、
　こなたと一つでない希世が、身の云ひ譯せねばならぬ。
　てもさても、こなたは、顏に似合はぬ、恐ろしい和郎ぢ
　やわいなう。
輝國　道眞公。御身に覺えなき無實の御難儀、さぞ、口惜
　しう思し召されう。
道眞　我れ初冠の始めより、天恩を思ひ、禮を以て上に仕
　へ、仁を以て下を惠み、朝廷に私しなしとは思へども、
　例へば晝の螢の如く、身にある非をば知り難し。君は天
　なり。罪を天に得たれば、祈るべき天もなし。最前參內
　せし折から、殿上の板に記されし、右大臣と書いたる板
　の、自然と落ちたるは、かゝる無實の罪に沈むべき天の
　知らせ。文宣王は陽虎なりとて捕はれ、周の文王は、羑
　里の獄屋に入り給ふ。それは對する敵あり。菅丞相は
　敵もなし、身に犯せる罪もなし、只讒言の輩ゆゑ。哀れ、
　法皇の御代ならば、讒言の舌はたるゝとも、よも聞濟み
　はあるまじきに、淺ましの時世ぢやなア。
希世　ヤア、我が大望事顯はれしを憤り、その上、公卿

の面々を讒者などとの悪言。よいよい。これから弟子、
師匠一つでないといふ申し譯に、この希世が繩打つて、
謀叛徒黨の白状さす。サア、謀叛人どの。腕廻した。
ト道眞が手を取り引附ける。輝國それと寄るを玄蕃
引き退ける。

皆々　勅諚ぢやぞ。
ト輝國控へる。

時平　ヤア、諸卿の方々、先づ待たれよ。
ト奥殿より聲掛け、つか／＼と走り出て、希世を突き
退け、道眞を圍ふ。清貫、希世、皆々時平を取巻き

希世　ヤア、時平公、何ゆゑ罪有る道眞を、庇ひ召さるゝ。

清貫　留め立てして、共に朝敵の名を取り給ふか。

皆々　時平公。なんとでござる。

時平　ヤア、こと／＼しい事。道眞帝より蒙むりし罪の次
第、時平詳しく聞き屆けた。さりながらその詮議は、少
し分らぬ／＼。

希世　イヤ、時平公、みす／＼知れた謀叛人、それを詮議
が分らぬとはな。

時平　オヽ、菅原の道眞は、従三位より段々昇進して、右
大臣に任官せられ、今この時平と肩を並ぶる兩官。何が
不足で謀叛すべき謂れなし。差當つて詮議のあるは、唐
土の使ひ天蘭敬。彼れをキッと拷問せば、事明白に相知
れん。その沙汰もなきうち、道眞を糺命せんとは、近頃
麁忽の評議であらうぞ。

清貫　イヽヤ、麁忽でござらぬ。差當る道眞が科を差措
き、天蘭敬を糺命せられんは、異國へ聞え、事を好むに
似たり。まして遁がれぬ慥かな證據は、コレこの異國よ
り送りし密書。なんと遁れはござるまい。
ト件の密書を時平へ差出す。

仲友　その上、娘紅梅姫、齊世の君に戀をさせ、底の企み
は親王を位に即け、我一天の外戚とならん謀り事。即
ち、不義の證據はこの短册。
ト短册を差附ける。

定岡　殊に、公家、武家、町人に至るまで、子供を憐み、
その親々を懷け、一味徒黨を集むるは、疑ひもなき謀叛
人。反逆の兆しであるまいか。

三位　何は格別、帝より一旦遠流させよとの詔、それを
背くは違勅の科。

宿禰　綸言は汗の如し、出でゝ再び歸らぬ、道眞どのゝ糺
命。

清貫　かゝる罪人を庇ひだて
希世　共に違勅の科を蒙むり給ふか。
皆々　時平公。
時平　サア。
　ト清貫は密書、仲友は短册を時平に突附ける。
皆々　サア〳〵〳〵、なんと。
　ト時平ヂッと控へて、短册を取り
時平　ハヽア、是非もなき世の成行き。後にかゝる證據とならば、疾にも取捨てべきに、この短册は遁がるべきが、遁がれぬ證據はこの密書、唐土の大王よりの內通。殊更、使ひに立ちし天蘭敬が自身の白狀。彼れこれ以て重なる證據。その上、君が逆鱗強ければ、先づ一旦は、君命に隨ふは天の理に隨ふも、同じ事。さりながら、三十路に足らぬこの時平、道眞は右大臣に昇進して、一天四海の政事、この時平、道眞、執り行はゞ、一天四海泰平、御齡は萬々歲と祝ひし甲斐もなう、道眞、虛名蒙むつて、右左に並ぶ兩臣、今より貴公左遷あらば、日月二つ片々に、片羽をもがれし翼の如く、いつか雲井の御歎き。時平が心の悲しさ、推量あれ、道眞公。
道眞　こは惠みある時平のお歎き。道眞虛名蒙むつて、身は荒磯の島守りと朽ち果つるとも、我が忠臣の魂ひは都に通ひ、帝都を守護し奉らん。この後、道眞、席は同じからずとも、貴公、某、兩臣の如く、心を勵かし、帝の守護頼み入る。
時平　その儀は氣遣ひあるな。帝の守護は、時平が少しも麁略はあるまじ。我れ天下の政事に私しを執り行ふものならば、和歌三神の御罰を請け、再び冠を着せざらん法もあらん。さら〳〵不忠はあらじ。その儀に於て、必らず心を苦しめられな。
道眞　ハヽア。天晴れ淸しき貴殿の御心底、承つた道眞が安堵。又の歸洛は盲龜の浮木。これ今生の名殘りとも、思へば果敢なき身の成り果。
時平　道眞公。
道眞　時平公。
時平　エヽ、是非もなき
兩人　世の有樣ぢやなア。
　ト互ひに手を取り交し泣く。ト橋がゝりより官人走り出で
官人　ハッ、菅丞相の門弟と申し、京中の童、まつた、その親ども、御門前へ參り、丞相左遷の樣子を聞き、何卒

暇乞ひ、又は船場まで見送りの儀を願ひ奉ります。如何仕りませう。

清貫　ヤア、ならぬ〳〵。科極まつた道眞、見送りなどは思ひも依らぬ。妻子眷屬に至るまで、別々に引き離し、五畿内を追ひ拂へとの勅諚。菅丞相が弟子とはいへど、云はゞ謀叛一味の荷擔人同然。暇乞ひとは野太い奴。その者ども、親子ぐるめ、獄屋へぶち込み、糺命させよ。ヤア、玄蕃、早く〳〵。

玄蕃　ハツ、畏まつてござります。

ト行かうとする。

時平　ヤア、騒がしい。暫らく待て。

ト玄蕃ハツと控へる。

師の恩を思ひ、暇乞ひを願ふは、しほらしき童。親たるものは門前に留め置き、せめては暫しの暇乞ひ。少人なれば恐れもあるまい。こなたへ通し得させよ。

皆々　イヤ、それは。

時平　左大臣時平が許すと云ふに。

皆々　ぢやと申して。

時平　但し、時平が詞用ひられぬか。

皆々　イヤ、全く

時平　さもなくば、控へられよ。

皆々　ハツ。

時平　急いでその童ども、これへ通せ。

官人　畏まつてござります。

ト官人橋がゝりへ入る。希世思ひ入れ。

希世　ハヽア、負うた子に教へられ、淺瀬の格で、いま童どもが、師匠へ暇乞ひを願ふので思ひ合せた。師匠の恩は須彌山より高く、蒼海よりも深しといへども、中々比べがたき筆の道。この希世も、師の恩を報ぜん爲、今日より平の希世、菅原の氏を顯はし、道眞の館を申し受け、大内の筆道となりたき願ひ。情ある時平公、天機よろしくお執成し頼み上げます。

時平　ヤア、師匠の恩を繼がんなどゝは横道者。まこと師を思ふ希世ならば、最前道眞に繩を打ち、糺命させんと、なぜ師匠に手向ひ致した。

希世　イヤサ、それは。

時平　殊更、妻子は元より眷屬まで、五畿内を追ひ拂へと、きびしき勅諚。其方は道眞の弟子ならずや。その上、弟子の身を以て、師に敵對ふ人非人。官位裝束を召し離し、五畿内をぼッ拂ふが、この時平が政事。ヤア、判官代、

苦しうない、立寄つて政法を行うてよからう。
輝國　ハツ、畏まつてござります。サア、希世卿、お立ちなされ。官人達、早く〱。
官人　ハツ。
希世　これは又迷惑な。
官人　ハテ、こま言仰せられな。
ト官人立寄る。輝國下知して希世が裝束、着類を剝ぎ取り、丸裸にして、向うへ突き出す。希世皆々と顔見合せ、面目なきこなし。輝國、希世が首筋捕へ
輝國　師匠に刃向ふ天罰、思ひ知らつしやつたか。
ト突き倒す。
希世　ハア、。有爲轉變の世の中ぢやよなア。昨日は玉垂れの内に晝寢したり、今日は素肌にて叩き出され、この有樣は何事ぞ。
官人　ハテ、こま言云はずと、ござりませい。
希世　其やうに荒々しう致すな〱。
官人　早うござりませい。
ト割竹にて叩き引ッ立てゝ行く。眞中程にて希世、官人を鞠蹴るやうに蹴る。いろ〱をかしき仕打にて向うへ入る。ト橋がゝりより子供大勢出る。

官人　ハツ。仰せの如く童ども、召し連れましてござります。
時平　これへ許して、暇乞ひ致させよ。
官人　ハア、。サア、皆の者、菅丞相さまへ暇乞ひ。
子供　ハア、。
ト凡そ三十人ばかり、めい〱手に梅の折枝、若松、手本、草紙やうの物を持ち、菅丞相を見て、皆々辭儀する。
道眞　オ、。しほらしや皆の者。この道眞が一やうに教へし者ならねど、我が手風を學ぶゆゑ、師匠と思ひ慕ふ優しさ。さりながら、例へ配所に殘りても、魂ひは留まつて、手習ひ學問の守り神と成るべきぞ。我れ亡き跡にて、我れ頼む人は無實の難を遁がるべき、一首は即ち我が記念。……流れ行く我れはもくづとなりぬとも、君柵となりてとゞめよ。……便りもあらば、法皇へ時平公、よきに名殘りを頼み入る。
時平　追ッつけ、君の逆鱗申しなだめ、歸洛の勅命。この時平が申し請け、再び歸りを松が枝に、梅は諸木に魁けて、やがてめでたく春に逢ふ、帝の勅諚相待たれよ。
道眞　龍の腮の驪龍の玉、得るが如きのお心附け、忝な

い。
ト道眞行かうとする。時平袂を控へ
時平　仰せ殘されん事もあらば、
道眞　ただ何事も天命。
ト兩人顏見合はせ、愁ひのこなしあつて
兩人　おさらば。
清貫　ヤア、追ッ立ての役人、輝國、玄蕃、時刻が移るぞ。
輝玄　ハア、。
官人　イザ、お立ちなされ。
トかすめて管絃になる。忍び三重のやうな合ひ方、しめやかにあつて、菅丞相靜々向うへ行かうとする。子供皆々袂にすがり、泣く／＼附いて行く。後より清貫、仲友、三位、定岡、藤原の宿禰、辨の宰相、靜々附いて行く。輝國、玄蕃後より附き、時平、中程まで行き、こなしあつて、あと打詠め、ホロリとして本舞臺へ戻り、よき所に立つ。向うよりバタ／＼にて玄蕃走り出て
玄蕃　ハッ、菅丞相、只今牢輿に入れ、檢非違使へ渡し、時を移さず、船場まで追ひ立つるやう、しかと申し付けましてござります。
時平　玄蕃。路次を、隨分いたはれ。
玄蕃　ハッ。
ト向うへ入る。あと見送り、ほろりとして見廻し、天蘭敬が繩を解き
時平　黃金千兩。予が御所にて受取り、立歸れ。
天蘭　エ、忝ない。然らば、おさらば。
時平　早う／＼。
トはつと天蘭敬走り入る。時平、始終向うを見て、懷中より短册を出し、チッと見て
春來れば柳の絲も解けにけり、結ぼふれたる君が心を。
齊世さま參る紅梅より。
ト少し腹立つる思ひ入れありて
ほてくろしい。
ト短册を打ちつける。
我れ若年なれど重代の攝家。左大臣の左大將の任官。道眞纔が儒臣の家にありながら、右大臣の右大將に昇進。剩さへ內覽を許され、この時平より官位は右にありながら、唐の關白の位に准じ、菅丞相と敬はれ、萬機の政務を彼れが心に取納め、この時平はなきもの同然。帝に法皇の覺えよきまゝ、後には攝政關白に登らんは目のあた

り。見るに忍びぬ我が奇ッ怪。それゆゑ、黄金に心迷ひし毛唐人一人を、我が心腹に取込め、希世めをぽッ拂ひ、玄蕃は元より清貫はじめ諸卿めら、一々に騙かりしゆゑ、今日只今遠島。……我が本懷を達し、ハテ、心よやなア。とは知らずして諸卿めら、我れに道眞を見落せよと、口々に罵れど、ナニおのれらにこの一大事を明かさうか。馬鹿めらが。……道眞は猶大馬鹿。時平が涙を誠と思ひ、帝の守護をくれ〴〵と涙を流し頼みしは、アヽ、淺はか〳〵。道眞だにぼいまくれば、大內は心の儘。我れに敵する靑公卿ばら、一々に蹴殺し、大望成就の血祭り。元老智多の道眞、かねて心が置かれしに、計れば安く我が計り事の網に落ちたか。……ハテ……心よやなア。ムヽヽヽ。ハヽヽヽヽ。

ト大笑ひ。階の高欄にもたれ

ても、道眞は、いかい阿房ぢやなア。

幕

三つ目　京都廣小路の場

役名——菅丞相。仕丁、又五郞。判官代、輝國。春藤玄蕃。腰元、勝野。菅秀才。物淵の三位。久方御前。頭の定岡。武部源藏。

造り物、臆病口、竹の木戸、向う一面の土手。橋がかり、築地塀。幕の內より京中の子供、親の爺婆、大勢往來に莚を敷き、皆々坐り居る。この見得にて幕明く。

〽行き集ふ、京極通りの廣小路、丞相流され給ふと聞き、老若男女の分ちなく、名殘りを惜しむきりぎりす、築地の蔭に聲立てゝ、泣く音押ふる金棒の、音嚴重に見えにける。

皆々　ハイ〳〵。どうぞお暇乞ひをさせて下さりませ。

〽程なく官人列を正し、見る目いぶせき牢輿の、前後を圍み警護の役人、時平の隨身、春藤玄蕃、院の廳の仕へ司、判官代輝國、衣紋正しく立出づる。

皆々　申し、どうぞお顏なりと、暫らく拜ませて下さりませ。お慈悲、お情でござります。

ト銘々願ふ。

玄蕃　ヤイ〳〵、かしましい、蠅蟲めら、うぬらそれ程、菅丞相に名殘りが惜しくば、共に太宰府へ流し者にして

くれうか。ソレ、官人ども。彼奴等をぶち据ゑい。

官人 ハア、。

輝國 イヤ〳〵、いづれも先づ待たれよ。先程も時平公の仰せの如く、彼れらが爲には師匠たる道眞公、暇乞ひ願ふは無理ならず。門前に留め置き、暫しの暇乞ひ、させよとの御意、ナニ、官人ども、輿を下ろせ。

官人 ハア、。

ト輿を下ろす。

〽聞くよりハッと御臺、若君、勝野も共にまろび出で、牢輿を見奉り、そもや如何なる御有樣と、聲を揃へて亂れ泣き。

久方 ナウ、この有樣は何事ぞ。科の樣子は知らねども、島流しとは情ない。何ゆゑ、かゝる咎めを蒙むり給ふ。樣子は。

ト輝國、久方御前を見て

輝國 さては、道眞公の北の方、若君。……ハテナア。

玄蕃 ムウ。道眞が御臺。菅秀才とた。菅丞相の科の次第、王位を望む朝敵。遁がれぬ證據は、娘紅梅姫と齊世の君、まつた異國への內通の書翰。この二品云ひ譯立たず、謀叛人に相極まり、洛中を引廻し、重き刑に行はるべき筈なれども、一旦帝の師匠たるゆゑ、師弟の禮儀を重んじ、命を助け遠島とは、まだしもの御政道。有り難いと三拜さつしやれ。

久方 ナニ、親王と紅梅姫とが、不義を身に引受けて、かかる難儀に遭ひ給ふか。覺えなき身を流され給ふは何事ぞ。なぜ仰せ分けを遊ばしては下さりませぬ。科なき御身を、やみ〳〵とさすらへとは、曲がない。此まゝお別れ申して、この菅秀才や自らは、なんと致しませうぞいなア。

菅秀 申し、父上樣。とても仰せ分けの立ちませぬ事ならば、私しも島へ一緒にお連れなされて下さりませ。コレ、警固の者ども、わしも一緒に流してくれいやい。

勝野 オ、若君樣。よう仰しやつた。荒い風をも御存じないお身を、なんとお一人やられませう。せめてお召使ひに私しなりと、お願ひなされて下さりませ。

久方 勝野の云やる通り、さも恐ろしき荒島に、何とお一人置かれうぞ。例へ死すとも親子一緒に。慈悲ぢや、情ぢや、武士は物の哀れを知るぞかし。どうぞ一緒にやつて下れいやい。

玄蕃 ヤア、ごくにも立たぬよまひ言。とかう云ふうち時

刻が移る。殊更、罪人の餘類の者ども、五畿内を追ッ拂へとの勅諚。抱いて居る子悴めは、菅秀才の弟と見える。此方へ渡せ。ソレ、官人ども、引ッ立てい。

久方　アヽ、待つて下され。この子は誠に妾が子にはあらず。丞相さまを賴みに、處も多いに花園に、捨て置きしは義理ある子。自らや菅秀才は召さるゝとも、この子供ばかりは、助けて下されいなう。

〽口說き立てゝ泣き給へば、輝國さては十六夜と、我が仲の子なりしかと、思へば御臺の御身に替へ、いたはり給ふ情の程、有り難しと一禮も、奉公の身のはかなやと、氣はくらやみとなりにけり、佞人邪智の春藤玄蕃。

玄蕃　エヽ、耳やかましいよまひ言。ソレ、官人ども、打ちすゑい。

官人　ハアヽ。

ト叩く。輝國引きのけ

輝國　御身に替へてこの幼な子をおいたはり。誠の親が洩れ聞かば、さぞ嬉しうござりませう。併し科人の餘類は、例へ親子兄弟たりとも引分けて、五畿内を追ひ拂へとは、私しならぬ君の御諚。その幼な子は、いづれへなりともお捨てなされて、早々お立退きなされませう。

久方　イヤナウ、輝國どの、自らが願ひ、どうぞ情に我が君のお顏を、この菅秀才に今一度、暇乞ひがさせたうござるわいなう。

輝國　成る程、お名殘りを惜しまるゝも御尤も。お心措きなうお暇乞ひなされませう。

玄蕃　ヤア、ならぬ〳〵。謀叛人の餘類、暇乞ひは叶はぬ事。

輝國　道眞公の牢輿は、門前に留め置き、暇乞ひさせよとは、貴殿の主人時平公の仰せ。但し、主人の御意を背くか。

玄蕃　サア、それは。

輝國　サア〳〵。なんとでござる。

玄蕃　ムウ。

輝國　ハッ、御臺所。丞相へ、とくと御暇乞ひあられませう。

〽御臺所御親子は、牢輿に、こは淺ましのお姿やと、取りつき歎くを制し給ひ

ト久方御前、菅秀才、勝野、輿に取りつく。

久方　ヤア、我が夫か。

菅秀　父上樣。

勝野　御主人樣。
道眞　最前から、おことらが、歎きは道理、道眞虚名蒙むれども、君を恨み奉らず。昨日までは叡慮に叶ひ、今日は逆鱗ましますも、皆天命のなすところ。今更悔む事にあらず。さりながら、殘念なるは武部源藏。彼れ能書なれば、捨てがたし。道眞斯くなりしと聞かば、一度は尋ね參らん。その時は、コレ、この卷。菅原の流心を傳ふる神道口傳。菅秀才、其方に渡し置く。御臺はこの一書を源藏へ相渡し、我が心を察せよと、くれ〲も傳へられよ。申し置く事これはかり。必らず〱歎かれな。
ト一卷を菅秀才、書き物を久方御前に渡す。久方御前取りて、こなしあり。
久方　御傳授の一卷、お渡しあるからは、御勘當もお許しなされて遣はさるゝか。
道眞　いやとよ。傳授は傳授。勘當は勘當。今この身にて勘當赦せば上への恐れ。
菅秀　仰せ殘されました趣き、つど〱申しませうが、今お別れ申しまして、いつか御歸洛のある事やら。これ今生のお別れかと、思へばこれを形見かと、いと悲しう存じますわいなう。

ト大泣き。四ッの太鼓を打つ。玄蕃數へ
玄蕃　最早四ッの太鼓。時刻が移る。官人ども、輿を舁き上げい。
官人　ハア、。
ト久方御前、菅秀才、勝野取りつくを、官人ども引退ける。
久方　情に、今暫し。
玄蕃　ヤア、面倒な。最早輿の側へは叶はぬぞ。
三人　そんなら、もう叶はぬかい。ハア、。
玄蕃　ヤア、耳かしましい、とこぼえ聲。官人ども、引据ゑい。
官人　ハア、。
〽情を知らぬ官人ども、ばら〱と立ちかゝれば、輝國すかさず拂ひ退け、人々圍うて突ッ立てば、春藤玄蕃つと詰め寄り。
玄蕃　ヤア、輝國。科人の餘類を庇ふは、所存ばしあるか。
輝國　ハテ、高が、女子供の事。
玄蕃　ムウ。謀叛人の肩持つは、其方も謀叛人の餘類か。
輝國　左やうではなけれども、

玄蕃　左やうでなくば、控へてゐよ。
輝國　サ、それは。
玄蕃　サア〱〱。なんと。
〽我慢の反り太刀拔きかくる、輝國無念の忍びの鍔元、拔かば切らんと詰め寄る有樣、輿の內より御聲高く。
道眞　ヤア、兩人。無益の爭ひ致されな。丞相これにあるゆゑに、妻子の歎き、方々の爭ひ。名殘りを惜しみ猶豫あれば、却つて恐れ。早々都を追ひ立てられよ。官人達、片時も輿を急がれよ。
玄蕃　オヽ、流石は道眞、よい覺悟。輝國どの、爭ひは私し事、大切の囚人、猶豫はならぬ。官人ども、早くぼッ立てい。
久方　ナウ、我れ〱も
官人　叶はぬ〱。
〽役目の角びし、心の情、身に知る雨やさめ〲と、御臺の嘆きやる方なく、師匠を送る幼な子も、又もや歸洛を松が枝に、曇る涙や梅の雨、官人どもに追ひ立てられ、うき身をつくしの浪の末、しをれ出でさせ給ひける、御有樣ぞ痛はしき。
トこの淨瑠璃にて、官人輿を舁き上げると、勝野、久方御前、菅秀才、取りつくをくらはす。輝國さゝへる。三人、また輿の方へ行かうとする。輝國留める。輿を臆病口へ舁いて行く。子供、親々も皆附いて入る。ト玄蕃、輿の方へ入る。輝國、菅秀才をいたはる思ひ入れあつて、臆病口へ入る。三人後見送り、矢來の側へ又行かうとする。
官人　叶はぬ事でござる。
ト割り竹振り上げるこなしにて入る。
久方　最早お輿の影も見えぬわいなう。
菅秀　申し、母樣、どうぞま一度父上の、お顏が拜みたいわいなう。
勝野　オヽ、お道理でござります。お名殘り惜しいは御尤もでござりますれど、こんな悲しい事は、さぞ姬君樣は御存じあるまい。
久方　ほんに、可愛や、紅梅姬が聞きやつたら、さぞ悲しう思ふであらう。
勝野　申し、御臺樣。
久方　勝野。
菅秀　母樣。
三人　エヽ、情ない浮世ぢやなア。

ト三人泣く。
〽歎き沈みし折からに、武部源藏、押ッ取り卷きし固めの役人、かなたこなたと打つ杖の、下を廻つて。
ト花道より源藏(早替り)着付け破れ、風呂敷に麻上下、扇を包み、腰に括り附け、官人二人、割り竹引摺つて出る。
源藏　ハイ〳〵、お免されませ〳〵。
官人　ヤア憎い奴。菅丞相都を追ッ立つる間、辻々の固め
官二　往來を止め置くに、なぜ矢來を押し破り、理不盡に往來いたす。
源藏　イヤ、モウ、それは私しが誤まり。何卒御赦免下さりませう。
ト兩人さん〳〵に打つ。源藏二人を投げ退け、本舞臺へ走り來る。兩人追つかけ來て、散々に打つ。源藏打ち倒されながら、久方御前を見て
ヤア、御臺樣。
久方　武部源藏か。我が夫は、御流罪に、お遭ひなされたわいなう。
源藏　承りました〳〵。

勝野　源藏さま。丞相さまは、いま輿に召して、お越し遊ばしたわいなア。
源藏　最早お出でなされましたか。して、その道筋は。
勝野　京橋を南へさして。
源藏　ソレ、お暇乞ひ。
〽いでお暇乞ひとはやり雄の、武部源藏矢來へかゝれば、そりや狼藉者打ち据ゑよと、手手に割り竹振り上げて、脊骨も腰も、さゝらになれとぶつてかゝれば、なう悲しやと菅秀才、御臺も共に取りつくを、こなたは足弱、かなたこなたと支へる源藏、兩三人の上を、覆ひ重なる忠臣も、情を知らぬ官人ども、矢來、木戸口、閂も、打ち連れて急ぎ行く。
ト官人叩き立てる。久方御前、勝野、菅秀才を打たせじと、三人の上へ源藏乘りかゝり、我が脊中にて三人を叩かさぬやうにして、いろ〳〵ある。官人打ち据ゑ、木戸口へ入る。閂を締める。源藏こなしあり。
源藏　お怪我はございませなんだか〳〵。
久方　イヤ〳〵、怪我はないわいなう。
源藏　何は兎もあれ、お暇乞ひを。
ト駈け出す。久方御前袂を控へ

久方　コレ、源藏、例へ後より追ひつきやつても、警固の役人、官人、仕丁が押隔て、中々御對面は叶はぬわいなう。

源藏　そんなら、もう叶ひませぬか。

久方　叶はぬわいなう。

源藏　叶はぬ……叶ひませぬか。

〽如何なる運の盡き弓ぞ、やたけ心の弦切れて、どうと泣き伏し涙ぐむ、若君、源藏が側近く。

菅秀　コレ、源藏。それほど父上に逢ひたくば、配所とやらへ、わしも共に、連れて行てくれい。母樣、參りたうございます。

ト臆病口の方を見て

父上樣。私しもお連れなされて下さりませ、母樣、逢ひたうございます。源藏、父上樣に逢はしてくれいやい。

久方　オヽ、道理ぢや〳〵。

源藏　お道理でございます〳〵。

ト合ひ方になり

勝野どの。アヽ、殘念にございます。私しが、斯う云ふ事とは露知らず、我が君樣には、從三位より大納言におなりなされたと承り、殊には唐の丞相の宣旨まで下りしとの事、この上もなき御大慶、私しお喜びにとは存じますれど、御勘當の身の上、殊に永々の素浪人。イヤイヤ、かゝるめでたき折柄、お喜びに寄つたら、御勘當を赦される事もあらうと、十三里飛ぶが如く、鳥羽のほとりへ參りましたれば、大勢の人々が、アヽ、菅丞相さま、おいとしやと云ふをフト承り、申し〳〵、菅丞相さまが、何と致しました、と尋ねますれば、イヤ何やら誤まりがあつて、御閉門とやら、御流罪とやら、聞いたる時は膝もがつくり。イヤ〳〵、これは惡舌、高きは風に破らるゝと、寸善尺魔、何分御殿へと、大宮通りを五條へ參りましたるところ、はや御殿は青竹を以て犇と戸締め、出入りというては一人も叶はず。何は兎もあれ禁裏の樣子をと、烏丸通りを二條へ參りますれば、大勢の人立ち。爰や彼處に、菅丞相さまの身の上、覺えのない事ぢやと、とり〴〵の噂。イヤ〳〵、一時も早うお輿へお暇乞ひと、息を切つて參りますれば、年の頃七十餘りの老人、孫と覺しき者の手を引いて、申し、お侍ひ、と私しが袂を控へ、菅丞相さまは遠い島へお出でなされまして、あの納まりはどうなる事でございますと、問はるゝ人も、問ふ人も、目と目を見合はせ、……アヽ、

ようこそお尋ね下さるゝ、併し私しは所緣のない者、追ッつけ御歸洛でござりませう、と別れて、何のかけかまはぬ他人でさへ、あの如く、ましてや御勘當は受けたれども、一旦は主從、せめ お輿になりとお暇乞ひ、と參りますれば、ヤレ、狼藉者、ぶてよ、叩けと、コレ、この如く打ち打擲にあうて參りしに、お輿の影さへ、えい拜まぬとは、よく／＼主從の緣の薄い、……始めの程はお喜びにと、御覽下さりませ、破れ熨斗目に

ト風呂敷ほどき

……破れ上下、破れ扇子も、御勘當の身の上、お玄關へはとても叶はぬ。せめてお臺所、イヤ／＼、御門番の軒下にて

〽差出して御祝儀をと、思ふ願ひも後の祭り。

神ならぬ身は

ト扇子を箱とも打ちつけ

〽殘念さよと齒嚙みをなし

誰が爲に袴、肩衣。

〽持ちたる肩衣、喰ひさき／＼、涙も布ゝ縱横に、身を投げすてゝ泣き沈む、主從互ひに顏見合はせ、そもマア如何なる因果ぞと、暫し嘆かせ給ひける。

トいろ／＼身を跪き、上下又は着物を喰ひ裂き、髮を掻き亂し、いろ／＼ある。

久方　オヽ、源藏、其方の嘆きは道理々々。さりながら、嘆きの中の喜びとは、其方の身の上。菅原の家の秘書を傳授なされんと、自らにお渡しなされた。其方に渡し、道眞が心を推量せよとの、くれ／＼とのお詞。

菅秀　コレ、源藏。この一巻を、其方に遣る程に、どうぞ父上樣の御座なさるゝ、配所とやらへ連れて行てくれい。頼むわいやい。

源藏　アヽ、申し／＼、そりや御傳授の一巻でござりますか。

久方　さうぢやわいなう。

源藏　菅原の御傳授の秘書を下さるゝからは、昔に變らぬ主從。御勘當はお赦しでござりますか。

久方　さればいの、傳授は傳授、勘當は勘當と事を分けたるお詞。マア、何にもせよ、その書き物を披見しやいなう。

源藏　ハア。然らば

〽源藏は頭を下げ、あたりは有りあふ高提灯、照らすは君の御情、我が身は扇の幸ひと、打ち開き、臺に載せ、

塵手水してへり下り、恭々しくも押開き。
ト高提灯を下ろし、扇の封を切り、右の書き物を廣げ、懐より塵紙を出し、口にあて
砂を切る草只三分ばかり、木に誇る霞僅か半段餘り。これは御前様の唐歌。昨日こそ年は暮れけれ春霞、春日の山にはや立ちにけり。……これは人丸の詠歌。いづれも早春の心を詠み叶へ、この傳授の巻を我れに與へ、道眞公の御心底を察せよと。ムウ。眞名と假名を認め、源藏へ下されしは。……君は罪なくして、配所へ赴き、砂を切つてこの芽出しの若君。覺えなき無實の難は、木にほこる霞に似たり。その霧霞を裁ち切りて菅原のお家、春日の山に出づる如く、この源藏に畏れ多くも若君を、守り奉り、菅原の筆法傳授、普ねく世上に流布せよと、我が君の心を籠め給ひしこの一書。この一巻も傳授の巻。エ、、有り難や、忝なや。
〽須彌より高き御高恩、傳授の巻に御書取つて、押戴き押戴き、遙かしさつて有難涙。
久方　オ・・流石は源藏、我が君の御安心。御心底を察せし上は、いよ／＼菅秀才が事を頼むぞや。
源藏　お氣遣ひ遊ばされますな。都の中は人目あれば、拙者が隠れ家、津の國難波入江へ、お供仕りませう。
ト此うち物淵の三位、侍ひ大勢連れ、窺ひ出て
物淵　御臺所。菅秀才。ソリヤ。
侍ひ　やらぬ。
トこの時、右の提灯の火を消す。これより皆々暗がりのこなし。源藏、菅秀才を負ひ、久方御前が手を引き、三位とちよつと立廻りあつて、橋がゝりへ入る。後に勝野、三位と立廻り、三位、橋がゝりへ入る。後に勝野、侍ひと段々立廻り皆々を當てる。ト久方御前橋がかりより走り出る。後より三位附き出る。
勝野　ヤア、御臺様。
三位　その御臺、此方へ渡せ。
勝野　寄つたら爲にならぬぞ。
ト勝野、三位と立廻りあつて、勝野を當てる。勝野こける。此うち三位、久方御前を小脇に抱へ、向うへ入る。勝野起きて行かうとする。侍ひ一人かゝるをポンと切り倒し、向うへ走り入る。ト橋がゝりより仕丁又五郎、仕丁の形にて出る。
〽切り結ぶ、直ぐにその日も暮れ過ぎて、築地の屋根をめつき／＼、ひらりと飛んだる黒装束、太政官の御正印、

難なく奪ひ仕濟まし顏。

ト頭の定岡、築地の屋根より飛び下りる。又五郎、ちやつと提灯の火を吹き消す。

定岡　太政官の御正印、まんまとしてやつた。エヽ、忝ない。

〽喜ぶ後へ窺ふ仕丁、御正印を引ツたくり、逃げんとするを遁がさじと、引き拔いて切りかけるを、さしつたりと手利きの仕丁、もぎ取る刃、曲者は、ウンとのつけに反りかへる、その隙に不敵の仕丁、後に窺ふ源藏、曲者待てと取りつくを、振り切る手先、手練のさそく、はずみに引取る仕丁の片袖、遁がれ行くへは白砂の、後を慕うて

ト三重にて　　　　　　　　　　　　　　幕

四つ目　　長柄堤の場

役名――武部源藏。平の希世。腰元勝野。百姓、太次兵衞。ねぶかの九助。中間、了助。鯰の兵六。

造り物、長柄堤の體。向う一面の土手。上に並木あり。眞中よき處に稻村あり。舞臺先は菜種畑、但し青菜の生えてある見得。在鄕唄にて幕開く。

ト七ツ半の鐘打つ。向うより勝野抱へ帶、旅姿にて出る。後より仲間了助、半合羽、一腰差し、弓張提灯、三度笠にて出る。

勝野　コレ、了助。もう夜が明けさうなものぢやが。

了助　イヤ〳〵。只今七ツを打ちましてござりまする。

勝野　其方も滅相な。そんなら夜が明けてから、立つたらよかつたもの。

了助　サア、私しも時を取違へましてござりまする。

勝野　さうして、これから浪花入江とやらへは、なんぼ程あらうぞいなう。

了助　されば、私しもとくと存じませぬ。大方一里の上もござりませう。

勝野　そんなら、夜道を歩かねばならぬなう。

了助　左樣でござりませう。

勝野　ついぞ夜に入つて歩いた事もなし、殊に、此やうな堤ばかり歩いて居ると、どうやら心の後れるものぢやわいなう。どうぞ早う、町續きの所へ行きたいものぢやが。

了助　イヤ、まだもそつと、堤を參らずばなりますまいてや。

勝野　それはどうやら氣味の惡い。怖い事ぢやなう。

了助　なんの怖い事はござりませぬ、お供には拙者が附いて居りまする。それとも怖いと思し召すなら、お肌の守をしつかりと、胸に當てゝござりませい。

勝野　成る程、それがよいわいの。

　ト懷中を見て

　アヽひよんな事をしたわいの。

了助　何となされました。

勝野　先刻の渡し場で、帶を締め直したが、守を船の中へ。

了助　お忘れなさりましたか。エヽ、面倒な。と云うて捨てゝも置かれず。わしが一走り行て取つて參りませう。

勝野　そんなら、さうしてたも。どうぞ早う戻つてたもや。

了助　畏まりました。あの稻村の中へ入つてござりませ。今の間に戻つて歸ります。

勝野　隨分早う戻つてや。

了助　合點でござります。

　ト了助、向うへ走り入る。勝野稻むらへ入る。ト在鄕唄になり、橋がゝりよりれぶかの九助、鯰の兵六、雲助にて、希世、破れ布子にて、くも駕籠に乘り出る。よき處へ下ろす。希世眠つて居る。

九助　鯰よ、爰で下ろせ／＼。

兵六　オツと合點ぢや。なんとよう眠る和郞ぢやないかい。

九助　サイヤイ。駕籠舁き上げると直ぐにせぶりかけたが、矢ツ張り寢て居らるゝ。これで一倍重たい。コレ、申し、親方。起きさつしやりませ。コレ、親方々々。

　ト駕籠の側にてやかましういふ。希世、目の覺めたるこなし。

希世　ムヽヽヽ。なんぢや／＼。

九助　なんぢやどころぢやござりませぬ。もう參りました。

希世　參つたとは、どこへ參つた。

兵六　ハイ、極めた處まで參りました。

希世　ムウ、極めの處まで來たか。

兵六　ハイ。

希世　さうして、爰はどこぢや。

九助　でも滅相な。これが極めの長柄堤でござります。

希世　何を云ふぞい。誰れが長柄堤まで極めたぞい。おれが宿に泊つて居るを、わいらが來て駕籠借らぬか、長柄堤まで行きませう〳〵と、あんまり行きたさうに云ふに依つて、アヽ、こりや連れがなうて淋しいさうな、おれを誘うて連れて行くのぢやと思うたに依つて、如何にも行てやらうと云うて乘つて來たが、何とした。

九助　エヽ、親方、じやら〳〵と、何を云はしやりますぞい。コレ、もう夜が明けますわいの。わしらも歸りたうございます。どうぞ駕籠賃を下さりませ。

希世　なんぢや。駕籠賃おこせ。して、駕籠賃は何程ぢや。

九助　ハテ、物覺えの惡い。駕籠賃は二百五十でござりまする。

希世　アノ、それを今おこせか。

九助　ハイ。どうぞ早う去なして下さりませ。

希世　イヤ、ないわい。

兩人　エヽ。

希世　わいらはおれを知らぬか。

兩人　イヽエ、存じませぬ。

希世　こりやならぬワ。おれは大内から出たものぢや。

兩人　これはしたり。

希世　ぢやに依つて、其やうにさもしい物は手に觸れた事がないわい。

兵六　そんなら駕籠賃はないかい。

九助　駕籠賃もなしに、なんで貴様駕籠に乘つた。

希世　此奴、澤山に物を云ふわいやい。それほど駕籠賃が欲しくば、もそつと駕籠をやれ〳〵。

九助　駕籠をやれとは、どこまでやるのでござりまする。

希世　難波までやれ。

九助　難波は、どこへ行くのでござりまする。

希世　そりやおれも知らぬ。

兵六　難波何町の、何屋何某が所へ行くのぢやと仰しやりませ。

希世　それを知つてよいものか。

兩人　エヽ。

希世　それを知つて居る位なら駕籠は借らぬ。おれ一人歩いて行くわい。その難波には、おれが由縁の者がある。その處は知らぬが、知れるまでは幾日でも逗留して探す。廻り逢うた時に、駕籠賃はやらう。

九助　イヤ、此奴が〳〵。あんまりぢやがな。さてはおのれ、おいらを騙り居つたのぢやなア。そんなら、よいよ

い。駕籠賃の代りに、うぬが着て居るおかいこ引ッ剝ぐワ。サア、出やアがれいやい。出をらぬかいやい。
ト兩人して希世を駕籠より抛り出す。希世、ころ〳〵と轉ける。
希世　イヤ、わいらの一時の主を、なぜ打ちあけた。
兵六　此奴が〳〵。樣々の事を吐かす。ねぶかよ。どうせうぞい。
九助　どうの斯うのはない。引ッ剝げ〳〵。
兵六　オヽ、合點ぢや。
ト兵六、希世にかゝる。
希世　何をさらすのぢや。
トしめ上げる。
九助　此奴が〳〵。ほてがきいてある。うぬを。
トかゝるを、兩人を投げ、息杖にて打ち据ゑる。
ア、、お免されませ。もう駕籠賃は取りませぬ。
希世　おのれ、取つて堪るものか。玆な大盜人めが。
ト又くらはす。兩人逃げて入る。
ア、、惡い奴等ぢや。サ、、何も構ふ事はない。駕籠やれ〳〵。
ト希世また駕籠へ入る。勝野、稻むらの間より出て

勝野　イヤ、申し、最前から承りますれば、あなたは大內と仰しやつた。大內と仰しやれば、お懷かしうござります。して、大內では、どなた樣でござります。
希世　イヤ、某は大內では、ちと樣子あつて、
ト互ひに顏見合はせ
勝野　ヤア、希世さま。
希世　其方は勝野か。
ト勝野逃げうとする。希世、捕まへて
どつこい。逃がさぬ〳〵。ハテ、變つた所で逢うたなア。われが爰に居るからは、定めて伴うた者があらうなア。サア、それを云へ。
勝野　さればでござります。我が君樣流罪の時より、お主樣も、わたしらも、散り〴〵ばら〳〵となりました。わたしは心も急きますれば
ト逃げうとする。希世、ちやつと捕まへ
希世　われ一人とは忝ない。これまで心を掛けた勝野。爰で逢うたは盡きせぬ緣。マアちよつと、アノ松蔭へ、
ト挑むを振り切り
勝野　ア、、惡い事なされますわいなア。
希世　なんの惡い事せう。よい事するのぢや。

トこれより駕籠の緣を追ひ廻す。勝野、逃げ廻る。よき所にて駕籠の中より引ツ捕へ

してやつた〳〵。

トまた挑む。勝野、希世の手を嚙む。

アイタヽヽヽ。わりやア嚙んだな。

勝野　惡い事なされますと、其やうに嚙みますぞえ。

ト希世、嗅いで見て

希世　ア、蘭奢待の香りがするわい。そんならどのやうに云うても、否か。

勝野　例へどのやうになされても、否でござりますわいなア。

希世　よいワ。そんなら、もう抱いて寢ぬワ。……が、われに尋ねる事がある。われが爰に居るからは、源藏が處を知つて居るであらう。サア、有やうに云へ。

勝野　ハテ、變つた事をお尋ねなさるゝ。源藏を尋ねて何となされます。

希世　オヽ、菅秀才が詮議するのぢや。

勝野　エヽ。

希世　サア、源藏が住家を云へ。

勝野　イエ、存じませぬ。

希世　知らぬと云やア、カウ。

ト咽喉を締めにかゝる。立廻りに、勝野が懷中より財布を引き出し、見て

ハテ、よい物を持つて居るなア。

勝野　エヽ。

ト悄りして、財布を引ツたくり、懷へ入れる。

希世　おれもこの程は、甚だ不自由な。それ此方へおこせ。

勝野　イヽヤ、この金は大切な、お主樣の御用に立てる大事の金。渡す事はなりませぬ。

希世　ムウ、お主の用に立てるといふからは、御臺、菅秀才が在所、そちや知つて居るな。

勝野　イヽヤ、御臺樣、若君樣のお在所は知らぬわいなう。

希世　すりや、どのやうに云うても、知らぬか。

勝野　知らぬわいなう。

希世　吐かさにや、われ、この棒でぶち据ゑても、云はさにや置かぬ。

勝野　サア。

希世　云はぬか。

勝野　サア。

希世　吐かさにや、カウ〳〵〳〵。

ト散々にくらはす。勝野、ウンと切齒する。希世いろいろあり、池の水を汲んで來て、口から口へ飮ませてやる。勝野心附き、希世を見て振り放し、逃げうとするを引戻し、

サア、有やうに云へ。

勝野　例へこの身は、どのやうになつても、知らぬわいの。

希世　エヽ、しぶとい。吐かさにや、又、カウ〳〵〳〵。

トまた散々打つ。此うち兵六、九助、外に雲助五六人、めい〳〵竹杖を持ち、出かけて居て

雲助　何奴ぢや〳〵。

九助　うぬ。駕籠賃の代りに。

ト雲助大勢皆々希世を竹杖にて叩きかゝる。希世、あちこち逃け廻る。トゞ希世橋がゝりへ逃げて入る。皆皆追ひかけ入る。勝野も後より追ひかけ走り入る。ト雨車になると、方々にて蛙鳴く。ト橋がゝりより百姓太次兵衞、百姓の形にて、外に百姓四五人、皆々簑、笠にて出て

太次　なんと、今の物音は、畑盗人ではないか。

百一　オヽ、今宵は捕まへて、棒縛りにしてくれう。

百二　イヤ〳〵、土の中へ埋んでしまはつしやれ。

百三　皆の衆、すわと云うたら出やつしやれや。

皆々　合點ぢや〳〵。

ト皆々方々の松の木、稻村などの間々へ隱れる。ト合ひ方になり、向うより、源藏、菅笠、簑を着て、畚をかたげ出る。花道にて

源藏　アヽ、嬉しや雨もやんだ。まだ里人も起きはせまい。今の雨で、往來もあるまい。……さりながら、如何に浪苦の身なればとて、菅原のお家譜代の侍ひ、武部源藏ともいはるゝ者が、御主人の御流罪の、跡にまします若君を、夫婦の者がお預り申しての御養育、貧苦の住居をお目にかけまいと、女房にまで隱し包み、人の作りたるたなつ物を盜み取つて、その日の煙を立てるとは、野末に住む非人にも、劣つたる身の上かと思へば、口惜しいやら、無念なやら、……アヽ、おれとした事が、なんの思ひ出さいでもよい事を、くど〳〵と、假令、人が聞かねばこそよけれ。ハテサテ愚痴な。ハヽヽヽ。

ト思はず高聲にて笑ひ、ちやつと口を塞ぎ

明けぬうちに、さうぢや。

ト又あたりを見廻りて畑の青菜を引き抜いて、菜種などを鎌にて刈り、畚へ入れる。ト並木の蔭より太次兵衞、百姓皆々出る。

皆々　畑盜人め。

トめい〳〵鋤、鍬を持つて、源藏を追ひ廻す。源藏、あちこち逃げろうち、太次兵衞、源藏が笠を捕まへる。源藏笠を脱ぎ、いろ〳〵逃げ廻ろ事あつて、つまり、臆病口へ逃げて入る。後に皆々寄りこぞり

百一　折角見付けたのに、ても足の早い奴。

太次　皆待たつしやれ。笠を取つたが、何やら書いてあるが、暗うて見えぬ。内へ去んで見ようわいの。

皆々　さうせう〳〵。ござれ〳〵。

ト皆々橋がゝりへ入る。明け六ツの鐘鳴る。在郷唄になり、橋がゝりより馬糞拾ひ、手籠あまかひにて拾ひ拾ひ出る。臆病口より馬方、馬を追ひて出て、行き逢ふ。

馬士　六兵衞か。精が出るなア。

馬糞　貴樣も早いなア。どこへ行く。

馬士　長柄に荷があるさかいで、早う行かうと思うて。

六兵　それは精が出るなア。

ト此うち希世、最前の勝野が金を口に啣へて走り出て、馬に行き當る。馬跳れ出し、馬士を引摺り橋がゝりへ駈けて入る。ト馬糞拾ひ逃げて入る。希世そこらを探り、源藏が畚の中へ右の金を入れる。橋がゝりに大勢人音する。希世いろ〳〵うろたへて、臆病口へ走り入る。ト橋がゝりより百姓大勢出て、臆病口へ皆々入る。源藏引違へ出て、又々菜種を取つて畚へ捻ぢ込み、向うへ走り入る。始終バタ〳〵にて、希世そろ〳〵と出て、右の畚を尋ねる。百姓後より付き出て

皆々　爰に居る〳〵。

ト皆々希世を捕まへようとする。希世うろたへ、馬糞の籠を畚かと思ひ、戴いて向うへ走る。百姓皆々、其奴ぢや〳〵といふて、後より追うて入る。をかしみの

幕

五つ目　難波武部源藏内の場

役名――武部源藏。源藏女房、戸浪。平の希世。常磐木。腰元、勝野。菅秀才。笠見藏人。つなしや又右衞門。百姓、太次兵衞。紀の長谷雄。

造り物、二重舞臺、見附け赤壁、納戸口。西の方、折り廻り反古張障子屋體。橋がゝり、塗垂れ。よき所に門口、眞草行指南といふ表札ある。臆病口、大木の松、幹枝葉茂りあり。戸浪、前垂れ、襷にて釜の下へ差しくべて居る。百姓、三人、腰掛け、茶を飲んで居る。在郷唄にて幕明く。

百一　おか樣。毎日々々、こりや世話になりますなう。

戸浪　なんのお世話な事はござんせぬ。常住お前方のお世話になつて居るわたしら夫婦。せめて畑の休みになと、澁い出花をあげますのでござんすわいなア。

百二　それは忝ない。ほんに、この源藏どのが、この村へござつてから、イヤ證文ぢやの、むづかしい手紙ぢやのというて、書いてもらふので、村中が大抵喜んで居る事ぢやござらぬ。

戸浪　イヤモウ、主の拙い筆が、間に合ひませうなら、何なりとも遠慮なう、お使ひなされて下さりませ。

百三　イヤモウ、いとしいはこなん達夫婦の衆。元は都で由ある人ぢやさうな。この難波の里へござつてから、しつけもさつしやれぬこの世帶、見る目が笑止なと、此方のが噂、こなんの事を、常住屈托にして居るが、お内儀、水汲む釣瓶が、どうぢや、よう返りますかの。

戸浪　ハイ／＼。あなた方のお世話で、習はうより馴れいで、今は釣瓶もよう返ります。水もよう汲みます。打卷きも漸しますわいなア。

百一　待つたり。その打卷きとは何の事ぢやの。

百二　ハテ、太郎兵衞。知れた事、五月の節句の事ぢやわいの。

百三　なにを。そりや打卷かすのぢやない。粽卷くのぢやわいの。

百一　ハヽヽヽ。さうかなア。時にお内儀。不思議なは、アレあの松ぢや。この間一夜のうちに、爰な庭に生えたが、源藏どのが朝も晩も掃除して、大事にかけさつしやるは、どうぢやの。

戸浪　サア、あの松に就いて、不思議がござんす。わたしら女夫が大切な御主人樣、この度不慮な事ゆゑ筑紫へ御流罪のお身。ところに、あの松はお主樣の御秘藏、それゆゑ郎ち御主人樣と思うて、わたしら女夫がお宮仕へ、致しますのでござんすわいなア。

百二　ハア、、聞えた。それでこなた衆女夫が、大事にか

けるとは、こりや尤もぢやわいの。

百三　今お内儀の話で合點がいた。それで女夫を松と號けしは、この時よりぞ知られけり。

ト淨瑠璃語る。

百一　エヽ、阿房らしい。何の事ぢやぞいの。

百二　ハテ、松の謂れを語つて、聞かすのぢやわいの。

百一　イヤ、松の謂れで日が闌けた。なんと、畑へ行きませうか。

百二　オヽ、行きませう／＼。

戸浪　皆樣。マア、ようござります。マア、お茶お上がりなされませ。

百三　イヤ／＼、御馳走にあひました。

百一　源藏どのが歸られたら、よろしう云うて下されい。

ト在鄕唄になり、百姓しか／＼云うて、橋がゝりへ入る。ト戸浪、障子屋體を開く。菅秀才、机にかゝり、學問の體。戸浪、手をつかへ

戸浪　若君樣。其やうに學問にお凝りなされたら、お氣も結ぼれませう。お煩ひでも出れば、惡しうござります。マア／＼、これへお越しなされ、お氣晴らしなされませいなア。

菅秀　イヤ／＼、戸浪。一日に一字學べば、三百六十字との敎へぢやわいなう。

ト在鄕唄になり、源藏、向うより初手の形にて、頰冠りして、畚に菜種や菜の葉を入れ、走り出て、つかつかと内へ入り、戸をピッシャリさして、ホッと吐息つく。戸浪、悧りして

戸浪　オヽ、こちの人。戻らしやんしたか。

源藏　女房ども。アヽ、嬉しや。

菅秀　源藏。いま戻りやつたか。

源藏　ハッ。これは若君樣。只今歸りましてござります。

ト畚を方付けて

これはしたり、女房ども、心の附かぬ。大切な若君樣、なぜ端近へ出しますぞいの。今にても時平方より……ハテサテ、心の附かぬ。どうしたものぢやぞいなう。

戸浪　アイ。イエ／＼、あんまりお學問に心を委ねてござるゆゑ、もしお氣も結ぼれませうかと思うて、いま爰へ出し申したわいなア。イヤ、申し、こちの人え。お前は、この間より、七ツ前／＼に出やしやんすが、どこへ行かしやんすえ。

ト源藏、悧りして

源藏　イヤ、こりや何ぢやわいの、オヽ、御臺樣を見失うたは、おれが誤まり。それゆゑ晝もお尋ねと思へども、何を云うても、此やうな見苦しい形。それゆゑに、夜のうちに尋ねに出るのぢやわいなう。

戸浪　それはマア、さうであらうが、お前の顏附き。戻りのけたゝましいは、常の樣子では、

　ト いろ／＼云ふ。源藏恟り、思ひ入れ。

源藏　イヤ、寒かつた。

戸浪　エ。

菅秀　コレ、源藏。どうぞしやつたか。

源藏　戻る道で震ひつきました。……イヤ／＼、もうよいもうよい。案じやんな／＼。イヤ、若君樣、お案じ下されな、源藏めは滅多に煩ふ事ぢやござりませぬ。

菅秀　源藏。館の騷動より、其方衆夫婦の心遣ひ、隨分煩はぬやうにして、この上ながら父上の、歸洛あるやうに頼むぞや。

源藏　アレ、聞きやつたか。

戸浪　こちの人。

源藏　チエヽ、有り難い仰せ。煩はぬやうにとは、冥加ないお詞。これに就けても、口惜しいは時平が計らひ。讒者の輩、罪なき君をさすらひと、濁る浮世の有樣ながら、御一家は散り／＼に、勿體なくも、菅原の若君を、軒漏る埴生の御住居、思ひ廻せば、お痛はしうて／＼。

　ト 泣かうとして思ひ入れ。

ハヽヽヽヽ。おれとした事が、知れた事を。定めて若君樣も、愚痴な奴ぢやとお笑ひ遊ばしませう。ナツ、女房ども、さうぢやなう。ハヽヽヽ。イヤ／＼、思ふまい思ふまい。有爲轉變の世の中、日月とても蝕の憂ひ。……イヤ、女房ども、今朝の朝嵐、庭の松が枝に障りもなかつたか。

戸浪　イエ／＼。お前の云ひ附け、隨分大切に、そよとの風の落葉さへ、大事に取つて置いてござんすわいなア。

源藏　オヽ、それがよい。隨分心を附けてたも。夫婦の爲には、大切な御主人同然。若君樣、お聞き遊ばせ。父君、丞相樣の御秘藏、不思議に生えたこの幹、追ッつけ君樣の歸洛を、松の榮えを菅原氏、常磐の色に綠の我が君、神の示顯に、君の御愛樹は、即ち父君。我れ／＼夫婦も諸共に、せめては畑の出來初穗。女房ども。片木、土器

戸浪　アイ／＼。

　ト 合ひ方になり、戸浪、片木、土器を取つて來る。源

藏、畚より菜種を取り出し、水に淸め、片木に載せ、火を打ちかけ、松の木へ供へ、下へ下がつて辭儀する。戶浪見て

戶浪　滅相なこちの人。菜種の花を。

源藏　ハテ、故人の詩に、菜種の詩に、花の色は蒸したる粟の如しと賦したれば、心ばかりの粟の飯。源藏が貧苦に迫り、島にござる丞相さまへ、心ばかりのおもてなし。

戶浪　成る程、さうでござんす。鐵丸を食すると雖も、心汚れたる人の物を受けずとは、八幡樣の御託宣とやら。忠義を忘れぬこちの人、菜種の御供は百味の飮食。

菅秀　源藏夫婦が淺からぬ忠節、父丞相さまにも、さぞ御滿足にあらうぞいの。

源藏　エヽ、有り難いお詞でござります。若君樣には、奥にて、お好きの横笛を遊ばされませう。

戶浪　父君にも追ッつけ御歸洛、めでたうお逢ひなされませ。

ト右のせりふのうちより、橋懸りよりつなしや又右衞門、男二三人に鋤、鍬、斧を持たせ出て、戶を叩き

又右　源藏、內にか。開けてもらはう〳〵。

トやかましう云ふ。源藏、戶浪に菅秀才を奥へやれといふ。戶浪、一間へ菅秀才を入れる。此うち始終やかましう云ふ。戶浪開けて

戶浪　エヽ、忙しない。誰れぢやぞいの。

又右　誰れでもない、おれぢや。この村の請負ひ人、つなしや又右衞門ぢや。約束の地代を取りに來たのぢやわいの。

源藏　これは〳〵、又右衞門さま。御苦勞にようお出で下されました。サ、これへ。女房ども、エヽ、氣の利かぬ。お煙草盆を、ちやつとあなたへ。

戶浪　アイ〳〵。

ト煙草盆と茶を持ち行く。

又右　アヽ、コレ、茶も煙草も飮みたうない。おりや地代の金を取りに來たのぢや。サア、受取つて去にませう。

源藏　これは毎度御苦勞樣でござります。段々延引仕りまして、甚だお氣の毒にござります。どうぞ明後日までお待ちなされて下さりませ。明後日にはキッと上げます。

又右　アヽ、コレ〳〵。その明後日、久しいものぢや。もうなりませぬ。ちよつとも待つ事はならぬわいなう。

源藏　成る程、御立腹は御尤もでござります。イヤモウ、貧しい世帶で、書き物や又寫し物の代物を集めまして、上げますのでござりますさかいに、此やうに遲なはります。イヤ、併し、私しが懇ろやひに無心申しまして、明後日にはキッと貸してもらひます。どうぞお待ちなされて下さりませ。

又右　ア、、コレ／＼。その人だましは行かぬわいなう。とんと合點がいかぬ。貴樣も醉狂な。今日、内に食ふ物は有るか無いかといふ風體にて、あの松を買ふとは、全體呑み込めぬ。先度の大風の揚句に、あのやうに一時にヌッと生えたぢや。ても不思議なと思うても、見世物にはならず、隣り屋敷へかまふに依つて、いつそ打ち切つて焚きつけになとせうと思うて、掘り起しに來たところが、貴樣が止めた。この松を、とうぞわしに賣つてくれいと段々の頼み、松の木ばかりならよけれど、あれだけ地面が塞がるゆゑ、賣ることはならぬと云ふを、袖褄にすがつて、涙をこぼしての頼みぢや。あゝしてあれば、隣り屋敷へかまうて邪魔にはなれど、それほど頼ましやる事、賣つてやらうと、地代から松の木を、僅か金三十兩に賣つたぞや。その金を取りにくりや、晩ぢやの、明日ぢやのと、一寸延ばしに埒が明かぬ。如何に松の木の金ぢやとて、下り藤にしては、この請負ひ人が辛いぢや。此やうに來てゐる事はなりませぬわいなう。

源藏　サア、さう仰しやるは、段々御尤もでござりますが、私しもいらぬ醉狂なれど、あの松を求めますは、ちつと仔細がござります。こりや申しても御存じない儀。どうぞ明後日までお待ちなされて下さりませ。

又右　ア、、コレ／＼源藏どの。金の出來んものを、無理に買ふ事はない。松はあゝして置いては邪魔になるゆゑ、ぶち切つて焚きつけにしてしまふ積りぢや。

源藏　イヤ、又右衛門さま。そりやどうしたお詞でござります。さうさせます程ならば、此やうにお頼みは申しませぬわいなう。

ト急いて云ふ。

又右　ハア、、御立腹か。御立腹お尤もぢや。コレ、皆の衆。アレ、あの松の木、掘りかけて下され。

男　オイ／＼、合點ぢや。

ト皆々松の木の側へ行かうとする。

源藏　マア／＼、お待ちなされて下さりませ。

又右　イヤ、構ふ事はない。掘つて下され／＼。

戸浪　コレ。申し、其やうに仰しやらずと、どうぞ。

ト源藏皆々を留める。男うぢ〳〵する。

又右　コレイナウ。こなた衆は何をしに來たのぢや。早う掘らつしやれぬかいなう。

源藏　サア、段々御尤もでござります。この上は、長うとは申しませぬ。どうぞ今宵中、お待ちなされて下さりませ。あの松を切らせます事は、私しが御主人の秘藏の松、不思議にこの所へ生えたは三世の奇緣。身の誤まりに御主人樣と思ひ、朝夕夫婦が大切に、落葉一つ散らさぬやうに致しますも、いま日蔭の私しが忠義。爰の所を聞き分けて下さりませうならば、例へこの身はどのやうになつても、金のたんぞく致して差上げませう程に、どうぞコレ慈悲ぢや。昔は堂上に仕へて錆び刀も差したる身、兩手を突き、頭を下げてのお賴み。コレ、申し、どうぞ今宵中の所を、お待ちなされて下さりませ。

戸浪　ハイ〳〵。いま主の申されます通り、違ひはござりませぬ。御主人同然のあの松、切り倒されては夫婦の者が悲しみ、どうぞお待ちなされて下さりませ。あなたのお心一つで、こちの人の忠義も不忠となる、大事のあの松。今宵の所を、コレ、申し。

源藏　夫婦が一生のお願ひ。

戸浪　どうぞお聞届けなされて下さりませう。

源戸　又右衞門さま。

ト兩方より又右衞門に取りつき、いろ〳〵賴む。又右衞門も思ひ入れありて

又右　ハテ、それほど夫婦の衆が涙を流しての賴み、違ひもあるまい。おれもつないしや又右衞門。男ぢや。よいワ。待つてやらう。

源藏　ナニ、御容赦なされて下さりますか。

戸浪　エ、有り難うござります。

又右　ア、コレ〳〵。待つてはやらうが、明日までは待たぬ。今宵の夜半まで。

源藏　そんなら、今宵の夜半まで。

又右　夜半の鐘がゴンと鳴ると、取りに來るぞや。それまで金が出來ぬと、夜中とは云はさぬ。切つてしまふぞや。

源藏　成る程、キッと拵らへませう。

又右　必らず違へまいぞや。

源藏　そりやモウ、違ふ事もござりますまい。

又右　そんならお內儀、源藏どの。キッと詞を番うたぞ

や。
源藏　ようお出でなされました。
ト唄になり、又右衛門「男ども、サア來い〳〵」と連れて橋がゝりへ入る。跡に兩人思ひ入れある。
戸浪　申し、こちの人。お前、今のやうに受合はしやんして、金の心當りがござんすかえ。
源藏　身の誤まりに、永々の浪人。夫婦の者が朝夕の、煙も細いかせ世帶。
戸浪　以前は僅か、今では大枚の金の才覺。
源藏　お匿まひ申す若君に、御不自由をさせますまい爲、道ならぬ事
戸浪　エ。
源藏　長柄の事も。
戸浪　長柄の事とはえ。
源藏　サア、苦は色變へる松の地代の金たんぞく。……ムウ。
ト手を組み思案する。ト向うより下役、急がしさうに走り出て
下役　申し〳〵、源藏さま。お宿にござりますか。何やらお前にお尋ねがあると云うて、代官所へどれやらお歴々樣が、お出でなされてござります。サア〳〵、今お出でなされませ。
源藏　ムウ。ナニ、わしに尋ねたい事があると云うて、お代官所から召しますとな。
戸浪　申し、こちの人。なんぞ氣遣ひな事ぢやござんせぬかえ。
源藏　サア、何も覺えはないが、もし又昨夜の
戸浪　エ、昨夜のとは、なんでござんすえ。
源藏　イヤ、云ひつける事があるのか。コレ、こな樣、何も樣子知らぬか。
下役　イエ〳〵、私しは存じませぬ。いま急に呼んで來いとの事でござります。サア、お出でなされませぬか。
源藏　サア、參ります。ソレ、女房ども。木にも萱にも心を置く時節なれば、あの一間の、ナア、必らず合點か。
戸浪　成る程、心得ましてござんす。
下役　サア、お出でなされませぬか。
源藏　サア、參ります。ソレ、羽織たも。
戸浪　アイ〳〵。
ト羽織着せる。
下役　申し。羽織は着いでも大事ない。急な事でござりま

す。

源藏　隨分氣を付けや。

戸浪　アイ〳〵。

下役　サア、お出でなされませ。

源藏　ドレ、參りませう。

ト唄になり、源藏、下役を連れ向うへ入る。戸浪、後に案じる事しか〴〵あると、向うより希世、冠り下地の髮にて、黒羽二重の隨分破れたのを着て、門口に立ち

希世　お勅使。

戸浪　エ、。

ト恟りする。希世、靜々内へ入る。戸浪見て
お前は左中辨希世さま。

希世　勅使なれば罷り通る。

ト仔細らしうズッと通る。

戸浪　見れば、見苦しい形で、勅使とはえ。

希世　戸浪、その後は打絶えたなう。して、其方が夫、武部源藏は。

戸浪　ハイ、こちの人は、今ちつと用があつて。

希世　すりや、他出よの。どうぞ、其方が夫源藏に見えたいものぢやが。

戸浪　都の噂を承りますれば、あなた樣も御追放とやら承りましたが、エ、そんなら、希世さま、御追放ゆゑ其お姿でござりますか。

希世　すりや、都の樣子を知つて居るとな。

戸浪　アイ、あなたのお身の上、承りました。

希世　ハデ、天なる哉、命なる哉。昨日は雲井に膝を連ね、今日は人の軒端にて、貰ひ喰ひ、てんや物にて露の命を繫ぐといふは、浮世ぢやなア。皆師匠の謀叛ゆゑ、斯く淺ましき姿となる。即ち希世が今の身の上を、三十一文字の詠み歌に、「へればこそ腹もひもじき蟲の音に、黄粉小豆の餅もほしけれ。」

戸浪　オ、笑止。そりや、なんの事でござりますぞいなア。

希世　有やうは、都を拂はれて佇む所もなく、むらくひの左中辨、前の由緣源藏夫婦が、この難波に居ると聞いたゆゑ、二三日喰はしてもらはうと思うて、尋ねて來たのぢやわいなう。

戸浪　それはマア〳〵、お笑止な事ながら、ほんに恥かしながら、わたしら夫婦も。

希世　サア、薄い事を知つて尋ねて來たも、これ同氣相求むるといふものぢや。どうぞ不請ながら茶粥でも大事ない、二三日養なうてたも。

戸浪　ぢやと申して、夫の留守に、わたしがあなたを。

希世　イヤ、大事ない。源藏には外に用もあれば、戻りを待つて、直ぐに頼みませう。

戸浪　そりや如何やうとも、お勝手次第に遊ばせ。

希世　そんなら暫く奥へ行て待つて居る。源藏が歸らば、知らしてたも。コレ、戸浪。して、飯櫃はどこにある。

戸浪　アヽ、さもしい事ばかり。なんぼう其お姿でも、以前は

希世　ハテ、內裏男も喰はにや立たん。戸浪、後に逢はう。

ト唄になり、希世、障子屋體へ入らうとするを、戸浪留めて

戸浪　ア、イヤ〳〵、斯うお出でなされませ。

ト納戸へ連れて入る。橋がゝりより太次兵衞、百姓三人連れて出て

太次　サア、爰ぢや〳〵。皆入らつしやれ〳〵。

皆々　源藏に逢はう。源藏を出せ〳〵。

ト口々にやかましういふ。戸浪、奥より出て

戸浪　ア、コレ、お前方は、ついに見た事もないお方々、こちの人を出せと、聲高に云はしやんすは、なんぞ御用でござんすかえ。

太次　オヽ、用がある。爰な源藏は、大それた大盜人ぢや。

皆々　オヽ、盜人ぢや〳〵。

ト口々やかましう云ふ。

戸浪　イヤ、申し、お前方は、云ふ事と云はぬ事があるぞえ。こちの人を盜人々々と云はしやんすは、何を盜んで、マア、盜人呼ばはりなされます。一體お前方は、どこのお人でござんすえ。

太次　オヽ、おいらは長柄村の百姓ぢや。

戸浪　その長柄村のお衆なら、こちの人を、なんで盜人と云はしやんす。

太次　云やんないの。コレ、朝は星を戴いて出で、畑仕事に身の袖絞つて、作つて置いた三月大根、又ちさの葉。

皆々　冬から圍うて置いた獨活もある。

太次　そればかりぢやない、金目な菜種まで引拔いた大盜人。先度から畑が荒れると氣を附けて、皆番をして居た所が、昨夜といふ昨夜、手目は上がつた。連れて去んで

法に行ふ。

皆々　サア、盜人の源藏を、出しや〳〵。

太次　但し奥に隱れて居るか。引摺り出して棒縛りにするのぢや。サア、ござれ〳〵。

皆々　合點ぢや〳〵。

ト奥へ行かうとする。戸浪皆々を引戻し、取逆せ、急いて物の云はれぬこなしあつて、無理に引留め、下に置き

戸浪　コレ、申し、こちの人に限つて、そんな道ならぬ大それた事を。ほんに、女房のわしが口から云ふは、味な物ぢやけれど、それは〳〵律義な、侍ひ氣質な

太次　イヤ、侍ひ氣質ぢやない。侍ひ騙りぢや。ナウ、皆の衆。

皆々　オヽ、さうぢや〳〵。

太次　おいらが作つて置いた物を、夜々盜みに來るといふ橫道者、大盜人。

戸浪　イヤ、申し〳〵。最前から默つて居れば、モウ〳〵、堪へられぬがな。こちの人を盜人ぢやと云はしやんすには、なんぞ慥かな

太次　オヽ、證據といふのは、この菅笠ぢや。

ト出す。

戸浪　この菅笠を、證據とはえ。

太次　その頂きは狀の封じ紙。書附けがある。それを見たがよい。

戸浪　ナニ、これか。

ト菅笠を取り、頂きを見て

難波入江武部源藏どの、同戸浪どの。都より。こりやコレ、いつぞや、造酒さまより來た文の封じ紙。

太次　サア、それが證據ぢやあるまいか。

戸浪　すりや、これが。

太次　昨夜畑へ落して逃げたはこの源藏。それで盜人の正銘。

皆々　なんと、連れて去なうといふが、おいらの誤まりか。

戸浪　そんならこの笠があるゆゑ、夫が。

ト最前の菜種にて心の附きたる思ひ入れ

すりや、若君樣のお爲に、さもしい貧の盜み。……ハアア。

太次　サア、斯ういふ慥かな證據が出るからは、源藏を連れて去んで、處の法に行ふ。

皆々　サア、源藏を、爰へ出しや〳〵〳〵。
戸浪　成る程、斯ういふ慥かな證據があるからは、こちの人に違ひもござんすまいが、どうぞお前方の御料間で、穏便に濟みますやうに、御思案はござりませぬかいなア。
太次　思案といふは、連れて去んで、畑へ埋むるより仕樣はない。
戸浪　サア、さうしられましては、諸人に面を晒し
太次　オヽ、恥をかゝすが、畑盗人の掟ぢや。
戸浪　サア、そこをどうぞあなた方の、お慈悲を持ちまして、何事も丸う納まりますやう。
太次　納まらうが、納まるまいが、おいらが一存では濟まぬ。村には庄屋、名主といふ束ねがある。そこへ連れて行て指圖を受けねばならぬ。
皆々　オヽ、さうぢや〳〵。庄屋どのへ、連れて行くぞ連れて行くぞ。
戸浪　サア、其やうに仰しやつても、こちの人源藏は、只今は
太次　オヽ、留守なら、こなたを代りに連れて行て、指圖を受けう。

皆々　サア、ござれ〳〵。
ト戸浪にかゝる。
戸浪　そんなら、わたしが行かねばなりませぬか。
太次　なんでも庄屋の指圖次第ぢや。
戸浪　でも、この樣子をちよつと
太次　イヤ、ならぬ〳〵。ソレ、引摺つてござれいなう。
皆々　サア、うせう〳〵。
戸浪　でも
太次　ハテ、ならぬわいの。
皆々　サア、うせう〳〵。
ト戸浪を無理やりに引立て、橋がゝりへ入る。ト奥より希世出て、あたりを見廻し、机の書き物を持つて身構へして、尻からげうとする。ト橋がゝりバタ〳〵。希世ちやつと奥へ入る。ト七ツの半鐘を打つ。合ひ方になり、向うより笠見藏人、素袍、龍神卷にて、源藏を侍ひ四人、矢にて鬪ひ出る。後より乘り物舁き、若黨附いて出る。花道にて源藏立廻つてキッと見得。
藏人　ソリヤ。
侍ひ　サア、源藏、歩め。
源藏　聊爾なされますな。

藏人　ヤア、默らう。いま、代官方にて申し付けし通り、菅秀才が首討つか。

源藏　イヤ、先程も申す通り、若君を匿まひし覺え、ゆめ以てござりませぬ。

藏人　ヤア、匿まひし樣子は、疾より顯はれある。それを、是非匿まはぬとあらがへば、うぬ、爲にならぬぞ。

源藏　爲にならうがなるまいが、存じませぬぞ。

藏人　知らぬと云へば、其方に繩かけ拷問する。ソリヤ。

侍ひ　ハツ。

ト源藏にかゝる。千鳥に投げろ。

皆々　こりや、手向ひか。

ト取卷く。乘り物の内より

長谷　藏人。暫く待ちやれ。

ト乘り物の戸を開き、長谷雄、長袴にて出る。

藏人　長谷雄公。菅秀才を匿まはぬと申すゆゑ、繩打ち拷問せん爲。

長谷　イヤ、科の疑はしきは輕くせよといへば、苦しうない。源藏、其方、菅秀才を匿まひし事、先達て顯はれあるわい。

源藏　イヤ、全く以て、源藏、若君を

長谷　匿まはぬとは云はれまい。この難波入江に蟄居の源藏、菅秀才を養育する樣子、兵庫司の訴人ゆゑ、その役ならねど、遺恨ある菅原家、檢使の役を乞ひ請け、立越えた某は、いま、文章の博士、紀の長谷雄。

源藏　すりや、こなた樣が。

長谷　如何にも、當時はつかうのこの長谷雄。

源藏　君さすらひの後、禁中に於て筆道の覺えよきと承つたは、ハテ、こなた樣ぢやよな。

長谷　源藏。菅秀才匿まひし事あらがふと、われが爲にならぬぞ。

藏人　但し、勅命を背くか、源藏。

源藏　草も木も、我が大君の國なれは、何しに勅命は背きませう。何を云うても、若君菅秀才を

希世　イ、ヤ、この家に菅秀才は、匿まひある。

ト納戸より出て

その證據は、コレ、菅秀才が書き物。

源藏　こなたは希世。

希世　源藏。いつぞや筆法傳授、その遺恨ある其方、それではるばる尋ねて來たわいやい。

源藏　すりや、身共が、留守の間に來て、若君を

希世　匿まうたか、匿まはぬか、犬に入つたこの希世。
藏人　即ち主人時平公の仰せ。源藏、あらがはずと、菅秀才が首を渡せ。
源藏　すりや、さほどまで菅原の根を絶たん、時平公の逆意か。
長谷　イ、ヤ、逆意ぢやない、勅命。菅丞相は齊世の君を位に卽けんとの企み。娘紅梅姬を囮に謀叛の根組み。その枝葉を絶つは天下の政道。
希世　源藏。菅秀才が首討つて、其方が受けた筆法傳授の卷を希世に渡せ。異議に及ぶと、逆磔刑ぢやぞ。
源藏　ハテ、しみしつから心をかける傳授の一卷。心爰にあらざれば、喰へどもその味ひを知らずとやら。木石同然の者が、傳授を受けて詮ない事。
希世　ヤ、なんと。
源藏　筆法は世の寶、菅丞相は御さすらひ、後にましますす若君といひ、菅原の根を絶やすは、天下の鑑を失ふ同然。
長谷　源藏、例へ菅原の筆道を失うても、この長谷雄、天が下に在るうちは、日本の寶は朽ちぬわサ。
源藏　イカサマ、文章の博士とある、紀の長谷雄さま。及ばずながら拙者めも、菅原のお家に育つた一德、筆道の儀お尋ね申したいが、苦しうござりますまいかな。
長谷　ハテ、しほらしい源藏。其方も、菅原の傳授を受けたとあれば、苦しうない。許す。尋ねて見よ。
源藏　近頃以て有り難い仕合せ。高位に向つて過言は、これも傳はる筆の冥加、然らば慮外も顧みず、お尋ね申しませう。長谷雄さま、筆の法はな。
長谷　文字は蒼頡より始まり、張融、伯英世に秀でし、なれども、我が筆道は二王の法を用ふるわサ。
源藏　二王とは、彼の王羲之、王獻之。これ晉の世の能書と聞く。して筆畫の傳へはな。
長谷　七十二點を體とする。して又、菅原の傳授を受けた源藏、其方にも問はう。彼の永字の八法といふは、眞の筆道、極意はなんと。
源藏　側、勒、努、趯、策、掠、啄、磔、この八點は七十二點に分れ、八畫を以てしきとくす。
長谷　イ、ヤ、下世話にも云ふ、鋸屑も云へば云はる、口先の筆法、合點がゆかぬ。まこと傳授を極めしならば、席書が見たい／＼。
源藏　成る程、お望みならば、書いてお目にかけませう。

長谷　面白い。早う認めい、
源藏　ハッ。
　ト合ひ方になり、源藏立つて、机、硯を取出し、直る。
希世　ヤイ、源藏。如何に長谷雄公の、お指圖ぢやとて、見事書くかよ。
源藏　御意でござるもの。ほんのこれが盲人の垣覗き。
希世　ハテ、しやらくさい。在所住ひの武部源藏、くさ墨に三文筆、書出しや手紙書くとは違ふ。似合うたやうに、恥と頭の、席書ひろがう。
　ト此うち源藏、白紙に一の字を書く。
源藏　憚りながら、拙者が筆立て、御覽下さりませう。
　ト見せる。長谷雄とつくりと見て
長谷　ハ、ア、天晴れ一の字。畫は陰陽、春より起りて冬に納まる、四季の墨色、菅原の妙手。ハテ、見事々々。
源藏　いま、文章の博士、長谷雄公の筆法、畏れながら、拜見いたしたうござります。
長谷　望みなら、見せてくれう。長谷雄が筆法、とくと見て、見本にせい。
源藏　それは有り難う存じます。
長谷　希世、その筆紙を、これへ。
　ト右の机を長谷雄が前へ持ち行く。長谷雄、筆を濕し、大の字を書く。此うち始終合ひ方。長谷雄書きしまひ
なんと、源藏、身が筆法はこの通り。とくと見て、批判があらば、打つて見よ。
源藏　さらば、拜見仕りませう。
　ト希世見て
希世　ハア、、見事、その職に任ぜられし長谷雄さまは、筆法に肉を持つたところ、イヤ、なか〳〵詞には盡されませぬ。なんと、源藏、さうは、思はぬか。
源藏　イヤ、私しは存じませぬ事ながら、ハレ、見事さうにござります。
長谷　源藏。菅原の筆法とは、また格別に見えやうが。
源藏　成る程、また格別。
希世　見事でないか。
源藏　成る程、天晴れ御筆勢。して、この讀みはな。
長谷　ハテ、知れた事。「大」の字、卽ち遊情。
源藏　イヤ、こりや「大」の字ではござりませぬ。
長谷　ヤ。
源藏　こりやコレ卽ち「火」の字。「大」の字とは大きな誤まり。

長谷　何がなんと。
源藏　弘仁の御宇、殿門の額を改めらるゝに、勅命に依つて、空海これを承る。即ち大極殿と記す。小野の篁これを難じて、これ大極殿にあらず、火極殿なり。「大」の一の字、横の一文字に納まるべきに、下へ撥ねたるは、大極殿にあらず、火極殿といふ。果して、貞觀の頃燒失する。空海でさへ斯くの誤まり。まして長谷雄卿たるは、火の字と申したが、この源藏が誤まりでござりますか。
長谷　サ、それは。
源藏　その差別もなき長谷雄さま、いま文章の博士とは、ちと心元なう存じます。
長谷　サ、それは。
源藏　但し、「火」の字を「大」と讀みますかな。
長谷　サア。
源藏　サア〳〵、何とでござりまするな。
　ト繰り上げ。長谷雄、源藏を扇にて、りう〳〵と叩き
長谷　源藏、無念なか。
源藏　長谷雄さま。この源藏には、何誤まりあつて、打ち打擲なされますな。
長谷　オヽ、ぶつて〳〵ぶちのめし、叩き殺しても大事ない。
源藏　大事ないとは。
長谷　菅原道眞は、儒の家より出でゝ、右大臣まで經登り、謀叛の企てあるゆゑ、官を引ツ剝いで、今筑紫へさすらひ、勅勘の菅原の筆法、許しもなきに、猥りに、なぜ筆を取つた。
源藏　サア、それは。
長谷　殊に、文章の博士紀の長谷雄は、禁廷の勅筆、官位の司、その前にて勅勘の由緣の者、許しもなきに筆を取つたる越度、いま打ちのめしたが、身が誤まりか。
源藏　サア、それは。
長谷　それのみならず、この長谷雄が筆をさみした。
　ト打ち据ゑる。源藏無念のこなし。
源藏　これは又あんまり。
長谷　何があんまり。慮外が重なると、博士の權威を以て眞二つ。利法權の差別も知らぬ、玆な、うつけ者めが。
源藏　チエヽ。
　トぢつと思ひ入れある。
藏人　サア、源藏、菅秀才が首打つて渡すか。

希世　但し、この希世が引出して、首打たうか。
長谷　好事門を出でず。
希世　悪事千里。
藏人　家探しせうか。
長谷　首打つか。
源藏　サア。
皆々　サア〳〵〳〵。
長谷　源藏、返答はどうぢや。
源藏　ハアヽ。
希世　源藏、菅秀才が首打たずば、この希世が奥へ行て
ト行かうとする。源藏留め
藏人　妨げする源藏を圍へ。
侍ひ　ハッ。動くな。
源藏　エヽ、是非に及ばぬ。この上は、若君の御首、打つて渡しませう。
希世　すりや首打つか。
源藏　若君のお命を助けんと、千變萬化に心を碎けども、最早叶はぬ御運の末。人手に掛けんよりは、この源藏めが御首を賜はり、差上げませう。
希世　源藏、その性根なら、菅秀才が首、早く打つて渡せ。

源藏　如何にも、首打つて渡しませうが、假初めならぬ右大臣家の若君、つい掻き首捻ぢ首にも致されず、せめては御最期を勸め、死を清くさする間、暫らくの御容赦を。
希世　ヤア、その手はくはぬ。暫しの容赦と暇どらせ、逃げ仕度するのであらう。
藏人　覺悟もへちまもいらぬ。早く首打つて渡せ。
長谷　イヤ〳〵、兩人。かゝる手詰めの場所、首打つといふに相違はあるまい。某が情を以て、暫らくの猶豫いたしてくれう。ナニ、藏人。其方は暫らく代官の方に控へ、後ほど首取りに參られよ。
藏人　ハッ、然らば左やう仕らう。希世どのには、後に殘りて、萬事に心を附け召されい。
希世　如何にも、後に殘り、何なりと一つの功を立て、時平公にお目にかけ、御所へ歸る所存なれば、滅多に油斷は仕らぬ。が、長谷雄どの、暫しの猶豫の其うちに、もし彼奴らが。
長谷　ハテ、逃げ仕度しても、裏道には、數百人を附け置き、蟻の這ひ出る所もない。コリヤ、源藏、其方が願ひに任せ、某が情を以て、暫しの容赦を致しくれるが、生

き顔と死顔とは相の變るなどと、身替りの似せ首、古手
な事して、後悔いたすなよ。
源藏　いらざる御念。一旦首打つと、云うた詞は違はぬ武
部源藏。
長谷　アノ見事、其方が。
源藏　如何にも。
長谷　見るぞよ。
源藏　お目にかけう。
ト兩人睨み合ふ。源藏肩脱ぎ、キッとなる。この襦袢、
口幕にちぎりし片袖縫ひ合せある。長世雄見て
長谷　その片袖は慥かに。
源藏　御存じでござるか。
長谷　これを持つて居るからは。
源藏　これを知つてござるからは。
長谷　いつぞや京極通りの廣小路、
源藏　その時の暗まぎれ。
長谷　出逢つたは其方であつたか。
源藏　引きちぎつた片袖。
長谷　その紋は三蓋松。
源藏　其方には詮議がある。

長谷　コリヤ、大事の前の小事。この片袖の
源藏　繼ぎ手を合す
長谷　時節があらう。
源藏　マア、それまでは、
長谷　源藏。
源藏　長谷雄さま。
ト唄になり、長谷雄、藏人、皆々橋がゝりへこなしあ
つて入る。源藏、希世は奥へ入る。ト暮れ六ツの相鐘
鳴る。引きながしの合ひ方にて、橋がゝりより戸浪、
しを／＼として出て、門口にて
戸浪　こちの人の難儀、畑の物を盜んだ科、長柄の里へ連
れ行かれ、代りにわしをと、段々謝うても聞入れず、や
うやく金であつかひ、戻つては來たものゝ、夜分までに
金が出來ねば、源藏どのを連れに來る。どうぞ金の才覺
を、と思へど大枚二十兩といふ物、下地の貧苦、なんの
出來やうぞ。松の地代の金といひ、今宵中に五十兩とい
ふ金。アヽ、どうしたらよからうなア。
ト門口に立ち、ヂッと思案する。奥より源藏、角行燈
に火をともして出る。こなしあつて
源藏　退引きならぬ若君の手詰め、御首打つて渡すと、請

合ひしは當座遁がれ。差當つたお身替りとてもなし。こりやマア、何としたものであらう。

ト戸浪、空を眺めて

戸浪　今暮れても春の短夜。どうぞ長柄の里人の來ぬうちに、金の才覺。

ト源藏、內にて

源藏　若君のお身替り、女房戸浪に

ト門口にて

戸浪　こちの人にこの樣子を

トこの間、內と外にて、一時に云うて、兩人門を明け、互ひに顏を見合せ

源藏　女房ども。其方は奥にと思うたが、どこへ行きやつた。

戸浪　アイ。わしはちつと用があつて、ついそこまで。こちの人、お前又、どこぞへ行かうと思うてか。

源藏　サア、どこというたら、當はなけれど、

戸浪　アノ、松の地代の、金才覺かえ。

源藏　サア、それも手詰め、こちらも大事。

戸浪　エ。

源藏　イヤ、女房ども。おりや其方に、ちつと云はねばならぬ事がある。

戸浪　わたしもお前に、ちつと云はねばならぬ事が、ござんすわいな。

源藏　そんならわがみも、

戸浪　お前も常から、何かに心を盡して居やしやんす。お前に相談したら、どのやうにでもなりさうな事、必らず聞いて、悔りして下さんすなえ。

源藏　ムウ。悔りすなら、しよまいが、おれもわがみに云うて相談せねばならぬ。譬への通り、三人寄れば文珠の智慧。おれも思案に能はぬ事、云うて聞かす程に、必らず驚きやんな。

戸浪　驚くなとは、どうやら氣遣ひ。

源藏　悔りすなとは、おれも心ならぬ。

戸浪　思ふ事、云はで心の止みぬべしとの歌もあれば、

源藏　互ひに云うたり、聞いたりするが談合。

戸浪　そんならわたしも。

源藏　おれも

ト兩人一時に、源藏は最前の首桶、戸浪は菅笠を持つて出て

戸浪　これ覺えて居やしやんすか。

ト見せる。源藏悸りして

源藏　さては長柄へ盜みに行た事を。

ト戸浪、源藏が胸倉を取る。

戸浪　コレイナア、如何に貧苦に迫ればとて、道ならぬ事。いつの間に其やうな、さもしい心にならしやんしたぞいなア。

源藏　若君樣に御不自由させますまいと、道ならぬ畑盜人。此やうに心を碎き、御介抱申す若君樣も、今日が手詰めとなつて。

ト首桶を見せる。

戸浪　あの若君樣を、匿まうた樣子が

源藏　最前、村の役人、我れを呼び寄せしは、時平が家來笠見藏人、今一人は紀の長谷雄。平の希世などが犬に入つて若君の御身の上、匿まふ由明白と、退引きならぬ手詰めの場所。

戸浪　エ、、すりや、時平が家來が若君の討手とは、さては、希世が最前來たのも、若君の實否を糺すのであつたか。

源藏　一寸遁がれに事を延ばさばと、若君の御首打つと、請合ひしこの首桶。

戸浪　そんならお前、若君樣を

源藏　なんの討たう。身替りとても心當りはなし。いつそ一か。八か。奧に居る希世めを打ち殺し、かねてお賴み申せし河内の伯母御の方へ、若君をば其方御供。

戸浪　サテ、そりや常々の覺悟、若君は御供いたしませうが、手詰めになつた私の地代に、長柄の百姓が追ッつけ來れば。

源藏　ハテ、毒食はゞ皿。土民めらを切り捨て、某も切腹。

戸浪　エ、、、。

ト悸り、源藏思ひ入れあつて

源藏　イヤサ、切腹すれば思案はいらぬが、若君の御先途を見屆けるこの源藏。氣遣ひしやんな、死ぬる事ではない。コリヤ、道に背くも若君が御大切。

戸浪　成る程、さうでござんす。氣が弱うては仕損ずる。鬼になつて

源藏　若君樣の御供せよ。

戸浪　成る程、何をするも若君樣のお爲。こちの人。

源藏　女房ども。

戸浪　必らずともに

源藏 破るは易し。
戸浪 ならう事なら、
源藏 事故なう納まるやう
戸浪 叶はぬ時は是非なけれど
源藏 兎角は辛抱。
戸浪 マア、それまでは若君を
源藏 奥にてお伽。
戸浪 アイ、もしもさうなつたら、これ今生の
源藏 ハテ、未練な。
戸浪 合點でござんす。
トきつと云ふ。
源藏 出かした。行け。
ト唄になり、兩人こなしあつて、戸浪、奥へ入る。ト源藏殘り、いろ〳〵あつて
もう夜半というても間はあるまい。地代の金といひ、昨夜の仕儀に長柄の扱ひ。源藏が忠義、天も納受あつて、お助け申す手段を授けてたべ。觀音でも、黄金佛でも、身替りに立つてたべ。
トいろ〳〵あつて思ひ切つて、表へ出ようとして、橋がゝりを見て

アレ〳〵。あの提灯、人影は、出口を固める長谷雄が家來。
ト内へ入り、奥を見て
奥には希世。外には數多。エヽ、口惜しや、籠中の鳥の、雲井を焦るゝ、身の上になつたか。
〽目釘を濕めして窺ひ居る、折から奥には冴え渡る、心耳を濟ます笛の音の。
トいろ〳〵こなしあつて、下に居る。トこれより奥にて笛の音、合ひ方入り。源藏笛の音を聞いて、思ひ入れあつて
あの笛の音は、若君樣。最前お好きの笛を御いうらんと申せしが、何にも御存じなく、御遊らんか。エヽ、忝ない。
〽喜ぶうちにも若君の、お身の上を案じ侘び、手をこまぬいて屈托顔、夜も早更けて子に移り、空吹く風は梢に殘り、落ち來る松葉春雨の、降りしきるかと疑はる、怪しや化したる女の形、松の小蔭に顯はれ出で。
トこの淨瑠璃にて、笛をかりて松の下の柴垣より、常磐木、萌黄繻子の着附け、同じく萌黄繻子の抱へ帶、但し金絲にて松の落葉の縫ひ、その形にて顯はれ出て、

そろ〳〵源藏が側へ來て

常磐　武部源藏どの。菅秀才のお身替りの、お役に立ちませう。

源藏　なんと。

ト常磐木を見る。

常磐　今宵こなたの手詰め、非情の身にも忍び難く、お身替りの一子を與へん爲

〽假に姿を見えしぞや。

源藏　ハテ、合點のゆかぬ。異なる女の顯はれ出で、お身替りの一子を與へんと云ふ、其方は何者。

常磐　イヽヤ、我れは誠は人間にあらず。丞相さまの御秘藏にあづかり、年月經し甲斐もなう、我が君は讒者の爲に、筑紫へさすらひ。お別れの名殘りを惜み、心なき草木なれど、これまでお後を追ひ、松の緑の若君、助けんと御夫婦のお心遣ひ、君御秘藏の庭木ゆゑ、其許御夫婦の、我れをいたはり大切の、御恩を報ぜん爲、假に姿を顯はしましてござんすわいなア。

源藏　ムウ、さては君の寵愛に、後を慕ひしこの松の精靈となア。如何にも、其方が切なる志しを感じて、源藏がお役に立てう。

〽叶へてやらうと源藏が、切つてかゝるを女もしれ者、支へ留むるその折節。

ト切りかけ、兩人立廻りのうち、夜半の鐘鳴る。橋がかりより太次兵衞、又右衞門出て、門口にて

又右　サア、源藏どの。約束の夜半ぢや。金受取らうか。

太次　サア、お内儀。長柄の百姓ぢや。拔ひ金受取らうか。

ト常磐木、源藏　構はず立廻りにて、最前の谷にて受けとめる。ト内より小判バラ〳〵と出る。

又太　ヤア、こりや金。

又右　地代の三十兩。

太次　畑の拔ひ二十兩。

又太　慥かに受取つた。ヤレ〳〵、嬉しや〳〵。

ト兩人しか〳〵あつて、橋がゝりへ入る。

常磐　思ひがけもない金の出所。

源藏　何にもせよ、其方を。

〽又切りつくるを身をかはし、拔けつくゞりつ、上段下段、武部が鋭き太刀先に、さしもの女もあしらひかね、逃げ行く松の木の下に、すつくと立ちし幼な子に、はやり切つたる源藏も、呆れて暫し詞なし。

ト立廻り段々ある。よき處にて、常磐木、子役を連れて出て

常磐　菅秀才さまのお身替り、お役に立てゝ下さんせ。

〽云ひつゝ姿は失せにけり。

源藏　この悴は。すりや、誠の松の精靈か。

ト子役を見て

年恰好も若君に其まゝ。エヽ忝ない。

ト喜ぶ。奥より長谷雄、つか／＼と出て、源藏を突退け、子役の首をポンと切る。

ヤア、それは。

長谷　身替りの根を絶ちたれば、誠の菅秀才が首受取らう。

源藏　エヽ、其方を。

ト切りかける所へ、藏人、侍ひ連れて出る。

藏人　サア、源藏。菅秀才の首受取らう。

ト奥バタ／＼にて、希世、戸浪、菅秀才を追ひ出る。

戸浪　コレ、こちの人。希世が若君樣を。

源藏　もうこの上は、遁がれぬ。コリヤ、若君を早う。

戸浪　心得ました。

ト菅秀才を連れ、中二階へ逃げて上がる。長谷雄追ひかけ上がる。源藏「それを」と行かうとするを、希世支へる。源藏立廻りにて、希世を當て、長谷雄の方へ行くを、藏人支へるうち、長谷雄、中二階にて菅秀才が首討つ。戸浪を當て、下へ下りて

長谷　誠の菅秀才が首、藏人、時平公へ早く。

藏人　ハッ、左やう仕らう。家來、參れ。

ト首桶を持ち、藏人橋がゝりへ入る。戸浪、起き上がる。

源藏　若君を手に掛けた長谷雄、源藏が死物狂ひ。女房。

戸浪　合點でござんす。

ト兩人、長谷雄へ切りかける。少し立廻りのうち、勝野走り出で

勝野　源藏さま御夫婦。道にて聞いた、若君の事。

戸浪　勝野さま。遲かつた。若君樣を長谷雄が手にかけたわいなア。

勝野　エ、、、、。

源藏　若君の仇。うぬ。

ト皆々立ちかゝり、いろ／＼ある。長谷雄、大小を投げ出して

長谷　コリヤ、手向ひせぬ。必らず早まるな。

源藏　なんと。

ト詰めかける。奥より菅秀才出て

菅秀　皆早まりやんな。これに居るわいの。

勝野　ヤヽ、若君様。

源藏　すりや、御安泰か。さては

長谷　二度くはした身替りの首。

戸浪　エヽ。

ト皆々驚く。長谷雄こなしあつて、どつかと眞中へ坐り

長谷　流れゆく我れは水屑となりぬとも、君柵となりて止めよ。……女房、忰はお役に立つた。これへ參れ。

常磐　すりや、我が子はお役に立ちましたかえ。

ト垣の間より出る。

源藏　ハア、こなたは今の松の精靈。

長谷　如何にも姿を變へさせ、裏道より、女房、忰を入込ませ、松の精と僞はりしも、源藏の手詰めの場所、難儀を救ふ、手段でござつたわいなう。

源藏　ハテ、心得ぬ。さほど仁心の其許が。

長谷　筆法をわざと書き誤まりしも、時平が家來、藏人、希世を欺かん爲。

皆々　して又、その仔細は。

長谷　法皇よりの院使。

皆々　エヽ。

長谷　菅原の道眞は、我れも親しき朋友。分けて法皇のお覺えめでたく、當今の師範と定め給ひ、從三位より大納言、右大臣まで昇進あり、果報いみじき道眞公。菅丞相と人尊敬。誠に高木は風に破らるゝと、讒者の計らひ、罪なき丞相、謀叛の汚名、官を引ッ剝ぎ、筑紫へさすらひ。その折から、法皇へ悲しみの歌を連ね給ひしその歌に、「流れゆく我れは水屑となりぬとも、君柵となりて止めよ」と出で行き給ふ、御詠歌を、法皇御叡覽ましますと、夜中ながらも御車にて、美福門まで御幸ありしところ、はや門を打つて出入を禁ずる。法皇にも、東雲まで築地の外に御落涙にて明かし給ふ。その後は我れを召されて、何卒菅丞相歸洛の奏聞遂げ、菅原の家を引起しくれよと、法皇の院宣。當今には、讒者の讒、舌を振へば、中々歸洛の奏聞は叶はず。心を碎いて、わざと惡人の中に交り、菅秀才の檢使を乞ひ請け、これへ引ッ越す某が心底は、我が子を身替りにして、菅秀才を助けん爲。表は惡に、内心は、法皇へ紀の長谷雄が眞忠義。

悴なくば、これ程の、君に忠義は立てられまじきに、持つべきものは子でござるわいなう。

ト此うち常磐木、始終泣いて居て

常磐　申し、我が夫、草葉の蔭にて花若が、聞いて嬉しう思ひませう。持つべきものは子なりとは、あの子の爲にはよい手向け。昨日、館を出る時に、申し、母樣、父上諸とも難波へ行くは、名所御覽か、歌枕かと、尋ねた事を思ひ出せば、可哀や、冥途の旅の歌枕、子を殺しに連れて來る、わたしが心、推量して下さりませ。せめて、死顏なりと今一度、見たいわいな〳〵。

ト泣く。

戸浪　オヽ、お道理でござります。御尤もぢや。他人のわたしさへ、お心を察して悲しいもの、まして親御のお身では、さぞやさぞ。

長谷　イヤ、コレ、內室。コリヤ、女房ども。なんで吠える。覺悟して切つた身替り。館で存分吠えたぢやないか。源藏夫婦の手前もある。

常磐　アイ〳〵。

ト泣いじやくりする。

長谷　とは云ふものゝ、無得心に、たつた一打ち。

常磐　アノ、逃げも隱れもせず。

長谷　首さし延べて。

常磐　エヽ、可愛や〳〵。

〽可愛の者やとばかりにて、正體もなく嘆き伏す、女房の嘆きに源藏も、二人の心察しやり。

源藏　ハヽツ。天晴れの長谷雄公の御賢慮。御幼稚なから健氣の御最期。八つや九つで親の仰せを背かぬとは、廿四孝の郭巨にも、まさりたる御孝行。併しながら、合點の參らぬは、最前の畚より出でたる、五十兩の金は。

戸浪　こちの人。最前の金とはえ。

源藏　サア、松の地代、長柄の百姓に渡した金。合點のゆかぬ、この畚より

ト畚を出し、打明ける。內より財布出る。勝野取上げ

勝野　こりや、コレ、覺えあるわたしが財布。昨夜長柄の堤にて、狼藉者に出合ひ、取られた路用の五十兩。

戸浪　そんならそれが、廻り廻つてお役に立つたか。こちの人。

源藏　ハテ、思はず手に入る勝野さまの路用金。ハテナア。

勝野　盜賊に取られた金が、お役に立つたわたしが喜び。

源藏　皆、若君のお爲。それよりは長谷雄公の御心底、承つて安堵仕つた。
菅秀　覺悟極めた我が最期、疾にもそれと知るならば、親々達に嘆きはかけまいものを。いとしやなう。
ト泣く。
長谷　ハテ、しほらしい菅秀才。其お詞が伜の爲の經陀羅尼。ナニ、源藏どの。某が賜物、菅原の家を引起す一品。
ト印を出す。
源藏　ヤア、こりや太政官の御正印。すりや、いつぞや廣小路にて。
長谷　時平が家來、奪ひ取りしを某が、手に入つたる御正印。
源藏　その時、拙者も居り合はし、最前の片袖。今こそ繼手を離し、源藏が、この三蓋松の定紋に、御免を受けるはいつまでも、御恩を忘れぬ卽ち證據。
常磐　この上は我が子の亡骸
〽しほ／＼立つて女房が、抱き上げたる我が子の死骸。
長谷　それ／＼。野邊の送りを營まん。
源藏　野邊の送りに親の身で、子を送る法はなし。我れ我れ夫婦が代り申さん。
長谷　イヤ／＼、これは我が子にあらず。アレ、あの松の精靈なれば、卽ち堀川松福寺へ送らん。
源藏　ハアツ、松の奇瑞と奥方の操。最前の詞といひ、この所を老松町と名づけ、君御歸洛の後は、お願ひ申し、拜借して軒を並べて、繁榮の地となさん。
長谷　ホ、ウ、それまでは我れは、矢張り讒者の徒黨に交り、時平の大臣を計るが肝要。
ト希世出て
希世　樣子は聞いた。この通り時平公へ注進する。
ト駈け出す。源藏引廻す。長谷雄、拔き打ちに切る。
皆々　これは。
長谷　伜が追善。
皆々　讒者の一味。
源藏　お役目御苦勞。
長谷　いづれも、さらば。
〽早お暇と立出づる、君も歸洛を松が枝に、我れは小松を切り捨てゝ、忠義を立つるも松の名の、末世にそれと生ひ茂る、老松町と名のみして、伴ひてこそ出でゝ行く。

トよろしくありて

幕

六つ目　河内宿禰太郎館の場

役名——宿禰太郎。土師の兵衛。母覺壽。松月尼。齊世の君。女房小櫻。紅梅姬。蘭の貞政。腰元、皐月。同、彌生。同、如月。小姓、求馬。奴、早助。奴、宅内。

造り物、一面の二重舞臺。西の方に、高うして神前の心、七五三繩引き廻しあり。前は池、蛇籠。臆病口の方、鷄の鳥屋、橋がゝりに柴折門。よき所に手水鉢あり。幕の内より奴、早助、宅内、掃除して居る。小姓求馬、、腰元如月、彌生、塗り盆に挽き飯を干して居る。この見得、白囃子にて幕明く。

早助　なんと宅内。今日は後室樣、お連合ひの殿樣の御命日とやらいうて、お二人の娘御を連れて、お寺參り、追ッつけお下向であらう。

宅内　オヽ、サ、命日とやらで寺參り。昨日までは流し者のお客人で、屋敷はもてかへす。イヤモウ、泣く程留めたいお客でも、去ねば嬉しいとやらで、菅丞相さま御流罪、潮待ちの間御逗留。イヤモウ、やう〳〵昨日、お立ちの節、後室覺壽さまや娘御達のお嘆きなれど、おいらは使はれるが嫌さに、早う去なしたく思うたてや。

早助　オヽ、さうだ。流人の逗留に、イヤモウ、ほつとして草臥れた。

求馬　コレ〳〵、宅内。早助。大切なお客人のお噂、後室樣のお聞きなされたら、お叱りであらうぞや。

宅内　イヤモウ、菅丞相さまの儀、惡う申すのではござりませぬ。

早助　昨日お立ちあつて、助かつたと申すのでござります。

彌生　アレ、まだいの。菅丞相さまは、後室樣の御大切な甥御樣。今度島へござるゆゑ、潮待ちの間にお暇乞ひの御逗留。それを蔭で誹りやつたら、小櫻さまや松月さまに告げるぞや。

宅内　滅相な。それを仰しやつて堪るものでござりますか。

早助　それはさうと、お前方は、毎日〳〵、米を干して挽

いては、其やうに干すとは、何にマアなる事でござりますな。
如月　サア、これは挽き飯というて、後室樣の云ひ附け。挽き飯を白湯に掻き立て、あがるのぢやわいなう。
宅内　エヽ、はつたいの格でござりますな。
求馬　イヤ〱、はつたいは麥なれど、こりや米で製法したものぢやわいの。
早助　ハテ、むづかしいものでござりますな。
如月　わしらもちやつと、この挽き飯を方附けて置かうわいの。
彌生　それ〱。ちやつと方附けたがよからう。
求馬　お下向に間もあるまい。二人の衆も次へ立ちや。
宅早　ネイ。
求馬　サア、こちらも奥へ行かうわいの。
ト唄になり、早助、宅内は橋がゝりへ、腰元三人は挽き飯を持ちて奥へ入る。ト橋がゝりより紅梅姫、振り袖、さゝげ附き、着流しにて出る。
紅梅　憖かに此お館が實の母樣覺壽さま。アヽ、どうぞお目にかゝつて、自らが身の上の事を、お頼み申し、共々に宮樣の……イヤ〱、この身の越度。常から物堅い母樣、御機嫌の程も量られず。母樣のお目にかゝらぬうちに、姉樣小櫻さまや、松月さまに逢うて、この身の上の事をお頼み申さうか。アヽ、どうしたらよからうぞ。
トいろ〱思案のうち、向うより
内に　後室樣のお下向。
ト紅梅姫向うを見て、柴垣の後へ隱れようとして思ひ入れありて
紅梅　母樣のお下向とは、さてはいづれへぞ御參詣なされしか。幸ひお歸りを待つて。さうぢや。
ト唄になり、こなしあつて、柴垣の蔭へ忍ぶ。ト向うより徒歩侍ひ、乘り物に附き、小姓、杖をかたげ、後より小櫻、衣裳、裲襠にて、提げ手桶に櫻の折枝を入れ、松月尼、尼の形にて、これも提げ手桶に松の枝を入れ、めい〱に持ち、その外、家來大勢附いて出る。皆々本舞臺へ來る。先備への侍ひ、紅梅姫を見附け
侍ひ　何奴ぢや〱。
小姓　コレ〱、侍ひ衆。何事ぢやぞいなう。
侍ひ　イヤ、この柴垣に何者やら忍んで居ります。
小姓　そんならキッと、吟味さつしやれ〱。
侍ひ　何者ぢや。これへ、出居らう〱〱。

ト口々に云ふ。

紅梅　イヤ／＼、大事ない者ぢや。騒がしう云ふな。

櫻松　ヤア、お前は紅梅さま。

紅梅　松月さま。小櫻さま。お二人とも、御無事にござりましたか。

小櫻　ほんに、マア／＼、思ひがけもない紅梅さま。

松月　いつ都よりお越しなされしぞ。そして供廻りも見えず。何ゆゑ垣根に忍んでござるぞいなア。

紅梅　サア、自らが身の上は

ト言ひ兼ねるこなしあつて

イヤ、申し、お二人様。この乘り物は母様ではござりませぬか。

小櫻　成る程、母様。この様子を母様へ。

ト乘り物の側へ行き

覺壽　オヽ、聞いた／＼。

ト云ひ／＼覺壽、着付け、裲襠にて乘り物より出る。小姓、杖を出す。

紅梅　ヤア、母様。お懐かしうござりますわいなア。

ト取りつく。覺壽こなしあり。

覺壽　母様とは誰が事。茲な不孝者めが。

ト振り退け、杖を振り上げる。

兩人　アヽ、コレ。

ト紅梅娘を圍うて

松月　申し、母様。こりや何ゆゑ、紅梅を御打擲。

小櫻　どういふ譯でお腹立ち。折角都から、はる／＼見えて、まだしみ／＼とお詞さへお交しなされぬその先、打ち叩きなさるゝは、マア、何事でござります。

松月　殊に、常々のお詞、人に遣れば我が子でないと仰しやらぬか。それに、お腹立ちは、母様とも覺えませぬ。菅丞相さまの御秘藏娘

小櫻　紅梅さまを打ち打擲。この杖を當てゝよいものでござりますかいなア。

覺壽　イヤ、小櫻。松月。おりや人の娘は打たぬ。養子に遣つた丞相さまは、自らが爲には甥の殿、子に遣つた紅梅娘は甥孫。親も許さぬ徒らして、大事の／＼甥の殿は流され給ふ。その罪は皆あの紅梅ゆゑ。それを思へば、憎うて／＼、この杖が折れる程叩かねば、丞相さまへ云ひ譯がないわいなう。

紅梅　申し、母様、御尤もでござります。父上のさすらひも、自らゆゑと世の風説、聞くに忍びず。ほんに、身も

世もあられうか。この身の戀に後先の辨へもなく、國はれしが恐ろしさ、宮樣もろとも都を立退き、誠の母樣、⊕あなたを便りに、はる〴〵と河内の國を志し、尋ねて來る道すがら、宮樣にははぐれ、悲しいやら、怖いやら。方々とさまようて、賤の軒端や野もせの蔭に、泣き明かし、やう〳〵爰へ參りましたも、人の噂に父上樣も、潮待ちとやらで御滯留。母樣にお目にかゝつて、お詫びを願ひ、この身は捨てる兼ねての覺悟。さりながら、道ではぐれし宮樣に、輪廻が引かされ、未練が起りました。生みの情に母樣の、お手にかゝつて死ぬれば本望。どうぞお慈悲に殺してたべ。申し、お二人の姉樣。共々、母樣へ、お願ひなされて下されませいなア。

ト取りつき、泣く。

松月　オヽ、いとしや紅梅さま。自らも都の噂、聞く度々に案じて居ました。母御に逢うて身を捨てるとは、お心根が思ひやられて、ナア、小櫻さま。

小櫻　左樣でござります。この嘆きが、せめて昨日ならば、丞相さまにお逢はせ申し、共にお詫びをせんものを、思へば殘り多い紅梅さま。

紅梅　エヽ、そんなら、父上、丞相さまは。

兩人　昨日お立ちなされたわいなア。

紅梅　すりやモウお目にかゝる事は叶はぬか。ハア、ヽ。

ト泣く。

小櫻　オヽ、お道理でござります。悲しい筈、心を盡して折角爰まで見えたもの。

松月　いとしや、徒歩や跣足で、習はぬ旅路。裾は血潮に、袖は淚のこの姿。

紅梅　都を出でゝ日數は積れど

小櫻　お髮もみだけてあるからは、したゝめとても

松月　ナンノイナア、晝はひねもす、夜もすから

紅梅　泣いてばかり。

ト顏を上げる。松月尼、小櫻こなし。

兩人　申し、母樣。お聞きなされましたか。

ト泣く。覺壽こなし。

覺壽　檜山の火、刃の鋒。その身より出でゝその身の苦痛。

ト紅梅姫の姿を見て

菅原の御先祖は、垂仁天皇、天の穗日の尊の御宇、野見の宿禰、當麻蹶速と力を合せ、結び勝つ。こは角力の始まりとかや。又、帝崩御の時、近臣、官女、殉死となぞ

らへ、御墓に埋む。これを憂へて埴輪を以て人形を拵らへ、これに換ふる。土の司を取つて「はじ」と稱ふ。神策の長刀とこの河内一國を賜はり、御先祖連公より連れ合ひ郡領まで、連綿として由緒正しき菅原一家。
ト松月尼、小櫻、紅梅姫を前へ並べ、提げ手桶に梅の折り枝入りしを、紅梅姫が前に置き、これにて松、梅、櫻の手桶を、三人の女の前に並べ
小櫻。
小櫻　エ。
覺壽　松月。
松月　アイ。
覺壽　紅梅。
紅梅　エヽ。
覺壽　夫郡領世に在りし時、白鷄千羽飼へば、その家より高位になるべき娘出生するとの世の諺。子を思ふ親の心は、闇にはあらねど、アレ、あの如く、白き鷄を飼ひ育てゝ、程なう自らが懷姙し月も重なり、產み落せしは、世にも稀れな三つ子の娘。成人に隨ひ、姉小櫻に宿禰太郎といふ聟を取り、土司の家を相續させ、妹の松が枝は、いつぞやより心願の事あつて緣組みを嫌ひ、尼となり、松月尼、乙の紅梅は即ち道眞どのへ養子。都の住居と鄙の育ちも、子の可愛さに、いづれ分け隔てがあらうか。なければこそこの紅梅、松、櫻を佛の前へ供へ、三人の娘の無事、分けて紅梅が身の上の事のみ、亡き夫に願はん爲の三つの枝。產屋の內より、ほんに荒い風にも當てず、お乳やめのとが宿直して、育て上げし身を、その淺ましい姿にてさまよふとは、思へば〳〵、涙がこぼれて、憎うて〳〵、ならぬわいなう。
松月　御尤もでござりますが、申し、母樣。わたしら姉妹がお願ひ、どうぞ紅梅さまを
小櫻　お前の居間に叶はずば、わたしが部屋になりと、
覺壽　イヽヤ、ならぬわいの。不孝者め、館に叶はぬ。詞は交さぬ。顏も見とむない。この上は、どうならうと構やせぬ。死んで云ひ譯が立つならば、死んで見せい。コリヤ、丞相さまは其方ゆゑ筑紫へさすらひ、昨日大物の浦へござつたぞよ。
紅梅　サア、それぢやに依つて
覺壽　身を捨てゝ、養父へ孝が立つか。淺ましい最期をせば、菅丞相と人もかしづく日本の聖人、その息女の紅梅が死樣と、父御の名まで下して、不孝に不孝重ぬる

か。
紅梅　そんなら、どうぞ、母様のお情に
覺壽　イヤ、知らぬ。詞も交さぬ。
兩人　すりや、あの子は不孝の罪で
覺壽　子で子にあらぬ時鳥。谷の戸出づる鶯と、梅に育て、啼く聲は、月と日星の三光たる、右大臣家へ立てる義理。詞交さぬ。そこ立つて行け。
紅梅　エヽヽ。
兩人　申し、母様。せめては館の内へ
覺壽　イヽヤ、ならぬ。小櫻。松月。不孝者めに構はずと、二人とも、マア、おぢや。
ト唄になり、皆々を連れて内へ入る。紅梅姫「コレ申し」と寄る。松月尼、小櫻「どうぞ」といふこなし。覺壽隔て、柴折門をピッシヤリ閉め、二人が手を引き、皆々紅梅姫が方へ見返りながら、こなしあつて奥へ入る。ト紅梅姫、門の外にこなしあり。
紅梅　母様のお詞、皆御尤も。宮様にはお別れ申し、どうぞ父上のお目にかゝり、お詫び申さんと、お尋ね申した甲斐もなう、父上は最早お越し遊ばす。どうで生き存らへぬこの身。今際に父上様のお顔が拜みたい、逢ひたいわいなア。
ト泣く。始終合ひ方。
ト奥より小櫻、彌生、皐月、小湯つぎ、塗盥を持たせ出て、二人に囁く。奥へ入らす。
小櫻　紅梅さま。矢ッ張りそこに居やしやんすか。
紅梅　さう仰しやるは姉様、小櫻さま。
小櫻　アヽ、コレ。
ト戸を開き、盥に湯をさし
せめて湯なと遣はさうと思うて。サア、ちやつと。
ト盥を側へ持ち行く。
紅梅　ほんに、血筋なればこそ、勿體ない姉様のお心ざし。
小櫻　ナンノイナア。姉妹ぢやもの。物堅い母様、お腹立ちは御尤も。間を見合はして松月さまと共に詫び言して、内へ入れますわいなア。これにつけても夫、宿禰太郎さまは、折悪い、いつぞやよりの病氣。
紅梅　エヽ、そんなら、宿禰太郎さまは、御病氣でござりますかえ。
小櫻　サア、いつぞやより健忘とやらで、今の事は後に忘れ、今日の事は明日覺えぬ、子供同然の御病氣でござん

すわいなア。
ト此うち松月尼、小袖を持ち出で、奥を見い〳〵、門の側へ來て
松月　申し、紅梅さま〳〵。
ト小櫻に行き當り、顔見合せ恟り。
小櫻　エヽ、松月さま。
松月　小櫻さま。
小櫻　そんならお前も。
松月　サア、なんぼう母樣が最前のやうに仰しやつても、いとしや紅梅さまに着換への小袖を、
小櫻　わたしもこの湯を。
松月　そんならお互ひに。
小櫻　母樣のお叱り受けても
松月　大事ござんせぬ。ソツと內へ入れまして置きませうわいなア。
紅梅　それ程までに自らが事を、御不便に思うて下さります姉樣方のお心ざし。エヽ。
ト拜まうとする。兩人ちやつと
兩人　コレ、申し、奥へ聞えては悪い。密かに〳〵。
ト話しの所へ、覺壽、佛の膳高盛りを持つて出て、門を開ける。皆々顔見合せ、恟りして
覺壽　ヤア、小櫻。松月。そこに何して居やる。
小櫻　エヽ、わたしは、アノ。それ〳〵。父上の御命日、それでナア、松月さま。
松月　アイ〳〵。月を拜してお看經申して居りまする。見れば、母樣、あなたにも佛器を持つて、これへ何しにお出でなされましたえ。
覺壽　サア、これはなう。今日は連合ひ郡領さまの命日。佛に供へたこの靈供を、せめては無緣法界の人になりとも、戴かして、暫しの飢ゑを助けうと思うて。
ト靈供を差出す。紅梅姬つか〳〵行て、靈供に手をかけ、戴く。皆々顔見合せ、チツと泣く。
兩人　エヽ、そんなら。
ト向うより
內で　勅使。
ト皆々こなし。
兩人　ハテ、思ひがけない、お勅使とは。
覺壽　菅丞相には昨日お立ち。暇乞ひの滯留は、潮待ちの間、輝國どのゝ情。それに禁廷より勅使下るは。……
丞相どのゝ謀叛の汚名は、齊世の君と紅梅姬が不義。

その紅梅は自らが生みの娘。すりや、血筋の由縁で詮議の爲か。

ト向うを見る。紅梅姫、懐劍を出し

紅梅　母樣。姉樣。おさらば。

ト死なうとする。小櫻、松月尼留めて

兩人　コレ、待つて下さんせ。

紅梅　イヽヤ、放して下さんせ。思ひ廻せば廻す程

ト死なうとするを

覺壽　コリヤ、待て。

紅梅　それでも。

覺壽　ハテ、待ち居らぬか。……イヤ、小櫻。松月。アレ、梅に鶯、巣をくうて燈火の影に驚き、時も來ぬに音を出だし、我れと名乘るうつけ鳥。まだ勅使の趣きも知れぬに、……冥途の鳥はまだ早い。それより、鳶や烏に取られぬうち、早う飛び去れ。逃げてくれいやい。

ト此うち小櫻、松月尼、懐劍を取つて

松月　申し、母樣。そんなら、この紅梅、イヤ、小鳥を、わたしらに暫しが間。ナア、小櫻さま。

小櫻　それ〱。まだ雛鳥の片翼。爰を飛ばしては、命の程も心元ない。思へば、殺生な事でもあり。どうぞ、申し。

覺壽　ハテ、二人の頼みなら、どうなりと。今日は即ち佛の日。生けるを放つ慈悲心も、松月尼、小櫻もろとも、御經を、とつくりと讀んで、放してやりや。

兩人　エヽ、すりや、館へ入れても

覺壽　サア、小鳥でも目立つてはならぬ。奥の庭籠、小櫛の内。

兩人　エヽ、忝なうござんす。

紅梅　でも、自らは

覺壽　小鳥に構ひはない。二人とも早う。腰元ども、ソレ、お勅使を早うお出迎ひ申せ。

ト内より皐月、如月、彌生。

三人　ハア、

ト唄になり、松月尼、小櫻こなしあつて紅梅姫を連れ、奥へ入る。ト奥より三人腰元出て出迎ふ。ト門の希政、冠、装束にて出る。後より土師の兵衛、着附け、上下にて、家來、仕丁、皆々本舞臺へ來る。覺壽も出迎へて

覺壽　お勅使樣には、遠路のお下向、御苦勞に存じます。

希政　勅使なれば罷り通る。

トずつと通る。兵衞も通る。

覺壽　これは〳〵、あひやけ兵衞どのにも、定めてお勅使お出迎ひでござりませう。御苦勞に存じます。

兵衞　成る程、お勅使御下向と先觸れがござつたゆゑ、お出迎ひ、誘引仕つたが。ナニ、後室、この間は流人菅丞相の御滯留。何かとお取込みでござらう。拙者もお手傳ひに參らうと存じても、年寄りは却つて邪魔と差控へましたが、承れば丞相には、昨日お立ちとやら。

覺壽　成る程、仰せの通り、丞相どのには、昨日お見送り申しました。イヤ、これは內證。先づはお勅使樣、憚りながら勅使の趣き、仰せ聞かされ下されませうならば、有り難う存じます。

希世　勅使の趣き、餘の儀にあらず。この度菅丞相左遷の上は、左大臣時平公、外戚に立たせ給ひ、即ち太政大臣に任官ある。殊に、內覽を許され給へば、四海の事は時平公のお心の儘。御政道を改め給はんと、延喜式を撰ばれ、公卿、殿上、平官、地下に至るまで、寶を改め、右の書に加へられんとの勅諚、承つたる蘭の中將希政。この土師の家にも、先祖宿禰角力の砌り、恩賞にあづかりし家の重寶、內見せん爲、はる〴〵と罷り越した。

覺壽　ハツ。勅使のお下向、如何と案じ居りましたが、さては時平公の思し召し立ちにて、延喜式を御調作とは、天晴れの御賢慮。成る程、この土師の家にも、先祖より傳はる御綸旨、まつた神策の長刀、取傳へたる家の重寶。幸ひ今日夫の忌日、佛前に飾りあれば、聟、宿禰太郎に申しつけ、御內覽に供へ奉りませう。

兵衞　イヤ〳〵、後室。忰太郎は健忘にて、物忘れするうつけ病。それに大切な役目を云ひつけるとは。

覺壽　ハテ、健忘であらうが、うつけであらうか、自らは女の事。河內一國を取計らふは聟が役。宿禰太郎に申しつけねば、表が立ちませぬ。

兵衞　そりや尤もでもござらうが、して、太郎はいづれに居ります。

覺壽　聟は、今日、他出仕つた。

兵衞　ヤア、わらんべ同然の病ひ者を。

ト內より

小櫻　イヤ、そりや苦しうござりませぬ。

ト出る。

兵衞　嫁小櫻。何事も皆目覺えぬ健忘病み。他出したとあ

れば、心元ない。大方、歸りには、どてもない所へ行くであらう。

小櫻　イヤ、それはお氣遣ひ下さりますな。唐土の管仲とやらは、雪の道にて方角を失ひしも、飼ひ馴れし德、馬に導かれて、追ッつけ歸られませう。ナア、母樣。

覺壽　それ〳〵。太郎が乘換へは名馬なれば、追ッつけ彥どのを乘せて戻りませう。兵衞どの、お案じ下されますな。

兵衞　ハテ、後室や嫁女の才覺。むづかしい馬の講釋、承つて、兵衞も一つの德を得ました。ハヽヽヽヽ。

ト此うち向うより宿禰太郎、着附け上下にて馬に乘り、出て來る。馬、內へ入る。小櫻見て

小櫻　ヤア、太郎さま。只今お歸りなされたか。

ト宿禰太郎あたりを見て

太郎　申し、女中樣。爰はどなたのお屋敷でござりまする。

小櫻　これはしたり。あなたのお屋敷でござりまする。

ト馬より下ろす。馬は橋がゝりへ入る。

コレ、申し、あれに母も、お前の親御兵衞どのも、ござるわいなア。殊に、お勅使樣の御前。ちやつと御挨拶を。

トいろ〳〵心遣ひある。宿禰太郎こなしあつて、そこらあたりをウロ〳〵見廻し、小櫻が顏をヂッと見て

太郎　ハテ、思ひがけもない。見馴れぬ女中、馴れ〳〵しう云はつしやるは。マア、こなたはどなたでござります。

ト小櫻こなしあつて

小櫻　ハテ、お前に連れ添ふ、女房小櫻でござりますわいなア。

太郎　なんぢや、小櫻。アヽ、小櫻といふ名は、どうやら聞いたやうな名ぢやが。

ト懷より手帳を出し見て

ムウ、小櫻はおれが女房とある。オヽ、それ〳〵。さてはわがみは、おれが女房ぢやの。

小櫻　ハテ、知れた事ばつかりを仰しやるわいなア。

兵衞　忰太郎、歸つたか。

太郎　コレ〳〵、あの親仁樣は誰れやらぢやの。

兵衞　ハテ、現在其方が親の兵衞ぢやわい。

太郎　ナニ、兵衞とは。

トまた手帳を出し見て

オヽ、兵衞とはおれが親仁樣に違ひはないぞ。そんなら、

あれにござるは。

小櫻　母樣、覺壽さま。

太郎　オツと、覺壽さまとは母樣と書いてある。

小櫻　そんなら、ちやつと御挨拶。

太郎　申し、母樣。親仁樣。ア、私しは、どこへ參りまして、いま歸りました。

覺壽　ハテ、聟どのとした事が、小櫻が勸めて、その病の願籠めに、譽田の八幡樣へ參詣。

ト此うち太郎、帳を控へ居て

太郎　ほんに、私し、病の願籠めに、參詣とござります。

小櫻　ほんに、病とは云ひながら、しどけない夫の有樣。申し、母樣。こりやマア、どうぞ仕樣はござりませぬかいなア。

覺壽　醫療手を盡せども、本腹のないといふは

兵衛　ハテ、物怪なものでござるなう。

兼政　覺壽。して、寶の內見は。

覺壽　聟太郎立歸りし上は、身を淸めて御上覽に供へませうず間、暫しのうち休息の次手に御容赦を。

兼政　如何にも、船路の疲れ。願ひに依つて、暫らく休息いたしくれうが、その間に覺壽、其方が取計らうて內見させい。

覺壽　ハツ、委細畏まりました。お勅使の御饗應は、小櫻、申しつけてよからう。兵衛どのにも、マア奧へ。

兵衛　イヤ、拙者は老人の事。自由ながら、暫らくこれにて疲れを晴らしたう存ずる。

覺壽　そりや如何やうとも、御勝手次第に遊ばせ。サア、聟どの。

太郎　ハイ／＼。お暇申しませうかな。

小櫻　何を仰しやるやら。サア、奧へ。

覺壽　サア、お勅使樣には

皆々　先づ、お入りあられませう。

ト唄になり、皆々こなしあつて、奧へ入る。後に兵衛、小櫻殘り、こなしあつて

小櫻　申し、舅御樣。お疲れならば、わたしが部屋へ。また寒ながら、餘寒も烈しい。腰元どもに申しつけ、せめては火鉢で膚を溫め、酒をお一つ。

兵衛　それは心の附いた孝行な嫁女。日頃からの志し過分な。兵衛が老の入りまい、仕合せと喜ぶに、喜ばれぬ伜が病氣。ありやマア、何としたものであらうぞいなう。

小櫻　サア、わたしも連れ添ふ夫の事。ほんに、祈らぬ神

も倅も、ござりませぬわいなア。
兵衛　さうであらう。親の思ひは又百倍。推量して下され
い。イヤナニ、嫁女、それに附きこの兵衛が、一生の頼
みがある。なんと、聞き届けておくりやるか。
小櫻　ハテ、何なりと背きますまい。
兵衛　とても事に、誓言が。
小櫻　わたしが母様覺壽さまを、奈落へ落す法もあれ。
兵衛　オヽ、祝着々々。嫁女。其方に頼むといふは、外の
事でもない。この土師の家に傳はる、河内一國宛て行ふ
御綸旨、まつた神策の長刀が、密かに盗んで欲しい。
小櫻　エヽ、。
兵衛　オヽ、驚きは尤も。彼の二種を盗み出すは、さらさ
ら身の慾ではない、皆倅が爲。その仔細は倅があの病。
この間より試し見るに、健忘といふは即ち業病。もし何
その障礙ではあるまいかと思ふは、親の迷ひかは知らね
ども、天子の宸筆の綸旨、名代の金氣、神策の長刀を密
かに戴かし、試し見て、物の化ならば、即座に立退け、
病本腹さすれば、身共が大慶。其方の喜び。この譯を後
室に云うてからが、物堅い覺壽どの、アッと云うて大切
な家の重寶、迂濶に貸しはさつしやるまい。最前聞け
ば、郡領どのゝ今日は忌日。佛間に飾りあるとやら、願
うてもない幸ひ、どうぞ密かに倅に戴かすやうの才覺は
ないか。コレ、嫁女、兵衛がお頼み申す。
小櫻　成る程。仰しやる通り、物堅い母様、なんぼう太郎
さまの爲ぢやと云うても、迂濶にお貸しはなさるまい。
兵衛　おやに從つて、密かに其方を頼むのサ。
小櫻　でも、母様のお目を掠め、盗み出すとは。
兵衛　サア、さう云へば仰山な。ついちよつと倅に戴かす
ばかり。病が直つたら又元へ戻して置く分の事。夫を思
ふ貞女は、七尺の屏風も越ゆるとやら、云ふではない
か。コレ、嫁女、兵衛が頼み、夫の爲ぢや。倅の病を癒
すのぢやわいなう。
小櫻　其やうに事を分けて仰しやる事なれば。
兵衛　コレ、皆倅が爲、病の癒る事、其方の爲にも現在夫
の事。
小櫻　成る程。盗み出しませう。
兵衛　すりや、得心して。
小櫻　夫の病氣本腹すれば、例へこの身は、どうなつても
いとひはない。
兵衛　オヽ、さうとも〳〵。それが貞女、賢女といふもの。

小櫻　サア、盜み出してお渡し申しませうが、彼の長刀は佛間に飾り、また御綸旨は畏れ多いとあつて、奥庭の寶藏に。
兵衞　して、その鍵は。
小櫻　夫の預かり、わたしが居間。
兵衞　身共は綸旨を。
小櫻　必らず、夫の病氣本腹せば
兵衞　ハテ、返すと云ふに相違はないわい。
小櫻　そんなら舅御樣。
兵衞　嫁女。
小櫻　密かに。
兵衞　ござれ。
ト唄になり兵衞、小櫻は奥へ入る。ト暮れ六ツの半鐘鳴る。ト腰元三人、求馬、燭臺を持つて出る。ト松月尼、菓子盆に挽き飯を入れ、持つて出る。ト紅梅姫も附いて出る。
紅梅　申し、姉樣。お前のお世話で、母樣の御機嫌が直つて、此やうな嬉しい事はござりませぬ。
松月　母樣の御機嫌が直つて、わたしも嬉しうござります。
紅梅　イヤ、申し、腰元衆を始め、あなたまでが其やうに、挽き飯を遊ばすは、何ゆゑでござります。
松月　奥でも申しました通り、母樣の仰せにて、腰元どもや自らが、製法したるこの挽き飯は、朝な夕なにあの一間へお供へ、申しますのでござりますわいなア。
紅梅　してその樣子はえ。
ト内より
覺壽　イヤ、その樣子は、自らが直に云はう。
ト出る。
兩人　エヽ、母樣。
覺壽　紅梅、最前つれなう生みの親が、打ち打擲は養ひ親へ立てる義理。丞相どの昨日船に召すまでも、紅梅が事をくれ〴〵と、妾へ執成し。その滯留のうち、自らが望み、主の形を畫でなりと作つてなりと、伯母が形見に下されと頼んだれば、その日から取りかゝり、初めて出來たは打ち割り捨て、二度目に作り立てられしも、同じくこれも打ち碎き、三度目に木像を作り上げて仰しやるには、前の二つは形ばかり、精魂なきも木偶人、これは又丞相が魂ひ殘す形見とて、下されし主の姿の木像を、アレ、あの一間に請待し、不淨を入れぬあの一間。

木とな思ひそ紅梅姫。父御丞相どのに逢はしてやらう。

紅梅　エヽ、母様のお志し。父上様は島へお出でなされた上は、せめて木像になりと、お目にかゝつてこの身のお詫び。

松月　それ〳〵。申し、母様、どうぞ紅梅さまの願ひの通り、

覺壽　オヽ、逢はさいで何とせう。逢はしてやりませう。

ト云ひ〳〵一間の海老錠を鍵にて開く。ト内に齊世の君、指貫、壺折りに立つて居る。紅梅姫見て

紅梅　ヤア、あなたは宮様。

齊世　紅梅姫。

紅梅　おなつかしうござりましたわいなア。

ト取りつく。松月尼惘り。

松月　申し、母様。あなたはえ。

覺壽　勿體なくも當今の弟宮、齊世の親王さま。

松月　エヽ。

トとつくりと見て

ヤア、いつぞや加茂の社で自らが見染めた

覺壽　ヤア。

松月　ても思ひがけもない。

覺壽　オヽ、驚ろきは道理。其方や小櫻にも隱し、木像と御一緒に、この間にお忍ばせ申したは、壻への聞え。

松月　そんなら、アノ、紅梅さまの

紅梅　云ひ交したこの宮様。道にてはぐれ、いま又お目にかゝるも盡きせぬ縁、母様のお情。

齊世　麿とても、覺壽のいたはり淺からで、憂きを凌ぐも、其方に今一度、逢ひたいばつかりでござるわいなう。

覺壽　いつぞや玉手のほとりにて、宮様のお目にかゝり、密かに御供して、この一間に御座なさるを、現在娘にも云はねば、召使ひの者は猶更。朝夕の供御までも、人目を憚り、勿體なくも、思ひついたるこの挽き飯は、即ち宮様の供物ぢやわいなう。

紅梅　ほんに、何から何まで、母様のお心遣ひ。

齊世　姫。覺壽によいやうに禮を云うてたも。志しの程は、詞には盡くされぬわいなう。

ト此うち橋がゝりより、兵衛見て居る。

覺壽　こは勿體ない仰せ。君をかしづく道眞どのゝ妻へ賴み。さりながら、爰に御座あつては、讒者の舌頭止む時なければ、姫もろとも、今宵八聲の鷄を合圖に、叡山の座主法性坊は、坂本の庵に閑居あれば、この所に落し參

らせんと、先達てより交通。それまでは姫もろとも、夜もすがらのお物語りを、ナウ、松月。

ト松月尼うつとりと齊世の君の顏を見て見惚れる。

コレ、松月。

ト大きな聲にて云ふ。松月尼恠りして

松月　アイ、母様。何ぞ仰しやつたかえ。

覺壽　ハテ、今宵宮様を姫もろとも、八聲の鷄を合圖に、爰を落します先達ての契約ゆゑ、あの方より宮様を、お迎ひに來るわいなう。

松月　エヽ、滅相な。母様とした事が。あの宮様を、餘所へやりましてよいものでござりますかいなア。

覺壽　ナンノイナウ。あの法性坊の阿闍梨は、丞相どのの師の由縁、なんの粗略があらうぞいの。

松月　イエ／＼、それでは惡うござんすわいなア。

覺壽　ヤア、なんで惡いぞいなう。

松月　サア、折角今宵お目にかゝつて、直ぐに別れるといふやうな、本意ない事があるものでござんすかいなア。せめて三月と五月と、但し、十年も、二十年も、百年も、繼きせぬやうに附き添うて、二世も三世も離れる事は嫌でござんすわいなア。

覺壽　サア、國を隔てゝ育つた其方の爲には、妹の紅梅に名殘りの惜しいは道理なれども、今宵落さねば、却つて宮様のお爲にならぬわいの。

松月　それでもお別れ申すと思へば、悲しうて／＼なりませぬわいなア。

覺壽　ハテ、血筋は爭はれぬ。同胞思ひな人ぢやなう。

紅梅　申し、姉様。それ程までに自らが事思うて下されまする。エヽ、嬉しうござります。

松月　なんのマア、自らはアノ

ト云はうとして思ひ入れあり、紅梅姫が方を見て

斯ういふ事と知つたりや、母様にお詫びせずと、餘所へやつたらよかつたもの。

トむつとして、あちら向く。

覺壽　何を云やるぞいの。申し、宮様。奥には勅使の下向、殊には、心善からぬ兵衛どの、覺られてはお身の大事。紅梅と諸共に、矢張りその一間へ。

ト紅梅姫が手を取り、一間へ入れる。松月尼もこなしあり。

松月　自らも一緒に一間へ。

ト行かうとするを、覺壽とめて

覺壽　ハテ、其方は尼の身。父御の忌日、いつものやうに、佛間で、御經讀誦。
松月　エヽ。
ト思ひ入れあつて、我が姿に心附き、チッとなつてこなし。
齊世　そんなら、覺壽。
紅梅　母樣。
覺壽　暫しの御睡眠。
ト障子さす。
松月　せめてお顔なりと、
ト倚るをピンと錠をおろす。松月尼こなし。
覺壽　サア、松月、おぢや。
ト合ひ方になり、松月尼か手を引き、こなしあつて、松月尼を連れて入る。ト奥より小櫻、長刀の箱を持つて出る。
小櫻　男御樣にお約束の、この長刀。
ト箱の蓋を明け、思案して、長刀の刃を手水鉢の手拭にて卷き、疊の下へ隱す。此うち橋がゝりの障子の内より、蘭の兼政見て居る。小櫻、右の箱の紐を元のやうにして、こなしある。此うち奧より
皐月　申し〳〵、小櫻さま〳〵。後室樣のお呼びなさる。早うお越しなされませい。
ト頻りに呼ぶ。兼政、障子を閉める。
小櫻　ハテ、そこへ行くわいなう。
ト箱を持つて、奧へ入る。始終合ひ方。ト兵衞、綸旨の袋を持ち出て、袋の内より出し、口の内にて讀み
兵衞　エヽ、忝ない。河内一國の御綸旨、嫁を騙して、まんまとしてやつた。
ト内より
兼政　兵衞々々。兵衞はどれに居る〳〵。
兵衞　ハッ〳〵。これに居ります。
トいろ〳〵こなしあるうち、綸旨を袖へ入れたり、懷へ入れたり、思案して刀の鞘へ入れて、差さうとして入らぬ思ひ入れ。手水鉢の角にて、刀の切先を折り、刀の鞘へ納める。また刀の切先の置き所に困つたこなし。疊を上げ、右の折れを疊の裏へ刺さうとして、長刀を見附け、手拭を取り、よく〳〵見て
こりやコレ、慥かに神作の長刀。面妖な。嫁に盜みくれよと云ひ附けしに。何にもせよ。
ト右の劍を取り、折れを手拭にて卷き、矢張り疊の裏

へ刺し込み、元のやうにして、行かうとして、持つてゐる長刀の置き所にいろ〳〵困る體。

彌生　申し、兵衛さま〳〵。お勅使が召します。どれへお出でなされました。

ト頻りに呼ぶ。

兵衛　オイ〳〵。これに居る〳〵。

ト右の長刀を、池の端の蛇籠へ隱す所へ、兼政、覺壽、宿禰、小櫻、求馬、腰元、皆々附いて出る。

覺壽　兵衛どの。これにござりますか。

兵衛　これはお勅使。後室。すりや、ハヤ。

兼政　二種の寶、内見いたさん。

覺壽　成る程。健忘なれども、犁太郎も立合ひの上は、御内見に供へ奉りませう。

小櫻　エ、。すりや二種の寶、只今内見に供へねばなりませぬか。

兵衛　ハテ、薄墨の御綸旨、神策の長刀、御内見の爲、お勅使樣にははる〴〵とのお下向サ。

小櫻　サア、それでも最前。

兵衛　嫁女。何が何とした。

小櫻　エ、。

トこなしあり。

兼政　サア、覺壽。二種の寶、早う見せい。

覺壽　ハツ。ソレ、求馬。佛間に飾りある長刀の箱をこれへ。

求馬　ハツ畏まりました。

ト求馬、奥へ入る。

覺壽　御綸旨は寶藏に納め、即ち鍵は犁どのに先達て預け置いたれば、小櫻、とくと尋ねて、其方が寶藏へ行て、綸旨をこれへ。

小櫻　サア、その鍵は。

ト兵衛の顏を見る。兵衛脇見して居る。

覺壽　ハテ、何をうぢ〳〵。ちやつと、

小櫻　サア、それでも。

トうぢ〳〵する。

覺壽　ハテ、埒の明かぬ。コレ〳〵、犁どの。大切な寶藏の鍵は。

宿禰　寶藏の鍵とは、何の事でござります。

覺壽　ソレ、先達てこなたに預け置いた、寶藏の鍵わいなう。

宿禰　イヤ、私しはそんな事は存じませぬ。とんと覺えま

せぬ。
覺壽　ハテ、辛氣な健忘病ではあるぞ。
ト此うち求馬、以前の長刀の箱を持つて出て、覺壽が前に直し
求馬　お長刀の箱、持參仕りましてござります。
覺壽　オヽ、先づ御綸旨は後の事。聟どの、この長刀の箱を開いて、お勅使樣へ。
ト宿禰が前へやる。宿禰見て
宿禰　申し、こりやどうするのぢや。
覺壽　箱を開いてお勅使樣へ、御內見に供へるのぢや。
ト敎へる。
宿禰　エヽ、合點でござります。
ト紐を解き、蓋を明けうとする。小櫻始終心遣ひあつて、「それは」と行かうとするを、兵衞ちよつと支へ
兵衞　ハテ、嫁女。大切な御內見、ヂッとして居召されい。
ト小櫻ハイ／＼とこなし。此うち宿禰、蓋を取り、內を見て
宿禰　申し、中には何がござりますいなア。
覺壽　ハテ、大切な長刀が。

ト內を見て驚く。
兵衞　こりやコレ、大切な神寶の長刀が
覺壽　コレ、小櫻。今朝佛前へ飾らせたに、其方、この箱の內には、どうして無いぞ。
小櫻　サア、それはな。
兵衞　嫁女、大切な長刀はどうして無いぞ。
小櫻　サア、最前
兵衞　お身が盜んだか。
小櫻　エヽ。
兼政　オヽ、盜んだ小櫻。慥かに見屆けた。兵衞、その疊をまくつて詮議せい。
兵衞　ア、コレ、お勅使。そりや何を仰しやる。
兼政　疊の下へ隱したと慥かに見屆けた。
兵衞　滅相な。この疊をまくつて堪るものでござるか。
覺壽　ハテ、合點のゆかぬ。お勅使樣の仰せに、慥かに見屆けたとあるからは、兵衞どの、その疊を除けて。
兵衞　コレ、後室、こなたの爲に現在の娘、拙者が爲には嫁の小櫻。なんの長刀を盜んでよいものでござるか。
覺壽　でも、お勅使樣が見屆けたとあれば、娘でも容赦は

致さぬ。マア、疊を除けて詮議の上。ソレ、小姓ども。

皆々　ハツ。

ト疊を上げにかゝる。兵衛留める。覺壽支へ、トゞ立廻りにて、疊を上げ、以前の刃の折れを出し

斯やうなものがござりました。

ト渡す。覺壽取り、兵衛こなしある。覺壽、手拭をほどき

覺壽　こりや、コレ、刀の折れ。

ト兼政も見て

兼政　面妖な。正しくこれへ入れたと、慥かに見屆けたが、こりやどうぢや。

小櫻　母樣、堪忍して下さりませ。成る程、長刀はわたしが盜みました。

覺壽　ムウ、すりや、其方がなぜ盜んだ。その仔細は。

小櫻　サア、それは。

ト兵衛が顏を見る。兵衛睨む。小櫻、いろ〳〵こなしあつて

覺壽　ヤ。

小櫻　サア、太郎さまの健忘の病ひは、物の化の所爲と思ひ、家に傳はる大切な長刀は、帝樣の重寶、神代の寶なれば、夫に戴かせて本腹もあらうかと、盜み出して、この疊の下へ、隱して置きましたが。

覺壽　そんなら、太郎が病を癒さんと、盜み出し、この疊の下へ入れ置いたが、今、切先の折れになつてあるのぢやの。

小櫻　アイ。

覺壽　さては其方が入れ置いた跡へ、何者ぞが來て、その長刀を盜み取り、この切先と入れ替へ置いたもの。すりや、この折れの主が、長刀は持つて居るわいの。

兼政　イカサマ。その折れの主を詮議したら、知れさうなもの。

覺壽　こりや、めい〳〵の腰の物を吟味せにやならぬ。ソレ、求馬。侍ひたる者をこれへ呼べ。

兵衛　ア、コレ〳〵、後室。なんの、誰れが疊の下へ、心が附きませうぞ。こりやモウ、吟味せずとよしにさつしやれ。

覺壽　イエ〳〵、大切な家の重寶、神策の長刀、キッと吟味を遂げねばなりませぬ。侍ひ分の者は外樣。これはよもや……こりや後での事。マア、兵衛どの、こなたは一家の事なり、お勅使の御前も御苦勞ながら、腰の物を拔

いて見せて下され。

兵衛　ハテ、滅相な。この兵衞は何者。こなたとは姪。すりや近しい一家。なんの疑ひがあらう。身共がこの家の家來を一々捕へ、一々詮議いたして進ぜう。

覺壽　イヤサ、近しいこなた様ゆゑ猶の事。どうぞ吟味させて下され。

兵衛　すりや、身共が腰の物を是非見るとな。

覺壽　ハテ、妾が疑ひ晴し、お勅使様への申し譯。

兵衛　よくござる。せう事がない。見せませう。

ト小柄抜き

ソレ、見さつしやれ。別條はないぞや。

覺壽　成る程。それには別條はござりませぬ。とてもの事に、刀も抜いて見せて下さりませ。

兵衛　アノ、刀も見せいか。武士が刀を吟味しられては立ちませぬ。

覺壽　たつて見せまいとあると、長刀の詮議はこなたにあるわいの。

兵衛　ハテ、それは迷惑。

兼政　コリヤ／＼、兵衞。刀を見せぬと、其方に疑ひが立つ。早う抜いて見せい。

兵衛　何を様々の事を云ひ出して置いて、……成る程、刀見せませう。が、覺壽どの。御苦勞ながら、ちよつとあれへ

ト覺壽、兵衞こなしあつて向うへ出る。

覺壽　御用かな。

兵衛　こなたも知る通り、この兵衞は郷士でござれば、知行などもござらず、僅かな田地の主、それゆゑ身上も拂底、腰の物なども用意も心に任せず。面目ないが、ほんの人目おどしの見せかけ、どうも人に見せられぬ一腰なれば、達て見ようとあれば、せう事がない、恥を捨てゝお目にかけるぢや。その代り、直に身共は切腹いたす。それとも抜いてお目にかけうかな。

覺壽　イヤ、見ますまい。よう云ひにくい事を、一家なればこそ、云はつしやれた。なんのこなたに疑ひはなけれども、ほんのお勅使様の手前を思うての事。もう見るには及ばぬ。

兵衛　すりや、お得心か。それでは身も大慶。

覺壽　シタガ、兵衞どの。ちつと不嗜みでござりますぞえ。武士の身で、何時どのやうな事があらうも知れぬ。人にも見せられぬやうな刀、差して居るといふ事がある

ものかいなア。アヽ、わつけもない。……ナニ、求馬、過ぎ行かれた郡領どのゝ差添へ持て。

求馬　ハッ。

ト刀を持ち出て、覺壽へ差出す。

覺壽　この刀は過ぎ行かれし夫の差添へ、太郎に讓りあれど、暫しが間でも心が後れては惡い。これ差いてござれ。

兵衛　すりや、この一腰を下さるぢやな。忝ない。申し受けう。

ト取つて大小の上へ差し、三本差しながら立たうとする。

覺壽　アヽ、コレ〳〵。其やうな人にも見せられぬやうな見苦しい刀、差して居るものぢやない。此方へおこさつしやれい。

ト差いてゐるのを引き拔き、取る。

兵衛　イヤ、それは。

覺壽　人目に掛けては武士が立つまい。一家の恥辱。こりや妾が預かりませう。

兵衛　でも。

覺壽　但し、この刀拔いて詮議せうか。

兵衛　サア、それは。

覺壽　どうでござる。

兵衛　然らば如何やうとも。刀の詮議でも、知れかぬる長刀の行くへ、覺壽どの、どうでござる。

覺壽　サア、この上は、とくと思案し、詮議いたして御內見に供へ奉ります。

兵衛　ハテ、べん〳〵と、いつまでお勅使を待たせて置くのでござるぞ。

覺壽　イヤモウ、長うとは申しませぬ。今宵のうちに

兵衛　二品を內見せずば

覺壽　ハテ、河內一國に土師の家を差上げます。

兵衛　面白い。今宵中とあれば、お勅使樣、御猶豫なされて遣はされい。

乘政　それでも

兵衛　ハテ、苦しうござらぬ。長刀が出ぬ時は、家國は沒收。その時は、かねて、イヤサ、一家のよしみ、執成し仕ります。

乘政　ムウ、成る程。暫しの猶豫は長袖の情。詮議の間は待つて得させん。

覺壽　すりや、詮議のうち御容赦なされて下されうとな。

これといふも、兵衛どのゝお執成し。エヽ、忝なう存じます。
兵衛　イヤモウ、一家のよしみ、悪しう思はぬがようござる。
小櫻　申し、母様。長刀の行くへの知れぬも、一旦盗み出したわたしが誤まりなれば
覺壽　詮議するか。
小櫻　アイ、ちつと思ひ當つた事もござりますれば。
覺壽　オヽ、出かす〳〵。併しながら、一旦越度ある其方、娘でも容赦はならぬ。兵衛どの、こなたにお頼み申しませう。
兵衛　ナニ、すりやあの小櫻を。
覺壽　連れ添ふ太郎は健忘、妾は生みの緣あれば、差詰めこなた。嫁は子といへば、長刀の吟味を、とくと指圖してやつて下され。頼みます。
兵衛　ハテ、かゝりや繋がる倅が嫁。指圖してよい事なれば、どうなりと仕らう。
覺壽　それは御深切。この上は、お勅使様。
兼政　今宵は滞留。覺壽、奥へ。
覺壽　腰元ども。ソレ、御誘引申せ。兵衛どの、後に。

ト唄になり、兼政、腰元、皆々附いて覺壽、兵衛が刀を持ちて入る。兵衛、小櫻殘る。宿禰太郎はキヨロリとして居る。あと合ひ方。
小櫻　申し、舅御様。
兵衛　嫁女。
小櫻　最前あなたのお指圖の通り、寶藏の鍵は、あなたへお渡し申したれば、彼の長刀は
兵衛　コレ〳〵、嫁女。そりや何云ひ召さる。
小櫻　サア、鍵はお渡し申したからは、定めて綸旨はあなたが。
兵衛　イヤサ、綸旨とは何の事。身は其やうな事は知らぬ。
小櫻　イヽエイナア。ソレ、夫太郎どのゝ病、本腹のため二種の寶を、盗み出してくれいとのお頼み。
兵衛　ハテサテ、そりや何云ひ召さる。神策の長刀に、綸旨はこの家の重寶。それを兵衛がどうしたぞ。彼の長刀はお身が最前盗んで、この疊の下へ入れて置いたと云ふぢやないか。
小櫻　サア、それもお前様が、母様に隠して、盗んでくれいとのお頼みゆゑ。

兵衞　まだ〳〵。身共は知らぬ。馬鹿云ひ召さるな。
小櫻　アノ、現在わたしを。
兵衞　頼んだ覺えはない。エヽ、なにか、こりや其方も健忘か。
小櫻　エ。
兵衞　サア、物覺えの惡い。覺えもない事を云ふからは、こりや、其方も健忘か。夫婦とも健忘病になつたか。ハテ、氣の毒なものぢやなア。
ト煙草のんで居る。
小櫻　申し、舅御樣。覺えないとはお胴慾でござります。例へお前の指圖でも、夫の爲に、一旦盜み出した私し、盜賊の越度で殺さるゝとも、お前のお名を出しませうかいなア。折角盜んだ長刀を取られし不覺。共々に吟味して、綸旨を共に戴かし、夫を本腹させん爲、
兵衞　ア、イヤ〳〵、嫁女。さては綸旨や長刀を盜んで、本腹させうと思ふか。流石は女の淺はか。其やうなもの戴かして、心安う病氣が直るなら、天子や法皇は無病息災、生き通しにせねばならぬ。ハヽヽヽヽ。
ト煙草のみながら、あざ笑ふ。小櫻こなし。
小櫻　そんなら最前仰しやつたは、皆わたしをお騙しなされて、二品の寶を
兵衞　盜んだは、其方。身は頼んだ覺えはないぞ。
小櫻　舅御樣、そりやお前、お胴慾でござりますぞえ。
ト取りつき泣くを、振り放し、空うそふく。小櫻ウロウロして、宿禰太郎に取りつき
コレ、申し、我が夫太郎さま。何をうつかりとして居て下さんす。お前の病氣本腹の爲とあつて、舅御樣のお指圖で、折角盜んだ長刀は又紛失。その行くへも、舅御樣をお頼み申しても、覺えないと仰しやつて、御機嫌が損ねた程に、どうぞお前がお詫びして、綸旨の行くへも、長刀の在所も、ちやつと尋ねて下さんせいな。
ト宿禰に取りつき、泣く。宿禰始終構はず
宿禰　おりやそんな事は知らぬ。とんと何にも覺えぬもの。
小櫻　エヽ、つツとお前がその病氣ゆゑ、斯ういふ難儀。
トこなしあつて、また兵衞が側へ行き
申し、舅御樣。何ぞわたしが申した事が、お氣に障つてお腹が立つなら、堪忍して、どうぞ申し。
ト兵衞、顏を外ける。又あちらへ廻つて
コレ、申し。

ト又こちらへ廻り、また宿禰が側へ行き
コレ、申し、太郎さま。どうぞ舅御樣へお詫びして下さんせいなア。

宿禰　エヽ、この人は知らぬと云ふに。
ト突き退ける。小櫻いろ〳〵ある。

小櫻　何を云うても、夫の病でこの通り。舅御樣。
ト兵衛が側へ行く。煙を吹きかける。
寶が出ねば、母樣の御難儀。こりや、マア、何とせうぞいなア。
ト大泣き。兵衛、思案して、ズッと立ち上がり、小櫻が首筋持つて、太郎に突きつけ

兵衛　コリヤ、悴。この女は大盗人。早く成敗せい。

宿禰　悴々と、貴樣は誰れぢや。

兵衛　馬鹿め。おのれが親の兵衛ぢやわい。

宿禰　オヽ、兵衛とはおれが親仁樣ぢや。

兵衛　この女は大盗人ぢや。成敗せい。

宿禰　そりや、どうして。

兵衛　ハテ、その脇差を斬う抜いて、斬う。
ト手に持ち添へ、宿禰が脇差を抜き、振り上げる。小櫻、飛び退き

小櫻　コレ、こちの人。早まつて下さんすな。

兵衛　コリヤ、悴。ちやつと切り殺せ。

宿禰　オヽ、切るぞ、女子め。爰へ直れ。

小櫻　オヽ、滅相な。粗相さしやんすな。

兵衛　ちやつと切れ。

宿禰　爰へ直れ。

兵衛　サア、切れ。

小櫻　ア、何を教へなさるぞいなア。

兵衛　オヽ、切れと云ふに、切らぬか。斬う切れ。
ト手を持ち添へ、一刀切らす。小櫻、倒れながら、太郎に取りつき

小櫻　コレ、こちの人。お前まで胴慾な。

宿禰　おりや知らぬ。盗人ぢやに依つて切るのぢや。

兵衛　オヽ、さうぢや。その女は大盗人。憎い奴ぢや。悴、盗人を助けるな。なぜ切らぬ。切れ〳〵。

宿禰　オヽ、切る〳〵。
ト又振り上げる。小櫻取りつき

小櫻　コレ、待つて下さんせ。せめてお前が病氣でなくば

兵衛　ソレ、こま言云はさず、切らぬか、悴。

宿禰　オヽ、こま言云ふな。盗人ぢやに依つて、斬う切

る。

ト宿禰いろ〳〵こなしあり、小櫻を又切る。小櫻切られながら、又縋り

小櫻　さては舅御樣。大事を知つたわたしゆゑ、健忘を幸ひ、夫に云ひつけて、こりや、殺さすのぢやな。

兵衞　コリヤ〳〵、悴。その女めがわれを殺さうと云ふ。ちやつと殺されぬうち、殺してしまへ。

宿禰　なんぢや。おれを殺すとは、憎い女め。おのれは、マア、どこの奴ぢやぞい。

ト又切る。小櫻苦しむ。

小櫻　そんならわたしを。現在の女房ぢやとも知らずに。

宿禰　太い女め。おれが女房ぢやないわい。

ト又切る。兵衞、始終二重舞臺に煙草のんで居るこなし。兼政出る。

兼政　兵衞さま。云ひ合した通り、いよ〳〵宿禰どのは。

兵衞　悴が病、實否はあの通り。現在の女房を盗人と思ひ、手に掛けるからは、眞の健忘、うつけに相違はない。

兼政　誠に、これを見るからは、先達て云ひ附けし、菅丞相を助け返した疑ひは晴れた。

兵衞　この上は、八聲を合圖に、彼の兩人も。

兼政　アイヤ、その儀は。

兵衞　ハテ、大事ない。性根のある女はくたばる。悴は健忘。何を云うても氣遣ひないてや。

兼政　左樣ならば、私しもちつと寛ぎませう。

トぐつと伸びをして

ヤレ〳〵、仕附けもせぬ勅使で、窮屈で窮屈でなりませぬ。頭は、冠りで、頭痛はする。體は、むり〳〵と引ッ張るやうな。

小櫻　エヽ、そんならアノ、お勅使樣は。

兵衞　身共が家來、荒島主税。

兼政　人の知らぬを幸ひに、勅使となつて入込んだも、兵衞さまの云ひ附け。

兵衞　時平公に取入り、立身する身共が手段。何でも首尾ようやりつけ、追ッつけ、攝河泉の主となつて見せう。

小櫻　エヽ、さうとは知らず、最前やみ〳〵とお前に騙され、寶藏の鍵まで渡したが口惜しい。せめてこの事を母樣に。

ト立ち上がらうとする。

兵衞　コリヤ、悴。盗人のその女、早く止め刺せ。

宿禰　止めとは、どうするのぢや。

兵衞　ハテ、咽喉へ刀を突ッ込み、抉るのぢや。
宿禰　オヽさうぢや。
ト引き附け、止め刺す。
なんと、斯うか。
兵衞　オヽ、さうぢや。グッと抉れ〳〵。
宿禰　かう〳〵〳〵。
ト抉る。小櫻もがき、死ぬる。兵衞とつくり見て
兵衞　もう大方とまつたであらう。コリヤ、悴、その死骸を、アレ、あの池へ打ち込め。
宿禰　ムウ、合點ぢや。
ト小櫻が死骸をころばして、池へ入れる。
アヽ、しんどやの。
トこなしある。
杀政　この上は、兵衞さま。彼の二人の迎ひを。
兵衞　奥にて密かに
宿禰　奥とはどつちぢや。連れて行て下され。
兵衞　ハテ、うつけめ。うせう。
ト唄になり、杀政、兵衞、宿禰が手を引き、奥へ入る。
ト腰元二人、鏡臺、櫛笥を持つて出直し
皐月　なんと、彌生どの。いつにない、夜に入つて、鏡臺、櫛笥を持てと仰しやるは、どうした事ぢやぞいなう。
彌生　さればなう。今宵はお勅使樣のお入りといひ、かてて加へて、身仕舞ひなさるゝは、とんと合點がゆかぬわいなう。
ト唄になり、松月尼、隨分派手な衣裳と着替へ出て、鏡臺の前に直り、恨めしさうに鏡に向ひ、こなし。
皐月　申し、松月さま。俄かにお小袖をお召替へなされて、派手なお姿といひ
彌生　お髪までなさるゝやら、櫛笥を持てと仰しやるゆゑ、これへ持つて參りましたが、
皐月　こりやマア、どういふ事でござりますえ。
ト松月こなしあつて
松月　君をのみ、思ひかけごの玉くしげ、所詮叶はぬ戀路と諦らめて、切り捨てしこの黒髪。
ト頭へ手を上げ
どうぞ元のやうに取上げられぬか。腰元ども、仕樣はないかいやい。
彌生　オヽ、笑止。松月さまとした事が、その髪が元のやうにならぬかとのおむづかり。あんまり短かうお切りなされたゆゑ、髱も入れられず、取上げる事もなりますま

い。
皐月　どうぞ今の間に、長うなる髪生え藥でもあらうかいなう。
彌生　そりや、金魚の黒燒がよからうわいなう。
皐月　オヽ、その金魚の黒燒より、後室樣の仰せには、今宵密かにお立ちのお客があるげな。それで提げ重、酒筒を云ひつけよとの仰せ。
彌生　それ〳〵。隨分密かにと仰しやつた。忘れぬうちに云ひ付けて置かう。サア、ござれ。
皐月　申し、松月さま。私しどもは奥へ參ります。
ト唄になり、兩人奥へ入る。後しつぼりとしたる合ひ方にて、松月一間の側へ出て、いろ〳〵こなしあつて
松月　ほんに、いつぞや、京内詣でのその時、加茂の社で、フツと見そめたお公家樣。ても可愛らしいと思うても、名も知らず、高位と思ひ、及ばぬ戀と思ひ切つて、尼になつて居るもの。今宵思ひがけなう、お月にかゝつた齊世の宮さま。この家にござるといふ事を、母樣もなぜ疾に知らしては下さりませぬ。ほんに知つたりやこれまでに、自らが思ひの遣る瀬なさ、心の丈を。……さはいへ尼の身、何と仰しやらうやら。殊に紅梅さまと云ひ交して、都を立退きなさる程の仲の宮樣。不束な自ら、お氣には入るまいと思へども、焦れ慕うて、尼になつたも宮樣ゆゑ、エヽ、羨ましい。あの一間には、紅梅さまと宮樣が睦まじうお話しやら……何やら、かやらであらうなア。それを思へば、いつそ。
ト行かうとして思ひ入れあり。
イヤ〳〵。自らは得道した尼の身、思ふは妄執。さうぢや。
ト觀音經を讀み、又こなしあつて
今宵宮樣のお立ちは八聲。もう追ツつけ紅梅さまと宮樣とお二人、延暦寺へお越しなさるゝであらう。……せめて戀は叶はずとも、お側に居たら宮樣と、お詞かはす事もあらうに、この年月、焦れ慕うて、やうやく今宵お目にかゝつて、直に別れると思へば、本意ない事ではある。さはいへ、此方は思へども、宮樣は何とも思うてはござるまい。鮑の貝の片々に、云はで焦るゝ澤邊の螢、思ひは消えぬ埋火の、いつかは閨に焚きしむる、香のすがりの尼の身で、戀ゆゑ胸を、焦しますわいなア〳〵。
ト長崎の鳥の唄になり、鳥屋の内より四國一羽飛び下り、鏡に向ひ毛を立てる。仕掛けにて鏡と蹴合ふ。松月

悸りして、飛び退き、思ひ入れあつて、チツと見る。
ト合ひ方になり
ハテ、思ひがけもない。鷄の鏡を我が友と思ひ爭ふは。
ムヽ。
トこなしあつて
それ、唐土の函谷關とやらの、關の戸を開きしは鳥の空音、今宵宮樣のお立ちは八聲を合圖。それ。今宵のうちに鷄の時をつくらねば、お立ちもあるまい。さすれば、自らが戀も叶ふ。
トきつとなつて、鏡の下の書物を出し
今までは及ばぬ戀と思ひしが、紅梅さまも自らも、同じ血筋の姉妹なれば、などかは戀を仕負けうか。戀に上下の隔てはない。
ト右の書物を讀み
いんいん物うし、鷄鳴を憎んで君と枕を同じうす。この唐歌は、鷄の鳴く音を憎んで、いつまでも君と添ひ寢をせんと、戀路の慾につまされし歌。それは變らぬ契り。自らは今宵が初戀。叶ふか。叶はぬか。戀の敵、鷄の鳴く音をとめて、宮樣に思ひを明かし、二世の契りを結ばいで置かうか。

ト鷄を抱き締め
コレ、鷄。今宵は必らず鳴いてたもんなや。わがみが鳴きやると、自らが戀が叶はぬ程に、よい鳥ぢや、必らず鳴きやんなや。や。
ト此うち方々の鳥屋の内より羽叩きする。
アレ／＼、羽叩きするは、もう時をつくるのかいなう。必らず鳴いてたもんなや。わがみが鳴きやると戀が叶はぬ程に、必らず鳴きやんなや。や。
ト矢張り羽叩きする。
アレ／＼、聞分けのない。其方達も、女夫番ひの妹脊鳥。わしが戀路を思ひやつて、鳴かずにくれい。自らが頼みぢや。鳴いてくれなよ。
ト側にある珠數と袈裟を取上げ
それ。自らが日頃念じ込んだる觀世音、大悲の誓ひには、枯れたる木にも花咲かすとの御誓願。自らが切なる戀路を納受あつて、佛力應護を添へ給ひ、今宵の鳥の音をとめてたべ。南無大慈大悲の觀世音菩薩。
トいろ／＼ある。
戀ひ焦れし齊世さま、今宵ぞ稀れにあふ坂の、鳥の塒を吹く風に、鳴く音をとぢる關の杉の戸。

ト思ひ入れあつて、右の珠數と袈裟を火鉢へ投げ込む。燒酎火上がると、松月、下へ下り、空を眺める。
仕掛けにて、月じり〱と西へ入る。
今宵は如月十二日。西に傾く月代は、早七つ。鳥の八聲を上げぬは、さては自らが念力、佛の示現で、鳥の鳴く音を止め給ふか。エヽ、嬉しやなア。
トどろ〱にて、火鉢より掛け煙硝パッと上がる。松月ウンとのる。松月、肩ぬぐ。白き毛色の肌ぬぎになる。これより激しき合ひ方になる。櫻の花多く散る。松月、鳥のこなしにて、方々の鷄と蹴合ふ事面白く、いろ〱あつて、トゞ鳥を皆々蹴殺し、奥へ行かうとする。この時、覺壽出かけ

覺壽　コリヤ、待て、松月。

松月　イヽヤ、母樣、そこ退いて下さんせ。日頃戀ひ焦れた齊世の君さま。あの一間へ往て妹脊の語らひ。
ト突き退け、行かうとする。覺壽、引き戻し

覺壽　コリヤ、其方は尼の身ぢやないか。それに妹脊の語らひとは。

松月　サア、都で見染めた親王樣。尼になつたも、あなたゆゑでござんすわいなア。

覺壽　イヽヤ、待ちや。コレ、松月。

松月　イヤ、母樣。日頃焦れた齊世の君さま。そこ退いて下さんせ。

覺壽　イヽヤ、待ちや。やる事はならぬ。コレ、松月、よう物を辨まへて見や。あの齊世さまには、現在妹の紅梅が

松月　サア、云ひ交したが妬ましい。申し、母樣。お止めなさるゝは、妹を庇うて、自らを捨てるお心か。
ト覺壽こなしあつて、チッと松月を引据ゑ

覺壽　燒野の雉子、夜の鶴、子を憐れまぬ親はないぞよ。紅梅を庇ふも、其方が不便ゆゑ。

松月　自らが可愛くば、あの一間へやつて、宮樣と妹脊の語らひさせてたべ。
トまた行くを引きとめ、立廻りあつて

覺壽　エヽ、情なや。その姿に心が附かぬか。

松月　なんと。

覺壽　コレ。
ト側に有る鏡を突きつける。
この姿をとつくり見て、思ひ切れ。
ト松月、鏡をキッと見て

松月　ヤア、この姿は、母樣。
覺壽　そちや鳥になつたわいやい。コリヤ、一旦得道した尼の身、今また、宮樣に心を掛けるは、煩惱の犬ではなうて、生きながら鳥になつたは、嫉妬の念。これでも、そちや、思ひ切らぬか。
松月　イヽヤ、思ひ切らぬ。
　ト行かうとする。立廻りあり。
覺壽　コリヤ、恥づかしいとは思はぬか。最前も紅梅に云ふ通り、白鷄を千羽飼ひ育てしは、我が子の果報を祈りの爲。それに、この如く鷄になれとは、過ぎ行かれし夫が、なんの飼ひ育てゝ置かうぞ。佛の爲、母の爲ぢや程に、宮樣を思ひ切り、元の通りの道心堅固になつてくれい。さすれば、未來の父御への菩提。この世の母へは孝行ぢや。心を改めたらば、佛の功力で元の姿にもならう。コレ、松月。日頃から聞分けのよい子ぢや、ちやつと得心しや。得心しや、得心して、思ひ切つてたもいなう。
松月　イヽヤ、思ひ切りませぬ。尼となり、鳥となるも、宮樣ゆゑ。紅梅を引分け、自らが二世の結び。意見も聞かぬ。不孝になつても構ひはせぬ。母樣、退いて下さんせ。
　ト行くを又引戻し
覺壽　すりや、母が此やうに云うても
松月　イヽヤ、きかぬ。
覺壽　どう云うても
松月　思ひ切られぬ。
覺壽　その姿になつても
松月　鳥はおろか、生きながら蛇身となつたる例もある。
覺壽　コリヤ、外面如菩薩、內心如夜叉。其方も常々法華經を讀誦したではないか。
松月　イヽヤ、法華經、嫌ぢや。惚れたが因果。
覺壽　すりや、此やうに云うても。
松月　思ひ切らぬ。
覺壽　思ひ切らぬか。
松月　イヽヤ。
覺壽　サア。
松月　サア。
覺壽　サア〳〵〳〵。
　ト鏡臺の鏡突きつけ、いろ〳〵面白き立廻りあつて詰め寄る。松月覺壽を突き退け、行かうとする。覺壽、

後より松月を切る。

覺壽　もう、是非に及ばぬ。

松月　エヽ、母樣。そんなら、自らを殺すのか。

覺壽　オヽ、この身になつて戀爭ひ。大切なる宮樣の、お身の上には替へられぬ。不便ながらも、母が手に掛けるわいやい。ほんに、世の中に、何萬人もある殿御、妹の紅梅が云ひ交した、宮樣に惚れたが、その身の因果と諦らめて、例へ今際になりと、得道して、元の姿になつてくれやい。

松月　エヽ、胴慾な母樣。この年月、焦れ慕うた宮樣、添はさうとは仰しやらず、思ひ切れとは情ない。いつまでも存らへて、宮樣のお側に暮らしたい。死にともないわいなア。

　　ト泣く。覺壽こなしあつて

覺壽　すりや、泣く聲までが、母が耳へは鳥と聞えるか。エヽ、淺ましい。

松月　さては多くの鳥の鳴く音を止めたが、この身に報うてか。エヽ、淺ましい。

　　ト橋がゝりよりバタ〳〵にて、侍ひ大勢。

侍ひ　ハツ、覺壽さま。これにござりますか。我れ〳〵は延暦寺法性坊の家來。先達て契約の通り、八聲を合圖に宮のお迎ひ。

覺壽　オヽ、時を違へぬ延暦寺の迎ひ。急いで宮樣を。

宿禰　ヤア〳〵、母人。その迎ひは似せ物。宮樣は渡されませぬぞ。

　　ト云ひ〳〵宿禰太郎出る。

覺壽　ヤア、こなたは聟どの。

宿禰　今こそ健忘病みの本腹時。延暦寺の似せ迎ひ、迂濶に宮樣は渡されませぬ。

覺壽　すりや、この家來は、

宿禰　皆似せ者。

侍ひ　それ知られたら。

　　ト宿禰太郎に切つてかゝるを、立廻りにて、皆々を殺す。

覺壽　ても、ひやいな事の。コレ、聟どの。今の迎ひを似せ者とは。

宿禰　知つたも健忘病みの德。

　　ト此うち主税駈け出て

主税　さては太郎めに化され、大事をうか〳〵と云ひ聞かしたか。この上は齊世の宮、姫もろとも、兵衞さまへ、

さらぢや。
ト一間の鬘を忽ち切り捨てる。宿禰太郎、後より主税を見事に切る。覺壽驚ろき

覺壽　コレ、聟どの。お勅使を手に掛けては、都への聞え。

宿禰　此奴も似せ者、荒島主税。

覺壽　ヤア、なんと。

宿禰　その仔細はカウ。
ト腹へ突ッ込む。覺壽驚ろく。

覺壽　ヤア〳〵、さては聟どの。親兵衛の惡事に、一つでないとの云ひ譯の切腹か。

宿禰　ハツ、御推量の通り、親兵衛が積惡邪慳。勿體なくも菅丞相御滯留のうち、我れに云ひ附け害せん企み。親の惡事と後室の恩義、取れば憂し、取らねば辛き武士の、捨てる命と思へども、強慾邪慳の親人。我れ亡き後も心元なく、思ひついたる健忘のうつけ病。それを疑ひ、最前も、女房小櫻を手に掛けさせ、實否を糺す親の惡意。

覺壽　ヤア〳〵、そんなら、娘小櫻は。

宿禰　我が手に掛けて、死骸はあの池。

覺壽　ヤア〳〵。

宿禰　不便や最期の今までも、眞の病と心得て、恨みかこちて死んだもの。譯も云はずに、刺し殺す無得心。それゆゑ我れを眞の健忘と思ひ、あの主税と親人の惡事の段段、似せ迎ひの様子知つたも、可愛や小櫻を殺せしゆゑ。申し、母人、我が切腹に免じ、何卒親人の命。なんぼう惡でも、親は親。……最前もナ、苦痛を見せず、只一思ひと思へども、現在の女房を、手もなまつて、なぶり殺しも同然。死ぬる今までも、我が病を眞と思ひ、樣樣の心遣ひ、その誠ある女房を、無得心に、胴慾な事、したわいやい〳〵。
ト覺壽、奥を見て

覺壽　エヽ、憎くい奴。切り刻んでも飽きのない兵衛。なれども、こなたの孝心にめでゝ、兵衛は助ける。

宿禰　どうぞあなたのお情、偏へに頼み上げまする。

覺壽　聞けば聞く程、心元ない宮様のお身の上。

宿禰　イヤ、お氣遣ひなされな。御兩所とも御安泰。イザ、宮様、これへお出であらせられませう。
ト奥より齊世の宮、紅梅姫出で

紅梅　申し、母様。姉様の御最期の様子、

齊世　宿禰太郎が切腹も、聞いてこれへ出られぬは、即ち太郎が教へ。

ト紅梅姫、松月尼に取りつき

紅梅　申し、松月さま、宮様を焦れてのこの最期。疾にもそれと知るならば、自らはどうなりとも、共に宮様をお勸め申し、お前と二世の固めをさせませうもの。

齊世　コレ、松月。知らぬ事とて、憂き目を見せて、殘念なわいなう。

覺壽　アレ〳〵、聞いたか、有り難い宮様のお詞。

ト松月尼こなしあつて

松月　母様、申し、宮様にこの姿を、お目に掛けるが恥かしい。

ト身を慄はして泣く。

覺壽　オヽ、不便や。口ではつれなう云ふものゝ、その心根が思ひやらるゝ。聟どのが最期といひ、娘二人が淺ましいこの死様。アヽ、有爲轉變の世の習ひ、三つ子を產んで幸ひと、人も羨やむこの覺壽、老の入りまい、喜びは見ず、一時に憂目を見る、妾が心を推量して下されいなう。

ト宿禰太郎、覺壽が側へ這ひより

宿禰　申し、母様。

ト兩方より

松月　どうぞ未來の緣を。

齊世　太郎が最期は親へ孝。

紅梅　松月さまは宮様ゆゑ。

齊世　コレ、松月。この世の緣は紅梅姫。未來の緣は後々萬劫。必らず半座を分けて待つて居や。

松月　エヽ、忝ない。

宿禰　申し、母人、親人の事

覺壽　氣遣ひしやんな。兵衞は助ける。

宿禰　エヽ、忝ない。

覺壽　さはいへ不便や、娘が最期。

松月　鳥になつたる自らは

覺壽　この世からなる畜生道。

松月　申し、母様。

覺壽　娘。

松月　エヽ、淺ましい

ト泣く。一間の內より

道眞　なけばこそ、別れを急げ鳥の音の、聞えぬ里の曉もがな。

覺壽　ヤア、あれは。
紅梅　慥かに父上のお聲。
　ト戸を開く。ト木像飾りある。
松月　今の御詠歌は。
覺壽　ホヽウ、菅丞相の三度まで、作り直せし物なれば、
　木にも魂ひ備はつて、今の御詠歌。
　ト松月尼が姿を見ろ。仕掛けにて羽根とれろ。
松月　申し、母樣、自らの姿が元のやうに。
齊世　すりや、木像の威徳にて。
覺壽　オヽ、例へ末世に至りても、この河内の土師村に、
　鷄鳴かぬは娘が一念。菅丞相の歌の德。
松月　申し、母樣。紅梅さま。
　ト苦しみながら、齊世の宮の側へ行く。
　宮樣。
　ト手水鉢の水を汲み取り
皆々　南無阿彌陀佛々々々々々々。
　トどろ／＼にて、前の池より吹き水上がる。
宿禰　ハテ、心得ぬ。この池より水氣卷き上るは、最前小
　櫻が血汐、今また松月が血汐と流れ寄つて合體し、水氣
　立ち登るは、陰にして又陰なり。

覺壽　時は丑三ッ、極陰の時刻。三陰の司るは月の形代。
　すりや、この池の元に、月の形の長刀が隱しあるに極ま
　つた。ハテナア。
　トどろ／＼にて、小櫻が死骸、長刀を抱へ、セリ上が
　ろ。
宿禰　ヤア、女房、小櫻が死骸。
覺壽　ナニ、娘。
　ト池の側へ往つて、長刀を見て
　これこそ家の重寶、神策の長刀。
　ト此うち兵衛出かけ居て、この時
兵衛　それを。
　トかゝろを宿禰支へて
宿禰　コレ、親人。こなたの惡心ゆゑ拙者が切腹。コレ、
　申し、どうぞ本心になつて
兵衛　ヤア、親の惡事を訴人する、不孝者め。
　ト蹴飛ばし、覺壽にかゝろ。最前の鞘にて立廻りあつ
　て、程よく受けろ。ト鞘切れ割れて、内より綸旨出
　ろ。
覺壽　これこそ御綸旨。
兵衛　それを。

ト切りかける。宿禰立廻りにて、刀を取り、兵衞を押へ、覺壽にその刀をやり

宿禰　コレ、申し、親人の命を。

覺壽　助ける證據はこの白髮。

ト髻を切る。宿禰取上げ

宿禰　これは。

覺壽　こなたの切腹、娘が最期。爰に一字を建立し、木像を安置し、末世末代、道明寺と名づけ、逆まながら弔ふこの尼。種々因縁佛道。南無阿彌陀佛。サア、兵衞。こなたも覺壽と共に、佛の道に入らつしやれ。

宿禰　コレ。親仁樣。どうぞ心を取り直し、姑御と御一緒に。

兵衞　佛は嫌ひぢや。

覺壽　發心さつしやれ。

兵衞　否ぢや。

覺壽　現在我が子の最期を見ても

兵衞　いつかな心は變ぜぬわい。

ト兵衞、手を組み、立ち身になる。覺壽こなしあつて

覺壽　エヽ、こなたはなう。

ト覺壽、宿禰太郎も一緒によろしく詰めかける。

幕

七つ目

播州曾根の濱邊の場
同　海上の場

役名――帆柱辰藏。入江宇平太。妹、みどり。久方御前。春藤玄蕃。判官代輝國。女房、十六夜。

造り物、向う淺黃幕。眞中に大木の松、この松の下に茶屋あり。みどり、茶屋の娘の形にて居る。在鄕唄にて幕明く。

ト仕出し大勢、茶店に腰掛けて居る。

仕一　さて、斯う出花を飲んで、向うの海づらを眺めた所は、どうも云へぬ景色ぢやぞや。

ト尻を叩く。

仕二　イヤモウ、向うの景色より、娘の姿の景色は、どうも云へぬわいの。

みど　オヽ、何をさしやんす。てんがうばつかり。わたしがやうな松の荒皮育ち、却つてお手がそこねますわいなア。

仕一　こりやきついワ。曾根の松の下に居るお娘、松に譬へてお斷りはけうといものぢや。
仕二　さうして、こなたの名は。
みど　アイ、みどりと申します。
仕三　シタリ。松の緑でみどりとは、叶うた名ぢや。
みど　イヤモウ、みどりといへば、どうやらしほらしう聞えますれど、ほんの赤松のやうな、不束な者でござんすわいなア。
仕四　イヤ〳〵、赤松ぢやない、姫小松め。しつぽりと臥松を待つて居るわい。
みど　ア丶コレ、惡い事さしやんすないなア。
仕四　なんの、それが惡い事。イヤ、その惡い事の次手に、今度菅丞相さまとやらが、惡い事をさつしやれて流し者ぢやと、この間から、この濱邊で潮待ち。今日は日和がよい。大方船が出るであらう。
仕一　聞けば、何にも覺えのない事ぢやげな。それに流さるゝとは、いとしい事ではないかいの。
仕二　サイナウ、今日はお船が出るなら、こちらもちよつと、どんなお人ぢや、見たいものぢやが。
〽噂半へ艪をかたげ、この濱先で名うての船頭、帆柱辰藏、のつか〳〵と歩み出で。
辰藏　ホゥ、皆免さつしやれい。コリヤ、妹よ。もう茶店もしまうて、早う内へ去ね。
みど　オ丶、兄様とした事が、まだ八ツ過ぎ、日の暮れまでは二時餘り。今からしまうてよいものかいなア。
辰藏　サイヤイ、今日は日和がよいに依つて、あの流人船が、もう追ツつけ出るさうな。その事に就いてお役人衆が、皆曾根へ來るゆゑ、それでしまへといふ事ぢや。
仕一　そんなら、もう流人船が出ますか。
仕二　お役人衆が爰へ見えるなら、こちらも爰には居られまい。
仕三　それ〳〵。方寄れ〳〵と叱られぬうち、もう去にませう。
仕四　オ丶、さうしませう。ヤイ、お娘、忝なうごんす。
みど　ようござんした。
ト在郷唄になり、皆入る。
〽かゝる所へ春藤玄蕃、後に續いて判官代輝國、菅丞相を見送りて、暫し疲れを松蔭に、腰打掛くる折も折、處の代官、入江の宇平太、兩使の前に手をつかへ。
宇平　先づ以て、御兩所様には、この程よりの潮待ち、定

めし御退屈にござりませう。今日は天氣もよく、丞相の船も恙なく、この地を出船仕り、拙者も安堵仕りました。御挨拶の爲、入江宇平太、これまで伺候仕つてござります。

輝國　これは〳〵、御念の入られし御挨拶。成る程、逗留のうちは、何かと御心配。流人船も只今出船仕り、我れ我れが役目も相濟み、互ひに安堵仕る。ナニサマ、この程より段々のお心遣ひ、千萬祝着に存じます。

宇平　これは〳〵、結構なるお詞。最早御兩所とも、お役目も相濟み、苦しからずば、一兩日御逗留遊ばされて、この所の名所舊蹟、憚りながら、拙者御案內仕りませう。

輝國　イヤ〳〵、大切なる禁庭の御用、恙なく相濟みたれば、一刻も早く立歸り、事の樣子を言上いたさねばなりませぬ。イヤナニ、玄蕃どの、御同道仕らう。

玄蕃　イヤ、拙者はちと用事あれば、明日早々相立ち、夜を日について上京仕らう。貴殿は先づお先へお立ち下されい。

輝國　そりや又なぜに。

玄蕃　ヤ。

輝國　イヤサ、私しならぬ大切な御用。貴殿一人引殘り、何御用がござるぞ。樣子承らう。

玄蕃　イヤサ、そりやナニ、物でござる。オ、それよ、拙者はこの播州に所緣の者がござるゆゑ、それへ立寄り、明日早々立歸りまする。

輝國　ハテナア。

　ト云ふうち、辰藏出る。

辰藏　玄蕃さま。これにござりますか。最前より待ちかねて居りました。仰せつけられた早船の用意、卽ちこの裏手へ。

玄蕃　コリヤ〳〵、あたりほとりへ心を附けい。何にも云ふな。

輝國　玄蕃さま。見ますれば、船乘りさうにござる。ハテ、異な者と御懇意になされますの。

玄蕃　イヤナニ、あれは何でござる。拙者が用事を勤めた上、一時も早く貴殿に追ひつくやう、それゆゑ早船を申し附けたのでござります。

輝國　ハテ、それはお心の附きました。拙者も急きますれば、お指圖に隨ひ、お先へ參ります。

玄蕃　然らばお先へ。

輝國　お別れ申す。
宇平　輝國さま、拙者も村はづれまで見送りませう。
輝國　イヽヤ、それは却つてお心遣ひ。
宇平　イヤ〳〵、平にお先へ。
輝國　左やうならば、ナニ、玄蕃どの。
玄蕃　輝國どの。
輝國　萬事は都で
玄蕃　お目にかゝらう。
〽互ひに目禮、判官代、入江と共に濱傳ひ、都の空へと立歸る。
玄蕃　イヤ、うろたへ者め。あたりほとりへ目かりをきかせ。大切なる密事、輝國が聞く前で、既の事に。エヽ、あつたら膽を菜種にさし居つた。
辰藏　サア、わしもお前が目玉を剝かしやつたで、ハッと存じました。
みど　申し、兄様、もう店も方附けました。早う去なうぢやござんすまいか。
辰藏　コリヤ、妹。今宵はあなたを、此方の內へお泊め申し、明日早々船に乘せまし、兵庫までお見送り申す約束ぢや。われは內へ去んで、取方付けて、掃除して置け。

みど　アイ〳〵、合點でござんす。
辰藏　早う行け〳〵。
〽アイとみどりは甲斐しよげに、我が家をさして急ぎ行く、あと見送りて兩人は、浪打ち際に聲をひそめ。
辰藏　申し、玄蕃さま。この間よりお頼みの通り、わしが手下の船頭を、菅丞相が船に附け置き、沖中で船を止めよと、申し附け置きましたが、して、この上は、どうなさるゝお心でござります。
玄蕃　オヽ、その仔細も、とくと其方に申し聞かさうと思へども、何をいうても、相役の輝國めが、邪魔になるゆゑ、彼奴を先へ歸したは、深き思案があつての事。流人船が沖に漂ふうち、手船にて追ひつき、飛び道具を持つて丞相めをしまうて取れと、主人時平公の仰せ。併し、身が面體を見知られては、後日の詮議むづかしい。それゆゑ、われが船頭と姿を變へ、後よりぼッつき、討つて取る、手船の用意ぢやわいやい。
辰藏　成る程、そりやお氣遣ひなされますな。この濱邊から乘り出せば、人目に立つと存じまして、この松の裏手へ手船を繋ぎ置きました。身拵らへはわしが內で。
玄蕃　オヽ、サ、菅丞相を打ち殺して、船を遙かに脇へ漕

ぎつけ、陸地を密かに立歸る積りぢやて。

辰藏　海の上は此方の得物。例へ二里や三里違うても、ぼッついて首尾させます。

玄蕃　出かした。何かの用意は

辰藏　船の內で。

玄蕃　辰藏、參れ。

辰藏　ハツ。

〽慾と惡とのいさご道、踏み立てゝこそ走り行く、二人が談合、物蔭より窺ひ聞いたる判官代。

ト玄蕃、辰藏、橋がゝりへ入る。ト松蔭より輝國出て

輝國　始めて聞いたる時平が逆心。丞相のお身に凶事あつては、法皇の御所へ申し譯もなし。殊に恩ある道眞公。彼奴より先へ廻つて、お助け申すが恩返し。さうぢや。

〽胸に一物、二筋道。

ト花道の眞中まで行き、こなしあつて

この姿では人目に立つ。姿を變へて、彼奴等が船はこの裏手。さうぢや。

〽行き違うてぞ急ぎ行く。御臺所はこの世の名殘り、詞なりとも交さんと、悲しきうちに拾ひ子を、肌に抱きしめ、只一人、早御船は出で潮と、聞くに心も暮れ近く、曾根の濱邊にたどりつき。

久方　ハア、悲しや里人の噂の通り、もうお船は二三里も行き過ぎたか。せめてこの世のお名殘りに、お目にかからうと思うて、爰まで來た甲斐もなう、荒波に隔てられたる我が身の上。

〽濱邊にがつぱと打伏して、流涕焦れ泣き給ふ、みどりは內を取方附け、立戻る床几のかげ、それと御臺は近寄り給ひ。

コレ、娘御。いま聞けば、菅丞相のお身は、はや二三里も行き過ぎたとの噂。いよ〳〵それに違ひはござらぬか。

みどり　もそつと先に、アレ、あの向うの濱から、お船が出ましてござんす。流人船をお尋ねなさるゝからは、さては菅丞相さまの由緣のお方でござりまするか。

久方　成る程、自らは、丞相さまの妻、久方といふ者。せめてこの世のお名殘りに、一目逢はうと、はる〴〵と爰まで尋ねて來ましたわいなう。

〽語るうちより春藤玄蕃、辰藏もろとも立出で、御臺

と見るより引ッ攫み。
玄蕃　菅丞相の御臺、見附けた〳〵。先達て仰せの通り、流人の餘類は、假へ妻子眷屬でも、別に引離せよとの御意。その餓鬼めも菅丞相が子悴、此方へ受取り、時平公への土產にする。渡せ。
久方　ナウ、情ない。いつぞやも云ふ通り、この幼な子は誠は自らが子にあらず、花園にて拾ひし義理ある子。これぱつかりは免して下されいなう。
玄蕃　ヤア、拾ひ子と云うたら、赦免せうと思うて、よい手な事を吐かす僞り女。コリヤ、辰藏、此奴はわれ引ッ立てい。餓鬼めは身共が捻り殺す。
辰藏　合點でござります。
　ト久方御前にかゝるを、みどり、辰藏に取りつき
みど　兄樣、そんなむごい事があるものか。惡に組みしてその身が立たうか。エヽ、こな樣はなう。
辰藏　エヽ、うぬが知つた事ぢやない。爰離せ。
みど　イヽヤ、なんぼうでも、離さぬ〳〵。
　トしがみつく
辰藏　申し、玄蕃さま、此奴が邪魔でどうもなりませぬ。内へ抛り込んでから、船を廻します。お前はその女を。
玄蕃　オヽ、合點ぢや。
辰藏　妹め、うせう。
みど　そんなら、どうでも頼まれさしやんすか。
辰藏　兄が出世の妨げひろぐか。こゝ言吐かさずと、うせうてや。
〽傍若無人の帆柱辰藏、妹引きつれ走り行く。
玄蕃　サア、その子悴渡せ。
久方　どうぞ免して下されい。
玄蕃　渡せ。
　ト久方御前を押へ、立廻りにて子を引つたくり
この餓鬼めは干ぼしになつてくたばれ。
　ト打ちつけ
サア女め、うせう。
〽後の方より輝國は、宙を飛びくる身輕の打扮、玄蕃をのめらし、御臺を庇ひ、幼な子奪ひ取り突ッ立ちしは、心地よくこそ見えにけり。
アイタヽヽ。……何奴なれば……ヤア、うぬは士民め、何ゆゑ妨げする。
　ト輝國、深笠を取る。玄蕃見て
ヤア、わりや輝國。爰へはどうして。

輝國　最前歸る體に見せかけ、後へ廻つてうぬらが企み、時平が云ひ附けにて、丞相さまを船中にて殺す企み、皆聞いた。それゆゑ斯く姿を變へ、丞相さまを助けんと思ふうち、御臺の難儀。うぬらにやみ／＼渡さうかい。
玄蕃　ムウ、企みを聞いた輝國、生けて置いては後日の仇、者ども、參れ。
侍ひ　ハア、。
〽隱し置いたる玄蕃が家來、ばら／＼と押ッ取り卷き。
輝國、やらぬ。
輝國　ヤア、小癪なる人畜めら、惡く寄つたら、蹴つて蹴つて蹴殺すぞ。
玄蕃　こま言云はすな。ソリヤ。
〽ハッと一度に拔き連れて、つばなの穗先、えい／＼聲、沖にはどう／＼浪の音、打ち立て、切り立て。
ト輝國、侍ひ大勢を相手に、タテいろ／＼ある。玄蕃、辰藏、侍ひ大勢を輝國追つて入る。
久方　コレ、長追ひして怪我あるな。輝國どの／＼。
〽斯くと遠目に十六夜が、走りつまづくいさご道、こけつまろびつ浦傳ひ、やう／＼に走り着き
十六　輝國どのいなう／＼。

ト久方御前に行き當る。
お免されませい／＼。
ト顏見合せ
ヤア、お前は御臺樣。
久方　そもじは十六夜。
十六　何ゆゑこの所にましますぞ。
久方　サレバイナウ。丞相さまこの所にて、潮待ちと聞き傳へたゆゑ、お暇乞ひと、はる／＼來た甲斐もなく、お船は早二三里も過ぎ行き、剩さへ、追手の者に出逢うたわいなう。
十六　それは危ない所へ駈けつけましてござります。イヤ、申し、御臺樣。見れば、幼な子を抱いてござるが、さては菅秀才さまの乙の若君樣でござりますか。
久方　イヤナウ、この子はいつぞや、花園にて、其方に預かりし幼な子。果報拙ない子ぢやわいなう。
十六　その身になつても、矢ッ張り御介抱。なぜに捨てゝは下さりませぬぞいなア。何は兎もあれ、お身の上が危ふい。蜑の苫屋になりとお忍び申させませう。
ト此うち辰藏出る。
辰藏　ヤア、菅丞相の御臺、此方へ渡せ。渡さぬと此だ

んぴらが、胴腹へお見舞ひ申すぞ。
十六　寄つたら爲にならぬぞ。
ト切りかける。十六夜少々立廻りあるうち、輝國橋が
がりより出て、辰藏を見事に投げる。侍ひ二人切つて
かゝるを立廻りありて、見事に切り倒す。
ヤア、輝國どの。
輝國　コリヤ、女房、うろたへる所でない。時平が下知に
隨ひて、玄蕃が早船にて追ッつき、菅丞相を討ち奉
る企み。某は御臺所をお忍ばせ申し、後より追ッ附かん。
其方は裏手なる小船に乘り、丞相さまに御油斷あるな
と、お知らせ申せ。
十六　合點でござんす。我が子を育て給はりし、大恩を送
らねば、お前もわたしも人でなし。例へこの身は捨つる
とも、少しもいとひは致しませぬ。
輝國　出かした。我れとても、命に替へてお助け申さん。
十六　さうでござんす、輝國どの。
ト久方御前が抱いて居る子を取り
輝國　コリヤ。この子も次手に方附けて。
十六　そんなら、この子も。
輝國　早う行け。

十六　合點でござんす。
〽我が子と御臺を取り分けて、忠と恩義を身二つに、東
西へこそ
ト十六夜、子を抱き、向うへ入る。輝國、久方御前を
連れ、橋がゝりへ別れ入る。返し
一セイにて、右の松、上へ引き上げる。淺黃幕切り
落す。
向う。操りの本手摺。一面浪に成る。下手より二の
手三の手セリ上がる。臆病口、橋がゝり、浪幕。下
より花道セリ下げ、鳥居際まで浪セリ上る。鳥居の
根に大岩、人登る體。橋がゝり、二の手摺内より大
岩出る。ト本舞臺は、西の方より人形にて、船に乘
り、遣うて出る。
〽別れゆく、月代も早出で潮の、後を追ひ來る十六夜は、
岩角に駈け上がり、見れば向うに小船一艘、玄蕃が舳先
に立ち上がり、辰藏がエイ／＼聲、しどろ拍子に浪押し
切り、十町ばかり漕ぎ出だす。
ト船は段々東の方へ遣うて行く。十六夜、花道の岩の
上に登り

十六　ナウ、情なや。玄蕃が船は、もう向うへ行くわいの。輝國どのはなぜ遅い。丞相さまをやみ〳〵と討たせては、夫婦の者が義理が立たぬわいなう。輝國どのいなう輝國どのいなう。オヽ、さうぢや。例へ千尋の底の藻屑となるとても、女の念力、玄蕃に追ッつき、丞相さまをお助け申さいで置かうか。

〽かよわき女の念力に、心も太き抱へ帶、我が子を脊にしつかと止め、髪のかく縄、夕だすき、小太刀を拔いて差しかざし、岩角に突ッ立ち上がり。

八大龍王、恒河の鱗屑、忠義に凝つたる十六夜が、誠を感じ給ひ、力を添へてたび給へ〳〵。

〽劍をくはへ、磯打つ浪にざんぶとこそは飛び入つたり。

ト一セイにて、十六夜海へ飛び込む。花道段々と泳ぎ二の手を樣々泳ぐ事ある。これは介錯人浪子にて遣ふなり。西の方へ泳ぎ入る。ト十六夜の人形遣うて出る。

〽泳ぎ來る、さしも女の念力の、矢竹心のたゆみなく、勇みて泳ぐ白浪は、花を分け行く如くにて、玄蕃が乘つたる早船に、三段ばかり泳ぎ着く。

ト十六夜、橋がゝりの岩上の上へ泳ぎ上る。此うち輝國、向うの岩の上へ出る。

輝國　ヤア、あれは十六夜、危ふい〳〵。

玄蕃　ヤイ、皆の者。向うの岩の端に居るは、慥かに輝國めではないか。

侍ひ　左やうでござります。

辰藏　イヤ、申し、玄蕃さま。この船を目掛けて泳ぎ來るは、慥かに女でござります。

玄蕃　如何にも、この船を目掛け泳ぎ來るは、我れに敵たふ不敵の女。目に物見せん。

〽弓矢番うて、きり〳〵〳〵と引き絞り、かつきと放せば過たず、十六夜が咽喉笛を、脊中をかけて、負ひたる子まで、胸板にすつぱと立ち、ウンとばかりに苦しみの、泣き聲さへも磯千鳥の、磯邊の方をなつかしげに、我が夫なうと泣き叫ぶ、聲も幽かに輝國が、斯くと見るより、歯がみをなし。

ト玄蕃、矢を放す。十六夜に當り、いろ〳〵苦しみ、東方へ流れ行く。輝國あせり

輝國　さては遠矢に討たれしか。チエヽ、殘念やなア。

ト後より侍ひ一人かゝるを切り倒し

目前に妻子の仇敵。いつまで生けて置くべきぞや。

〽いで追ひ附かんと輝國も、海へざんぶと飛び入つたり

折から吹き來る嵐につれ、さらさらさつと逆卷く浪に、散るは水玉、水煙り、一段ばかり泳ぎしが、底を潜つて追ひつかんと、浪間にかつぱと沈みけり。

ト輝國、花道中程まで泳ぎ、沈む。玄蕃、辰藏見て

辰藏　玄蕃さま、御覽じませ。水心も知らず、海へ飛び込み、沈み居りました。鵜の眞似をする烏侍ひ、うろたへ者ではござりませぬか。

玄蕃　如何にも。輝國といひ、十六夜まで、水を喰うて死んだのは、俗にいふ身投げ心中。皆も笑へ笑へ。

皆々　ハヽヽヽ。

玄蕃　この間に、艪を押せ〳〵。

辰藏　合點でござります。ヤツシツシ〳〵。

〽腕限りに押切り押切る、水底くゞつて輝國が、舳先にすつくと立ち上がる。

ヤア、輝國めが。

ト立廻りにて、辰藏、侍ひ、櫂にて叩きかける。皆々を散々に打ち据ゑる。

玄蕃　うぬは輝國。

ト輝國思ひ入れ。

輝國　よくも妻子を手に掛けたな。目前に敵を取る。覺悟せい。

玄蕃　面倒な。ソリヤ。

〽ハツと一度に左右より、取つてかゝるを輝國が、もんどり打たせて海へどんぶり、又打ちかける辰藏が、艪柄しつかり輝國が、その身を沈めば帆柱は、腰を折られて輝國が、刀の難風、その身の夜嵐、玄蕃はすかさず切り込む刀、引ツ外して搔い潜り、ひらりとかはす身のひねり、難なく刀もぎとられ、一かせ切り込む、起しも立てず、船梁に差し通し

輝國　目前の妻子の敵。思ひ知つたか。

トいろ〳〵立廻りて、ト、捩ぢ附け、切り殺し

〽えいと差上げ、海卷く浪の眞中へ、ざんぶとこそは、投げ込んだり。

ト輝國、玄蕃を海へ切り込む。玄蕃、見事に海へはまる。ト玄蕃死骸、介錯人、浪子にて遣ふ。輝國、思ひ入れあつて

今一足早くば、斯くやみ〳〵と殺しはせまい。現在妻や子を、鮫や鯨の餌食となしたか。せめて屍を尋ねて見ん。

〽船押し廻し、十六夜が、死骸はいづくと尋ぬれど、は

や引き潮に誘はれて、その行き方はなかりけり、舳板にかつぱと伏しまろび、譯も涙に沈みしが

ト輝國、いろ／＼尋れる事あつて、泣き倒れ、また氣を替へ

ハア、、誤まつた／＼。傳へ聞く、魯國の呉起は、妻子を殺して義を立つる。我れも妻子を殺し、恩を謝して、義を立つる。さうぢや。

〽心一つに納むれど、猶逆立つや沖津波、我が一心の早手船、屍は浪に曝さば曝せ、命は天に奉る。感應納受の誓ひの船。

八大龍王、天龍八部。

ト侍ひ一人、海より上がり、切り掛くる。立廻りにてふゝ首を切る。仕掛けにて船の舳先へ首切る。

〽龍女が成佛海に在り、風神、水神、力を合せ、菅丞相のおはします、筑紫の浦へ漕ぎ寄せ／＼、寄せ來る浪に舵取り直し、君を慕うて行く船は、あと白浪と

ト三重にて　　幕

八つ目　筑紫白太夫隱居所の場

役名――白太夫。女房十六夜の亡靈。判官代輝國。小磯。荒藤太。物淵の宰相。安樂寺住僧。神子、お米。禰宜、太郎太夫。禰宜、主計。藤原宿禰。菅丞相。

造り物、三間の間、二重舞臺。向う赤壁、納戸口、但し廻り壁あり。西の方、折れ廻り、障子屋體。前に白梅の盛りの立ち木あり、橋がゝり、塗垂れ。よき處に門口。正面に荒菰の上に八つ足の机、一萬度のお祓ひ飾りあり。三方に神酒德利、洗ひ米など据ゑてある。幕の内より小磯、振り袖。神子、お米、詰め袖、千早掛け、神子の姿にて舞つて居る。白太夫、下袴、ゆふ襷。荒藤太、荒縞のやつしにて、白太夫に掴みかゝつてゐる。安樂寺住僧、花の帽子、僧衣。禰宜、主計、太郎太夫、木綿やつし、白の差貫、ゆふ襷にて、荒藤太をとめて居る。この見得、庭神樂にて幕明く。

荒藤　サア、親仁。どうするのぢや。讓り狀渡さにや踏み

殺すぞ。

皆々　コレ〳〵、藤太。今日は大事の太々神樂、料簡して去なつしやれ。

白太　申し、皆樣。あゝいふ不孝者に構はずと、抛つて置いて下さりませ。

荒藤　ヤイ〳〵、死ぞこないの茶袋親仁め。一體、この太太がいま〳〵しい。妹めも措きやがらぬか。何奴も此奴も止め居らんか。

ト叩きにかゝる。皆々マア〳〵と云つて、荒藤太に取りつき、下に置く

白太　ヤイ、不孝者め、今日の太々を、なんで邪魔しをるのぢや。

荒藤　オヽ、おれが云ふ事聞きさらさぬゆゑ、邪魔するがなんとした。

白太　エヽ、おのれ、親に向うてその頬桁を。

皆々　マア〳〵、ようござるわいなう〳〵。

ト留める。荒藤太「なんぢや〳〵」と尻を捲り、のッかゝるを、安樂寺住僧留めて

住僧　アヽ、コレ〳〵、藤太。貴樣もどうしたものぢやぞいの。この筑紫の安樂寺は、兩部ぢやに依つて、白太夫どのを頭にして、神道を守る。また愚僧が半分社務にして、神樂所の供物もすぐれてあがるゆゑ、皆相談にして行くのに、こなた一人が、又しても〳〵、白太夫どのをせたげ來る。マア、今日は一年に一度の太々神樂、兩部立合ひの祈禱ぢやないか。愚僧は格別、禰宜衆の手前も、ちつとは耻ぢたがよいわいの。皆の衆、さうぢやないか。

皆々　左やうでござります。

ト此うち輝國、着流しにて橋がゝりより出て、門口に聞いて居る。

主計　コレ〳〵、藤太。皆が挨拶ぢや程に、マア〳〵、今日の所は、お住持の詞に附いて

荒藤　否ぢやわいの。今日の神樂を幸ひに、坊主と禰宜の眞中で云ふのぢや。ヤイ、老ぼれめ。この隱居屋敷の讓り狀は、もう渡さぬか。惣領なれば、本家を讓り、妹めを連れて、爰へ隱居したと思うたが、和御寮は金持つて居やるの。オヽ、その證據は、この島へ來て居る菅丞相とやら、寒雀とやらいふ流人を、朝も晩も見舞うて、イヤ、お成りで候ふの、お出でぢやのと、內も僅かに此やうに普請して、疊の表替へして、結構にするは、ぬ

つくりと金持つて居るのぢやないか。コレ、おれはの、胴に直りや、腐る。側張りや負ける。丁乘りや半が出る。田地も賣れば、家も賣る。米屋はせがむ。歩錢はおッ立てる。一向今はひらいこばかりで、小歩き同然に暮らして居る、御子息の難儀は見向きもせず、流人の菅丞相をはごくむとは、日本一の無得心者の惡者とは、親仁、貴樣の事ぢや。エヽ、親といふのも腹が立つ。なんと、コレ、お住持、おれが云ふのは無理か。尤もか。尤もであらうがの。云うて見や。

住僧　サア、マア、無理は無理ぢやが、又さう事を分けて、とつくりと云はつしやると、矢ッ張り無理ぢや。

荒藤　エヽ、鈍な利郎ぢやわい。

ト突き飛ばし、主計の側へ行き

コレ、貴樣は、物の嚙み分けがよい。お住持と二人判斷して見や。お住持もとつくりと聞かつしやれい。

住僧　サア〳〵、聞くてや。

主計　して、どうぢやの。

荒藤　マア、世間の大法にも、親の物は子の物ぢや。

住僧　よいワ。

荒藤　惣領のおれに讓るが道ぢや。

住僧　よいワ。

荒藤　時に、いま親仁が云ふには、惡者ぢやに依つて、ならぬと云ふワ。

住僧　オヽ、さうぢや。

荒藤　どこにおれが惡者ぢや。

住僧　さアれば。

荒藤　コレ、マア、云ひ立てゝ見せう。札事と云や、あはせまんぐわん、骨牌の吹替へは綺麗にやるワ。

住僧　よいワ。

荒藤　さて、四壺は一から六まで、四通りのかたみ見たまで覺えて居るワ。

住僧　よいワ。

荒藤　丁半は達者に、組み前には一足をこぼし、い、たてぼうは掠つて、手味噌いくワ。

住僧　器用な事の。

荒藤　サア、誰れが聞いても器用なと云ふ。さて又、小盜みは何でもするワ。

住僧　よいワ。

荒藤　喧嘩好きぢやに依つて、ぐづるワ。

住僧　よいワ。

荒藤　娘から小女郎まで、孕ますに依つて、間男するワ。
住僧　するワ。
荒藤　ちつとの間、ヂッとして居ぬワ。
住僧　居ぬワ。
藤太　夜歩きするワ。
住僧　するワ。
荒藤　家尻切るワ。
住僧　切るワ。
荒藤　それ見たがよい。何が惡い。云ひ並べるうち、一つもひッついな事は、微塵もないワ。皆只する事ばつかりぢや。斯ういふ息子が外にあるか。
住僧　イヤ、無い〳〵。
荒藤　よう思うて見たがよい。
住僧　成る程、さう云うた所は、譯が立つてある。
主計　イヤモウ、殘る所もない多藝な人ぢや。
住僧　サア、あれ程藝能が達者にあらうとは思はなんだ。ア、白太夫どの位の息子にするは惜しいもんぢや。
荒藤　誰れもさう云うてぢや。
住僧　いつそ、斯うもさつしやれぬか。
荒藤　どうしませう。
住僧　斯うもよからう。
荒藤　どうでござる。
住僧　ハテ、どうなとさつしやれ。
荒藤　エ、人をふづくるのかい。
主計　イエ〳〵、お住持では判斷がなし憎い。また一つ、斯うして見さつしやれ。
荒藤　どうぢやの。
主計　いつそ、まそつと藝能に精を出すぢや。
荒藤　面白いワ。
主計　とんとまものになるワ。
荒藤　なるワ。
主計　捕へられるワ。
荒藤　られるワ。
主計　牢へ入るワ。
荒藤　入るワ。
主計　引廻されるワ、首切らるゝワ。獄門に上がるワ。犬が喰うてしまふワ。これで止み切るといふものぢや。
住僧　これはよい。コレ〳〵、この思案がいつち上分別ぢや。
荒藤　エ、。

ト皆々を踏み飛ばし

ろくな事は一つも云はぬ。よい〳〵、直に見知らさう。

ト白太夫が側へ行く。皆々留めるを踏み飛ばし

何奴であらうが、寄つたら踏み殺すぞ。

トぐつと尻まくり、どつと坐り

コレ、親仁。この隱居屋敷の家財かざい、釜の下の灰まで讓るといふ判をしておこせばよし、否と云ふが最期、骨も臑も、ほつき〳〵と折つてしまふ。サア、否か、應か、一口に返事さらせ。

白太　イヤ、おのれは〳〵。日本の阿闍世太子といふは、おのれが事ぢや。この隱居屋敷と、牛と身とを退いて、本家は皆おのれに讓つた事は、これにござる衆が證據。八丁といふ田地に、山ばかりが一里四方、鹽燒き場から、網引き場、二年たゝぬうちに、棒に揮つてしまひ居つた。この隱居屋敷はな、京におのれが妹もある。三番目のこの小磯、おのれにかゝつて、年たけるまで男も持たず、やもめ暮らし。もう追ひ〳〵に聟を入れねばならぬ、末で、ともかうもするならば、まんざらおのれにも。孤かづけては置くまいと、後々までも心を配る親の慈悲。それにマア罰當りの業人め。

荒藤　コリヤ、老ぼれめ。その談義聞きたうない。どうあつても、この隱居屋敷は、おれに讓らぬのか。

白太　オヽ、讓らぬ。おのれがやうな不孝者に、なんの讓ろぞいやい。

荒藤　エヽ、固意地な死損ひめ、さう云やモウ、腮引ッ裂かにやならぬやうになつたぞよ。

ト立ち上がるを、小磯留めて

小磯　コレ、兄樣。もうお前も、ちやつと料簡して去んで下さんせ。

荒藤　イヽヤ、ならぬ。この跡式、讓り狀取らにや、去にやせぬぞ。

白太　エヽ、これにつけても、コリヤ、小磯、常から、早う男を持て〳〵と云ふは、玆の事ぢや。聟がありや、彼奴を、グツと縛し上げて置くわい。

荒藤　オヽ、縛し上げてもらはうわい。

ト小磯を引き退け、白太夫を蹴飛ばす。小磯ちやつと留め

小磯　アヽ、コレ、勿體ない。兄樣、お前は氣が狂うたか。お前、現在の親を蹴るとは、足がちぎれませうぞえ。

荒藤　エヽ、構ひくさんない。コレ、親仁、おれが云ふ事

聞かぬからは、もう親でも、子でもない。貴樣は勘當ぢや。

小磯　エ、。

荒藤　イヤ、親を勘當するからは、おりや他人ぢや。へ、、けうといか。

白太　アレ〳〵。あんな事を吐かし居るわい。コリヤ、小磯、早う男を持つてくれいやい。

小磯　サイナア。常からお前の云ひ附けなれど、男を持てば、おのづと不孝にならうと思ひましたが、今日の今では男が欲しい。

よね　コレ、小磯さま。お前も早う男を持つて、あの荒藤太さまを、きつい目に遭はしてもらはしやんせいなア。

小磯　サア、わしもさう思うて居るわいなア。

ト住僧を見て

コレ、申し、お住持樣。お前、どうぞわたしが聟になつて下さんせんかいなア。

住僧　ハレ、滅相な、愚僧は精進でござるわいなう。

小磯　ほんに、さうぢやなア。ア、、どうぞよい男が欲しいなア。

よね　エ、、わしが男なら、聟になるけれど。

荒藤　やかましいわい。

ト小磯、主計が側へ行き

主計さま、お前、男になつて下さんせいなア。

主計　ムウ、それは、ほんにおれを聟にする氣かいの。

小磯　見て居やしやんす通りの譯、父樣の難儀には替へられませぬ。一生連れ添うて、いとしがるわいなう。

主計　こりや忝ない。常からこなたに惚れて居るけれど、有やうは云ひかねて居ました。また、時節も待てば、結構な二汁五菜の据ゑ膳、戴いて賞翫する。今からは聟ぢや。ドレ、ちよつと手附けに。

荒藤　コリヤヤイ、俄かに聟穿鑿したとて、滅相に我まゝにはさゝぬわいやい。

ト蹴る。

白太　エ、、聟が欲しいわいやい〳〵。

小磯　オ、、それ〳〵、コレ、申し、太郎太夫さま。常からお前と懇ろしたは、茲の事でござんすわいなア。

ト太郎太夫の側へ行く。

太郎　どこにおれが、懇ろを。

小磯　ア、、コレ。申し。父樣の難儀になる。コレイナア、云ひ交した太夫樣いなア。コレ、申し。

ト手を合せ、呑み込みます。

太郎　オヽ、成る程。云ひ交した事を、とんと失念した。

小磯　互ひに變るな、變るまいと、約束した仲ぢやないかなア。親の難儀は見捨てゝは居られまいなア、コレ、こちの人。

太郎　オヽ、如何にも〳〵。懇ろして居るからは、女夫ぢや。女夫ならば、あの兄の悪者めを。

ト手を振り上げる。荒藤太睨む。

ト後へ寄る。

荒藤　其やうに握り拳を振り上げて、おれを相手にするか。べら作めが。サア、親仁、緣切つたからは、構ひがない。譲り状おこさぬと、踏み殺すぞ。

白太　エヽ、まだ吐かすか。おのれは〳〵。皆の衆の手前もある。現在親にその頰桁。エヽ口惜しいな。マア、年が十若けりや、おのれをばさうして置かうかい。

荒藤　イヤ、まだ頤を叩き止まぬか。胴骨をへし折つて、仕舞ひをつけてこまさう。

トずんど立つて引き廻し、脊骨も碎けと薪ざつぱ、なくる情も荒藤太、始終を窺ふ判官代輝國、見かねてつツと走り入り、藤太が腕ツ首引ツ摑み、庭へどつさり投げ飛ばし、親子を引ツ立て、後に圍ひ立つたるは、心地よかりし有様なり。藤太砂まぶれになりて起き上がり。

荒藤　ヤア、うぬはどこからうせた。毛野郎め。かけも構はぬ喧嘩の仲裁人。うぬはマア何奴ぢヤ。

輝國　オヽ、聟ぢや。

小磯　エヽ。

荒藤　なんぢや、聟ぢや。

輝國　オヽ、聟ぢや。色を見て惡を察す。醫は脈を取つて藥を盛る。歌人は居ながら名所を知る。通りかゝつて、一々喧嘩の様子、とつくりとあれにて聞いたゆゑ、ちよつと仲裁人に出た、間に合せの聟ぢや。

荒藤　わりや仲裁人ぢやない、きつい左平次ぢやなア。親の物は子の物、殊におれは惣領の息子ぢや。親の跡式取らうといふが、誤まりか。

輝國　オヽ、誤まりぢや。

荒藤　なんで誤まりぢや。

輝國　わりや他人ぢや。

荒藤　ヤ。

輝國　わりや親を勘當したりや、他人ぢや。

よれ　オヽ、さうぢや。先刻に親子の緣を切れば、他人ぢ

や。縁を切ると云はしやんしたなア、皆様。

皆々　オヽ、さうぢや／＼。

荒藤　ちよこ才な。それをうぬらが吐かす事かい。イヤ、コレ、他人なら、この跡式取る事はならぬか。

輝國　ハテ、それが天下の大法ぢや。かけも構はぬ他人が、跡式は取られまいわい。

荒藤　ムウ、よい。親仁、勘當免した。元の親子ぢや。なんと、これで跡式は取られうが。

輝國　すりや、勘當免したか。

荒藤　オヽ、勘當免したからは、元の親子ぢや。

輝國　ハレ、料簡強い御子息ぢやなア。勘當免せば、元の親子ぢやぞよ。その親をなぜぶつた。

荒藤　ヤ。

輝國　子の身として親を打つ不孝者。通りかゝつて聞に合せの聟が、マア、さうはさすまいわい。

ト突つ放す。小磯嬉しきこなし。

小磯　アイ／＼、さうでござんす。天から降つた大事のわたしが、男ぢや／＼。こちの人でござんす。

白太　オヽ、聟どのぢや／＼。思ひ掛けない、よい所へ、よう來て下さつた聟どのぢや。

荒藤　コリヤ／＼、待て／＼。あの、ふり賣りの聟を、二人とも得心か。

白太　オヽ、得心の段か、願うてもない幸ひの聟どの。

輝國　舅や女房を打擲するを、聟の身でなんと默つて居られうぞ。妹聟の初見參、近附きの爲に、カウ／＼カウ。

ト薪ざつぱにて、りう／＼と打ち据ゑる。

よれ　ても、えらい聟どのが湧いて來た。

主計　よい氣味ぢや／＼。

佐倫　コレ／＼、藤太。日頃から不孝の罪、キツと嗜なんだがよい。

荒藤　エヽ、やかましい。もう百年目ぢや。

ト輝國にかゝる。

輝國　これは／＼段々の御挨拶、以後は別懇に申し談じませう。

ト投げる。

荒藤　何をさらすぞい。

ト又かゝる。立廻りあつて

輝國　舅どのゝ喧嘩を申し受け、舅の物で小舅どのをもてなすのぢや。

〽かゝれば投げられ、起きればぶたれ、脚腰立たず、ふぬけの藤太、目鼻も分かぬ砂まぶれ、やうやくに起き上がり。

荒藤　聟入りの振舞ひは痛い御馳走。小舅、腰骨にこたへて、痛み入るぢや。此お禮は後程キッと。

輝國　念には及ばぬ、何時なりと。

荒藤　おのれ、待つて居れよ。

〽達者な物は口ばかり。

アイタヽヽ。

〽あいた〳〵としかみ面、臑引摺りて逃げ歸る。

仕僧　ても、よいざまでござるなう。

主計　イヤモウ、よい氣味の段か、日頃からの憎さ。

太夫　今の心地よさといふものは、あつたものではなかつた。

よれ　荒藤太ではなうて、なまこを縛つた藁藤太ぢや。

皆々　ハヽヽヽ。

白太　さても〳〵、好い所へ好い人が來て下さつた。親仁の仕合せ、お禮もとつくり申したい。マア〳〵これへ。

小磯　申し、父樣。

白太　ヤア〳〵。

小磯　あなたの今仰しやつた通り、どうぞなア。

白太　どうぞなアとは。

小磯　エヽ、つんとモウ、兄樣にあなたが、仰しやつた通りになア。……わたしになア。

白太　なア〳〵と云うては、なんぢや、譯が知れぬわいやい。

よれ　イヤ〳〵、こりや小磯さまの云はしやるは、大方あのお侍ひ樣を殿御に持ちたいとの事であらう。ナア小磯さま、さうかえ。

小磯　アイ。

白太　エヽ、さうならさうと云へばよいわい。この上は遠慮も瓢簞もいらぬ。今のお世話といひ、われが氣に入つた事なら、聟にせいで何とせう。

ト輝國と顏見合せ

ハヽヽヽ。これは〳〵、マア、思ひ掛けもない、只今のお世話。とてものお世話次手に、アノ、妹の小磯も、どうぞこなたのお世話で、近頃押し附けがましいけれど、聟になつて下されうなら、ナウ、申し、お住持樣。皆の衆。

仕僧　さうとも。どうぞ聟になつて進ぜて下されうなら、

親仁白太夫の滿足でござらう。

主計　イヤモウ、總々が達てのお願ひでござる。

太郎　どうぞ聟になつてやつて下さりませ。

輝國　これは〳〵、何れもの御挨拶、忝なう存じますが、私しは上方の浪人、身上稼ぎの爲に、この國へ下りましたれど、それと知るべの無い身の上、殊に、只今の仕儀を見かねて、入つてちよつぽりと。

白太　サア、嘘の聟を、ほんまの聟にしたい娘が願ひ。

輝國　おやと申して、餘り早急な。

仕僧　兎角は善は急げ、上方から遙々ござつて、この筑紫で聟になるとは、即ちこれが縁といふもの。ナウ、白太夫どの。

白太　さうでござる。こちらも幸ひ。定めて上方のお方とあれば、お連れ合ひもござらうが、何を云うても只今の體裁。一人の兄めはあの通りの不孝者。近頃不請ながら、得心して。

輝國　成る程。故郷には妻子も、……イヤサ、妻子もござつたなれども、ちと望みあつて、私し一人參りまして、賴む知る邊とても

白太　サア、無ければ猶の事。この妹、名は小礒といひます。外に姉もござれど、京へ登つて居ますゆゑ、今ではほんの獨り娘。

小礒　どうぞ、申し、わたしがやうな不束な者でも、御不便をかけて下さりませうなら、マア第一父様への孝行にも。

白太　なるとも、なるとも。どうぞ親子の賴みでござる。

輝國　左やう仰しやる事、辭退も異なものなれば、お詞に隨ひませうが、不調法者でござります。この上は御憐愍を。

白太　なんの御憐愍どころか、この妹さへ可愛がつて下さるなれば、今日からは、おれが聟どの。聟は子と云ふではないか。

輝國　如何にも。然らば先づ、舅どの。

白太　聟どの。

輝國　女房ども。

小礒　こちの人。

白太　ハヽヽヽ。めでたい〳〵。直ぐにこれから奥へ行て、杯しませう。

仕僧　サア、さらりと埒が明いた。

太郎　こちらも手傳ひませう。

よれ　小磯さま、さぞ嬉しからう。

白太　オヽ、嬉しい〳〵。聟どのござれ、祝言の杯さそう。

オヽ、めでたい〳〵。

仕僧　太々神樂の御利生で

皆々　鈴をいたゞくあやかり娘。

〽あやかり者と囃し立て、神樂の當夜が忽ちに、祝言振舞ひ、酒になる、喧嘩の裁人聟になる、後の緣ぞ。

ト送りになつて、白太夫、輝國、小磯こなしあつて、皆々引連れ、奥へ入る。あと合ひ方になり、荒藤太、橋がゝりより、そろ〳〵出て、窺ひ、内へ入る。奥を見て

荒藤　さては、もう最前の奴が、いよ〳〵聟になり居つたわい。もうこの上は、親仁めに一服。

ト懐より毒の包みを出して、又隱し、奥を窺ひ、神前の三方を取つて來て、德利の中へ右の毒藥を仕込む。此うちおよね出かけ

よれ　荒藤太さま。そりや何さんす。

ト荒藤太悔りし

荒藤　ヤア。……イヤ、こりやなんぢや。毎年の大々、祈禱の爲、おれも戴かうと思うて。

よれ　嘘をつく人樣ぢや。わしや、先刻にから見て居た。その德利へ毒を入れて、親仁樣へ服ますと云はしやんした。滅相な。親に毒を服ましてよいものかいなア。よいよい。おりや奥へ行て、親仁樣に云はう。

ト行かうとするを捕へ、口を押へ

荒藤　それ云うて堪まるものか。うぬ、もう命はねぐさつたわい。幸ひの毒見ぢや。この酒くらへ。

よね　エヽ、滅相な。それ飲んだら死ぬるわいなア。

ト逃げうとするを、いろ〳〵あつて引ツ捕へ、仰のけにして毒酒を飲まして、振り廻す。此うちおよね苦しむ。

荒藤　よう〳〵。思ひ入れ〳〵。

トおよねいろ〳〵あつて、血を吐き、死ぬる。

ても、毒の廻りは早いの。

ト死骸を引ッかたげ、蹴込み、右の三方を神前へ直し置き、

親仁めをあれで殺せば、跡式はおれが物。マア、それよりは菅丞相が肝心。

ト尻からげる。奥にて

皆々　三國一ぢや。聟に成り濟ました。シヤン〳〵。

ト手を打つ。

へ祝うて三度土器の、燈火よりも蠟燭の、火影ちらめく風に連れ、この世の縁は盡き弓の、矢先きに命を失ひし、十六夜が亡魂とは、誰かそれぞと門の口、しよんぼりと立つ夜の鶴、親子のきづな古郷の、軒端に聲も細々と。

ト寝鳥になつて、十六夜、セリ上げにて出て

十六　妹、小磯々々。

へ小磯々々と呼ぶ聲も、涙はら〳〵はらからの、血筋にこたへて思はずも、小磯はふつと門の口。

ト小磯、不思議さうに奥より出て

小磯　慥かに今のは、京の姉様の聲ぢやが。

ト十六夜を見て

ヤア、お前は姉様。よう戻らしやんしたなア。おまめで嬉しうござんす。父様も随分達者で、明け暮れ懐かしい〳〵と云うてゞござんすわいなア。さうして、マア、いかうお顔の色も悪し、いかうやつれも見えます。氣合ひでも悪うござんすかえ。

十六　サイナウ。長の旅路を潮風に吹かれて、何の色がよからう。開けば、奥にお客もあるさうな。ちよつと父様を、爰へ呼び出してたもいなう。

小磯　オヽ、改まつた、なんの事ぢやいなア。久し振りでといひ、なんの遠慮。マア〳〵、お入りなされませいなア。

十六　イヤ、マア、呼びましてたもいなう。

小磯　アイ、そんなら爰へ呼びます。申し、父様。京の姉様が見えましたわいなア。

白太　ヤア〳〵、なんぢや。京の姉が戻つたか。

小磯　アイ、爰に居やしやんすわいなア。

白太　姉とした事が、なぜ内へ入らぬぞ。ドレ〳〵。

ト門口へ出て

ほんに姉か。よう戻つたなア。マアマア、内へ入りや。

ト皆々内へ入る。

ほんに今日は嬉しい事だらけ。オヽ、袖も詰めたな。今は名も變つて、出世の奉公するげな。さうして、徒歩なれば草臥れたであらう。但しは船か。さうして輕々しい。連れでもあるか。供もあるであらう。親の内へ戻るに遠慮はない。ソレ妹、ちやつと爰へ呼べ。

小磯　アイ。

ト立たうとする。
十六　アヽ、コレ、妹。外に連れはないわいなう。
小磯　アノ、長の旅路を、たつたお前一人かえ。
十六　サイナウ。
ト俯向く。白太夫ほた〳〵して
白太　マア、何でも、よう戻つて來た〳〵。さうして器量も上がつた。色もくつきり白うなつた。とうとう麥の粉と娘の子は、里へ出せとの世の譬へ。シタガ、この頃は何とやら、夢見が續いて惡いゆゑ、それで今日は、おらが處で神樂を飾り、太々を打つた、隨分無事なやうに。ナア、妹。
小磯　それ〳〵、父樣が夢見が惡いと云はしやんしたゆゑ、わたしも氣にかゝつて、海山隔てた姉樣の身の上、祈禱の爲というて、安樂寺のお住持樣や禰宜樣達も、奥で酒盛りしてござんすわいなア。
白太　オヽ、それよりは、肝心の事をとんと忘れた。姉、喜んでくれ、妹の小磯に聟を取つて、いま祝言の最中ぢや。
十六　それは嬉しうござんす。コレ、妹、隨分夫婦仲ようして、父樣に孝行にしてたも。賴むぞや。

白太　イヤモウ、そりや氣遣ひしてくれな。兄の惡者めと違うて、それは〳〵孝行にしてくれる。それゆゑの今宵の祝言ぢやわいの。
小磯　申し、姉樣。これからは、わたしも今までとは百倍、殿御を持てば、猶孝行にせねばなりませぬ。それはさうと、姉樣、父樣の云はしやんす通り、いかうお顏の色が惡いが、氣合でも惡いかえ。
白太　サア、おれもそれが氣にかゝる。姉、何とぞしやせぬか。
十六　イエ〳〵、何ともしや致しませぬわいなア。
白太　何ともせぬか。マア、落ちついた。
十六　イヤ、申し、父樣、お前にお賴み申したい事がござります。
白太　ムウ、賴みたいとは。
十六　アイ、外の事でもござんせぬ。今この濱邊を通つて參りましたが、年の頃は二十歲餘りの女の死骸、脊に赤子を負ひながら、雁股の大矢にて咽喉笛を射通され、負うたる子まで貫かれ、髮は藻屑に搔き亂れ、屍は浪に漂うて、潮引く時は日に照され、さし潮には浮み出て、浮きつ沈みつ搖られ來て、今この濱の岩波に、打ち寄せら

れたを見ますれば、わたしが顔に生き寫し、小袖の模樣、帶の色、もしもお前が見やしやんして、姉が死んだと力を落し、泣かしやんせうかと思うて……それでお話し致します。

小磯　オヽ、姉樣なんのマア。生き〳〵して居やしやんすお前、誰れがそんな事、思ひませうぞいなア。

白太　それ〳〵。わつけもない事云ふものぢや。久し振りで戻つた姉、雛どのにも引合はさうし、馳走もせねばならぬ。

十六　申し、父樣。わたしへの御馳走は經陀羅尼、一遍の念佛。

小磯　アレ、また忌はしい事云うておぢや。そんな事云はずと、ちやつと奧へござんせいなア。

ト此うち始終寢鳥。

十六　サア、奧へも行かうが、只心にかゝるは彼の死骸。どうぞ早う引上げて、矢柄も拔いて、負うた子を引分けて、二筋の煙りとなして、跡弔らうてやつて下さんせ。その功德は皆わたしが爲になります。どうぞ願ひを叶へて下さんせいなア。

白太　ハテそれ程に心にかゝる事なら、奧の衆を賴んで見よう。

皆々　アヽ、殊の外醉ひました〳〵。

ト皆々出る。

白太　オヽ、こりや、皆の衆。もう去なつしやるか。

太郎　去にます〳〵。今日のやうな賑かな大々神樂はないなう。

主計　それ〳〵。その上、俄の祝言でめでたうござる、白太夫どの。

住僧　愚僧も直ぐに歸りませう。祝言の座敷で僧衣を掛けて居るは、珍らしい婚禮。

主計　葬禮と取違へはせぬか。

太郎　コレ、滅相な。

ト白太夫の方を見て

住僧　アヽ、イヤ〳〵、これもはかいきがして、めでたい〳〵ハヽヽヽ。

白太　イヤ、まだめでたい事がござる。コレ、皆も見て下され。京から姉が戻りましたわいの。

太郎　ほんに、姉御ぢや。マア、達者で、重ね〴〵。

皆々　めでたい〳〵。

住僧　時に白太夫どの。何か取紛れて忘れて居たが、今宵

菅丞相さまが御宿願の仔細に依つて、これへお成りの筈ぢやぞや。

白太　成る程、その用意で、どこもかしこも綺麗に掃除して置きましたが、不思議なは、あの向うに在る梅、いつの間に生えたやら知れぬが、この隱居屋敷の普請の時、庇の方へ枝がふつてあつたゆゑ、邪魔になるに依つて、明日早う枝を下ろさうと云うて居た翌る日、不思議な事の、南へさした枝が、北の方へ枝が振り替つた。ナニガ、悧りせまいか。ても奇妙なと聞き傳へて、この筑紫は愚か、壹岐、對馬から拜み參りのやうに見に來ました。

住僧　イヤ、爰な梅が振り變つた事は、上方まで、きつい噂であつたわいなう。

白太　それはさうと、幸ひのお住持樣。ちとお賴み申したい事がござります。

住僧　ムウ、賴みたいとは、なんの事でござるの。

白太　サア、この濱先に、女子の死骸が流れ寄つたげにござる。それをどうぞ引上げて、爰まで持たしておこして下さるまいか。

太郎　それは不淨な賴みぢやが、神道の我れ〳〵、お住持の頭役、弟子衆連れて行てやらしやれ。

住僧　ハテ、神佛は水波の如く、殊に、兩部習合なれば、別に不淨とも申されまい。愚僧が參りてよろしく計らひませう。

白太　そんなら、そこへ賴みます。

住僧　心得ました。

皆々　もう歸りませう。いかい御馳走にあひました。

白太　これは皆御苦勞でござりました。

ト白太夫しか〳〵ある。皆々橋がゝりへ入る。

姉聞いたか。追ツつけ爰へ來るぞ。その間奧へ去て草臥れを休みやいなう。

小磯　父樣があのやうに世話やかしやんす程に、ちやつと奧へござんせいなア。

十六　オヽ、行かいでなんとせうぞいの。

白太　小磯、ソレ、案内せい。

小磯　アイ〳〵、サア、姉樣、斯うござんせ。

ト小磯、十六夜先に立つ、白太夫こなしあつて

白太　ても、よい女房になり居つた。

〽伴ふ親子同胞が、今はこの世になき人とも、白髮頭を打振つて、いそ〳〵奧へ入りにけり。

ト暮れ六ツの鐘打つ。

〽暮れ行く鐘に輝國も、心ならず一間を立出で

輝國　現在連れ添ふ、妻子の最期を餘所に見て、聟入りの、祝言と……ア、、イカサマ、緣といふものは變つたもの。筑紫の涯へ來て、夫婦の約束。これ前世の約束事。

〽心で心取り直す、折柄いそ〳〵娘の小磯、まだうら若き初戀の、云うて見たさも恥かしながら

ト小磯、行燈を持ち出て、輝國を見て、いろ〳〵恥かしき思ひ入れ。

小磯　こちの人。

輝國　オ、、これはお娘御。

小磯　わたしやお前の女房。

輝國　ヤ。

小磯　たつた今、奥で祝言したぢやないかいなア。

輝國　オ、、成る程、杯したら、其方はおれが女房。オ、、あんまり早急なゆゑ、とんと忘れた。

小磯　お前は都のお方、わたしは筑紫育ちの不束者。お前の氣に入るまいかと、わたしや案じて居るわいなア。

輝國　ハテ、京と筑紫と、いま杯をしたら、二世までも變らぬ夫婦。

小磯　それがほんとなら、嬉しいけれど……イヤ、申し、こちの人、喜んで下さんせ。先刻に、父樣がお前にも話さしやんした京の姉樣、お潮さまが戻つてぢやあつたわいなア。

輝國　オ、、それはめでたい。京とあれば懷かしい。定めて奉公でもして居るといふやうな事か。

小磯　アイ、しかも內裏樣に。

輝國　アノ、內裏にか。

小磯　なんと、けうといものであらうがな。

輝國　大內ではお端下ではあるまいが、但しは女院方か。大內でお潮といふ名は聞き馴れぬが。

小磯　サア、小さい時の名はお潮というたけれど、京へ行かしやんして、今の名は變つて、十六夜といふわいなア。

輝國　ヤ。

ト悄りする。小磯飛び退き、悄り。

あの幼少の時はお潮というて、今の名は十六夜といふか。

小磯　アイ。

ト慄へて云ふ。

輝國　その十六夜が來て居るか。

小磯　アイ、奥の一間に居やしやんすわいなア。
輝國　アノ十六夜が。
小磯　アイ。
輝國　奥に居るか。
小磯　アイ。
ト障子屋體に十六夜の影坊師寫ろ。輝國見ていろ／＼思ひ入れある。
小磯　ムウ。
〽ムウと、とつおいつ。
ト俯向く。小磯、輝國が顔を見て
小磯　お前、何とぞさしやんしたかえ。
輝國　そんなら迷うて居るか。
小磯　迷うて居るかとはえ。
ト輝國こなしあつて
輝國　オヽ、おれが迷うて
小磯　エヽ。
輝國　サア、おれが迷うて來て、爰の聟になつたれば、其方はおれが女房
小磯　アイ。
ト輝國、障子の内を見て

輝國　現在の女房が
小磯　アィ、なんぢやえ。
輝國　イヤ、いかう夜が更けた。
小磯　滅相な。いま日が暮れたさかいに、灯をともしに來たわいなア。
ト門口へ出て見て、いろ／＼あり、寝ようといふ思ひ入れ
ア、ほんに、きつう夜が更けたなア。
ト日をすり
夜が更けた。もう寝ようかいなア。
輝國　オヽ、寝よう。奥へ行て寝所も拵らへて置きや。
小磯　アイ、わたしや奥へ行て、蒲團を引いて置くに依つて、お前も後からお出でなされませ。
ト奥へ行かうとして、輝國を見る。輝國は障子の方を見るこなしにて、顔見合せ、兩人思ひ入れある。
〽笑を殘して入りにけり。
ト小磯嬉しきこなしあつて奥へ入る。
〽その間遲しと駈け入つて、一間を見れば、影も形も陽炎の、姿掻き消し失せにけり、輝國は茫然と。
ト淨瑠璃にて、障子屋體を明ける。影繪消える。掛け

烟硝上がる。輝國いろ〳〵ある。
輝國　たつた今まで有りつる十六夜。最早形を隱したか。この輝國に、何恨みがあつて、詞を交してくれぬ。親子のきづながあればこそ、親兄弟には名殘りを惜み、爰までは來たではないかいやい。たつた一言輝國かと、詞を交してくれ。女房ども。せめて稻妻、石打つ火の、暫しなりとも姿を顯はし、夫に詞を交してくれい。十六夜やアい。女房ども。
〽露と消えなば、葉末に殘れと、草を押分け、掻き分けて
　ト門口へ出て
十六夜やアい。女房ども。
〽塵塚の中までも、探し泣くこそ果敢なけれ、夫の嘆きに亡き魂の、あこがれ出でし俤の。
　トどろ〳〵にて、十六夜をセリ上げる。
十六　ナウ、輝國どの〳〵。
輝國　ヤア、さう云ふは十六夜。
〽十六夜なるかと走り寄り、縋らんとするに便りなく、有るか無きかに手にさはらず、只茫然とばかりなり。
　ト十六夜、輝國よろしくある。

十六　コレ〳〵、輝國どの。目には見ゆれど、形はなく、影に等しきこの身なれば、寄添うて下さんな。夫戀しう思ふのは、親兄弟より百倍なれども、わたしが死んだと仰しやると、父樣や妹が嘆き、それで暫しは隱れたが、幽靈といふ事を、必らず〳〵隱してたべ。女の身の矢先にかゝり、孩子諸とも死したるは、持ち籠りも同じ事。八寒地獄の苦しみ。今にも親子の死骸をば、爰へ運びなば、水に晒され、色變り、髮も飾りもあらばこそ、淺ましい姿にて、戀ひし床しに引替へて、さぞや愛想が盡きやうかと、それが悲しうござんすわいなア。
　ト泣く。輝國いろ〳〵あつて
輝國　オヽ、道理ぢや〳〵。さりながら、愛想が盡きようかとは、曲がない。如何なる姿にもならばなれ、一度魂ひ立返り、夫よ、妻よと云うてくれい。女房ども。
十六　イエ〳〵、二十四時過ぎぬれば、守り本尊の壽命の札を削られて、閻魔の帳に載るゆゑに、再び娑婆へは歸られませぬ。もしや嘆きの聲が聞えて、この譯が父樣に知れては、親子のきづなに搦まれて、影も形も消え失せて、詞交す事もなりませぬ。必らず聲ばし立てゝ下さんすな。泣いてばし下さんすなえ。

輝國　ぢやと云うて

十六　アヽ、コレ、泣いて下さんすな。聞えますわいなア
聞えますわいなア。

〽云へば夫も泣くまじ、聲立つまじと兩袖にて、口をふさげばむせかへり、五體をもだえあこがるゝ、心ぞ思ひやられけり、かゝる嘆きの折も折、板に乘せたる女の死骸、門口より舁き入れて。

ト伴僧二人、戸板に死骸を載せ舁いて出て、直ぐに内へ舁き込む。ト輝國思ひ入れ。

伴一　サア、白太夫さま、お頼みの死骸、持つて來ました。

伴二　早う埋んで跡淸めさつしやりませ。アヽ、不淨な者でござる。

ト白太夫、小磯出て

白太　それは、お二人とも、御大儀でござつた。

伴二　渡しましたぞや。サア／＼、ござれ。アヽ、さてさて

トしか／＼云うて入る。ト白太夫柏手打ち

白太　とをかみ、ゑみため、祓ひ給へ、淸め給へ。

小磯　てもさてもおいとしや。どこのお人か知らぬが、姉樣に似た死骸、身にしみ／＼と悲しうござんすわいなア。

白太　これも他生の緣でがなあらう。イヤ、姉、見れば又、最前より色が惡い。どこぞ鹽梅の惡いのぢやないかいの。殊に、あゝいふ忌々しい物見るも、一倍心が結ぼるる。風が當りや、鹽梅が惡い。ソレ、妹、屛風引いて置いてやれ。

小磯　アイ／＼。

ト二枚屛風にて圍ふ。ト輝國、戸板の死骸を見て思ひ入れある。

白太　コレ、彦どの、幸ひこなたを頼まう。まだ神道を授けねば、汚れもない。あの矢を拔いて、親子を引分けてやつて下されぬか。

輝國　エヽ。

白太　イヤサ、折角京から戻つた姉が頼み、後生にもなりませう。どうぞ引分けてやつて下され。

輝國　イヤ、その儀は。

ト十六夜を見る。十六夜いろ／＼こなし。

白太　その儀はとは、こなた怖いか。

輝國　エヽ。

白太　大方氣色が惡いのであらう。

輝國　なんのお前、

トいろ〳〵思ひ入れある。小磯見て

小磯　お前はなんで泣かしやんす。

輝國　ヤ。

白太　こなたは泣いて居るか。

輝國　なんの泣きませう。私しは最前より笑うて居ります。

ハヽヽヽ。

ト泣き笑ひ。

小磯　そんならどうぞ、引分けて進ぜて下さんせいなア。

輝國　ぢやと云うても。

白太　矢ッ張り怖いのか。アノこなた、侍ひぢやないか。侍ひといふ者は、こんな事が商賣ぢやないかいの。侍ひの役ぢやわいなう。

トいろ〳〵思ひ入れあつて、俯向く。

〽侍ひの役といふ詞に心恥しめて、アッと答へて、つッと寄り、見れば我が子や我が妻の、形はあれど魂ひなければ、物云はず、その魂ひは立ち添うて、物は云へども形はなし、親同胞はさは知らず、知つたる者は我ればかり、知つてそれとも明かされぬ、こはそも如何なる因果ぞと、目もくれ心も亂るれど、叶はぬものと矢柄を摑み、引いても〳〵、しやくつても、皮肉に矢の根錆び附いて、抜けばこそ、骨にさはる苦みの、魂ひにやこたへけん

ト淨瑠璃にて輝國、矢の根を抜く。十六夜いろ〳〵苦しみのこなしあり。

〽ねぢ廻せば身をもだへ、摑みて引けば身を縮め、身を慄はせば我が手も慄ひ、腕も力もなまりしが、嘆きにくらむ目をふさぎ

輝國　利劍卽是彌陀佛、一聲稱念罪皆除。南無阿彌陀佛。

〽南無阿彌陀佛と引き抜けば、親子の骸さつと別れ、ふくみし潮、疵の口より流るゝは、何に譬へん秋の田の、畔の切れたる濁り水、涙は掛け樋の如くにて、目も當てられず哀れなり、輝國包むに包まれず、二人の死骸に抱きつき。

今は何を隱しませう。この死骸は拙者が女房でござるわいなう。

白小　ヤア。

輝國　某は院の廳の官人、判官代輝國と申す者。女房は大内にてお末の奉公。忍び〳〵の假り枕にこの子を設け、もしや不義の顯はれては、互ひの大事と存ずるところ、丞相北の方のお情を以つて、養育給はる御厚恩、その丞相をさすらひの道で害せんと、敵の者ども早船にて追ッ

かくる。甲斐々々しくもこの女、この姿にて海へ飛び入り、遁がさじやらじと追ッかくる。放逸無慚の敵の者ども、よッぴいてはたと射る。矢の根は即ちこの通り、矢柄も體も、目に見れども、心は人目にかゝらぬか。

〽無慚や、可愛や、心の內、如何ばかり悲しかりつらんと、涙にくれて幽靈の、顔を泣く泣く見上ぐれば。

十六 ナウ、その時の苦しさはいとはねども、共に射られし子のいとしさ。名殘り惜しさは取分けて、一人は父樣。一人は夫。せめて最期の念佛も

〽潮にむせび、絶え入つて、海は三途の川波と、漂ふ體も、斯ういふも

今はこの世にない十六夜。名殘り惜しいわいの。

白太 ヤア〳〵、コレ、そんなら娘は死んだかいやい。

小磯 そんなら、これが、姉樣の死骸かいなア。

白太 コリヤ、小磯よ。姉は爰に居るわいやい。

〽抱きつけば、目に見えず、ぱつと消えて後にあり、夫が縋れば爰に消え、父が寄れば彼處に立ち、見えつ隱れつ、妄執は、雲に隱れて失せければ、聟も舅も 妹も、あへなき死骸にひし〳〵と、抱きつき〳〵

小磯 最前お前が見えた時、お顔の色が惡いと思うたが、そんなら姉樣は幽靈であつたかいなア。申し姉樣、妹かと、ま一度物云うて下さんせいなア。

〽妹が嘆けば、白太夫は足摺りして

白太 可愛や娘よ、蕾の花を先立てゝ、この七十や八十の長生きは何事ぞ。めでたい壽命ぢや、あやかりたいと、人の云ふは皆僞はり。年寄つて子を先立て、後に殘るおりや業人。兩部習合の安樂寺、神樣も佛樣も、聞えませぬ。なぜこの親仁を殺して、娘を助けては下さりませぬぞいなう。

〽聲を限りに叫び泣き、物の哀れを止めけり、かゝる嘆きの隙を窺ふ荒藤太、輝國やらぬと打ちかくる、鍬の柄しつかと判官代。

トこの淨瑠璃にて荒藤太、鍬を持つて、そろ〳〵來て、思ひ掛けなう鍬にて打つてかゝるを、輝國留めて

輝國 うぬは荒藤太。

荒藤 オヽ、最前からの樣子は聞いた。京の姉めもてこねたら、おのれも親仁も妹めも、皆殺しにして、おれ一人、何もかもせしめてこます。

小磯 申し、兄上。姉樣の最期の上は、心を直して、父樣へ孝行盡して下さんせ。

荒藤　うぬが構ふ事はない。すッ込んでけつからう。

輝國　親に刃向ふ極重惡人、覺悟ひろがう。

〽打ち込む鍬に身を交し、上段下段の鋤と鍬、我慢の藤太に、手練の輝國、附け入り附け込む身のひねり、打てば開き、なぐれば拂ひ、只一打ちと藤太が無法、鍬も落され荒藤太、こは叶はじと逃げて行く、いづくまでもと驅け出す輝國

丞相　ヤア〳〵、輝國。無法の愚人を追ふ事なかれ。暫く待て。

〽御聲高く菅丞相、一間より出で給ふ。

白太　ヤア、丞相さま、いつの間に、御來臨ましました。

丞相　オヽ、今宵設けし裏道より來り、十六夜が最期の樣子、輝國が報恩に心を盡す事、白太夫がこれまでの介抱、我れ臨終に齋とならば、其方どもは末社として、末の世までも祀らせんに、ハレ、不便の有樣ぢやよなア。

白太　コレ〳〵、聟どの。丞相さまが、勿體ない、あのお詞が未來の土產。ソウ〳〵、おれは泣かぬ〳〵。こなたも、妹も、嘆くまい。

輝國　それ〳〵。嘆くは愚痴、丞相さまの、冥加ない今のお詞。御恩報じも十六夜が庇。

白太　白太夫づれが娘には、生れまさつた十六夜、兎角は丞相さま、暫しの間も血潮の汚れ。

〽何がな淸めの御座所をと、白太夫は立ち上がり、船の碇の大綱を、たぐりまめろめて圓座となし畏れながら、イザ、これへ。

ト白太夫、大綱をまろめて、菅丞相をその上に直し置き

〽あふぎ請じ奉る。末世に至つて綱敷の天神とは、此如く、お姿を寫すなり、かゝる所へ荒藤太、疫神の荒れたる如く、宿禰、宰相、手の者引連れ、取つて返し

荒藤　ヤア、輝國、一度ならず、二度、三度、手ひどい目に遭はしたなア。その報いは、菅丞相を殺してしまへと、時平公の御內意。先達て通路して、宿禰さまと宰相さま、たつた今、船が着いた。うぬらも命の出船ぢや。覺悟せい。

物訓　ヤア〳〵、菅丞相、とても歸路は叶はぬ。手短かにくたばつてしまへ。

宿禰　首は宿禰が打落して、冥途へ歸路をさしてくれう。

宰相　覺悟せい。

丞相　ヤア、極重惡人。よい所へうせた。一々首を並べる。

覺悟せい。

宿禰　ヤア、ちよこ才な。ソレ、何れも。

侍共　やらぬ。

〽心得、小磯も甲斐々々しく、輝國もろとも割つて入り、火水になつて戰へば、眞向碎かれ、小鬢を切られ、こりや敵はぬと逃げゆくを、いづくまでもと

ト三重にて、輝國、小磯、立廻り、追つて入る。白太夫こなしあり。

白太　コレ〳〵、長追ひして怪我せまい。

ト鋤を持ち、いろ〳〵ある。

シュツ〳〵シュツ、シュラシュツシュ。

丞相　白太夫々々々。

白太　ハイ〳〵〳〵。

トうろ〳〵する。

丞相　この梅はこの家の梅か。

白太　ハイ、不思議なはこの梅。一夜のうちに、まツこのやうに、生ひ立ちましてござります。アレ〳〵。とかう云ふうち、また追手が參じます。早く爰を立退いて下さりませ。

丞相　東風吹かば匂ひおこせよ梅の花、主なしとて春な忘れそ。……一首の詠歌にて、寵愛の都の梅、我れを慕ひ、この所へ飛び來りしな。花を物云はぬ非情とは何事。人こそ物を知らぬよなア。

白太　ア、申し、歌どころぢやござりませぬ。ちやつと爰を立退いて下さりませ。今にも追手が取つて返し、お前のお身に、お怪我があつたら、何と致しませう。アレ〳〵、もう參じますわいの。

ト此うち橋がゝりより荒藤太逃げて出て、へたばり

荒藤　ても、あの輝國めはえらい奴ぢや。

白太　忰め、うぬを。

ト鋤にて叩きかゝるを、引ツたくり、白太夫を當て、菅丞相を見て

荒藤　ヤア、貴樣、菅丞相ぢやの。われが望みの首が、えらい大金になる。いま首打ち落す。覺悟せい。

〽拔身振り上げ、立ちかゝるを、不思議や庭の白梅の、枝を刎ね來て藤太を飛ばし、菅丞相の御姿、埋むが如く消え給ふ、藤太は呆れて口あんぐり

ト梅、仕掛けにて菅丞相を隱す。

荒藤　ヤア、こりやどうぢや。さては邪法を遣ひ居るな。

ト白太夫起きて

白太　おのれを。

　ト かゝるを白太夫を引きつけ

荒藤　婆娑ふさげの老ぼれめ、捻り殺すは易けれど、親といふ字があるゆゑ、獨り自滅さゝうと、拵らへて置いた物がある。

　ト 神酒德利を取つて來て

サア、これ喰へ。

白太　こりやお神酒ぢやないか。

荒藤　オヽ、神酒ぢや。われが日頃信心するこの神酒を戴かさうと、氣を附けてやるのぢや。サア、喰へ。

白太　エヽ、酒機嫌ぢやないわい。

荒藤　喰へと云ふに。

　ト 引きつけて、口から口へ神酒を飲ます。小磯悄り。

小磯　ヤア、こりや、父樣を何とするのぢや。

荒藤　何ともせぬ。毒喰はして殺すのぢや。

小磯　エヽ、滅相な。

　ト 退けにかゝるを引きつけ

荒藤　エヽ、やかましい。おのれにも戴かしてやる。

　ト 兩人に無理に飲まして

これからうぬらがあをち死を見物せうわい。

白太　エヽ、おのれはなア。親に毒を服ます不孝者。

荒藤　コリヤ、跪くな。せめては念佛でも申してやるワ。南無阿彌陀佛。

白太　おきやがらいでな。おのれが念佛で佛になるものかいやい。

小磯　あんまりぢやわいなア。

荒藤　面妖な。もう廻る筈ぢやが、どうでも年寄りは血性が枯れてあるゆゑ、遲いかしらぬ。よいよい。毒がきかねば、この毒でいつそ。

〽刀押取り切りかくる、腕なまつて神變不思議、我れと我が貫向すつかり、七轉八倒、のたくりかへすぞ心地よき。

こりや、おのれ切つたぞよ。

白太　誰れがいやい。

荒藤　うぬ、もう。

　ト 白太夫に切つてかゝる。小磯、荒藤太に取りつき、刀を取る。

白太　危ない〳〵。

　ト いろ〳〵ある。

〽輝國は敵を追つて、立ち歸り、藤太を見るより襟髮摑

んで引据ゑ、捻ぢ据ゑ、これはと見やる白梅は、元の如くに安然と、姿顯はれ菅丞相、悠々として立出で給ふ。
ト輝國、荒藤太立廻りありて、當てる。荒藤太ウンとのる。どろ〳〵にて、梅が枝戻る。菅丞相出る。この時、菅丞相顏薄肉になり
ヤア、菅丞相さま。御安泰。
小磯　常に變りし御顏色。
丞相　オヽ、我が多年念じ奉る、威德明王の法力にて、二人に與へし靈藥の、神酒殘らず飮み干して、其方達が命を救ひ得させしぞ。
白太　エヽ、すりや、この神酒をあがつたゆゑ、其お顏。私しをお助けあるは有り難けれど、壽酒をあがつて丞相さま、もしお命が
丞相　佛力應護の我れなれば、少しも氣遣ふ事なかれ。
ト荒藤太、起き上がり「われを」と菅丞相の方へ行くを、輝國引戻し、立廻りあつて、とまり
輝國　アイヤ、申し、丞相さま。都には時平の大臣、謀叛を企て君を害せん企み、それゆゑ宰相、宿禰を討手におこすも。
丞相　イヽヤ、輝國。道を守る時平の大臣。謀叛の企て何しにあらんや。都を出づる時、禁廷の守護を契約せし後、何しに野心のあるべきぞ。
輝國　憚りながら、それは君の御惑ひ、都には專ら時平我意を振ひ、一味を招くは謀叛の根組み。その證據は最前の密書。
ト立廻つて密書を取る。
サア、時平に頼まれた樣子、一々に白狀せい。
荒藤　オヽ、斯うなつたらは、云うて聞かさう。輝國が云ふ通り、時平公には大位の望み、邪魔になる菅丞相を流さん爲、忠臣と見せかけたも、天蘭敬との云ひ合せ、四海を呑み、おれも筑紫の主とならんと、樂しんで居るその墨附。
ト取りにかゝる。立廻り。
〽ずんと立つを、首筋摑んでずでんどう、ウンとばかりに倒れ伏す
ト荒藤太を當てる。ウンとこける。
輝國　時平が惡事の墨附、御覽あられませう。
ト菅丞相に渡す。取り、開き見て
〽菅丞相は件の墨附、押し開き、惡事の段々を讀み下し

丞相　こりやコレ、左大臣の手蹟なれど、仁義正しき時平の大臣、謀叛とは心得ず。
〽はて不思議・いぶかしさよと御心も、惑はせ給ひおはします、時に不思議や今宵の星、分野忽ち散亂して、大星一つ落星する、丞相怪み、空打詠め
ハテ・心得ぬ。
ト床にて、靜かにノリ地彈く
台星紫薇宮を犯すは、三公の國に權強くして、君公を亡ふ兆。また降官台星に向ふは、文武の百官、三公の權威に恐れ、附き隨ふ。北辰は南面して動かず、衆星北面して手拱す。今の落星は、我が命數終るところ。
トきつとなる。
諸々の星、時として南面するは、時平叛逆相違なき星の分野。さは知らずして計られしか。エヽ、殘念や。
〽御まなじりに朱を注ぎ、眉毛逆立ち御怒り、都の方を睨みつけ、物狂はしく立ち給ふ。
白太　アヽ、コレ、申し、丞相さま。時平が企みお聞きなされて、怖いお顏。爰から睨ましやましても、都の方へは屆きませぬわいの。
輝國　申し〱、丞相さま。

ト皆々取りつく。ト床にてノリ地しづめて彈く。
丞相　ヤオレ、輝國。白太夫。今の天變、時平の大臣、叛逆の企て、聞き捨てられぬ御大事。赦免なければ歸洛も叶はず。大位を望む朝敵と、知ろし召されぬ玉體危ふし。
〽臣が忠義も徒らに、この所に朽ち果つる、屍は虚名蒙むるとも、死したる後は憚りなし。人に知らさぬ我が大願。天拜山にて三百三日、斷食荒行、天を祈り
〽今日滿ずる我が命、飛び梅の花流滿して、我れを包みし其うちに、はや天帝も受納あり、梵天、帝釋、閻羅王、三天に對面して、鳴る雷となつたるぞ。
三人　エヽ。
丞相　必らず嘆くな。十六萬八千の、眷屬引連れ、都へ登り、時平を始め謀叛の奴原、引裂き捨てん。現世の對面、これまで〱。
〽いさうれやつと御聲も、共に烈しきはやち風、吹き立て〱、戸障子も、欄間たわんでばた〱〱、納戸外壁木の葉の如く、庭の立木も、飛び梅も、花も砂も、吹

き捲くる。かゝる所へ宰相。宿禰、取つて返し。
トこの淨瑠璃にて、菅丞相いろ〳〵思ひ入れある。
叩き屋根まくれると、花と一つに散る。大風凄まじく
いろ〳〵。始終どろ〳〵なり。ト藤原の宿禰、物淵の
宰相、侍ひ大勢連れ出る。

宰相　エイ、荒藤太。その面はなんぢや。

荒藤　イヤモ、魔法を遣うてどうもならぬぞ。皆寄つて打
ち据ゑさつしやれ。

宿禰　合點ぢや。者ども。ソリヤ。

皆々　やらぬぞ。

トこれより菅丞相は二重舞臺、侍ひ皆々下にて、い
ろいろ連理引きのやうなる立廻りの模樣、此うち始終
どろ〳〵。

丞相　如是我聞、一時佛在須彌大王、八萬四千寶藏金剛。
〽般若はらみつに裂け、臓腑出でゝ失せにけり、續いて
かゝる力者ども。

侍ひ　やらぬぞ。
〽第一菩提王、第二帝釋天王、第三魔天、おう〳〵と、
おめき苦しみ逃げんとする、うんらい、うげ〳〵、てび
てび、うげ〳〵、うんらいそわか、どうとのめれば、體
は二つ、兩腕拔けて首に凹み、眞向二つに乳の下まで、
柘榴を割つたる如くなり。

荒藤　もう、破れかぶれぢや。
〽荒藤太が狂ひ死、中にひら〳〵、ころ〳〵、骨も
碎け、身も碎け、よろめく上にはたゝみ神、鴨居より猛
火の丸かせ、頭微塵に燒けたゞれ、眞黒になつて死んで
けり、齒の根がた〳〵宿禰、宰相、逃げんとすれば白梅
が、枝を伸して引摺り戻し、逃げる先々地雷、命お助け
お助けと、泣き詫ぶるこそ氣味よけれ。

輝國　これより拙者は都へ登り、

白太　謀叛の輩を一々奏聞あれ、彦どの。

ト藤原宿禰「うぬ」と輝國にかゝるを、仕掛けにて首
飛ぶ。

皆々　これは。

丞相　敵退治の手始めよし。

ト物淵の宰相「うぬ」と輝國にかゝるところへ、雷落
つる。物淵の宰相が體二つになる。
門出の血祭り。

三人　丞相さま。

丞相　早く行け。

輝國 おさらば。

ト始終どろ〳〵。ぐわた〳〵烈しく、菅丞相、廻り壁へ消える。白き御幣顯はるゝ。掛け煙硝にて御幣、空へ上がる。小磯、白太夫、輝國、向うへ入る。

切　幕

延暦寺法性坊庵室の場
內裏紫宸殿の場
天滿宮の場

役名――丞相神靈。法性坊。十六夜の死靈。判官代輝國。三好淸貫。紅梅姫。齊世の君。菅秀才。伴の仲友。辨の宰相。

造り物、二重舞臺、見附け金襖、西の方折り廻り緣附き、仕切りに妻戸あり。橋がゝり柴折り門。大雷にて幕明く。

〽九識の窓の前、十丈の床の邊り、瑜伽の法水を湛へて三密の月明らけく、西坂本の法性坊阿闍梨、佛力應護のまなじりに、聖澄ましておはします、稍更け渡る時しもあれ、又も扉に人音するは、窓打つ雨の音にもあらず、阿闍梨は耳をそばだて給ひ

ト淨瑠璃にて、法性坊、阿闍梨の形にて、御經讀誦して居る。橋がゝり柴折り門の側へ、菅丞相の神靈セリ上げ、戸を叩く。

法性 ハテ、心得ぬ。夜更けて、切りに扉を叩くは何者。

丞相 月光地に敷いて、拂へども又生ず。

〽槙の板戸を押し開けば、過ぎにし如月末の五日に、筑紫太宰府にて世を早う去り給ふ、菅丞相にておはします。

法性 こは、思ひ掛けなき菅丞相。イザ、こなたへ。

〽怪しみながら、こなたへと請じ入れ奉り

丞相には、深夜に及び、何ゆゑ御來光。腐草生じて、しん〳〵と、月は冴ゆれど、法の庵、何をがな、もてなす物もなし。

ト思ひ入れありて、菓子盆に柘榴を取り出し

これは時ならぬ柘榴、麁末ながらも愚僧がもてなし。丞相、きこしめされい。

丞相 こは有り難き師の坊のもてなし。我れ、夜陰に及び參りしは、君暗からずと申せども、濁る世に生れて無實の讒言力なし。讒者の輩、君をおそひ奉るゆゑ、我れ

鳴る雷となり、内裏に飛び入り、讒者の輩を蹴殺し捨てん。僧正、その時、召しの勅諚あらんが、例へ勅使立つとても、構へて構へて、參内候ふな。この事頼み申すなり。

法性　こは、御頼み切なれば、例へ宣旨下さるゝとも、二度までは參り候ふまじ。

丞相　イヤ、度々の宣旨あるとても、構へて參内ましますな。

法性　こは仰せとも覺えぬ。如何なる勅使參るとも、二度までは參るまじ。勅使三度に及びなば、

丞相　參内あるか。

法性　普天の下、率土のうち、王土に有らずといふ事なし。

〽さのみは如何との給へば、菅丞相は怒りの顔色

丞相　ハテ、是非もなき師の坊の仰せ。師弟の縁もこれ限り、未來の引導受け難し。

〽傍に有りあふ柘榴おッ取り、口に含んで、ばら／＼と噛み砕き、妻戸にぱつと吐きかけ給へば、柘榴忽ち火焔と成つて、三尺ばかり燃え上がる。

ト神靈、柘榴を口に含んで、妻戸に吐き掛ける。どろどろにて掛け煙硝燃え上がる。

〽僧正騒がず、洒水の印を結んで、鑁字の呪を修し給へば、火焔はそのまゝ消えてけり。

ト法性坊、印を結ぶ。どろ／＼にて、火焔消える。神靈こなしあつて

丞相　最早この上は佛敵となり、

法性　讐をなす御所存か。

丞相　おんでもない事。

法性　怒りを鎭めたび給へ。

丞相　イヤ、恨みは盡きぬ。

法性　愚僧が行力。

丞相　參内あるか。

法性　勅命ならば

丞相　參内あるな。

兩人　サア／＼／＼。

〽師弟のよしみもこれまでと、怒りのまなじり、猶も心を鎭めんと、縋れば拂ひ、立寄れば、千手陀羅尼に祈るは法性、さらぬは丞相。繰りかけ／＼。

ト三重どろ／＼大雷、稲妻、掛け煙硝。返し。

この道具、東へ引込む。

西の方より紫宸殿の館引き出す。時平の大臣、辨の宰相、三好清貫、伴の仲友、その他公家大勢並び居る。矢張り大雷、稻妻、雨車。

大勢　桑原々々々々。

宰相　申し、清貫卿。仲友卿。こりやマア、どういふ事でござります。

仲友　菅丞相雷となつて、我れ〳〵に恨みをなさんと祟りますのぢや。

清貫　申し、時平公。我れ〳〵に仇を報いんと、菅丞相の死靈が、大雷になりました。

時平　馬鹿謐すな。雷は陰陽の激するところ。菅丞相が死靈雷となつても、生ある時さへぼッ下したこの時平。死靈などとは猪口才な。

皆々　でも、アレ、鳴りますわいなう〳〵〳〵。

ト時平に取りつく、どろ〳〵にて、方々に掛け煙硝。大雷、稻妻、車軸の音。時平、太刀を拔き、方々切り廻る。ト公家皆々取りつき、いろ〳〵あつて、臆病口へ入る。公家皆々附いて入る。清貫殘り、いろ〳〵あつて

清貫　この上は法性坊を頼まねばならぬ。

〽駈け出す向うへ、顯はれ出づる十六夜が

十六　我が君を讒言せし三好清貫、仇を報いん。思ひ知つたか。

〽神罰は目の前に、虚空を摑んであをり死、心地よくこそ見えにけり。

猶この上は、左大臣に、目に物見せん。

〽十六夜が駈け出す向うへ法性坊、紫宸殿より駈け出で給ひ

ト此の淨瑠璃にて、十六夜、奧へ行かうとする所へ、法性坊出て

エヽ、恨めしや、僧正、參內あるなと頼みしに、何ゆゑ參內ましますぞ。

法性　一旦の契約、二度の勅使は歸せども、是非なく參內。大臣といひ、讒者の輩に恨みはあらんが、君に何の恨みやある。

十六　イヽヤ、例へ讒者の輩舌を振ふとも、勅命なきならば、君さすらひの恨みはない。

法性　邪正一如といひ、罪なきその身も天の禍ひ。

十六　その禍ひの根を斷たん。

法性　早く立去れ。

十六　イヽヤ、去らぬ。この上は佛敵とならん。
法性　我が法力で祈り鎭めで置くべきか。
ト太皷。はしら卷のやうな模樣にて、法性坊、十六夜、花道の戸屋際まで行き、いろ／＼あつて、時平出で死ぬる、菅丞相神靈セリ上がる
ハテ、殘念な。怒りを鎭め、時平を救はんと思ひしに、その身の罪業增長して、法力にも叶はぬか。
神靈　今こそ恨みは晴れたり。本望やな。
ト橋がゝりより辨の宰相、伴の仲友、逃げ出ろ。輝國赦し文を竹に附け、追ッかける。齊世の君。菅秀才、紅梅姬も後より出る。
仲友　輝國。われを。
ト輝國にかゝる。
輝國　謀叛の殘黨、思ひ知れ。
ト切り倒す。辨の宰相、伴の仲友死ぬる。
齊世　只今、法皇の院宣にて、菅秀才には、藤原の遺蹟を立てさせんと、有り難き父法皇の勅命。
輝國　即ち、阿闍梨へ御綸旨。
ト綸旨を法性坊へ渡す。法性坊開き
法性　エヽ、有り難い。菅丞相に正一位贈官、天滿大自在天神と崇めかしつき、世々の守護たるべしとの宣旨なり。
神靈　ホヽウ、有り難きみことのり。この後は我れ守護し、手蹟を守り、我が賴む人を空しくなすならば、天が下にて名をや流さん。
トどろ／＼にて、神靈消える。
法性　めでたい／＼。惡人退治の上は、この通り奏聞せん。
〽榮え榮ゆる御神德、この御神の著るき、筆の冥加ぞ有り難き。
向うの幌引きぬく。天滿宮の社壇を飾り、金燈籠夥しく掛けある。齊世の君、菅秀才、紅梅姬、上段へ上がり拜する。神樂になりて、いづれもよろしく
打出し

天滿宮菜種御供（終り）

太夫様の禿衆
　呼びましや〱
みのに
しゆくした　柿木金助
あづま
に名を得し　向坂甚内
お大名の　妼衆
　やるまいぞ〱

オヽとこたへて茶摘の大寄せ、聞き違はぬが窟の爪音、いづれの
おとり調べの捕り縄、血筋に引なし高野の對面、しやんと一まき
隅田川の隠里

けいせい黄金鯱

雌雄
六冊

ハツといらへて貞女の曲者、取りはづさぬが閨の手配り、いづく
の浦よりこへたの釣鐘、ちよせにあらはす雪中の會合、そら音に
はかる鶏籠山の八陣

再演繪番附表紙

けいせい黃金鱐

口明　宇治の場

役名——齋藤司之助。岩瀨久馬。横谷勇藏。石黒丹平。大垣彌藤次。有松小平太。齋藤刑部。茶摘み女、小品實ハ足利國姬。同、おふじ。同、おその實ハ園生。同、おこま實ハ傾城吾妻路。同、おしげ。同、おてる。同、おさわ。同、おりよ。同、おらん。同、おかね。奴、鳴平。百姓太作郎實ハ最上新兵衞。質屋權兵衞。肝入り十右衞門。遣り手、すぎ。石谷歩左衞門。老女、村路。

造り物、宇治黃蘗山の總門、眞中に飾り、臆病口、橋がゝり、高塀、三間の間に、小平太、彌藤次、法被、大口陣羽織、鉢卷にて太刀を佩き、せり合ひ居る見得。橋がゝりに軍兵大勢、鬨の聲、エイ〳〵オオにて幕開く。

小平　ヤア卑怯なり、隆景、そこ退いて通し召され。

彌藤　卑怯とは御身が事、隆景が望みし軍陣の先駈け、人に後れて武士が立たうか。

小平　ハ、、、、人にこそよれ、菊地が持ち口、餘人に先陣越えられては、末代までの家の瑕瑾、踏みたる足が植木となつても、一歩も後へは寄らぬ。留め立てして後悔せられな。

彌藤　その舌の根の乾かぬうち、引退けて先駈けし、一番首を引つさげるは今のうち。身共が尻に引ッついて、二番乘りを召されたが上分別。

小平　ヤア、是非留め立てせば、味方とは云はさぬ、目に物見せるが留めて見るか。

彌藤　軍令破つて討ち果しても、身共が先陣仕つて見せう。

小平　見事和主が

彌藤　仕負ふせて見せう。

小平　見るぞよ。

彌藤　見せるぞよ。

ト詰めよる。

司之　待つた。暫らくお待ち下されませう。

小彌　待てと留めしは何奴。

ト此うち司之助、浪人の形、つか〳〵と本舞臺へ來て、兩人の中へ入り、立廻りにて見得よくとまる。

彌藤　慮外な曲者、妨げせば、ぶッ放して血祭りにするぞよ。

司之　イヤ、先つお待ち下され。鎬を削るこの中へ、身を捨て來たりしは、お願ひでござります。

小平　ヤア、其方は身共が甥、花形伊織。

彌藤　誠に、身が妹と不義をして、先年本國を立ちたる伊織。

小平　かゝる折から一二を爭ふ我れ〳〵。

彌藤　留めし仔細は。

司之　面目次第もござりませぬ。某事は幼少より、弓馬の道にうときとあつて、親花形郡領、度々の折檻、色慾に心を奪はれ、馬耳東風と聞き流し、剩さへ、これなる隆景どの、妹御と不義密通、國を立退き京近邊に徘徊するうち、計らずも今度の騷動。軍に高名し再び歸參と志し、來る事は來ても、その如く花やかなる武具も持ち合さず、この形で合戰、思ひも依らず、いま身を悔み佇む折節、この爭ひ、恥をいとはず扱ひに立ち出でしは、外ならざる御兩所へお願ひ申す。今日の先陣、拙者〳〵讓り下されなば、如何ばかり有りが難う存じ奉ります。

彌藤　何事かと思へば、面倒な願ひ事。

小平　立歸らねば爲になるまいぞ。

司之　命はちつとも惜しまぬ伊織。

彌小　ソレ、面倒な。引立てい。

軍兵　立たう。

司之　何を猪口才な。うづ蟲めら、陣笠首を並べるに遠慮はないぞ。

トきつと見得になり、どんちやん、鬨の聲にて、丹平、勇藏、半切れ、小手臑當にて、總門より駈け出る。

丹平　兼て兩人寺内へ忍び入り、敵の樣子を窺ふところ、山門のあたりには、まき砂まき、石を山の如く用意して容易く取りかゝられぬ責め口。

勇藏　勢の多少は解らねども、ひそまり返つて相見えまするゆゑ、兩人とも奧深く、猶も樣子を窺ひ見たるところ

丹平　後の山の手を切り崩し、落ちのびまするやうに見請けましたるゆゑ、取る物も取りあへず、お知らせ申します。

勇藏　裏の手へ人數を廻され、討ち取られてようござりませう。
小平　ムウ、兄弟の者、天晴れの忠臣。
彌藤　すりや、後の山より落ち行くとな。
司之　さうぢや。
ト行かうとする。
彌藤　待つた伊織、そちや、いづこへ行く。
司之　後の山の手へ立ち廻り、落ち行く敵を一人なりとも討ち取つて。
彌藤　手柄にする所存ぢやな。
司之　くどい。
小平　オヽ、天晴れ〳〵。いま目の前に彼奴等を防ぐ手の內と云ひ。
彌藤　して、裏の手を切り崩す、手覺えがあるか。
司之　愚かや隆景どの、すべて軍を勝たんと望まず、たゞ負けまじと勵むが第一。必定敵は後の山を越えて落ちんと、登り足に向ふ所を、山の上より狩人野武士を狩り催ほし、拳し下がりに雨霰と射るならば、矢は一筋の仇矢もなく、射すくめられてひるむは治定。その處に乘りて一文字に駈け破り、臆病神の付きたる奴原、一々首を並べんは案の內。
彌小　面白し〳〵。千に一つも外るゝ事なき即座の智慮。
丹平　某どもは御兩所諸とも、この總門より込み入つて、裏と表に引包んで責め立てなば。
勇藏　敵は遁がれん道もなく、味方の勝鬨目のあたり。
トどんちやんにて、十右衞門、雜兵の形にて出て
十右　申し上げまする。寺內へ打つて出まする時刻、あまり延引いたすに付き、後陣の輩、退屈いたし、何ゆゑ延引仕ると、相尋ねよとの儀でござりまする。
彌藤　誠に後陣の催促尤も。
小平　評議に時を移さんより、一手になつて總門を駈け破り、勢の多少を見定めて、伊織を後の山手へ差向けん。
司之　然らば、この總門から。
勇丹　無二無三に責め破らん。
彌藤　軍兵ども、續け。
ト行かうとする。內より。
エイ〳〵オウ。
ト門の屋根より、餅をパラ〳〵と、礫に拋る。
皆々　ヤア、この礫は石にもあらず。
司之　餅を礫に蒔きちらすは

丹平　味方の輩に、拾はせん計り事の。
彌藤　但しは下戸と侮どりしか。
小平　何にもせよ、稀代の珍事。
皆々　アレ、いぶかしやなア。
ト皆々キッと見得する。
司之　サア、棟上げの餅蒔きの前狂言はこれまでぢや。出來た祝ひに、一つ打つてくれ。
皆々　ヤア、ヨイ〳〵〳〵。も一つせい、ヨイ〳〵。祝うて三度。シヤシヤンノシヤン。
ト門の内より
呼び　御上使。
ト云ふに皆々恟りする。
三人　ヤア、御上使とは。
ト門の内より岩瀬久馬、衣裳上下にて、侍ひ連れ、後より坊主十人あまり附いて出る。本舞臺の人數、皆々鬘を外したり、半切り陣羽織など半分脱ぎかけたり、いろ〳〵うろたへて、舞臺の人數はせう事なしに、並み惡う列ぶ。司之助、それなりに手を突き
司之　存じ依らざる不時の御上使、略服ながらこれまで。委細仰せ聞けられ下されませう。

久馬　齋藤司之助どの、さぞ驚ろき召されたであらう。上使の趣き餘の儀にござらぬ。この度、當黄檗山の中興、大鵬禪師、御産祈りせられしに依り、室町どのゝ若君、御平産遊ばされ、君の御喜び淺からず、大禪師へ恩賜とあつて、黄檗山の再興、美濃の城主、齋藤どのへ、仰せつけられたるところ。
司之　兄兵衛頭、折惡しき病氣に依つて、某、當地へ立越えましての取計らひ。
彌藤　兵衛頭が名代、司之助どのへ附け人の我れ〳〵まで
小平　出精仕る折から
勇藏　即ち今日、棟上げの儀式に當つて
丹平　不時の御上使、心元なく
皆々　委細の樣子、承はりたうござります。
久馬　普請の日限百日は、過半經てども、やうやく、山門棟上げの出來たるばかり、その上、司之助どのには都に於て遊興に耽り、傾城に迷ひ、當山の再興も拘らずと御聞に達し、その上、寺中の役僧どもよりの訴へ、キッと樣子相糺せよと、三老職の仰せを請け、先達て寺内まで立越したる岩瀬久馬、案に違はずこの遊興。顏を隠取り、衣裳を着飾り、こりや何の眞似でござる。寺僧の面

面、室町どのへ訴への趣き、これへ出て相述べられてよからう。

ト和尚出て

和尚　ハア、イヤモウ、この間より寺内の普請は一向にお構ひなく、茶の口切りぢやの、山吹の花見ぢやのと、毎日々々門内は女子の山。寺内の仕出しに困り入りました。その上、今日の山門の棟上げの狂言に、人が足らぬと、方丈より出入を云ひつけられまして、軍兵とやら云ふ役は、皆此方の者どもでござりまする。コレ皆、これへ出さつしやれ。

ト軍兵、大勢出て

軍兵　ハツ。

ト陣笠を取る。皆々、坊主頭になる。

久馬　斯く遊興に御普請は、べん／＼だら／＼。剰さへ寺中の費えをいとはぬ不屈き、云ひ譯あるか。

司之　サア、それは。

久馬　三老職へ申し上げ、キッと事を糺さうか。

皆々　サア。

皆々　サア／＼／＼。

久馬　サア、返答なければ、某が目にかゝつた一通りを、室町どのへ申し上げる。

彌藤　先づ／＼、お待ち下され。それには申し譯がござりまする。

久馬　云ひ譯あるとは。

彌藤　司之助が放埒ではござりませぬ。

久馬　何がなんと。

彌藤　諸國の城主、京都へ入込むは、堂上方より縁を以て茶の口切り、又は花見の御遊興、奥女中を誘引なさるゝ高位の方々、招待申すは、まゝある事。

久馬　ムウ。して又、家中の諸士を集め、この往還にて樣樣の戯れ、貴殿を始め、そのなり形は。

彌藤　すべてかゝる大寺の再興は、和を施して、大工日雇を使はねば、辛勞辛苦の彼れらが思ひ、堂塔にへんまして、地震に崩され、火災に遭ふ事久しからず。それゆゑ、上より拜借ある三千兩の賄ひにては、行き屆きかね、日限猶豫し、無益の費えをかけまするも、末世末代寺院に凶事なき司之助が計らひ。この大垣彌藤次を始め小平太など、神事の如きまねびを致すも、出生遊ばされし室町どのゝ若君樣の御武運、壽命長久の爲。それをひが事とお咎めあらば、此方も三老職へ直に訴へ、申し開き仕ら

うか。
久馬　サア、それは。
彌藤　御上使樣、御返答が承りたうござりまする。
和尚　ハヽア、こりやきつう日和が變つて參つた。
小平　御上使樣へ、お咎めなされぬ主人が忠義の御遊興。
づく入めが何を訴へ申上げた。
和尚　イヤモウ、斯うあらうと思うたが、これから座禪を
取措いて、愚僧も狂言を心がけう。
久皆　それが上分別でござる。
彌藤　殊さら、齋藤家の次男といへども、司之助どのは、
當時室町どのゝ別腹、國姫さまと御緣を結ばれ置かれし
上、彼れこれがござつては、お守りに付けたる刑部を初
め、我れ〳〵までが、粗相となる儀。お咎めの來ぬうち
に三老職へ此方から。
久馬　イヤ、コレ〳〵、ハテサテ、惡い呑込み。御内緣の
定まる司之助どの、みだらがあつて濟むものか。大工、
日雇ひもそれ〳〵に、猶豫いたし使はねば、結局不時の
費えのありさうな事。拙者もこれより立歸り、殊の外の
出精ゆゑ、追ッつけ普請も成就と、御前よろしう申し上
げるに相違ない。

彌藤　イヤ〳〵、それでも最前の、顏を隈取り衣裳を着飾
り。
小平　べん〳〵だら〳〵普請のお咎め。
久馬　ハテサテ、それはもうよいてや。最早身共は立歸る
ぞ。
和尚　御苦勞千萬に存じまする。方々、道までお見送り。
坊皆　ハア。
久馬　家來、參れ。
ト久馬、家來連れ入る。後より坊主ども、和尚をはじ
め、皆々附き添ひ入る。後に皆々顏見合せ
小平　なんと巧い手番ひ。
司之　慾面の親仁が又うせたゆゑ、なんでもいぢり居らう
と思ひの外、もらう行つてしまひ居つた。
勇藏　いつも賄賂を取立て去ぬる奴、えらう弱つて歸りま
した。
彌藤　お國から若殿のお側に勤めるこの彌藤次、辯にかけ
たら、いかな彼奴も、蛭に鹽と、しゆつと消えたぢや。
司之　イヤ又、今日棟上げの饗應しに、小平太が菊地の役、
彌藤次が隆景。勇藏、丹平が兄弟の役まで、わいらはき
つう出かしたなア。

彌藤　人の事より且しうが、伊織を性根で當て置いて。
司之　イヤモウ、なんでも總當てぢやつた。この勢ひに、刑部が兼ねて思ひ附きの、上林の赤手拭と、名にしおふ、夜の茶摘みに行かうぢやあるまいか。
皆々　エヽ、そりや有り難い。かゝるめでたい折からなれば、夜の茶摘みはほんの事ぢや。參りませう〳〵。
司之　刑部めが來をつたら、嬉しがるであらうのに。
ト此うち、暮れ六ツの太鼓打つと、木魚の勤めの音聞える。
小平　ヤア、ありや暮れ六ツぢや。
丹平　お勤めの聲がするワ。
彌藤　茶園へお供いたさうかい。
三人　マア、この形を、着替へて來う。
司之　コリヤ、その形が思ひ付きぢや。練り物の通るやうに、宇治橋を練つて渡らう。
皆々　こりや、よからう〳〵。
司之　それから後が茶摘みの騷ぎ。
皆々　ほん〳〵、女達を選り食ひぢや。
小平　何所も彼所もしよき〳〵と。
皆々　面白くなつて來たぞ。

彌藤　體がぴり〳〵するやうな。
司之　コリヤ、取逆上すな。いよ〳〵體がぴりつくか。
皆々　ぴりつかいで、なんとせう。
司之　皆の者、ぴりついて、斯う參れ。
皆々　そつこでせい。
ト踊り三味線になり、皆々騷ぎ踊りながら臆病口へ入る。後しんとした唄になる、門の内より黑縮緬の頭巾、大小着流しにて、齋藤刑部出て、あたりを見て居る。所へ橋がゝりより岩瀬久馬戻りかゝり
久馬　齋藤刑部どの、樣子は定めて聞かれたであらう。
刑部　久馬さま、兵衛頭の名代として、黄檗山の御普請に立ち越したる司之助、彌藤次小平太、その外の近習の者に申し附け、島原へ遊覽させ、吾妻路と云ふ傾城になづませ、まんまと馬鹿に仕上げた上、先刻書狀寄越されし通り、檢分上使に立越えらるゝ、貴殿に心を合し置けば。
久馬　室町どのへまつかいさまに申し上げ、しくじらすは、たつた今。殊さら貴殿が賄賂を以て頼み置かれし今日の上使。今の如く閉口に見せかけたも、帶紐解かせてまだこの上に、そゝり上げさす一手段。なんと好い手番ひで

ござらうがの。

刑部　某とても家門の端なれど、僅かな分地に家老格。無念に月日を送るに、思ひたつた我が大望。龍興義龍を仕舞ひつけ、あはよくば武將の礎となる所存。その時は久馬どの、こなたもしつかりと、お禮申さう。

久馬　ムウ、して足利の礎となるべき、手法はどうぢや。

ト刑部、物云はず懐より呼子の笛を出して吹く。そつばの重、げんの才助、がさの八、どてら前帶にて一腰差し出で。

重　お侍ひ様。

ト刑部、シイとあたり見廻し、こなし。

お頼みのあの姫とやら、おいらが仲間の者どもへ、衣服を着せ替へ。

才助　仕事はとくと、目論んで置きました。

刑部　出かした。手當の金子。

ト金財布出し、そつばの重に渡す。

重　エ、、忝ない。

刑部　必らず首尾よう。行け。

三人　ハツ。

ト橋がゝりへ走り入る。こなしあつて

刑部　御覽じたか。彼奴等は柿の木金助と云ふ盜賊の手下ども。追ッつけ金助も、我が味方に抱へる所存。

久馬　すりや、彼の姫を。

刑部　コレ。

ト久馬に囁く。

久馬　巧い〱。兼ねて云ひ合した小平太、彌藤次へ送る密書。

ト二通出す。刑部取つて

刑部　家來參れ。

侍ひ　ハツ。

ト出る。刑部、狀を渡す。

刑部　其方、久馬どのゝ茶摘みの場所へ持參して、小平太彌藤次へ、密かに渡せ。

侍ひ　畏まつてござります。

ト受取つて入る。

久馬　某は立歸り、司之助がある事ない事申し上げ、その上、明日改めて上使の用意。

刑部　身共はいよ〱、彼れらが夜の茶摘みへ入り込み、忍んで事を計らひませう。この上ながらお頼み申す。

久馬　萬事ぬからず。

刑部　然らば明日。

ト両人、東西へ別れ入る。茶摘み唄になり　返し

造り物、一面茶園、葭簀垣にて花壇綺麗に仕切り、屋根留めへ、障子瑠璃燈を一面にともす。勿論奥深く右の茶園を手摺に見る心。ひるさし」臺の裏、両方に障子屋體。幕打つて緣側休み所の體。西の方に腰元、おしげ、同じくおてる、小しな、遣り手杉。中の間におふじ、おその、おさわ。東の方おりよ、おこま、仲居おらん、同じくおかれ、皆々着附け前垂れ紅絞りの手拭をかづき、竹床几に後向きになり、茶を摘み居る體。此うち、橋がゝりより小平太、勇藏、司之助、丹平、彌藤次、各々羽織袴、皆々駒下駄を穿き、めい／＼手燭を持つて出て

小平　御覧なされ。どうも云へぬでないか。

勇藏　それ／＼、どうも云へたものではござらぬ。

司之　斯う見たところが、しほらしい姿ぢやて。

丹平　晝さへあるに夜の茶摘み。

彌藤　どうも斯うも云へぬ景色ぢや。

ト　めい／＼褒めてゐる。

司之　コリヤ／＼、褒めるは褒めるものゝ、おり留めの唐人見るやうに、ア、つッく／＼後向いてばかり居ては、肝心のお顏が見えいで氣の毒ぢや。こちら向かせい向かせい。

彌藤　オツと合點。あのやうに精出してばかり居つては、一通りではこちら向くまい。そこで我れらが工風があるぢや。行儀に居た／＼。

皆々　合點ぢや／＼。

ト皆々手燭を持つて両方へ並よく竝ぶ。

彌藤　ヤア／＼茶摘みの女めら、抑々これにかゝらせ給ふは、在五中將業平よりは九代の後胤、美濃の城主、齋藤龍興の舍弟、司之助義龍とて、如何程戰ひしつかれても、くにやついた事のない大勇者。一度拜する事は、よいも悪いも一てうづゝ、討つて取るとの御請願でござる。

小平　急いでお目見得

皆々　致してよからう。

女皆　そんな事は存ぜぬわいなア。

小平　ヤア、存ぜぬで濟まうと思ふか。女子だてら、後向きに尻つきつけるは不躾千萬。

彌藤　こちら向いてお目見得せい。
すぎ　エイ、やかましい、ちよつとお目見得せまいかや。
皆々　さうせうわいなう。
　トこの時一度にこちら向く。めい〳〵綺麗な手籠を持ち、前垂れを挾み、一やうにしほらしき拵らへにて
その　皆さま、ようお出で
皆々　遊ばしました。
皆々　見事。
　ト手燭持ちながら、一度にすべりこける。
女皆　サア、摘まうぞや。
　ト後向く。
皆々　アイタヽヽ、ア、美しや。ア、痛や。
司之　さて〳〵、綺麗な痛い奴ぢや。
彌藤　若殿樣。
皆々　お互ひに痛み入りまする。
司之　聊か呆れた拍子にかゝつて、如何なこの堅藏のおれも、尻餅ついてのけた。時に、ちよつと見たばかりでは濟まぬわい。どうぞ彼奴らを、一服づゝ賞翫いたしたいものぢやが。
彌藤　あるぞ〳〵。好い思案が浮んだ。

皆々　あるか〳〵。
彌藤　此方どもも若殿のお相伴が致したいけれど、こつちやでは廻り居るまい。そこであいらに斯う云ひつけるぢや。
皆々　どうぢや〳〵。
彌藤　室町どのより、御用があつて、爰で俄に相談がある。茶摘み唄がやかましくて邪魔になる。休み所へ行つて休んで居い。相談しまはば一人づゝ呼び出して褒美を遣らうと云ひ付けるぢや、なんとえらい孔明か。
皆々　出來た〳〵。
司之　彌藤次が近年の上分別ぢや。その計略を計らへ〳〵
彌藤　畏まつて彌藤次は、茶摘みに向ひ大音上。
小平　チン〳〵〳〵〳〵テンツテン〳〵。
　トのり地の心。
彌藤　ヤア〳〵茶摘みの女子めら、大切な御用がある。急いでこれへ出居らう。
皆々　出ませい。
女皆　オヽ、せわし。なんぢやぞいなア。
　ト皆々こちら向く。
彌藤　なんと云うたら、それ。

小平　斎藤の若殿様、大事の御相談の思案も引込むに依つて、休み所へ行て休んでゐい。
司之　その代りに、相談しまへば、一人づゝ呼び出して褒美を取らす。
皆々　その分とく〳〵心得たか。返答は、なんとぢや。
ト此うち、女方、皆々下に居て。
ふじ　仰山な仰しやりつけ。
その　お邪魔なら皆一緒に
女皆　休まうわいなア。
ト唄になり、皆々入る。この時司之助、おさわを捕へ
司之　コリヤ〳〵、われには爰に用がある。
彌小　ソリヤ、もう網を下ろしかけぢや。
さわ　エヽ、申し、わたし一人を捕まへて、なんの御用でござりますかえ。
司之　わが身に用と云ふは、エヽ、それ、斯うぢや〳〵。この袴を脱がしてくれて、この大小も取つて退いて、帯をくる〳〵と、仕直してもらはうと思うて。
さわ　オヽ、滅相な。何仰しやりまするぞいなア。
彌藤　帯を仕直してくれいとは。
小勇　アヽ、もうかいやい。
トいろ〳〵跪く。
司之　イヤ〳〵、其やうに仰山に云うたら、恥かしがつて仕直してくれぬ。爰では目立つて悪いに依つて、アノ、あそこな休み所へ来て、仕直してたも〳〵。
ト手を引ッ張る。
さわ　エヽ、何をなされまする。わたしや否でござりまする。
司之　ハテサテ、サア、おぢやいの。
ト無理に引ッ張り、おさわを東の方の、休み所へ連れ行く。障子ピッシャリ。彌藤次、小平太、勇蔵、丹平、こなしあつて、めい〳〵、障子の内を覗きに行き
四人　こりや堪らぬ。
ト抱きつき合ふ。
彌丹　ハテ、不調法な。はつの身臭い。
小勇　粕煎りの、數の子でも食うたさうな。
トゑづく。ト臆病口より、おてる、おりよ、おしげ、おらん、出て来て
りよ　申し〳〵、あなた方様。
しげ　おさわが、休み所へおぢやらぬが

てる　どこぞ、そこらに居やらぬか
らん　呼んでおくれなされませいなア。
小勇　オヽ、好い所へ尋ねに來た。
彌丹　教へてやらう〳〵。
ト皆々、女を捕へ抱きつく。
女皆　ア、コレ、何をなされますぞいな。
彌皆　どこか、ちよと來い〳〵。
トめい〳〵引ッ張り
コリヤ、してくれぬか〳〵。
照皆　何をいな〳〵。
彌皆　アノ鄙を。
照皆　なんの事ぢやいな〳〵。
彌皆　コリヤ。
ト囁やく。
照皆　エヽ、知らぬわいなア。
ト皆々を突きこかし、逃げて入る。
彌皆　エヽ、むごい奴ぢや。待ち居れ〳〵。
ト皆々口々にぼやき〳〵、をかしき身振りして、臆病口へ入る。茶摘み唄になり、向うより百姓太郎作、木綿淺黃頭巾、百姓の形にて、藥鑵片手に、酒、堺重を肩に載せ、本舞臺へ來て

太郎　ヤレ〳〵急いだ事ぢやあつた。皆ひだるうてなるまいと、いつき急き持ちかけたが、こりや誰れも、仕事場には見えぬ。どこへ行た事ぢややら。マア、爰へ下ろして置いて、流石宇治の名物ぢや、どうやら花香がするやうな。一杯上がりまいを刎ねたいものぢやが。
ト風呂敷取らうとするうち、東の方の休み所より、司之助、おさわが手を引き出る。
さわ　エヽ、モウ惡いお方ぢやわいなア。
司之　ナニ、今のやうなよい事を。
さわ　それでもアノ。
ト太郎作を見て
オヽ、恥かし。
ト臆病口へ逃げて入る。太郎作、ちやつと隱れる。
司之　ヤイ〳〵、なんで逃げて行たのぢや、ヤイ。
ト右の藥鑵を見て
こりや、好い物が來てあるワ。幸い茶碗も爰にある。マア、息つぎに一服せう。
ト側にある床几に腰かけ、茶を呑んでゐる所へ、鳴平、綺麗な奴の形にて、橋がゝりより、走り出る。

鳴平　お旦那、これにござりまするか。

司之　そちや鳴平、何用あつて參つた。

鳴平　參らにやならぬ儀がござりまする。

司之　兄者人の御病氣は。

鳴平　イヤ、モウ稀有な我まゝ病。なり形もお構ひなく、方々へめぐり歩いてござれば、御氣分もお心よく、今明日の其うちには、京都のお上屋鋪へ、お入りの筈でござりまする。

司之　すりや、上屋敷へ兄者人が。

鳴平　その上、室町どのより御緣組み延引に付き、お姫樣の御乳人、獅子堂の奥方、お入りあるとの御内意。

司之　すりや、緣組みが延引ゆゑ。ホイ。

鳴平　イヤ申しお旦那、何ゆゑの御當惑でござりまする。

司之　祝言の場になければならぬ重寶、道風が朗詠集がないわいやい。

鳴平　エヽ、承り及んだ御結納の朗詠集、何方へおやり遊ばしました。

司之　島原の吾妻路に馴染みかさねた揚げ代、花代、國の用金、刑部や皆に呑み込ませ、三千兩ほど取り寄せた。それでも行き屆かず、引き殘つた二百兩、揚屋はせがむ、是非なく朗詠集を代りに預け調のへた二百兩を、廓へ拂うてしまつたわい。

鳴平　エヽ、してそれは、何者にお預けなされました。

ト此うち、橋がゝりより、質屋權兵衞、手代の形にて出かけゐて

權兵　イヤ、預り主は、私しでござりまする。

鳴平　そちや何者ぢや。

權兵　私しはかせ屋と申しまする質屋の手代、權兵衞と申しまする者。ぢやに依つてお斷わり申しましたりや、達てと仰しやるゆゑ、切りを短かうして、昨日ぎりの朗詠集、こちらに望む人があるゆゑ、賣り拂うてしまひまする。お斷わりに參じました。左やうに思し召されませい。

ト云ひ捨て行かうとする。

司之　ア、コリヤ／＼、權兵衞、われはよい氣な者ぢやあつたに、なぜ其やうに氣短うなつた。

權兵　なんの、よい事も、惡い事も、ないでござりまする。二百兩と云ふ大金を借りまするも、十日が間に百兩の利を溫まらう爲。今日か明日かと、待つてゐたが、切り切つたりや仰しやり分はござりますまい。お屆け申し

ましてござりまする。

鳴平　權兵衞とやら、マア待ちやれ。金渡さうが、そこに代物、持つてゐるか。

權兵　ハイ、直ぐに先樣へ持つて行く氣で、肌に付けて居りまする。

鳴平　コリヤ、元利揃へて。

權兵　三百兩でござりまする。

鳴平　その質物、請け戻さう。

權兵　お金をお渡し下されまするか。

鳴平　今爰に金はない。

權兵　エ、。

鳴平　才覺するまで、待つてもらはう。

權兵　ア、申し、その明日までぢやの、夜半の鐘の鳴るまでも、聞き飽いて居りまする。今お金のない事なら、こちらへ貰つてしまひませう。

鳴平　待て。餘の物とは違ふぞ。その質物の外へ行ては、旦那のお身の上になる事。待つまいと云ふが最後、鳴平が臺座後光、待たせやうがあるが、われ見事、待たぬかえ。

トきつと云ふ。

權兵　イヤサ、待つまいではない。少々なれば、どうなとせうわい。

司之　ハア、、折れて出をつたな。コリヤ權兵衞、長うは待たし置かぬ程に、マア宵の口、上林の臺所で、酒など一つ呑んで待つて居い。ソレ鳴平、臺所へ連れて行け。

鳴平　でも、お金の才覺を。

司之　ハテサテ、そりや皆と相談して仕樣があらう。マア權兵衞を連れて行け〳〵。

鳴平　然らば左やう仕りませう。權兵衞、來やれ。

權兵　必ず待つて居りますぞえ。

鳴平　ハテ、來やれと云ふに。

ト唄になり、鳴平、權兵衞、臆病口へ入る。

司之　エ、、此やうな相談も、刑部に逢つてせねばならぬ。どこへ入つて居る事ぢや知らぬ。

トおふじ、奥より出て、あたりを見て

ふじ　オ、、まだ仕事にかゝらずかいなう。滅相な。夜が更けたぞや。

ト行かうとするを、司之助見て

司之　コレ〳〵用がある、ちよつとおぢや〳〵。

ト手を取つて、引寄せる。

ふじ　ア、申し、なんとなされますぞいな。
司之　サア、そのするは、この大小ぢや。どうやら差し心が悪いに依つて、この大小を、わが身に差し直してもらうて、侍ひらしうするのぢやと云ふ事。
ふじ　ホヽホヽ、あなたとした事が、私しが、あなたの殿御振りを、どうマア、直して上げまするものでいなア。
司之　ものでいなア、と云やつても、ほつそりすうわり柳腰、そろ／＼巧者ものゝ付く時分ぢやに、否か。
ふじ　なにをえ。
司之　茶のみ話しを。
ふじ　あなたとかえ。
司之　オイヤイ。
ふじ　嘘ばつかり。
ト此うち、太郎作、出かけ、見てゐて口なめずり。
司之　嘘ぢやない、ほんまぢやわいなう。
ふじ　そりやマア、どこでいなア。
司之　あの休み所で。
ふじ　そんならほんまに。
司之　サア、おぢやいなう。
トおふじを引ッ張り、また東の方の休み所へ、司之助先へ入り、おふじ外より
ふじ　ゆるりとお休み、なされませ。
ト障子をヒッシャリ締めて、臆病口へ逃げて入る。太郎作、バッタリ下に居て、吐息つく。司之助、障子明けて出て
司之　ヤイ／＼、おのれマア、むごい目に遭はしたぞよ。どうやら巧うなるやうに、ちよぼくり居つて、憎い奴ではあるわいやい。
ト臆病口より、小品出て
小品　おそのどの／＼、どこに居さつしやるぞいなう。
司之　コレ／＼、わが身の尋ねる人は、おれがよう知つて居る。なんぞ用があるか。爰へおぢや／＼。
小品　ハイ／＼、私しはおそのどのに、ちよつと逢ひたうござりまする。あなた知つてござるなら、ちよと呼んでおくれ遊ばせ。
司之　サア、呼んでくれなら、呼んでやるが、わが身も否か。
ト太郎作、後で又、をかしきこなし。
小品　否かと御意遊ばしまするは、何が否でござりますえ。

司之　ハ、ア、堅いワ〱。わが身は餘程、變物ぢやわいやい。
小品　田舎者でござりますれば、不調法、失禮の段、眞平御免下さりませ。
司之　ハ、、、、美しい顔に堅くろしうて、どうやら接ぎ穗がない。コレ〱、わが身の尋ねる、おそのとやらは、おれが用を云ひつけてあの休み所に居る。連れて行て逢はしてやらう。ちやつと、おぢや〱。
小品　ハイ〱、左やうなら私しが、つい參じます。お手をお取り遊ばすには及びませぬ。餘りと申せば、畏れ多うござりまする。
司之　ハテサテ、何が畏れ多い。次手におれが何やかや、よい事を敎へてやらう。サア、ちやつと來いやい。
小品　ハイ。
ト恥かしがるこなし。
司之　早うおぢやいなう。
ト西の方の座敷へ入らうとする。
彌藤　ア、サテ、これは不躾な。
ト内より障子を明け、彌藤次、遣り手すぎ、帯とけにて、飛んで出る。

司之　彌藤次か。
彌藤　若旦那。
司之　そんなら、わいらも。
彌藤　きほひ口には、山姥でも……悴はお役に立ちました。
すぎ　オ、、笑止。
司之　心が十ある武士は、誰れも斯くこそあるべけれ。直ぐに一風呂。サア、おぢやいなう。
ト小品、行きかれるを、無理に引立て入る。障子さす。
すぎ　サア、彌藤次さん、こちらの座敷へ行かう。お出で。
彌藤　ア、、コリヤ〱、まだ堪能せぬかいやい。
すぎ　こちや、堪能どころかいなア。
彌藤　ア、、待つてくれ〱。息なしに五番忠信。咽喉がひい〱。
すぎ　エ、、仁體な事云はずと、人の來ぬ間に、お出でいなア。
ト此うち、太郎作こなしあつて、藥罐と茶碗持つて出て

太郎　茶參らんか〳〵。
彌藤　ア、、コリヤ〳〵〳〵。よい所へ來た。茶を買ふ
　茶を買ふ。一杯つげ〳〵。
太郎　オツと合點ぢや。
彌藤　エ、、有り難い。
　ト呑まうとするを。
太郎　オツと待つたり。
　ト彌藤次が額を、片手で押へる。
彌藤　コリヤ、なんとする。
太郎　茶の錢いたさうかい。
彌藤　ハテサテ、知れた一服一錢。役でやる〳〵。
太郎　忝なくも、宇治の根本、茶の銘は五番忠信。皆銘茶
　は一服が金五兩ぢや。
彌藤　ヤア。
太郎　サア、五兩出して、お上がりなされ。高けりや、止
　めにしよか。
彌藤　よいワ、是非に及ばぬ。おすぎ、その紙入れ、あり
　だけ出して扱へ〳〵。
すぎ　アイ〳〵、合點でござんす。コレ、爰に二朱が三つ
　と、小玉が一つあるわいなア。

彌藤　それが身上ありまちぢや。呑ましてくれ〳〵。
太郎　あるぎりなれば、是非がない。まけて置け〳〵。
彌藤　エ、、有り難い〳〵。
太郎　どうぢや〳〵。
すぎ　よいかえ〳〵。
彌藤　値ほどあつて、甘露の味ひがする。ア、〳〵〳〵。
　トをかしき身振りして、べつたりと、へたる。
すぎ　ア、コレ、なんとさしやんしたえ。
彌藤　イヤ〳〵、なんともしやせぬが、あつたら藥の奇特
　を、今の一口で、ツイぐわら〳〵と。
すぎ　なんとしたえ。
彌藤　いてのけたわやい。
すぎ　ハアハア、悲しや。それでも堪能せにやならぬわ
　え。サア、ござんせ〳〵。
彌藤　サア、役に立たぬ。堪忍せい〳〵。
すぎ　イヤ〳〵、どうも堪えられぬ。ござんせいなア。
　ト大小、帶を引さらへ、彌藤次を連れて、無理に、臆
　病口へ入る。唄になり、太郎作、見送り
太郎　どうも云へぬ、流石は宇治ぢや。よい茶の錢が取れ
　る所ぢや。

ト此うち、奥よりおその、出て

その　もうこちの人さんが、見える筈ぢやが。

太郎　ヤア、女房どもか。

その　先刻にから、大抵待つた事ぢやなかつた。

太郎　して、望みの筋は。

その　その手段もあるけれど、何を云うても、爰では譯が話されぬ。

太郎　そんなら勝手で、聞いたり、云うたり、人の間合ひに談合せう。

その　ござんせ。

太郎　おぢや。

ト唄になり、太郎作、おそのが手を引き、ツイと入る。

司之　サア〱、嘘はつかぬ程に、必らず人に云やんなや。

小品　お嬉しうござりますわいなア。

ト司之助、小品を連れ出て

司之　コレ、わが身の朋輩には勿論、誰れにも云ふ事ならぬぞや。

小品　なんの申しませうぞいなア。

司之　エヽ、可愛い奴の。

ト臆病口で、内より

小品どの、小品どの、小しなどのは、どこに居さつしやるぞいなう。

小品　アレ〱、誰れやら參じまする。とつと、モウ、折の惡い。後程、お目にかゝりませう。

ト臆病口へ入る。司之助こなし。

司之　思ひがけない振出しであつたわい。

ト合ひ方になり、こなしあつて

ア、餘ッぽど草臥れた。今見れば、あの銚子杯、必定、彌藤次めが樂しみに取寄せ居つたか。草臥れ休めに、一杯呑まう。誰れも合ひの仕手もないが、然らば、我れら手酌にて打入らうか。

ト酒をつぎ、呑んで居る。始終合ひ方。おこま、奥より出て

こま　イエ〱、わたしや否でござんす。酒はよう食べぬわいなア。

トあたりを見て

オヽ、こりや、茶摘みの火も大方消えて、ほの暗うなつて來た。其やうに酒たべて居ずと、そつと去んだらよか

らうぞえ。ほんにこのマア夜の茶摘み、珍らしい、好い景色ぢやわいなう。

ト此うち、司之助、右の酒を呑んで、醉うたるこなしあつて

司之　コリヤ〳〵、そこへ來たは誰れぢや。爰へ來て合ひしてくれぬか。明りが消えて事が解らぬ。誰れぢやいやい誰れぢやいやい、持たせ居るな〳〵。

ト此うち、おこま、袖にて顔隱し、この時、逃げうとする。

コリヤ〳〵、逃げうとは氣が惡い。滅多に逃がしてよいものか。

ト探り、おこまを捕へる。

こま　エヽ、誰れさんぢや、放さんせ〳〵いなア。

司之　放せとは胴慾な。大分に醉が廻つて來て、滅多無性に面白うなつて來た。コレ、あそこへ來て、この醉を醒ましてくれる氣はないかいやい。

トいろ〳〵嫌らしきこなし。おこま、始終顔隱し

こま　そんな事は存じませぬ。放しておくれなされませいなア。

ト摺りぬける。この模樣よろしく。トヾ後ろ抱きにへだかつて

司之　コリヤ、さゝぬワ〳〵、氣の惡い。なぜ顔を隱すのぢや。マア〳〵御面像を。

トいろ〳〵見ようとするを、おこま、猶、顔を隱し

こま　何をじやら〳〵と仰しやるやら。お前樣は傾城とやら、太夫とやら云ふ古いお馴染みがあるげな。それにマア、在所育ちの茶摘み女子、嫌らしいわたしを。

司之　でも、ませた事をのたまふ。その太夫と云ふは、島原の吾妻路と云うて、おれが馴染みであつたけれど、餘り悋氣しくさるに依つて、すとんと去りこくつて、困らしたら、おれへの面當てに、色を十三人まで拵へ居つたげな。あんな惡性者はない。どこの國が色にまで、閂を入れて十三人とは、とんと愛想が盡き果てた。これから傾城狂ひを思ひ切り、宇治に名高い名茶の花香を、戀ひ慕ふ心ぢやが、どうぢやぞいやい〳〵。

こま　ムウ、そんなら、その傾城樣とやらは。

司之　すとんと、退いてしまつたわいやい。

こま　それぢや、御勝手がよからうなア。

司之　よいぢややら、惡いぢややら、まだ定めもせぬうちに。

こま　殿様。
司之　なんぢや。
こま　きつい醉ひでござんすなア。
之　そしたら、抱かれて寢てくれるか。
こま　わしが聲まで聞き違へるとは、あんまり胴慾ぢやわいなア〳〵。
司之　ヤア、アノ茶摘みと思うたは。
こま　わしぢやわいなア。
司之　ヤア、吾妻路。こりや堪らぬ。
ト逃げうとするを、捕へて
吾妻　司さま、ほんにマア、云ひやうのない惡性づら。如何に酒に醉うたとて、わたしが聲まで聞き違へるとは、水臭いと云はうか、心ないと云はうか、むごいわいなアむごいわいなア。
ト振り廻し、泣く。
司之　ア、、コリヤ、目が舞ふ〳〵。すりや、先刻からの樣子を
ト此うちおらん、遣り手すぎ、手燭を隱し持つて出て
らん　太夫樣、お前の推量しての通り、惡性の手めが上がつて
すぎ　お喜びでござりませう。
ト手燭を出す。
司之　ヤア〳〵、おらんも、遣り手のすぎも、茶摘みの中へ、交つて來て。
吾妻　お前の惡性を、見出さうと、今朝から宇治橋の茶屋に、そつと隱れ來て居たも、彌藤次さまや、皆樣が、文で知らしておくれたゆゑ、茶摘みの方々を賴んで、紛れて居る事は知らずに。アタ惡性な、腹が立つて〳〵。
ト司之助を抓る。
司之　アイタ、、、太股が缺けるわい。そんなら皆の奴等が太夫の方へ知らしたか。
らん　アイ、まだそればかりぢやござんせぬ。國姬さまとやら云ふお方と、祝言のある事まで。
司之　コリヤ、焚きつけな〳〵、それには段々云ひ譯のある事ぢや。コレ太夫、聞いてたも。
吾妻　イエ〳〵、その云ひ譯よりは、十三人まで、色を拵らへたの、閏月まで入つたのとは、そりや誰れが事でござんす。
司之　サア、それにもキッと、云ひ譯がある。

吾妻　その云ひ譯、聞かうわいな。
らん　聞かしやんせ〳〵。
司之　その云ひ譯は。
吾妻　云ひ譯は。
司之　その間に逃げて行たものぢや。
ト臆病口へ逃げ込む。
吾妻　お前はマア。
皆々　聞かしやんすな〳〵。
ト三人ともに、奥へ入る。唄になり、合ひ方にて、臆病口より刑部が家來出る。
侍ひ　彌藤次さま、小平太さま、これにござりまするか。
ト奥より、小平太、彌藤次、出る。
御兩所樣。
彌藤　シイ……刑部どのゝ御家來。
小平　我れ〳〵に何用あつて。
侍ひ　主人、刑部より差越しました、久馬どのゝ御内意。
ト兩人、受取り、狀を見て
彌藤　すりや、久馬どのより兼ねての密書。小平太どの、返翰いたさう。
小平　成る程〳〵。委細は後より。兩人が受取つたと、歸つて刑部どのへお云やれ。
侍ひ　畏まつてござります。
ト入る。
小平　萬事は奥で。
彌藤　來やれ。
ト兩人、奥へ入る。唄になり、司之助、鳴平、出て
司之　サア〳〵、次第に夜は更ける。あの權兵衛めが、長う待つてはくれまいし、どうしたものであらうか。
鳴平　私しめも、その儀について、いろ〳〵心を痛めては居りますれど、何を云うても明日の事。火急の儀なれば、お國へ歸つて來る間もなく、あの朗詠集が人手に渡りました樣子、上へ聞えては、お前ばかりの御難儀ではござりませぬ。兄御樣まで、お祟りは目の前。如何にお若いとてあんまりな事なされました。此やうな切端になつて、これがなんとなりませう。
トうろ〳〵する。司之助もとも〳〵、うろ〳〵する。
此うち、橋がゝりより、歩左衞門、大島の衣裳、大小にて出かけ、樣子を聞いて居る。
司之　其やうに叱つたとて、おれぢやて仕樣はない。あの朗詠集を、權兵衛に預けて金を借りたのは、おりやそんな

事は知らぬけれど、揚げ代に詰つて、どうも斯うもならぬ時、國から銀が参り次第、請け戻して上げます程にと、アノ刑部が權兵衞をつれて來て、朗詠集を渡さして金を借りてくれたのぢや。とんだ事してのけたと思へど、せう事がない。どうぞ金才覺する思案してくれいやい。

鳴平　ムウ、すりや刑部どのが……これにも深い企みのありさうな事なれど、そこ所でない手詰めの切端。

司之　なければならぬ三百兩。

鳴平　朗詠集がお手に入らねば。

司之　室町どのへの云ひ譯は、腹切らうより外にはない。

鳴平　おやと云うて金はなし。

司之　エヽ、どうしたものであらうなア。

ト歩左衞門、二人が中へ、財布に入りし金を抛り出す。鳴平、司之助、恟り。

鳴平　お旦那、そりや、なんでござります。

司之　なんぢややら、おれも知らぬが、マア、見ようわいの。

ト思ひ入れあつて、財布を取り上げ

鳴平　ヤア、こりや金ぢやさうにござります。

ト司之助、ドレ〳〵と、財布ながら探り

如何にも金ぢや。しかも三百兩の嵩。こりやマア、思ひも依らぬ、天から降つたか、地から湧いたか。

歩左　天から降らず、地からも湧かぬ、拙者が金子でござる。

司之　ハア、これはしたり。ハイ、お返し申しませう。

歩左　お遣ひ下されい。

司之　エヽ。

歩左　お若いうちのせう事なし、火に入る事も思はれぬ一盛り。御家來の心遣ひ、餘り笑止に存ずるから、持ち合せの三百兩、御用立てまする。いつにても、調ひました節御返濟なされいサ。

司之　鳴平、聞いたか。

鳴平　これは思ひも依りませぬ。なんとお禮を申さうやら。

歩左　なんの〳〵、手前も主持ち、仕官の身は相身互ひ。

司之　鳴平、一札いたして進ぜませう。

歩左　ハヽ、證文取る程疑はしくば、お取替へは申さぬ、預かり手形は互ひの表、心と心が借り主請け判。依つて件の質物を請けなされい。

司之　鳴平。

鳴平　お旦那。

二人　エヽ、忝なう存じまする。

歩兵　後程、お目にかゝりませう。

ト唄になり、歩左衞門こなしあつて、臆病口へ入る。と兩人、思ひがけないこなし、いろ〱あつて

司之　コリヤ鳴平、今のお侍ひは人間ではあるまい。慥かにおれを守る大小の神祇樣。マア〱、なんぢやあらうと、お志しのこの金、早う朗詠集を取返したい。權兵衞を爰へ呼んで來い〱。

鳴平　左やう致しませう。嚴しうせがみますから、臺所で酒を強ひさせましたゆゑ、慥かに、小座敷で寢て居りました。マア、呼んで參りませう。

ト鳴平、細言しか〴〵あつて、臆病口へツイと入る。

司之　金の要る事ばつかりで、さう〱彌藤次や小平太にも云はれず、どうせうと思うて居たに、鳴平が身に引請くる志しが屆いたこの金。エヽ、忝ない〱。

ト大バタ〱にて、肝入り十右衞門、逃げて來る。彌藤次、拔刀にて追はへ出る。小平太とめながら出る。

十右　アヽ、お免されませ〱。

小平　彌藤次、短氣な。先づお待ちやれ。

彌藤　うぬ、眞二つにぶち放す。それへ直れ。小平次、お退きやれと云ふに。

ト十右衞門、西の方へすくみ居る。眞中へ小平太、彌藤次を止めてゐる。

司之　コリヤ〱〱、廓の肝入り十右衞門に、何科があるぞいやい。赦してやれ〱。

小平　若殿の御意ぢや。マア、お待ちやれ。

ト彌藤次、こなし、刀を納め

彌藤　イヤ、餘の儀でござりませぬ、吾妻路太夫の身請けの事、お前樣より、近々手附けを渡さるゝ內談、十右衞門へ申し聞かしましたるところ、あの方にも、吾妻路どのを望む客より、明日早々手附けを受取る內談のよし。今宵中に手附け金三百兩、差入れねば、吾妻路どのを明日より、先方へ遣はすとの儀。

小平　拙者諸とも、脇より手附け受取る事、暫らく待ちくれるやう、達て頼めど、聞入れぬ強慾者。

彌藤　これまで、切々お金を頂き、御恩を着ながら、受け附けぬ無得心。餘りと申せば憎い仕方。それゆゑ、斯くの仕合せ。

十右　アヽ、申し〱、さう仰しやれば、御尤もらしうご

ざれど、お金の早う渡る方へ埒を明けるが、廓の法でござ
りまする。
彌藤　ムウ。手打ちにするも武士の法ぢや。うぬ。
ト また立ちかゝる。
十右　アイ／＼、お赦されませ／＼。
ト 慄へる。
司之　彌藤次、待て／＼。あゝ云へばとて十右衛門に無理
もない。金銀で方を附けるは廓の法。それで立つた三筋
町ぢや。今宵中に三百兩、手附け金渡しさへすりや、太
夫は此方の手生け同然。おれも寶を請け出す三百兩、思
ひがけなう手に入つたゆゑ、鳴平が、權兵衛を呼びに行
た。寶を請け出し、屋敷へ歸り、其まゝ才覺してやら
う。十右衛門、それまで待つたがよい。
十右　イヤ申し、その間待たれるなら、私しも命の切端、
斯う申しは致しませぬ。夜が明けますると、こちらの手
附けを受取りまして、太夫樣は彼方へ渡しまする。左や
うに思し召されませ。
司之　さう云うては濟まぬわい。
十右　でも、せう事がござりませぬ。
彌藤　憎い雜言、聞捨てに致すも心外。寶を質請けなされ
まする、三百兩あるこそ幸ひ、手附け打つておしまひな
され。
小平　それぢや／＼。質屋めには、明朝までと仰しやれ。
手附けにお遣りなされませい。
司之　ぢやと云うてこの金を。
彌藤　手附け渡して、存外吐かす十右衛門、存分に致した
う存じまする。
司之　成る程、そこもあるわいなう。マア、寶は後での事、
太夫を外へ遣つてはならぬ。いつそこの金、手附けに渡
してしまはうわい。
彌藤　それが上分別でござりまする。
司之　エヽ、いつそ、さうもしてしまへ。
ト 財布を出す。此うちよき程に、步左衛門、出かけ、
後にて聞いて居て、この時
步左　イヤ／＼申しお侍ひ、ちよとお待ちなされませう。
司之　ホウ、こりやお前は最前の。
步左　三百兩、お貸し申した者でござる。
司之　申さうやうもござりません。この三百兩が命金、私
しが身に負ひ重なる難儀を殘らず、この金で遁がれま
す。

歩左　イヤ／＼、なんの禮を仰しやるには及びませぬ。その金、急に拙者が入用、お返しなされて下されい。

司之　エヽ、なんと仰しやりまする。

歩左　寶を質請けの金は貸せども、傾城を身請けの金は、用立てぬ。キリ／＼戻してもらひませう。

司之　サテ、この金戻せと仰しやるに、否はなけれど、見えわたつたその場の難儀。

歩左　四の五の云はずと、戻しやいなう。

ト引ッたくる。司之助キッとなる。皆々、氣の毒なるこなし。歩左衛門、財布の紐を解き、金を改める。財布に載せ司之助が前へ置く。

歩左　お侍ひ、手の悪い事せずと、先刻に貸した三百兩、キリ／＼爰へ、出さんせいの。

司之　ヤア、何がなんとした。

歩左　しやり／＼した葺立ての小判と、瓦の耳を丸めた包み、いつの間に掏り替へた。相手が違ふ。平に何も云はんすな。貴様の爲ぢや。おれが貸したほんまの小判、キリキリ出して戻しやいなう。

ト司之助、右の包みを取上げ見て、瓦ゆゑ、愕り、皆皆もこなし。

十右　ハテ、こりや、もうあみの手が上がつた。いつまで云うても同じ事。明日早々に此方の手附け、受取りまする、さう思うてござりませ。小平太さま、彌藤次さま、お斷わり申しました。ドリヤ、勝手へ行て、とろ／＼やりませうわい。

ト入る。此うち司之助、いろ／＼こなしあつて、ズッと歩左衛門が前へ出て

司之　コレ待て。

歩左　なんぢや。

司之　先刻に難儀の最中へ、抛り出して貸した財布の儘、改め見ぬ事を考へて無理な理窟。そんな事は喰はぬぞよ。アノ横着者めが。

歩左　ハヽヽヽ、栃ほどな涙をこぼして、難儀ひろぐが笑止さに、出してこましたほんまの小判。おてゝこてんで附け上がつて、まだその上にもがりとは、どの頬桁から吹き出した。この口からか。この頬桁か。いま／＼しい泥坊め、うぬ。

ト引附け、くらはさうとする所へ、鳴平駈け出て、歩左衛門を引きのけ、立廻りにて止め

鳴平　コリヤ、お旦那をなんとするのだ。

歩左　なんともせぬ。貸した金を掏り替へて、三百兩を瓦にせうとする泥坊め。養生加へて、埋んだ金を吐かすのぢや。

鳴兵　おきあがれ。コナ大騙りめが。この邊でまだ大手な事ぢや。當世は間に合はぬ。なくなれ〳〵。

歩左　ハヽヽ。泥坊の下前働く程あつて、餘ッぽど丈夫に仕込んだものぢやが、それぢや行かぬ。その手ぢや行かぬ。ごたくばらずと三百兩、世間晴れて出さずば、この袖へなりと入れて置き、取ッ捕まへて、しどかれぬうつ、キリ〳〵出してしまへやい。

司之　まだマア、あゝ云ふねだり者ぢや。鳴平、退け〳〵。ぶち切つて、のけうわい。

歩左　なんぢや、ぶち切る。へヽン、人そばへする泥坊めが。三百兩を騙り損なひ、見せかけ力味おきあがれ。その刀で見事切るか。サア切れ、首を切るか。腕を切るか。このお御足をやらかすか。へヽ、そこらは骨があつて、えゝ切れまい。われに似合つた、爰を切れ〳〵やい。

ト尻まくり、突きつける。司之助、もう、ト抜きかけるを、鳴平抱きとめ

鳴平　コレ申し、大事のお身でござりまする。高が、あゝ云ふ騙りめ、お手下される事はない。切つてよくば下郎めが仕る。大事のお身ぢや〳〵。御料簡が肝要でござりますがや。

歩左　へヽ、大事のお身の筈ぢやてや。三百兩も肌に附けて居るのぢやもの。恐怖の虫の發つたやうな目附きで、その眼玉はなんぢや。大泥坊めが。切らぬかやい〳〵。

トいろ〳〵憎う云ふ。司之助、もう是非に及ばぬと、鳴平を引きのけ、拔打ちにする。歩左衛門、掻い潜り立廻りある所へ、太郎作、おふじ出て來て

ふじ　ソレ、太郎作どの。

太郎　合點ぢや。

ト品よく司之助を留めて

待つた待つた。マア、お急ぎなされますな。

司之　ヤア、料簡がならぬ。退いた〳〵。

太郎　イヤ、私し、出入りの女中に頼まれ、留めにかゝりまするからは、金輪際、お留め申さにやなりませぬ。マア、マア、待つて下されませう。

司之　ムウ。最前の女中、さては由ある方でござるか。定めて樣子はお聞きなされて、お留めなされし儀でござり

ませうが、拙りやうもない大騙りめ。斯く抜き放しました刀、納めやうがござりませぬ。
ふじ　憚りながら、お刀の納まらぬとは、人を相手に遊ばす事。先程より見聞き致すに、人ではない人非人。畜生をお手打ちに遊ばすは、お刀の穢れになりませうがな。
司之　サア、それは。
ふじ　性根の悪い野良犬の癖として、遣る物遣れば、尾を振つて歸るは定め。御一分の立ちまするやうに致しませう。マア／＼、お納めなされて下さりませいなア。
トこなしあつて、司之助、刀を納める。
鳴平　どなた樣かは存じませぬが、逆立ちましたる主人が心を、おなだめ下され、千萬忝なう存じまする。
ふじ　なんの御禮に及びませう。太郎作どの、用意の物を。
ト太郎作、懐より財布取出し、三百兩手に据ゑ、歩左衞門が前に置き
太郎　サア、眼を押ッ開いて、改めて受取り居らう。
歩左　ホヽウ、こりやほんまの小判ぢやさうな。ドレ、受取らう。アヽすんでの事に三百兩、騙られうとした。アア、怖や／＼。首尾よう戻つた祝ひ事に、上林へ行て、一杯呑まう。何奴も此奴も云ひ分ないか。
鳴平　なんのあらう。アノ大泥坊めが。
ト唄になり、歩左衞門、のさ／＼と臆病口へ入る。司之助、うぬト、行かうとする。鳴平、留める。
鳴平　コレ申し、お旦那。
彌藤　御短氣千萬。
小平　お鎭まりあられませう。
ト留める。
太郎　ハテサテ、お氣を立てられますな。御大身と見込まれたが此方の不肖。あのやうな惡者がお側近う參れば、一時も早うお屋敷へお歸りあるが、ようござりまする。併し合點のゆかぬ風體。
ト司之助、心附きたる體にて、鳴平に囁く。
鳴平　畏まつてござりまする。
ト歩左衞門を蹤けて入る。
司之　太郎作とやら、心ある其方が諫め、過分々々。時に思ひ寄らぬお情にあづかり、無難に納まり、喜ばしう存じまするが、して、其許樣の儀は。
ふじ　小倉の里に住居いたす、父樣は京都の浪人、夜の茶摘みの催しに、今宵、これへあなた樣のお入りと聞き、

爰に居ります出入り百姓、太郎作をやう〳〵頼み、この上林へ參り、茶摘みの内へ立交りましたも、司之助さまへ、折入つてお願ひ申す譯あるゆゑ。

太郎　百姓づれがお側近う立振舞ひも、畏れながら、お願ひあつての儀。何卒、お聞屆け下されませうならば、有り難う存じまする。

司之　ムウ。して某への願ひとは。

ふじ　妹おぢや。

小品　アイ。

ト小品、臆病口より出て、恥かしきこなしにて、出かれるを、太郎作、介抱して、おふじが側へ坐らす。

司之　其方は先刻に、休み所で。

小品　お目にかゝつたお殿樣。

司之　ムウ。

ト兩人、俯向く。

ふじ　イヤ御當惑には及びませぬ。お願ひと申すは、妹の事。いつぞや鞍馬の初寅詣り、都の花は、まだ紐とかぬ女子連れ、詩仙堂の門前から、殿達の四五人づれ、中にあなたの殿振りを、見初めたが迷ひの元。朧の清水の蔭にだに物云ひ交す隙もなく、女子の足のついはぐれ、思ひの淵にやせとふりぬる妹が戀。それから内へ戻つても、何事も手に附かず、うつら〳〵と只戀病ひ。わたしを始め父樣も、樣子を知らぬ事、直に問うても、打明けられぬ戀の闇。やう〳〵連れのお衆に便り、樣子を聞けば見初めた戀とは云ふものゝ、お名も所も知らぬが因果。病みほうけた妹を連れ、その時の殿達に、似たお方でも見やつたら、思ひを晴らしてやらうにと、姉妹づれに京中を、一遍と尋ねた今日この頃、伏見のお中屋敷より、大原へお通ひなさるゝお顏を妹が見附け出し、よくよく聞けばお大名の御次男樣、お顏を見た喜びに、病は癒れど及ばぬ戀、思ひ切れと云うたなら、また變も出やうかとたつた一人の妹を助けたさ、お願ひ申すは、この譯でござりまする。

小品　いま姉さんの仰しやる通り、厚かましい恥かしい、灘も瀬戸も打越したわたしが戀。佛神のお力にや、お恥かしい先刻の添臥し。姫御前の本意は達したれど、わたしが切ないこの思ひを、お耳に入れてと姉樣を、せがみせがんだこの隨哉。殿樣の御用の端の露ばかりも、お役に立てば、もう心殘りませぬ。爰に長居は、結句迷ひの種。

ふじ　ぢやと云うて、焦れ〳〵た今夜の仕儀。せめてしみじみ殿樣に。

小品　一夜を千夜の思ひぢやもの。わたしが心を、推量して下さんせいなア。

ト泣く。

ふじ　太郎作どの、どつちへなりと、早うやつて下さんせいなア。

司之　すりや、此まゝ歸るのかいの。

太郎　お侍ひの胤ほどあつて、思ひ切りのよい姉樣。出かさつしやれた〳〵。肝入り十右衛門どの、奉公人を渡します。早う〳〵。

ト奥より、十右衛門出て

十右　奥で、おりのに引合うて、三百兩の身の代まで、渡して置いた此方の代物。暇乞ひが濟んだら、一目散に連れて去ぬる。サア小品、早う立ちやいなう。

ふじ　その身に迫る戀ゆゑとは云ひながら、苦勞にあらう。可愛や〳〵。

太郎　年月出入りの旦那の娘御、十右衛門どの、心して遣うて下され。

彌藤　ヤア、すりや、あの娘は島原へ。

司之　コリヤ〳〵十右衛門。アノ、われがあの子を抱へたか。

十右　ハイ、抱へるが私しが商賣。なければならぬ三百兩、あの子の身の代に貸してくれとあつたゆゑ、兩替屋で取つて渡した三百兩。

司之　ヤア。

太郎　請け判はこの太郎作。

ふじ　商賣とて、手廻した證文まで。

十右　器量押立て、云ひ分ない。お寢間のねざらへ出來てある飛切りの奉公人、見遁がしてなりませうか。

ト太郎作、おふじ、司之助が側へ行き

太郎　お役に立つて苦界に沈む、せめてあの子が念晴らし。

ふじ　未來の契りと思し召し、お心のお杯。

太郎　おさしなされて下されませ。

司之　ムウ。尤もの願ひなれども、姫と云ひ、吾妻路が手前もあれば。

太郎　すりや、お杯は頂かれぬか。

吾妻　その杯は、私しが取次ぎ致しませう。

司之　ヤア太夫。

ト吾妻路出る。

三人　すりや、吾妻路どのと云ふは。
吾妻　アイ、わたしでござんす。殿様の御難儀を救うてもらうたお妹御様、杯ばかりはわたしが仲間入り。お姫様へもよいやうに申しまする。殿様、あの子の志し、無になさらずと、お杯を。
司之　オヽ、よう云やつた。出かしやつた。ソレ、銚子杯銚子杯。
　ト銚子杯、おその、持つて出る。
その　様子を聞けば、おめでたい哀れな事。殿様、お取上げなされませ。
十右　サア〳〵小品、早う埒を明けぬか。
司之　エヽ、忙しない。合點ぢや〳〵。
　ト司之助、杯を取り、おその、酌する。
ソレ、小品とやら、望みを叶へる、假の杯。
小品　そんなら先刻に仰しやつた
司之　詞は違はぬ、深い緣。
小品　エヽ、お嬉しう存じます。
十右　ア、嬉しや、埒が明いた。おそのどのとやら、先刻に頼んだ駕籠はどうぢやな。
その　合點でござんす。用意の駕籠、早う〳〵。

　ト侍ひ大勢、橋がゝりより
侍ひ　ハツ。
　ト飾り乗り物吊らせ、侍ひ大勢附き、スタ〳〵と舁いで出る。
侍ひ　申し上げまする、半蔀さまより、國姫さまのお迎ひの御乗り物、疾より控へ居りましてござりまする。
ふじ　ソレ腰元、お供の用意。
腰元　ハア。
　ト臆病口より、おさわ、おしげ、おりよ、おてる、おかれ、皆々腰元の形にて一腰差し出る。
ふじ　お姫様を、お乗り物へ。
皆々　ハア。
　ト小品を、乗り物へ乘せる。
司之　小品が様子。皆の者、この姿は。
歩左　若殿様、聟引出、お渡し申さん。
　ト歩左衛門、麻上下、大小にて、三方に神武の旗、連理の杯を、袱紗に包み載せ出る。
女房、出かした。さりながら御祝言の折柄、聟引出の神武の旗、お姫様の御肌の守に。
　トおふじ、取次ぎ、國姫に渡す。

國姫　吾妻路どの、過分なぞや。
吾妻　おめでたう存じまする。
司之　太夫も樣子知つた體。すりや、この小品と云ふは。
步左　室町どのゝ御息女、御縁組みのある國姫さま。即ち
　これなる杯は、室町どのゝ、御重寶、比翼連理の二つ
　の杯。内祝言の御固め、めでたくお納め下されませ
　う。
司之　すりや聞き及びし御重寶、司之助、めでたう受納。
　ト乘り物の内より
國姫　吾妻路どの、諸事は其方を頼むぞや。
吾妻　有り難いお詞、お姫樣のお心根、おいとしう存じま
　して、あなたと寐さしましたのも、みんなわたしが取計
　らひ。
司之　これはしたり。
十右　私しまでも皆樣に頼まれて、手附け金の催促やら、
　お姫樣を、奉公人とは勿體ない。サア、太夫樣、行から
　ではないか。
吾妻　殿樣、先刻に云うた事、覺えて居やしやんせえ。
腰元　太夫樣、お供せう。
ふじ　乘り物、早う。

侍ひ　ハア、。
　ト乘り物舁き上げる。おふじも襠着て、右の腰元大
　勢、乘り物に引添ひ、侍ひ大勢、後に附いて入る。
彌藤　すりや、いづれもの計ひで
小平　内祝言のお杯を、取結ばれてござるな。
步左　成る程〳〵、主人國姫、婚禮を待ち佗び、只なんと
　なく病氣の體。それゆゑ、乳母勘解由の奥方、半部さま
　と申し合せし拙者め、姿をやつし、いろ〳〵心を盡した
　も、お杯を納めん爲。即ち、獅子堂勘解由が家來、一徹
　者と名を取つた、石合步左衞門と申す者。
その　私しは、半部の妹園生。御家中、最上新兵衞と、部
　屋住みのうち云ひ交し、不義の科とて御勘當。
太郎　殿には未だ御幼稚にて、お目見得とては致さねど、
　御舍兄、兵衞督さまの御勘當御赦免を願はん爲、新兵衞
　がこの有樣。
司之　すりや、聞き及んだ最上新兵衞。姫が家中の步左衞
　門。
步左　畏れながら我れ〳〵が
新兵　心遣ひも忠義の一途。
步左　鳴平どの、朗詠集を早く〳〵。

再演の

附　評　繪

鳴平　ネイ。
ト鳴平、朗詠集の箱、持つて出て、司之助が前に直し
最前質屋權兵衞を、連れ參らんと致せし所へ、歩左衞門さまにお目にかゝり、三百兩をお役に立て、朗詠集を取返し、御祝言を調へんその爲に、まッ斯う〳〵と申し合せし先刻の仕儀。もし御短氣も出やうかと、お側に附き添ふ其うちに、各々の取計らひ。守り奉りし朗詠集。お姫樣の御祝言も相調ひ、いづれも樣のお喜び。下郎めまでもナイ〳〵、おめでたう存じまする。
司之　すりや、鳴平も一つであつたか。何は兎もあれ、朗詠集の手に入つたも、一方ならぬ皆の忠義、過分過分。
ト奥より丹平出で
丹平　中屋敷より火急のお使ひ、明日室町どのゝ上使として、大橋左理さま、岩瀬久馬さま、御同道にてお入りとの事。刑部どのよりこの趣き、相知らされましてござります。
小彌　御上使の御入りとな。
司之　すりや、刑部どのゝお越しの上、小平太丹平は急ぎ歸つて、萬事の仕度。
小丹　畏まつてござります。
ト入る。
司之　新兵衞夫婦も、この功を申し立て、兄龍興どのへ、御勘氣の執成しを、申し立てくれう。
新兵　お目通りへも叶はぬ身が、勘當お詫び、このお目見得。
歩左　何にもせよ上使とあらば、早々お歸りあられましてようござりませう。
司之　如何にも。屋敷へ立歸らう。連理の杯は、彌藤次、其方が。
彌藤　畏まつてござりまする。
ト彌藤次、杯を懐へ入れる。
司之　朗詠集は、鳴平、其方に相渡すぞ。
鳴平　ネイ。
司之　大切に守り奉れ。
鳴平　畏まつてござりまする。
その　長居は畏れ、こちの人。
司之　方々、さらば。
歩左　ハア。
新兵　女房來い。

ト唄になる。こなしあつて、新兵衛、閻生、附いて向うへ入る。後に司之助、見送りながら鳴平、彌藤次を連れ、橋がゝりへ入る。歩左衛門後に殘り、こなしあつて、

歩左　エ、有難い。心を盡せし御祝言調ひし上は、先づこの樣子を半蔀さまへ。

ト行かうとする、おかれ、息を切つて走り出て

かれ　申し〳〵歩左衛門さま、最前のお乘り物、半蔀さまのお迎ひと思ひの外、誠は姫を奪はん爲の似せ迎ひ。思ひがけなき途中の狼藉、大勢相手に働けども、云ひ甲斐ない女の業。早う御加勢下さりませ。私しはお先へ參ります。

ト云ひ捨てゝ走り入る。

歩左　ヤア〳〵。すりや最前の迎ひの乘り物。南無三

ト股立ち取らうとするうち、勇藏、出かける。

勇藏　待て。

歩左　合點のゆかぬ荷擔ばうめ、詮議してゐる間はない。

ト茶園の向うへ、見事に投げ出し

うぬ、曲者め。

ト股立ち凛々しく端折り入る。返し。

造り物、黒幕、一面の松原になり、橋がゝり、バタバタにて、おふじ、おさわ、おてる、おりよ、おしげ乘り物に引添ひ出る。後より侍ひ大勢附き、出て

侍ひ　サア、その乘り物此方へ渡せ。

ふじ　何者なれば迎ひと僞はり

さわ　お姫樣を奪はんとは、心得がたき狼藉。

てる　此まゝに歸ればよし

りよ　無理に狼藉するならば

皆々　此まゝには免さぬぞ。

侍ひ　ヤア、猪口才な。踏み込んで奪ひ取れ。

ト抜きつれかゝる。おふじ、皆々、なにをト抜き合せ、橋がゝりへ追ひ込む。アリヤ〳〵にて侍ひ大勢取つて返し、乘り物を舁き上げうとする所へ、歩左衛門、凛凛しき體にて駈けつけ、大勢を取つて投げ

歩左　ヤア、うづ蟲めら、半蔀さまの迎ひと僞はり、國姫さまを奪はんとは、何者に頼まれた。サア、有りやうに白状ひろがう。

侍ひ　ヤア、むま〳〵と頼み手を白状してよいものか。邪魔ひろぐおのれから、ソレ、ぶち殺して奪ひ取れ。

侍皆　合點ぢや。

ト これより烈しきタテ、いろ〳〵あつて、歩左衞門、皆々を追ひ込むと、乗り物より國姫出で

國姫　コレイナウ歩左衞門、長追ひしやんな。戻つてもいなう〳〵。

ト侍ひ一人、駈け出て

侍ひ　コリヤ、してやつた。

國姫　エ、狼藉な。何者ぢや、放せいやい〳〵。

ト此うち村路、屋敷模様の襠裲にて、鐵隱し、よき時分に出かけゐて、この時、侍ひを引退けて投げろ、直ぐに切りかける、捻ぢ上げ

ヤア、こなたは誰れぢやぞいなう。

ト慄ふ。

村路　コレ、怖い事はござりませぬ。ヂッとして居なされや。

ト襠裲脱ぐ。老女の姿なり。侍ひ引ッぱづし、切りつける。村路、刀を叩き落し、直ぐに引きつけ、締め殺し、乗り物へ、右の死骸を打ち込み、戸をピッシャリさす。國姫こなしある。

コレ、神武の旗は持つてござるかや。

國姫　アイ、自らが肌に附けて。

村路　ハテ、慄ふ事はござりませぬ。わたしがお供いたしまする。

國姫　でも、其方は。

村路　お見知りなされいでも、年寄りが悪いやうには致しませぬ、なんにも云はずと、姫君様。

國姫　でも。

村路　妾に附いて、マア〳〵お出でなされませ。

ト姫を連れ向うへ入る。と侍ひ大勢、取つて返し

侍ひ　してやつた。

ト乗り物舁き上げる所へ、歩左衞門出て、皆々を、取つて投げのけ

歩左　爰に置かれぬこの乗り物。さうぢや。

ト乗り物を舁き上げ、侍ひ皆々取卷く。

皆々　やらぬ。

歩左　なにを。

トきつと見得にてとまる。

幕

二つ目

齋藤館の場
小倉堤の場

役名──齋藤龍興。齋藤司之助。齋藤刑部。石橋亘理。岩瀨久馬。大垣彌藤次。石黑丹平。有松小平太。横谷勇藏。獅子堂奧方、半蔀。石谷步左衞門。同女房、藤野。奴、鳴平。柿木金助。向坂甚內。

造り物、三間の間二重舞臺、橋がゝり高塀にて、大橋亘理、岩瀨久馬兩人、衣裳、上下にて上使、二重舞臺に床几にかゝり居る。齋藤刑部三方に、腹切り刀を載せ、司之助に突きつけゐる。彌藤次、拔きかけるを、司之助、留めてゐる。鳴平　奴の形にて、勇藏を捻ち上げゐる。下座の方に小平太、丹平、立ちかゝり擬勢。いづれも衣裳、上下にて、花道戸屋の內より、獅子堂勘解由さまのお入りと、能の太鼓で、幕開く。

小平　慮外者。
丹平　下がり居らう。

鳴平　お旦那に狼藉ひろぐと、どなたでも、この奴めが容赦はせぬぞ。
刑部　サア若殿、尋常に、切腹召されい。
彌藤　介錯は、この彌藤次。
司之　待て。何ゆゑに某に切腹を進めるのぢや。
久馬　只今申す通り、黃梁山の御用金、三百兩の不足と云ひ
亘理　夜の茶摘みの香りの條々。
兩人　申し譯がござるか。
司之　サア、その申し譯は。
刑部　なんのあらう。吾妻路と云ふ傾城に、遣ひなくして放埓懦弱、室町どのへの申し譯に、さつぱりと
皆々　切腹なされい。
　ト花道戸屋の方より
半蔀　待つた。その切腹お進めあるな。無益の生害、お扣へなされい。
皆々　ヤヽ、なんと。
　ト向うより半蔀、襠裲にて出る。
亘理　國姬君の御乳人、獅子堂勘解由どのゝ奧方。
久馬　半蔀どのには、何用あつて。

皆々　これへお出でなされたな。

半蔀　國姫君の御縁組み、御婚禮を取急がんと、政所より御内意をうけ、夫勘解由、折惡しく病氣につき、名代のこの二腰。

亙理　御内意とあらば、上使も同然。

司之　イザ先づあれへ、お通りあられませう。

半蔀　左やうなれば、お許されませう。

ト ずつと通る。皆々並よく並ぶ。

刑部　半蔀さま。申し譯なき若殿の切腹。なぜお留めなさるゝな。

半蔀　國姫君と婚禮相濟まば、司之助さまは足利の御聟君。參りかゝつて様子を聞けば、御生害とは一大事。事を糺した上の事と、お留め申した、半蔀が、誤まりぢやござりますまい。

ト 皆々思ひ入れ。

久馬　黄檗山の御用金、一萬兩のうち、三千兩の不足の儀は。

亙理　司之助どの、申譯がござるかな。

司之　サア、その金子は……コリヤ／＼彌藤次、小平太、勇藏、丹平、その三千兩の金は、國元の納戸金を取寄せたと云うたでないか。

彌藤　知りませぬ。吾妻路と云ふ傾城、遣ひなくした奢りの入用。

小平　我れ／＼が存じませうか。こなたこそ覺えがござらう。

司之　すりや、納戸金三千兩と、僞はつて御用金を。

久馬　イヽヤ、それぱかりぢやない。足利の若君御祈禱と身共を欺き、夜の茶摘みと准らへて、多くの遊女を集め、放埒惰弱の申し譯は。

司之　すりや、その茶摘みの儀まで。ホイ。

亙理　司之助どの、申し譯はござらぬか。取分けこなたは室町どのより嚴命あつて、三韓通路の書翰を自筆に認めねば、和漢の通路なりがたき重き役目を蒙むり、その上、足利どの御縁組み、國姫君をお嫌ひなされ、傾城遊君の入用に、御用金を遣はれしとお聞きに達す。して、彼の朗詠集は如何なされたな。

司之　鳴平、最前の朗詠集を。

鳴平　ハツ。

ト 朗詠集の箱を、亙理が前へ持ち行く。

亙理　すりや、これが朗詠集。

ト箱を開き、改め見て
尤も墨色捺らへまでも似せたれども、手鑑の朗詠集は、天下に稀れなる齋藤家の重寶。これはコレ、似ても似つかぬ似せ物サ。

司鳴　ナニ、朗詠集は似せものとな。ホイ。

ト當惑する。刑部、三方を司之助が前へ出し。

刑部　サア若殿、兄龍興へ、お祟りの來ぬうち、サア、尋常に切腹なされい。

半部　イ、ヤ、切腹の人が違うた。

皆々　ナニ、切腹の人が違うたとは。

半部　御若年の司之助さま、大切な御用金を不足なさるゝ程の御遊興、うか／＼見て居ずとも、なぜ諫言はなされぬぞ。

刑部　ム、、ハ、、、、當家の執權の席につらなるこの刑部、若殿に諫言する事、他の女に習ひませうか。かゝる惰弱は三度諫めて身退くは臣下のならひ。百度千度諫めても、傾城に魂ひ奪はれ、この期に及んで詮方なく、切腹を進むるは、齋藤家を大切に存ずるから。

半部　成る程、左やうありさうな事。さりながら、紛失したる御寶の詮議もせず、失つたらよいはと、其まゝに捨て置かるゝは、刑部どの、なんでござる。各々まで、不忠ではあるまいか。

刑部　その儀も拙者が承知いたしある。一旦若殿、御切腹あつて、室町どのゝ御不審を遠ざけ、その上にて、寶の詮議。

半部　イヤ、そりや不忠ぢや。

刑部　不忠とは。

半部　寶の詮議の有無も糺さず、主人に切腹すゝむるは、なんと不忠であるまいか。イヤサ、主人に替るは家來のならひ、お家の大事を思し召さば、金子の不足も、寶の儀も、皆我れ／＼が放埒と、室町どのへの云ひ譯に、刑部どのを始め、御近習方、いさぎよく切腹なされい。

刑部　すりや、主人の代りに刑部を始め

皆々　我れ／＼に切腹して。

半部　主人に代るは忠義の切腹、お進め申す半部が、誤まりでござるかな。

刑部　サ、それは。

半部　サア。

皆々　サア／＼／＼。

半部　命を捨てるは忠死のならひ。ホヽ、、お氣の毒に存

じまする。
皆々　ムウ。
　ト皆々うぢ〳〵する。
鳴平　シタリ、けうといものぢや。イヤモ、半部さまの仰しやる通り、若殿様を放埒に、そゝり上げた近習方、辨慶の報が來て、黒くなつたり青くなつたり、まぢ〳〵としたお顏つき、こんな小氣味のよい事はない。旦那の代りに、どなたからおやりなさる。
　ト三方を取つて來て、皆々の前に置く。
サア、彌藤次さま、小平太さま、苦々しい、おしやッ面だ。勇藏さま、丹平さま、なぜ尻込みなさるゝ。忠義になるぞや……ム、、ヘ、、、各々方、きよろ〳〵とさつしやるも尤もぢや。このお箸は刑部さまからお取りなさるゝがよからう。サア、さつぱりと、やらしやりませ。
　ト刑部が前へ、三方直す。
刑部　ヤア、慮外な下郎め。大切な評議の場所へ罷り出で、立ちはだかつて見苦しい。切腹してよければ、うぬらに指圖を受けうか。刑部が前とも憚からず、蟲同然の匹夫下郎。くたばりたくば、うぬ、くたばれ。
　ト三方を蹴飛ばす。

鳴平　なにを。
司之　コリヤ、上使の御前ぢや。扣へて居い。
鳴平　でも。
司之　ハテサテ、マア、扣へて居やいの。
鳴平　ネイ。
　トこなしあつて控へると、向うバタ〳〵にて、歩左衛門女房おふじ、走り出て
ふじ　半部さま、これにござりまするか。
半部　歩左衛門が女房おふじ、あわたゞしい、何事ぢや。
ふじ　あなたのお指圖通り、國姫さまの御內祝言、首尾よう結びましたるところ、半部さまよりのお迎ひと僞はり、國姫君を奪ひ取らんと、思ひ依らざる途中の狼藉。
司之　ナニ、國姫を。
　ト皆々恟りする。
刑部　途中に於て狼藉者が奪ひしとは、オヽ、さうあらう。
　ト云はうとして、顏見合せ
ハテ、氣の毒千萬な。
　トこなしあつて
半部　して、其方が夫、歩左衛門は居合さぬか。

ふじ　成る程、夫歩左衛門、危ふい場所へ駈けつけ、狼藉者を追ひ散らし、お乘り物、お姫君を取り返し、追ッつけこれへお供して參りまする。

皆々　ヤア、、。

ト恟りする。

司之　そんなら國姫どのを、歩左衛門が。

鳴平　取り返してお供して歸るとな。

刑部　なんと云ふおふじ、狼藉者が奪ひし姫君の乘り物、歩左衛門が取り返してお供するとな。

歩左　君のお身の上、それへ參つて申し上げう。

ト花道より、大童になり出る。

半蔀　歩左衛門か。

ふじ　こちの人、半蔀さまのお待ちかね。サア、お姫樣のお乘り物は。

歩左　サア、その乘り物は。

鳴平　如何なされた。歩左衛門どの。

歩左　奪ひ返せし國姫さまのお身の上は……その云ひ譯は。

ト腹切らうとする。おふじ、鳴平、留めて

ふじ　待たしやんせ。こりや、なんで腹切るのぢやいなア。

歩左　女房ども、口惜しや、奪ひ返したお乘り物を押開け見れば、怪しい奴の死骸と入れ替へ、姫君樣は御座なされず、南無三方と駈け出しても、人影なく、所詮武運に盡きたる某、腹切らんと存せしが、半蔀さまへ離れあつて、お知らせ申さんと、面押拭うてその場の次第。申し譯には歩左衛門が不覺の切腹。

ふじ　コレ、早まつて下さんすな。

刑部　犬死するな歩左衛門。姫を盜みし盜賊は知れてある。

歩左　その盜賊が知れてあるとは。

刑部　國姫君との祝言を嫌ひ、神武の寶諸ともに、盜ましたに違ひはない。遠い所を探さうより、足元にある詮議が近道。

久馬　イカサマ、傾城に性根を奪はれ、御上臈のかゝつた縁組みを嫌ひ、姫君を盜ましたに相違はない。

彈正　見す〳〵知れた狼藉者。畏れながら久馬さまには、かゝる樣子を室町どのへ言上なされ、御前よろしうナ、首尾よう事の納まるやうに。

久馬　氣遣ひ致すな。この久馬が承知いたして居るわサ。

司之　半蔀どの、司之助が身に取つて、毛頭覺えはなけれども、御上使のお詞、室町どのゝお疑ひ。

歩左　政所への申し譯。

ト兩人、顏見合せ、腹切らうとする。

鳴平　これ待つた。

歩左　女房退け、申し譯の。

司歩　この切腹。

半蔀　生害すれば姫君の、お行くへが知れるか。

司歩　ヤ、なんと。

半蔀　御內祝言を遁がれたさと、お疑ひのかゝつた若殿樣、大切なお姫君を奪はれし歩左衞門、とくと詮議を致すまでは、無益の切腹叶ひませぬぞ。

司之　すりや、死ぬるにも

歩左　死なれぬか。

兩人　ホイ。

ト兩人顏見合せ、こなしある。

刑部　イヤ〳〵、半蔀さま、神武の旗も、朗詠集も、姫君樣も失ひたれば、この緣組みは、なりますまい。

半蔀　イヤ、御祝言は相濟みました。

刑彌　ヤ、なんと。

半蔀　足利家の姫君樣、表向きの御婚禮は、假初めならぬ御儀式、義照公御眼病につき、延引に及ぶゆゑ、歩左衞門に申し付け、杯まで取交し、內祝言、滯りなく相濟んだれば、御緣組みの切れやう筈がない。その上姫君の御在所は、この半蔀が知つて居る。

歩左　エヽ、すりや。

半蔀　ハテ、この乳母が、姫君の在所知つてゐるからは、例へ誰れがどう云はうが、御緣の切れやうがない。大切ない聟君に、御生害はさせませぬ。

刑部　して、御內祝言相濟んだ印がござるかな。

半蔀　その印はおふじ、御祝言は相濟んだであらうな。

ふじ　左やうでござりまする。御祝言は相濟みまして、お杯をお二方へ。

半蔀　若殿樣、取交されしお杯は。

司之　彌藤次、其方に預けた杯、これへ出せ。

彌藤　存じませぬ。拙者、覺えはござりませぬぞ。

司之　最前宇治の茶園に於て、預けた連理の杯。

彌藤　なんでござりまする。茶摘みの女子の振り袖を捕へて、自墮落の事をなされて、杯をやつたり、取つたりした女を、足利のお姫樣と、御祝言なされたとは、餘りに

勿體ない儀でござりまする。

鳴平　イヤ、とぼけさつしやる彌藤次どの、こなたにお預けないものが、若殿がそれと仰しやるものか。尋常にそこに出さぬと、この奴が。

歩左　さうだ〳〵。惡く隱し立てをひろぐと、素首を引き拔いて。

鳴平　合點ぢや〳〵。

ト兩人、立ちかゝらうとする。

半蔀　コレ、兩人とも、立騷いで見苦しい。御上使の御前ぢや。

兩人　でも。

半蔀　扣へて居やうぞ。

兩人　エヽ、いま〳〵しい。

ト鳴平は丹平、歩左衛門は勇藏を、毆りこかす。

丹勇　此奴、何をひろぐ。

久馬　最前から譯立たぬ、不思議の條々、立歸つて、言上いたさう。

亙理　イヤ〳〵暫らく、お扣へなされい。事を紊すが上使の役目。ナコレ、半蔀どの、この場の納まり、なんと、思し召さるゝな。

半蔀　サア、御縁談を急がんと、參りかゝつてこの場の樣子、聞捨てならぬ、三千兩の不足、若殿司之助、園繪君をお嫌ひなさるゝ、また杯の儀も、とくと糺して、暮れ六ツまでに申し譯いたさせませう。御苦勞ながらお二方には、善惡邪正の分るまで、若殿樣を、この半蔀に、お預けなされ下されうなれば、有り難う存じまする。

亙理　左やうなくては、司どのゝ御縁談は調ひますまい。

久馬　すりやこの久馬もこの儀に。

亙理　例へ百日千日でも、事を糺すが、上使の役目。

久馬　左やうならば、如何やうとも。

刑部　ハヽヽ。女賢しうして牛賣られぬと、呑み込み顏の半蔀さま、朗詠集の譯を糺し、印の杯も。

半蔀　サア、何もかもとつくりと、各々方とも、御熟談。

彌藤　マア、それまでは奥殿にて、上使の御馳走。

亙理　半蔀どの。

半蔀　お二方樣。

皆々　先づ、お入りあられませう。

ト唄になる。亙理久馬を先に立て、半蔀、その外、諸士皆々入る。跡は半蔀、司之助、歩左衛門、おふじ、鳴平殘る。合ひ方。

司之　半部さま、我れ〳〵が身の上は。
歩左　何卒命の
司之　お暇を。
半部　イヽヤ、なるまい。
歩藤　でも、不覺の科ゆゑに。
半部　サア、若殿樣との御祝言、待ち侘び給ふ姫君樣、戀は切ない習はせと、思ひ過して、半部が、其方達夫婦に。サア、其方達には詮議がある。扣へてゐやうぞ。
トこなし。
歩藤　ハアヽ。
ト思ひ入れあつて俯向く。
司之　家門なれ共家老格、遺恨を挾む刑部が詞。
鳴平　家中の近習も一味と見え、若殿樣をそゝり上げ、家國を押領せんと、企みある刑部。
半部　コレ、何事も、姫君の安否の知れるそれまでは、滅多な事を云ふまいぞ。歩左衛門は、おふじに預け、おふじは又歩左衛門に預けて置くが詮議の手がゝり。遠い所を尋ねうより、忠と不忠を目の前に、顯はす工風があらうぞや。
歩藤　すりや、我れ〳〵に。

半部　糺すは同じ館の内、若殿樣にも、一先づ奥へ。
司之　半部どのにも、御一緒に。
鳴平　この奴めも。
半部　詮議がある。イザ奥の間へ、夫婦の者。
歩藤　忠と不忠と目の前に。
半部　命の捨て場を、思案せい。
ト唄になり、半部、司之助、鳴平、奥へ入る。歩左衛門、おふじ、殘り、いろ〳〵こなしあり。
歩左　忠と不忠を目の前に
ふじ　命の捨て場と仰しやつたは。
歩左　こりや思案せざなるまい。
ト手を組み思ひ入れ。
ふじ　こちの人、好い思案が出たかいなア。
歩左　思案が出たぞ。
ふじ　エ、そりやどういふ思案ぢやえ。
ト急いて云ふ。
歩左　エヽ、忙しない。其やうに吐かすで、出かゝつた思案が引ツ込んだわい。
ふじ　なんぢやぞいなア。阿房らしい。
歩左　われも其方へ寄つて、思案をせい。おれがやうな武

骨者に、此やうなむづかしい思案をせいと仰しやつても、ついこれが出る事かい。エヽ、忠と不忠と目の前に。

ふじ　命の捨て場を。

歩左　ハテ、どうした事で、あらうなア。

ト両人、手を組み、いろ〳〵こなしある。ト奥より勇藏、出て、橋がゝりへ行かうとする。歩左衞門、見てこなし。

歩左　待ち居らう。

ト首筋を摑む。

勇藏　アイタヽヽ、これはどうだ〳〵。

ふじ　コレ、滅多な事、さしやんすないなア。

歩左　大事ない〳〵。

勇藏　イヤ、大事あるぞ。コリヤ、身共をなんとする。

歩左　詮議する。有やうに吐かせ。

勇藏　ヤイ、ヤイ〳〵〳〵、此奴が〳〵、狼藉な。吐かせとは何事ぢや。

歩左　大切な姫君を奪ひ取られ、氣を取逆上して、先刻にうぬが面を見附けなんだが、夜前、茶園に於いて姫君樣の樣子を聞き、駈け出さうとした身共を、なんでうぬは止め立てした。

勇藏　イヤサ、それは。

歩左　好い所へ出居つた。サア、有やうに吐かせばよし、隱し立てひろぐと、摑み殺すぞ。

ト締めつける。

勇藏　アイタヽヽ。申します〳〵。

歩左　サア、企みの段々、白状いたせ。

ト突き放す。

勇藏　オヽ、云うて聞かさうわい。

ト抜きかける。歩左衞門とめる。この立廻りのうち、おふじ、懷中より一通を引出す。

歩左　女房、そりやなんぢや。

ふじ　何か怪しい、この一通。

歩左　ドレ。

ト書附けを取る。

歩左　なんだ。覺え、一貫五百文、すつぽん汁二十五膳、酒代二十貫、勇藏さま。大庄の書附けだ。

勇藏　エヽ、面目次第もない。

ふじ　なんぞ手がゝりには、ならぬかいなア。

歩左　なんにもならぬものだ。さてこの野郎は、よく喰ふ

奴だ。
ト此うち、勇藏、苦しみ、血を吐き死ぬる。
コリヤ、物を吐かせ。此奴、空を使ひ居るさうな。
ふじ　コレイナア、血を吐いて死んでゐるわいなア。
歩左　なんだ血を吐いて。
ト見て
コリヤイ、いつの間にくたばつた。
ト突き放す、勇藏、こける。此うち奥より、丹平、出かけゐて、この時
丹平　勇藏を手にかけた歩左衛門、覺悟。
ト切つてかゝる。歩左衛門、見得よく留めて
歩左　同じ穴の狐めら。詮議する。有りやうに云へ。
丹平　うぬを。
ト立廻りにて、丹平を切り倒す。おふじ、死骸の懐中を探し見て
ふじ　手がゝりになるべき物は、見えぬわいなア。
歩左　エ、いま／＼しい。面倒な、この死骸。
ト井戸へ蹴込む。
さて、カウツ。
ト云ひながら、裾をからげ、大小差して
これから、彌藤次めや、小平太めを、呼び出して。
ト云ひ／＼兩人、二重舞臺へ上がる。
ふじ　まだ詮議して見るのかえ。
歩左　有りやうに吐かさねば、何奴も此奴も、ぶつ放して。
ふじ　エ、。
ト慄ふ。
歩左　コリヤ、靜かに／＼。
ト押へ、兩人あたりを見る。チョン／＼にて返し。
造り物、二重舞臺、東西ともに一面の障子屋體、後一面の金襖、奥座敷の體。半蔀、香盆に香爐を載せ香をきいてゐる見得、下座に、彌藤次、手を突いて、うつゝになつてゐる見得にて、道具とまる。
半蔀　聞く毎に珍らしけれど郭公、いつも初音の心地こそすれと詠ぜしも理り。この名香は初音と云ふ。ハテ、奥床しいかをりぢやなア。
彌藤　あなたがこれにお出でなされまして、香をおきゝなされまするか。
半蔀　サイナウ、最前より一人樂んで居ますわいなう。
彌藤　道理こそ、ぷん／＼鼻柱を動かす、この匂ひよりも、

あたたのお髪の油の匂ひ、イヤモウ、堪つたものではござりませぬ。
半蔀　彌藤次どの、こなたも香をきいてかや。
彌藤　伽羅くさい奴と思し召しませうが、少しばかり學ばんではござりませぬ。
半蔀　そんなら、これをきいていなう。
彌藤　エ、ハイ／＼。
半蔀　エ、、初心な。もそつと此方へ寄つたがよいわいの。
彌藤　餘りよい匂ひでござりまするゆゑ、これからきからと存じまして。
ト半蔀が顔に見惚れ、香の煙にむせ、くさめして灰散る。彌藤次、目に入つたるこなしある。
半蔀　これはしたり、遠慮せずと、爰へ寄つてきいたがよいわいなう。
ト彌藤次が手を取り引寄せる。
彌藤　申し／＼、これは何をなされまする。
半蔀　何をとは不粹らしい。其方に聞きたい事があるに依つて。
彌藤　拙者めにお聞きなされたいとは。

半蔀　サアコレ、なんぞ用はないかや。
彌藤　イエサ／＼。なんのあなたに、拙者が用がござりませう。申し、あなたに御用でもござりませうなら、承はうと存じまして。
半蔀　聞いてたもるか。
彌藤　なんなりとも。
半蔀　オ、嬉し。
ト抱きつく。彌藤次、突きかけて慄ふ。
彌藤　滅相な／＼。人にこそよれ、あなた様が。
半蔀　惚れたわいなう。
彌藤　エ、。
半蔀　過ぎし御室の花盛りに、其方もア、、行きやつたであらうがの。
彌藤　ア、御室の花盛りに……エ、、成る程、參りました。ほんに我れらもその時に、向うの茶賣り見世、彼のこんにやくの田樂で、五合酒のそろ／＼川、その美しい御面像。
半蔀　わしもその時思ひ初め、寐た間も忘れぬ俤が、よすがを求め名を聞けば、戀の譯知り彌藤次どのと、聞いた時のその嬉しさ。

彌藤　チッと見られた流し目に、現他愛もなまめいた、その姿のぽつとりは、如何なる人の奥方ぞ。あの可愛らしい女房を、抱いて寐くさる男めは、我れらがやうな不粹ではあるまいと、思へば腹が立つやら、何が立つやら。モウ〳〵先刻にから、はり切るやうに立ち切つて居りまする。

半部　サア、自らも、どうぞ逢ひたい、顔見たいと、願ひ願うた今日のお使者の名代。これ幸ひに密かに逢はうと思うて來たもの〻、定めし否であらうの。

彌藤　なにサ〳〵、否ではなけれど、どうか金を拾つた夢を見たやうで。サア、何はともあれあなた樣には、勘解由さまと申す歷とした

半部　夫のある身が大それた、斯ういふ事を云ひ出すからは、聞いてもらはにやならぬぞや。其やうに云うてたもると、こりや相惚れと云ふものぢや。定めて其方は否であらうなう。

ト思ひ入れ。

彌藤　サア、否ではなけれど。

半部　なけれどなら、もそつと此方へ寄りやいの。ほんに初心らしい。

ト引寄せる。

このマア手の冷たい事わいなう。わしが溫めてやらうかいなう。

ト彌藤次が手を半部が懷へ入れる。彌藤次、いろ〳〵こなしある。

叶へてもらはにやならぬぞや。

彌藤　サア〳〵、なんでも叶へて上げますが、何か氣が無性にのぼせて、息がはずんでなる事ではござりません。

半部　氣がのぼす。撫つてやらうか。其方の肌へわしがこの手を斯う入れて。

ト彌藤次が袖より、手を差し込んで

其方の脊中に、何やらこんもりと、高うあるは。

ト思ひ入れ。彌藤次、振り切り飛び退き

彌藤　イヤ、こりやなんでもござりませぬ。

半部　オヽ、けうと。あの人とした事が、なんぢややら、慇懃になつて、堅い物の云ひやう。アノ、わが身はわしを嫌やるかや。

彌藤　イヤ〳〵、嫌ひは致さぬが、あなた樣は、誰れあらう、國姬さまの御乳母、拙者は又、齋藤家の陪臣、あまりと申せば。

半部　誠に上下の隔てはない。
彌藤　それ程までに仰しやるなら、聞きますまいものではなけれども、勘解由さまに、見替へると仰しやる、御誓言が承りたう存じます。
半部　サア、その誓言は。
ト思ひ入れあつて
爰で女夫の杯しませう。
彌藤　こりや有り難い、ドレ〳〵。
ト次の間より、銚子杯を持つて出て
サア、おなぶりなされぬが定なれば、祝言の杯は、女房が呑んで
半部　殿御へさすがお定まり、呑んでさすぞや。
彌藤　頂きませう。
ト半部、手酌にて呑み、彌藤次にさす。
相に相生の松こそ。
半部　コレ〳〵、待つとは、氣にかゝるわいなア。
彌藤　そんなら、待たぬこそめでたけれ。
ト呑む。
半部　こりや、出來たわいなう。押へませう。
彌藤　これはあなたへ返杯。

半部　返杯とは氣にかゝる。改めてたも。
彌藤　改めませう。
ト眞面目に、ついで呑む。
半部　もう一つ、改めて。
トつがうとする。彌藤次、これはと云ふ時、杯落し割る。
彌藤　南無三、杯が。
半部　杯してたもらねば、生きてはゐぬぞや。
彌藤　サア、杯を致します。ドレ杯を。
ト立たうとする。
半部　コレイナウ、奥へ取りに行きやつては、人目に立つては互ひの身の上。
彌藤　成る程。
半部　外に仕様はないかいなう。
ト彌藤次、思案して
彌藤　杯がござりまする。
半部　杯があるかいなう。
彌藤　命に替へて拙者めを、思し召して下さるものを、どう杯がせずに措かれませう。
半部　エヽ、嬉しい心ざしぢやなア。

ト抱きつく。

彌藤　モウ〳〵〳〵どうも堪りませぬ。早く杯いたして、それからなんぞ致したうござる。

ト云ひながら懐より、袱紗包みの杯出し

サア〳〵、この杯を祝言のお杯。

半部　ドレ〳〵、わしが今から改めて。

彌藤　さらば、お酌を。

トつぎにかゝる。半部、その手を捕へ、片手に杯を持ち

半部　世に稀れなる、薄繪の筆勢、室町どの御重寶、枝を違へし連理の杯。

トきつと云ふ。

彌藤　ヤヽ、なんと。

半部　脊中に隱せし彌藤次、こなたは若殿を科に落し、御縁談を妨げる企みであらうがの。

彌藤　すりや、その事を探らん爲。

半部　心を盡せし甲斐あつて、御縁は盡きぬ、連理の杯。

彌藤　それ知られたら、もう百年目ぢや。

ト切つてかゝる。鳴平、奧より出て、彌藤次を引き廻し、立廻りあつてポンと切る。彌藤次、二重舞臺より見事に中返り。鳴平手早に取つて押へ、止めを刺す。

兩人、こなし。

半部　とまつたか。

鳴平　只今、止め。

ト扶る。

半部　目立たぬやうに、その死骸を。

ト半部、襠襠を脱いで、拭けと云ふこなし、鳴平それにてあたりを拭き、死骸に着せて、縁の下へ蹴込む。半部、あたりを見て、杯を取り納め

この上は刑部を、コレ。

ト囁く。序の鳴り物にて、返し

造り物、また元の座敷に戻る、眞中に歩左衞門、小平太を引きつけゐる。おふじ、側に附き、氣をくばりゐる。この見得にて道具納まる。

歩左　サア、小平太、企みの次第、尋常に、そこへ蒔き出せ。

小平　ア、申します〳〵。ちと、ゆるめて下さりませ。

歩左　術なくばゆるめてくれう。きり〳〵白狀してしまへ。

ト突き放す。

小平　オヽ、云うて聞かさうわい。その白狀はカウ。

ト歩左衞門へ、切つてかゝる。兩人、立廻りあつて、トヾ小平太を切り殺し

歩左　ソレ女房、彼奴が懷中を。

彌藤　合點でござんす。

ト小平太が懷より、序の密書を出して

ヤア、こりや久馬より送りし密書。

歩左　すりや、若殿樣を亡きものにせんとする彼れらが內通。

ト此うち、侍ひ一人出て、聞いてゐて

侍ひ　その密書を。

トかゝるを、歩左衞門、侍ひをグッと捻ぢ上げ

歩左　こりや好い物が手に入つたわい。

ト兩人キッとなる。チョン／＼。返し。

造り物、また元の奧座敷になり、刑部、上下にて奧へ行かうとしてゐる。半部、袴の裾を扣へてゐる。側の花の瓶に、櫻の枝を生けあり、しつぼりとした合ひ方にて、道具とまる。

刑部　半部さま、見苦しい。爰お放しなさい。

半部　刑部どの、待たしやんせ。御家中の方々へ、和歌達歌の一首を乞ひ受け、此やうに結んで、お館へのお土産にせんと、それゆゑ望むを、素氣ない返事もせず、どこへ行くのぢや。

刑部　ハテ、知れた事、上使の御機嫌を伺ひます。生れついて武骨のこの刑部、歌の道は勿論、俳諧發句もて遊んだ事もござらん。元より公用に取紛れ、存じてゐる隙がない。

半部　成る程、隙がござんすまいが、文武兩道を心がくるは武士の道、腰折れの一首や二首、讀みかねる刑部どのでもあるまい。

刑部　イヤ、存じませぬ。

半部　それ程までに御辭退なら、この短冊へ、古歌なりとも。

刑部　ハテサテこれは、無禮な御所望。

半部　ホヽヽヽ、能ある鷹は爪を隱すと、心がけある刑部どの、古今の傳も、三鳥の傳授も、籠る一卷は

ト刑部が懷へ手を差込む。その手を押へて

刑部　コリヤ、何さつしやる。

半部　歌道の祕書でもあらうと思うて。
刑部　ハテナア、身共が心探らんと……この懷中には、何もござらぬ。
ト突き放す。
半部　アノ、怖い顏わいなう。剛い鬼神も感應する。
トちよと立廻りあつて
刑部　歌の傳授に事寄せて。
半部　その懷中の
ト又かゝる。立廻り。
刑部　その手ぢや行かぬ。
ト突き放す。
半部　慥かに密書。
刑部　小癪な女め。
半部　是非、懷中を。
トかゝる。立廻りある所へ、橋がゝりより侍ひ一人出て
侍ひ　刑部さま、彼の金助が。
刑部　コリヤ。
トまた立廻りにて、刑部、半部をちよつと當てる。刑部向うへ出て、こなし。

侍ひ　先達て仰せ合されし、柿木金助にお賴みの、大望の一卷。
刑部　承知いたした。この一札、持つて行け。
ト渡す。
侍ひ　畏まつてござります。
ト侍ひ一札を持ち、花道へ行かうとする。半部、ソツと起きて、ソレと聲かける。橋がゝりより鳴平出て、後より侍ひを當て、神文を取る。
刑部　南無三、それを。
ト行かうとするを、半部とめる。立廻りにて刑部が刀を落し、直ぐにそれを附きつけ、キツとこなしあつて
半部　身動きすると、命がないぞ。
ト刑部、思ひ入れ。鳴平、右の一札を開き讀む。
鳴平　ナニ、神文の事、一つこの度、齋藤家を押領いたし候へば、恩賞は望みに任せべく候。こりやコレ、味方を招く神文。
半部　宛名はなんと。
鳴平　柿木金助。
半部　外に添へたるこの密書。
鳴平　若殿に淫酒を進め

半蔀　三千兩の不足金も
鳴平　國姫さまの御緣談。
半蔀　妨けんとする云ひ合せか。
鳴平　半蔀さまの賢慮の通り。
刑部　半蔀、うぬを。
ト起き上がりかゝる。立廻りにて、半蔀、刑部が首を
ポンと切る。暮れ六ツの半鐘鳴る。歩左衞門、衣裳を
改め、ツカ〳〵と出て
歩左　半蔀さま、佞人ばらを仕留めまして
ふじ　やうやう手に入る久馬が密書。
鳴平　半蔀さまにも佞人を
半蔀　仕留めて手に入るこの神文。
三人　して、若殿の御身の上は。
半蔀　姫君のお行くへ知れるまでは、足利どのへ日延べの
願ひ。
ト奧より、互理、久馬、この時出て
兩人　半蔀どの、して、今日の申し譯は。
半蔀　五人の佞人仕留めまして、この場に手に入る密書と
神文。
久馬　すりや齋藤家の侍ひを、討ち果したる、申し譯は。

半蔀　その云ひ譯は。
鳴平　我れ〳〵が。
ト切腹せうとする
半蔀　切腹とはうろたへ者。幾人切つても大事ない。
久馬　大事ないとは無法の一言。
半蔀　主君の家を押領せんと、非道を企む密書と神文。
ト開いて見せる。久馬、ウンと息つむ。
鳴平　然らば拙者はこの場の樣子。
半蔀　この神文は、其方が手土産。
ト鳴平へ渡す。
歩藤　して我れ〳〵が納まりは。
半蔀　姫君の在所を求め、再び連理の杯は、ソレその密書
と引替へに。
ト歩左衞門が持ち居る密書と、取替へる。
歩左　拙者は此まゝ。
ふじ　お行くへを。
互理　いづれも吉左右、相待ち申す。
久馬　して、室町の御前へは。
互理　申し譯はこの密書。刑部へ送りしこなたの手蹟。
久馬　南無三、それは。

ト取りにかゝるを立廻りに亙理、久馬を見事に切りつけろ。

半部　いづれも早う。

三人　ハッ。

ト向うへ走り入る。半部、見送るこなし。

半部　ハテ頼もしい者どもぢやなア。返し

造り物、一面の草土手、小倉堤の景色、所々に、稲村。後ろ淺黄幕、所知入りにて道具とまると、花道より本行列、手振りその外大勢、乘り物舁き出て、よき所にて

龍輿　乘り物立てい。

皆々　ハア、、。

ト乘り物の内より、龍輿、顏を出し

龍輿　家來ども、申し附けた通り、心得たか。

侍ひ　承知仕りましてござりまする。

龍輿　小倉堤の夜陰を幸ひ。

ト思ひ入れあつて

乘り物やれ。

皆々　ハア、、。

ト在郷唄になり、供廻り皆々、行列にて臆病口へ入る。と東西より旅人大勢行き違ふ。いろ〳〵仕出し。この中に金助、豊島茣蓙の脚絆を穿き、短かき脇差を差し、笠をかぶり、西國道者の姿にて、杖を突き出て

金助　エ、、降らねばよいが。今夜は好い宿に泊まり申したいが。

ト本舞臺へ來て

ア、、こりや、お月様が出申した。先づ、斯う景色がよか〳〵。ドリヤ一服やり申さう。

トまた在郷唄になり、金助、笠をぬぎ、火打ち腰提げを出し、火を打ち、煙草のみゐる。向うより、甚内、關東道者、あかとんぼうの形にて、旅脇差、笠をかぶり、關東杖を突き出る。

甚内　こりや、早く日が暮れ申した。オ、、爰に火が見える。ドレ、一服吸はせてくれめせ。

金助　オ、、遠慮なしに、やり申せ。

甚内　こりやモウ、無心でおんぢやり申す。

ト兩人、煙草吸ひつけ、甚内、笠を脫ぎ

コレサ、そな人、アレ、松の間からお月様が、つん出し

申した所は、よい景色でおんぢやり申す。

金助　オヽ、よか〳〵。コレお旅人、お身はどれからどれへ、ねまり申すぞ。

甚内　うんどもは、仙臺者でおんぢやり申すが、山城の國、京とやら云ふ都さアを、見物すべいとつんで申した。それサアは、どれどれへ、つん出し申しておんぢやり申す。

金助　オヽサ、身共は九州者ぢやア。京の内裡様を拜み申して、これから津の國の大坂とやら云ふ、在所の繁昌の地を見申さうと、はる〴〵ねまり申したけん。

甚内　そんならぬしやア、九州者だな。

金助　御亭どのは、東國者ぢやけん。

甚内　オヽサ、つがもない、海山を隔てゝ、當てもない、京大坂。

金助　見申さつとねまり申した、うらは西國。

甚内　うんどもは、東國者。

金助　思はず爰に寄り合ひ申して

甚内　旅の道ほど、とんでもない。

金助　面白い事はなか〳〵。

甚内　ハヽヽヽヽ。

金助　ハヽヽヽヽ。

兩人　ハヽヽヽ。

ト兩人こなし。

金助　こりや、座をきまつて、語り申さうけん。

甚内　話すべいかの。

ト兩人こなしあり、と兩方より、股引、胸當て、一本差し、三度飛脚の形にて、一人づゝ出て、甚内、金助を見て、兩方より

飛二　お頭。

ト兩人俯りする。

飛一　こなさんの云ひつけの通り

飛二　屋敷の様子を。

ト云はうとする。

金助　コレサア、うらは見知り申さんけん。

甚内　ハテ、つがもない、おんどもは東國者。

金助　うらは西國者、身どもさまは、見知らぬけん。

甚内　うんどもは、見知らないに、ハテ馬鹿々々し。

ト兩人、口々に仕形に教へる。双方呑み込みたるこなし。

飛一　ほんにさうぢやない。おいらが仲間の者かと思へば

飛二　よう似たやうな人達ひぢや。
飛一　免さんせ〳〵。
飛二　ドリヤ、一里塚の方へ行て
二人　仲間の者を尋ねようわい。
飛一　エヽいま〳〵しい。
ト兩人、こなしにて、東西へ入る。跡、合ひ方になる。
金助　ハヽヽヽ、いろ〳〵の者がつんで申したけん。
甚内　つがもない馬鹿野郎、とんでもない事、つん出しやつた。ハヽヽヽ。
金助　コレ、御亭どの、お身様も、なんぞ願ひがあり申すか。
甚内　オヽサ〳〵、うんどもは、でつかちない出世をすべいと、方々を駈け廻つて、神佛を祈り申す。
金助　アノお身様が。
甚内　オヽサ〳〵。
金助　ムヽハヽヽヽ。
ト無性に笑ふ。
甚内　コレサ〳〵、にしやア、無性に笑ひをつん出し申すが、何がをかしくおんぢやり申す。

金助　イヤモウ、其やうな形で、でつかちない出世とは、つがもない事をおぎやり申した。國でも申す赤とんぼうと云ふ形で、つがもない出世し申したいとは、ハヽヽハ。
甚内　コレサ〳〵、そな人よ、赤とんぼうぢやと申したとて、とんだ出世がならないものか。コレサ、身共が聞き及んだ、惡たいを見申せろ。
ト矢立を出し、我が笠へ歌を書き見せる。
金助　ナニ「とんぼうと、見れば小さき秋津國、四海をにぎる手の平もあり」……ムウ、面白くつた。うらも、わるから書き申さう。
ト矢立を出し、同じく歌を笠へ書き、突き出す。甚内見て
甚内「數ならぬ、美濃の山路に朽ちずとも、物見の松と殘る青墓」……ムウ、こりや面白く、そん出し申した。
ト兩人、笠を持ち、思ひ入れあつて
金助　とんぼうと、見れば小さき秋津國。
甚内　數ならぬ美濃の山路に朽ちずとも。
金助　四海を握る、手の平もあり。
甚内　物見の松と、殘る青墓。

金助　コレ、この歌も
甚内　この歌も
金助　實に名を惜しむ
甚内　心の度量。
金助　手に取る時は
甚内　一天四海。
金助　一つに握る
甚内　その時もあらう。
ト兩人、顏見合せ、こなしにて、氣を替へ
甚内　つがもない事、つん出し申すも
金助　旅の氣散じ、むそふかものを、おぎやり申する惡ごう。
甚内　惡たい。
金助　緣あらば又
甚内　逢ひ申すべい。
金助　ドリヤ、まからうか。
甚内　つん出し申さう。
ト兩人、東西の通ひ道へ行く。此うち、後の稻村より、龍興、非人の形にて出かけ
龍興　風吹かば、沖津白波龍田山、唐土にては、綠の林。
兩人　ヤ。
ト思ひ入れ、立ちとまる。
龍興　心々の世渡りおやなア。
ト甚内は笄、金助は小柄を、一時に打つ。龍興、面桶にて受ける。金助、甚内、龍興を見ようとする。龍興、稻村へ隱れる。兩人、ちよつと顏見合せ、笠かぶる。一時の途端にて、
よろしく幕

三つ目　齋藤本國館の場

役名——齋藤兵衞督龍興。後室、操の前。家老、山形道閑。不破伊達五郎。御影東馬。松浦右衞門。垂井兵太。八ツ代監物。監物實ハ柿木金助。奴、鳴平。腰元、關屋實ハ上杉久方姫。同、渚。同、朝妻。同、伊吹。同、月吉。同、萬。同、青葉。鳴見瀬平。南宮中將友明卿實、向坂甚内。

口上、役觸れありて、幕の内へ入る。と所知入りになり、向うより侍ひ四人、手を振り出る。堂上の栗

り物舁き出る。後より諸太夫、采女、太刀をかたげ、仕丁、立て笠、沓持ち、侍ひ大勢、附き出て、花道中程へ來る。幕の內より不破伊達五郎、御影東馬、松浦谷右衛門、垂井兵太、いづれも、麻上下にて出て、平伏して

伊達　これはお先觸れのござりました、南宮左中將友明卿には、お著きの樣子を承り、當國の城主、齋藤兵衛督龍興が家中の者ども。

皆々　お出迎ひの爲、參上仕りましてござりまする。

采女　御主人南宮左中將、當今の勅命に依つての歌まくら、當美濃の國へお入りのところ、齋藤龍興へ旅宿の仰せつけられしは、家の規模にもなるべき間、隨分麁略なきやうに。

伊達　ハア、仰せの通り主人の滿足、先づは直さま城內へ。

采女　如何にも。いづれも、案內召され。

四人　イザ先づお入り。

采女　お先へ參れ。

ト內へ、伊達五郎、案內にて、乘り物とも殘らず入る。太鼓唄、バタ／＼にて、幕開く。

造り物、二重舞臺。見附け、金襖。西の方に折り廻り障子屋體。すべて齋藤館の體。本舞臺に腰元關屋、伊達五郎が胸倉を締め上げて、東馬が首筋を持つてゐる。これを腰元朝妻、同じく伊吹、同じく逢城野、同じく渚、同じく月吉、同じく萬、同じく青葉、皆々腰元、一やうの形にて、關屋をなだめる體にて、幕開く。

朝妻　コレ申し、關屋どの、其やうにさしやんしたら、伊達五郎さまにも、もう懲りて

伊吹　それ／＼、この後はふッつりと、てんがうもさしやんすまい程に

逢城　もう堪忍して

皆々　上げさんせいなア。

關屋　なんぼ、傍輩のお前方が、其やうに云はしやんしても、常から武士に似合はぬ、アタ嫌らしい、わたしを捕へて、どうの斯うのと云はしやんすがよいか。これがよいか。とつくりと覺えさゝにやならぬわいな。

ト また胸倉をグッと締める。

伊達　ア、、コレ／＼、死にます／＼。どうぞ免して下さ

れ。モウ〳〵一生、口説きも、てんがうも申さぬ。諸事は、これぢや〳〵。

ト片手にて拜む。

東馬 コレサ、身共はなんにも存ぜぬ事ぢや。畢竟、伊達五郎どのゝお頼みゆゑ、それに此やうに、どえらい目に遭ふとは、ほんの側杖ぢや。関屋どの、どうぞ料簡して、免して下され。腰元衆、とも〴〵にお頼み申す。

逢城 アレ〳〵、二人ともによく〳〵術ないやら、卑怯な詫び言。

諸 白體、常から男嫌ひの関屋どのに、てんがうさしやんした伊達五郎さまの不覺、以後の懲らしめに、そんな事もよけれども、今日は殿樣、都より御歸館なさるゝと申し、殊にお公家様のお客もあれば

朝妻 それ〳〵、何か御大切の折なれば

伊吹 朋輩のわたしが挨拶。

皆々 もう堪忍してやらしやんせいなァ。

関屋 エ、コレ、どうも堪忍がならぬ事なれど、折角朋輩衆の挨拶、又は殿樣御歸館の大切ない今日ゆゑ、伊達五郎さま、東馬さま、免して上げる。以後、キッと嗜なんだがようござりまするぞえ。

ト むがう突き放す。

伊達 アイタ、、、これに懲りよ道者坊。今の手並と云ひ、日頃嫌味のないすんとした所に、拙者が首たけ。

東馬 ア、コレ〳〵、伊達五郎どの、そりやどうでござる。今のやうに手ひどい目に遭うても、矢張り貴殿は、これサ、白體、男嫌ひと名に立つた関屋どのに執心とは一體無分別でござるわい。

伊達 サア、そこが戀は心の外。なんぼう思ひ切らうと存じても、思ひ切れぬ思ひの種。また惚れたが無理か。美しい顔を見ては、どうも堪えられぬ。

ト関屋が側へ行かうとするを

伊吹 申し伊達五郎さま、たつた今、懲りたと仰しやつたお詞の下から、それはえ。

伊達 サア、これは。

皆々 どうでござりますえ。

伊達 イヤモウ、例へ如何やうな目に遭うても、大事ない。

東馬 アノ、今のやうに締め上げられても。

伊達 サア、締め上げられるのは、身共が望み。抓じめよりは、臍の下で、今一度しめられたいぢや。

ト關屋に又抱きつく。

關屋　エヽしつこい、てんがうを。

ト見事に取つて投げる。と伊達五郎、投げられながら

伊達　コレサ、體は碎けても、せめてはちよつと、門口へなりと。

ト關屋、長押に掛けたる長刀を外して、かゝる。伊達五郎、悄り。

關屋　エヽアタ腹の立つ。いつそ長刀にかけて。

伊達　ヤア、こりや堪らぬ。皆の衆、どうぞ詫び言を。

皆々　わしらはモウ、構はぬ／＼。

伊達　それはつれない。コレサ、東馬。

東馬　今のに懲りた。身共は知らぬぞ／＼。

關屋　サア、伊達五郎どの、これへ直つた。

伊達　イヤ、どうも直られぬ。

關屋　人にてんがうしながら、そりや卑怯な。

ト長刀を構へる。伊達五郎、逃げる。皆々の後へ隱れる。皆々、構はぬ體。

伊達　コレ／＼、あやまつた。

關屋　イヤ／＼、堪忍ならぬ／＼。

ト伊達五郎、あわてる。關屋、追はへ廻る。この模樣にてよろしくあると、奥より後室操の前、衣裳襠にて出て來る。伊達五郎、追ひ詰められ、トヾ操の前の後へかゞむ。操の前、こなしあつて

操前　ヤア、これは何事ぢや。

皆々　後室樣。

ト皆々、悄り。關屋こなし。

操前　關屋、荒々しい長刀三昧、何をはしたなうしやるぞいなう。

關屋　イヤ、これは申し。

操前　また伊達五郎が其方を口說いたか。

諸　ハイ、それで關屋どのが、いつもの通り腹立つて

皆々　この仕儀でござりまするわいなア。

關屋　後室樣、お免しなされて下さりませ。伊達五郎どのを。

ト長刀を取り直す。皆々留めて

皆々　コレ、申し、マア／＼、鎭まらしやんせいなア。

關屋　イヤ／＼、腹が立つ。腹が立つ。

皆々　後室樣の御前ぢやわいなア。

トいろ／＼留める。

操前　ホヽ、日頃、男嫌ひの腰元關屋、自が云ひつけで伊達五郎に、無理に口說かしたのぢや。
關屋　エ、、、。
伊達　關屋どの、身共がこなたに、打ツ惚れたと申したも、後室樣の御意でござる。
關屋　そんならわたしに、惚れたと仰しやつたは。
皆々　後室樣の仰せとな。
操前　武家の掟、不義は嚴しい法度なれど、斯うみだらの事を云ひ附けるも、いま當國の主と呼ばるゝ、兵衛督龍興、どう云ふ事にや、生れついての女嫌ひ、最早三十になつたれども、色の道に疎く、寸も管領上杉家の姫と云ひ號けあつたれど、八年後に離緣の使者。それを止むれば日頃の短氣。聞入れぬ一徹。不便や上杉の姫は死す。その後始終、諫めても進めても、妻を迎へぬ片意地は彼の徒然に書きたる如し。色好まざらんは、いとさうざうしくと、龍興が日頃の行跡。また、司之助は室町どのゝ御上意にての緣組み、他家を相續、それにあの龍興は妻を迎へねば、子孫はなし、家の大事と思ふゆゑ、家老道閑と謀し合して、手廻りに召し遣ふ、近習小姓を遠ざけ、其方達を附け置くも、どうぞ龍興が心に入つて、枕を交すか、肌ふれるならば、國の爲、自らへの忠義とかねて云ひ附け置きしが、分けて龍興が心に入つたと見える關屋は男嫌ひ。それで伊達五郎に云ひつけ、少しは色の道にもと進めさしてのこの仕儀。腰元ども、たゞ油斷なう、龍興を口說き落して、自らが心を休めてはくれぬぞ。
朝妻　サア、後室樣の有り難い仰せゆゑ、殿樣のお氣に入らうと存じまして、朝夕のお宮仕へも、戀のわたりの橫橋と、折にふれ、物に準へて、心の丈を打ちつけに申しましても、なんのいらへも辛氣な事ばかり。
逢城　當世は薄雪やうでは間に合はず、ツイ假名で・勿體ないが私しは、殿樣、申しあなたになア、と申しましても、しゝらしん。
朝妻　お側へ寄らば・慮外な、退れ、次へ立てと、睨みつけられ、妻乞ふ雉子ではなうて、けんもほろゝに据ゑる膳も、お給仕も、關屋を呼べと、お嫌ひなさるゝ、はね箸に合ふわたしら。
逢城　それ〳〵、古への、業平さまとはきつい違ひ。わたしは知れた、不束者、まだ〳〵手短かに長廊下、或はお湯殿に待ちうけて、仕掛けて見ても不部金吉。

月吉　ほんに辨慶でも、朝比奈でも、殿樣のやうにはござりますまい。

青葉　あんまりの事で、小野小町のあちらこちらではあるまいかと存じられます。

諸　錦木でも常陸帶でも、いかな〳〵。

伊吹　きゝ目のない

萬　いもりの黑燒も、三度まで

月吉　四角四面な殿樣は

伊吹　細谷川の丸木橋

逢城　皆ふみかへされて

皆々　ぬるゝ神がなでござりまずわいナア。

東馬　アレ〳〵、伊達五郎どの、お聞きなされたか。

伊達　ハテサテ、好もしい。拙者と違うて殿、龍興公には女嫌ひ、それ習うて關屋どのは男嫌ひ。所をどうぞと思ふも、殿樣を色道へ導く方便。後室樣の仰せなれば、何所では身共が。

關屋　ヤア、たんと仰しやる。

　トきつとなる。

東馬　アレ、あの通りでござれば。

伊達　ハテ、よいてや。蔭裏の豆もはぢける時分はたけ過ぎる。關屋どのを手に入れるは身共の工風にござる。

　ト此うち向うよりバタ〳〵にて、侍ひ一人走り出て

侍ひ　申し上げまする。殿樣のお乘り物、追手の下馬先に立ちましてござりまする。

操前　ナニ、龍興が歸りしか。

侍ひ　ハツ。

伊東　殿樣、御歸館なれば。

　ト立たうとする。

操前　イヤ〳〵、矢張り伴ふは腰元ども、錠の口まで、早う。

女皆　畏まりました。

諸　殿樣のお歸りとあらば、後室樣の仰せの通りに。

朝妻　無理にお手を取つて、日頃の思ひ。

逢城　心の丈を申し上げう。

皆々　口說き落すは、面々の手柄。

伊達　然らば身共も、手柄に關屋どのを。

　トまた抱きつく。

關屋　エヽ、性懲りもない。

　ト顏を蹴る。それはと寄るを見事に取つて投げ

サア、皆樣ござんせ。

道閑　ト關屋、腰元、皆々向うへ入る。奥より山形道閑、着附け上下にて白髪頭。鳴見瀨平、松浦谷右衞門、御影東馬、垂井兵太を連れ出で
道閑　後室樣、殿の御歸館の御樣子、承りましてござりまする。
操前　道閑、老體の其方、今日の役目大儀。
道閑　ハッ。
伊達　イヤ、御家老、瀨平どの、して、奥殿にお入りある中將さまの御機嫌は。
瀨平　ます／＼上首尾。只今御酒宴最中でござる。
道閑　アイヤナニ、後室樣、この年月、禁足同然に引込みござる龍興公、お進め申しても、御上洛なきところに、先づこの頃俄の御參內、今日歸國の御祝儀、おめでたいと申すにつけても、彼のお家の重寶、先達て紛失いたした道風が朗詠集。
操前　それにつけ、心にかゝるゝは司之助が身の上。龍興が心底。
道閑　何分殿の樣子を承はつた上、拙者が思案。
操前　ぢやと云うて。
皆々　手延びにならぬ。

道閑　ハテ、萬事を取り捌くお家老の役目、後室樣、いづれも苦しうござらぬ、落ちついてござれサ。
ト向うより。
呼び　殿樣のお歸館。
道閑　アレ、殿樣の御歸館。
操前　我が子ながらも、因の守。
道閑　いづれも、ソレ。
皆々　ハッ。
ト戸屋の内より
朝妻　私しどもが不調法。
皆々　どうぞお免しなされ下さりませ。
ト此うち、本舞臺の皆々竝よく出迎ふ。ト向うより腰元皆々前後に別れ起れ出る。齋藤龍興、着附け上下にて、脇差に手をかけ睨みつけ、つけ廻しの心にて、チリチリ出る。關屋、刀を持ち、留めながら附いて出る、この見得よろしく、皆々出て來る。
操前　龍興、歸國召されたか。
龍興　母人にも御堅固で、おめでたう存じまする。
關屋　皆樣、抑へさしやんせ。
女皆　ハイ、、、、。

ト扣へろ、龍興ズツと通り坐る。關屋、刀を直し、片脇へ下がろ。道閑初め皆々二重舞臺の下へ並よく並ぶ。

道閑　先づは龍興公には、御健堅にて御歸國の程

皆々　おめでたう存じまする。

龍興　道閑始め家中の者ども、無事の體、めでたい。

皆々　ハア、、、、。

操前　コレ龍興、こなたの面色は只ならぬが、旅行の疲れか。

關屋　イエ〳〵申し後室樣、殿樣にはお障りはござりませぬわいなア。

操前　それに不機嫌の樣子は

朝妻　御機嫌を損じましたは。

皆々　私しどもが不調法。

道閑　かねて女嫌ひの龍興公に、お腰元が何がなお氣に入らうと存じての事でござらう。

關屋　サア、お館へお入り遊ばさるゝと、直ぐに皆の衆がまんがちに、お手を取らうの、イヤお足を擦らうの、と日頃御意に入らぬ事ばつかり。それでは御機嫌が。

龍興　イヤ〳〵、なんの女ばらが、慮外は毎度の儀。ナニ、母人、お案じ下されな。拙者隨分心よく、入城仕りましてござりまする。

操前　さう聞けば自らも嬉しうござる。

龍興　草も木も我が大君の國なれば、龍興この年月、禁足同然に國に引籠り居るも、餘り畏れと、母や其方どもがこれまでの諫言と云ひ、俄に存じつきたるこの度の上洛。天機を窺ひ奉りしところに、上樣のお覺えめでたく、この身の面目。まつた弟司之助が身の上、某にお咎めもなく、記錄所より仰せ出さるゝは、家の重寶たる道風が朗詠集、ほゞ聞けば足利家と取替へなれど、司之助が申し譯の相立つまでは、禁廷へ差上げよとの勅命。

道閑　イヤ〳〵、重寶たる朗詠集は、御舍弟司之助さま、この度都に於て、御放埒ゆゑ、右の寶紛失。

伊達　草を分つて、詮議眞最中なれど、今に於て

龍興　行くへの知れぬその朗詠集なれど、今宵中に詮議して、差上げうと勅答申したれば、即ち院使としては八ツ代監物さま、右の寶受取りの爲、某に引續いて都を御出立、今宵、寅の刻までに當城へ御入りの手筈。

道閑　すりや、一旦都にて紛失した朗詠集を。

伊達　今宵中に御詮議あつて。

瀬平　院使へお渡し申し、禁廷へ
皆々　差上げんとな。
龍興　ハテサテ、家の大事は龍興が身の上。何かは某が胸
中にあれば、道閑、皆の者ども、騒ぐな／＼。
伊達　アレ、殿の御上意、御家老、なんと思し召すな。
道閑　心同じからざる事、面の如し。院使のお入りは當家
の切端。紛失の朗詠集。差上げんとある殿の御賢慮、な
んともハヤ。
ト思案する。龍興、こなしあつて
龍興　ナニ母人、某、歸國の路次にて承れば、南宮左中
將友明卿には、先達て當城へお入りと承りましてご
ざりまする。
操前　成る程、中將には今日思はず御入りゆゑ、奥殿にお
渡り、萬事饗應申しつけ置きましたわいなう。
關屋　殿樣には、中將さまへ御對面を。
龍興　イヤ、御對面は後程。先づ母人、某今度上洛につ
き、お土産を差上げうと存じ、持ち歸りました。ソレ、
侍ひども、土産の品をこれへ持て。
侍ひ　ハア、、、、。
ト侍ひ、手箱を龍興が側へ差置き、下へ下がる。龍興、
右の箱を開き、内より珠數を取り出し、扇の上に載せ、
後室が前に置く。後室、取上げる。
龍興　母人、心ばかりの某が土産。
操前　この珠數を。
龍興　左やうでござりまする。何をがなと存じまするとこ
ろに、都出ましてより凡そ三里ばかり參ると、大津とや
ら申して、市店と相見え、軒を並べての營み、幸ひと存
じ、乘り物立たせ見ますれば、その珠數を商ふかと存じ
ますれば、襖にはさま／＼と面白き浮世繪、これを大津
繪と申す。また片々には、針を商ひまする。皆當所の名
物と承りましたゆゑ、求め歸りましてござりまする。
操前　其方の志し、母に土産のこの珠數、夫道三どのに別
れし後は、心は頓世、後生を營むは老の役。忝なうござ
る。
龍興　ハツ。また關屋を始め女子どもにも、土産をくれう
わい。
關屋　アノ私しどもにも。
龍興　如何にも。この大津繪、藤の花をかたげたおやま繪、
片身恨みのないやうに。ソレ。
トめい／＼に、大津繪をやる。皆々頂く。

伊達五郎、瀬平、これへ参れ。
伊瀬　ハツ。
龍興　コリヤ、兩人を始め殘りの者にも、この品を土産にくれる。
兩人　ハツ。
ト伊達五郎、針の箱を受け取る。瀬平と一緒に手に取つて見て
伊達　こりや、物縫ひ針では
瀬伊　ござりませんか。
龍興　如何にも大津の名物サ。
瀬平　アノ、女子の手業のこの針を。
諸士　我れ〳〵に。
龍興　すべてその針と云ふ物は、直ぐなるを以て潔く鍛へ、磨き上げて絲を通し、絹を縫ひ合はす、隨分重寶なる物なれど、鑄が出てゆがむと、役に立たぬ。また眞綿に包めば譬への通り、上邊はよくて心の針。只ゆがみ曲らず、おのが役目を專一とす。某が都の土産。
諸士　ヘイ。
ト不承々々なこなしある。此うち腰元皆々、右の繪をためつ、すかめつ、眺めてゐる。

關屋　殿樣の有り難い、大津繪、このお土産。
日吉　關屋どの、なんと可愛らしい、藤の花かたげたおやまではないかいなア。
關屋　これを賜はつた殿樣の御心は。
朝妻　振り袖姿の、隨分派手なお宮仕へをせよとの事でござんせう。
伊吹　イエ〳〵、さうぢやないわいなア。この藤の花の形は、いの字を十書いて、その中へ、しの字を入れた心。
皆々　そんなら殿樣が。
朝妻　いとしいと仰しやつて。
皆々　エヽ、有り難うござりまする。
龍興　イヤ〳〵、其方達にその大津繪をくれたるは、某が寵愛の妻と呼ぶは、そのおやま繪、隨分心を附けて宮仕へ致せ。
女皆　エヽヽ。
關屋　アノ、このおやま繪を、殿樣の御寵愛の奧樣とは。
龍興　ハテ、もの云はねば飽きもせず、物妬みをせねば、元より女の嗜みを守り、悋氣嫉妬は猶の事、さもしげな事、微塵もない。紅白粉にて色どらねば、剝げる事なく、四季ともに同じ衣裳に塗り笠を離さねば、髮結ひ直す世

話もいらず、破らねばいつまでも、ソレ其まゝに年もよらず、姿も變らず、奇々妙々たる女の操。かたげし藤も散る事たければ、枯るゝ愁ひもなく、いつまでも詠めは同じ儘に貼り置き、龍興が寢覺め〳〵に倒さす女は、その繪より外にはないと云ふ心サ。
操前　そんなら龍興、妻と呼ぶは。
關屋　この大津繪。
龍興　折る事も、高嶺の花や見たばかり。
女皆　エ、、なんの事やら。
諸士　我れ〳〵のお土產も。
龍興　不足なか。
伊瀬　エ、、有り難う存じます。
龍興　山形道閑、其方へは分けて心を籠めし土產。
道閑　ハツ、すりや拙者には、この鬼の念佛の大津繪を。
龍興　なんと、よからう。
道閑　エ、。
龍興　姿は佛體、慈悲忍辱の誓衣をまとひ、頭に邪慳の角を振り立て、惡鬼の相を現はす。
道閑　ムウ。さては殿には拙者を、かねて邪慳と思し召して。

龍興　イヤ、鉦を叩き、念佛を申せば、即ち善人。
道閑　それに又。
龍興　鬼と云ふ字の氣畫を、分くれど甲乙なし。
道閑　國の政道を預かる拙者、忠義一圖に、心をゆだね、日夜分かたず賞罰を糺せば。
龍興　その繪の如く角を見せ、また慈悲を施す。
道閑　千辛萬苦仕り、只殿の榮えを。
龍興　サア、それゆゑに、その土產、鬼の念佛。老は先立ち若きは殘ると云へど、老少不定定めなき世の中。心の角は發起の撞木。
道閑　都のお土產。
龍興　道閑、承知か。
道閑　有り難う、頂戴仕りまする。
ト向うより
呼び　院使のお入り。
道閑　ナニ、院使のお入りとは。
皆々　さては、殿の仰せの如く。
龍興　ハテ心得ぬ。尤も彼の院使のお入りは今宵なれども、道中行程の分量にて、寅の刻とあるに、今お入りとは刻限相違。何にもせよ道閑、家中の者、麁略なきや

う。

道閑　先づ後室樣、お腰元衆、奥へ。

操前　ソレ、中將さまへ、龍興が歸國の樣子、腰元ども。

皆々　ハア、、、。

龍興　皆の者、院使のお出迎ひ。

皆々　畏まりましてござります。

ト太鼓、唄になり、後室、關屋、その外腰元皆々、奥へ入る。と龍興、道閑、伊達五郎、瀬平、諸士、皆々出迎ふと、向うより、八ッ代監物、着付け上下にて、院宣を持つて、侍ひ大勢を連れて出て、花道にて

監物　院使たる八ッ代監物、只今到着。して、出迎はれし方々は。

龍興　即ち某、當國の主、齋藤兵衞督龍興。

道閑　家臣、山形道閑。

伊達　不破伊達五郎。

瀬平　鳴見瀬平。

皆々　その外諸士の面々、お出迎ひ申してござりまする。

龍興　ハッ、その砌り御對面は仕らねど、御家名は承り及びました、八ッ代監物さま。遠路の御下向、御苦勞千萬。

道閑　イザ先づこれへ

皆々　お通りあられませう。

監物　如何にも。

ト ずつと二重舞臺へ通り、床几にかゝり、院宣を出して

この度、龍興參內に付き、記錄所より仰せ出さるゝ趣き、即ち院宣。

龍興　ハッ。

監物　都に於て委細承知の上は、改めて述ぶるに及ばず、一刻も早く當家の重寶たる、道風の朗詠集を。

龍興　某承知の上は。

道閑　アイヤ殿、先程も申し上げる通り、その朗詠集の儀は。

龍興　コリヤ扣えい。

道閑　イヤサ、それでも。

龍興　ハテ、扣えいと云ふに。

道閑　ハッ。

ト こなしあり。龍興も思ひ入れあつて

龍興　院使たる監物どの、お入りの上は、取りあへず朗詠集、差上げませうずなれども、長途のお疲れ、先づは御

休息あつて。
監物　君命なれば、身體の疲れはいとはねど、大切な當家の重寶、早速にも受取れまじ。如何にも暫時休息の上。
龍興　朗詠集、差上げませう。
　ト此うち道閑、こなしあつて。
道閑　ホウ、幸ひ監物さま御饗應の爲、役者どもを召し寄せ、お能囃子をお進め申さん。
伊達　成る程左やう。事延引のうち彼の御詮議を。
龍興　ハテサテ道閑、伊達五郎。何をざわ〳〵と。諸事はこの龍興が心にあれば。
道閑　でも、その朗詠集。
龍興　まだ〳〵詞を返すか。扣えて居よ。
監物　龍興、あの者どもは何を心遣ひ。
龍興　イヤ、監物さまのお入りゆゑ、何をがな御饗應と存じますれど、才覺なき荒くれ武士、それゆゑ俄の混雜。ハテ、面目次第もなき仕合せ。
　ト此うち道閑こなしあつて、伊達五郎に何やら囁く。伊達五郎心得、瀬平に囁き、兩人ツイと入る。
監物　大内に仕ゆる監物なれば、詩歌は元來春は櫻、秋は菊のお能、又は山海の珍物に飽きみちゐれば、必らず心遣ひ、無用々々。
龍興　ハツ、有り難う存じます。
道閑　憚りながらせめては麁茶、御菓子なりとも。ソレ、早く〳〵。
伊瀬　ハア、。
　ト伊達五郎、菓子盆持ち出る。瀬平、茶碗を持ち出る。
伊達　畏れながらお菓子、即ち新製二歩金糖。
瀬平　麁茶ながら、銘は山吹。
兩人　イザ、召上がられて下さりませう。
監物　ムウ。成る程こりや山吹。
道閑　お心に入らば、お替へ下さりませう。
監物　齋藤龍興、日延べ叶はぬぞ。
龍興　なんと仰せらるゝ。
監物　イヤサ、都に於て一旦紛失の朗詠集、詮議仕出して差上げんとお答へ申せしゆゑ、受取りの爲、院使に立つたる八ツ代監物、なぜうつけ者に致す。
龍興　こは存じよらぬお詞。
監物　イヤ、金銀を以てへつらひ賄賂は、某に記錄所へ執成しを願ふ所存と見た。八ツ代監物は、大内の北面、い

がみすじつた蟹侍ひと思ふか。馬鹿な事を。

ト茶碗を打ちつけ菓子盆を蹴る。二朱小判散亂する。

龍興　ヤア、すりやそれにて。

監物　なんと龍興、これでもへつらはぬか。

龍興　さては道閑、其方が。

道閑　監物さまに猶豫を願はんその爲に、あの御馳走。

ト龍興、道閑を散々に打ち据ゑる。伊達五郎、瀬平、驚ろく。

伊達　殿、それは。

龍興　子胥死して後は呉傾き、けんせい退き越笑ふ。皆これ忠臣の功。それにうぬは、この龍興が詞も出さぬに、いらざる差配。恥辱を知らぬ、コナうつけ者めが。

道閑　イヤ／＼、全く以てさにあらず。斯く朗詠集にて殿の御心遣ひ察し奉り、少しにても猶豫あらばと後を思ひ、監物さまへ右のへつらひ。それが却つてお腹立ちとは、拙者が愚案、眞平御免下さりませう。

龍興　まだ／＼詮なき云ひ譯、次へ立て。

道閑　ぢやと申して。

龍興　詞を返す、慮外な奴の。

伊達　先づ／＼御家老には次へ。

道閑　然らば諸士の面々。

龍興　次へ立て。

道閑　ハツ。

ト道閑、奥へ入る。

監物　金銀を以て某にへつらふは、朗詠集渡さぬ所存であらう。

龍興　イヤ、そりや道閑が不調法。

伊達　主人龍興存せぬ儀なれば、何卒

瀬平　御機嫌直され

龍興　彼の朗詠集を

監物　然らば只今渡すか。

龍興　サア、それは。

監物　事を延すは違勅の科。都に歸り、奏聞とげうか。

皆々　サアそれは。

監物　朗詠集受取らうか。

皆々　サア。

監物　サア。

皆々　サア／＼／＼。

監物　龍興、なんと。

龍興　ハア、。

ト當惑する。向うバタ〳〵にて、奴鳴平、走り出て
鳴平　申し上げます。
ト目を廻し、こける。
伊達　下郎の鳴平め、大切ないこの場所へ。
瀬平　あわたゞしい何事。
藤太　性根を失ひしと相見まする。
龍興　ソレ皆の者、立ち寄つて介抱いたせ。
皆々　ハツ。
藤太　コリヤ下郎め、性根を附けい。鳴平〳〵。
ト引き起す。鳴平心附き、起き上がり
鳴平　ヤア殿様、いづれも樣、下郎めが無禮の段、眞平御免下さりませう。
伊達　エヽ見苦しい。早う次へ立て。
龍興　イヤ〳〵、鳴平には、京都にて申附け置きし仔細あれば、心元ない。
瀬平　事の樣子を申し上げい。
皆々　どうぢや〳〵。
鳴平　ネイ〳〵。樣子と申すは下郎めが、都に於て殿樣の御意を蒙むり、院使の御立ちを待ち請け、見え隱れのお供仰せつけられしゆゑ、當國へお入りの道筋、心がけてお供仕りましたところ、夜前のお泊りは當國高須、今日早朝に出立あつて、やう〳〵池田も過ぎて、垂田へかかる山中より、數十人の曲者現はれ、無二無三に切つてかゝり、無法の狼藉、なんでも爰だと下郎めが、無性矢鱈に駈けめぐり、一人なりと留め捕つて詮議の種と存じ逃げ行くを追ひ駈け廻れど下郎一人、こちらへ廻ればあちらへ逃げ、詮方なさに元の所へ立歸へり、先づ大切なお乘り物、監物さまのお身の上を、尋ね廻れば、お乘り物もあたりになく、詮議いたさうも雲を掴。イヤ〳〵一刻も早く右の樣子を、殿樣へお知らせ申さん爲、すごすご立歸へりました下郎めが殘念さを、御推量下さりませう。併し追ひ〳〵院使のお迎ひ、人數を差遣はされたれば、追ッつけ吉左右、相聞えませう。
伊達　ムウ。すりや途中にて、折重なつての狼藉。
瀬平　院使のお乘り物の行くへも知れず。
藤太　曲者は遁がせしとな。
鳴平　エヽ、返す〴〵も、殘念にございます。
龍興　すりやその曲者は。
ト監物に目をつけ
ハテナ。

ト監物、つか／＼と鳴平が側へ行て、扇子をひろげ、
煽ぎ立て

監物　ヤレ、健氣な若者。ムウ、驚ろき入つた最前の働き。狼藉者に取圍まれ家來の狼狽、某が心遣ひ、大勢の中へ只一人、其方が働き、乘り物の中より見屆けた。イヤモ粉骨の働きの程、驚ろき入つた／＼。家來の内では見馴れぬ者と思うたが、さては龍興が家來であつたか。

鳴平　エ、。

ト合點のゆかぬこなしにて、監物が顔を見る。

監物　ハテサテ、下郎に似合はぬ武術の心掛け。かゝる功の者を都より、某が見え隱れの供に附け置きしは、これ誠に遠き慮り、龍興が智略、感心いたした。流石は美濃の主程ある。主も主なり、家來も家來。其方が最前の働きにて某が身の安堵、思へば／＼過分の至り。龍興、この上は只今の家老の粗忽と違ひ、安堵召され。

龍興　ナニ、すりや途中にて曲者の狼藉を、鳴平が働きゆゑ、御機嫌を直されて、

監物　朗詠集は勝手に渡し召され。

鳴平　してあなた樣は、どなたでござりまする。

瀨平　院使たる八ツ代監物さま。

鳴平　すりや監物さまでござりますか。都御出立の折からと申し、道中にても始終お乘り物、下郎めは見え隱れのお供なれば、お顔は存じませねども。

監物　思ひがけない路次の難澁。家來は逃げ散る。跡は某一人。詮方なさにあたりの百姓を人足に取り、當城へ入り來りしが、その砌り其方が働き、都へ歸らば、キッと恩賞の沙汰に及ぶであらう。

龍興　鳴平、出かした／＼。

鳴平　なんの褒美、畏れ多い。監物さまや殿樣のお詞が、下郎めが身に餘り、有り難うござりまする。それにつけても御大切なる、監物さまのお身の上、殘念なるは曲者め。

龍興　何は格別、院使樣には、お怪我もなうて、先づは重疊。

監物　某より先づ大切なこの院宣に、恙なきがこの上の大慶。急いで龍興、拜領召され。

ト渡す。

龍興　ハッ、申し下す一條、其方家の重寶なる小野の道風の朗詠集、御光覽の爲、急ぎ差上げべき旨、八ツ代監物、承つて相向ふものなり、仍て執立件の如し、月日、記

錄所在判、齋藤兵衛督龍興へ。

ト讀み上げる。皆々顏見合せ

皆々　その院使の趣きにては。

監物　いよ〳〵彼の朗詠集を。

龍興　後刻差上げ奉りませう。

ト障子屋體の內より。

中將　思ひきや、天が下なる美濃に來て、我が日の本に名をなさんとは。

ト唐樂になり、一間の障子殘らず開く。內に中將友明、冠、裝束、笏を持ち、床几にかゝり居る。

龍興、歸國の由、對面許す。近う。

龍興　ハツ、さては先刻御入來ありしと承りました

中將　南宮左中將友明。

監物　フウ。すりや歌枕とありて、國々を通行する。

中將　して、院使と開きしは。

監物　八ツ代監物。

龍興　歌枕と申し、院使のお役目、同じ堂上の交はりと存じたが、いや御兩所には。

中監　ヤ。

龍興　よそ〳〵しい御對面。

中將　イヤ、同じ大內の宮仕へなれど、堂上堂下と隔り、殊には院使仙洞御所、この友明をイヤモ、存ぜぬも理り。

監物　此方の役目はその院宣、龍興、某暫時休息のうち、中將には對面とげ、一刻も早く朗詠集を。

龍興　委細承知仕りましてござります。

監物　然らば少し旅行の疲れを。

ト氣味合ひにて

これにて憂を晴らさん。誰そ、煙草盆。

藤太　ハツ。

ト煙草盆、長煙管を持ち出て、監物が前に置く。中將、監物、東西に別れる。龍興、眞中にゐる。

中將　この度、當今の勅命に依つて歌枕の折柄、當美濃の國へ立越えしも、龍興、其方へ御內勅。

龍興　して、勅諚の趣きは。

中將　當家に傳る重寶たる小野道風の朗詠集、帝、古へを慕はしく思し召し給ひ、かねて御叡覽あるべき勅命、それゆゑにこそ友明、旅館とのみ入城せしも、彼の朗詠集、內見の上、都へ持參し、御叡覽に供へ奉らんその爲。

龍興　すりや、友明卿にも、朗詠を差上げよとの勅諚と

な。
中將　齋藤家の譽れ、有り難くお請けしてよからう。
龍興　アイヤ、憚りながらその儀は、先達て京都上洛仕り、院參の砌り、差上げよとの勅命下り、即ち受取りの爲、院使として八ツ代監物さま御入りの上は、この院宣を承ればとて、卽刻の御返答は。
中將　フム。尤も。誰ぞ用意の短册、料紙。
瀨平　ハツ。
ト奥へ入る。
中將　億兆の人、同じからず。烏は烏、鷺は鷺とな。武家の其方は云はず語らず合點であらう。紛らはしき院使の樣子。
ト此うち瀨平、文臺を中將の前に置く。中將短册、取上げ
四海の政道は、じやうせんを煑る如しと云へば、この短册を渡し、速かに歸すがよからう。
ト龍興、顏にて敎へる。瀨平、取つて八ツ代監物へ渡す。
監物　數ならぬ美濃の山路に朽ちずとも、物見の松と殘る害墓。フム、面白さうなこの一首。
中將　無事に歸すが公の政道。有り難いと心得、早く立歸つたがよからう。
監物　某、武官なれど、大內に交はる八ツ代監物、取りあへず返歌せん。料紙をこれへ。
伊達　ハツ。
ト硯を出す。監物も短册にさら〳〵と書いて
監物　龍興、その返歌を早く中將へ。
瀨平　お取次ぎは拙者が
ト取つて、中將に渡す。
中將　とんぼうと見れば小さき秋津國、四海を握る手の平もあり。ハテ當意速妙、面白きこの返歌
監物　アイヤ、ナニ龍興、某は、院使の役目、爭はれぬはその院宣。ナ、それに紛らはしき歌枕とやら、辯舌を以て人を惑はし、得ては大名などへは、はり枕とやら、ばらもある格。龍興も承知であらう、今の返歌を見せて、早々ぼツ歸したがよいてや。
中將　そりや其方が事。この中將は禁廷の勅命なれば、當家に逗留、それに同じやうに、身の程知れぬ愚人ではある。
監物　監物が爰にあるとも知らず、歌枕の旅館などゝは片

腹痛い。早く立歸れ。又、惡くうぢつくと、冥途の旅へ
欲枕、閻魔の廳より見物が、金札や鐵札か、事の分らぬ
サア其うちに、早く歸れ。ハテ笑止千萬。
中將　院使たる監物とやら、中將が許す。對面のとげう。
監物　すりや某に。
中將　近う參れ。
監物　そりや望むところ。如何にも面談。
中將　サアこれへ。
龍興　すりや、御兩所には。
中監　イヤ、苦しうない、龍興は扣えい。
ト兩方こなしあつて、平舞臺へ下りて
中將　都より院使に立ちたる監物とやら、折角心を盡し、
院宣まで、所持して參つたれど、惡い所に某が居れば、
所詮其方が望みの朗詠集は手に入らぬ程に、思案しかへ
て、キリ〳〵出直せ〳〵。
監物　しやらくさい。某に出直せとは舌の根が伸びる。望
みかゝつた朗詠集、甲が舍利になつても受取り歸る。折
惡いとは其方が事、思ひがけなき所に某が居れば、朗
詠集は渡さぬ。三五十八算用違ひであらう。足元の明る
いうちに、外の仕事にかゝれ。形もないのに大名を相手
には、ちと荷が過ぎる。痩馬の其方が、いかぬ〳〵。
中將　職分は互ひの業。知らぬ體で、無事に歸してくれう
と思へば。
監物　惡く屈意地ばると、面縛するに、遠慮はせぬぞ。
中將　すりや、如何やうに云うても。
監物　望みかゝつた寶は一つ。
中將　是非一方は片附けるか。
監物　互ひのばれ口。
中將　サア。
中監　サア〳〵〳〵。
ト身構へあつて、詰め寄る。
龍興　待つた御兩所。朗詠集お渡し申さう。
中監　ヤ、なんと。
龍興　エイ。
ト兩人へ手裏劍を打つ。監物、刀の柄にて留める。中
將身をかはす。前の舞臺にて兩人見得よくとめて
中將　この笄は。
監物　この小柄は。
兩人　エイ。
ト龍興へ打ち返す。と口明の面桶にて受け留める。

伊鳴　どうでも曲者。

ト両方へかゝる。立廻り。龍興、ツカ〳〵と行て鳴平、伊達五郎を引き分ける。監物、切りかける。キッと留める。中将寄るを、面桶を附きつけ、三人見得よく、しやんととまる。

龍興　いつぞや小倉堤に於いて。
中将　時は東雲、人顔も。
監物　空も朧の朝影に。
龍興　沖津白浪龍田山。
中将　唐土にては綠の林。
監物　思はず出逢うたその時の。
龍興　笠に記せし二人が歌は、今の短册。
中将　様子を聞いた非人と見えしは。
監物　アノ龍興であつたよな。
龍興　姿をやつした似せなまりの
中将　西國道者は院使の監物。
監物　奥州道者は中将友明。
龍興　包めどそれと、小柄と笄。
中将　顯はす合紋、院使の似せ者。
監物　公家の騙りがほざいた歌に。
龍興　手爾葉を合はす、二人が本名。
中将　東に名を得し向坂甚内。
監物　美濃に熟した柿木金助。
鳴伊　兩人ともに名におふ盗賊。

ト立ちかゝるを

龍興　コリヤ。

ト押へる。

中将　齋藤龍興。
監物　柿木金助。
龍興　向坂甚内。
中将　しつくり合つた。
龍興　面桶の割符。
監物　寶を望んで
中将　思はずこれにて
三人　出逢うたなア。
皆々　騙りの兩人、腕廻せ。
龍興　コリヤ皆の者、兩人が詮議はゆるがせに此まゝ。
伊達　でも、みす〳〵知れた勅使と云ふは、向坂甚内、盗賊の張本。
鳴平　すりや、最前途中の狼藉も、うぬが手下。お乗り物

も奪ひ取り、院使になつたる柿木金助。
ト兩人にかゝる、兩方、立廻りにて
甚内　ちよこ才な。わいらが手には滅多に合はぬ。
金助　イヤ、こそばい奴の。
ト伊達五郎、鳴平を引退ける。諸士皆々、擬勢する。
皆々　動くな。
甚金　へゝ。
ト兩人、につたり笑ひ、どつさり下に居て
甚内　龍興どの、古うござる。イヤ、ずんと古い。仕組みは知れた騙りのしくじり。そこを新らしく朗詠集を渡して下され。
金助　龍興、命が惜しいか、寶が惜しいか。どちらへなりとも一口に返答せい。この金助、まだ／＼した事聞いては居ぬ。
甚内　ちつとは武士に合はぬ向坂甚内、こなたの返事次第で、澁柿の蔕ばなれぢや。
金助　金助に渡すか。
甚内　甚内に渡すか。
金助　返答次第で此方の片附け、踏みひしやいでやる向坂甚内。

甚内　落ちかゝつてある柿木金助。サア龍興どの、おし黙つて居ては事が濟まぬ。
金助　恐ろしいは道理ぢやが、開かぬ顔する事はない。サア龍興。
兩人　返答はなんと。
鳴平　眼前の盗賊。
伊達　引ッ縛つて同類の拷問。
皆々　いで我れ／＼が。
トまた皆々立ちかゝる。
龍興　ハテ、此まゝ置くは龍興が心あつての儀。手出しは無用。
皆々　ぢやと申しても。
龍興　ハテ、構ひないわい。
金助　ハアヽ、家來はうぬが手下ゆゑ、始終、やり込むれども、龍興、コリヤ、なぜ金助に物云はぬ。肝がひしげてあるか。
甚内　甚内に向うては、胸がだらつくか。コリヤ尤も。
金助　よいワ。おらが情で、ちつとの間、待つてやらう。
甚内　心を鎭めて
兩人　返答いたせい。

龍與　如何にも。この龍與も望みあれば、かねて名に負ふ盜賊どもを、召し寄せんと思ひしも、幸ひの兩人、殊に依らば望みの寶も與へくれうが、いづれ返答、後までキッと。

伊鳴　すりや、この兩人を。

龍與　奧へ伴ひ馳走を致せ。

甚内　こりや、よく心が附いた。

金助　然らば奧で。

伊達　油斷大敵。

皆々　うぬ。

　ト兩人を、キッと取卷く。

龍與　コリヤ／＼、仰々しい。國に盜賊、家に鼠。

甚内　窮鼠却つて猫を喰ふ。

金助　その窮鼠どもの返答次第で、喰つてしまふ。

龍與　サア、兩人奧へ。

兩人　龍與、案内。

諸士　兩人歩め／＼。

兩人　ハテ、やかましい。

　ト兩人キッと取卷く。唄になり、いづれもこなしあり右一件殘らず奧へ入ると、七ツの半鐘打つ。向うより八ツ代監物、裸、褌一つにて、後より横井軍次、凛凛しき形、その外侍ひ大勢附いて

軍次　なか／＼危ふい場所でござりました。

侍ひ　先づ／＼お怪我がなうて、安堵いたしました。

監物　されば／＼、狼藉者に出合うたに、龍與が迎ひの人數を越されねば、某は如何ならうやら相知れなんだ。

軍次　下郎の鳴平めが知らせまするを直さま、追ひ／＼に別れ、お迎ひに參りましてござります。

監物　イヤモウ、氣丈な若者であつたてや。

　ト云ひ／＼本舞臺へ來る。道閑奧より出て

道閑　皆の者、鳴平が樣子を知らせ、追ひ／＼其方達をお迎ひに遣はしたが、誠の院使のお供仕つたか。

侍ひ　左やうでござりまする。

監物　フム。さては聞き及ぶ龍與が家老、道閑とは其方か。

道閑　して、こなたは。

監物　この度、勅命を蒙むり、當美濃の國へ下向いたした、院使に立つた八ツ代監物。

道閑　すりや今日の狼藉ゆゑにそのお姿。

監物　如何にも。思はず路次の難澁、院使の某をこの如く衣服上下まで。エヽ、無念に思へど詮方もなく、未だ對

面はとげねども、龍興の心遣ひの段祝着。イヤモ、面目もなき今日の仕儀。
軍次　巻田の山奥に縛めありしを見附け、お供仕つてござります。
監物　某を手籠めにし、大切ない院宣まで。
道閑　その曲者は盗賊の張本、柿木金助、先達て入込み居れば、とくと詮議を遂げ、刑に行ふ龍興が計らひ。先づは監物さまには、奥へお入りあつて御休息。
監物　龍興に對面とげん。
道閑　ソレ、御案内。
侍達　イザ先づ
皆々　お入りあられませう。
ト唄になり、監物、道閑、侍ひ皆々附いて、奥へ入る。靜かな合ひ方にて、奥より腰元皆々、花活を持ち出て、左右に別れて
朝妻　後室様、御家老の仰せゆゑ、
逢城　めい／＼手生けの花筒。
朝妻　我が君様、
皆々　御内見、下さりませう。
ト奥より龍興出て、右の花を一々詠め

龍興　すりや、この花を院使へ御高覧に入れるのか。
清　イエ殿様へ
皆々　差上げまする。
龍興　なんと。
朝妻　山吹の花色衣、主や誰れ、問へど答へも口なしの
月吉　玉椿の八千代まで、變らぬ契りもお頼み申し上げたさ。
逢城　畏れ多い事なれど、私しが御訴訟は、そのあづま菊、吾妻きくと申しますれば。
青葉　品よくなびく柳の御返事を、皆々へお聞かせなされて下さりませ。
龍興　して關屋、其方が手際は。
關屋　憚りながらこの牡丹。
龍興　まだ咲かぬ蕾ながらの投入れとは、花の心も深見草。ハテ面白い。
皆々　そんなら私しどものは。
龍興　持つて下がれ。
逢城　すりや殿様の
三人　お心は。
龍興　叶はぬと云ふに。

三人　ハア、。
朝妻　左やうなれば。
逢城　云ひ合した通り
皆々　お手打ちに。
ト前へ直る。
龍興　オ、、手打ちが望みならば、これにて直ぐに。
關屋　こりや又御短慮。
龍興　イヤ放せ。
關屋　マア／＼、お待ちなされませう。
龍興　イヤ、又しても慮外の段々。以後の見せしめ。
關屋　すりや、どうあつても。
龍興　如何にも。
關屋　ソレ、皆の衆。
皆々　ハツ。
ト二人づゝ兩方別れ、奧へ向ひ
朝妻　後室樣。
伊達　道閑さま。
關屋　お開きなされまして
皆々　ござりまするかいなア。
操前　氣遣ひしやんな。龍興に得心さす。

道閑　腰元衆、扣へ召され。
ト操の前、三方に、桝杓を載せて、道閑、油桶を携へ出る。
龍興　ヤア、母人樣、道閑。
腰元　御意の通りに計らひますれども、お取上げござりませねば
操前　生れついての女嫌ひなれば。
道閑　ムウ。亡父山城入道、道三さまの御上意。
龍興　なんと。
操前　コレ、この油荷は我が夫、道三どの。
道閑　元は賤しき庄九郎と云ふ油商賣より、國の主に取立てられ
操前　それより數度の戰ひに譽を顯はし
道閑　長井氏との合戰に、先主討たれ給ひしかば、直ぐに長井を亡ぼして、齋藤の苗字をつぎ、山城入道道三と御改名。そのお胤の龍興公、武勇も父君におさ／＼劣らねども、只女嫌ひにて、情の道に辨まへなく、一徹短慮のお生れつき。産家の內より手しほにかけ、お育て申した慮外な諫言、申すもお家の爲と存するから。
操前　云ひ合したこの意見も、何卒齋藤家の相續に、妻を

道閑　迎へぬ其方の心。子孫なきは御先祖へ御不孝。何卒この上は、お心を改められて

龍與　妻を求めてたもるか龍與。

道閑　殿、なんとでござりまするな。

龍與　生れついた女嫌ひの某なれば、母の仰せは先づ、追つての沙汰。差當つて道閑、今、某への諫言、子孫なきは先祖へ不孝とあるが、この龍與と同年の、其方が悴はなんとした。

道閑　こは事新らしき御尋ね。憚りながら殿と、同日同所に誕生いたせし拙者が悴は、妾が腹に宿りしゆゑ、本妻の嫉妬強く、卽ち大殿に拜領の差添を乳母に預け、里に下せしが、その後悴が生死を聞かず。

龍與　ムウ。すりや其方が悴の行くへ知れぬか。ハテナア。

操前　龍與、最前の返答は。

龍與　イヤ、少し拙者は道閑に申しつける用事もござれば、何かは後刻。

操前　そんなら返事は後に。

龍與　先づそれまでは。

道閑　奥へござつて。

操前　ア、苦の色かへる松風の音。關屋、其方の琴など聽きませう。

ト合ひ方になり、操の前、關屋、皆々連れて、奥へ入る。後に龍與、道閑殘る。

龍與　其方に龍與が、申し聞かす仔細がある。近う參れ。

道閑　ハア、御用とはな。

龍與　某、これまで禁足同然に引籠り、室町どのへは元より、大内へ參内、これまで怠りし所存を、存じて罷りあるか。

道閑　イヤ、愚案の某、その儀は。

龍與　それ應仁以來國々納まらず、やゝともすれば劍戟を振ひ、強きは蔓り、弱きは亡ぶる時節と云ひ、龍與美濃一國を納むるは心の不足。それゆゑ、人を語らひ叛逆を企て、一天四海を掌握の望み。

道閑　ヤア〳〵、さては殿にもその御所存か。

龍與　如何にも。道閑、其方も心合すか。

道閑　それ承れば某もかねて。

トちやつと、思ひ入れあり、

イヤ〳〵、道ならぬ企て。思し召し止まり給へ。後の聞えも恐ろしゝ。

龍興　ハア、我れをば育てし乳母の其方。小さい性根、父道三は僅かな油賣りより、この美濃の主となり、龍興もその倅、父に比ぶれば今は大名。日本國を手に入れねば、釣合はぬ〳〵。
道閑　すりや、如何やらに諫言申し上げても。
龍興　いつかな變ぜぬ我か一念。
道閑　叛逆の底は固まりましたか。
龍興　某が家來の其方、心を合はすか。
道閑　主人の仰せならば、善惡ともに組み致すが即ち主從。
龍興　出かした道閑。
道閑　して、大望を思ひ立つとある、とても事に御誓言が。
龍興　僞はるに於ては、匹夫に首を下げやうとも。
道閑　オヽ、お出かしなされた、龍興公。樣子聞かれしか向坂甚内。
甚内　承はつて安堵いたしした。
ト奧より出る。
龍興　さては道閑、あの甚内と。
道閑　かねて心を合せ、大望の思ひ立ち。
甚内　歌枕となつて入込みしも、貴殿の歸國を待つて、道閑に進めさせ、心を合さんその爲に。
道閑　此方の進めより早く、殿の御所存承はつて、某が滿足。
甚内　これまで某、諸國を廻り、一味に入れし人數はこの連判。
ト出して見せる。
道閑　殿にも同じ大望、この上は。
龍興　甚内と、心を合す固め。
ト連判狀を取つて開く。道閑、硯をあてがひ
道閑　一味の印に。
龍興　如何にも血判。
ト姓名を記し、血を絞り、血判して渡す。
甚内　龍興どの、過分。拙者も心を合せば、龍に翅を得たる心地。
道閑　水魚の因みに何かの密談。
龍興　萬事は奧にて
甚内　申し合さん。
龍興　甚内。
甚内　龍興どの。

龍興　道閑、諸とも。イザ奥へ。

ト唄になる、三人奥へ入る。跡合ひ方、奥より鳴平出る。

鳴平　エヽ、歯がゆい殿様の御意。あの盗賊に知れてある兩人の奴等。なんでもグッと引縛つて手短かに、拷問と思ひの外、しつかい客あしらひ。なまぬるこい詮索ではあるわい。イヤ、暫らく休息と有り難い仰せを幸ひに、ちつとの間に疲れを晴らし、グッスリやらかしたで、グッと草臥れが出た。

ト足を伸ばし、撫つてゐる。ト奥より、渚、山吹の花を持つて出で

渚　鳴平どの。

鳴平　これはお腰元の渚どの。

ト ちやつと立ち上がる。

渚　最前都から歸らしやんしたと聞きました。きつい手柄の様子。

鳴平　イヤ、骨灰、微塵な目に出合ひました。

渚　それに付き、後室様より、御褒美として、この一本。

鳴平　こりや、山吹の花。

渚　サア、私しに取次ぎせよとの仰せ。

鳴平　フム。山吹の花色衣、主や誰れ。

渚　問へど答へず、口なしにして。

鳴平　ハテ、それとは云ばず口なしにして、有り難い御褒美。

渚　それで取次ぎしたわたしが喜び。

鳴平　花もの云はねど。

渚　互ひの心底。

鳴平　來る春に盛りもあれば。

渚　生花の眺めも暫し。

鳴平　渚さま。

渚　鳴平どの、必らずともに。

ト兩人、氣味合ひにて

鳴平　ハテ、お上へよろしう、仰せ上げられ下さりませう。

ト兩人奥へ入る。奥、バタ／＼にて

東馬　大切ない囚人、柿木金助の行くへが知れませぬ。いづれも御吟味々々。

侍ひ　畏りました。

ト瀬平、一巻を持つて出て、あたりを見廻す。後より鳴平、附いて出る。

瀬平　館の騒ぎを幸ひに、寶藏に入れ置きし、これも齋藤

家の重寶、伊賀流の忍びの術。遠霞の傳書、これを見れば身を隱す事心のまゝ。伊達五郎どのゝ賴みゆゑ、奪ひ取つたる、この傳書を早く。

鳴平　イヤ、鳴平が受取らう。

ト鳴平、一卷に手をかける。

瀨平　ヤア、さては下郎め。

鳴平　慥かに見屆けた。その一卷を。

瀨平　なにを。

ト兩人これより面白き立廻りさま〴〵ある所へ、金助出で、瀨平を當て、一卷を開いて見る。鳴平始終窺ふ。

金助　フム。これが伊賀流の遠霞の傳書。

鳴平　さては金助、うぬ。

トかゝるをちよつと當てる。鳴平、たぢ〳〵と、後へしさり、其うち、一卷を繰りひろげ

金助　姿を隱す術は、爰ではないわい。

瀨平　ヤア金助、すりや今の一卷を。

ト取りにかゝるを見事に返し、起き上がるをグッと踏みつけて

金助　フム、成る程爰ぢやて。姿を隱す忍びの術は、ムウ尤も。梵字で記し九字を切りかけ、四天に大事に唱へる文は。

瀨平　イヤ、うぬ。

金助　よし〳〵。的中したぞ。

ト蹴り飛ばす。鳴平、心附き

鳴平　繩かける。腕廻せ。

トかゝる。瀨平もかゝる。兩人を相手にちよつと立廻りありて

金助　姿を隱す、稀代の傳書。

鳴平　うぬ。

ト兩方より寄る。

金助　早速試すは。ソレ。

ト祕文を唱へ、九字切りかける。薄ドロ〳〵にて窓をさす。兩人一時に見えぬこなし。

瀨鳴　ヤア、金助は。

トあたりを尋ねるこなし。此うち金助　のう〳〵と花道へ行きかける。

金助　また姿を顯はすは。

ト一卷を始終見い〳〵、又九字を切る。窓を開く。兩人、目に見えるこなしあつて

瀨平　ヤア、金助そこに。

ト行かうとするを

鳴平　イヤ鳴平が。

ト引きのけ見事に返し、ツカ〱と花道へ行て、うぬ、とキツとなる。金助始終一卷を見い〱又九字を切りかけ、窓をさす。見えぬこなし。

兩人　又いづくへ。

ト尋ねる。

金助　ハテ、こりや、けうといワ。

ト二足三足行て又九字を切り、窓を明ける、鳴平、見て

鳴平　金助。

ト行かうとする。又九字を切る。鳴平、尋ねる。金助、鳴平をなぐさむ心にて、姿を顯はしたり隱したりしいしい花道へ入る。鳴平も金助に附いて入る。チョンチョン。返し。

造り物、右の飾りつけを兩方へ引き分け、奧より三間の二重舞臺、高欄附きにて、見附け金襖、この舞臺の上に龍興、硯を扣へ、長々とした立て文を書いてゐる。下に伊達五郎、剃刀を研いでゐる。燭臺、諸方に灯し、よき所に、具足櫃直しあり、この見得にて右の道具、前へ突き出す。兩方折り廻り、奇麗なる高殿。緞子張りの障子をはめ、臆病口の方に糸櫻の實木、吊り枝見事に。この前鍵の手に泉水。この道具、隨分奇麗によろしく、暮れ六ツの半鐘、面白き合ひ方にて、道具納まる。

龍興　伊達五郎、其方に、月代と申し附けしが、用意はよいか。

伊達　ハツ、只今お剃刀を合せ居ります。

龍興　ムウ。

ト右の狀を書きしまひ、立て文封じをして

誰そ居ぬか。參れ。

朝妻　ハア、、。

ト出て

お召しなされまするは、御用にござりまするか。

龍興　コリヤ、この一書を奧に居る、向坂甚內に相渡せ。

朝妻　畏まりましてござります。

ト取つて、奧へ行かうとする。

龍興　コリヤ〱、大切ない儀ぢや程に、密かに、とくと相渡せ。

朝妻　心得ましてござります。
龍興　早く行け、早く行け。
朝妻　ハア、〳〵。
ト朝妻、右の狀を持つて入る。始終此うち合ひ方、伊達五郎、剃刀を合しまひ、手合せなどしてゐる。龍興、鏡臺に向ひ、手盥を引寄せる。
伊達　殿、お月代を仕りませうか。
龍興　たらちねの、かゝれとてしも烏羽玉の、我が黒髮は撫でずやありけん。僧正遍照が歌の樣、誠に髮は樹木に例へ、髮は生ひ茂る草、たち伸びて役に立つべき髮は次第に枯れ失せ、田畑の妨げ、又は庭前の眺めの邪魔になるべき髭の草は、次第に茂りはびこるも、これ心に仕せぬ天の禍福。人間の身は小天地、氣候に依つてじゆん化し、また時の運氣に上つて應ぜずぢやよなア。
ト髭を揉む。
伊達　よく揉めましたらお髭を剃りませうか。
龍興　サア、これへ來て、この咽喉の下の髭から剃れ。
伊達　アノ咽喉の下のお髭から。
ト思ひ入れある。
龍興　サア、早く〳〵。

伊達　畏まつてござります。
ト剃刀を持つて側へ行く。龍興、仰向きゐる。
只今、剃りまする。
ト後より髭を剃りかける。よき所にて、剃刀を逆手に持ち直し、咽喉笛を掻かうとする。その手を取つて見事に投げる。
龍興　ハテサテ麁相な伊達五郎。ズッと寄れと云ふに。餘り遠慮を致すゆゑ、其やうに爪づいて、ハテ、危ない事。
ト伊達五郎、起き上がり
伊達　イヤ、殿のお髭を、あまり大事にかけまして、思はぬ不調法仕りました。とてもの事に、とくとお髭を。
ト切りかける。龍興、ちよつと留めて
龍興　ハテ仰山な。其方は髭をこれにて剃るか。
伊達　剃刀よりは切れ味のよい。
トまた切りかけるを、附け廻す所へ、關屋、ツカ〳〵と出て、伊達五郎と、立廻りにて、裾を掻き、伊達五郎を中返りさせ
關屋　殿樣に慮外する伊達五郎。
伊達　何を邪魔な關屋どの。

ト關屋を引き退け、切つてかゝらうとするを、支へて
立ち上がり、よろしくあつて、伊達五郎が刀を落す。
關屋取上げ、ツカ／＼と詰めかけて、キッとなる。

關屋　殿樣に、何ゆゑ刃向ふ。

ト刀を振り上げる。此うち、龍興、キッと見て

龍興　關屋、見事。

關屋　エヽ。

龍興　ソレ、さう振り上げし構へは、介錯の故實。武藝の嗜み。ハテ奥床しい。

關屋　殿樣の御意ではござりますれど、當お館へ御奉公に出ますからは。

伊達　なにを。

トかゝるを、立廻りにて

關屋　そしりはしりは、及ばずながら存じて居ります。

伊達　小癪な。

ト關屋を蹴り退けて、龍興にかゝるを

龍興　ハテ、女には天晴れの心がけ。

ト伊達五郎を投げる。起き上がつて、直ぐに關屋にかかるを

關屋　この上は、キッと詮議を。

ト二重舞臺より、下へ見事に投げる。

龍興　イヤ、彼奴等が、如何やう企めばとて、蟷螂が斧、苦しうない。

ト此うち、伊達五郎、逃げて入る。

關屋　みす／＼敵たふ、あの伊達五郎。あのまゝに免しては。

龍興　なんの、構ひない。打ッちやつて置け／＼。

關屋　流石の殿樣、寛仁大度。

龍興　關屋、近う。

關屋　ハッ。

龍興　コリヤ、日頃の其方が振舞ひ。今の手の内まで、しつかりと見屆けた上は、某が改め、申しつける役目があるが、違背はあるまい。

關屋　憚りながら私しも侍ひの娘、弓馬のお家に、御奉公いたしますからは、女でこそあれ、まさかの時は、長刀掻い込み、お馬の先で命を落しまする。

龍興　ホヽウ、過分。某が家中の者數多あれど、其方にまさる武士は心元ない。それゆゑ其方が性根を見込み申しつくる大切の役儀。なんに依らず承知、と云ふ慥かな誓言が。

關屋　御尤も。

龍興　ソレ。

ト差添を拋つてやる。關屋、ハツと掻い込み、庭の櫻の枝を、ポンと切る。右の枝を持つて來て、差添と一緒に龍興が前へ直し

關屋　何に依らず、違背いたしませぬと申す、私しが誓ひ。

龍興　出かした。

關屋　して殿樣には、仰せつけられまするお役目とは。

龍興　介錯いたせ。

關屋　エ、。

龍興　イヤサ、この龍興は、今宵切腹して相果つる。介錯は、其方に申しつけるぞ。

關屋　エ、、。

ト愡りする。ト此うち、西の高殿の障子を開き、甚内、最前の狀を讀み〳〵、下の樣子を聞いて居る。關屋、こなしあつて

殿樣、思ひがけなう御切腹と仰せられまするは、お家の重寶紛失の、その申し譯のお爲に。

龍興　イヤ、氣遣ひ致すな。朗詠集は紛失いたさぬぞ。

關屋　でも都に於いて。

龍興　ありや、似せ物ぢや。

關屋　エ、。

龍興　イヤサ、弟司之助に渡せしは眞赤な似せ物。かねて寶を望む佞人ある事を、疾より知つて、似せ物を拵らへ置き、誠の朗詠集は、この龍興が深く隱し置いたわやい。

關屋　天晴れ、殿樣の御賢慮。誠の朗詠集がござりますれば、御切腹には及びますまい。

龍興　例へ、寶は恙なくても、某は矢張り切腹する身の覺悟。

關屋　エ、、そりや又なぜでござります。

龍興　人に語らぬ一大事、龍興が心の底を明かすは其方、關屋、近う。

關屋　ハツ。

龍興　コリヤ、この龍興は、誠の入道どのゝ胤ならず。家老、山形道閑は、我が現在の親人。

關屋　エ、、アノ、道閑どのが御眞實の。

龍興　如何にも。當家の若殿と、某は、同日同刻の誕生。淺ましい人間の慾心。子に迷ふ親の心は闇にはあらで大

殿御臺、一家中の眼を眩まし、人知れず、若殿と某を、藁の上より取替へられ、それとは知らず、生ひ立ちし、十五の暮に思はずも、道閑どの、奥方の、大病のその時密かの内通。某と若殿と取替へしは、この家國を押領せんとの深き望み。いろ〳〵に諫むれども、聞入れぬ夫の惡事、死んで行く身の冥途の障り、心を改めさせ、取替へし若殿は、三つの年に乳母に預けて行くへ知れず。在所を求めて忠義を立てよと、くれ〴〵も末期の遺言。見ると等しく某が身の上、申し上げてと思へども、イヤ〳〵誠の若殿のお行くへ知らねば、却つてお家の一大事と、矢張り深く押包みしに、勿體なくも、後室樣の御いつくしみ、弟司之助は他家へ養子、龍興はこの國の、花の臺の鷲の巢に育てられ、子で子にあらぬ郭公、啼かで血を吐く心の苦しみ。彼の若殿のお行くへを、尋ね求むる方便はさま〴〵。御在所さへ知れゝば、某は惡人の道閑が忰と名乘り、最期を告ぐるかねての覺悟。それゆゑ云ひ號けの上杉家の姫にも、科なくて離別の使者。これまでいろ〳〵お進めあつても、詮なき惡人の胤、せめてお家に疵附けぬ龍興が心底は、天道より外は存じなく、日頃の願ひも今日成就。この一大事を其方に云ひ聞かすも、死後に至らば彼の朗詠集を、若殿にお渡し、申し右の樣子を、とくと合點か。賴むは其方。コリヤ關屋、龍興が所存を殘さず打明くるも、朝を待たぬ蜻蛉の、夕に消ゆる今宵の切腹。介錯は其方に。とくと萬事を心得たか。

ト甚内、これを聞いてズッと奥へ入る。關屋、始終泣き〳〵聞いてゐる。

關屋　アイ〳〵。

ト泣く。

龍興　關屋、そちやなんで歎く。

關屋　お情ない。これが泣かずに居られませうかいなア。

龍興　ヤア。

關屋　エ、サ、……よう思うて御覽じませ。取替へ子と御存じない後室樣、今宵あなたの御最期と、お聞きなされたら、さぞお嘆きと、思ひやられて。

龍興　武士の身の上、命は塵芥。

關屋　お家の重寶、朗詠集さへ紛失せねば、禁廷への申し譯立ち、御最期には及びますまい。ぢやに依つて後室樣に申し上げて。さうぢや。

ト奥へ行かうとするを

龍興　コリヤ〳〵關屋。待て。

關屋　イエ、あなたの御切腹を止むる御評議。
龍興　エ丶、死なしたり殘念や。健氣な其方が心底と思ひしに、淺はかなるは女の常。それを便りに大事を明かせしは龍興が不覺。この年月の心勞も、只一時に亡ぶる百日の萱、水の泡と消え果つる身の迷ひの種。エ丶。
ト泣く。關屋立ちどまり、氣の毒のこなしあつて。
關屋　そんなら、どうあつても、この場に於て。
龍興　くどい。
關屋　ハア丶、是非に及びませぬ……これ御覽じて下さりませ。
ト首に掛けてゐる守より、書いた物を取り出し、龍興に渡す。取つて開き
龍興　これは。
ト見る。
關屋　里の召使ひ渚、これへおぢや。
ト奥より。
渚　ハア丶。
ト出て
御用でござりますか。
關屋　かねて用意の小袖をこれへ。
渚　さてはお身の上を。
關屋　苦しうない。早う〳〵。
渚　ハア。
ト奥へ入る。
龍興　こりやコレ、某と云ひ號けせし上杉の息女、久方姫に遣はせし離緣狀。さては其方は久方姫か。
關屋　お恥かしうござります。
龍興　ハテナア。
ト渚、衣裳襠補を、廣蓋に載せ持つて出て
渚　イザお姫樣。お召替へなされませう。
ト關屋、此うち鏡臺にかゝり、笄を拔き、下げ髮になる。渚、衣裳を着替へさすうちに
龍興　すりや、同じ腰元の其方も。
渚　姫が里の召使ひでござります。このお館へ一緒に來りましたも。願ひあつての儀。その願ひも大方成就いたしましたこの樣子、私しもお嬉しう存じまする。
龍興　ム丶丶丶。
ト此うち、久方姫、衣裳着替へる。
久方　渚、暫らく次へ。
渚　畏まりましてござります。

ト奥へ入る。

久方　自らが身の上、申し上げるお恥かしながら、父上の夫さだめ、美濃の國の主、齋藤龍興さまに云ひ號けと、聞くと等しく輿入れを、今日や明日やと待ちかねる、月日も經つて十六夜の、春は美濃へお輿入れ、お姫樣にはさぞお嬉しうござりませう、必らず殿御の惡性を、御油斷なされな、御政道の仕樣は斯う〳〵と、お乳や乳人、腰元どもにそやされて、嬉しいやら恥かしいやら、龍興さまのお顏見たらば、なんと云はうぞ、どうせうぞと、心の中は岩にせかるゝ谷川の、末の契りを樂しみに、來た甲斐もない、お胴慾な、離別の狀の使者の口上。聞くと其まゝ懷劍に手をかけしを、母樣に止められ、父上樣は武士の意地、面當てに他の大名へ緣を組まんと仰せあるを、さま〴〵にお詫び申す其うちに、後室樣より密かの御狀、表向きは病氣と僞はり、館へ入つて腰元の中に交つて、折もあらばと有り難い仰せに縋り、お館へ參りまして、樣子を見れば女嫌ひの龍興さま、どうぞ御意に入るやうと、思ひついたる男嫌ひ。せめて枕は交さずとも、お側に附き添ふ心の樂しみに、あられもない取なしをして、現在殿御のお側で、不束に見えるやうに嗜なむは、ほんに小笠原の仕附けの外。まだこの上に幾年も附き添ひてと、存じましたところに、思ひがけない今の仰せ。今宵は最期と承りましての本意なさ。この年月の憂き心づくしの數々を、御推量なされて下さりませ。是非御切腹ある上は、なんの後に存命いたしませう。お願ひと申しまするは、未來のお供を、お許しなされて、その上のお情に、死んで行く身の自らなれば、とてもの事に、賽の河原へ參じませぬやうに、お願ひ申し上げまするわいなア。

龍興　ムウ。すりや久方姬、其方は。

久方　君が一度の情に、妾が百年の命を。

龍興　ともに捨てるか。

久方　どうぞお願ひ。

龍興　聞き屆けてくれう。

久方　エヽ。

龍興　ハテ、そちや貞女な者ぢやなア。

久方　ハツ。

　ト此うち、龍興は、手水鉢の杓にて、水をすくひ持つて來て

龍興　未來を契る二世の杯。

ト差出す。
久方　逢ふは別れと申しますれど、思へば嬉しい。
ト一口飲んで差出す。
龍輿　蓮の臺で添ひとげう。
トぐつと飲む。
久方　エヽ、有り難うござります。
龍輿　誰ぞ寝所の用意。
ト内より
女皆　ハア、。
ト銘々夜着を持つて出て、寝所をして、此うち、西の方の高塀より、操の前出て見てゐる。また東の高殿より、伊達五郎出かけ、見てゐる。腰元皆々、寝所をよろしく、久方姫を見て
朝妻　コレ申し伊吹どの、殿様の御意、俄にお床を取つたは、あれ。
ト久方姫を教へる。
皆々　そんなら關屋どの。
龍輿　次へ立て。
皆々　エヽ、おめでたう存じまする。
トびんとして、皆々奥へ入る。龍輿、そろ〳〵袴の紐をほどき取つて、夜着の上へ直つて
龍輿　久方、苦しうない。これへ參れ。
久方　エヽ。
ト立つて慄うてゐる。
龍輿　ハテ、時刻が移るが。
久方　それでもどうやら自らは。
ト始終、慄うてゐる。
龍輿　武士の娘に似合はぬ、未練な奴の。
久方　ハイ、、、、。
トいろ〳〵こなしあつて、久方姫も上へ上がり、畏まつてゐる。
久方　申し、どう致したらようござりませうな。
龍輿　どうしたらよからうやら、某も、母の胎内を出でしより、乳人の乳房を離れて、女と添寐は三十歳にいたる今宵が始め。何を云うても不知案内。其方も存ぜぬか。
久方　自らとても廿の上は三つ越せど、殿御と枕交しまするは。
ト無性に慄ふ。
龍輿　ハテ、なんとせうな。
トいろ〳〵思ひ入れあつて、あたりを眺め、具足櫃を

見てこなしあり。

ハテ幸ひ。

トつか／＼と行て、鎧を取出し、內より、卷物を取つて來て、ひろげ見て、これを、久方姬に見せる。久方、こなしあつて、兩方より見て心意氣ある。

あらまし承知。

久方　申し殿樣、

龍興　衣を解け。

久方　ハッ。

龍興　其方も。

久方　ハッ、斯うでございますかえ。

龍興　奧。

久方　我が夫。

龍興　久方。

ト引寄せ

久方　エヽ、有り難い。

ト抱きつく。操の前、後へ廻つてちやつと屛風を引き廻す。伊達五郎、高殿より落ち、恟りして、橋がゝりへ逃げて入る。ト奧より、朝妻、伊吹、皆々出かけ、見て居て

皆々　エヽ、アレ。

ト云はうとするを、操の前、仕方にて押へ、逢城野、朝妻、伊吹に囁やき、皆々、奧へ入る。操の前、跡にこなしある所へ、逢城野、犬張子。青葉、茶臺に銀の茶碗を持つて出る。操の前、始終仕方にて、ソッと屛風の內へ遣れと云ふ事する。伊吹、青葉、屛風の側へソッと行て、耳を寄せ、張子茶碗を落す。恟りする。操の前、仕方にて叱りつける。奧へ入ると又朝妻、角盥、月吉、湯つぎを持つて出る。操の前、初手の通りに敎へる。朝妻、月吉もソッと行て、又取落し、恟りする。操の前、呵つて奧へ入れる。ト操の前も、こなしあつて、そろり／＼と屛風を窺ふこなし。ヂッと聞いて、ちやつと、こちらへ來て、思ひ入れあつて袂より、最前の珠數を出して拜み、奧へ入るとチョン／＼にて返し。

右の二重舞臺を後へ引き込み、兩方より大襖、一面にさす。チョン／＼と、太皷の頭打ち、太皷になつて臆病口より、八ツ代監物、出る。橋がゝりより、鳴平、瀨平、諸士皆々附いて出る。

瀬平　最早、寅の上刻。
諸皆　先達ての仰せなれば。
監物　龍興はいづくに。彼の朗詠集を受取らん。
ト大襖を又兩方へ引分けると、後ろ舞臺一面に金襖に
飾り替へある。
龍興　最早刻限なれば。
監物　朗詠集を差上げ奉らん。
ト白無垢、麻上下にて出る。
瀬平　ヤア　殿の
皆々　お姿は。
龍興　コリヤ、院使の御前なるぞ。
皆々　ハツ。
龍興　イヤナニ、八ツ代監物さま、一旦院宣の下りし朗詠
集、只今差上げ奉らん。
監物　龍興、早く。
龍興　ハツ。ソレ、申し附けた寶を早く。
ト内より
久方　畏まりました。
ト白無垢にて、三方と、腹切り刀を、持つて出て、龍
興が前へ直す。

瀬平　ハテ、合點のゆかぬ。死裝束と云ひ、腰元の關屋を
奥方とは。
龍興　イヤ、腰元でない。某と云ひ號けの、上杉の息女久
方姫。
久方　即ち龍興さまの妻。
皆々　なんの事ぢや。
監物　さては龍興、紛失の寶、手に入らぬな。
龍興　申し譯の切腹。
久方　そんなら最早。
龍興　コリヤ。
久方　なんの泣きませう。泣きや致しませぬ。
ト思ひ入れあつて
瀬平　寶のない云ひ譯に切腹とは、よい覺悟。早く腹を切
らつしやれ。介錯仕る。
龍興　すりや、其方は、最前の針の土産を忘れたか。
瀬平　オヽ忘れた。うつけの主に仕へるこの家國を、身共
が釣り針。
東馬　心を合す東馬も一緒に。
兩人　龍興、覺悟。
ト兩方より切つてかゝるを、立廻りにて、ポン〳〵と

當てると、諸士皆々、立ちかゝるを

龍興　其方達も、主に敵たふか。

皆々　全く我れ〳〵は。

ト ぢつと扣へる。

監物　龍興、時刻が移る。

龍興　只今切腹。

ト三方を引寄せる。久方立ち上がる。

久方、それは。

久方　イヤサ、あなたのお覺悟、泣きや致しませぬが、ようようたつた今。思へばあんまり本意ない御最期と存じますれば。

ト思ひ入れあつて、龍興、腹切り刀を取上げ。

龍興　監物さま、龍興が申し譯の切腹、イザ御覽。南無阿彌陀佛。

ト腹切り刀取り直す。橋がゝりの内より

道閑　待つた〳〵。早まり給ふな龍興公。

ト云ひ〳〵出て、龍興を留める。

監物　道閑、龍興が切腹、なぜ妨げる。

道閑　イヤ、御切腹とはあまり御短慮。なぜ寶の詮議、日延べをお願ひなされぬぞや。エヽコレ、斯う云ふ事と存じたれば、先達て都に於て。

ト立つたり居たり、うろ〳〵する。

龍興　道閑扣へい。見苦しい。

道閑　ぢやと申して、なんとこれが控へて居られませう。

皆々　道閑どの、お控へなされい。

道閑　イヤ〳〵控へぬ。何分監物さまへ拙者がお願ひ。かかる場所に後室には、なぜござらぬ。現在我が子の御最期とあるに。

龍興　道閑、我が子が最期は悲しいか。

道閑　悲しうなうて、なんと致さう。エヽ、心強い後室様。

龍興　燒野の雉子、夜の鶴。

道閑　是非一旦は日延べをお願ひあつて

久方　せめて暫しのうちなりと

道閑　御切腹を。

龍興　イヤ、某が切腹は、道閑其方がこの年月の企みの程を。

ト腹切り刀を道閑にグツと突ツ込む。諸士皆々立ち騒ぐ。

皆々　ヤアこれは。

監物　龍興が願ひの趣き、慥かに見屆けた。

龍興　ハツ……親人、なんと思ひ知りやつたか。
道閑　ヤア〳〵、身共を親とは。
龍興　エヽ、こなたはなう。
道閑　なんと。
龍興　この年月の積惡、人は知らぬと思うてござつても、コレ、天道は明らかな。當家の若殿と某を、藁の上より取替へ、家國を押領させ、まだその上に一天四海を掌握と及ばぬ望みは最前の連判狀、合體と見せしも、一味の人數見屆けん爲でござるわいなう。
道閑　イヤ、連判狀は格別、合點のゆかぬは、我が悴と云ふには。
龍興　あらがはれな。こなたの心に覺えがあらう。母の病死の遺言に、委しく知つたこの龍興。
道閑　イ、ヤ、覺えぬ、知らぬ。こなたは道三公の御胤に相違はない。てこねた奧は熱のうわ言。死病ひの苦しさに、うろたへた遺言狀。そりや證據にはならぬ。誠取替へたと云ふ、なんぞ外に慥かな。
甚内　證據と云ふは向坂甚内。ト長上下にて最前の連判狀を持つて、操の前連れ出て來る。
道閑　ヤア甚内、その姿は。
操前　道閑、ようも〳〵この年月、自らを始め一家中の目を瞑ましたなア。
龍興　さては若殿には。
甚内　其方が最前送りし一書と云ひ、また連判に血判の折から、道閑と記せし血判、龍興が血汐と一つに寄りしは、心得ずと存ぜしが、思ひ合する親子のしるし。それに不思議は我が身の上、當國長良村に生ひ立ち、草村に朽ち果てんより、四海に名を現して、足利同然と呼ばれんと、十五の年より家出して、東に住みて、向坂甚内と、盜賊の張本となりしも、軍用集めん方便に、諸國を遍歷するこの甚内を、山城入道道三どのゝ、胤と知つたる不思議の龍興。
龍興　ハアヽ、御不審は御尤も。親の惡事で國の守と、傅かれる某が身の果、空恐ろしく、一刻も早う若殿に、當家の御相續と存ずるから、密かに安否を尋ね求むる折柄、小倉の堤に於て、打ちかけ給ひし手裏劍は、即ち、道三公の御祕藏の、すいめうくはの笄にて、親人に拜領の差添え。
甚内　其方が忠義の心底、感じ入つて、コレこの認めし願

ひの通りに。

龍興　お家相續あつて。

甚内　母に孝行、弟の身の上、氣遣ひ致すな。

久方　そんならあなたが、誠の若殿樣で。

龍興　御家來の某、この上ながら。

甚内　叛逆を思ひ立ちしも出世の望み。齋藤の血脈と聞いたる上は、心を改め當家の相續。

諸皆　すりや、我れ〳〵の御主人は。

龍興　今日今宵、あの若殿。

操前　皆の者、違背はあるまい。

諸皆　ハア、。

監物　すりや、願ひの通りに。

龍興　誠の若殿に、跡目の願ひを。

監物　紛失の寶なくては。

龍興　朗詠集はこれに。

ト三方を打ち碎くと、下より朗詠集、出づる。久方、それを若殿へ。

久方　イサ朗詠集、お受取りあられませう。

ト渡す。

甚内　この寶手に入る上は。

龍興　參内して、跡目の願ひ。

監物　お家は萬歲、萬々歲。

諸皆　おめでたう存じ奉ります。

ト道閑、起き上がつて

道閑　ハア、、天なるかな命なるかな。親は子に迷ひ、惡事を企めど、伜は義を全く、忠義たるは。

龍興　ソレ、最前土產の大津繪。

道閑　鬼の念佛の角も折れ、今に至つて發起。

ト引き廻し

伜、苦痛を助けよ。

龍興　ハア。

ト伊達五郎の落したる刀を取上げ、道閑が首をポンと切る。

操前　惡人なれど

久方　現在舅御。

ト首を取上げる。

龍興　三十年來夢空々、須彌山碎けて磐石に花開く。一喝。

ト刀を取り直し、腹へ突ッ込む。

操前　ヤア、そんなら其方も。

甚内　健氣の覺悟。

ト瀬平、東馬、起き上がり、
瀬平　樣子は聞いた、誠の朗詠。
東馬　誠の龍興。
　ト兩人、甚内に、切つてかゝるを、ちよつと立廻りして、見事に兩人を切る。
皆々　ヤアそれは。
甚内　この龍興が政道始め。
龍興　勇ましき若殿。
監物　急いで參內。
甚内　直ぐに出立。院使のお供。
　ト監物伴ひ、花道へ行きかゝる。
龍興　久方、介錯。
久方　ハヽ、…………………自らも直ぐにお供。
　ト咽喉へ突き立てる。
操前　可哀や姫が。
甚内　天晴れ貞女と忠義の夫婦。
龍興　御出世の門出。
　ト引き廻す。
操前　コレ。
　ト寄ると、龍興、がつくり落入る。
甚内　ハテ、あつたら武士を。
　ト云ひさして、思ひ入れあつて
院使のお立ち。
　トよろしく幕。ト監物、甚内、花道の人數、皆々靜かに向うへ入る。

四つ目　島原の場

役名——齋藤司之助。土岐主計頭。夜番、太郎助。石黒官兵衞。雛鶴屋才兵衞。大坂屋與九郎右衞門。太鼓持ち、彌吉。同、利作。仲居、おたけ。入間玄宅。傾城、春日野。同、綾絹。同、吾妻路。同、初風。千鳥の局。

造り物、向う一面の黒幕。臆病口に大門口、眞中に番部屋、出口の柳、この模樣よろしき騷ぎ唄にて幕開く。ト橋がゝりより石黒官兵衞、大盡の形にて、前垂れをかづきながら出る。禿若葉、綠、太鼓持ち彌吉、利作、金盥太鼓叩き、うころもちは内にか、海鼠どの、お見舞ひぢやと、皆々囃して出る。雛鶴

屋才兵衛、亭主の形。呉葉、八重菊、傾城の形にて、男大勢、附いて出る。

官兵　ア、、待て〳〵。

ト羽織を脱ぐ。

ヤレ、海鼠になるのも、大抵しんどいものではないぞ。

才兵　御尤も〳〵、お前様の思ひ附きで、節分の體なされての御趣向。さりながら、節分の晩には、總上げなさるるお客様を海鼠にして、廓中から、うごろ持ちを送りまするが、習はせとなりまして、あなた様に限らず、どの大盡様でも、海鼠に致しまするのでござります。

若葉　お前がなんぼう切ないの、否ぢやのと仰しやつても、お前に惚れて居なさる春日野さまが、ひよつと海鼠が好きぢやと仰しやつたら、海鼠におなりなさるゝであらうなア。

官兵　あの春日野太夫が云ふ事なら、例へ海鼠は愚か、うごろもちにてもなる心ぢや。

呉葉　ほんに、そりやよからうわいな。お前の顔は、とんと、うごろもちが日でりに遭うたやうな顔ぢやわいなア。

綠　イヤ〳〵、うごろもちより、蟇蛙のやうな顔ぢやわいなア。

官兵　ヤイ〳〵、禿ども、身共をうごろもちぢやの蟇蛙ぢやのと、なんで吐かすのぢや。

皆々　ソリヤ、うごろもちが怒つた〳〵〳〵。

ト皆々囃す。

官兵　憎い奴。うぬ。

ト官兵衛、腹立て、傾城、禿を追ひ廻す。皆々逃げる。

皆々　うごろもちが怒つた〳〵〳〵。

ト追はへ、よき所にて廻り。向うより。

呼び　お客人のお入り。

官兵　ヤア、最早お客人のお入りとな。

皆々　お約束の御大切なお客様。

官兵　もう料簡してやる程に、隨分麁相のないやうに、お迎ひ申せ。

皆々　合點でござんす。

ト面白き囃子になり、向うより立派なる奴、一對の挾み箱かたげ振つて出る。後より長刀、持ち出る。傾城綾絹太夫、道中長柄の傘さしかけさせ、禿青葉、ゆかり、連れて出る。後より千島の局、好みの衣裳にて、腰元筆岡、皐月、連れて出る。後より入間玄宅、醫者の形にて附いて出る。後より、ぶッ裂き羽織股立ちの

侍ひ、大勢、附き出る。花道の中程にて皆々立ちとまる。女形皆々

皆々　綾絹さま、今かえ。

綾絹　昨日は筑紫のお人を送り、今日は又東の迎ひ。憂きは勤めの習ひ。石黑さまの云ひつけ、名も、お顔も知らぬこのお方を、お迎ひ申してやう／＼今。

千島　彼の兼好のつれ／＼に云ふ通り、物云はねば誰れを友に昔を語らんと書けど、この粧ひは物云ふは、誠に傾城の、賢なるはこの柳かな。とは面白い口ずさみ。ナウ玄宅。

玄宅　左やうでござります。物堅いお館とは違ひ、なまめく廓の模様。アレ出口の柳に人を招く、情と色を商ふ遊女の景色。イヤモウ、堪つたものではござりませぬ。

官兵　これは千島のお局さま、遠路の御歩行おいとひなく、これまでの御來駕、御苦勞千萬に存じまする。

ト　これにて皆々、本舞臺へ來て並よく並ぶ。

千島　石黑さまにも、何かの心遣ひ。自らも心は急けど、女の身すから。歩行路を拾うて、やう／＼と今來ましたわいなう。

ト　編笠を取り、皆々を見る。

綾絹　エヽ、あなたは。

皆々　女中さん。

侍ひ　コリヤ／＼、慮外な奴なう。

玄宅　あなたをどなたと思ふ。忝なくも武將義輝公の御乳人たる、千島の局。

千島　玄宅、控えい。

ト　思ひ入れあつて、扣える。

官兵　イヤ、お局樣のお慰み、これより雛鶴屋方にて、太夫どもに舞ひ謠はせ、一獻召し上がられ、然るべう存じまする。コリヤ／＼亭主、皆の者。隨分、あなた樣の、御機嫌に叶ふやうに、おもてなし申せ。

皆々　畏まりましてござります。

玄宅　イザお局樣には、先づ部屋へお入りあつて、ナ、石黑どの。

官兵　如何にも、御案内仕る。イザ、千島さま。

千島　ほんに常々お館にて、御祝儀の酒とは違うて、今宵は傾城達と一緒に、廓の色酒。

官兵　皆の者、お供仕れ。

皆々　左やうならば

皆々　女子大盡樣。

千島　筆岡、皐月、供せい。
兩人　畏まりました。
女皆　サア、ござんせいなア。
千島　綾絹、其方も。
ト綾絹が手を取る。
綾絹　アイ。
千島　サア、ござれ。
ト騒ぎ唄になり、千島の局、綾絹、皆々、大門口へ入る。ト番部屋の内にて、灯をともす。向うより土岐主計頭、家來に箱提灯を、持たせ、出て來て
主計　この野邊が、朱雀野と云ふのであらうな。
家來　左やうにござります。あれに大門口の、柳が見えます。
主計　あれを入つて、三筋町の揚屋、雛鶴屋とやら。もう千島のお局さまにも、お入りであらう。サア、參れ〳〵。
家來　ハツ。
ト本舞臺へ來て、家來、誤まつて爪づき、提灯の灯、消える。
主計　ハテ、とばついて麁相な。幸ひの番所、火を借つて參れ。

家來　ハツ。
ト番所の口へ行て
ちよと、賴みたい〳〵。
ト内より、太郎助
太郎　ハイ〳〵、なんでござりますな。
家來　イヤ、往來の者ぢやが、提灯の灯を消して難儀を致す。どうぞ灯を一つ貸して下され。
太郎　ハイ〳〵、お易い御用でござります。
ト内より夜番太郎助、提灯に、灯をともし出る。
家來　これは〳〵忝ない。
ト云ひ〳〵提灯の蠟燭に火をうつし、此うち太郎助、主計頭、顏、見合せて
太郎　ヤア、あなたは。
主計　其方は齋藤の家來、最上新兵衞。
太郎　土岐主計頭さま。
主計　ハテ、思ひがけもない。
太郎　面目ない御對面を仕ります。
主計　勘當と聞いたが。
太郎　左やうでござります。それゆゑにこの流浪。して、あなた樣は、いつれへお越しなされまするな。

主計　某今宵爰へ參りしは、武將義輝公の御眼病、日を重ねて重らせ給ふに付き、三老職も心を痛められるところ、辰の年月日時に、產れし女の肝の臟の生血を取り、眞珠寶珠の祕藥に交へ用ゆれば、立ち所に御平癒あらんとの儀。それゆゑ所々方々を尋ねると雖も、右の年月揃ひし女、相知れず。廓は諸人の入込み所と云ひ、分けて女も數多あらばと心を付け、千鳥の局、右の詮議に某も諸とも、今宵參りしは彼の祕藥の。

太郎　辰の年月揃ふ女の詮議、私しへ仰せつけられ下されませうならば、有り難う存じまする。

主計　ムウ新兵衞、この詮議を願ふ其方が所存は。

太郎　御存じの通り、勘當の拙者なれば。

主計　それを功に勘當の詫び、主人たる司之助に。

太郎　アイヤ、主人も勘當の身の上なれば。

主計　すりや、主從ともに。

太郎　功を立てる拙者が願ひ。何卒主計頭さまのお情で。

主計　その身になりても忘れぬ忠義。ハテ、主計頭が察して、申しつけてくれう。

太郎　すりや、御承知下されて。

主計　如何にも。それにつき、まだ申し聞かす仔細もあれば。

太郎　案内がてら。

主計　委細は道々とくと。

太郎　然らば主計頭さま。

主計　最上新兵衞……イヤ、廓の番人。

太郎　ハッ。

ト唄になり、主計頭、太郎助、家來、連れ、大門口へ入る。ト向うより司之助、着流しにて出て

司之　アヽ、通ひ馴れし道は昔に變らねど、變つたはわしが身の上。どうぞ綾絹にも逢ひたし、吾妻路も、心にかかり、殊に新兵衞夫婦が心ざし、忝ないと思ふ程、何かにつけて任せぬものは浮世。

ト始終合ひ方にて、大門口より、禿ゆかり、文を持つて出て來て

ゆか　司之助さまか。

司之　ムウ。ゆかり、太夫は。

ゆか　雛鶴屋に。それでお前にこの文を。

ト渡す。取つて

司之　ドレ〳〵。

ト狀を開き

ムウ。そんなら太夫は雛鶴屋に。よし〳〵。後に忍んで行かうわいの。

ゆか　必らず早う來て上がりなさんせえ。

司之　合點ぢや〳〵。

ゆか　アイ〳〵。

トゆかり、大門口へ走り入る。司之助、右の狀を卷いて、懐中へ入れる。

司之　嬉しや〳〵。なんでも今宵雛鶴屋へ忍んで、綾絹としつぽりと。

ト大門口の方へ、行かうとする所へ、かけこの八、しめたの虎、來て行き當るを、御免々々と行かうとする。

虎　ヤイ〳〵二才め、待ちやがれ。人の足を踏みさらして挨拶もせず、なぜうせる。

八　おいらが足を踏みにじり、どこへうせるのぢや。

ト兩方より、胸倉取る。

司之　これは〳〵、心が急きまして、あなた方のお足を踏みましたを、とんと存じませなんだ。御免々々。

虎　否ぢやぞよ。見りや、なま白けたしやツ面で、此やうな奴等は、癒らぬ風の神のやうに思ふ。太夫等の見せしめに

八　揚屋の門口で

虎　踏みにじつてこまそ。

兩人　サア、うせう。

ト司之助を引ッ立てる。此うち太郎助、戾つて來て、直ぐに兩人を引きのけ、司之助を圍ふ。

司之　ヤア、其方は。

太郎　大事でござりません。

虎　番太め、わりやなんで。

八　邪魔さらすな。

トかゝるを、兩方へ見事に投げ

太郎　禿に樣子を聞きました。ちやつとあなたは。

司之　雛鶴屋へ。

ト行かうとするを兩人、起き上がり

兩人　うぬ、二才め。

ト引き戾すを、太郎助、立廻りにて

太郎　エヽ、邪魔ながらくため。

トよろしく投げ据ゑ、割り竹にて、さん〴〵に擲る。

司之　ヤア、それは。

太郎　ハテ、構ひない。廓の暴れ者を政道するは、私しが役でござります。

司之　そんなら。

ト門口へ走り入る。

兩人　イヤ、彼奴を。

ト兩人かゝるを、太郎助、割り竹にてさんざんに打ち据ゑる。兩人、中返りするを、太郎助、こなしあつて

太郎　火の廻り〱。

ト割り竹を引き、大門口の方へ行く。チョンチョン。返し。

造り物、三間の間、二重舞臺、一面の茶屋暖簾、西は中二階がゝり、高塀、門口に、雛鶴屋、と云ふ掛け行燈、上手に手水鉢、側に水仙の鉢植、但し仕掛けあり、すべて島原揚屋の模樣にて、道具とまる。

ト司之助、奧へ行かうとして居るを、千島の局、裾をヂッと捕へて

千島　申し、司之助さま。自らが切なる戀路、今日この廓へ來たも、どうぞお前に逢ひたいばかり。この心根を不便と思し召して、情のお返事を聞かして下され。司どの、また自らが事を、兎やかうと云ふ者があると、義輝公へ云ひ上げなし、知行を棒に振らすか、切腹さすかは、そりやモウ云はいでも知つての通り。また自らが高が女とて、役に立たぬと思ふは不覺。この戀叶へて賜はるなら、勘當は愚か、加增がしたくば、加增もさす。立身出世は心のまゝ。これ程までに思うてゐる、自らが心を推量して、色よい返事を、聞かしてたべ。

司之　ぢやと云うて、このお返事は。

千島　ならぬかいなう。そりや情ない、胴慾ぢや。心の外なればこそ、この千島が、これ程にまで心を盡すに、聞入れなければ司之助さま、こなたの身の上ぢやが……ハテ、女子の口から、明らさまに斯ういふ事を云ひ出すからは、否でも應でも叶へてもらはねば措かぬ。認め置くはこの起請。

ト懷中より、守り袋を出して、その中より起請出し

大事の守も一緒にして、これ程までに、こがるゝ自らを少しは不便と思ひやり、この起請を手に觸れて、思ひの丈を晴らさしてたべ。拜みます。

ト無理に、懷中へ入れる。

司之　これはしたり、何をなさるゝ。

千島　ハテマア、これを。

ト無理やりに入れる、司之助、突き戻す。立廻りにて

司之　最前の文を落す。これを知らずに、起請突き出す藻鹽焼く、海女の磯家の夕煙り。
千島　エ、なんと。
　ト引きとめる。
司之　立つ石ももし思ひ果てねば。
　ト司之助振り切り、奥へ入る。千島の局、殘り、合ひ方にてこなし。
千島　エ、、胴慾な司之助さま、眞實こなたに惚れたればこそ、廓へござると聞いたを幸ひ、御内用にかこつけて、この島原へ來たも、顏が見たさと、戀が叶へてもらひたさぢや。それに起請まで持つて來た自らを、つれない胴慾、今の詞の端々。そりやあんまりな、胴慾ぢやわいなう。
　ト舞臺を叩きこなしあつて、司之助が落した文を見て
こりやなんぢや。
　ト開き見て
ムウ、そんなら今宵、この揚屋で忍び逢はう。ムウ。
　トこなしある所へ、奥より官兵衞出て
官兵　これは千島さま、端近へ出てござりますかな。奥には傾城藝子が、お慰め申さんと、あなたをお待ち申して居りまする。イザ／＼奥へ、お越し遊ばされませい。

千島　エ、、思ひ廻せば廻す程、戀なればこそ自らが、心を盡すにこの文。
　ト文を見て
ムウ、さうぢや。
　ト奥へツイと入る。
官兵　なんの事ぢや。
　ト花やかな囃子になり、太鼓持ち彌吉、利作、遣り手お竹、禿、男皆々、手を叩き出る。春日野太夫、衣裳裲襠にて、三方に銀の枡を乘せ、中に小判、一歩二朱を入れて、酒に醉ひたるこなしにて
春日　福は内／＼。
皆々　拾はう／＼、拾はうや／＼。
　ト皆々、春日野の囃子に乘つて蒔くを、皆我れ先にと金を拾ふ事よろしくあつて
春日　サア／＼、めでたい／＼、石黒さまの今宵の趣向、年越しの豆囃子も、めでたう濟んだ。喜び事に酒にせう酒にせう。
官兵　コレ太夫、コレサ春日野、ても、けうとい機嫌ぢやの。其方ばかり面白う酒呑んで、身共一人打捨て置くとは、聞えぬぞよ／＼。

ト しなだれかゝる。春日野、煙草のみ、脇見して居る。

コレ、身共ばかりに口たゝかせ、煙草ばかりのんで居るとは曲がないワ。身共一人胸を焦がすと云ふ事かいやいやい。

ト 春日野太夫に抱きつく。煙管を顔にあてる。

アツ、、、、。

ト 飛びのく。皆々氣の毒なこなし。

コリヤ、皆の者、騒ぐな、だんない〳〵。春日野ゆゑなら、この頬が、焼豆腐になつても、大事ない〳〵。

皆々 きつい心中ぢやわいな。

官兵 えらいか〳〵。ナニ太夫や、今宵は身共が趣向で節分の眞似。今見れば、豆囃子ぢやと云うて、大枚の金銀を、パツ〳〵と蒔き散らしたが、あの金は。

春日 アノ、わたしが蒔いた一分や小判かえ。

官兵 オヽ、サ〳〵。

春日 あの金は、わたしを身請けすると云うて、お前が持つてござんした、手附けの金ぢやわいなア。

官兵 ヤア、、、、。

ト 大きに驚ろき、目を廻す。介抱する。

皆々 石黒さま、石黒さま。

ト 呼びいける。官兵衞、心附く。

お心が附きましたか。

官兵 心は慥かになつたが氣にかゝる今の金。コレ太夫、其方に預けた手附けの金、蒔いたか。

春日 アイナア。

官兵 ヤア、コリヤ〳〵おのれら、その金で、この春日野を請け出し、女房にせうと思うて、持つて來た大事の金。一兩も、遲疇なしに皆戻し居らう。

春日 ア、コレイナア。折角わたしが年越しの祝儀に蒔いた金を取返すとは、どうやら氣にかゝるわいなア。

官兵 でも、ありや大事の身請けの金ぢやわいの。

春日 それでも無理に、取返して下さんすと、わたしが顔がすたるぞえ。お前もわたしを可愛いと思うてなら、わたしが顔の立つやうにしてくれたがよいわいな。

官兵 顔は立てゝやりたいが、あの大枚の金を。

春日 措かしやんせ。わたしが此やうに云うて頼むに、聞入れなくばよござんす。コレ皆さん、金をあのお方に戻しておくれ。その代りに、わたしがお前方には金あげるゆゑ。申し、こんな所に居ると、酒の醉が醒めて面白うない。ドリヤ奧の。

官兵　ア、コレ〳〵短氣な。マア〳〵、爰に居てたもいの。
春日　それでもお前、きつう金が惜しさうなもの。
官兵　イヤ〳〵惜しうない。よう蒔いてたもつた。節分の晩に小判を蒔くとは、めでたい〳〵。わいら、よう拾うてくれたなァ。
彌吉　なんと皆様、聞かんしたか、あのやうに御機嫌が直れば、こちらも拾つた甲斐があつたと云ふものぢや。
たけ　わしやこんな事なら、もそつと拾はうぢやあつたもの、たつた五兩ぢや。
春日　お竹どの、少なかつたなア。こなさん、前垂れ拵らへたいと云はんしたが、それだけは足るまい。申し、あの人さんに、もそつと金を遣つて下さんせ。
官兵　ヤア、アノ蒔き散らしたその上に、遣つてくれいか。
春日　否かえ。否なら措かしやんせ。お竹どの、わしが方から足してやろ。望みの前垂れ拵らへさんせ。
たけ　アイ〳〵。
官兵　コリヤ〳〵女郎め、その足しは身が足してくれる。して何程ぢや。
たけ　アイマア、五兩程も足りませぬわいなア。
官兵　ヤア。
春日　オヽ、けうとい偏りの仕やう。わたしが足してやるわいなア。
官兵　アヽ、身共に出さしてたも〳〵。
ト紙入れの金を出し
それでよいか。でも、えらい前垂れぢやなア。
たけ　有り難うございます。
ト金を取つて頂く。
利作　イヤ、春日野さま、私しがお頼み、どうぞ、煎り豆に花を咲かすは、あなたのお心次第でござります。
春日　これは又迷惑な。お前の頼みも餘儀ない事。この利作さまは、この間大坂から見えた太鼓さまぢやが、一人の母御様を呼びたいとの事。母御様に孝行な、ほんにしをらしいお方。その母御様、どうぞ呼んで上げて下さんせいなア。
官兵　コレサ、なんのあれが母親の事まで。捨てゝ置きやいの〳〵。
春日　オヽ、不粹。否かえ。措かしやんせ。コレ袖彌、奥座敷の袋棚に、わしが忍ぶ袋がある。取つておぢや。
袖彌　アイ〳〵。
ト行かうとする。

官兵　コレ待て〳〵。コレ春日野、其方の忍ぶ袋を取りにやつて、どうするのぢや。
春日　あの利作に、金上げやんす。構うておくれな。
官兵　イヤ、構ふ〳〵。その金も身共が遣る。其やうに腹を立てずと、機嫌直してたも。コリヤ〳〵利作、母を呼びに遣る金は、何程要る。
利作　どうぞ二十兩ばかり欲しうござりまする。
官兵　ヤア、こりやいつそ肝がでんぐり返るワ。
ト春日野が顏を見る。つんとして居る。官兵衞、こなしあつて
遣ろ〳〵。もういつそ自棄ぢや。望みの通り、ソリヤ二十兩。
ト金を出し、惜しさうに遣る。
利作　エヽ、有り難うござりまする。
ト彌吉、襖へ出で
彌吉　さて春日野さま、最前桝七が、この薄簪を持つて參りましたが、なんとお買ひなされて、禿衆に、お遣りなされませぬか。
春日　ほんに、こりや好い簪ぢや。買うて子供に遣りやんせう。なんぼぢやえ。
彌吉　ハイ、簪一本が五兩づゝ。六本で、五六の三十兩。ちつと高いか存じませぬが、その代り細工がようござります。
春日　よう出來たわいなア。石黑さま、この簪買うて、子供に遣つて下さんせ。
官兵　ヤア、また簪かいなう。
春日　否かえ。
ト又つんとする。
官兵　サヽ、買つてやる。時に、それを一本五兩づゝとは、あんまり高い物ぢや。なんと六本で九十匁位にはなるまいか。
彌吉　それも引合はないと、申して居りました。
春日　早う買うてやらしやんせ。ならぬかえ。忍ぶ袋、取つておぢや。
官兵　コリヤ〳〵、簪三十兩。
ト紙入れより金を出し
ツレ金。
彌吉　代銀、慥かに受取りました。
春日　簪の代は、濟んだかいなア。
利作　何もかも、すつぱりと濟みました。

官兵　此やうに金を蒔き散らして、甚だ氣に入るであらう。ナウ、春日野。
春日　嬉しいわいなア。
官兵　嬉しいか。嬉しくば身共も、ちつと嬉しがらすやうに。
春日　どうするえ。
官兵　奥へおぢや。抱かれて寐よう。
春日　エヽ。
官兵　ハテ、其方が云ふには、わしが云ふ通りに、なんでもオイと云うたら、抱かれて寐ようと云うたぢやないか。
春日　サア、それはなア。
官兵　ぢやに依つて、否とは云はれまい。サア／＼、抱かれて寐や／＼。
春日　待たしやんせ。
官兵　また待てと云ふか。
春日　斯うぢやわいな。お前と床入りするに、素面では恥かしい依つて、一つ呑んで行くわえ。
官兵　こりや有り難い。女子の酒に醉つたは、憎うないものぢや。

春日　そんなら、一つ呑むぞえ。
官兵　ソリヤ、酒になりました。
ト銚子杯、持つて來る。
春日　オヽ、此やうに小さい杯では。わしやいつそ、鉢で呑まうわいな。
トお竹、鉢を持つて來る。
皆々　こりや見事でござりませう。
春日　サア、一つつがんせ。
トお竹、つぐと飲む。
皆々　こりや、えらいものぢや。
春日　お褒めにあづかつていたみ諸白、も一つつがんせ。
官兵　コレ／＼春日野、其やうに呑んでもらうては、床入りが益體ぢや。ドレ／＼、おれが助けてやらう。
春日　イエ／＼、氣味の惡い事して下さんすな。さつぱりと呑んで上げるわえ。
ト呑んで官兵衛にさす。
官兵　アノ、これで呑むか。
春日　押へさんすか。
官兵　イヤ／＼押へぬ。おれが呑む／＼。
皆々　旦那、それで上がりますか。

トつぐ。

春日　ドレ、わたしが助けませう。

ト呑みにかゝる。

官兵　アヽ、コレ〳〵、さう呑んでもらうては、迷惑な者は、身共一人ぢや。銚子を彼方へ持つて行け。

春日　お前一人が、なんで迷惑ぢやえ。わたしも迷惑ぢや。

皆々　迷惑ぢや〳〵〳〵〳〵〳〵。

ト囃す。此うち官兵衛、酒を無理に呑んで大喜びの思ひ入れ。いろ〳〵をかしきこなし。

春日　それを肴にもう一つ、つがんせ。

トつがして呑みにかゝる。奥より綾絹太夫、出かゝり居て、この時ツカ〳〵と出て、春日野太夫の手をチッと留める。

綾絹　待たしやんせ。

春日　どなた様がと思うたら、綾絹さまかいなア。

綾絹　春日野さま、こりやマアどうした事でござんすぞいなア。いつぞやより毎日々々、大酒をさしやんすと聞いては居れど、この五六日一座せぬゆゑ、よもやと思うて居やんしたが、今と云ふ今、お前が其やうに大酒をさしやんすを見ては、夜番の太郎助どのが、云ひたい事があるぢやあらうが、人目の關があるゆゑに、チッと堪えて居やしやんすわいなア。そればかりか、司さまも、大切な物の紛失や、何やかやの事に、吾妻路さまも、親方さんの機嫌を損なうて、一向揚屋へござんす事もならず、わたしとても、お前方二人を、杖とも柱とも頼みに思うて、どうぞ、あなたを世に出したいと、明暮れわたしは殿様の事ばかり。それにマア、お前は其やうに、大酒さしやんして、命も體も續くものかいなア。春日野さま、お前はアノ禿の袖瀬は、コレ、可愛うないかいなア。數ならぬわたしが、傾城に似合はぬ、意見がましい事云ふのが腹立つなら、堪忍して、どうぞ酒は止めて下さんせ。拜みますわいなア〳〵。

春日　段々誤まり奉るぢや。綾絹さまの御意見、わたしや、返す詞もなかりけりぢやわいなア。シタガ、お前も勤めの身に似合はぬ、時代めくぞえ〳〵。君傾城の客を勤める祝儀と云ふは、酒でござんす。酒は百薬の長たりと云ふ事も、憚りながら、慮外ながら、存じて罷りありまする。ホヽヽ。なんであらうと、辛いも、悲しいも、一つたべると、さらりと忘れてしまふぢや。

鉢の酒を呑んで

ア、面白い〱。綾絹さま、お前も傾城に似合はぬ事云はずと、一つ呑ましやんせいなア。

ト醉ひたるこなし。綾絹急いて

綾絹　コレ、春日野さま。

春日　なんぢやえ。

綾絹　ほんに、あんまり呆れて、物が云はれぬわいなア。其やうな心にならしやんしたら、なんぼなと酒を呑ましやんせ。酒浸しになつて何もかも忘れてしまうたがようござんす。春日野さま〱、コレ、云ひたい事がモウモウモウ、たんとあるけれど、人目があつて云はれぬわいなう。エヽ、情ない、こなさまはなう。

ト思ひ入れ。

官兵　コレ〱春日野、綾絹太夫が意見、惡う聞きやんなや。酒を抑えて本性になつて、今宵は身共と抱かれて寐てたもや。コレ、頼むわいの〱。

ト肩を揉みながら、抱きつくを突きのけ

春日　オヽうるさ。又しても、抱かれて寐よ〱と、否で否でならぬわいなア。何所の國か廓へ來て、太夫を呼んで、抱かれて寐よと云ふやうな、不粹な事があるものかいなア。あの綾絹さまの、面白う酒たべてゐる中へ來て、意見さしやんすやうなもの、至らんぞえ〱。なんと云はれうが、かと云はれうが、酒でなければ浮世が渡られぬ。兎角浮世は斯うしたものぢやえ。チン〱。

ト云ひながら、それなりにこけて寢る。

官兵　コレ〱、春日野〱。爰に寐てよいものかいなう。風邪を引くわいなう。もう寐入つたか。ア、情ない。今夜も又お伽番ぢや。

利作　これから座敷を替へて、旦那、一つ上がりませう。

官兵　イヤ〱、酒に懲りたものぢや。太夫の醉の醒めるまで、奥へ行て。

皆々　ほんに、それがようござりませう。

官兵　綾絹太夫も、サア、奥へ。

綾絹　サア、皆様も一緒に。

トさんを取つて、春日野が枕にさし、裲襠を脱いで、裾へ着せて

春日野さま、風引いて下さんすなえ。

ト唄になり、皆々奥へ入る。合ひ方にて又直ぐに、利作、彌吉、お竹、その外、料理人男、下座の東の方へ出て、一時にチョンと手を打つ。春日野、むつくと起き、皆々と顔見合つて教へる。皆々、舞臺先へ出る。

春日野、矢張り、酔つたるこなしにて、奥を窺ひなが
ら
春日　野邊の細道、危ない。合點ぢや〳〵。
ト唄ひながら、あたりを窺ひ
皆々　春日野さま。
春日　シイ。
トこなしあつて
皆、大儀であつたなア。
利作　かねて申し合せし通り、金はたうとう皆此方へ、取
りたくりましてござりまする。
彌吉　簪代の三十兩。
ト金を出す。
たけ　これはわたしが花に貰うたので、禿衆が最前、拾ひ
ました金。
彌吉　これはこの間中、なんのかのと云うて、摺り下ろし
た花でござりまする。
利作　母者人を出しに遣うた二十兩。
ト出す。
たけ　あの前垂れの十兩。
ト金を出す。

太鼓　ハイ、これは先刻にお蒔きなされた金。
料理　皆、取り集めましてござりまする。
彌吉　貰ひ溜めから拾うた金から。
利作　一つに寄せたら、大方百兩あまりもござりませう。
春日　オヽ、ようして下さんした。嬉しうござんす。もう
これでよいわいな。
ト金廿兩ばかり紙に包み
折角、世話燒いて下さんしたお禮、些少ながら、皆樣の
中へ、取つて置いて下さんせ。
皆々　益體もない、これには及びませぬ。
春日　イヤ〳〵、ほんのそれが骨折賃。取つて置いて下さ
んせ。
皆々　左やならば、マア皆の中へ、お預かり申して置き
ませう。
春日　そんなら、預かつて置いて下さんせ。
ト内にて
才兵　これはしたり、仲居どもはどこへ行た。アレ、奥座
敷からお手が鳴るぞよ。
皆々　アレ、旦那樣の聲がする。
春日　ちやつと、人目にかゝらぬやうに。

皆々　春日野さま。
春日　皆さん、大儀でござんした。
皆々　後程、お目に。
春日　コレ。
ト思ひ入れあつて、皆々奥へ入る。春〻野一人殘り、右の金を取り集め、内懷より、縮緬の内がいを出し、この中の金と、一つにして居る所へ、橋がゝりより與九郎右衛門、親方の形にて出て來て、春日野太夫を見て
與九　春日野どの、爰にござるの。吾妻路が身請けの金、受取りませうか。
春日　これは御苦勞さま、ようお出でなされた。吾妻路さまの身請けの金、やう〳〵と手附け金程、拵らへましてござんす。後金の出來るまで、これを改めて、預かつて置いて下さんせ。
ト金を出す。與九郎右衛門、改め
與九　この金は大方、三百兩ほど。
春日　マアそれを、手付けに取つて。
ト與九郎右衛門、金をそこへ置き
與九　イヤ、ならぬわい。外に身請けの云ひ合せがあつて今宵中に六百兩、一度に殘らず渡る約束。この金を預かつても、後金の埒明かねば、此方も迷惑。シタガ、馴染みだけ、明け六ツまで待つてやらう。この金はマア、其方へ取つて置いて、後金の三百兩と一つにして六百兩、コレ、明け六ツの鐘がゴンと鳴ると、斷わりなしに外へやるぞや。
春日　そんなら今宵中に、六百兩の金を立てれば。
與九　吾妻路は、外へやる。
ト春日野、思案して
春日　與九郎さま、明け六ツまでに、その金殘らず立てませう。
與九　それに違ひないかや。
春日　合點でござんす。
與九　コレ、キッと、詞を番うたぞや。
春日　明け六ツまでに。
與九　耳を揃へて六百兩。
春日　心得ました。
與九　コレ、必らず待つて居るぞや。
ト合ひ方になり、與九郎右衛門、橋がゝりへ入る。春日野太夫、見送り

春日　合點でござんす。氣遣ひして下さんすな。金は拵らへて、キッと持つて行くぞえ……如何にお主の爲なればとて、皆様を頼み、やう／＼と拵らへたこの金。

ト金を取出し

みす／＼騙り同然に、人の金を掠め取り、報いも科もこの身に迫る、まだこの上に憂き艱難、つらい辛苦をせうかと思へば、恐ろしいとは云へ、お主の忠義の爲、天道様も、佛神様、お免しなされて下さんせいなア。

ト泣き落し、また氣を替へて

イヤ／＼、此やうな事、云うて居る所ではない。吾妻路さまの身請けの金、六百兩の都合には、マア三百兩、どうして拵らへたものであらうぞ。ハテ、なんとしたものであらうぞ。

ト思案のうち、癪が發つたこなし。

ア、、術ない。どうやら癪の業か、胸が痛い。ア、、こりやどうも術ない。

ト胸を擦り、痛むこなしあつて、手水鉢の側へ行き、柄杓を取つて水一口吞み、胸を擦りながら、胸苦しき體にて、また水を吞まんとして、含みし水を吐く。仕掛けにて、水仙の露除けへ血を吐く。パツとかゝる。

春日野、これを見て、悧りして飛びのき、あたりを窺ひ、そろ／＼立ち寄り、かゝりし血を見て

ヤア、こりや吐血とやら云ふ病か。人目にかゝつては。

ト手早に水を露除けへかける。仕掛けにて、血汐流れる。胸を擦りながら、こなたへ來て

ア、思へばこの筈でもあらうか。まだ命も續けば續く今の身の上。さぞ餘所目には、粹興で吞む酒と、さげしみ受くるも恥かしながら、新兵衞どのと云ひ交し、姉様の勘當請けて屋敷を立退き、爰や彼處とさまよふうち、司之助さまも同じ御流浪。どうぞお貢ぎ申さうと、思ふに甲斐なき男も浪人、詮方盡きてこの身を沈め、御難儀を救ひ申す憂き勤めも、女の道は破るまい。外の男に帶紐は解くまいと、座鋪ばかりはあじやら勤め、床で氣强う振るゆゑに、二度とござんす客もなし。揚屋からは毎日の附け屆け、親方様には叱られて、辛い悲しい辛抱も、お主の爲の苦界と、思ひ直せど情なや、帶紐解かぬ勤めには、深山の奥の櫻花、誰が問ふ人もないこの身。それよりフツと、思ひ附いたるこの大酒。あの春日野は、紋日、日柄を買うてやれば、よう酒吞んで面白いと、來る人毎に謳はれて、客を宿さん辛抱は、命替りと思へども

根が一雫も呑めぬ酒、今日この日の苦しみは、魔道の三熱、猛火の炎、劍を呑むとも斯うはあるまい。その苦しみも、お主の爲と思ひ詰め、人目なき間は聲立てゝ、泣き明かし、泣き暮らし、さても命はあるものかと、ほんにほんに一日も、泣かぬ日とてはなかつたわいなア。

ト大泣き。此うち始終合ひ方。一間の障子の内にて

千島　筆岡、皐月、綾絹太夫を、身請けしてやらうと思ふが、コレ、爰に金三百兩、親方とやらを呼びにやつて、亭主に相談させい。ア、、自らはいから酒にたべ醉つて、眠たうなつた。マア、三百兩の金は、爰に置かうわいなう。

トこれを聞いて、春日野、チツと仰向き

春日　あの聲は、慥かに千島さまと云ふ女大盡樣。綾絹さまの身請けとあらば三百兩、後金は館へ歸つても、何くらからぬ、あなたの身の上、此方は手詰めの。

トいろ〳〵と思ひ入れあつて

さうぢや。

トそろ〳〵一間の寢間へ入る。障子を靜かに開き、手を差し入れる。バツタリと、かけ打ち、春日野、財布を取つて來る手に小柄さいてある。ちやつと、引き拔き、手拭掛けの手拭にて卷き、財布を懷へ入れると、千島の局、障子を開く。

千島　そこに居るのは、誰れぢや〳〵。

春日　エ、。

千島　お傾城さうなが。

ト云ひ〳〵下りて來る。

春日　ハイ、わたしや春日野でござんすわいなア。

千島　ムウ、成る程、春日野どの、聞き傳へてゐる。ドレ、とつくりと近附きになりませう。

ト春日野が、左の手を見て

ヤア、この疵は。

春日　エ、、これは。

トちやつと振り放す。

千島　自が用金を盗んだ傾城がある。石黒どこに、皆、出合はんせ〳〵。

皆々　ハア、。

ト官兵衛、玄宅、才兵衛、皆々奧より出て

官兵　ヤア千島さま、あなたの用金盗んだとある

玄宅　傾城は何者。

千島　コレこの春日野。

玄宅　ヤア。
ト愕りする。
春日　アヽ申し、必らず麁相仰しやんな。大膽な、この金を盗んだなどとは、とんと覺えはござんせんぞえ。
官兵　さうであらう。なんの其方が。
千島　石黑さま、こなた、傾城の肩持つか。
官兵　イヤ、全く左やうではござりませぬ。
千島　左やうでなくば、ともくに詮議さつしやれ。
玄宅　何分此奴が懷中を。
ト春日野が懷へ手を入れるを
春日　なんのわたしが。
ト留める。
玄宅　隱すは猶、合點がゆかぬ。
ト無理に春日野が懷へ手を入れ、財布を引き出し
コレこの財布。
春日　エヽ、それは。
ト取りに寄るを
玄宅　なにを。
ト蹴り退け
千島さま、この財布は。

千島　オヽ、そりや自らのぢや。ても恐ろしい。
ト取つて、中を改ため
ヤア、こりやコレ、中に金は無うて、床の置き物と摺替へてある。
皆々　誠にこりや備前燒の布袋。
千島　いつの間に摺替へた。きつい練磨な盗人ではある。
春日　イエく、さうではござんせぬ。尤も金は、わたしが盗んだれど、中改める間も、摺替へる間も、たつた今の事なれば、その中には。
千島　イヤ、吐かすな。武將の乳人千島の局、廓へ來るのに、財布の中へ布袋を入れ置かうか。重々の慮外な女郎め。
春日　エヽ。
千島　サア、摺替へた金を、出し居らぬか。
春日　それでも、みすく。
千島　ソレ、二人とも、懷中を詮議。
兩人　心得ました。
ト春日野の懷を探し、紅縮緬の内がひを出し
官兵　コレこの金が丁度三百兩。
春日　イエく、その金は最前、お前を蕩らし、皆の衆

に。
官兵　ヤ、、なんと。
春日　イエ、わたしが金でござんすわいなア。
　ト取りに行くを、千島の局、金を取る。
千島　でも、盜人猛々しいと、こりや自らが金ぢや。
春日　そりや、さもしいお局樣。
千島　なんと。
春日　尤も、盜したはわたしが誤まりなれど、財布の中の
金の事は、知らぬ、存じませぬ。まだその金は、わたし
が身を削り、命を縮めて、拵らへた金、それを取られま
しては。
千島　なんの取らう。こりや自らが金を、われが摺替へた
のぢや。それを此方へ取返すのぢやが、なんとした。
春日　イエ、それでは、それでは。
千島　わが身の金か。
春日　アイ。
千島　なぜ盜みしやつた。
春日　エイ。
千島　こりや自らが金ぢや。摺替へぬ物が、なぜ財布の中
に布袋があつた。

春日　サア、それはナ。
千島　サア。
春日　サア。
千島　サア／＼。
春日　サア。
千島　生盜人め。賣女めが。ソレ兩人、成敗。
兩人　ハア。
　ト春日野を引きつける。
官兵　イヤ、可愛さが餘つて憎さが百倍。ようおれをこれ
まで騙かつて、金を取りあがつたなア。その報いが來て
この態、身共をむがうしたがよいか、これがよいか。
玄宅　玆な盜人傾城め。
　ト兩人寄つて、打擲する。
千島　もうよい／＼。司之助に由緣の奴。これで少しは痛
へが下りた。この金も自らが、たぼ／＼して置きませ
う。
　ト金を懷へ入れる。
春日　どうぞその金を。
　ト取りに行くを、叩き退け
千島　オ、怖。この金を矢ッ張り。

兩人　イヤ、盗人めが。
ト引きつけろ。
春日　エ、、何くらからぬ身を以て、現在わしが。
千島　なんぼあつても金は欲しい。自らはきつい好きぢやわいなう。
春日　エ、、こなたはなう。
千島　なにを。
ト蹴り退け
サア、これから奥で。
官兵　又の御酒宴、二人とも奥へ。
ト唄になり、千島の局、兩人を連れ、奥へ入る。春日野、後に殘り、いろ／＼、こなしあつて
春日　エ、、思へば／＼胴慾な千島さま。現在わたしが金を、みす／＼知つてあれど、さうと云はれぬ盗みの誤まり。おやと云うて、折角心を盡した吾妻路さまの身請け。こりやマア、なんとせうぞいなア。
ト大泣き。橋がゝりより、太郎助、出て來て
太郎　女房春日野。
春日　ヤア、こちの人。コレ、吾妻路さまの身請けの金を拵らへたれど、千島の局に。

太郎　氣遣ひ致すな、金は出來た。
春日　エ、。
太郎　禿の袖簾は。
春日　娘のお袖は奥に。
太郎　現在女房は傾城、娘は禿に仕立て、我れも廓の番人と、親子三人、身を凝らした甲斐あつて、若殿は元より身共までも、勘當赦さるゝわやい。
春日　エ、、そりやどうして。
太郎　娘が生れた年月は。
春日　辰の年、辰の月、辰の刻の誕生。
ト此うち、千島の局、障子明け、聞いて居る。
太郎　サア、その辰の月日時の生れの娘ゆゑ。
春日　エ、、なんとさしやんす。
太郎　ハテ、娘の。
春日　エ、。
ト太郎助、フト千島の局と顏見合せ、障子ピツシヤリさす。
太郎　イヤサ様子は後に。
春日　そんなら、わたしは。
太郎　娘を大事に奥へ行て。

春日　お袖にも喜ばしませう。

太郎　何も知らずに。

春日　エヽ。

太郎　歸參が叶ふ様子をちやつと。

春日　アイ／＼、嬉しうござんす。

ト春日野、いそ／＼奥へ入ると、太郎助、跡に思ひ入れあつて、奥より人音する。ちやつと、千島の局出て

千島　ちらりと聞いた禿の袖彌は、春日野が娘、辰の年月揃ひし生れ。彼奴が生血を取らば目に。ムウ、よし／＼。時に忘れられぬは司之助。今宵綾絹と忍び合ふ約束の、文も大方

ト奥を見て

こりや慥かに

トこなしあつて燭臺の火を殘らず消すと、奥より綾絹太夫出て

綾絹　アヽ、こりや灯が消えてある。オヽ、幸ひ／＼。文といひ、今お知らせ申したら、殿様に忍び合ふに、暗うて人目にかゝらいでよいが、又お顔が見えぬ。アヽ、辛氣な事ではある。

ト此うち、千島の局、綾絹が側へ探り寄つて

千島　コレ、綾絹。

綾絹　エヽ。

ト悄りする。

千島　コレ、悄りする事はない。千島の局ぢや。灯を消したは、其方に、司之助を逢はしてやらうと思うて。

綾絹　そんなら千島さま、お前が。

千島　なんと粹で、あらうがの。

綾絹　エヽ、忝なうござんす。

ト喜ぶ。千島の局、綾絹が手を取つて、下括りを外す。

アヽ、これは。

千島　やかましい。

ト手拭にて、猿轡を嵌め、障子屋體へ探り寄つて、内へ綾絹を抛り込み、障子をたて

マア、これでよいワ。

ト奥より司之助、探り／＼出て

司之　太夫綾絹、其方が知らしやつたに依つて。

ト此うち、太郎作出て、司之助を捕へ、囁やく。千島の局、司之助を尋ね、探り寄る。此うち、太郎作、障

子の内の綾絹を解いて囁き、奥へやり、太郎助司之助と千島の局の眞中へ入る。

千島　司之助さま。

司之　千島のお局さま。

千島　そんなら自らと云ふ事を

司之　エヽ、知つて居りまする。最前のお心ざし、あんまり嬉しさに、お禮を申さうと思うて。

ト無性に喜ぶ、太郎助、司之助に又囁く。

ヤア、そんなら按摩になつて、大坂屋へ行く。

千島　イエ、なんと云はしやんす。あんまり嬉しさ。

ト太郎助、千島の局を抱へ囁くうち、司之助、走り〳〵門口へ出て、こなしあつて向うへ走り入る。

エヽ、なんぢや、精一杯逐はう。そりやほんまかいな。

ト太郎助また囁く。

なんぢや、天にあらば比翼の鳥、地にあらば連理の揺粉木。そりやきつい嘘。お前はあの可愛らしい綾絹と、云ひ交してござるもの。なんの自らがやうな者を。

トぴんとする。太郎助また囁く。

なんぢやえ。綾絹はほんの手かけぢや。そりやほんまかえ。

ト此うち、太郎助、千島の局を、後から抱きかゝへ、懐へ手を入れる。千島の局、こなしあつて。

オヽ、こりや何をなさるゝぞいなア。

ト太郎助、囁く。

雪の肌を擦る。オヽ、こそばいやいな〳〵。

ト太郎助、また懐へ手を入れる。がさ〳〵と體を掻く。

アイタヽヽ。コレ申し、ちつと爪をお取りなされいなア。

ト太郎助また手を入れる。

アヽ申し、其やうに掻きなさるゝと、ぴり〳〵して、こちや否々。

ト胸に手を當てる。此うち最前の守り袋を出す。

そりや自らが見せた起請。

ト太郎助、守り袋を取つて、我が懐へ入れて、千島の局を後抱きにグツと抱きしめる。

アヽコレ、息がはずむ。ちつとゆるめて〳〵。

トまた太郎助、囁く。

エヽ、早う息がはずむやうに抱いて寐たい。堪らぬ〳〵とは、自らも胸がどき〳〵、此やうに。

ト手を揉つて
ヤア、司さま、お前はマア恰好に似合はぬ、このマア、
手の荒れてある事わいなう。
ト太郎助、こなしあつて囁く。
勘當の身の上ぢやに依つて、水を汲んだり、飯も炊いた
り、それで此やうに手が荒れる……アヽ、おいとしや／＼
なア。
ト太郎助、囁く。
なんぢや、この手で頭を叩く……そりやなんで。
ト太郎助囁く。
なんぢやえ、心中ぢや。アノ自らが心を疑うて、心中を
見せい……申しいなア。お前の疑ひの晴るゝ事なら、例
へ頭の一つや二つ、くらはされても、堪えますわいな
ア。
ト太郎助うなづき、けんのみにて頭をくらはす。千島
の局、恟りして
アイタヽヽ。こりや手ひどい叩きやう。頭がしゆう／＼
云ふ。
ト下にゐる。太郎助また囁く。
なんぢやえ。心中ぢやが、痛いか／＼とは……イイエ、

痛うない／＼。
ト頭を抱へて居る。
太郎 そんならもう一つ。
トまた毆る。頭を抱へる。
痛いか／＼。
千島 イヽエ、なんともない／＼。
ト泣いて云ふを。
太郎 そんなら斯うぢや。
ト滅多無性にくらはす。千島の局、堪えかねて逃げ廻
るを、追はへ廻つてくらはす。よろしくあると奥よ
り
官兵 お局さま、千島さま。
ト云ひ／＼手燭を持つて出て、顔見合せ
ヤア、お局。
千島 司さまはえ。
太郎 知らぬわい。
ト手燭を叩き落す。千島の局、ハアと泣き落す。よろ
しく下に居る。チヨン／＼。返し。
造り物、三間、女郎屋二階、下座の方に障子、東の

方に上がり口、下は三尺程の板塀、橋がゝりへ門口、大坂屋と云ふ暖簾を掛け、禿みどり、小すゐ、内着の形にて、お千度打つてゐる。二階、東の方に、初風、女郎の形、内着にて鏡臺に向ひ、身じまひして居る。西の方の炬燵に、吾妻路太夫、傾城内着の形、亂れたる髪にて、後向きにて炬燵にあたりながら、文を書いて居る。この見得、合ひ方にて、道具とまる。

小す　コレ〳〵みどり、わしやしんどいわいなう。ちつと休まうではあるまいか。

みど　小すゐとした事が、なんのしんどい事がある。親方樣の機嫌が直つて、太夫樣が早う揚屋へ、出やしやんすやうにするお千度ぢやないか。

小す　サア、それはよう知つて居るけれど、マア、ちつとの間休んでから。

みど　休んでゐるうち、親方樣の目にかゝると又、呵られるわいなう。早うおぢや。

小す　ほんに忙しない、なんぢやぞいの。

トまた兩人、お千度打つてゐる。ト二階へ、與九郎右衞門、出て來て

與九　ヤイ禿ども、また裏へ出て何してけつかる。三味線の稽古もしをらいでな。

トみどり、小すゐ、内へ入る。吾妻路、文を隠し、俯向いて居る。

コレ初風、まだ身じまひは出來ぬかいの。雛鶴屋からも柏屋からも借りに來て、人橋がかゝるがな、ならず者に相手になつて、司之助が噂して居るのか。ぺら〳〵と埒の明かぬ。早う行かぬかいの。

初風　アイ〳〵、もうしまひでござんす。着物着替へて、行くばかりぢやわいなア。

ト鏡臺を片附ける。

與九　コリヤ吾妻路。

吾妻　アイ。

ト額を上げる。

與九　オヽ、よい態ぢや。吾妻路と云ふ全盛の太夫が間夫狂ひ、さうして方々の揚屋からは、客を振るの麁末にするのと屆けられ、この親方には櫛をよけ、頭の道具も、何もかも、皆質屋へ居續けさせ、火の附くやうな亂れ髪、わりや恥かしうはないか。よい蟲ぢやわい。此やうに、二階へぶち上げられて居ながら、炬燵矢倉と毎日首引

き、外の女郎に惡智惠をかうてくれなよ。初風も此奴を見習ふなよ。イヤモ、人間も恥を知らぬやうになつてはしまひぢや。ほんに、面を見るも腹が立つわい。

ト煙草盆を引寄せる。

吾妻　段々のお腹立ち、御尤もでござんす。わたしも此やうに、二階にばかり居りまするは、大抵や大方、苦しい事ぢやござんせん。この苦しみに替へて、なんの司さまの事を思ひませうぞ。ふッつりと思ひ切つて居りまする。此やうに引いて居りまして、親方様のお役に立たぬ身の辛さ。どうぞ端へ下ろしてなりと、お遣ひなされて下さんせいなア。

與九　イヤ、そりやならぬ。

初風　それでも吾妻路さまの、あのやうに云はしやんすのは、よく／＼の事ぢやと思うて、親方様、端へなりと下ろして上げなさんせいなア。

與九　コリヤ、われまでが、其やうな事云ひ居るかな。端へ下ろしてよければ、疾から下ろして勤めさすけれどな、端へ下ろしたらわれが氣儘に、司之助に逢はうと思うて、さう吐かすと云ふ事は、この與九郎が見拔いてゐる。

吾妻　なんのマア、其やうな事を。

與九　ハテ、云ふないやい／＼。その位な事に氣が附かいで、大勢の奉公人が使はれるものか。われがやうな、ならずでも、どう云ふ事にや、桔梗屋の春日野が、われを請け出すと云うて、明け六ツまで金の切端。それが濟まねば外へ遣る口もある。それまではその通り、端の事は思ひも依らず、階子から下へ下ろす事はならぬ。エヽ、死太い女郎ではある。

ト二階の上がり口より女房おたつ、花車の形にて出て

たつ　こちの人、桔梗屋から賴母子の掛け銀取りに來た。早うやつたがよいわいな。

與九　それ／＼、ならずにかゝつて、とんと忘れた。ドレドレ、持たしてやらう。初風も早う行かぬか。

たつ　サア／＼初風、早う着替へて、行きやえ。

ト兩人、喚きちらして、下へ下りる。合ひ方になり、初風、吾妻路が側へ行て

初風　吾妻路さま、春日野さまや綾絹さまに、なんにも用はござんせぬかえ。

吾妻　あるわいな。折角書いた文を、親方面めが爰へ上がつて、ツイ皺にしたわいなア。

ト云ひながら、文を封じて、上書きをして
お世話ながら春日野さまへ、屆けて下さんせ。

初風　アイ〳〵。

ト文を取り、懐へ入れる。

吾妻　コレ〳〵、着替へる時、落して下さんすなえ。

初風　合點ぢやわいなア。行つて來う〳〵。

ト下へ下りる。

吾妻　今日は雛鶴屋に、大寄りがあると聞いたが、行かしやんしたか知れぬ。それにつけても、よい首尾がなうて殿樣にも、いつぞやより、とんと逢はぬが、どうして居やしやんすやら。ほんに儘ならぬ浮世ぢやなア。

ト唄になり、また文を書きにかゝる。合ひ方になり、花道より司之助、頭巾、袴、脊蟲座頭の形にて、後より、座頭せく市、頭巾、袴、着流しにて附いて出て

せく　申し〳〵殿樣、お前はほんまに、御勘當がゆりましたかえ。

司之　ゆりた段か、今では大名の若殿樣ぢや。それに、二階に押込められてゐる吾妻路太夫、勘當のゆりたも知らず、恨んでゐるであらう。そこへ勘當がゆりた、喜べと、なり込んでは、いつもある格で、面白うないでないか。

せく　左やうでござります。

ト云ひ〳〵本舞臺へ來て

司之　そこで、わが身の頭巾や袴を借りて、せく市で來るワ。二階へ上がるソ。吾妻路が悄りするワ。そこで捕へて口舌するワ。それから何をせうも知れぬ。なんと面白いではないか。

せく　面白うござりますとも。

司之　ソリヤ、約束の。

ト懐より、皺になつた、紙を出してやる。

せく　また紙かえ。

司之　雛鶴屋へ持つて行て、二角ぢや〳〵。

せく　エヽ、忝ない。

ト司之助、座頭になり、せく市に囁く。大坂屋の門口へ行て、せく市、附け聲。

せく　ハイ、せく市でござります。

ト内より

たつ　ようござんした。入らんせ。

せく　二階へ廻つても、大事ござりませぬか。

ト内より

たつ　大事ないわいの。こな樣の事ぢやもの、早う行てや

らんせ。
せく　ハイ〳〵。
　ト立ちながら、せく市云うて、橋がゝりへ入る。司之助、こな、あつて、二階へ上がる。吾妻路、悔りして
吾妻　ヤア、お前は。
　トいろ〳〵思ひ入れ。
司之　コレ……ハイ、せく市でござります。
吾妻　ようござんしたなア。その形わいなア。
司之　マア〳〵、變る事もなうて、わしも嬉しい。さぞ氣詰まりであらうの。いつぞやより、よい首尾がなうて其方の顏見ぬに依つて、大抵や大方、案じた事ではないわいの。
吾妻　サイナ、内も外も不首尾たら〳〵。此やうに押込められてゐるうちも、お前の事ばかり、片時忘れぬこの吾妻路。よう顏見せて下さんした。逢ひたかつたわいの逢ひたかつたわいなう。
司之　道理ぢや〳〵。シタガ、喜びや。其方を早う請け出してやると云うて、春日野が一人、氣を揉んで、世話やいて居るわいの。
吾妻　忝なうござんす。嬉しいぞえ。併し、其やうな事を綾絹さまが聞かんしたら、腹を立てさんしよぞえ。
司之　イヤ〳〵、綾絹も、其方の事ばかり世話やいて居るわいなう。
吾妻　ほんに嬉しい心立てぢやな。わたしが姉妹分になつて、二人して、お前様をいとしぼがるが、無理ぢやござんすまいが。
司之　無理でないとも。
吾妻　久し振りぢやなア。下から誰れも來ぬうちに、ちやつと炬燵へあたらんせんか。
司之　おれは先刻にから、あたりたうてならぬわいなう。
吾妻　爰へござんせ。
　ト兩人、炬燵へあたる。
オ、をかし。お前のせく市さまの眞似してござんした、この背中のはなんぢや。
司之　わしがこの脊蟲か。脊蟲の正體は、これぢやわいの。
　ト袂より、風呂敷包みを出して見せる。
吾妻　そりやなんぢやえ。
司之　こんな物ぢや。
　ト司之助、風呂敷を解いて、紙帳を出し
吾妻路、これを見や、この紙帳は、其方や、綾絹がおこ

した文を集めて、我れら手細工の反古張りの紙帳、其方衆が戀しい時は、駕丁の嘉助が二階へこれを持つて行て樂しんで居るわいの。

吾妻　ほんに、大名の若殿に似合はぬ、よう拵らへさんしたなア。

司之　なんと、伽羅であらうが。そこらへ釣つて讀んで見や。

吾妻　そんなら爰へ釣つて、讀んで見ようかいな。

司之　ドレ／＼、わしが釣つてやらう。

ト兩人、紙帳を釣つて

アレ／＼、こちらの文を見や。花の三月雛祭りに、公用に付けて、わしが行かずに居たれば、取分けてこの節句は雛祭りで、女夫事をする大事の祝ひ日に、なぜ來てくれぬと、恨んでおこした文ぢや。

吾妻　ほんに、其やうな事がござんした。アレ、あの文は慥かに綾絹さまの遣らしやんした文。なんぢや。過ぎし御見の折柄は、よい首尾にて、しか／＼とお目にかゝり御嬉しく存じまゐらせ候、未だ／＼その移り香のみ、明暮れ樂しみまゐらせ候。ほんにあんまりな。

ト腹立てゝこなし。

司之　其やうに腹立てやんな。今宵はあの文の文體のやうに、しみ／＼と逢ふから、紙帳の內へ。

吾妻　親方樣の目にかゝらぬやう、この內にて、話さうかえ。

司之　過ぎし揚屋の全盛を、思ひ出せば夢うつゝ。

吾妻　その越し方を思ひ出し……殿樣。

司之　吾妻路。

吾妻　昔の夢を。

司之　さらば見ようか。

ト兩人、紙帳の內へ入る。チヨン／＼。返し。

元の揚屋になり、上の方に、主計頭、控えて居る。眞中に、千鳥の局、禿の袖彌を引きつけ、懷劍にて突かうとして居る。春日野、これを留めてゐる。入間玄宅、その外侍ひ大勢、控えて居る。この見得よろしく、バタ／＼にて、道具とまる。

主計　千鳥のお局、すりや、その小兒が、辰の年月揃ひし生れとな。

千鳥　現在、親の口から吐かしたが、慥かな證據。義輝公の御用に立つは大果報者。それぢやに依つて自らが、い

ま肝の臓の血汐を取つて」

ト懐劍振り上げるを、春日野、よろしく留めて。

春日　イヤ〳〵、その子は、なんぼでも殺さぬ〳〵。可愛さうに、よたけもない者の、生血を取らうとは、そりやあんまり無得心。

千島　なにを盗人女郎めが。様子を聞けば、うぬらは、齋藤家の家來ぢやげな。勘當請けてその態。いま餓鬼を殺して御用に立たば、主人への忠義、有り難いと思ひ居らう」

ト突き放す。主計頭、中へ割つて入り

主計　ムウ、すりや千島のお局さま、主人の御用に立てば、忠義でござるかな。

千島　忠義とも〳〵。願うてもない有り難い事。自らなぞがその産れなら、どうぞお願ひ申して、命を差上げますわいなう。

主計　さては、いよ〳〵忠義に一命を。

千島　オヽ、くどい。主計さまとした事が、知れた事を、しつッこい。

主計　御苦勞ながら、千島どのには、あれへ。

千島　アヽ、むごい目見るは嫌なものなれど、これもお主の爲なら、せう事もなし。

ト云ひ〳〵、席の側へ下りて

ナア、その女郎をちやつと爰へ。

主計　千島どの、早くそれへ直らつしやれ。

千島　なんで自らが。

主計　御意。

千島　なんと。

トこなしある。

主計　其方、この年月、君の御乳人と、役を高に威を振ひ、剩へ御眼病に用ゆべき、辰の年はおのれでありながら餘人を尋ね、身を遁がれんとすれども、天命遁がれず、今日今宵、絶體絶命、尋常に血汐を差上げめされい。

千島　アヽ、コレ〳〵主計どの、そりや何を云ふのぢや。妙藥の血汐はあの餓鬼め。それに自らを。

主計　イヤ、御用に立つは千島の局、其方が血汐を用ゆる。それへ直れ。

千島　イヤ〳〵、益體ない。自らが産れは辰ではない。巳。イヤ、オヽ、しかも丙午ぢや。丙午の産れゆゑ、殿御に緣が遠い。それに辰の年とは阿房らしい事ばかり。

太郎　イヤ、その證據は爰にある。

ト太郎助出て、紙を開き

辰の年、辰の月、辰の刻に誕生の女子壽命長久。

千島　ヤア〳〵、面妖な。

ト守より書附けを出して見て

情ない。起請は爰にある。そんなら、その書附けと取違へたか。ムウ。

主計　かゝる證據の出るからは、最早遁かれぬ。尋常に覺悟して

春日　そこへ直らしやんせ。

千島　サア、それは。

皆々　サア〳〵〳〵、なんとぢや。

千島　エヽ口惜しい。隱し負ふせた我が身の年を、取違へた守が證據になつて、退引きならず、この場に於て、武將のお役に立てねばならぬか。エヽ、殘念な。

主計　時刻が移る、衣類剝げ。

侍二　ハア、衣類をお脫ぎなされ。

ト兩人、千島が側へより、兩方より捕へ、脫がしにかかる。

千島　何するのぢや。姬御前を捕へて荒々しい。慮外すると、爲にならぬぞ。

太郎　エヽ、脫がつしやれ。

ト無理に衣類を脫がす。千島の局、長襦袢になり

尋常にそこへ直つた。

ト蓆の上へ附き据ゑる。

千島　オヽ、なんぢやの。蓆の上へ突き据ゑて、暮の餠かなんぞのやうに。

ト玄宅、立ち上がり

玄宅　イザ、胸をお開きなされ。

千島　コリヤ坊主、何するのぢや。

玄宅　墨打ちする。

千島　なんぢや、墨打ちする。自らを材木のやうに思ひ居るか。

侍ひ　立たつしやれ。

ト兩方より、手を取つて引ッ立てる。玄宅、向うへ廻り

玄宅　肝の臓は脊に附き、九の圖にあたり、鳩尾より二寸程下。

ト玄宅、筆にて墨打ちする。

千島　ヤイ玄宅め、おのれ、いや法眼になつてけつかるは誰れが庇ぢやと思ふ。この千島が庇ぢやぞよ。義輝公御

風邪の折節、お頭痛の藥に疝氣の藥を盛つて、足の上がる所を、自らが口一つで、繋いで置いたぢやないか。恩知らずの、ずく入め。おのれ、法眼返しくされ。

太郎　時刻が移る。仰のけに直つた。

千島　なんぢや。女子のおれに、仰のけになれ。コレ、今わしや仰のけになるが、司之助居やらんかいなう。

春日　たんの阿房らしい。

千島　何が阿房らしい。なめくさりめ。アタいま〳〵しい。アタ腹の立つ。アタ〳〵〳〵、アイタ〳〵。コレ、癪が發つて來たわいの。癪の發つた者がお役に立たれまいかの。

玄宅　お癪が發つたら、ドレお脈を。

ト脈を見る。

千島　ア、切なや、癪が發つてあらうがの。お腹が、アノ、しやちばつて居やうがの。

玄宅　イエ〳〵、なか〳〵お脈は大丈夫な儀でござります。

千島　何を吐かす。

ト玄宅の頭を叩く。

主計　時刻が移る。

太郎　覺悟さつしやれ。

ト詰めよる。

千島　こりやモウ堪らぬ。

ト逃げうとするを、主計頭支へる。逃げ廻るを太郎助、捕へ、蓆の上へ載せ

太郎　南無阿彌陀。

ト押へて、腹へ庖丁突き立てる。

千島　ア、。

ト苦しみ、太郎助に、むしやぶりつく。太郎助、上へ乘り、抉ると、玄宅、壺を持つて來て血汐を請ける。ト橋がゝりより、バタ〳〵にて、司之助、吾妻路、出て來る。後より與九郎右衛門、附いて出る。

春日　ヤア殿樣、吾妻路さま、お二人のお身の上は。

司之　サア、聞いてたも、紙帳の内で寐て居たを見附けられ

吾妻　この通りに親方樣が。

與九　身請けの金、受取らうか。

春日　サア、その金は。

主計　この場の褒美。

ト金財布を投げ出す。

兩人が勘當は、主計頭がなだめ得させん。

太郎　エヽ忝ない。ソレ女房。

ト春日野、金財布を取上げ見て

春日　こりや最前のわたしが金。

ト官兵衞、駈け出て

官兵　イヤ、その金を。

ト取りにかゝる。主計頭、支へ、立廻りあつて

主計　この金に心をかける石黑、さては局と心を合せ、お納戸金の盗賊。

官兵　それ知られたら、うぬ。

ト主計頭に、切つてかゝる。なにを卜刀もぎ取り、二重舞臺より下へ、見事に投げろ。與九郎右衞門、主計頭と、立廻り、官兵衞、太郎助と、立廻りよろしくあつて、見事に押へ

太郎　捕つた。

トよろしく、この途端、　　幕

五つ目

不破の閑居の場
村路隱れ家の場

役名＝柿木金助實ハ八代簀八寛。石谷歩左衞門。同女房、おふじ。不破伊達五郎。肝入り十右衞門。遣り手、くま。盗賊、ころの三藏。同、西條九介。同、木ねりの定八。同、熟柿の權。藥屋長命。足利國姬。傾城吾妻路。老女、村路。

造り物、平舞臺、黑幕、板松、眞中に、不破の閑家に、板庇、荒れたる模樣、在鄉唄にて幕明く。花道より、代官、羽織、野袴にて、家來、連れ出て來る。

ト橋がゝりより、庄屋に百姓大勢、附き添ひ出て

庄屋　これはお代官樣、御苦勞に存じまする。

代官　其方達は、所の百性ともぢやな。

百姓　左やうでござりまする。

代官　この度、足利武將、當美濃の國へ御下向につき、今の龍興公、御饗應の爲、鷹野の催ふし。正明け六ツ時より、武將のお成り。それゆゑ、この頃より、鳥見餌蒔き

の役人を出し、所々出茶屋を立て並べ置けば、いづれの村も隨分、粗忽なきやうに、火の用心を第一に申しつくるぞ。

庄屋　畏まりましてござりまする。明日、明け六ッから鷹野とは、殿樣も御苦勞でござりまする。

百一　この冷える時分に、野山を鷹野狩りぢやと云うて、駈け歩かうより、チッと內に居て、炬燵へてもあたつて居る方が、よささうなものぢやなア。

百二　ソレイノ、この冷では、てつきり雪であらうに、鷹野狩りとは、冷たい思ひつきぢや。

庄屋　サア、おいらも、殿樣の鷹狩りゆゑ、支配の野山を掃除して、隨分鳥を集めるやうにして、雀一疋貰ひはせまい。これがほんの、犬骨折つて鷹に取られると、云ふ譬へであらう。

代官　ヤイ／＼、そりや何を云ふ。大切なる武將の鷹野、役にも立たぬ徒口きかずと、申しつけた掃除萬端、心づけい。

皆々　ハヽヽ、畏まりました。

代官　最早、暮れ相なれど、大切なる明日のお鷹野、夜通しに樽井青墓、赤坂までも順檢せん。所の者ども、案內いたせ。

庄屋　それは御苦勞でござりまする。

百姓　夜通しの順檢とは、大儀なものぢや。庄屋どの、お供さつしやれ。

庄屋　合點ぢや。申し、お代官樣。

代官　如何にも。家來、參れ。

ト唄にない、代官、庄屋、百姓皆々、臆病口へ入る。

ト向うより、石谷歩左衞門、病氣の體にて、丹前を打ちかけ、綿にて頭を包み、刀を風呂敷にて包み持つて出る。後よりおくま、十右衞門、肝入りにて男附き

くま　コレ／＼歩左衞門どの、太夫が後金は、どうするのぢやぞいなう。

十右　旅がけのせいらく。さう／＼は逗留はなりませんぞや。

歩左　サア、よごんすわいの。

ト云ひ／＼皆々、本舞臺へ來る。

おれも、見やんす通り、打臥して寢て居る病氣なれど、一旦番うた詞、今は浪人でも以前は

くま　石谷歩左衞門どの、それ知つて居るゆゑ待つた太夫が後金。連合ひも不時な死やうさつしやる。最も半金は

済んである、わしが抱への吾妻路。

十右　駈落ちして、この美濃へ來たを嗅ぎ出すは、この十右衞門、判先の奉公人、司之助と云ふ蟲附き、後金が埓が明かにや、京へ連れて去んで勤めさゝにやなりませぬ。

歩左　サ、それぢやに依つて、熱が浮かいで、術ないけれど、樽井へ行つて、金拵らへて渡すつもり。病氣と云ふものは叶はぬもの。斯う物云ふさへせぐるしい。

くま　此方もせぐるしい。飯代出して斯う引ッ張られてゐて、つまるものかい。

十右　是非金を今夜中に貰ふか、ならにや吾妻路を連れて去ぬか、二つ一つの返事次第ぢや。

歩左　ハテ、吾妻路どのを渡す程なら、金拵らようとは云はぬ。コレ、恥を云はねば理が聞えぬと、金を拵らへるは、コレこの刀。

二人　その刀を、どうするのぢや。

歩左　以前拜領の折紙附き、例へ命は絶るとも、滅多にサア、放すまいと思ひ詰めたれど、吾妻路どのゝ後銀三百兩の金才覺、樽井の町へ持つて行て。

ト思ひ入れあつて

違ひはない。長うと云はぬ。今宵夜半までに、キッと拵らへよう。

くま　そんなら夜中までに銀が

十右　出來るか。

歩左　夜中を合圖に、此方の內へ。

十右　どうで今夜も泊らにやならぬ。

くま　夜中が鳴ると直ぐに

十右　取りに行くぞや。

歩左　念には及ばぬ。病みほうけても石谷歩左衞門。

十右　面白い。そんならキッと。

くま　夜中までに。

歩左　マア、宿へ行て、待つてゐたがよい。

ト合ひ方になり、兩人、男衆、向うへ引返し入る。歩左衞門、思ひ入れあつて

歩左　いつぞや宇治に於て、姫君を奪はれし身共が越度、神武の簾諸ともに、詮議せんと心を碎く折柄、吾妻路どのゝ駈落ち。樣子を聞いて世話するうちも金の工面、御主人より拜領のこの刀、命より惜しい。

トちつと見て

四百四病の病より、貧程つらいと云ふに、煩ひと金の手詰め。兩方一時に。マ、足利の身內にて、小身なれど歩

左衛門が、よつくも侍ひ冥利に盡きたか。チエ、。
ト刀を持つて身を慄はし泣く、ト此うち始終合ひ方。
橋がゝりより歩左衛門女房おふじ、小提灯下げ出て來て、花道へ行く。歩左衛門、これを見て思ひ入れあつて、右の刀を差し、こなしあつて

歩左　コレ〳〵。
ト呼びかける。おふじ、恟りして
ふじ　エ、、わたしが事かえ。
歩左　如何にも女中、貴樣の事ぢや。マア、待ちや。
ふじ　わたしを呼びかけさしやんして、なんぞ用がござんすかいなア。
歩左　用があるかとは知れた事、酒手置いて行け。
ふじ　エ、、そんならお前は。
歩左　追剝ぢや。
ふじ　エ、、それは情ない。わたしはちつと人を尋ねる者でござんすれば、金は持つて居ませぬ。もう料簡して下さんせ。心が急きますれば。
ト行きかける。
歩左　コリヤ、待て。
ふじ　エ、。
歩左　金がなけりや、褞袍脫がす。キリ〳〵うせう。
トよろ〳〵行て、おふじが首筋持つて、本舞臺へ戻る。
ふじ　エ、、そんならどうでもわたしを。
歩左　オ、、剝ぐのぢや。
ト首筋取つて引上げ、互ひに顏見合せ
ふじ　ヤア、お前はこちの人。
歩左　おふじか。
ふじ　でも、思ひがけもない。
歩左　そちや、どこへ行た。
ふじ　どこへ行たどころか、病人だてら、お前は〳〵。
ト胸倉取つて、下に置く。
歩左　コリヤ〳〵、そないにすな。ふらついて、目が舞ふやうな。
ふじ　それ見やしやんせ。熱の浮かぬ大事の病人、チッと内に寢て居やしやんしても、わたしが心遣ひ。それにマア今の體裁。どう云ふ事で追剝と、道ならぬ思ひつき。尤も武士が浪人すれば、切取り强盗もある習ひなれど、お前はコレ大切ないお姬樣の詮議、神武の旗も取返し、再び歸參せねば、武士が立ちますまいがな。
歩左　女房、其方が手前も面目ない。今度都へ駈落ちして

來た吾妻路どの、司之助さまと云ひ交してござるゆゑ、姫君の家來の身共が、どうも見捨てられぬは浮世の義理。それで世話して匿まふうち、親方に見附けられて、金の催促。

ふじ　煩らうてゐるお前の心遣ひ、それでわたしも、及ばずながらとも〴〵に。

步左　サ、その金の手詰めが、今宵になつて、コレこの刀を賣り拂ひ、後金の才覺と其方が留主の內を出で、爰まで來たが心の未練、御主人より拜領なれば放し惜しう思ふ折柄、女子一人、其方とは知らず呼びとめたは、フッとした出來心、もし金を所持すれば、非道なれども手にかけて、この刀を放しとむないばつかりに。

ふじ　出かしやんした。步左衞門どの、人を殺しても、お主の拜領の刀を離さぬとは、流石は侍ひ、それ聞いてわたしも嬉しうござんす。心遣ひさしやんな。その金は、わたしがちつと心當りがあれば、拵らへて上げませうわいな。

步左　ヤア、なんと云ふ。其方が心當りがあつて拵らへるか。

ふじ　アイ、つい拵らへます。

步左　忝ない、が、そりやどうして。

ふじ　サア、それはな……サア、お前はなんにも案じる事はござんせぬ、なんぢやあらうと、金はわしが拵らへるわいな。

步左　イヤ〳〵それでも樣子を聞かねば落ちつかぬ。どうして金を拵らへる女房。

ふじ　それはナ。

步左　サア。

ふじ　サア。

兩人　サア〳〵〳〵。

ト此うち、步左衞門、こなしあつて慄ふ。おふじいろいろ思ひ入れあつて

ふじ　情ない。こりや又、病が發つたかいなあ。

步左　術ない〳〵。

ト片息になり、こなしあり、おふじウロ〳〵して

ふじ　エヽコレ、門中と云ひ藥はなし、どうせうぞいなア。

ト脊中を擦つたり、いろ〳〵思ひ入れあつて

幸ひマア、この關屋の內へ。

ト肩にかけ、無理に步左衞門を、關家の內へ入れる。步左衞門、始終術ながり、片息になつて直ぐに寢る。

ア、、どふぞマア駕籠をかつて內へ。
トこなしあつて
ぢやと云うて、こちの人を、あゝしても置かれず。イヤ、斯うして居ては、何かの手もつれ。マア、一時も早うこちの人を。さうぢや。
ト向うへ入る。歩左衞門、ヂッと起き、そこらを見廻して
歩左　女房ども〳〵、もう行たか。ア、、今あれが詞の端、金拵らへると云うたは、その身を野上の宿へ勤め奉公、忝ないぞよ。其方が心底、歩左衞門が身に餘つて。
トそれなりに苦しみ寢る。ト靜かな唄になる。向うより傾城吾妻路、着流し、しどけなき形にて出る。
吾妻　どうぞ司之助さまに、逢はうと思うて都を立退き、この美濃の國は、殿樣の本國、それで尋ねて來るところ、思ひがけなう歩左衞門さま御夫婦の、お世話になつてはゐれど、今宵夫婦の留主を幸ひに忍んで出たも、殿樣に逢ひたさ、知らぬこの道、城下とやらまでは、どう行くぞ。道は知らず雪は降る。ア、、心細い事ではあるぞ。
ト花道に立ちとまり、思案する所へ、橋がゝりより、ちよんがれ坊主、穢ない形にて、がつそう頭に、錫杖を持ち出て來て、吾妻路と花道にて行き違ひ、向うへ行かうとする。
吾妻　ア、、申し〳〵、お山伏樣。
ちよ　イヤ〳〵愚僧、山伏ではない、ちよんがれぢや。
吾妻　エ、。
ちち　野上の宿から戾りがけ、雪はちらつく、腹は後へ、こりや又つめたいこんだ。ホ、、、、、。
ト息を吹きかけ、手をぬくめる。
吾妻　申し、ちつと尋ねたい事がござんす。
ちよ　なんぢや、尋ねたい事とは。
吾妻　サア、この國の城下の方へは、どう參じますえ。
ちよ　なんぢや、城下。
吾妻　アイ。
ちよ　嘘か。
吾妻　エ、。
ちよ　どらが如來。
ト錫杖振り出すと、合ひ方になり
美濃の城下は、因幡大垣、樽井赤坂、上は青墓、熊坂長範、物の見事に物見の松では、ころりとしまうて、今に夜のつぎまい。こたへて見ればな、蟲めがきかない、こ

りや又、うるさいこんだ。ホヽヽ。
　ト錫杖を振つて向うへ入る。ト常の合ひ方になる。
吾妻　エヽ、なんの事ぢや、阿房らしい。人に物ばかり云
はせて……よい〳〵、知れぬと云ふ事はあるまい。
　トこなしあつて、そろ〳〵本舞臺へ來る。ト藥屋長
命、橋がゝりより、黒羽二重、着流し、深編笠にて、
行燈を風呂敷に包み、そろ〳〵出て來る。吾妻路見て
ヤア、お前は殿樣、司之助さまぢやござりませんかいな
ア。
　ト取りつく。
長命　イヤ〳〵、痞えには驗きませぬ。僅か十二錢で、三
度灸々々。
吾妻　マア、ちよつと、顏を見せて下さんせいなア。
長命　ア、滅相な。顏を晒してこの藥が賣られうか。野上
の廓の橋の上で、年中ひろめてゐる、コレ。
　ト包んで居る風呂敷を取る。石摺りにて、長命丸、
女悅丸と書いてある。
コレ、この如く、行燈に相違なしの請合ひ藥、幸ひ我れ
ら、附合ひしてゐれば、ちよつと試みに。
　ト吾妻路に抱きつく。

吾妻　エヽ、穢ない。こりや何するのぢやぞいなう。
　ト突きのける。
長命　何するとは曲がない。長命、女悅の驗目を見せるの
ぢや。
　トまた抱きつく。
吾妻　エヽ、否ぢや〳〵。とんといろ〳〵の人が來て、わ
しや心が急く。放して下さんせいなう。
長命　イヤ、放さぬ〳〵。ちよと、あしらうたら、其方か
ら放さぬが、どうぢや〳〵。
吾妻　エヽうるさい。否ぢや〳〵。
　ト否がる。吾妻路を無理に、嫌らしうする。此うち後
へ、伊達五郎出かけ、よき所にて長命を、取つて投げ
る。吾妻路見て
ヤア、お前は、誰れ樣ぢやえ。
伊達　ア、コレ女中、こなさん、おれ知つてゐやうがの。
吾妻　イヽエ、知らぬわいな。
伊達　ハテサテ、近附きぢや知つてゐる〳〵。ハテサテ、
近附きぢやと云ふに。
吾妻　そんならマア、近附きぢやわいなア。
　ト此うち長命、起き上がり、編笠を脱いで

長命　イヤ、貴樣は近附きか知らぬが、おれが商ひものゝ藥を散らさして、その上、なんで投げたのぢや。
伊達　なんで投げたとは、ちよこ才な。おれが近附きの女中を捕へ、なんで、てんがうさらした。
長命　ヤア。
伊達　それぢやに依つて、まだ云ひ分があるか。
ト締める。長命、ちやつと飛び退き
長命　イヽヤない。ちよつと抱きついて投げられたりや、互ひに云ひ分はない筈。なんの別に、大事の藥を此やうに蒔き散らして。
ト拾ひ〳〵。
伊達　締め上げる奴なれど、取るに足らぬ蚊蜻蛉め。
長命　馬鹿め、この雪降りに蚊蜻蛉が出るものかい。
伊達　こま言云はずと、キリ〳〵うせぬか。
長命　オヽうせる。おれが足でうせるからは、若い者、云ひ分はあるまいがな。云ひ分なくば。
ト長命丸、一貼、抛りつけ
構はずと、賣り物やらう。
ト物眞似にて、行燈提げ、向うへ走り入る。
伊達　ハヽヽヽヽ。いかい馬鹿ではある。

吾妻　ほんに、よい所へお前が來て下さんして。
伊達　女中、見れば大膽な。一人ぢやが。
吾妻　アイ、わたしや尋ねるお人があつて、城下まで。
伊達　城下までは、餘程の道ぢやが、して、城下はどこへ。
吾妻　アイ、この國の殿樣さんのお屋舖へ、尋ねるお方と云ふは、その殿樣の弟御ぢやわいなア。
伊達　すりや司之助か。
吾妻　お前はお近附きかえ。
伊達　さては聞き傳へてゐる島原の傾城、吾妻路ぢやな。
吾妻　エヽ、お前はそれを、どうして知つてゐやしやんす。
伊達　身共は齋藤の家來、不破伊達五郎と云ふ者なれど、浪人して今は、柿木金助が手下になつてゐる。
吾妻　エヽ、そんならお前は。
伊達　尋ねる人に、逢はしてやらう。マア、司之助よりは、おれが先へ。
ト抱きつく。
吾妻　エヽ、情ない。こりや又、お前もかいなア。
伊達　幸ひあたりに人もなし、腰元の關屋に面差しの似た吾妻路。せめてたつた一度。
吾妻　エヽ、否ぢやわいなア。

伊達　一度が否なら、二度でも大事ない。三度なら猶よし。
どうぢやい／＼。
トしつかう、しなだれるを、吾妻路、振り切る。また
抱きつく。此うち吾妻路、癪の發つたるこなしあつて
吾妻　ア、、術ないわいなア。
伊達　ヤア、なんとした／＼。
吾妻　サア、持病の癪が胸先へ。
伊達　どうでも、この雪で冷えたものであらう。幸ひおれ
が黑丸子、持つてゐる。
ト藥の包みを出して
サア／＼、これを服んで、そろ／＼擦つて、とりかける
ぢや。
ト吾妻路に、無理に突きつけ、服まさうとするこなし。
吾妻　エ、、否ぢや／＼。癪積が痛むわいなア。
ト手を叩きのける。その拍子に藥の包み飛ぶ。
伊達　エ、、勿體ない。大事の藥を、どこへやつたしらぬ。
トそこらを尋ねる。最前の長命丸を取上げ
コレ／＼、爰にあつた。鹽梅の惡いのに、藥を服まんと
云ふ事があるものか。
吾妻　イエ／＼、お前は構うて下さんすな。

伊達　アレ、まだ片意地な。よい／＼、この丸子を、おれ
が口中でない／＼して、そもじに、口移しで服ましてや
らう。
ト右の丸藥を、口へ頰張り、れきへ寄る。吾妻路逃げ
歩く。伊達五郎また抱きつく。
吾妻　エ、、アタ穢ない。否ぢやわいなア。
トむがう、突き倒す。伊達五郎、こける。
なんでも御城下へ尋ねて行て。さうぢや。
トこなしあつて橋がゝりへ入る。ト伊達五郎、すつく
り、しやきばつて、立ち上がり
伊達　コレ／＼、吾妻路々々、ヤア何所へ行た。
ト體の廻らぬこなしにて
ア、ラ心得ぬ。俄に發熱盛んにして、五體斯くの如くし
やきばり、おこづくは。
トいろ／＼思ひ入れあつて
ムウ、さては今、黑丸子と思ひ拾ひ上げ、服したるは、
最前うつけが投げつけし、長命丸であつたか。ハテ、
爭はれぬ藥力ぢやなア。
トいろ／＼身振りする所へ、橋がゝりより盜賊ころの
三藏、西條九介、出て來て

三藏　伊達五郎、爰に居るか。
兩人　一遍と尋ねて居たわい。
伊達　九介、その雪を一口身共に。
九介　なんぢや。をかしい身をして。
ト雪を集め、口へ入れる。伊達五郎、グニヤ／＼と、下に居て息をつぎ
伊達　ア、嬉しや、これでやう／＼人心地が附いたぞ。
皆々　なんの事ぢや。
ト向うバタ／＼にて、木ねりの定八、熟柿の權、黒裝束にて、鯱の箱、金の財布を持ち出て來て
定八　オ、皆の者、爰にゐるか。
三藏　オ、、木ねりの定に、熟柿の權。
兩人　今か。
伊達　さうして仕事は。
兩人　まぶぢや／＼。
皆々　そりやめでたい。
ト皆々、關屋の前へ行て、木ねりの定八は、これを開き、鯱を出して
定八　コリヤ見い、木ねりが仕事は、ザッと、斯ういふものぢや。
皆々　そりや珍らしいが、なんぢや。
定八　これを知らぬとは、うつけた奴等ぢや。こりやコレ、先年八代簀八寛と云ふ、謀叛人の唐人が、持つてゐた重寶。コリヤ見い、無垢の金で拵らへた鯱。彼の唐人は、吾妻の隅田川で亡びて後、足利に納まり、この度、武將義輝がこの國へ下向、これを持つて來た所を、お頭の云ひつけで、旅館へ忍び込んで、手まへて來た。
皆々　そりや大働らきぢやあつたなア。
權　コリヤ、木ねりばかりぢやない、この熟柿も、コリヤ見い、三百兩、手まへて戻つた。
皆々　此奴も、えらいワ。
伊達　黄金の鯱と云ひ、三百兩、ハテ、結構な事したなア。
ト此うち關屋にて、歩左衛門、無性にうめく。皆々聞きつけ
皆々　ヤア、ありやなんぢや。
トころ三藏、ツカ／＼と行て、歩左衛門が着物を、引ッ剝き、引摺り出し
三藏　ヤア、此奴は見馴れぬ素人ぢや。
伊達　すりや、最前からの様子を。
ト定に、目くばせする。定八、心得、鯱と財布とを、

關屋の屋根へ抛り上げろ。
引摺り出して、ごして見よ。
ト歩左衞門を前へ、引摺り出す。歩左衞門、苦しみながら起き上がつて
歩左　コリヤ皆の衆、病人を、なんとするのぢや。
伊達　わりや向うに寐て
定八　おいらが云ふ事を
皆々　聞かうがな。
歩左　イヤ、こなた衆が、何を云うたやら、手前は術なうて、何も知らぬぞ。
伊達　知らぬと云や、猶とぐらにやならぬ。
定八　知つてゐりや、料簡の附けやうもある。
伊達　サア、樣子を聞いたか。
皆々　但しは聞かぬか。
歩左　イヤモ、この通りの容態、なんのそこどころ、一向夢中。ア、、目がくる／＼して、胸先が、せぐるしい。女房はどこへ行た。ア、、術ない／＼、せぐるしい。
皆々　あれ聞いたか。
伊達　女房と吐かすからは、まだ手合ひがあるのぢや。いつそ消してしまふがよからう。
九介　さうぢや／＼。
ト兩人、歩左衞門を引ッ立てる。歩左衞門、ヨロ／＼して
歩左　コリヤ、なんとするのぢや。
皆々　消してしまふ。
伊達　しらで云ふと、殺すのぢや。
歩左　エ、。
ト恟りする。兩人を振り放し、下に居て
そりや、なんで／＼。
トうろ／＼として、立たうとしては轉んで、下に居て、足の立たぬこなし。
伊達　ハテ、おいらが身の上を聞かれた上は、
皆々　生けては置かれぬ。
歩左　イヤ／＼、神もつて存ぜぬ、知らぬ。身共は以前は武士、なんの未練にあらがはう。今死ぬる命は、さらさら惜しまねど、この身はちつと望みもある。今宵の樣子これ程せぐるしい病も、どうぞ本腹と、最前よりも心の内で、神佛への心の立願。こなた衆の身の上、知らぬ聞かぬが、有やうはどうぞ助けて下され、命が惜しい。卑怯未練にも、死にともない。コレ、手を合す。頭を下げ

る。いづれも、皆のお衆、情ぢや慈悲ぢや、お頼みます
る。コレ〳〵。
ト違ひ廻り、皆々縮み、始終苦しきこなし。
皆々　エヽ、なまたれる不吉者。
定八　こま言云はずと消してしまへ。
歩左　そんならどうでも。
伊達　われは命は寐腐つた。
ト歩左衛門、ヨロ〳〵、キッとなつて
歩左　とても死ぬる命、是非がない。
ト刀を抜いてよろぼひ、切つてかゝる。
伊達　ヤア、短刀ひらいたな。ソリヤ。
皆々　合點ぢや。
トこれより歩左衛門、皆を相手に弱きタテ、滅多切りに切り殺す。此うち、雪ひどう降る。ト、伊達五郎一人残り、歩左衛門と、無二無三に立合つて兩人當り合ひ、ウンと兩人一時に倒れる。但し歩左衛門、關屋の板庇の下へ轉ける。ト向うバタ〳〵にて、女房おふじ、走り出て、歩左衛門に爪づき見て
ふじ　ヤア、とりやこちの人、この有様は。
トうろ〳〵して

歩左衛門どの、こちの人。
ト呼び生ける。轉けてゐる木ねりの定、熱手の權、起き上がり、うぬを、ト女房おふじに切つてかゝる。おふじ、立廻りになつて、よろしく兩人を、橋がゝりへ追つて入る。ト本釣り鐘にて、明け六ッ打つ。これより合ひ方少し烈しく、最前より關屋の屋根に段々、雪つもる、この時仕掛けにて、右の屋根より、雪解けの心、本水流れる。歩左衛門にかゝる。伊達五郎、むくむくと、起き上がり
伊達　もう日の出、夜明けになれば幸ひ。最前の鯱二百兩を。
トきつとなつて取りにかゝる。歩左衛門、起き上がる。赤顔になつて伊達五郎を引き廻し
歩左　さうはならぬわい。
ト大肌脱ぎ、キッとなる所へ、おふじ、立戻り
ふじ　ヤアこちの人、お前の病氣は。
伊達　ほんに今まで、うめいて居つたうぬが。
トかゝるを、立廻り。
歩左　誠に、今も死入る切ない病。
ふじ　熱の浮かぬ苦しみも

歩左　俄に熱も發して、心も健か。

ト伊達五郎を投げる。起き上がつて又かゝるを

ムウ、さては最前彼奴等の云うた黄金の鯱、三百兩。

伊達　その二種はこの屋根に。

ト取りにかゝるを、歩左衞門、おふじ、始終立廻りにて、歩左衞門、屋根をキッと見る。

ふじ　アレ〳〵、あの屋根の雪解けしは

歩左　日の出の陽氣に

伊達　黄金の鯱。

トまた行くな、始終どん〳〵の立廻りにて

歩左　その滴りは黄金水、思はず我が口中に入つて

ふじ　病氣の本腹。

歩左　黄金の德にて自然と快氣は

ふじ　天道樣の御惠み。

歩左　神佛の加護、エヽ、忝ない。

ト伊達五郎を、見事に投げ、屋根より鯱と、財布を下ろす。所へ向うバタ〳〵にて、十右衞門、走り出て

十右　コレ、歩左衞門どの、最前約束の、夜半どころか、夜が明けたら、どうするのぢや。

ふじ　そりや、わたしが野上の宿へ勤め奉公。

歩左　それには及ばぬ。幸ひこの三百兩。

ト抛り出す。

十右　忝ない。金さへ取りや云ひ分はない。

ト財布を持つて、走り入る。伊達五郎起き上がり

伊達　今の金。マアこの鯱を。

ト引ッたくり駈け出す。おふじ立廻り、振り切る、伊達五郎、鯱を持つて、向うへ走り入る。

ふじ　ヤア、あれを。

歩左　コリヤ、彼奴は身共がぼッかける。女房、其方は身請けの樣子を、吾妻路どのへ。

ふじ　合點でござんす。

ト橋がゝりへ走り入る。

歩左　なんでも、うぬ。

ト花道へ追ひ駈け入る、チョン〳〵。返し。

右關家、板松を東へ引いて取り、黑幕切つて落す、ト後ろ淺黃幕、稻村五つ六つ、この合ひ矢張り板松、これより始終、雪降る。よろしくあつて、向うより、伊達五郎、鯱を持つて逃げて出る。歩左衞門、追ひ駈け出て

歩左　ヤア、大切なる鯱、此方へ渡せ。

伊達　イヤならぬ。

トまた立廻りになる所へ、十右衛門、吾妻路を引ッ立て出る。

吾妻　コリヤ十右衛門どの、なんとするのぢや。

十右　駈落ちしたわれ、都へ連れて去ぬるのぢや。

歩左　ヤア、吾妻路どのか。

吾妻　歩左衛門さま。

歩左　コレ、身請けの金は、渡して濟んだぞ。

吾妻　それにわたしを。

十右　野上の里へ賣つてやるのぢや。

歩左　イヤ、さうはならぬ。

ト兩方立廻りにて、鯱を引ッたくり

コレ、吾妻路どの、これを持つて先へ。

ト抛つてやる。吾妻路、取上げ

吾妻　合點でござんす。

ト橋がゝりへ行かうとする、伊達五郎、それは、ト行かうとするを、歩左衛門、引き廻す。十右衛門も、吾妻路を、うぬト支へるを、よろしくあつて右の四人、東向きになると、萬歳の合ひ方、雪降りにて、様々よろしく働らきあつて、皆々追つて、橋がゝりへ入る。とチョン／＼にて淺黄の幕切つて落す。

後ろ總一面の山の峯、諸木、梢ばかりを見せ、矢張り大雪にて、伊達五郎、鯱を持つて逃げて出て、駈け歩き、眞中の山の峯へ駈け登る。所へ歩左衛門、追はへ出て、引ッ捕へ、サア鯱を渡せ、と云ふこなしにて、伊達五郎を引きつける。どつこいと、よろしく見得になり、チョン／＼にて、橋がゝり臆病口もろともに、一面にセリ上がる。トだん／＼上がるに隨ひ、梢の諸木、根本現はれてくる。右の山、半上がると岩窟にて、下より茅葺き赤松柱の一つ家、物凄き葛屋をセリ上げる。見附け荒壁、納戸口、暖簾に好みある門口、岩の切組み。臆病口より舞臺前、蛇籠、柵池にて、氷張りつめたる體、但し上の方、枯れ木總山の麓、軒口一面の、びいどろの氷柱、花道舞臺蹴込み、返しにて、だくぼくの岩、このはざまに、萬年青のもやうよろしく、枯木、蔦の照葉、但し東西の棧敷の屋根、下の所、高欄殘らず皆々、山の返し、橋がゝりの切り幕出入りなしの山。隨分

もやう嶮岨に、大雪、右の屋體の内に、國姫、姫の形にて、琴の組を彈いてゐる。

附け琴、三面よろしく道具とまる、ト國姫、琴をチッと止め、外の合ひ方にて

國姫　遠近のたちきも知らぬ山中に、覺束なくも呼子鳥かな。

ト橋がりの山より、手白の猿、紅梅の枝を持ち走り出で、國姫が前に置き、後へ下がつて、手をつかへ、辭儀してゐる。

オヽ、しをらしい手白、又この紅梅を自らに。

ト取上げ見て

誠に、いつぞや宇治の茶摘みの折柄、迎ひと僞はり、狼藉者に捕へられ、何國へ行くやらと、心ならず思ひしに、この家の老女に誘はれ、思はずもこの山中へ來て、老いたる身の淺からぬ、心ざしは嬉しいけれど、人音絶えしこの處、こと問ふものは松風の谷の流れも物凄く、怖さ恐ろしさもいつしかに、馴れては馴染む手白まで、花や木の實を慰めと、自らにこの有樣も、古の、かりや姫うつぼ物語、それは子ゆゑの山籠り、自らは又戀路にて、司之助さまに添はさうと、老女の詞を樂しみに。

ト向うを眺めて

片時へんしあなたの事は、忘れた事はござりませぬが、定めてお前樣には、吾妻路どのや、綾絹どのと、しつぽりと、さぞお樂しみなされてござりませうなア……それを思へばお羨やましうて、悲しうござりますわいなア。

ト泣く。手白、國姫が脊を撫る。

コレ手白、わが身を頼む。どうぞ司之助さまを爰へお供して來てたもらぬか。思ひ焦れて司さまに、逢ひたい、顏が見たい、手白、其方を頼む。どうぞ司さまを連れまして來てたも。呼んでたも。コレ、自らは早う逢ひたい早う逢ひたいわいなう。

トいろ／＼手白を捕へてせぶる。手白むくむくと立ち上がつて、腹立て、搔きつく。國姫、あれえ／＼と怖がり、いろ／＼あつて振り放し、奧へ逃げて入る。ト面白き合ひ方にて、向うより、老女村路、小凄き姿にて、竹の子の女傘を持ち、笹の葉に、鯉を通し、提げて出で、花道の半にてこなしあつて

村路　ア、誠や、世にある人の樂しみも、何か劣らん老が身は、四季折り／＼も我まゝに、居ながら見る山櫻、谷の鶯、月も霞み、夏は涼しき苔清水、限なき秋の胸の月、

冬枯れ果てし心にも、我が庵ながら雪解して、軒新らしき詠めぢやなア。

ト四方を打詠め、また氣を變へて

イヤ、ほんにさぞ、お姫樣が待ちかねてござらう。ドレドレ。

ト本舞臺へ來て、內へ入る。

お姫樣〳〵、只今歸りましてござります。

ト奧より、國姫出で

國姫　村路、戾りやつたか。最前から、待ちかねて居ましたわいなう。

村路　オヽ、さうでござりませう。妾も、心が急いたれど、この大雪に年寄りの、嶮岨の山道。ツイ今になりました。

國姫　其方の情でこの山中へ誘なはれ、明けても暮れても、司さまの事をば思ひ暮らしてばかり、今日も其方の遲いにつけて思ふは、餘り自らが司さまの事ばかり云ひ出すゆゑ、愛想盡かして、この山へは、戾つてはたもらぬかと、今顏見るまでの心細さを、推量して下され。もしも其方に見放されたらば、司さまのお目にかゝる事も、ならず、焦れ死ぬるまでもなく、猪狼の餌食となる自ら。

村路　ハテ、益體もないお姫樣、一筋なお心で、さう思し召しますは、お道理でござりますれど、妾も仔細あつて世を退き、この住家へお供いたしましたも、思うてござる司之助さまに、お添はせ申さう爲ばかり。

國姫　サア、さう云うて下さると嬉しいけれど。

村路　追ッつけ、二世も三世も、お變りなされぬ御夫婦に致します。お案じなされなえ……オヽ、嬉しや、につこりと笑ひ顏。イヤ申し、そりや寒紅梅、その花は。

國姫　しをらしい手向が自らへ。

村路　そりや出かし居りました。イヤ、ほんに怪しからぬ感じやう。お姫樣にもさぞ、お冷えなされう。……これはしたり、圍爐裏に火の氣がない。エヽ、心の附かぬと、誰れを捕へて呵る者もない妾一人、ドレ、榾くべて、溫めて上げませう。

ト圍爐裏へ、火を燃やし

サア、ちと、おあたりなされませう。

ト下へ下りて右の鯉を盆に載せ、國姫が前へ持つて出て、寒紅梅と一緒に直し

村路　國姫さま、今日はおめでたう存じ奉ります。

國姫　村路、これは。

村路　樣子を承りました、今日の御誕生日、妾もちつと

心祝ひと、それでこの鶏籠山の山神へ詣で、歸るさに思はず七曲りの淵の氷の中より、飛び上がつたその鯉、持つて歸つたは今日の嘉儀。又は焦れてござる司之助さまに、お逢はせ申す戀の叶ふ瑞相と、妾が喜び、この上がござりませうか。

國姫　ほんに今日は自らが誕生日、よう祝うて下さる。これにつけても都では、今日を祝して父上や、母樣のお杯、諸大名の面々も、ともに祝儀の壽、自らが琴の調べに局が今樣、父上樣へのお慰み。それにこの身の徒らで、勿體ない父母の事は顧ず、其方の介抱、この住居。コレ、この水の鯉の志ざし、これにつけても彼の唐土の二十四孝、それには變つて、思へば不孝な自ら。

村路　アレ又おむづかりなされます。大事の御誕生日に不吉の涙、父御樣へのお慰めの琴の調べ、都の御所と思し召し、サア、一曲遊ばしませ。

ト琴を國姫が前へ直す。

國姫　誠に其方の云やる通り、都の父上樣へ、御祝儀の一曲もお詫びの心。

村路　都の空も、この谷底も、降り積む雪の色に、變りはござりませぬ。

國姫　父上樣のお遊びと思ひ。

ト琴にかゝる。

村路　皆、白妙の同じ詠め。

ト空を見ろこなし。國姫、琴にて

國姫　木々に積る白雪、風の誘ひ散る風情、花なき頃の花かぞ見えける。

ト越天樂の組のうち、村路、三方を取つて來て土器を並べて雪を盛り、萬年青を拔いて來て三方に据ゑ、七五三の膳組を拵へ、搔とりをほどき、右の三方を目八分に捧げ、國姫が上の方へ持つて行て、鯉と梅とを左方に置き、ツカ／＼と、下がり、チツと辭儀する。これ武將の拜膳の作法よろしくある。此うち最前の手白の猿、後へ出かけ、三方を覘うてゐる。

村路　イザ、あなた樣にも、御配膳あられませう。

ト國姫、また泣いてゐる。

これはしたり、又お歎きなされますかいなあ。

國姫　何かにつけて、司さまの事を。

村路　情ない。めでたい折柄、兎角お姫樣には。

ト手白、ツカ／＼と、三方の萬年青の實を取つて、前へ出て頰張り食ひ、また吐き出し、三方を抛り、頭を

國姫　掻き、足摺りする。姫これを見てフッと吹き出し
アレさもしい。手白が食物と心得、萬年青の實を。
ト笑ふ。村路、こなしあつて
村路　ヤレ嬉しや、お姫樣のお笑ひ顔、手白が麁相が時の幸ひ。オヽ、出かした〳〵。コリヤ、われには御機嫌直しに、褒美を遣らうぞよ。
國姫　それ程にまで、自らが事を。其方の。
トしをれて云ふ。
村路　アレ又。
ト思ひ入れあつて
コリヤ手白、とてもの事にお姫樣の、……エヽ、何を云うてもおのれは畜生。
ト叩く。手白、掻きつかうとする。
オヽ、怒つた〳〵。
ト手を叩き逃げ退き、國姫が方へ、心を配ることなし。
コリヤ、お姫樣の御機嫌より、手白どのゝ御機嫌を直さうか。
手白　きい〳〵。
ト村路が側へ行く。金柑を抛つてやる。手白、喜び取つて食ふ。

村路　そりや萬年青の實ではあるまいがな。
ト手白、喜ぶこなし。終始、國姫ないさめる心にて
アヽ、せめて其方が猿でなしに、愛盛りの五つから六つ、七つになる子が、いたいけな事云うた、殿が欲しいと謡うた。
ト村路、謡ひ出す。手白そろ〳〵立ち上がつて、あちらへ行たり、こちらへ行たり、舞ひ出す。
てもさても和御寮は、誰れ人の子なれば、定家がつらか、離れがたなやなう、川船に乘つて連れて行かう。やれ神崎へ、てもさても和御寮は、踊る子が見たいか、北嵯峨の踊りは、つゞら帽子をしやんと着て、踊る振りが面白い、吉野初瀬の色よりも。
ト此うち、國姫は、外の手の琴を弾く。おのづと、合合、間に合せ、村路は猿を浮かし〳〵
戀しき人は見たいものぢやと、ころ〳〵お詣りやつた科をば、いちやが負ひませう。
トいろ〳〵あつて
ホヽヽヽ、お恥かしや。山家育ちの姿がちり〳〵舞ひ。ほんの時の用には花香のない、一さしもさぞ、をかしう思し召されませう。オヽ、笑止やの。ホヽヽヽ。

國姬　イヤ〳〵、其方の志ざしは、仇には思はぬ。自らが誕生日、よう祝して下さつた。忝なうござるぞや。
村路　御機嫌が直つて、妾も嬉しうござります。これから奥へござつて、南宮山から永平寺の雪景色を、御覽じませ。
國姬　そんなら其方も。
村路　妾はこれより鯉の料理。追ッつけ御膳を差上げませう。
國姬　村路、返す〴〵も、どうぞ司さまに。
村路　待つ戀、逢ふ戀、忍ぶ戀、この鯉は三年もの、追ッつけ司之助さまを妾が取持つて、麥飯で釣り寄せまする。マア、ござりませ。
ト村路こなしあり、國姬、奥へ入る。ト在鄕唄なし、三味線ばかり。向うより牛六、輕衫ばかりを穿き、山岡頭巾にて、鐵砲を持ちながら、鬼六も同じ形、竹の筒の酒入りを、鐵砲の先に附けて、傾城吾妻路と連れ立つ出て
牛六　滅相な女中。こなさん、この道へどうして出て來た。
鬼六　爰は人の通ふ所ではないに、殊に女子だてら。
吾妻　サア、思はず爰へ迷うて來ました。どうぞ人里のある所へ。
牛六　イヤ、滅多には出られぬ。
吾妻　エヽ。
牛六　恟りする事はない。おいらが好い所へ。マア、ごんせごんせ。
ト吾妻路が手を取つて本舞臺へ來て、内へ入る。
村路　二人ともに今か。
牛六　今日は鷹狩りで、獵がきゝませぬ。
鬼六　約束の酒、買うて歸りました。
村路　オヽ、その酒を待ちかねた……イヤ二人の者、見れば、ありや女子さうなが、女鹿よりおとづれぬ、この山中へ、合點のゆかぬ、どうして其方達が。
牛六　サア、裟婆を出て來たこの女子、幸ひ彼のお人の御用聞かさうと思うて
鬼六　それで連れて戻りました。
村路　そりや出かした。よう氣が附いた。
ト此うち、吾妻路、合點のゆかぬこなしあつて
吾妻　申しかみ樣、爰はマア、なんと云ふ所でござんすえ。

村路　女中、爰は人倫離れた別世界ぢやわいの。
牛鬼　マア地獄ぢや。
吾妻　エヽ地獄とは、死んで行く冥途の事ぢやござりませんかいなア。
村路　冥途とは暗き道、可愛やこなたは迷うて來たの。
吾妻　そんなら、わたしや死んだのかいなア。
牛六　コレ女中、あのおかみさんは、そうづの川のお乳母どんぢやぞや。
吾妻　エヽ。
　ト悑り飛びのく。
鬼六　ヤア、もう血の池へ嵌つたか。赤い物がちらつく。
　ト裾をちよとまくる。吾妻路アレと下にゐて慄ふ。
村路　地獄と云ふ目のあたり、寒氣に閉ぢる氷の大紅蓮、嶮岨な山に霜柱、氷柱の光りも劍の山。
牛六　これから呵責に責め遣うて。
鬼六　竹の根を掘らす代りに、貴樣の藪はおれが掘る。
牛六　イヤ、おれが金棒振舞ふワ。
鬼六　そりや、焦熱の苦しみぢや。
牛六　なんでも地獄の苦患はえらいぞや。
吾妻　ハア。
　ト大泣き。
村路　コリヤ〳〵、この女中は爰に置いて、其方達は、いつもの通り奥へ行て。
牛六　オツと、觀音さまに、百味の飮食拵らへるのか。
鬼六　次手に地獄の釜で、湯を沸かして。
村路　それ〳〵、女中にも洗足させい。
牛六　イヤ、昨日取つた鹿めを料理して、おいらが晝食、飯からしまはう。サア鬼よ。
鬼六　牛よ。
牛六　來い。
　ト兩人、奥へ入る。吾妻路、泣いてゐる。
村路　コレ〳〵女中、何が其やうに悲しいぞいなう。
吾妻　これが悲しうなうていなア。申し、そうづ川のお乳母樣。
村路　ヤ。
吾妻　わたしや爰へ來る覺悟ぢやござんせなんだわいなア。
村路　オヽ、さうであらう。
吾妻　思ひがけない、わしやどうして死んで來た事ぢや。死ぬると云ふ事を知つたら、例へこの身はどうならう

と、殿様のお行くへを尋ね、とつとくり暇乞ひを……エ
エ、ひよんな。わしや死にともない。もう娑婆へ行かれ
ませぬかいなア。

ト此うち村路、鯉を洗うてゐる。吾妻路、始終、村路
を見て、氣味の悪いこなし。

エヽ、死んだと思うたら、猶、殿様が戀しい。申しお乳
母様、お前様のお情でわたしを。

村路　ムウ。さてはこなたも、云ひ交した男があるの。

吾妻　アイ、二世も三世も變らぬと云ふ、可愛い殿御がご
ざんする、思ひがけなう先へ來て、半座を分けて、待つ
てゐる事は、こちや否。あの悪性な殿様、わたしが死ん
だをよい事にして、大方、綾絹さまと、夫婦にならしや
んすであらう。それを思へば、モウわたしや死んでは居
られませぬ。どうぞ娑婆へ去なして下さんせ。申しお乳
母様、拝みます。お情ぢや、お慈悲ぢや。コレ申し。

トいろ／＼頼む。

村路　ハテ、若い女中の心は一つ。思ひ焦れて。アヽ、戀
は切ないものではある。

吾妻　申し、お前も閻魔大王さまと夫婦なりや、戀路は知
つて居やしやんすれば、わたしが心を推量して。

村路　イヤ／＼、一旦爰へ來たものが、二度娑婆へ行た事
はない。いつまでも爰に留め置いて、妾がちつと頼みた
い仔細もある。

吾妻　エヽ、そんならモウ、殿様のお顔を見る事は、なら
んかいなア。

ト大泣きに泣く。國姫、ツカ／＼と出て

國姫　おなつかしい吾妻路さま。

吾妻　エヽ、國姫さま。

トまた悄りする。

村路　そんならお姫様、その女中は。

國姫　いつぞや宇治でお世話になつた、傾城の吾妻路さ
ま。

吾妻　いとしやお姫様にも、お果てなされたかいナア。

國姫　イヽエイナア、自らは。

村路　申しお姫様、なんにも仰しやんな。

國姫　マヽ、思ひがけない爰で。

吾妻　これがほんの、地獄にも知つたお姫様。

村路　司之助に所縁の女中なれば。

國姫　何かの樣子を。

吾妻　どうぞ、鬼の來ぬうち。

村路　見る目、嗅ぐ鼻、密かに妾がとつくりと、淨玻璃の
鏡の間、假にしつらふ粧ひ殿の茅家で。
國吾　そんなら一緒に。
村路　戀慕の闇の、罪人達。イザ。
ト合ひ方になり、二人を連れて奥へ入ると、納戸より
牛六、鬼六、裝束の箱を持つて、そろ〳〵出て
牛六　コリヤ鬼六、かねて云ひ合した通り、あの姿め、合
點のゆかぬこの谷底の住居、表向きは、懇意に仕掛け入
り込み、内證は俗姓を知らん爲。
鬼六　殊にあの大事にかける姫は、行くへの知れぬと云ふ
足利の國姫に違ひはあるまい。
牛六　注進せうにも、證據なければ、却つておいらが身の
上。
鬼六　それで常から大事にかける、この箱を。
牛六　よし〳〵。
ト取つて
こりや、おれが改めて置く、われはナ。
ト鬼六を引寄せ、囁く。ト雪一所へ、パラ〳〵と降
り、黄金の鯱、兩人が頭の上へドツと落ちる。
牛鬼　アイタヽヽ。

ト恟り飛び退き、頭を抱へ
牛六　オヽ痛やの。今のはなんぢやあつた。
鬼六　案内なしの雷か。
牛六　なんでも頭へ當つたは、ちぎの重りが降つたやう
な。
鬼六　ハテ面妖な。
ト兩人、そこらを尋ね、鯱を取り上げ
牛六　これぢや、こりやコレ〳〵、黄金の鯱ぢや。天竺の
祇園精舍の屋根の飾りか。
鬼六　なんでも結構なものぢや。
ト奥より
村路　二人の者は、何所へ行てゐる。鬼六、牛六。
ト兩人、うろたへて
牛六　見附けられぬやう、この鯱を。
ト雪を集め、その中へ隱すうち
コリヤ、われもその箱を。
鬼六　合點ぢや。
ト鬼六は、門口の方へ雪を集めて、箱を隱し入る。兩
人よろしく、牛六こなしあつて、鬼六を連れツイと奥
へ入る。トヒヨ〳〵になり、花道の上より仕掛けにて

鷹飛び出て、本舞臺の上へ來る。柿木金助、鷹匠の形にて、繪圖を持ち、ツカ／＼と出て、花道半にて、繪圖を廻し、鷹を見て

金助　紀の關守がたづか弓、白鳥と化して飛び去りし、例しも古き白鳥の關。身より高き逸物の羽つがひ。我が飼ひ馴れし祕藏の鷹。この所へ案内は。

ト少しドロ／＼にて、右の鷹、落ちて死ぬる。金助、思ひ入れあつて

さては母の隱れ家、鷹の落命。ムウ。

ト心に納め、本舞臺へ來て、こなしあつて

母者人、御在宿か。先年家出いたした伜金助。御對面申したい。母者人々々々。

ト奥より

村路　古巣を出でし鶴の子の、待つに歸らぬ不所存者。母と呼ばるゝ伜は持たぬ。何者ぢや。

ト奥より出て來る。金助、内へズツと入り、兩手をつかへ

金助　母者人、おなつかしう存じまする。

村路　わりや誰れぢや。

金助　年月立てば、お見忘れも理り。當國ながら、村にござる時、家出した伜の金助。

村路　イヤ／＼、この母が產んだ伜は在所育ちの百姓。見れば立派なお侍ひ。

金助　成る程、御不審は御尤も。拙者が家出の元は、何卒立身出世の望みゆゑ、武者修行に諸國へ廻り、軍學の勵み、恐らく孫吳が祕書胸中に疊み、その功積つて只今にては、斯くの如く武士の交はり。これまで音信は致さねど、多く家來を隨へ、武士の棟梁とならば、一旦のお腹立ち、拙者が恥も會稽山にひるがへす、故鄉へ錦、母人にもさぞ、お喜びでござりませうがな。

ト村路、空を詠め

村路　ア、降るワ／＼。蝶の翅のお白粉を、草にこぼして梢には、鶴の霜毛を脫け替へる、雪は花より花多き、さぞ唐土人は六出花と、ア、詠めるであらう。

金助　イヤ母者人、只今御對面仕る上は、拙者が胎內にて、別れて親人の氏、素性を、お聞かせなされて下され。イヤサ、斯く大小を挾めば、知らで叶はぬ親の系圖。母の所存も打明けて、何卒お聞かせ下さりませう。

ト村路思ひ入れあつて、紅梅の枝を持つてズツと立ち上がり、庭へ下りて、雪の中へ、右の枝にて、犬と云

ふ字を一字書く。金助、立ち寄り見て
こりやコレ犬、と云ふ字。ムウ。ソレ、古へ三韓退治の凱陣に、長く日本の奴とありて、即ち、石面に三韓の王は犬なりと記せし無念、代々殘り、やゝともすれば唐土より、日本を討ち隨へんと、來朝渡海の臣下もさま〴〵。近くは天文年中、その企てに來朝せし、さては我が推量の如く、先年武藏の隅田川にて、亡びし異國人、八代寶八寛は、お隱しなざれしこなたの夫、拙者が爲には即ち父親。

ト村路これを聞いて、袂より袱紗包みの髑髏を取出し、金助を引きつけ、右の髑髏にて、さん〴〵に打ち据ゑる。

母者人、なんで拙者を。

村路　詞は交すまじと思へども、さま〴〵のたわけを盡す。コリヤ、この母が書いた犬と云ふ字を、夫や親と思ふか、馬鹿め。

金助　ヤ、なんと。

村路　犬と書いたはおのれが事。エヽ、茲な四つ足めが。

金助　ナニ、拙者を犬とは。

村路　コリヤ、盜賊の張本柿木金助。

金助　ヤ。

村路　サヽ、違ひはあるまい。それを母が知らぬかと思うて、利口さうに家出は出世の、只今は侍ひ武士になつたと、どこへおのれが武士侍ひ。コリヤ、渇しても盜泉を喰らはずとやら。誠の武士はこの心がけ。それに替つて、おのれはナ、人の眼を眩ます騙り盜賊。幼ない時より惡黨者、在所住居の其うちにも惡あがき、友達いさかひに、相手の子供は元より、先の親まで、山おゝこにて打ち殺して、直ぐにその場より家出した、後に殘つたこの母は、住み馴れし長良村をも追ひ拂はれ、立ち寄る方もかてつけぬも、皆おのれが惡事ゆゑ。詮方なさにこの裄底の今の住居。不孝な悴はあつて益なしと、妾は疾から諦らめてゐる。この年月、噂は聞けど、どこに居るとせうどは知らず、ナヽ、なんのおのれを尋ねうぞ。不所存なおのれが顏、見るもなか〴〵穢らはしい。足元の明かいうち、サア、キリ〳〵と出てうせう。ヤイ、去に居らぬか。歸らぬか。エヽ、茲な畜生めが。

ト呵りつける。金助、思ひ入れあつて、チッと仰向き、村路が兩手を取つて頂き、塵打ち拂ひなどして上座へ進め、こなしあつて

金助　母者人、なんにも申さぬ、誤まりましてござります。成る程、この身のすぎはひ、御存じの上は、隠しませぬ。仰せの通り、いま盗賊の張本、柿木金助と呼ばれるは拙者が事。併し、非道の盗みも、まさかの時の軍用、多くの手下を士卒と定むる我が大望。

村路　それ鳳凰は徳を見て下り、烏は親肉に迷ふ。

ト合ひ方になり、村路、右の髑髏を、西の方の枯木の雪拂ひ、枝に掛け、その前へ寒紅梅を供へ、こなしあつて愁ひを催ほす。金助、思ひ入れあつて、髑髏の前へ行き、兩手を突き、こなしあつて

金助　親人様、さぞ御無念にござりませう。追ツつけ拙者が修羅の妄執、晴らさせませう。

村路　ヤイ阿房め、そりや何吐かす。

金助　これこそ我か親人、八代簀八寛どの、髑髏でござらうが。

村路　イヽヤ、見せしめぢや。

金助　ヤ。

村路　盗賊の身の果は、アレあの通りの梟木にかゝり、遂には、野晒しとなる死恥。

金助　すりや、母者人には、只親人の身の上を。

村路　秋風の吹くにつけても、あなめ〳〵。

金助　小野とは云はじ、芒生ひけり。

村路　其方が心底、とくと見屆け、

金助　父が俗姓、系圖を。

村路　イヤ、百姓土民ぢや。

金助　なんと。

村路　盗みする子は憎からで。

金助　千變萬化に心を碎く某、父の仇には倶に天の戴かず。

村路　空晴れ間なきこの景色、雪や氷と隔つれど。

金助　解くれは同じ、こなたの心でござらうが。

村路　イヽヤ。

ト金助が大小をもぎ取る。

金助　それは。

村路　畜生に、刀脇差は似合はぬ。

金助　すりや、どうあつても。

村路　まだ〳〵その小袖、着類も借りて來たか。

金助　エヽ。

村路　盗んで來たか。コリヤヤイ、幾つ何十になつても、矯め直してやるは、親の慈悲ぢや。

ト納戸より着物を取つて來て

こりや母の手織りの在所木綿。親仁どのゝ着物。三十年來、たぼうて置いたも、斯ういふ時の。サ、脱げ。

金助　エ、。

村路　これと着替えい。

金助　でも。

村路　まだ云ふ事を聞かぬと、ひね／＼せうか。

金助　サア。

村路　ハテ、キリ／＼脱げと云ふのに。

ト無理やりに脱がし、行尺の短い着物と着せ替へ

オヽ、似合うた／＼。コリヤ金助、母がこの形を見い。山家に暮せば桂を織り、獸物の皮を縫ひ合して着でゐれども、心は穢れぬ羅綾の衣。元の百姓になつて、荒働きに身を凝らし、母が心に叶うたその時。

金助　ムウ。親人の御本名。

村路　また筐の一品。

金助　異國人か、百姓か。

村路　其方が心を。

金助　母の教訓。

村路　必らずともに……エイ。

ト有りあふ三方を打ちつける。金助宙にて叩き落し

金助　心がけたる手練の拙者。

村路　イヤ／＼、その手の内よりは、矢ッ張り畑仕事の。

金助　鋤鍬取つて心の底を掘り返して、イヤ、お目にかけませう。

ト琴唄になり、兩人こなしあつて、村路、奥へ入り、金助、跡に殘り、みすぼらしき妻にて、ムッ、と思案する。雪チラ／＼と降る。こなしあつて

金助　いま母者人の詞の端、この金助を、八代賽八寛どのの、胤と知つてあるを、矢ッ張り深う隱し包む心底。この姿にして、百姓になれとは。ムウ。

ト思ひ入れありて、また唄になり、此うち奥より吾妻路、國姫を連れ、さし足して出て、舞臺より表の門口の方へ行くを、フッと金助、兩人を見て

金助　コリヤ待て。[illegible]かに。

兩人　エ、。

ト吻りして振返り、下にゐる。

金助　二人とも、この家を逃げる事ならぬぞ。

兩人　アイ、、、。

金助　人倫離れたこの巖窟、二人の女が褄はづれ。ちよつ

と見てもさすものぢやない。足利の國姫。

國姫　ヤア、

金助　コレ、貴樣は又、島原の傾城、吾妻路であらうがの。

吾妻　エヽ、なんのマア。

金助　ハテ、女子と云ふものは執念な。コレ、おりや、よう知つてゐるぞや。

國姫　アヽ、そんなら自らを。

吾妻　イヤ〳〵、申し、どうやら合點のゆかぬ。イヤ、合點のゆかぬ道筋へ來て、ツイ爰へ迷うて來たわたしら。それでこの家の、マア〳〵、腰元でござんすわいなア。

金助　ムウ。腰元なら成る程腰元にして、おれが送つてやらうか。

吾妻　そりやどこへ。

金助　思ひ焦れてゐる齋藤司之助へ。

兩人　エヽ。

金助　イヤサ、有やうは、おれも迷うて來たが、去にたらて去にたうてならねど、命が惜しい。

兩人　命が惜しいとはえ。

金助　總じて斯ういふ山道も知れぬ、嶮岨な山中を出るには、吹雪と云うて、雪に卷かれて、凍え死に目がくらんで、谷がどこやら、道がどこやら、オヽ怖。

ト此うち兩人、びく〳〵する。

得ては又谷へころり。八萬地獄へだんだ走り。ナウ嫌やの嫌か。

吾妻　アノ、雪で命を。

ト國姫と、顏見合せ

兩人　ハア。

ト泣く。天井よりガタ〳〵にて、盜賊の死骸ドツと前へ落ちる。三人悚り、飛び退き見て

國吾　アレ、人が降つたわいな〳〵。

ト慄うて居る。金助、右の死骸を見てこなしあつて

金助　ヤア、こりや手下の九助が死骸。どうして殺られた。

ト上を見る。又バタ〳〵にて、臆病口より、伊達五郎、落ちて來る。國姫、吾妻路、怖がつてゐるこなし。

伊達　ヤア、お頭か。

金助　伊達五郎、九助が死骸と云ひ、心元ない。樣子はどうぢや。

伊達　イヤ、こなたが云ひつけた彼の鯱、木ねりが手まへて戻つたところへ、思ひがけなう歩左衛門と云ふ奴が、

様子を聞いて鯱を渡せと云ふを、奪ひ合うて、この山の峯へ、組んず轉んず、鯱も谷へ落すやら、九助も殺らされて亂騷ぎ。おれも思はず轉んで爰へ。

金助　すりや、肝心の黄金の鯱も。

伊達　どこへやつたやら知りませぬ。

金助　エヽ、殘り多い。

伊達　頭、あの女郎めらは。

金助　イヤ、大事ない者ぢや。コレ〳〵、二人とも、なんにも怖い事はないぞ。

吾妻　それでも切られた人が降らば、また何が降らうやら。それ〳〵、ちやつとこの間に。

金助　ハテ、おれが居れば、なんにも怖い事はないわいの。

トこちらへ二人を連れて來る。

伊達　頭、合點のゆかぬこなさんの形。今日の隣野を幸ひに、鷹匠に紛れて。

金助　コリヤ、何を云ふ。

伊達　でも、思ひがけなう。

金助　伊達五郎、おりや思案しかへた。

伊達　ヤア、なんと。

金助　サア、思へば〳〵、夜の目の寐られぬ怖い商賣、とんと思ひ切つて離れだちの百姓、それでコレこの形、大小止めてコレ鋤鍬。

ト取つて來て見せる。此うち吾妻路、因幡、逃げう逃げうとすることなしある。

伊達　頭、すりや、こなさんは。

金助　嫌で候、懲りて候、百姓がやつと氣樂でよいぢや。ナウ女中。

兩人　アイ〳〵。

ト愕りする。金助また連れて戻る。

伊達　金助、わりや、いよ〳〵百姓になる所存か。

金助　ハテ、百姓なりやこそこの形。

伊達　それでは仲間の者へ。

金助　立たうが立つまいが、しらほど結構なものはないぢや。

伊達　さう性根が腐つたら、手短かに。

ト鋤にて打ちかけるを金助、ヂッと捕へて

金助　こりや、何する。

伊達　しらになると云や、ぶち殺して仲間の者へ

金助　さう自由にはならぬ。

伊達　なにを。

ト ちよつと立廻りになつて、伊達五郎をポンと當てる。伊達五郎、倒れる。

國香　ヤア、それは。

金助　冷えた加減か、目を廻した……斯う片脇へ直して置けば、氣が附くであらう。とんと氣を揉むゆゑ、いろいろの世話をかける。

ト 伊達五郎を蹴り退け、こなしあつて

時に女中、斯うぢやて。

ト 二人を前へ連れ出て

司之助が在所を、……イヤ、司之助どのに、有やうは恩がある。それで二人を尋ねて連れて行て、添はしてやらうと思うて。

兩人　アノ、わたしらが、名を明かしたら。

金助　ハテ、司之助どのに添はしてやる。

兩人　そりや眞實に。

金助　なんの僞はり。

ト 鋤と鍬とを、取り上げ

百姓の魂ひ、鋤鍬の金打。

ト 奥より村路出て

村路　金助、心底見えた。

金助　ヤア、母者人。

國姫　そんなら村路の。

村路　眞實の忰。

吾妻　知らぬ事とて、わたしらが身の上を。

村路　イヤ、尋ねる忰は神武の簱が欲しさ。

金助　ヤア、なんと。

村路　心底を見屆けたからは、其方か望みの簱。

金助　すりや拙者に。

村路　ソレ。

ト 渡す。

金助　エヽ、忝ない。

ト 取つて戴く。

兩人　あの御簱渡しては。

村路　苦しうございませぬ。マア、ヂツとしてございませ。

ト 金助、簱を改める。

金助　ヤア、こりや眞赤な似せ物。

村路　ナニ、似せ物とは。

金助　知るまいと思はつしやるか。神武の簱と云ふは、人皇の始めより、代にひつぎの重寶なれば、東山どのゝ時代に、足利へ贈られし、神力加はる神寶同然、それゆゑ

しれぬ古絹を旗なぞとは、矢張り金助をうつけにするのか、母者人。
　ト旗を寸々に引裂き、打ちつける。
村路　それ見よ、おのれが性根はまだ直らぬ。百姓になる其方が、神武の旗を何にする。
金助　默れ老ぼれ、一旦思ひ立つたる金助が大望、なんの變ぜん。親と思うて敬まへば、附け上がりのした死損なひ。高で腹は借り物、親子の緣は此方から切つて、思ひのまゝに人を語らひ、足利を打ち亡ぼして見せう。
村路　エヽ、三つ子の魂ひ百までと、いがみすぢつた盜人根性。親の詞を背く不孝者めが。
金助　何が不孝ぢや。盜人とはうぬが事、慈な猫股婆めが。
　ト村路が首筋取つて引きつける。
國吾　ヤア、それは。
　ト寄らうとする。
村路　コレ〳〵、お姫樣、吾妻路どの、妾を庇うて、斯ういふ惡者、滅多に側へお寄りなされな。
國姫　それでも。
村路　ハテ、苦しうござりませんわいなア。
金助　オヽ、苦しうなくば、苦しめてやらう。
　トさん〴〵に振り廻す。國姫、吾妻路、心遣ひあり
ヤイ、コリヤ、我が子のおれには構はず、所緣かゝりのない足利の姫や、司之助と云ひ交した傾城を引入れて、世話を燒く氣遣ひ婆め、最前おれをくらはしたな。それがよいか、これがよいか。我が子の金助さまのお脚を戴き居らう。
　ト村路を引きつけ、踏みにじる。
國姫　コレ、可哀さうに、年寄つた村路をば。
吾妻　打擲とは、あんまり。
金助　なんぢや女郎ども、びらつきさらすな。
村路　コレ、天竺のあじやせ太子にも增つた不孝者。
金助　イヤ、孝行な息子に逆らうた罰、思ひ知れ。コリヤ、金助さまの足を戴け。
　トいろ〳〵蹴る。此うち、國姫、支へる事、よろしくあつて、また村路を踏みにじる。少しドロ〳〵にて、金助、五體すくばり、タヂ〳〵として、どつと下にゐる。
國吾　ヤア、あれは。
村路　父は元より母の恩は、蒼海より深し。忽ち報う親の

罰。

ト起き上がる。國姫、吾妻路、左右より介抱する。

不孝の罪を思ひ知つたか。イザ、お姫樣、吾妻路どの。

サア奥へ。

ト合ひ方になり、村路よろしくする。吾妻路、國姫、いろ／＼と介抱して、奥へ入る。金助跡に殘り

金助　嬉しや、尋ね求むる神武の旗の在所が知れたぞ。

ト伊達五郎も、起き上がり、こなしあて

伊達　樣子は聞いたが、お頭。

金助　煮ても燒いても、噛める姿ではない。

伊達　すりや、矢ツ張りこなたは。

金助　コリヤ。

ト囁き。

ナ、奥の樣子を。

伊達　ムウ。

ト心得、伊達五郎、奥へ忍び入る。始終此うち、合ひ方。

金助　手下の奴等に云ひつけし、黄金の鯱を、伊達五郎に聞けば、歩左衛門とやらと奪ひ合うて、谷底へ落せしとは。ムウ。

ト此うち、牛六、鬼六、出かけゐて

牛六　お尋ねの盜賊。

兩人　柿木金助。

金助　なんと。

牛六　繩かける。ソリヤ。

鬼六　うぬ。

ト兩方よりかゝる。金助、ちよつと立廻つて、九字を切りかける。

兩人　連れて行て、褒美をせしめる。

ト兩方よりかゝるを、よろしく留めて

金助　ハテ、面妖な。遠霞の忍びの術が。

牛六　なにを。

ト山刀にて、切つてかゝるを、立廻りにて、刀を叩き落す。鬼六又かゝる。此うち、牛六、鐵砲の火繩に火をつけて

金助、覺悟。

金助　ヤ。

ト鬼六を楯にして摺りぬける。牛六、覘ひをつけて

牛六　火蓋を切つて。

ト構へる。金助、手早に、門口の方の雪の塊を取つて

打ちつける。鐵砲落す。最前の箱、ガラリと、中より冠唐裝束と劍出る。金助、取上げ見て

金助　ヤア、こりやコレ冠唐裝束。

兩人　それを。

ト取りにかゝるを、金助、牛六をちよいと當てる、鬼六切つてかゝるを、劍を引拔き、鬼六を見事にポンと切り倒すと、ドロ〳〵にて、前の池より水氣、卷き上がる。枯木の枝の髑髏、燒酎火にて燃える。合ひ方烈しく、金助、キッと見得にて

金助　ハテ、怪しやなア。上天大呂の時なりと、陰氣に閉づる池中の水、消えてはなみきうたひの影を洗ふといへども、いま卷き上がるこの水氣と云ひ、あの髑髏。

ト枝を見て

魂は氣體、鬼の髑髏に陰火、れつ〳〵たるは、それ魂は陽に屬して魂ひとなつて天に登り、體は陰に屬して、鬼となつて地に歸る。

トまた水氣に目を附け

五行の相生水生、木是水より木を生じ養へど、火また尅して鷹の落命、殊に今、遠霞忍びの術のきかざるも、ムウ。彼れと云ひ、これと云ひ、思ひ合せば血汐の穢れに、不淨を忌むは、ムウ。

ト上の雪に、目を附けて

ハテ心得ぬ。皆白妙に埋むといへども、分けて束ねしあの雪ばかりに、陽氣の廻るは、オ、ソレ、母に番へし我が詞、雪ぐと云ひしを讀みに通してこの雪の。

ト劍を拔いて、上手の雪を切り割る。中より、鯱出るを、取上げ見て

さてこそ、黄金の鯱、寶の奇瑞に氷の解けしは金生水、すりや裝束冠、この劍も、慥かに父の筐なるか。母は包めど最期の念に性を引き、我れに知らせのこの有樣、思はず手に入る時の幸ひ、時日を移さず四海掌握、いよいよ我れは八代贊八寬、異國人の胤なる事、心の決着、疑念も晴れて今こそ雪ぐ、雪折れ竹に本來の面目。肢は切らねど彼奴を手にかけ、祖師再來意の話を開きし神光僧。それは偈說、我れは叛逆、追ッつけ大望成就なさん。ムウ、ハ、、、ハテ、喜ばしやなア。

トきつとこなしあり、水氣陰火、納まると、大井又カタガタにて、臆病口より歩左衛門、落ちて來て、金助が持つてゐる、鯱を見て

歩左　ヤア、その鯱を。

トつか／＼と行て、手をかける。金助、こなしあつて。
金助　すりや、其方は歩左衞門ぢやな。
歩左　して又うぬは。
金助　柿木金助。
歩左　さてこそ盜賊、鯱渡せ。
金助　イヽヤ、ならぬ。
ト立廻りになり、よき所へ、伊達五郎、奥より出て
伊達　ヤア、うぬは歩左衞門。
歩左　最前の盜賊、さては金助が手下ぢやなア。
金助　こま言云はさず、消してしまへ。
伊達　合點ぢや。
歩左　なにを。
ト兩人、花々しきタテになつて、模樣よろしくある。
ト牛六、心附き、起き上がつて
牛六　ヤア金助、鯱もらぬか。
トかゝるを立廻りあつて、牛六を取つて投げる。直ぐに起き上がつて
この上は、うぬが身の上、注進する。
ト駈け出す。ト奥より

村路　エイ。
ト聲かける。石門ピッシャリ。上より巖石落ちて、牛六キャッと云うて死ぬる。金助、冠裝束掻込み、さうぢやと奥へツイと走り入る。此うち表始終立廻り、歩左衞門、伊達五郎をポンと切り殺し、石門を開き
歩左　金助、うぬを。
ト内へ駈け込まうとする。所へ村路、着附け紋緋の袴にて、島臺を攜へ、持ち出て
村路　内へ入らば命を取るぞ。
歩左　ヤ、なんと。
村路　手本は目の前、ソレその死骸。卽ち八門遁甲孫呉が陣取り。
歩左　ムウ。心得ぬ老女が出立ち。孫呉が術にて人を害するは。
村路　コレ、内へ入らば地獄落しに、幾人でも命を取らうか。但し、犬死したいか。
歩左　サア。
村路　サア。
兩人　サア、サア／＼／＼。
歩左　ムウ。

村路　コレ、短氣は損氣、あつたら命ぢや。庇うて置きやれ。
歩左　推參な老ぼれめ。例へ命は終るとも、手に入る盜賊金助を。
　トきつとなり、駈け込まうとする。この前より、國姬、出かけゐて、この時ツカ〳〵と出て
國姬　必らず早まつてたもんな。この家に居るも、老女が情。
歩左　ヤア、國姬さま。御身に恙なうて、先づは安堵。直ぐにお供を。
國姬　コレ、聊爾に內へ入つては。
歩左　エヽ、コレ。
　トこなしあり。ト村路、枯木の枝をポンと切りかける。煙硝火パッと上がる。白と赤との絹、天井へ燃え上がる。ト直ぐに天井にて、遠責めになる。歩左衛門、國姬、こなし。
國歩　ヤア、あの鉦太鼓は。
　ト恟りする。
歩左　さては手段の網にかゝつたか。エヽ、殘念な。
　ト自團駄踏んで、ドッと下にゐる。國姬、心遣ひ。

村路　コレ〳〵、血氣にはやるは匹夫の勇。苦しうない。聊爾はせぬ。歩左衛門どの、サア、これへ〳〵。
國姬　コレ、村路の詞、歩左衛門、心を鎭めて、ちやつとこれへ。
歩左　ソレ。
　ト入らうとして、思ひ入れあつて、岩を取つて差上げ、空を見い〳〵內へ入り、こなしあつて、右の岩を投げつけて
奧に居る金助、鯱もろとも。
　ト奧へ行かうとするを、村路留めて
村路　待つた、そりやならぬ。
歩左　なぜ留める。
村路　黃金の鯱は、奪うたのではない。ありや此方へ取返したのぢや。
歩左　ヤ、なんと。
村路　ハテ、先年亡びた夫の重寶、いま足利に納まりありしを、血筋の者が取返せしは、これ非道ではあるまいがな。
歩左　ヤ。
村路　コレ、鯱よりは、まだ外に、其方が受取らねばなら

ぬ、大切な物があらうがの。
歩左 如何にも、姫諸ともに紛失せし、神武の旗、それ
も。
トきつとなるを、國姫、押隔て
國姫 コレ歩左衛門、村路が詞に隨うて、どうぞ自らを都
へ伴ひ、司之助さまに添ふやうにしてたもいなう。
歩左 ぢやと申して。
國姫 コレ。
ト拝む。
歩左 ムウ。ソレ。
ト思ひ入れにて、村路が前へ行て
これまで、姫君を、はごくみし志しに愛でゝ、神武の旗
を受取つてくれう。
村路 そんなら承知か。
歩左 如何にも。
國姫 して、神武の御旗は、
歩左 いづれにあるぞ。
村路 即ち爰に。
ト懐劍を出し、腹へ突ッ込む。三人恟り。
國姫 ヤア、これは。

歩左 何ゆゑの生害。
村路 唐土の山のあなたに立つ雲の、爰に焚く火の煙と消
ゆる、妾が身の上。
國姫 そんなら村路、其方の夫と云ふは。
村路 思ひ出づるも一昔、頃は天文三年申の年、月は如月、
日は五日、所は武藏野隅田川。
國姫 いざ事問はん都鳥、この詠歌は在五中將。
村路 我が夫は唐土人。
歩左 事成らずして、名を下せし謀叛人。
ト金助、奥より
金助 八代簀八寛、無念の最期。
ト唐冠、装束にて出る。村路、起き上がり
村路 オヽ、勇ましい。それその冠装束にて軍の駈引
き、士卒をたなびけ、謀り事を帷幕の内にして、勝つ事も
千里の外に、ほどこし給ふ軍術は、孫呉臥龍に劣らね
ど、運拙なくして、足利の嚴命にて、討手を向けられ御
生害。
歩左 その遺蹟は今吾妻に。
金助 八代簀川岸、八寛町と、諸人に呼ばるゝ我が心外。
村路 その妄執を晴らさせん爲め、妾がこの年月の憂き艱

鑑。

金助　父の追善、義兵の旗上げ。それに何ゆゑ母には御最期。

村路　イヤ、憂き年月を長らへしも、その勇ましいその姿を見るまでと、忍び暮して今日と云ふ、三ケ年この方の本意を遂げし身の喜び、我れながらも命を捨てゝ一つの願ひ。

金助　さては、こなたの育てし向坂甚内を。

村路　齋藤龍興と知つたるゆゑ、其方の乳にて養育の甚内どの、まさかの時には片腕と思ひしに、道閑どのゝ悪事にて、誠は取替へ子。この國の守は、妾が育て君、その御主人の足利家、擒と思ひしこの國姫、神武の旗諸とも無事に返すも、龍興公へ立てる義理。また其方には黄金の鯱、この歩左衛門どのに取返せし母が功。

歩左　すりや、老女の最期は。

國姫　恩と仇との義理を立て、自らへ情の程。

金助　氣遣ひあるな母人、一旦は軍勢催促に、神武の旗を望みしなれど、乳兄弟の龍興に、忠義を立てさす、こなたの心底。また足利を亡ぼす事は、我が掌に覺えあれば、姫も旗も、こなたの勝手に。

村路　嬉しや忰天晴れ名將。コレ、歩左衛門どの、姫君を都へお供。

歩左　して、神武の御旗は。

村路　今こそお渡し申す。

ト島臺をとんと叩く。仕掛けにて旗出る。

ソレ、お姫樣。

ト國姫取つて

國姫　歩左衛門。

ト歩左衛門に渡す。

歩左　これこそ誠の神武の旗。エ、忝ない。

ト押頂く。と遠責めになると、向う西の通ひ道より、樵、山賊、狩人大勢、面々の仕事道具を持つて出て、本舞臺へ並よく並び

杣山　村路さま、かねての手筈の御親子御對面。

狩人　日頃の御本意、狼火を合圖に間道より

皆々　早速これへ。

金助　すりや母人、あの者どもは。

村路　語らひ置きし杣山賊、狩人は元より、この山々谷々の猪、猿までも、其方の味方に。

金助　天晴れ御賢慮。

村路　歩左衛門どの、お姫様を都へお供。
歩左　先知に歸る拙者が大慶。
國姫　とてもの事に、吾妻路さまも。
金助　イヤ、吾妻路は、某が預り、司之助を招く囮に。
國姫　エヽ、そんなら。
村路　金助、其方が。
金助　高が女、命は取らぬ。
村路　コレ、氣遣ひない。
金助　我れはこれより父が最期場、東武隅田川へ立越し、萬事の手配り。
村路　ソレ、供奉の用意を。
皆々　ハツ。
歩左　イザ姫君。
ト行かうとする。
村路　アレ〱、武勇の勵し、三韓一代の臣下、八代簀八寛。
金助　母人、おさらば。
村路　門出を喜ぶ、母が血祭り。
皆々　君の出御。
ト唐樂になり、金助に絹傘、サッとさしかける。トしづしづ花道へ行く。山賊杣狩人、皆々並よく並ぶ。山賊、兩人して、傾城吾妻路が半櫃を差擔ひ、皆々供する。ト歩左衛門、國姫を連れて、通ひ道へ行きかける。雪また降り出す。始終靜かなる唐樂になる。ト本舞臺に村路、こなしあつて、懷劍を拔き、立ち上がる。金助、歩左衛門、振返り見る。村路、笛を掻く。國姫、あれトこゝしある。金助、思ひ入れあるを、歩左衛門、これト隔てゝ
國歩　南無阿彌陀佛。
ト手を合す。ト金助、合唱して
金助　歸命無量壽覺。
ト村路、バッタリこける。金助、心意氣あつて
いそふれ、者ども。
ト正面に立ち廻る。ト皆々。
よろしく幕
ト花道、通ひ道の人數、靜かに向うへ入る。

切幕

隅田川の場
花館樋口の場
金助隱家の場

鐘樓堂の場

役名――齋藤兵衞督龍興。金助女房、おせつ。同一子、兼松。傾城、吾妻路。齋藤司之助。漁師、浦右衞門。同、蟹藏。同、又助。同、岸六。奴、鳴平。石谷步左衞門。土岐主計頭。柿木金助 實ハ 八代寳八寛。

造り物、一面の浪幕、舞臺前三間程の浪手摺。橋がかり臆病口、殘らず白魚取りの漁船、奧深に小さく船毎に篝を焚き、もち網を下ろし、白魚を取つてゐる體、一セイにて、幕ひらく。ト西の方より、葛西太郎、漁船に乗り、もち網を下ろし、松明を振り上げ、又助、艪を押し出る。ト東の方より、七里浦右衞門、これも、漁船にて、岸六、艪を押し出る。

ト兩方船にて

浦右　葛西、早いな。

葛西　浦右衞門、今か。

浦右　オ、サ、お藏前から押して來た。

岸六　太郎、明日は、牛の御前の祭ぢやが、又助も一緒に、こりや精が出るな。

又助　オ、、明日はこちらの祭、それで今夜、精出さにやならぬ。ナウ太郎どの。

葛西　さうぢやとも。なんぼ所の祭でも、叩き止めや、喰止めと、この隅田川に住んで、白魚取りの葛西太郎、片時も身過ぎに油斷はならぬ。

ト網を引き上げる。白魚大分かゝりあるを、玉網にて掬ひ、籠へ入れる。

浦右　イヤ、上方から來て間もない葛西太郎、さう精出しては、內の嬶がさぞ喜ぶであらう。ナア岸六。

岸六　それ〳〵、葛西太郎が女房は、上は利根川、下は深川沖まで、美しいと云ふ評判ぢや。

浦右　漁師に似合はぬ、太郎はあやかり者ぢや。

ト浦右衞門、網を引き上げ、白魚を掬ふ。

葛西　何を云ふぞい。女房はこの白魚同然、人目には好もしがれど、常住鼻に附いてあらば、淸汁でも、薄葛でも、いけん〳〵。

浦右　ハテ、勿體ない事を。おれがあゝ云ふ美しい女房持つたら、戴いてゐるのになア。

又助　太郎の內儀は吉原で、丁山高尾にも、滅多に負けぬ

器量よしぢや。
浦右　漁師が來るのは朝のうちなれば、毎朝々々美しい内儀を、太郎が自由に。
葛西　面妖な。兎角漁場で、おれが女房を、美しいの、穢ないのと、構ひにもならぬ事を評判する。浦右衛門、わりや心があるか。
浦右　イヤ、滅相な。
葛西　でも、滅多に羨やましがるは。
浦右　サア、そりや法界、悋氣の裏を行た
葛西　法界悋氣か。
浦右　イヤ、さうぢやなけれどな。
ト話しあると、江戸騒ぎになり、また兩方とも、船をあちこちと漕ぎ廻し、葛西太郎、魚を掬ひ取る事、始終よろしくあつて、蟹藏、腰船にて出て來て
蟹藏　オヽ、太郎どの、爰にか。この川筋で、一遍尋ねた。コレ、もう今の刻限。
浦右　兩國の蟹藏、太郎を呼びに來たか。何の用ぢや何の用ぢや。
又助　こそ手合ひで、めくりでも打つのか。
蟹藏　イヤ、そんなこつちやない。深川へ行く大事の事ぢや。
皆々　深川へ行く大事とは。
葛西　イヤ〳〵、イヤ〳〵、なんでもないこつちや。高で明日は牛の御前の祭、こちらの方からもなんぞ見事な、花山車を出さうと思うても、餘所のやうによう張り込まぬ。それでおれが懇ろにする、深川の八幡の神主が所にある花山車を、借りに行てやる筈。ナア、それを仰山に蟹が……イヤモ、なんでもない事ぢやわい。
蟹藏　オヽ、それ〳〵、上方では祭の檀尻、この江戸では、花山車、それをあの和郎に借りに行てもらふのも、ほんにおれが仰山に。
浦右　ムウ、そんなら葛西太郎、深川の八幡へ、花山車を借りに行くのか。
葛西　オヽ。
浦右　ハテナア。
ト心意氣ある。
又助　イヤ、コレ、太郎どの、こなんが深川へ行くなら、おりやこの綱を片附けて、先へ去にましよか。
葛西　オヽ、さうせい。深川へ行くも、この船で行く。わりや綱も魚も、浦右衛門が船へ。

又助　そんならさうしませう。コリヤ岸六、取つてくれ。

ト網をしまひ、岸六に渡し、篭を持つて、あちらの船へ飛び乗る。

蟹藏　太郎どの、こなんは早う彼の深川の八幡へ。

岸又　明日は牛の御前の祭なれば。

浦右　葛西太郎、飲みに行くぞよ。

葛西　待つてゐる程に、わいらも、今夜は早うしまへ。ドリヤ、行かうか。

蟹藏　先へ歩んで待つてゐるぞや。

浦皆　もうおいらも、しまうて。

葛西　皆の者、明日逢はう。

ト浦右衛門の船、皆々入る。葛西、もろ網取り

葛西　この川下の管領の花館、内の案内細見に、手下の者をやつたれば、その安否を。さうぢや。

ト篝を川へ打込み消す。奥の篝も、消える。

夜明けぬうちに、押し切つて行かう。

ト入る。

造り物、一面に、石垣高く、花館の外塀の體。眞中に水落ち、上の方に水門あり、葛西太郎、以前の船に乗つて、爰へ船を附け

葛西　もう花館、この水落しより出て來る手管。

ト舟張りを叩くと、水落しより切り首を抛り出す。葛西太郎、見て

ヤア、こりや、忍びに入つた、手下の三つの首。すりや、見附けられて、この態か。ムウ。

トこなしある。右水落しより、番人出て、船へ乗り。

兩人　忍びの同類、繩かける。

ト兩方よりかゝる。引き廻して、一人を川へ見事に打込み、また一人の番人かゝる。此うち、水門を開き、主計頭、上下、股立ち、二つ引の紋附きの弓張にて

主計　曲者。

葛西　なんと。

主計　エイ。

ト手裏劍打つ。葛西太郎、番人にて受けとめ、川へ打込む。主計頭、うぬ、ト提灯を差出す。葛西太郎、出刃を手裏劍に打つ。提灯にて受けとめ、主計頭引込み、葛西太郎、直ぐに、艪を下ろして、橋がゝりへ入る。

返し。
造り物、二重舞臺、見附け、赤壁納戸口、佛壇、內に位牌飾り、上の方、折り廻り、障子屋體、橋がゝり在所出、いつもの所に門口、祭の行燈、宮神樂にて道具とまる。ト東西の棧敷、しぼり幕、間毎に祭の行燈、バラリと下りろ、ト二重舞臺に蟹藏、寢てゐる。と向うより、勢ひ組、大勢、花山車をかたげ江戶の掛け聲にて出て、ワヤ／＼云うて、皆々橋がかりへ入る。

蟹藏　エヽ、アタやかましい、祭の囃子、昨夜から夜通し、ちつとなと、寢ようと思や、いま／＼しい。寢られるものではない。

ト又寢る。ト向うより女房お國、着流しのひつこき髮に、尺長の鉢卷して、御幣を持ち、ウロ／＼と出て來る。

岸又　オヽイ／＼、待たしやれいなう。

ト呼び／＼、初手の形にて出て來る。

岸六　コレお內儀、おいらが物云ふのに、挨拶もせずに、滅多無性に走り出し

又助　なんぢややら、キョロ／＼と、何事ぢやぞいなう。

くに　ヤア、わりや誰れぢや。

岸六　おりや漁師の岸六ぢや。

又助　又助ぢやわいなう。

兩人　して、葛西太郎は內にゐるか。

くに　イヤ、知らぬわいやい。

岸六　こりや橫柄にやらかすな。常から美しいと思うてゐるお內儀、あの浦右衞門が、首たけ打ッ惚れて現を拔かし居るも尤もぢやわい。

又助　こなたを取持つてくれと、おいらが賴まれたのぢや。どうぞ返事をしてやつて下され。

岸六　イヤモ、浦右衞門ばかりぢやない。おいらも、疾から惚れてゐる。

又助　御亭主が居ぬ間に、ちよつとか。

ト兩人、抱きつく。振り拂ひ

くに　エヽ、慮外な、何するのぢや。

岸六　何するとは不粹な。浦右衞門に、こなたを取持ちするのぢや。

又助　どうぞ叶へてやらしやれ。

くに　穢らはしい〳〵。わしを誰れぢやと思うてぞ。
兩人　ハテ知れた事、葛西太郎のお内儀。
くに　イヽヤ、葛西太郎の女房ぢやないぞ。
兩人　ヤア。
くに　忝なくも三圍稻荷大明神の末社の神。
兩人　そりや何云ふのぢや。
くに　慮外な、すさり居らう。
兩人　ヤア、。
くに　すされ〳〵。
兩人　ハア、、。
　　ト　お國、御幣にて、さん〴〵に叩き追はへ歩く。兩人、逃げ廻り、蟹藏を踏むと
蟹藏　アイタ、、、、何奴ぢや〳〵。
　　ト起き上がり
ヤア岸六、又助、お國さま、戻らしやんしたか。
岸六　コレ〳〵、其やうに叩き廻さずと、浦右衞門が云ふ事を。
又助　叶へてやらしやれ、いつそおいらが。
　　ト兩人、お國が手を取る。
くに　エヽ、退き居らぬか〳〵。

兩人　イヤ〳〵、おいらが連れて行く。
蟹藏　そんなら浦右衞門は、此方の内儀を。
岸六　蟹藏、われも手傳へ〳〵。
　　トお國を三人して、連れて行かうとする。所へ奧より葛西太郎、内着の形にて、出て來て
葛西　コリヤ、何さらすのぢや。
　　ト兩人が頭を毆る。
兩人　アイタ、、。
　　ト頭を抱へて竦む。
蟹藏　そりや見いな。
葛西　女房、わりや、三圍の稻荷へ詣つたか。
　　トお國、物云はずに、御幣をなぶりゐる。岸六、又助、こなしあつて
兩人　ヤア、、葛西太郎か。
葛西　岸六、又助、昨夜から逢はぬな。
兩人　そんなら今のは。
葛西　コリヤ、惡うほたへると、骨鱠ぢや。
兩人　ア、、アノそれが祭の料理か。
葛西　オヽ、すこたんのはり〳〵、胴腰を叩きなげ、諸白の代りに、諸脚を折られぬ用心せい。

兩人　ハテ、そりやまづい御馳走ぢやな。
ト氣味の惡いこなし。所へ橋がゝりより浦右衞門、初手の形にて、網を持つて出て來る。
浦右　岸六、又助、先へ來てゐるか。
兩人　浦右衞門どの、今ごんしたか。
蟹藏　ア、、祭ぢやと思うて、呑みに來たのぢやな。
浦右　オオ、祭り酒、呑みに來たのぢや。
ト葛西太郎を見て、こなしあり
コリヤ、わいらに賴んだ事は、どうぢやぞい。
兩人　サア、その事は。
ト葛西太郎を見て、兩人、氣味惡さうにしてゐる。
葛西　コリヤお國。
蟹藏　コレ〳〵お國さま、太郎が呼んでゐさんすがな。
ト側へ行くを
くに　慮外者め、下がれ〳〵。
ト御幣にて、くらはす。
蟹藏　ヤア、これは。
くに　コリヤ、葛西太郎よ。
葛西　ヤ。
くに　わしや其方が女房ぢやないぞ。
葛西　そりや何を云ふのぢや。
浦右　成る程、合點のゆかぬ素振り。どうでも狐がついたと見えるわい。
蟹藏　ヤア、そんならお國さまは、狐がついたか。
浦右　離して見たら知れる。
ト蟹藏、岸六、又助皆々一緒に
皆々　くわい〳〵つんつく〳〵ぢや。
トお國も、こなしあつて
くに　皆の者、官位あるわしを、なんで其やうに侮るのぢや。憎い奴等、きかぬ〳〵。
ト御幣にて、皆々を叩き廻る。葛西太郎、お國を捕へて
葛西　コリヤ待て。
ト顏をキッと見て
くに　なんぢや〳〵。おのれもか。
ト御幣を振り上げるを
葛西　ハテ、女房のお國についた狐は、おれが仕樣がある。ヂッとして居い。
ト突きつける。お國、何やらぼやいてゐる。浦右衞門、こなしあつて

浦右　葛西太郎、不思議な事があるわい。
葛西　不思議な事とは。
浦右　漁師仲間へ、詮議がかゝつた。
葛西　詮議とは。
岸六　イヤ、昨夜深川の管領の花館へ、盗賊が忍び込んで、東國細見の繪圖を盗む所を見附けられ、その盗賊は、打ち首に遭うたれど
又助　頼み手は、どうでもこの隅田川の漁師仲間。
浦右　その證據はこの出刃。
ト返し前の出刃を出す。葛西太郎、心意氣ある。
又助　サア、この出刃は、滅多に外に使はぬ、漁船に限つて使ふ漁師庖丁。
葛西　ムウ、それでわいらが、盗賊の頼み手を詮議するのか。
浦右　今朝から花館へ、呼びつけられて、お役人の
岸又　云ひ附けぢや。
葛西　さう云ふ事なら、おれもとも／＼吟味せうわい。
浦右　ムゥ。すりや、太郎、いよ／＼われも、盗賊の頼み手を。
岸又　詮議するか。

葛西　共吟味との仰せぢやないか。ハテ、漁師どもが使ふ出刃が、證據とあらば、盗賊を花館へ忍び込ました者を。
浦右　面白い、すりや見事われが。
葛西　後まできつと。
蟹藏　それまでは、奥へ行て。
浦右　約束の祭り酒。
岸又　おいらも一緒に。
浦右　馳走にならうか。
葛西　イヤ、なんの風情もない茶碗酒ぢや。
蟹藏　コレ、打ち破らぬやうの獻立に。
浦右　盗賊の頼み手。
岸又　出刃の詮議の。
葛西　太郎が手際。
くに　ヤア、なんぢや。お召しなされる。行かねばならぬ。退いてくれ／＼。
葛西　コリヤ。
ト引きとめる。
蟹藏　エヽ、搗てゝ加へて。
浦右　狐つきのお内儀。

岸又　葛西太郎。
葛西　皆の者、マア奥へ。
ト宮神樂になり、浦右衛門、岸六、又助、蟹藏も、奥へ入る。トお國、葛西太郎を引きのけ
くに　慮外な奴の、三囲の稻荷大明神に仕へる末社の神を、なぜ手籠めにする。おのれを〱。
ト御幣にて叩きかゝる。その手をチッと取つて
葛西　野狐の骨頂め、立ち所に退かして見せう。
ト葛西太郎、表の戸を締め、掛け金をかけ、疊を上げると、司之助、着流しにて出る。
司之助どの、窮屈にござりませう。
ト司之助、お國と顏見合せ
司之　ヤア、其方は吾妻路。
くに　ヤア、殿樣、逢ひたうござんしたわいなア。
ト兩人、側へ寄らうとするを、葛西太郎引き分け
葛西　お國、わりや狐が退いたか。
くに　エヽ。
葛西　司之助どの、望みを叶へたぞ。
司之　ヤア。
くに　ても、思ひがけない。

司之　いま、太夫に逢ふとは。
葛西　うろたへた稻荷樣も、御存じあるまいがな。
くに　ほんに、さうとは知らずに。
葛西　狐つきになつたか。美濃の巖窟から、連れて戻つたおれが心を、探らん爲であらうがな。
くに　エヽ、そんなら、わたしが。
葛西　ハテ、あざとい女の智惠ではあるぞ。
司之　コレサ〱、吾妻路、其方に逢うたらば、この司之助も、何かの事を。
ト葛西太郎、硯を取つて來て、司之助にあてがひ
葛西　サア約束ぢや、書かつしやれ。
司之　すりや、三韓一の書翰を。
葛西　約束の通り、太夫に逢はしたぢやないか。
司之　サア、それは。
くに　エヽ、殿樣、聞えませぬ。いつぞや廓で別れてより、あなたのお行くへ、美濃の國へ行て、又思はずも、今この東へ。
司之　サア、都で別れて、おれも誠の兄龍興さまに、御對面申してより。
葛西　コレ、何かと積る話をば、云うたり、聞いたりした

くば、ちやつとおれが頼みを書いた。
司之　ぢやと云うて。
葛西　いま、日本の通達は、齋藤司之助が、自筆でなけりや、何を云うてやつても承知せぬ毛唐人。勘合の印よりは、司どのゝ手蹟ぢやに依つて、吾妻路を、連れて戻つたも、こな樣を呼び寄せう爲ぢや。サア、おれが望む三韓の書翰、認めてもらはう。
司之　例へ命を取られても、それはつかりは。
葛西　なりませぬか。
くに　殿樣、今お顏を見た上は、この後はちよつともお側を。
司之　なんの離れう。わしも其方に。
葛西　添ひたくば、書翰を書いた。
司之　サア、それは。
くに　エヽ、辛氣な。ちよつとマアお前に。
　ト側へ寄らうとするを、葛西太郎、支へて
葛西　イヤ、此方の望み叶はねば、滅多に側に寄る事はならぬぞ。
くに　エヽ。
葛西　表向きは女房にして置くも、内證は、司之助どのに添はしてやる所存ぢや。
くに　申し殿樣、なんぢや知らぬが、ちやつと書いてわたしにどうぞ。
司之　エヽ、なんにも知らずに。
葛西　是非得心ないか。
くに　申し殿樣。
司之　サア。
葛西　サア。
皆々　サア／＼／＼。
葛西　司之助どの、承知あるか。
　ト當惑する。ト内にて、コンと本釣り鐘鳴る。葛西太郎、思ひ入れにて、キッとなる。
くに　ありやもう。
司之　入り相の鐘。
葛西　諸行無常の響きに、アレ／＼、八寛を、お召しなされる。
司之　ヤ、なんと。
　トこなしあるを、葛西太郎、手早に縛る。
くに　ヤア、それは。
　ト寄るを、引き退け

葛西　書翰を書かすまでは、大事の囚人。
司之　すりや某を。
葛西　恩を見て恩を知らぬは、畜生木石。
司之　ヤ。
葛西　サア、添ひたくば、替へ／＼の望み事、得心あるま
　では、矢ッ張りお國はおれが女房。
くに　エ、。
葛西　滅多には寄せつけぬ。司之助どの、返事は密かに。
くに　コレ。
　ト寄るを、葛西太郎、突き廻し
司之　吾妻路、必らずともに。
葛西　命が物種、矢ッ張りわれは、狐つきにならねばなる
　まい。
くに　エ、、なんと。
葛西　人を化かすは傾城の誠。
　ト司之助に云うて、又お國に
　僞はりの女房と、覺られぬやうにナ。こりや又思ひのま
　まに、化け顯はすも司どの。
くに　そんなら殿様の。
葛西　返事次第ぢや、待つて居い。

　ト唄になる。お國寄らうとするを、引き退け、司之助
　を引つ立て、奥へ入る。跡にお國、こなしあつて
くに　エ、、なんの事ぢやな。今日稲荷様へ參つて、狐つ
　きになつたも、あの太郎どのゝ女房と云はるゝが嫌さ。
　それに思ひがけなう殿様に……わたしといひ、殊に又、
　殿様に書翰とやらを書かさう爲、どうでも合點がゆか
　ぬ。いま葛西太郎と名乘る柿木金助どのは。
　ト思案する。始終此うち合ひ方にて、向うより、齋藤
　龍興、どてら布子、山岡頭巾に、大だら差し、のう／＼
　と出て來る。門口をしやくり見て、大だらを拔いて、
　戸尻の壁を、めつきり／＼と切り破る。トお國は、火
　を灯したり又思案してゐて、フッとこれを見て恟りす
　ると、龍興、拔き身持ちながら、ヌッと入る。
くに　エ、、お前は。
龍興　女郎め、聲立てな。
くに　アイ／＼……。
　ト慄うて下にゐる。ト龍興、こなしあつて、あたりを
　コソ／＼見廻し、フッと佛壇を見て、新らしき位牌を
　取出し見て
龍興　金成院妙覺大姉、俗名、村路。行年六十歳。

ト思ひ入れあつて、右の位牌を懐へ入れる。お國、怖
怖ながら
くに　申しお前は。
龍與　知れた事、盗人ぢや。
くに　エヽ、それにその位牌を。
龍與　何に依らず、せしめるが商賣。これから奥で、好い
代物を持つて行かうわい。
ト唄になり、奥へ入る。
くに　ハテ、面妖な。盗人が盗人の内へ、盗みに入るは。
ト云はうとして、ちやつと、口押へ、思ひ入れあつて、
下にゐると、在郷唄になり、向うより、おせつ、世話
女房の旅の形にて、子の兼松の手を引き、風呂敷包み
を脊負ひ、出て來て
せつ　今とつくりと、敎へてもらうたれば、大方、向うに
見える家が、さうぢやわいの。
兼松　母樣、父樣の所へ、早う行きたいわいなう。
せつ　オヽ、道理ぢや〳〵。もうお父樣にあはす程に、も
ちつとぢや。おぢや〳〵。
ト云ひ〳〵、本舞臺へ來て
申し、ちつと物が尋ねたうござります。申し〳〵。

ト戸を叩く。
くに　エヽ、邪魔な。誰れぢやいなア。誰れでござんすえ。
せつ　さう云はしやんすは女中の聲。この家は申し、柿の
木。
ト云はうとして、思ひ入れあつて
葛西太郎さまの所かいなア。
くに　アイ、さうでござんすわいなア。
せつ　嬉しや〳〵、爰ぢやといふなら……申し、わたしや、
太郎さまに、ちつと逢ひたい者でござんすが。
くに　エヽ、大事の思案の邪魔になる。用があるなら、ツ
イ入らしやんせいなア。
せつ　それでもかき金が、かけてあるやら、戸が明きませ
んわいなア。
くに　そんなら横手に、今盗人が入つた穴があるさかいで、
其方から入らしやんせいなア。
せつ　ハテ、面妖な事を云ふ女中樣ではある。
ト云ひ〳〵戸尻の壁を見て
ほんに幸ひ、爰の事であらう。サア坊、おぢや。
ト穴より、兼松の手を引き、内へ入り
女中樣、許して下さんせ。

くに　見れば小さいお子を連れた、旅の女中様、お前はマア、どこからござんしたえ。
せつ　そりや葛西太郎どのに逢へば、知れますわいなア。
くに　そんなら、こちの人に。
せつ　エヽ、なんと云はしやんす。
ト思ひ入れあつて、お國をヂロ〳〵見て
くに　氣味の悪い、なんぢやぞいなア。
せつ　お前の物腰、こちの人と云はしやんすからは、葛西太郎どのゝ、お内儀さまぢやな〳〵。
くに　イヽエ、さうぢやござんせぬわいなア。
せつ　イヤ〳〵、隠さしやんな、知つてある。斯う云ふ美しい内儀様があるゆゑ、道理で、國へ戻らしやんせぬは、こんな事で。エヽ、腹が立つ、腹が立つ。
トぴん〳〵する。
くに　申し女中様、そんならお前は。
せつ　アイ、葛西太郎どのゝ女房でござんす。
くに　ムウ、お内儀様なら、それでわたしが身の上が……
落ちついたわいなア。
せつ　なんの負け惜しみな。落ちついた事がある。思ひがけない所へ、わしと云ふ女房が來たので、ひよんな事であらうなア。
くに　なんのマア。
せつ　なんのマアとは、落ちつき過ぎた。そりやわしを、踏みつけるのか。コレ、子まで生したこのおせつ、五年この方便りもなけれど、現在の女房。モウ〳〵、腹が立つて、どうもならぬ。これからこちの人に逢うて、金輪際、せりふせにやならぬ。
ト身拵らへする。兼松、取りつき
兼松　母様、喧嘩さつしやるな。
せつ　イヤ、喧嘩せにやならぬ。わしと云ふ女房のあるに、アタ横柄らしい、濟ましたあの美しい顔わいの。
くに　コレイナア、其やうに腹立つて下さんすな。これには大分譯のある事でござんすわいなア。
せつ　譯がならうて女夫に、なつてゐられるものかいなア。
くに　イヽエさうぢやござんせぬ。わたしはナ。
浦右　この家の亭主、葛西太郎が、女房に違ひはない。
ト前へ出る。
兩人　エヽ。
浦右　様子は聞いた。國から來たお内儀、腹の立つは尤もぢや。ちやつと、お國を去らしてしまはんせ。

せつ　さう云ふこなた樣は。

浦右　漁師仲間の浦右衞門。お國、貴樣もあゝ云ふ女房のある男、滅多に添うてはゐられまい。

せつ　さうでござんす。否でも應でも、緣切つてもらはにやなりませぬ。

浦右　さうすると、捨てる神あれば、拾ふ神ナ。

ト鼻を敎へる。

くに　エヽ、とんと、それが。

トお國、御幣を取上げて

なんぢや〳〵。わしやそんな事は知らぬ。コレ〳〵女中、わたしやこの家の女房ぢやない。必らず氣遣ひして下さんすな。

せつ　そりや、何を云はしやんす、たつた今まで。

浦右　ありや狐ぢや。

せつ　エ。

浦右　サア、あのお國へは狐がついてゐる。退くと、矢ツ張り葛西太郎が女房お國。

くに　また女房とは、慮外な〳〵。

ト御幣にて叩きかゝる。浦右衞門。とめる。おせつ、こなしありて

せつ　そんなら狐がついて。

くに　女房ぢやない〳〵。

浦右　油斷しよまい。そりや皆狐ぢや。

せつ　そりや幸ひでござんす。コレ狐どん、いつまでも、退かずにゐて下さんせや。

くに　なんの退かさう。退かさせぬ〳〵。

浦右　例へ退かうが退くまいが、姿はお國、常から心がけてゐるこの浦右衞門、太郎には、あの內儀が來た上は、もう氣遣ひなし。おれが降魔の利劍を以て突き通し、狐ぐるめに女房にする。

くに　エヽ。

せつ　そんならこなさんが。

浦右　古へ安部の保名の例しもあれば、狐は愚か、狸でも。

くに　エヽ、否ぢや〳〵。

浦右　貂でもする。川獺でもする。

ト附け廻す。

くに　エヽ、うるさい〳〵、寄るな〳〵。

浦右　イヤ、なんでもする、なんでもする〳〵。

トお國を、浦右衞門追はへ廻る。奥より

葛西　浦右衛門、おれが女房をなんとする。
　ト云ひ〳〵出る。
浦右　ヤア、葛西太郎。
せつ　ほんにこちの人、エヽ、お前は〳〵。
くに　コレイナア、お前のお內儀樣がわたしをナ。
葛西　コリヤ、わりや、狐つきぢやないか。
くに　エヽ。
　トこなしあつて
　オヽ、葛西太郎、なんぢや〳〵。
浦右　コリヤ葛西太郎、國からわれが女房が來た上は、あ
　のお國を。
葛西　イヤ、滅多にや去らぬ。
せつ　エヽ、なんと云はしやんす。
浦右　ありや狐つきぢやぞよ。
葛西　古への、安部の保名の例しもあれば、狐は愚か狸で
　も。
浦右　ヤ。
葛西　雛でも、川獺でも。
浦右　サア、藥喰ひには、よいものぢやてなア。
　トおせつ、葛西太郎が側へ行き

せつ　コレ、こちの人。
葛西　おせつ、わりや在所から、爰へ尋ねて來たか。
せつ　アイ、來いでいなア。野上の宿で勤めて居たわたし
　も、緣でがな、お前に馴染んで、女夫になつて暮らすう
　ちにも、內を外、留主は常住の事なれど、五年と云ふ
　もの在所へは戾らず、コレ、この坊が產れた時、ちよつ
　と立寄つたばつかり、同じ國に居やしやんしても、ねッ
　からわたしには……それに今は名も變へて、あゝ云ふ美
　しいお內儀樣を。
　ト葛西太郎、睨みつける。
サア、なんぼう睨ましやんしても、こればつかりは。
浦右　オヽ、云はにやならぬ〳〵。グッと突ッ込んで、せ
　りふしてもらはにや、おれが。
　ト葛西太郎を見て
イヤ、構はぬ事ぢや。
　トこなしある。
傘松　そんならあれが、父かや。
せつ　オヽ、父樣ぢや。ちやつと向うへ行て、よう顏を見
　やいなう。
傘松　父樣、逢ひたかつたわいなう。

ト葛西太郎に取りつく。

せつ　コレ、さういふ子まで……サア、なんと大きうならうがな。

くに　ソレ、その坊と、お内儀樣が、幸ひ見えた事なり、どうぞわたしは。

葛西　狐退いたか。

くに　エヽ。

葛西　狐が退いて、おれが手が切れたら、司之……イヤ、番うた詞を忘れたか。

ト　お國、思ひ入れあつて

くに　イヤ、忘れぬ〳〵。王子笠森、人目忍ケ岡に、妻戀稻荷、わしや三圍々々。

せつ　現在、わしと云ふ女房のあるのに、アレあのやうに、なんぼ狐がついても。

くに　わたしも、あのお心根が氣の毒さに。

浦右　どうやら合點のゆかぬ狐つき。

葛西　コリヤ浦右衞門、おれが女房に狐ついてあらうが、氣狂ひであらうが、われが構ふ事はない。

浦右　サア、おれは構はねど、男を寐取られたこの内儀の心根。

せつ　さうぢやわいな〳〵。

ト　こなしある。

くに　コレ〳〵、必らず疑ふな〳〵。

ト　御幣を振り廻す。

浦右　疑はにやならぬ、どうでも。

葛西　なんと。

浦右　葛西太郎、お花館の盜賊の頼み手、出刃の詮議は。

葛西　ハテ、そりやおれが吟味する。

せつ　わたしも又、これまでの腹癒せに。

葛西　何を猪口才な、うぬが。

せつ　エヽ。

葛西　男ぢやぞ。イヤサ、葛西太郎は氣に入らねば、何奴、此奴の容赦はせぬ。どん腹へ。

浦右　ヤア、。

葛西　イヤサ浦右衞門、出刃の詮議は、おれがとつくりとするわいの。

浦右　サア、そんならよい……エヽ、皆の奴等は。

葛西　奧にゐれば、貴樣も。

浦右　サア、奧へ行くが、コレ、必らずナ。

ト　お國を教へる。おせつ、こなしあり。

葛西　お國、われも奥へ。
せつ　エヽ、コレ。
　トきつとなる。
葛西　なんぢや。
　ト睨む。
浦右　稲荷様の、とんとこ〱。
せつ　エヽハア。
　ト泣く。
くに　アレあの。
　ト寄らうとするを、葛西太郎、顔見て押へる。お國に、心意氣あつて
夕立や、田を三圍の神ならで。
浦右　諸事は狐で。
　トきつとなる。
葛西　二人ともに、奥へ行け。
　ト合ひ方になり、お國、御幣を持つて、附いて奥へ入る。浦右衛門も、こなしあつて、附いて入る。おせつ、思ひ入れあつて、行かうとするを、葛西太郎、引き戻し
葛西　おせつ、わりやどこへ行く。
せつ　知れた事。今の内儀を引摺つて來て、お前と切刄して。
葛西　わりや腹が立つて悋氣するか。
せつ　アイ、悋氣するは、女房の習ひでござんす。
葛西　女房ぢやないぞ。
せつ　エヽ。
葛西　おせつ、わりや去つた。
せつ　そんなら今の内儀に見替へて、
葛西　去るのぢや。
せつ　否でござんす。
葛西　ヤ。
せつ　コレイナア、五年この方、わしが手一つで、この子を育て、お前が戻らしやんしたらと、明けても暮れても
イヤ知つた腹は云ひませぬ。いから結構なお内儀様が、出來たと云うて、わしには又、なんの科、どう云ふ誤まりで、去らしやんす。サア、その譯を、聞きませう。
葛西　ハテ、飽いた女房、去るは男の高下ぢや。
せつ　イヤ、なんぼう高下でも、わたしには、コレ〱此やうに、兼松と云ふ子まであるぞえ。
葛西　オヽ、この坊主めも、親子の縁切る。一緒に連れて

去ね。
ト子役を突きやる。
粂松　母様、怖いわいなう。
トおせつに取りつく。
せつ　オヽ、道理ぢや〳〵。可哀さうに、何をこの子が、知つた事があるぞいなア、現在、血を分けた我が子にも思ひ替へて。エヽ。
ト思ひ入れあつて
サア、此やうに云ふも、女の淺はか。どうぞ料簡して。
葛西　イヤならぬ。
せつ　サア〳〵、氣に入らねば、わたしは去られても、せめて矢ツ張り、この子を。
葛西　イヤ、其奴も、親子の縁切つた。
せつ　ムウ、そんなら親子の縁も、夫婦の縁も。
葛西　オヽ、くどい。
せつ　ハア、。
ト大泣き。ト粂松、葛西太郎が上へ行て
粂松　御上意ぢや。
葛西　なんと。
粂松　盜賊の金助に、繩かけるぞ。

ト捕り繩をしごく。
葛西　何をませた事を吐かす。
トおせつ、高札を出し
せつ　盜賊の張本、柿木金助、行くへが知れず、もしも在所を存ぜし者、訴人するに於ては、恩賞は望みたるべきものなり、齋藤兵衞督龍興在判。
ト讀み上げる。
葛西　ムウ。すりやおせつ、其方が。
せつ　訴人しました。
葛西　ヤア。
せつ　こなさんは、今この江戸へ立越し、この隅田川で、葛西太郎と名を改めて、漁師へと、サア、わたしが訴人しましてござんす。
葛西　すりや、この悴は。
せつ　捕り手の役人、夫婦の縁、親子の縁も、切らしやんすれば、盜賊の張本、柿の木金助、龍興公の家來の、アレあの粂松が
粂松　繩かけるぞ。
葛西　ム、ハ、、、。所詮齋藤龍興が立向うては叶はず、女房悴を餌にかひ、情を見せてこの金助を釣り寄せんと

は、ヤ、あざとい事を。
せつ　訴人した上からは、金輪際、繩かけて、お國へ引き
ますする。
葛西　そりや、なんの科で。
せつ　齋藤家の重寶、紛失した遠霞、忍びの傳書の盜賊。
葛西　すりやこの傳書をこの金助に。
ト奥より
龍興　如何にも詮議して、その悴に繩かけさすぞ。
ト以前の形にて出る。
せつ　ヤア、龍興さま。
葛西　向坂甚内。
龍興　柿の木金助。
金助　一別以來。
龍興　堅固であつたな。
金助　其方も。
龍興　互ひに重疊。
せつ　そんなら聞き傳へて、龍興さまのお身の上も。
龍興　以前は盜賊、只今にては美濃の領主、家の重寶遠
霞の傳書、先達て紛失、その詮議せん爲、以前の盜賊姿
にて、この家へ來りし齋藤龍興。

金助　すりや、あの高札も。
龍興　國に居て某が指圖ゆゑ、それなる女が訴人。
金助　アノ、現在夫が身の上を。うぬが。
トきつとなる。
せつ　コレ、去られた上は、赤の他人。
金助　ムウ。
ト兼松を引寄せ、脇差引き抜き、切らうとする。おせ
つ、恟りして、あわてゝ留めて
せつ　コレ、訴人したが腹立つなら、なぜわしを殺して下
さんせぬ。その子になんにも、科はないわいなア。
金助　イヤ、うぬを苛なむは、後での事ぢや。
ト蹴り退け、いろ／＼立廻りよろしく、おせつ留める。
血筋の悴を餌に、情を見せ、親子の心をゆるます術は、
なんぼもある格。此奴を生け置けば、蠅虫めらが、玉に
飼ふが面倒な。ぢやに依つて。
ト又おせつを蹴り退け、兼松をひん抱き、逆手に突か
うとする。
龍興　イヤサ悴、必らず早まるな。
金助　ヤ。
龍興　コレ、この母の村路が留めたぞ。

ト位牌を見せる。

金助　ヤ、なんと。

龍興　コリヤ、其方が爲には現在の母、又この龍興が爲には乳房の恩ある乳母村路、法名は、金成院妙覺大姉、この母が留めたとナ。サ存命ならば、よも、チッとは見てゐまい。

金助　ムウ。

ト思ひ入れある。

龍興　子を持つて知る親の恩、殊には、子より孫は、可哀い世の諺なれば、さぞ不便にあらう肉親の忰ぢやもの、心は矢竹に逸つても、去りがたき恩愛の血筋。

せつ　コレ、金助どの、どうぞその子を。

兼松　父様、堪忍し下されなう。

金助　エヽ。

トこなしある。

龍興　竹の林に住む虎は、勢ひ強きものなれど、我が子の別れを悲しみては、三日三夜泣き叫び、千里の劫ある足なへて、一歩をなす事能はずとや。

ト金助、此うち始終、兼松を見て、村路が事を思ひ出してゐる心の思ひ入れ、さまざまあつて

金助　縁切つた忰、助けてこます。

ト抛りつける。おせつ、ちやつと抱き

せつ　嬉しや兼松、先づ此方へ退いて居や。

金助　その代りにうぬを。

トおせつが髻を取つて引きつけ

女郎め、例へ訴人ひろいで、百萬騎の討手が向うても、びくとも恐れぬ金助なれども、これまで飼ひ育てた女房のうぬが、連れ添ふ夫の身の上を、訴人ひろいだ、うぬが心がむやくしい。心外なる畜生め。四つ足め。見下げ果てた女め。

トさん〴〵に振り廻して、打擲する。兼松、金助に取りつき

兼松　父様、どうぞ坊を、ひね〳〵して、母様を堪忍して下され。拜みます〳〵わいなう。

ト手を合し泣く。金助、こなしあつて

金助　うぬが腹から斯う云ふ健氣な……エヽ、腹の立つ女め。

ト取つて、突き退ける。ト龍興、此うち、山岡頭巾を外し、その上に位牌を載せ、いろ〳〵こなしあつて

龍興　本國、鷄籠山の巖窟にて、其方が最期の様子、石谷

歩左衛門に逐一聞き届け、この龍興も、なんぼう殘念に
思ふわやい。
ト涙を拂ふ。おせつ、此うちしを〱と、起き上がり、
龍興が前へ手をつかへ
せつ　申し殿樣、龍興さま、お國に於て、わたしが盜賊の
張本、柿木金助が在所、訴人いたしました上は、この高
札の通り、何卒御褒美を。
龍興　如何にも、褒美くれう。して其方が望みの品は。
せつ　金助どのゝ命を。
龍興　ヤ。
せつ　サア、訴人するに於ては、恩賞望みたるべきものな
り。
龍興　そりや、その高札に記せし通り。
せつ　金助どのゝ命を、どうぞ御褒美に。サア、望みたる
べきと、お書きなされた國の守の龍興公。よもや相違は
ござりますまい。
金助　ムウ。さては金助が。
せつ　命が助けたさに、わたしが訴人。
金助　ヤ。
せつ　現在の女房の口から、夫の訴人は、盜賊と名の立つ
たお前の身の上、もし外から訴人しられては、どうで死
罪、その時は、この子やわたしが心はマア、どのやうに
あらうぞ。ぢやに依つて、わたしが訴人して、褒美には、
お前の命を助けてもらひたさ。そればつかりを、コレ金
助どの、五年が間、置去り同然の女房の心、これでも畜
生、四つ足でござんすかいなア。
龍興　ハテ、貞女な心。
せつ　どうぞ夫の命を。
龍興　國中の政道を、取裁く齋藤龍興、僞はりの高札は立
てぬ。如何にも其方が望みの通り、金助が命、助けてく
れる。
せつ　エヽ、有り難うござりまする。
龍興　かねて附け置く組子の者、參れ。
ト内より
三人　ハア。
ト漁師岸六、蟹藏、又助、バラ〱と出て、金助を取
巻く。
三人　腕廻せ。
せつ　エヽ、これは。
蟹藏　漁師となつたる我れ〱は足利の家來。

岸又　いろは組の捕り手の役人。
蟹蔵　かねて龍興公に通達して、葛西太郎に附き添ふも、金助と本名知つて、萬事の手段に内通の爲。
金助　さてはうぬらは。
三人　足利の廻し者、腕廻せ。
せつ　待つた。金助どのに繩かけては、たつた今助けたと仰しやつた。
龍興　盗賊の金助は助けた。
せつ　それに又。
龍興　親の名を受け繼ぐ謀反人、八代寶八寛は滅多に助けぬ。
三人　足利の嚴命。
龍興　おやに依つて國にて、召抱へし某が家來のその悴、繩かけさす。
せつ　エヽ、そんならこの兼松に。
龍興　サヽ、それを功に、血筋の悴なれど、武士に取立つるは、これ乳人の村路へ追善。
岸六　情ある龍興公のお執成しにて、謀叛人の血筋の悴。
蟹蔵　武士に取立つる、武將義輝公の御憐愍。
金助　それを辨まへず刃向へば、

三人　我れ〱が、搦め捕らうか。
せつ　サア、それは。
龍興　但し重類を絶やさうか。
三人　サア。
龍三　サア〱〱。
龍興　なんと。
ト金助、兩手を組み、思案してゐる。
返答なければ、その悴を。
蟹蔵　サア。
ト兼松をひん抱き、拔き身をさしつける。
せつ　サアそれは。
ト寄る。
蟹蔵　サア、悴を殺さうか。
岸又　謀叛人が悴、重類を絶やさうか。
岸六　繩をかけるか。
三人　サア、どうぢや。
金助　空を翔る鳥、地を走る獸まで。
龍興　親子の哀れ。
トまた位牌を見せる。
金助　よく存じた。

ト前へ直り、後へ手を廻し
盗賊の張本にては柿木金助、また謀叛人の棟梁にては八代簑八寛、無念なれども齋藤龍興、今まで一味と思ひし足利の猿めら、立寄つて繩ぶて。
せつ　エ、。すりやお前は。
金助　忰が不便な。
三人　承知の上は、繩かけて。
龍興　イヤ、かほどの强勇、この龍興が縛むる。
ト下へ下りて
謀叛人、八代簑八寛。
ト位牌に繩かけ、下に置く。
せつ　これは。
龍興　その忰は、いよ／＼命を助け、足利の家臣。
せつ　エ、、アノ、位牌に繩かけて。
岸六　盗賊の張本。
又助　謀叛の棟梁。
蟹藏　お花館へ忍び入りし
龍興　サア、科の條々、親子は一體、足利へ引き渡す。
ト位牌を取上ぐる。金助、思ひ入れあつて
金助　エ、殘念や、心外や、產れ落ちると今日の今まで、おのれ四海を掌握して、父の無念榮華と、凝り固まつた我が魂ひも、慈悲と情の鞴にかけられ、忰が出世に刃も鈍り、父と母との未來の供。
ト腹切らうとする。龍興、留めて
龍興　イヤ、早まらずと、忠義を盡せ。
金助　なんと。
龍興　心を入れ替へ。
せつ　夫の身の上。
龍興　誤まつて改むるに、誰れ憚からず。龍興が乳兄弟、その所緣を以つて、東武の守護、汝が父の所緣もあれば卽ち八代簑岸、八寛町に屋敷を建て、親子ともに足利の家來。
金助　エ、、有り難い、骨身にこたえし情の程、忰が出世の賜物。
ト懷中より一卷を出し、龍興に渡す。
龍興　この一卷は。
金助　先達て奪ひ取つたる、遠霞の忍びの傳書。
龍興　再び手に入る我が喜び。
せつ　この上は、夫と我が子は。
金助　武士の交はり。

三人　すりや、八寛は。
龍興　搦め捕つたるこの位牌、事の樣子を都へ早打ち。
三人　して、我れ〲は。
龍興　取り得し一卷披露の言上。家來、參れ。
侍ひ　ハア、。
ト橋がゝりより侍ひ大勢出る。
せつ　段々のお情。
龍興　悴と夫に、忠義を勸めよ。
金助　せめてお供を。
龍興　それには及ばぬ。さらば。
ト家來を連れ、向うへ入る。跡、合ひ方になり、金助、おせつ、こなしあつて
せつ　こちの人。
金助　女房ども。
三人　お頭。
金助　ムウ、かねて其方達に謀し合し、わざと龍興へ内通させ
せつ　足利の家來と云ひしも
三人　こなたの手段。
せつ　又わたしは、國でわざと訴人をして、今日爰へ來たも
金助　心をゆるさせ、龍興を玉に、足利を油斷さす計らひ。似せ物の傳書を誠と思ひ、ぬるい面にて持ち歸つた大だわけ。
せつ　して又三韓への書翰は。
金助　司之助を擒にし、日本に謀叛人あつて、足利の大事を、義輝に願ひ加勢を乞ひ、唐人めらを渡海さすれば、大事は僞はり、來朝しても事なきゆゑ、唐人めらに怒りを起させ、同士打ちさすは、法師が慰めに諸軍を招きし、ほうくわだいの、裏行く計略。
三人　何もかも、手番ひよく參れば。
金助　裏手に續く法源寺の寺中、彼の鐘崎より引き出し、釣鐘の前にて萬事の手配り。司之助にも書翰を無理に。
せつ　もし御得心なくば
金助　云ふまでもない撫切り。
せつ　エ、。
金助　コリヤ、其方は跡に殘り、もしも龍興より迎ひ來らば。
せつ　わたしがとくと。
金助　必らずぬかるな。

せつ　心得ました。

金助　この兼松も裝束改め、父の怨念、鐘に目見得を。

三人　我れ〳〵も、ともに。

金助　參れ。

　ト金助、兼松、奥へ入る。

せつ　先達て夫の云ひつけ、わざと龍興さまへ訴人して、一旦夫の詞を立て、又わしが思案……殊に今、司之助さまに三韓の書翰を書かし、もし得心なければ、司之助さまを殺す所存、さすれば龍興さまへ……夫が望み、司之助さまにも御無事に、事の納まるやうの思案がありさうなものぢやが。

　トいろ〳〵と、思ひ入れあつて

それ三韓への書翰は、義輝公のお頼みと僞はり、人數を寄せて、同士打ちさす手段。よもや司之助さまがそれを素直に、……ぢやと云うてその書翰を、お書きなされねばお身の上……それ〳〵、あのお國さまと云ふは、島原の傾城吾妻路さま。定めて、二人の仲の起請。それを手本に。オゝ、さうぢや〳〵。

　トついと走り入る。チョン〳〵。返し。

右の二重舞臺を東へ引くと、後ろ淺黃幕、天井より絲櫻の吊り枝、一面に下がる。矢張り合ひ方、道具とまると、臆病口より、蟹藏、吾妻路を引ッ立て來る。

吾妻　コリヤ、わしをなんとするのぢや。

蟹藏　なんとするとは、先達て配符の廻つた傾城の吾妻路、管領の館へ連れて行て、褒美の金をせしめるのぢや。

吾妻　コレ、麁相云ふまい。わしやそんな者ではないぞ。

蟹藏　覺えはないとは云はさぬ。われが今、内で見てゐた七枚起請、ありや司之助より取替へた起請、名當に吾妻路と書いてあつたが慥かな證據ぢや。

吾妻　そんなら、この起請を。

蟹藏　オゝ見た。疑がはしくば、われが懷にある今の起請

　ト取りにかゝる。

吾妻　イヤ、大事の起請、見せる事はならぬぞ。

蟹藏　見せねばいつそ。

　ト脇差を拔いて切つてかゝるを、有りあふ櫂にて受けとめ、立廻りになり、トゞよろしく吾妻路、櫂を落される。蟹藏、引きつけ、切らうとする。ト臆病口の方より

せつ　エイ。

ト出刃を手裏剣に打つ。蟹藏、死ぬる。吾妻路、悄り見て

吾妻　ヤアこれは。

せつ　お國さま、氣遣ひはござんせぬ。

ト出る。

吾妻　そんならお前が。

せつ　お花館へ、忍びを入れた頼み手の、漁師は蟹藏、證據はあの出刃。

吾妻　成る程、それで落ちつきました。

せつ　この上はわたしが頼み、吾妻路さま。

吾妻　エ、。

せつ　お前の身の上、知つてゐるわいなア。

吾妻　すりや、おせつさま、お前は。

せつ　下さんせ。

吾妻　葛西太郎は假の夫、いつなりとも、お前の勝手に。

せつ　イヤ、わたしが頼んで貰ふは、お前の持つてゐやしやんす、司之助さまの、サ、起請が欲しいわいなア。

吾妻　ハテ、變つた物を望ましやんすは。

せつ　惚れました。

吾妻　エ、。

せつ　サ、司之助さまに、恥かしい事なれど、惚れたに依つて、お前の持つてゐやしやんす起請を、わたしに下さんせ。

吾妻　イ、エ、なりませぬ。

せつ　腹が立つかえ。

吾妻　イエ、怖いわいな。

せつ　そりやなんで。

吾妻　殿樣に惚れたとは、きつい嘘、誠は司之助さまの手蹟の起請、それを取つて、三韓への書翰の似せ筆。

せつ　エ、。

吾妻　恐ろしいお前の心、起請を望んで、似せ筆の手本にするのであらうがな。

せつ　吾妻路さま、なんと云はしやんす。

吾妻　サア、廓で育つた一徳で、嘘と誠と見分けるわたし。おせつさま、そんな手管ではゆかぬ。措いて下さんせ。

せつ　流石の吾妻路さま、御推もじの程、驚き入りましてござんすが、申し、成る程その起請を見て夫の望み、三韓への書翰の似せ筆と、思ひ附いたはわたしが計ら

ひ。司之助さまの御身に凶事のないやうに、起請を手本に似せ筆すれば、なんとお前も、可愛い殿御の事、氣遣ひがなうて、よからうがな。

吾妻　サ、その似せ筆も、後日には殿様のお身の上、足利さまにも兄御にも、疎まれなされにやならぬ仕儀。似せ筆して、お前方は勝手がよからうけれど、廻り廻つて殿様を科人にしては、わたしが勝手が惡うござんすわいなア。

せつ　すりや、司之助さまの命がなうても、構ひはござんせぬか。

吾妻　エ、。

せつ　夫金助どのが、法源寺の庭前にて、司之助さまに書翰の切端。

吾妻　それ聞く上は。

ト行かうとするを

せつ　イヤ、その起請を。

ト懐へ手を入れる。

吾妻　イヤ、滅多には渡しませぬ。

ト振り拂ふ。

せつ　是非にわたしが。

ト起請を引き出す。

吾妻　コレ、ならぬわいなア。

ト兩方の端を引ッ張る。

せつ　コレ、渡さしやんせぬか、破れるぞえ。

吾妻　大事の起請ぢや、放さしやんせ。

せつ　此方も大事なその起請。

吾妻　それ〳〵、破れるわいなア。

せつ　サア〳〵、ちやつと放さしやんせ。

ト兩人、大事に兩端を持つて

吾妻　エ、、鬼の女房に、鬼神と云はうか、追ッつけ報ふ

せつ　天罰の起請文。

吾妻　七枚つぎは二世の固め。

せつ　わたしが心は潔白に、これ日本國の神々樣を。

吾妻　誓ひに入れた大事の起請。

せつ　放しやんせぬか。

吾妻　お前も。

せつ　サア。

吾妻　サア。

兩人　サア〳〵〳〵。

ト兩人、よろしく見合ひ、下に置く。おせつ、ちやつ

と、苫を着せると、吾妻路、その上へしやんと坐る。

せつ　エヽ、まんがちな。退かしやんせ。

ト引き退け、取りに行くを、吾妻路、ちやつと、引き廻し

吾妻　エヽ、起請は滅多には渡されぬと云ふに。

せつ　イヤ、受取らにや、わたしが。

吾妻　イヤ、お前を。

ト櫂にて叩きかゝるを

せつ　どつこい。

ト玉網にて受けとめる。これより面白き合ひ方になり、吾妻路は櫂、おせつは玉網にて、よろしく立廻りになる。ト櫻の花散る。トゞおせつ、櫂を叩き落す。吾妻路も、玉網を引ッたくり、また苫を引きのけ、起請を取らうとする。よろしく立廻りあつて、兩人また起請の端を持つて、立ち上がり

せつ　サア、その起請を渡して下さんせ。

吾妻　イエ／＼、なんぼうでもこの起請、渡す事はなりませぬ。

ト入れ違ひ、引ッ張り合ひ、よろしく見得になり、チヨン／＼、引き臺にて、兩人を橋がゝりへ引込む。返し。

造り物、見附け、唐門、築塀にて、三間二重舞臺、土手の蹴込み、上の方に見事なる梅の實木、これに釣鐘吊りあり、但し燒酎火、燃え上がりあると、金助、唐裝束にて、床几にかゝり、司之助を引きつけ、鐘をキッと見てゐる。下の方に軍兵二人、半切れ小手脚當、凛々しき形にて手をつかへてゐる。この見得よろしく、木魚、禪の勤め、合ひ方入りにて、道具とまる。

軍一　御主人、今宵の催ほし、管領の館へ押寄せる手筈。

軍二　追ひ／＼味方の者ども。

軍一　この法源寺へ

兩人　相詰め居りまする。

金助　出かした／＼。コリヤ、兩人の者は、この川上を堰きとめさせ、かねて計らひ置きたる通りに、素破と云はば切つて落し、深川の花館を、水責めにする用意いたせよ。

兩人　ハア、委細畏まつてござります。

金助　早く行け。

両人　ハッ。
　ト両人、向うへ走り入る。
金助　ヤイ司之助、最早愚図々々と情を見せてはもう頼まぬ。これからは、責めせつてう。骨を拉いでも、三韓の書翰、書かさにや置かぬ。
司之　イ、ヤ、仮令へ身はしゝびしほになるとても、足利の大事、同士打ちさす書翰は、書かぬ〳〵。
金助　イヤ、死太い二才め。
　ト突き放す。
うぬ、書翰を書かねば、命を取るがや。
　ト司之助、こなしあつて、下に居て、首さしのべ
司之　一旦越度ある某、所詮武士道は立たぬ。また其方が望みの書翰も書かぬ。サア金助、司之助が命を取れ。
金助　ムウ、好い覚悟。望みの書翰書かねば、大事を聞かしたらぬ、生け置いては。
　ト刀を抜いて、振り上げる。とドロ〳〵にて、釣鐘、焼酎火、燃え上がる。母村路の附聲にて
村路　忰々。
　ト金助、こなしあつて
金助　母人の御霊魂。

村路　コリヤ、無益に命を取つては、仁の道が缺けるがや。
金助　なんと仰せらるゝな。
村路　夫の最後の怨念残るこの鐘に、いま母が魂魄さそはれて、詞交すも其方が為。非道の性根を改め、なぜ義兵の旗上げせぬ。人は一代、名は末代、天晴れ名将英雄と、呼ばれよ忰、返す〴〵も母の教訓忘るゝな。最早詞交さぬ。さらば〳〵。
　トどろ〳〵にて、焼酎火消える。金助、こなしあつて
金助　助けられぬうぬなれど、母の念慮の諫めの詞、司之助、命は助けてくれるぞ。
　ト突き放す。
司之　イヤ、仮令へ命は助けても、恩を仇にて、謀叛人の其方なれば。
　ト金助へ切つてかゝる。
金助　小積な奴の。
　トちよつと立廻りになり、此うち又助、半切れ小手脛當にて出て、この時金助を支へ
又助　頭、待つた。
　ト留める。
金助　何をうぬが。

ト見事に投げる。此うち司之助、つか〱と行て、前の井戸へ飛び込む。
ヤア、あの抜け道を。
又助　どつこい。
ト留めるを
金助　さてはうぬが知らしたな。
ト突き廻し、首をポンと切る。見得になり、遠責めになる。金助、こなしあつて
ムウ、あの鐘太鼓は我が計らひ、龍興管領を攻め取る味方の者、手筈を違へず、ハテ、心地よなア。
ト橋がゝり、バタ〱にて、軍兵二人、走り出て
軍一　我が君の仰せ通り、この法源寺へ諸軍を集むるところ、龍興が計略にて、此方の味方は皆裏返り、あの方より攻め取らんと、押寄せまする。
金助　ナニ、一味の奴等が、皆裏返つたとな。
軍二　あの鐘太鼓も、我が君を討ち取る手配り。
金助　ハヽヽ、苦しうない。例へ日本國が皆押寄せても、高で小國、一合桝に計る軍勢、何程の事あらん。コリヤ、其方達は道灌山に、伏せ置く人數ともに、一手になつて討つて取れ。
兩人　心得ました。
金助　必らず、ぬかるな。早く〱。
ト軍兵、引返し、橋がゝりより、走り入る。始終此うち遠責め合ひ方。金助、思ひ入れあつて
金助　最早、子の刻、陰中の陽……今宵の分野は。
トきつと空を見て
北辰は南面して動かず、象星は北面にたんだくす……太白紫微にたん〱として、殺氣、敵の強旗を貫くは……正しくこれ我が屬星、快明に照され、火星、金星を冠するは、龍興亡ぶる時節到來。ムウ、ハヽヽヽ、ヘレ心よや、喜ばしやなア。
トこなしあつて、又向うバタ〱にて、岸六、半切れ小手脛當にて、走り出て
岸六　お頭、御油斷あられたな。此方の手段は龍興が計らひにて、悉く破れましたぞ。
金助　ヤア〱なんと。
岸六　サア、漁船の體にて、花館へ押寄せしところ、あの方には用意あつて、岸へつけたを合圖に、思ひがけなう石火矢を放てば、船諸ともに諸軍を討たれ、なか〱花館へは寄りつかれませぬ。

金助　さすれば、なぜ堰きとめしこの川上の水の手は、切つて落さぬ。

岸六　イヤ、それも龍興が計らひにて、疾に水の手は切つて落し、川筋は常水。

金助　ヤア〳〵、何もかも龍興が計らひにて。

岸六　味方はさん〴〵、追ツつけこれへ押寄すれば、この事をお知らせ申さん爲、拙者は討ち洩らされを召し集め、追ツつけこれへ。早々御用意々々。

　ト引返し、向うへ走り入る。金助、いろ〳〵無念のこなしあつて

金助　エヽ、龍興の猿智惠にて、此方の手段は悉く破るるとも、この上は某が駈け向うて、龍興始め管領が素ツ首、引き抜かん、さうぢや。

　ト花道へ、ツカ〳〵と行く。よき所にて、本舞臺の釣鐘ゴンと鳴る。ト金助、キッと振返り

御用かな。

　ト釣鐘、ゴンゴン〳〵と鳴る。

ヤアナニ、ハツ〳〵〳〵〳〵。

　ト耳そば立て、ぢり〳〵と、本舞臺へ戻つて來る。釣鐘、ゴンと鳴る。

ハツ。

　ト釣鐘の前へ行て、辭儀して

すりや親人の御靈魂の仰せは、ナニ〳〵、敵の手段は今日の不意にあらず、かねての計らひ、一味の者どもも先達て、裏返りゐるとな。

　ト釣鐘、ゴンと鳴る。

ヤ、某に、一先づ爰を立退き、時節を待てとな。

　ト又ゴンと鳴る。

イヤ、なんぼう御靈魂のお示しでも、この場は。

　ト又鳴る。

全くお詞背くにあらず。

　ト又鳴る。

ても、それは。

　ト又鳴る。

ハツ。

　ト又鳴る。

サア。

　ト又鳴る。

サア。

　ト又鳴る。

サア〳〵。
ト又、ゴン〳〵と鳴る。鐘、指合ひにて
すりや是非。
ト又ゴンと鳴る。
エヽコレ、御靈魂のお示し。龍興めが、手段に乘つて、
思へば無念、口惜しいなア。
ト自團駄踏んで、撞と下にゐる。所へ向うよりおせつ、バタ〳〵にて、走り出て
せつ　こちの人。
金助　ヤア女房。
せつ　コレイナア、今どうぞお前の望み、三韓の書翰を。
金助　イヤ、三韓への書翰に及ばぬ、我が手段は皆、龍興めに。
せつ　サア、あの鐘太鼓にて、お前を取り卷く人數の聲、ちやつとこの場を落ちて下さんせ。
金助　イヽヤ、某は思ふ仔細あれば、コリヤ、其方は忰を連れて、本國美濃へ密かに立退け。
せつ　イエ〳〵、あのやうに、十重二十重に取卷いたれば、なんとして女の身で、所詮叶はぬ、お前と一緒に。
金助　最期を遂げるとは、うろたへた事を。忰を連れて、爰を一先づ、立退け。
せつ　ちやと云うても。
金助　コリヤ。
ト懐より一卷を取出し
誠の遠霞の忍びの傳書、これを持つて其方にも、かねて敎へし四天の法に、九字を切りかけ、立ち出づるに、側へ幾重に取卷くとも、咎むる者は一人もない。
せつ　すりや、この忍びの傳書を持つて。
金助　早く立退け。
せつ　して、兼松は。
金助　我が住家に。
せつ　又お前の身の上は。
金助　切り拔けて後より。一刻も早う。
せつ　合點でござんす。
ト向うへ走り入る。ト金助、橋がゝりへ、ツカ〳〵と行くと、鳴平、半切れ小手脚當にて、鑓を構へる。金助、振返る。奧より浦右衞門、これも半切れ小手脚當にて、鑓を提げて出て、構へる。金助また花道へツカツカと行く。向うより歩左衞門、半切れ小手脚當にて、凜々しき形、これも同じく鑓を構へ出て

三人　八寛、動くな。
金助　美濃で助けた歩左衞門、奴鳴平、不便やこれへうせたは、命が寢くさつたか。殊に合點のゆかぬ漁師の浦右衞門めも。
歩左　イヤ最期を遂げし老女が頼み、一旦は助けても、最早絶體絶命。
浦右　運命の盡きた八代寶八寛。
鳴平　今が最期ぢや、觀念ひろがう。
トこれより三人を相手に、鐘のタテよろしくあつて、トゞ見得にてとまると、岸六、高提灯持ち、凛々しき形にて、軍兵捕り手、大勢出る、皆々、手毎に、提灯を持ち出て、金助を取卷きて
岸六　謀叛人八寛。
皆々　覺悟。
金助　裏返つたうぬら、一々撫切りぢやぞ。
トきつとなる。ト臆病口より
龍興　待つた八寛、齋藤龍興。
司之　弟、司之助。
龍興　對面せん。
ト龍興、陣羽織にて、采配持ち、司之助、吾妻路、おせつ、金松を連れ出るを
金助　ヤア女房、悴…龍興兄弟、うぬ。
ト兩人を目がけ行くを、鳴平、歩左衞門、金助を支へて
鳴平　主人に刃向ふと。
歩左　歩左衞門が鐵玉。
浦右　ゆるさぬぞ。
龍興　皆の者、早まるな。家の重寶、誠の傳書を受取りし上は、必らず聊爾いたすな。
金助　ナニ、忍びの傳書とは、さては女房、うぬが。
せつ　コレ、お前への云ひ譯は、わたしがカウ。
ト自害する。
吾妻　ヤア、おせつさま。
せつ　命を捨てゝ夫の一命。
司之　先達ての願ひ通り
龍興　助ける契約、悴も武士に取立つれば。
金助　情は情、仇は仇。
歩左　龍興公の御賢慮。
鳴平　一旦この場は見遁がせど
金助　又の再會、父の仇。

司吾　マア、それまでは。
金與　互ひに。
皆々　さらばく。
ト皆々よろしく打出し

幕。

けいせい黄金鏽（終）

解　說

渥美清太郎

日本演劇史を研究する者が、夙に興味を感じる點は、東西の比較發達史である。「ヤツトコトツチヤア、ウントコナ」と今演じられる「暫」より、もつと呑氣な、もつと荒唐な狂言が江戸の舞臺に上つてゐた時、大坂では近松門左衞門の名作が既に喝采を博してゐたのだ。最初はどうしても江戸が京坂に劣つてゐた。寶曆から明和安永になると江戸の劇壇も發達して來たが、京坂の方はより以上進んでゐるので、とても相撲にならない。勝敗の度は、主として名作家の出現に依つて決せられた傾きがある。ところが、寛政の半、初世並木五瓶が江戸へ移つてから、俄然江戸劇壇が隆盛になつて來た。京坂劇壇は寛政の半を以て、一先づその鋒をさめたと云つてもよからう。本卷所載の三篇は、京坂劇壇隆盛の殿りを受持つた。寛政前期の名作を收錄したもので、流石にこの時代は五瓶が光つてゐるから、二篇までも同人の作である。一篇は辰岡萬作、この人は五瓶の先輩であるが、五瓶ほどの功績は殘さなかつた。

けいせい靑陽鷄（はるのとり）

寛政六年正月、大坂角の芝居へ書き卸された辰岡萬作の作。二の替り狂言だけに、場面は派手に、筋は複雜に、華やかに長々と脚色されてゐる。世界は太閤記であるが、お讀みになれば解る通り、これは大久保武藏鐙の一節、宇都宮釣天井の一件を脚色したもので、少し露骨過ぎると思はれる位、人物を當込んである。謀叛人の柴田修理介勝重は勿論本田上野之助で、三法師君を三代將軍家光とすれば、眞柴久吉は井伊掃部頭といふ所である。河田歩左衞門は石川八左衞門、小田三七郎は松平長七郎で、人氣者の大久保彥左衞門は、三輪五郎左衞門を以て現はし、大坪流々々と、うるさい程知らせてゐる外、いろ〳〵彥左衞門に關する逸話を書き込んで暗示してある。拵へがそれらしく見せた事は申すまでもない。長七郎を信孝へ持込んだのも巧妙な嵌め方で、小幕の「馬切り」は獨立して、今日猶舞臺に見る事が出來る。釣衾で釣天井を利かせたり、傳說の與四郎一件を其まゝ見せたり、全く至れり盡せりである。萬作としては第一位に置かれる佳作、上演度數も夥しいものであつた。

初演の役割は左の通りであつた。

金井山九郎。阿波座の田郎助、三輪五郎左衞門（淺尾

爲十郎）小田之助信雄（小川吉太郎）藤右衛門娘おとよ、腰元裏葉（藤川友吉）筒井順慶、羅漢の[illegible]八（三桝松五郎）瀬川采女、大工與四郎（泉川瀞藏）照烈大王、女陸尺關屋（尾上松助）小早川帶刀、長岡新吾（關三右衛門）女陸尺小谷（山下金作）小田三七郎信孝、眞柴久吉（市川團藏）玉泉女、千本姫（花桐富松）平手長司、女陸尺瀧野（吉羽治郎三）白拍子濱荻、妹初花（淺尾仙之介）宅間玄蕃、宅間小平太、百姓喜多作（山村友右衛門）奴木田平、まるらせ管六（嵐雛助）瀧川將監（坂東岩五郎）傾城園菊、管六女房お雪（中村のしほ）高川瀬平、熊谷藤右衛門、女房小光（姉川新四郎）柴田修理介勝重、女陸尺照葉、河田歩左衛門入方村與惣太夫（嵐小六）眞柴小一郎、牛飼ひ[illegible]吉（淺尾奥次郎）

天滿宮菜種御供（てんまんぐうなたねのごくう）

安永六年四月、大坂角の芝居に上演された初世並木五瓶の作、近松の「天神記」を改作したものであるが、時平の七笑と、雛娘の件に、五瓶獨特の、いゝ意味での書替へ振りを見せてゐる。殊に從來、誇張した公家惡の時平の役を、表面善良を粧ふ陰險な若い政治家として描いた如き、五瓶の長所を見せた鋭利な筆鋒である。二幕目の幕切れの工風に盡き、無理に笑ひで幕を切つたのが、却つて好評で、五瓶は歴史に詳しいと或る儒者から褒められたといふのは、「傳奇作書」でお馴染の有名な話である。それだけにこの一幕は、猶今日の舞臺に演存されてゐる。

三好淸貫、荒藤太（三桝他人）腰元勝野（嵐[illegible]治）左中辨希世（坂東岩五郎）腰元十六夜、松月尼、源藏女房戸浪（澤村國太郎）土師兵衛、白太夫、法性坊阿闍梨、紀の長谷雄（三桝大五郎）齋世の君（澤村千鳥）久方御前（中村玉柏）蘭の中將、春藤玄蕃（三桝松五郎）紅梅姫、白太夫娘小藏（三桝德次郎）判官代輝國（藤川都藏）左大臣時平、伯母覺壽（嵐雛助）菅丞相、武部源藏（尾上菊五郎）宿禰太郎（小川吉太郎）

けいせい黃金鯱（こがねのしやちほこ）

天明二年十二月二十四日初日で、大坂角の芝居、二の替り狂言、作者は同じく並木五瓶である。柿の木金助といふ盜賊が主人公になつてゐるが、これは實在の人物で、正德二年二月十四日、大凧に身を結びつけて空を飛ばせ、名古屋城の金の鯱を三枚剝ぎ取つたといふ曲者である。これに八重洲河岸や八官町の來歷を混じ合せ、齋藤龍興の世界に直したもので、例の通り大曲輪の華やかな手廣い書き方である。明治まで行はれた狂言であつた。

外題の「鱅」は、木當は「くらげ」であるが、搆はずに鯨の代用としてしまつた所に、昔の作者の呑氣さが現はれてゐる。

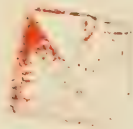
大垣彌藤次、鳴海瀬平（藤川鐘九郎）傾城初風（市山太次郎）歩左衞門女房おふじ（藤川山吾）八代監物（今村七三郎）不破伊達五郎（三桝松五郎）奴鳴平、土岐主計頭（中山他藏）大橋互理、後室操御前（嵐新平）山形道閑、七里浦右衞門（中村治郎三）石谷歩左衞門（三桝大五郎）齋藤司之助（染松七三郎）傾城綾絹、茶摘女小しな（山科甚吉）傾城吾妻路、腰元關屋（澤村國太郎）千島の局、柿の木金助（淺尾爲十郎）齋藤龍興、百姓太郎助（尾上新七）妻半部、傾城春日野、金助女房おせつ（山下金作）向坂甚内、母村路（中山新九郎）

○

カタリと役割に關しては、山形の秋葉芳美氏から多く敎へをうけた。末尾ながら記して謝意を表する。

編纂校訂責任　渥美清太郎
鈴木侃

編纂者檢印

日本戲曲全集・第七卷
寛政期京坂時代狂言・第廿三回配本

昭和五年九月十七日印刷
昭和五年九月二十日發行（非賣品）

編纂者　渥美清太郎
發行者　和田利彦
印刷者　高見靖雄
製本者　高崎鐵五郎

東京市日本橋區通三丁目八番地
發行所　春陽堂
電話日本橋 五一・六四一 三七八八
振替東京一六一七八

整版所　新倉東文堂

（神田區松下町七番地・明治印刷株式會社印刷）